

Oracle® Application Server

インストレーション・ガイド

10g リリース 2 (10.1.2) for Microsoft Windows (64-bit) on Intel Itanium

部品番号 : B25633-02

2007 年 1 月

Oracle Application Server インストレーション・ガイド、10g リリース 2 (10.1.2) for Microsoft Windows
(64-bit) on Intel Itanium

部品番号 : B25633-02

原本名 : Oracle Application Server Installation Guide, 10g Release 2 (10.1.2) for Microsoft Windows (64-Bit)
on Intel Itanium

原本部品番号 : B25331-01

原本著者 : Preeti Shukla

著者協力者 : Divya Shankar, Lyju Vadassery

原本協力者 : Arun Kuzhimattathil

Copyright © 2005, Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りがないことの保証は致しません。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしました、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Retek は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることができます。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしました、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	xiii
対象読者	xiv
ドキュメントのアクセシビリティについて	xiv
関連ドキュメント	xiv
表記規則	xiv
サポートおよびサービス	xv

1 インストール手順の概要

2 インストールの新機能

2.1 Oracle Database 10g を使用する OracleAS Metadata Repository	2-2
2.2 より多くの高可用性環境のサポート	2-2
2.3 Oracle Internet Directory レプリケーションのサポート	2-2
2.4 staticports.ini ファイルを指定する新しい画面	2-2
2.5 削除用の追加のツール	2-2
2.6 J2EE and Web Cache 用の「構成オプションの選択」画面のオプション名の変更	2-3
2.7 サイレント・インストール用の記録機能	2-3
2.8 インストールの統計の生成	2-3
2.9 デフォルトのポート範囲の変更	2-3
2.10 CORBA 通信用のポート番号を指定する新しい要素	2-4
2.11 OracleAS Forms and Reports Services インスタンスのクローニング	2-4

3 要件

3.1 最新の Oracle Application Server のハードウェアとソフトウェア要件を取得する OracleMetaLink の使用	3-2
3.2 システム要件	3-2
3.2.1 同じコンピュータ上で複数のインスタンスを実行する場合のメモリーおよび ページング・ファイルの要件	3-5
3.2.2 メモリー使用量を削減するためのヒント	3-5
3.3 Windows システム・ファイル (wsf.exe)	3-6
3.4 ポート	3-7
3.4.1 エフェメラル・ポートの概要	3-7
3.4.2 ポートが使用中かどうかの確認	3-9
3.4.3 デフォルトのポート番号の使用	3-9
3.4.4 カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）	3-10
3.4.4.1 staticports.ini ファイルの書式	3-10

3.4.4.2	インストーラが指定されたポートではなくデフォルトのポートを使用する原因となるエラー条件	3-12
3.4.4.3	Oracle HTTP Server および OracleAS Web Cache のポート	3-13
3.4.5	ポート 1521 が使用されている場合	3-14
3.4.5.1	ポート 1521 が既存の Oracle データベースで使用されている場合	3-14
3.4.5.2	ポート 1521 が他のアプリケーションで使用されている場合	3-15
3.5	オペレーティング・システム・ユーザー	3-15
3.6	環境変数	3-16
3.6.1	環境変数の設定方法	3-16
3.6.2	ORACLE_HOME および ORACLE_SID	3-16
3.6.3	PATH	3-16
3.6.4	TNS_ADMIN	3-17
3.6.5	TEMP	3-17
3.7	%WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイル	3-17
3.7.1	デフォルトの Oracle Identity Management レルムの場所	3-17
3.7.2	OracleAS Single Sign-On のホスト名	3-18
3.8	ネットワーク関連項目	3-18
3.8.1	DHCP 接続のコンピュータへのインストール	3-18
3.8.2	複数のホーム（複数の IP）を持つコンピュータへのインストール	3-20
3.8.3	複数の別名を持つコンピュータへのインストール	3-20
3.8.4	ネットワークに接続されていないコンピュータへのインストール	3-20
3.8.5	後でネットワークから切断する、静的 IP を持つコンピュータへのインストール	3-21
3.8.6	ループバック・アダプタのインストール	3-22
3.8.6.1	コンピュータにループバック・アダプタがインストールされているかどうかの確認	3-22
3.8.6.2	Windows Server 2003 へのループバック・アダプタのインストール	3-22
3.8.6.3	ホスト名の確認	3-24
3.8.6.4	Windows Server 2003 からのループバック・アダプタの削除	3-24
3.8.7	CD-ROM または DVD からハード・ドライブへのコピーとハード・ドライブからのインストール	3-25
3.8.8	リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからのインストール	3-26
3.8.9	リモート制御ソフトウェアを介したリモート・コンピュータへのインストール	3-28
3.9	インストーラにより実行される前提条件チェック	3-29

4 インストールを開始する前に知っておく必要のあること

4.1	基本概念	4-2
4.2	インストールの順序	4-2
4.3	Oracle Application Server をインストールする場所	4-2
4.4	Oracle ホーム・ディレクトリ	4-3
4.4.1	既存の Oracle ホームへのインストール	4-4
4.4.2	空ではない Oracle ホームへのインストール	4-4
4.5	Oracle ホームの名前	4-4
4.6	追加の言語のインストール	4-5
4.7	Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名	4-5
4.8	ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限	4-6
4.9	コンポーネントのインストールとコンポーネントの構成	4-7
4.10	インストーラがファイルを書き込む場所	4-8
4.11	Oracle Application Server インスタンス・インストール時の他のインスタンスの修正	4-8

4.12	SSL 接続を介した Oracle Internet Directory への接続	4-8
4.13	Oracle Universal Installer の起動	4-8

5 OracleAS Infrastructure のインストール

5.1	インフラストラクチャのインストール・タイプ	5-2
5.2	異なるインフラストラクチャのインストール・タイプを選択する理由	5-3
5.3	インフラストラクチャのインストールの順序	5-3
5.4	コンポーネントの別々のコンピュータへのインストール	5-4
5.5	Oracle Identity Management コンポーネントを別々にインストールするためのヒント	5-6
5.6	Oracle Delegated Administration Services または Oracle Directory Integration and Provisioning コンポーネントの必要性	5-6
5.7	インストール後のコンポーネントの構成	5-6
5.8	OracleAS Metadata Repository に対する既存のデータベースの使用	5-7
5.9	OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録とパスワードの ランダム化	5-7
5.10	OracleAS Metadata Repository の内容	5-8
5.11	複数のメタデータ・リポジトリの使用	5-8
5.12	Oracle Application Server でサポートされる高可用性オプション	5-10
5.13	SYS、SYSTEM、SYSMAN、およびDBSNMP ユーザー用のパスワードの制限	5-10
5.14	NE8ISO8859P10 およびCEL8ISO8859P14 キャラクタ・セットのサポート	5-10
5.15	「Internet Directory のネームスペースの指定」画面での入力	5-10
5.16	コンポーネントが使用するポート番号の確認方法	5-11
5.17	インストール後の OCA の追加	5-11
5.18	個々のホストへの Oracle Delegated Administration Services の配置	5-11
5.19	OracleAS Infrastructure のインストール	5-12
5.20	OracleAS Metadata Repository の新規データベースへのインストール	5-13
5.21	Oracle Identity Management コンポーネントのみ (Oracle Internet Directory を含む) の インストール	5-15
5.22	Oracle Identity Management コンポーネントのみ (Oracle Internet Directory を除く) の インストール	5-17
5.23	Oracle Internet Directory のみのインストール	5-18
5.24	OCA と OracleAS Metadata Repository のみのインストール	5-20
5.25	インストールの一部: インストールの最初のいくつかの画面	5-21
5.26	インストールの一部: インストールの最後のいくつかの画面	5-22
5.27	インストールの一部: データベースの画面	5-23
5.28	インストールの一部: OCA の画面	5-24

6 中間層のインストール

6.1	中間層タイプ	6-2
6.2	中間層のコンポーネント	6-2
6.3	必要なコンポーネント	6-3
6.4	J2EE and Web Cache 中間層用の構成オプション	6-4
6.4.1	ファーム	6-5
6.4.2	OracleAS Cluster	6-5
6.4.3	OracleAS File-Based Repository を使用する J2EE and Web Cache インスタンスの ファイアウォールを越えたインストールの要件	6-6
6.5	DCM スキーマのパスワードの確認方法	6-6
6.6	コンポーネントが使用するポート番号の確認方法	6-8
6.7	アップグレードした Oracle Internet Directory に中間層をインストールする場合	6-8
6.8	インフラストラクチャなしでの J2EE and Web Cache のインストール	6-8

6.9	Database-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール (Oracle Identity Management Access を使用する場合)	6-9
6.10	Database-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール (Oracle Identity Management Access を使用しない場合)	6-11
6.11	File-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール (Oracle Identity Management Access を使用しない場合)	6-12
6.12	File-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール (Oracle Identity Management Access を使用する場合)	6-13
6.13	Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms のインストール	6-15
6.14	中間層の拡張	6-16
6.15	インストールの一部：中間層をインストールする最初のいくつかの画面	6-19
6.16	インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面	6-20

7 Oracle Application Server のインストール権限のための Oracle Internet Directory の構成

7.1	Oracle Internet Directory のデフォルト・ユーザー	7-2
7.2	Oracle Internet Directory のグループ	7-2
7.2.1	グローバル・グループ	7-2
7.2.2	各メタデータ・リポジトリのグループ	7-3
7.2.3	各コンポーネントのグループ	7-3
7.3	コンポーネントの構成または削除に必要なグループ	7-4
7.4	中間層のインストールに必要なグループ	7-7
7.4.1	必要なメタデータ・リポジトリに対してインストールするのに必要なグループ	7-7
7.4.2	中間層コンポーネントのインストールに必要なグループ	7-7
7.4.3	例	7-7
7.5	追加のメタデータ・リポジトリのインストールに必要なグループ	7-8
7.6	異なるユーザーによるインストールの例	7-9
7.7	Oracle Internet Directory でのユーザーの作成方法	7-10
7.8	Oracle Internet Directory 内のグループへのユーザーの追加方法	7-10
7.8.1	Oracle Directory Manager を使用したグループへのユーザーの追加	7-11
7.8.1.1	グローバル・グループへの移動	7-11
7.8.1.2	メタデータ・リポジトリのグループへの移動	7-12
7.8.1.3	コンポーネントのグループへの移動	7-13
7.8.2	Deployment Delegation コンソールを使用したグループへのユーザーの追加	7-14
7.9	新しい Oracle Internet Directory の内容	7-16
7.10	「Oracle Internet Directory に対するログインの指定」画面で入力するユーザ名と レベル	7-17

8 レプリケーション・モードでの Oracle Internet Directory のインストール

8.1	Oracle Internet Directory レプリケーションの概要	8-2
8.1.1	ファンアウト・レプリケーション (LDAP レプリケーション)	8-2
8.1.2	マルチマスター・レプリケーション (アドバンスト・レプリケーション)	8-3
8.2	要件	8-3
8.2.1	データベース要件	8-4
8.2.2	時計の同期化	8-4
8.3	インストールの順序	8-4
8.4	マスター Oracle Internet Directory のインストール	8-4
8.5	Oracle Internet Directory レプリカのインストール	8-5
8.5.1	レプリカのインストールの概要	8-5

8.5.2	新しいデータベースと Oracle Internet Directory レプリカのインストール	8-5
8.5.3	既存データベースへの Oracle Internet Directory レプリカのインストール	8-8
8.6	OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services へのアクセス ...	8-10

9 高可用性環境へのインストール：概要

9.1	高可用性構成の概要	9-2
9.1.1	OracleAS Cold Failover Cluster	9-2
9.1.2	OracleAS Cluster	9-3
9.1.3	OracleAS Disaster Recovery	9-4
9.1.4	相違の概要	9-4
9.2	高可用性構成のインストール順序	9-5

10 高可用性環境へのインストール：OracleAS Cold Failover Cluster

10.1	OracleAS Cold Failover Cluster: 概要	10-2
10.1.1	対称ノードに関する考慮事項	10-2
10.2	OracleAS Cold Failover Cluster のインストール前の手順	10-2
10.2.1	Event Log サービスの実行の確認	10-3
10.2.2	クラスタの仮想アドレスの取得	10-3
10.2.3	両方のノードへの Microsoft Cluster Server (MSCS) のインストールの確認	10-3
10.2.4	クラスタの名前の確認	10-3
10.2.5	Oracle Fail Safe を管理するドメイン・ユーザーの決定	10-3
10.2.6	各ノードのローカル記憶域への Oracle Fail Safe のインストール	10-4
10.2.7	Oracle Fail Safe でのグループの作成	10-6
10.3	OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) 構成のインストール	10-10
10.3.1	OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) : インストール手順の概要	10-12
10.3.2	OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) : インストール手順の詳細	10-13
10.4	分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) 構成のインストール	10-23
10.4.1	分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) : インストール手順の概要	10-24
10.4.2	分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) : インストール手順の詳細	10-25
10.5	OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) 構成のインストール	10-31
10.5.1	OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) : インストール手順の概要	10-32
10.5.2	OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) : インストール手順の詳細	10-34
10.6	分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) 構成のインストール	10-40
10.6.1	分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) : インストール手順の概要	10-42
10.6.2	分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) : インストール手順の詳細	10-43
10.7	OracleAS Cold Failover Cluster への Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On のインストール	10-49
10.7.1	OracleAS Cold Failover Cluster の Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On: インストール手順の概要	10-51
10.7.2	OracleAS Cold Failover Cluster の Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On: インストール手順の詳細	10-53
10.8	OracleAS Cold Failover Cluster 環境への OracleAS Metadata Repository のみのインストール	10-58

10.9	OracleAS Cold Failover Cluster (中間層) のインストール	10-60
10.9.1	個別の Oracle ホームへのインストール	10-61
10.9.1.1	インストール前の手順	10-61
10.9.1.1.1	staticports.ini ファイルの設定	10-62
10.9.1.1.2	ホスト名の別名の作成	10-62
10.9.1.2	中間層のインストール	10-62
10.9.1.3	インストール後の手順	10-63
10.9.1.3.1	(オプション) SSL を使用する中間層インスタンスの構成	10-63
10.9.1.3.2	インストール (中間層および OracleAS Infrastructure) のバックアップ	10-63
10.9.1.3.3	Oracle Fail Safe でのグループの作成	10-63
10.9.1.3.4	(オプション) 共有ディスクでの OracleAS JMS のファイルベースの 永続性用のファイル・システムの作成	10-63
10.9.1.3.5	ノード 1 のコンポーネント構成の更新	10-63
10.9.1.3.6	ノード 2 のコンポーネント構成の更新	10-65
10.9.1.3.7	ファイルのバックアップ	10-65
10.9.1.3.8	既知の状態へのファイルのリストア	10-65
10.9.2	1 つの Oracle ホームへのインストール	10-66
10.9.2.1	インストール前の手順	10-66
10.9.2.1.1	ホスト名の別名の作成	10-66
10.9.2.1.2	staticports.ini ファイルの設定	10-66
10.9.2.1.3	Oracle Fail Safe でのグループの作成	10-66
10.9.2.2	中間層のインストール	10-67
10.9.2.3	インストール後の手順	10-68
10.9.2.3.1	(オプション) SSL を使用する中間層インスタンスの構成	10-68
10.9.2.3.2	インストール (中間層および OracleAS Infrastructure) のバックアップ	10-68
10.9.2.3.3	(オプション) 共有ディスクでの OracleAS JMS のファイルベースの 永続性用のファイル・システムの作成	10-68
10.9.2.3.4	コンポーネント構成の更新	10-68
10.9.2.3.5	ファイルのバックアップ	10-70
10.9.2.3.6	既知の状態へのファイルのリストア	10-70
10.9.3	中間層の拡張	10-71
10.10	同じノードへの OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) および OracleAS Cold Failover Cluster (中間層) のインストール	10-71
10.10.1	インストール手順	10-74
10.10.2	インストール後の手順	10-75
10.11	OracleAS Cold Failover Cluster のインストール後の手順	10-75
10.11.1	ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥htdocs¥index.html ファイルの編集	10-75
10.12	サポートされる手順	10-76
10.12.1	データベースの pfile の作成	10-76
10.12.2	OracleAS Metadata Repository の高可用性設定	10-76
10.12.3	リスナーへの共有ディスクの依存関係の追加	10-81
10.12.4	OPMN の高可用性設定	10-83
10.12.5	OPMN への共有ディスクの依存関係の追加	10-89
10.12.6	Application Server Control の高可用性設定	10-89
10.12.7	正しいリスナーがアクティブであることの確認	10-93
10.13	OracleAS Cold Failover Cluster Infrastructure への中間層のインストール	10-93
10.13.1	中間層を OracleAS Cold Failover Cluster のノードにインストールする場合	10-94
10.13.1.1	中間層用の staticports.ini ファイルの作成	10-94
10.13.2	OracleAS Cold Failover Cluster のインフラストラクチャへの中間層の インストール手順	10-94

10.14 OracleAS Cold Failover Cluster ノードへの標準の中間層のインストール 10-94

11 高可用性環境へのインストール : OracleAS Cluster (Identity Management)

11.1	OracleAS Cluster (Identity Management) : 概要	11-2
11.2	OracleAS Cluster (Identity Management) のインストール前の手順	11-3
11.2.1	Oracle ホーム・ディレクトリでの同じパスの使用 (推奨)	11-3
11.2.2	すべてのノードでの時計の同期化	11-3
11.2.3	ロード・バランサに対する仮想サーバーの名前およびポートの構成	11-3
11.2.4	LDAP 仮想サーバーの構成	11-4
11.2.4.1	ロード・バランサが LDAP サービスの監視をサポートしている場合	11-4
11.2.4.2	ロード・バランサが LDAP サービスの監視をサポートしていない場合	11-4
11.2.5	ロード・バランサへの Cookie 永続性の設定	11-5
11.3	Oracle Internet Directory パスワード	11-5
11.4	Oracle HTTP Server 用の SSL ポートおよび非 SSL ポート構成	11-5
11.4.1	ケース 1: クライアント --[HTTP]--> ロード・バランサ --[HTTP]--> Oracle HTTP Server	11-6
11.4.2	ケース 2: クライアント --[HTTPS]--> ロード・バランサ --[HTTPS]--> Oracle HTTP Server	11-6
11.4.3	ケース 3: クライアント --[HTTPS]--> ロード・バランサ --[HTTP]--> Oracle HTTP Server	11-7
11.5	OracleAS Cluster (Identity Management) 構成のインストール	11-8
11.5.1	インストールの順序	11-9
11.5.2	OracleAS Metadata Repository のインストール	11-9
11.5.3	最初のノードへの OracleAS Cluster (Identity Management) のインストール	11-9
11.5.3.1	staticports.ini ファイルの作成	11-9
11.5.3.2	最初のノードのロード・バランサで TCP の監視を無効にする	11-10
11.5.3.3	OracleAS Metadata Repository がいずれの Oracle Internet Directory にも 登録されていないことの確認	11-10
11.5.3.4	各ノードに対する同じコンポーネントの選択	11-10
11.5.3.5	インストーラの実行	11-10
11.5.4	後続のノードへの OracleAS Cluster (Identity Management) のインストール	11-13
11.5.5	Cluster Configuration Assistant が失敗した場合	11-15
11.6	分散 OracleAS Cluster (Identity Management) 構成のインストール	11-15
11.6.1	インストールの順序	11-17
11.6.2	OracleAS Metadata Repository のインストール	11-17
11.6.3	最初のノードへの Oracle Internet Directory のインストール	11-17
11.6.3.1	staticports.ini ファイルの設定	11-17
11.6.3.2	各インストールでの同じコンポーネントの選択	11-18
11.6.3.3	インストーラの起動	11-18
11.6.4	後続のノードへの Oracle Internet Directory のインストール	11-20
11.6.4.1	staticports.ini ファイルは不要	11-20
11.6.4.2	各インストールでの同じコンポーネントの選択	11-20
11.6.4.3	「Oracle Internet Directory への登録」画面の SSL に関するチェック・ボックスは 選択しない	11-20
11.6.4.4	インストーラの起動	11-20
11.6.5	各ノードへの OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services のインストール	11-22
11.6.5.1	staticports.ini ファイルの設定	11-22
11.6.5.2	インストーラの起動	11-22

11.6.5.3	Cluster Configuration Assistant が失敗した場合	11-24
11.7	インストール後の手順	11-24
11.7.1	targets.xml の更新 (ケース 2 のみ)	11-24
11.8	OracleAS Cluster (Identity Management) 構成への中間層のインストール	11-25

12 高可用性環境へのインストール : OracleAS Disaster Recovery

12.1	OracleAS Disaster Recovery: 概要	12-2
12.2	OracleAS Disaster Recovery 環境の設定	12-3
12.2.1	オペレーティング・システム・レベルでノードが同じであることの確認	12-3
12.2.2	staticports.ini ファイルの設定	12-3
12.2.3	本番およびスタンバイの両方のサイトでの同じホスト名の設定	12-4
12.2.4	本番サイトで OracleAS Cold Failover Cluster を使用する場合	12-8
12.3	OracleAS Disaster Recovery 環境への Oracle Application Server のインストール	12-9
12.3.1	OracleAS Infrastructure のインストール	12-9
12.3.2	中間層のインストール	12-9
12.4	次に読むマニュアル	12-10

13 既存のデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール

14 推奨されるトポロジ

14.1	Java 開発者トポロジ	14-2
14.1.1	説明	14-2
14.1.2	要件	14-2
14.1.3	インストールの手順	14-2
14.2	Portal and Wireless 開発者トポロジ	14-3
14.2.1	説明	14-3
14.2.2	要件	14-3
14.2.3	インストールの手順	14-3
14.3	Forms、Reports および Discoverer 開発者トポロジ	14-4
14.3.1	説明	14-4
14.3.2	要件	14-4
14.3.3	インストールの手順	14-5
14.4	Integration B2B トポロジ	14-5
14.4.1	説明	14-5
14.4.2	要件	14-6
14.4.3	前提条件	14-6
14.4.4	インストールの手順	14-6
14.5	OracleAS Portal 用に個別の OracleAS Metadata Repository が使用される 部門別トポロジ	14-7
14.5.1	説明	14-7
14.5.2	要件	14-8
14.5.3	前提条件	14-8
14.5.4	インストールの手順	14-8
14.6	開発ライフ・サイクル・サポート・トポロジ	14-9
14.6.1	テストからステージングへのアプリケーションの移行	14-9
14.6.2	ステージングから本番へのアプリケーションの移行	14-9
14.7	OCA トポロジ	14-10

14.7.1	説明	14-10
14.7.2	要件	14-10
14.7.3	インストールの手順	14-11

15 インストール後の作業

15.1	インストール後の Oracle Application Server インスタンスの状態	15-2
15.2	インストール後にコンピュータを再起動する場合	15-2
15.3	Oracle Application Server コンポーネントのパスワード	15-2
15.4	OracleAS ファイルベースのクラスタ化	15-2
15.5	OracleAS Metadata Repository のみのインストールに Application Server Control サービスは不要	15-2
15.6	サービスの依存関係	15-3
15.7	バックアップおよびリカバリ	15-3
15.8	SSL 対応	15-3
15.9	地域および言語オプションの設定および NLS_LANG パラメータ	15-4
15.10	インストール後のコンポーネントの構成	15-4
15.10.1	mod_osso の構成 (Oracle Delegated Administration Services に必要)	15-4
15.11	インストール後の作業を必要とするコンポーネント	15-6
15.12	次の作業	15-6

A OracleAS Developer Kits のインストール

B サイレント・インストールと非対話型インストール

B.1	サイレント・インストール	B-2
B.2	非対話型インストール	B-2
B.3	インストール前	B-2
B.4	サイレント・インストールおよび非対話型インストールに関する注意	B-2
B.4.1	OracleAS Certificate Authority のインストール	B-3
B.4.2	中間層の拡張	B-3
B.5	レスポンス・ファイルの作成	B-3
B.5.1	テンプレートからのレスポンス・ファイルの作成	B-3
B.5.2	インストーラの記録モードを使用したレスポンス・ファイルの作成	B-4
B.5.3	レスポンス・ファイルの例	B-5
B.5.3.1	スタンダードアロンの J2EE and Web Cache のレスポンス・ファイルの例	B-5
B.5.3.2	OracleAS Infrastructure のレスポンス・ファイルの例	B-7
B.5.3.3	Portal and Wireless のレスポンス・ファイルの例	B-11
B.6	インストールの開始	B-14
B.7	インストール後	B-14
B.8	サイレント・インストールおよび非対話型インストールでのセキュリティ上のヒント	B-14
B.9	削除	B-15

C デフォルトのポート番号

C.1	デフォルトのポート番号の割当て方法	C-2
C.2	デフォルトのポート番号	C-2

D ファイアウォール内で開くポート

E Java Access Bridge のインストール

E.1	概要	E-2
E.2	JRE 1.4.2 用の設定	E-2
E.3	インストール済の Oracle コンポーネント用の設定	E-2
E.3.1	Java Access Bridge のインストール	E-2
E.3.2	Java Access Bridge を使用するための Oracle コンポーネントの構成	E-3
E.3.2.1	Windows Server 2003 用の構成	E-3

F 削除および再インストール

F.1	新しいツール : Deconfig ツール	F-2
F.1.1	パラメータ	F-2
F.1.2	Deconfig ツールで生成されるログ・ファイル	F-3
F.2	削除手順 : 概要	F-3
F.3	OracleAS Cold Failover Cluster インストールの削除	F-4
F.4	OracleAS Cluster (Identity Management) 内の OracleAS Single Sign-On インスタンスの削除	F-4
F.5	OracleAS Cluster (Identity Management) の削除	F-5
F.6	中間層の削除	F-5
F.7	OracleAS Infrastructure の削除	F-6
F.7.1	削除の順序	F-6
F.7.2	削除の手順	F-7
F.8	OracleAS Developer Kits の削除	F-8
F.9	ログ・ファイルで発生する害のないエラー	F-9
F.10	すべての Oracle 製品の手動での削除	F-9
F.11	再インストール	F-11
F.12	トラブルシューティング	F-11

G Configuration Assistant

G.1	Configuration Assistant のトラブルシューティング	G-2
G.1.1	一般的なヒント	G-2
G.1.2	Configuration Assistant の結果コード	G-3
G.2	Oracle Application Server Configuration Assistant の説明	G-3

H トラブルシューティング

H.1	ログ・ファイル	H-2
H.2	一般的なトラブルシューティングのヒント	H-2
H.3	インストールの問題および解決策	H-2
H.3.1	ログ・ファイルの場所	H-3
H.3.2	空でないディレクトリへのインストールに関するメッセージ	H-3
H.3.3	インストーラが表示されない	H-4
H.3.4	失敗したインストールをクリーンアップできない	H-4
H.3.5	cn=orcladmin アカウントのパスワード忘れ	H-4
H.3.6	cn=orcladmin アカウントのロック	H-4
H.3.7	ユーザー・インターフェースが希望の言語で表示されない、または正しく表示されない	H-5

H.3.8	インストーラに OracleAS Metadata Repository の正しいデータベース名が表示されない	H-5
H.3.9	ネットワークに接続されているかどうかに関係なく Oracle Application Server を実行できない	H-6
H.3.10	一般的な Configuration Assistant の失敗	H-6
H.3.11	OracleAS Randomize Password Configuration Assistant の失敗	H-6
H.3.12	Database Configuration Assistant (DBCA) の失敗	H-7
H.3.13	Database Configuration Assistant (DBCA) からの害のないエラー・メッセージ	H-8
H.3.14	「OPMN Configuration Assistant - Oracle HTTP Server の起動」の失敗	H-8
H.3.15	「OPMN Configuration Assistant - DAS インスタンスの起動」の失敗	H-8
H.3.16	「OPMN Configuration Assistant - OCA インスタンスの起動」の失敗	H-9
H.3.17	chgtocfmt の再実行ができない	H-9
H.3.18	警告 : DCM サービスが現時点で使用できない場合がある	H-9
H.4	削除の問題および解決策	H-10
H.4.1	削除したパートナ URL が、OracleAS Single Sign-On の管理画面に残っている	H-10
H.4.2	削除したインスタンスのインスタンス名を再利用できない	H-10
H.4.3	データベース名を再利用できない	H-11
H.4.4	分散 OracleAS Cluster (Identity Management) での構成解除の失敗	H-12
H.5	関連ドキュメント	H-13

索引

はじめに

このマニュアルでは、要件、Oracle Universal Installer の新機能、インストールに影響する Oracle Application Server の概念、インストール手順およびトラブルシューティングのヒントについて説明します。また、Oracle Application Server をインストールし、実行するためのサンプル・トポロジも提供します。

対象読者

このマニュアルは、ユーザーやグループを作成したり、ユーザーをグループに追加するなどのシステム管理業務を問題なく遂行できる読者を対象としています。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読みない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読みない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

関連ドキュメント

詳細は、次のマニュアルを参照してください。

- 『Oracle Application Server 管理者ガイド』
- 『Oracle Application Server 概要』
- 『Oracle Application Server 高可用性ガイド』

表記規則

本文では、次の表記規則を使用します。

表記規則	意味
太字	太字は、操作に関連するグラフィカル・ユーザー・インターフェース要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
イタリック	イタリックは、特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、パラグラフ内のコマンド、URL、例に記載されているコード、画面に表示されるテキスト、または入力するテキストを示します。

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

オラクル社カスタマ・サポート・センター

オラクル製品サポートの購入方法、およびオラクル社カスタマ・サポート・センターへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>
<http://otn.oracle.co.jp>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

インストール手順の概要

Oracle Application Server は、強力な統合製品です。その機能を最大限活用するには、このマニュアルをよく読んで製品を正しく使用する必要があります。

この章では、Oracle Application Server のインストール手順の概要を説明します。手順の詳細は、他の章で説明します。

Oracle Application Server には次のインストール手順があります。

1. 次のドキュメントで、Oracle Application Server についての最新情報を確認します。
 - Oracle Application Server のリリース・ノート
最新のリリース・ノートは、Oracle Technology Network の次のサイトにあります。
<http://www.oracle.com/technology/documentation>
2. Oracle Application Server を実行するコンピュータが要件を満たしていることを確認します。次のような要件があります。
 - 第3.2項「システム要件」
 - 第3.3項「Windows システム・ファイル (wsf.exe)」
 - 第3.4項「ポート」
 - 第3.5項「オペレーティング・システム・ユーザー」
 - 第3.6項「環境変数」
 - 第3.7項「%WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイル」
 - 第3.8項「ネットワーク関連項目」
3. 第4章「インストールを開始する前に知っておく必要のあること」を読んで、Oracle Application Server のそれぞれの部分がどのように連携して動くのか全体像をつかみます。この章では OracleAS Infrastructure、Oracle Application Server の中間層、これらをインストールできる場所、およびいくつかのインストール画面で入力するように求められる値について説明します。
4. 第5章「OracleAS Infrastructure のインストール」および第6章「中間層のインストール」を読んで、Oracle Application Server の主要部分の詳細を理解します。
5. Oracle Application Server を OracleAS Cold Failover Cluster や OracleAS Disaster Recovery などの高可用性環境で実行する場合は、第9章「高可用性環境へのインストール : 概要」を参照します。
6. 推奨されるトポロジについて学習します。Oracle Application Server を複数のコンピュータにインストールすると、スケーラビリティ、可用性、セキュリティおよびパフォーマンスを向上させることができます。第14章「推奨されるトポロジ」では、開発および配置トポロジについて説明します。
7. Oracle Application Server (Infrastructure または中間層、あるいはその両方) をインストールします。第5章「OracleAS Infrastructure のインストール」および第6章「中間層のインストール」の該当する手順に従います。

-
- 8.** Oracle Application Server をインストールしたら、「ようこそ」ページにアクセスしてデモをいくつか実行し、インストールが成功したことを確認します。

2

インストールの新機能

この章では、Oracle Universal Installer の新機能について説明します。製品自体の新機能を確認するには、Oracle Technology Network の次のサイトを参照してください。

<http://www.oracle.com/technology>

この章の内容は次のとおりです。

- 第 2.1 項 「Oracle Database 10g を使用する OracleAS Metadata Repository」
- 第 2.2 項 「より多くの高可用性環境のサポート」
- 第 2.3 項 「Oracle Internet Directory レプリケーションのサポート」
- 第 2.4 項 「staticports.ini ファイルを指定する新しい画面」
- 第 2.5 項 「削除用の追加のツール」
- 第 2.6 項 「J2EE and Web Cache 用の「構成オプションの選択」画面のオプション名の変更」
- 第 2.7 項 「サイレント・インストール用の記録機能」
- 第 2.8 項 「インストールの統計の生成」
- 第 2.9 項 「デフォルトのポート範囲の変更」
- 第 2.10 項 「CORBA 通信用のポート番号を指定する新しい要素」
- 第 2.11 項 「OracleAS Forms and Reports Services インスタンスのクローニング」

2.1 Oracle Database 10g を使用する OracleAS Metadata Repository

今回のリリースでは、インストーラによって OracleAS Metadata Repository 用の Oracle Database 10g (10.1.0.4.2) が作成されます。

インストール中にこのデータベースを構成するために、次の画面が表示されます。

- データベース構成オプションの指定
- データベース・スキーマのパスワードの指定

詳細は、[第 5.27 項「インストールの一部：データベースの画面」](#) を参照してください。

2.2 より多くの高可用性環境のサポート

今回のリリースでは、Oracle Application Server は次の高可用性環境をサポートします。

- OracleAS Cold Failover Cluster
- OracleAS Cluster (Identity Management)
- OracleAS Disaster Recovery

また、各環境では、OracleAS Metadata Repository および Oracle Identity Management コンポーネントを複数のコンピュータに分散できます。

高可用性に関連する新しい画面もあります。

詳細は、次の各章を参照してください。

- [第 9 章「高可用性環境へのインストール：概要」](#)
- [第 10 章「高可用性環境へのインストール：OracleAS Cold Failover Cluster」](#)
- [第 11 章「高可用性環境へのインストール：OracleAS Cluster \(Identity Management\)」](#)
- [第 12 章「高可用性環境へのインストール：OracleAS Disaster Recovery」](#)

2.3 Oracle Internet Directory レプリケーションのサポート

今回のリリースでは、インストーラを使用して、マスター Oracle Internet Directory および Oracle Internet Directory レプリカをインストールできます。

インストール時に、希望するレプリケーションのタイプを選択します。

- ファンアウト・レプリケーション (LDAP レプリケーションとも呼ばれる)
- マルチマスター・レプリケーション (アドバンスト・レプリケーションとも呼ばれる)

詳細は、[第 8 章「レプリケーション・モードでの Oracle Internet Directory のインストール」](#) を参照してください。

2.4 staticports.ini ファイルを指定する新しい画面

今回のリリースでは、インストーラの新しい「ポート構成オプションの選択」画面で staticports.ini ファイルを指定します。ファイルの指定に、コマンドライン・オプションは使用しません。

詳細は、[第 3.4.4 項「カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）」](#) を参照してください。

2.5 削除用の追加のツール

今回のリリースでは、Oracle Internet Directory および OracleAS Metadata Repository からエンティリを削除する Deconfig ツールと呼ばれる新しいツールがあります。インストーラを使用して Oracle Application Server を削除する前に、このツールを実行します。

詳細は、[第 F.1 項「新しいツール：Deconfig ツール」](#) を参照してください。

2.6 J2EE and Web Cache 用の「構成オプションの選択」画面のオプション名の変更

今回のリリースでは、インストーラによってインスタンスのクラスタは作成されないため、これらのオプションは「OracleAS Farm Repository」オプションになりました。インストーラは、インスタンスをファームには配置しますが、クラスタには配置しません。必要に応じて、インストール後にインスタンスをクラスタ化できます。

詳細は、[第 6.4 項「J2EE and Web Cache 中間層用の構成オプション」](#) を参照してください。

2.7 サイレント・インストール用の記録機能

インストーラには記録モードがあります。このモードでは、ユーザーの入力値がレスポンス・ファイルに保存されます。生成されたレスポンス・ファイルを使用すると、異なるコンピュータに同じ値を使用して Oracle Application Server をインストールできます。

詳細は、[第 B.5.2 項「インストーラの記録モードを使用したレスポンス・ファイルの作成」](#) を参照してください。

2.8 インストールの統計の生成

インストーラでは、インストールに使用されるリソースを監視するためのコマンドライン・オプションが提供されます。次のオプションがあります。

表 2-1 インストールの統計を生成するためのインストーラ・オプション

オプション	説明
-printtime	このオプションを使用して、インストールにかかった時間に関する情報を取得します。インストーラは、次のファイルに情報を書き込みます。 C:\\$Program Files\\$Oracle\\$Inventory\\$logs\\$timetimestamp.log
-printmemory	このオプションを使用して、インストールに使用したメモリーに関する情報を取得します。インストーラは、次のファイルに情報を書き込みます。 C:\\$Program Files\\$Oracle\\$Inventory\\$logs\\$memorytimestamp.log
-printdiskusage	このオプションを使用して、インストールに使用したディスク領域に関する情報を取得します。インストーラは、次のファイルに情報を書き込みます。 C:\\$Program Files\\$Oracle\\$Inventory\\$logs\\$diskusagetimestamp.log

たとえば、次のコマンドを実行すると、3つの項目すべての情報が取得されます。

```
setup.exe -printtime -printmemory -printdiskusage
```

2.9 デフォルトのポート範囲の変更

次のコンポーネントのデフォルトのポート範囲が変更されました。

- Oracle Internet Directory
- OracleAS Certificate Authority
- Oracle Application Server Containers for J2EE
- Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソール
- Oracle Application Server Web Cache

詳細は、[付録 C 「デフォルトのポート番号」](#) を参照してください。

2.10 CORBA 通信用のポート番号を指定する新しい要素

Oracle Reports 10g リリース 2 (10.1.2) ではサーバー構成ファイルに `ORBPorts` 要素を導入し、Reports Server で使用するポート番号と CORBA を介した通信のエンジンを明示的に指定できます。ポート番号は、範囲または個々にカンマ区切りで指定できます。たとえば、次のようになります。

```
<ORBPorts value="15000-15010"/>      (Range of values)
<ORBPorts value="15000,16000,17000,18000"/>    (Comma-separated values)
```

注意： `ORBPorts` 要素は、Reports Server が稼動しているサーバーで TCP ポート・フィルタリングが有効な場合のみ、指定する必要があります。ポート・フィルタリングが有効であり、Reports Server 用として 2 ~ 3 のポートを開けることが可能な場合、`ORBPorts` を使用して、Reports Server とエンジンの通信用にサーバー構成ファイルでポートを指定します。使用可能なポートがまったくない場合は、Reports Server またはエンジンが起動に失敗することがあり、エラーが表示されます。

デフォルトでは、サーバー構成ファイルに `ORBPorts` 要素はありません。この要素がない場合、Reports Server では CORBA の通信にポートを無作為に選択します。`ORBPorts` 要素の詳細は、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』の「OracleAS Reports Services の構成」の章を参照してください。

2.11 OracleAS Forms and Reports Services インスタンスのクローニング

クローニングとは、既存のインストールの構成をそのまま別の場所にコピーするプロセスを指します。このリリースでは、OracleAS Forms and Reports Services インスタンスのインストールのクローニングが可能になりました。クローニングの詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

3

要件

Oracle Application Server をインストールする前に、使用するコンピュータがこの章で説明している要件を満たしていることを確認してください。

表 3-1 この章の内容

項	説明
第 3.1 項 「最新の Oracle Application Server のハードウェアとソフトウェア要件を取得する OracleMetaLink の使用」	Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) の最新の要件を検索する方法を説明します。
第 3.2 項 「システム要件」	サポートされているオペレーティング・システム、プロセッサ速度、メモリー、ディスク領域、スワップ領域などの要件を一覧表示します。
第 3.3 項 「Windows システム・ファイル (wsf.exe)」	wsf.exe を実行して Windows システム・ファイルを更新する方法について説明します。インストーラによって、更新するように求められた場合にのみ該当します。
第 3.4 項 「ポート」	デフォルト・ポート以外のポートを使用するようにコンポーネントを構成する方法について説明します。
第 3.5 項 「オペレーティング・システム・ユーザー」	Oracle Application Server をインストールするために、オペレーティング・システム・ユーザーを作成する必要がある理由について説明します。
第 3.6 項 「環境変数」	インストールに必要な環境変数を設定または設定解除する方法について説明します。
第 3.7 項 「%WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイル」	インストーラがどのように hosts ファイル内の情報を使用するかについて説明します。ファイルを編集せずに同じ情報を指定する方法についても説明します。
第 3.8 項 「ネットワーク関連項目」	リモート・コンピュータへの Oracle Application Server のインストール、リモート CD-ROM/DVD-ROM ドライブの使用、ハード・ディスクからのインストールなど、ネットワークの問題について説明します。
第 3.9 項 「インストーラにより実行される前提条件チェック」	Oracle ホーム名の長さや、Oracle ホーム・ディレクトリに別の Oracle 製品がすでにインストールされているかどうかなど、インストーラによってチェックされる項目を一覧表示します。

3.1 最新の Oracle Application Server のハードウェアとソフトウェア要件を取得する OracleMetaLink の使用

このマニュアルに含まれる Oracle Application Server 10g (10.1.2.0.2) のハードウェアとソフトウェア要件は、このマニュアルの作成された時点での情報です。ハードウェアとソフトウェア要件の最新情報については、OracleMetaLink を参照してください。

<http://metalink.oracle.com/>

OracleMetaLink にログインした後、「**Certify and Availability**」をクリックします。表示された Web ページから、製品、プラットフォーム、製品の可用性ごとに、最新の動作保証リストを閲覧できます。

3.2 システム要件

表 3-2 に、Oracle Application Server を実行するためのシステム要件を示します。インストーラにより、この要件の多くがインストール・プロセス開始時にチェックされ、満たされていない要件がある場合には警告されます。ユーザーはインストーラによってチェックされない要件のみを確認して時間を節約できます。インストーラによりチェックされない要件については、表 3-2 を参照してください。

また、次に示す `setup.exe` コマンドを実行すると、実際にインストールを行わずに、インストーラによるシステム・チェックのみを実行することもできます。`setup.exe` コマンドは、Oracle Application Server CD-ROM (Disk 1) または DVD (`application_server` ディレクトリ) にあります。

CD-ROM の場合 (E: が CD-ROM ドライブであると想定します) :

```
E:> setup.exe -executeSysPrereqs
```

DVD の場合 (E: が DVD ドライブであると想定します) :

```
E:> cd application_server
E:> application_server> setup.exe -executeSysPrereqs
```

結果は画面に表示され、ログ・ファイルにも書き込まれます。実行されるチェックの種類の詳細は、[第 3.9 項「インストーラにより実行される前提条件チェック」](#) を参照してください。

表 3-2 システム要件

項目	要件
オペレーティング・システム	Microsoft Windows Server 2003 (64-bit) Service Pack 1 以降 インストーラによるチェック : あり
64 ビットの動作保証	Oracle Application Server for Windows の 32 ビット版は、Intel x86、AMD64 および Intel EM64T プロセッサで動作します。詳細は、OracleMetaLink (http://metalink.oracle.com/) を参照してください。 次の 64 ビットのオペレーティング・システムがサポートされています。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Windows XP Professional x64 Edition ■ Microsoft Windows Server 2003, Standard x64 Edition ■ Microsoft Windows Server 2003, Enterprise x64 Edition ■ Microsoft Windows Server 2003, Datacenter x64 Edition 注意 : OracleAS Infrastructure を除くすべての製品およびコンポーネントは、AMD64 プロセッサおよび Intel EM64T プロセッサでの動作が保証されています。

表 3-2 システム要件（続き）

項目	要件
ネットワーク	<p>Oracle Application Server は、ネットワークに接続されているコンピュータまたは接続されていないコンピュータ（スタンダロン・コンピュータ）にインストールできます。</p> <p>Oracle Application Server をスタンダロン・コンピュータにインストールする場合、インストール後にそのコンピュータをネットワークに接続できます。コンピュータをネットワークに接続する際、いくつかの構成作業を実行する必要があります。</p> <p>詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。</p> <p>インストーラによるチェック：なし</p>
IP	<p>Oracle Application Server は、静的 IP または DHCP ベースの IP を使用するコンピュータにインストールできます。</p> <p>注意：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DHCP 接続のコンピュータにインストールする場合の追加の要件については、第 3.8.1 項「DHCP 接続のコンピュータへのインストール」 を参照してください。 ■ 静的 IP を持つコンピュータにインストールして、Oracle Application Server をオンラインまたはオフラインで実行可能にする場合の追加の要件については、第 3.8.5 項「後でネットワークから切断する、静的 IP を持つコンピュータへのインストール」 を参照してください。 <p>インストーラによるチェック：なし</p>
ホスト名	ホスト名は 255 文字以下にする必要があります。
プロセッサ速度	Intel Itanium 2 (900MHz 以上)
	インストーラによるチェック：なし
メモリー	<p>OracleAS Infrastructure:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ OracleAS Metadata Repository および Oracle Identity Management: 3.7GB ■ Oracle Identity Management のみ: 1.25GB ■ OracleAS Metadata Repository のみ: 3.7GB <p>Oracle Application Server の中間層:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ J2EE and Web Cache: 846MB ■ Portal and Wireless: 1.2GB ■ Business Intelligence and Forms: 1.7GB <p>OracleAS Developer Kits: 256MB</p> <p>注意：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ インストーラによってコンピュータのメモリーの容量がチェックされ、コンピュータが最小メモリー要件を満たしていない場合は、警告されます。 ■ これらの値は、コンピュータごとに Oracle Application Server インスタンスが 1 つだけ実行されていると想定した場合のものです。同じコンピュータ上で複数のインスタンスを実行する場合は、第 3.2.1 項「同じコンピュータ上で複数のインスタンスを実行する場合のメモリーおよびページング・ファイルの要件」 を参照してください。 ■ これらは、Oracle Application Server をインストールおよび実行するのに必要な最小値です。ほとんどの本番サイトでは 1 GB 以上の物理メモリー構成が必要です。通信量の多いサイトでは、メモリーをさらに増やすことによってパフォーマンスを向上させることができます。Java アプリケーションで增量したメモリーを活用するには、OC4J プロセスに割り当てられた最大ヒープを増やすか、OC4J プロセスを追加構成する必要があります。詳細は、『Oracle Application Server パフォーマンス・ガイド』を参照してください。 ■ 実際のインストールに最適なメモリーの容量を決定するには、サイトの負荷テストを行うのが最善です。アプリケーションや利用パターンによって、リソースの要件は大幅に異なることがあります。また、メモリーを監視するオペレーティング・システムのユーティリティでは、共有メモリーを示すなどの理由で、メモリー使用を実際より多く報告するものもあります。メモリー要件を決定するには、負荷テストの際に、物理メモリーの追加によるパフォーマンスの向上を監視することをお薦めします。メモリーおよびプロセッサ・リソースをテスト用に構成する方法は、各プラットフォーム・ベンダーのドキュメントを参照してください。 <p>インストーラによるチェック：あり</p>

表 3-2 システム要件（続き）

項目	要件
ファイル・システム タイプ	NTFS にはファイルに対する権限の制限を設定するなどのセキュリティ機能が含まれているため、FAT32 または FAT ファイル・システム・タイプよりも NTFS の使用をお薦めします。 インストーラによるチェック：なし
ディスク領域	OracleAS Infrastructure: <ul style="list-style-type: none">■ OracleAS Metadata Repository および Oracle Identity Management: 3.07GB■ OracleAS Metadata Repository データベースのデータ・ファイルを、OracleAS Infrastructure をインストールするディスクとは異なるディスクにインストールできます。これを実行するには、データ・ファイル用のディスクに 1.85GB 以上の空き領域があることを確認してください。■ Oracle Identity Management のみ : 1.25GB■ OracleAS Metadata Repository のみ : 3.7GB Oracle Application Server の中間層: <ul style="list-style-type: none">■ J2EE and Web Cache: 846MB■ Portal and Wireless: 1.2GB■ Business Intelligence and Forms: 1.7GB OracleAS Developer Kits: 256MB インストーラによるチェック：なし
TEMP ディレクトリ 内の領域	インストーラの実行には 55MB を必要としますが、インストールに 256MB を必要とするインストール・タイプがあります。 TEMP ディレクトリに十分な空き領域がない場合は、環境変数 TMP を設定することにより、別のディレクトリを指定できます。詳細は、第 3.6.5 項「TEMP」を参照してください。 インストーラによるチェック：あり
総ページング・ファ イル・サイズ（仮想 メモリー）	ここに示す値は概算です。コンピュータのメモリー容量に基づいた Windows の推奨値を使用する必要があります。 OracleAS Infrastructure: <ul style="list-style-type: none">■ OracleAS Metadata Repository および Oracle Identity Management: 1GB■ Oracle Identity Management のみ : 1GB■ OracleAS Metadata Repository のみ : 1GB Oracle Application Server の中間層: <ul style="list-style-type: none">■ J2EE and Web Cache: 512 MB■ Portal and Wireless: 512MB■ Business Intelligence and Forms: 1GB OracleAS Developer Kits: 512MB OracleAS Personalization を使用する場合は、ページング・ファイルのサイズを、コンピュータ上の物理メモリーの容量の 1.5 倍以上にする必要があります。 OracleAS Clusters を使用する場合は、1GB 以上に設定することをお薦めします。 本番環境では、仮想メモリーを 1 GB 以上に設定することをお薦めします。 総ページング・ファイル・サイズ（仮想メモリー）を表示および変更するには、次の手順を実行します。 <ol style="list-style-type: none">1. 「システムのプロパティ」コントロール・パネルを表示します。 これを行うには、「スタート」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。2. 「詳細設定」タブを選択します。3. 「パフォーマンス」セクションの「設定」をクリックします。4. 「詳細設定」タブを選択します。5. 「変更」をクリックして、仮想メモリーの設定を表示および変更します。 インストーラによるチェック：あり

表 3-2 システム要件（続き）

項目	要件
モニター	256 色表示機能 インストーラによるチェック：あり
サポートされているブラウザ	Oracle Enterprise Manager 10g は、次のブラウザでサポートされています。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Internet Explorer 6.0 (Microsoft Windows の場合のみ) ■ Netscape 7.2 ■ Mozilla 1.7. Mozilla は http://www.mozilla.org からダウンロードできます。 ■ Firefox 1.0.4。Firefox は http://www.mozilla.org からダウンロードできます。 ■ Safari 1.2 (Apple Macintosh コンピュータ) <p>サポートされるブラウザの最新のリストは、OracleMetaLink のサイト (http://metalink.oracle.com) を参照してください。</p> <p>インストーラによるチェック：なし。ただし、サポートされていないブラウザで Oracle Enterprise Manager 10g にアクセスすると、警告メッセージが表示されます。</p>

3.2.1 同じコンピュータ上で複数のインスタンスを実行する場合のメモリーおよびページング・ファイルの要件

同じコンピュータ上で OracleAS Infrastructure と中間層を実行する場合、そのコンピュータが表 3-3 に示すメモリーとページング・ファイルの要件を満たしていることを確認してください。

表に示すページング・ファイルの値は、コンピュータのメモリー容量に基づいた Windows の推奨値です。この推奨値を使用してください。

ここに示す値は、少人数のユーザーに対してテストされたものです。ユーザー数が多い場合は、メモリーの容量を増やす必要があります。

表 3-3 同じコンピュータ上で複数のインスタンスを実行する場合のメモリーおよびページング・ファイルの要件

説明	メモリー	ページング・ファイル
OracleAS Infrastructure および J2EE and Web Cache	1GB	1.5GB
OracleAS Infrastructure および Portal and Wireless	1.5GB	2.0 ~ 2.5GB
OracleAS Infrastructure および Business Intelligence and Forms	1.5GB	2.0 ~ 2.5GB

3.2.2 メモリー使用量を削減するためのヒント

メモリー使用量を削減する必要がある場合は、次の手順を実行します。

- 必要なコンポーネントのみを構成します。
- 必要なコンポーネントを含む中間層タイプで最も小さいものを選びます。
- インストール後、必要なコンポーネントのみを起動します。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
- インスタンスを管理する必要がある場合にのみ Application Server Control を実行します。ほとんどの場合、Application Server Control を実行する必要はありません。

1 台のコンピュータで複数の Oracle Application Server インスタンスを実行している場合、各 Application Server Control が大量のメモリーを消費する可能性があります。必要な場合にのみ Application Server Control を実行することで、他のコンポーネント用にメモリーを解放することができます。

- 複数のインスタンスを管理できるように Application Server Control を構成します。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

3.3 Windows システム・ファイル (wsf.exe)

注意： この手順はインストーラによって求められた場合にのみ実行します。

Oracle Application Server では、Windows システム・ディレクトリ（通常、C:\Windows\system32 または C:\Winnt\system32）の一部のシステム・ファイルに最低限のバージョンが必要です。Oracle Application Server のインストーラを実行する際に、コンピュータの Windows システム・ファイルがチェックされます。これらの古いバージョンのファイルが検出され、そのファイルを他のプロセスが使用している場合は、インストーラを終了して wsf.exe を実行し、最新の Windows システム・ファイルをインストールするように求められます。（古いバージョンのファイルが検出されても、そのファイルを他のプロセスが使用していない場合は、インストーラによってファイルが置き換えるため、wsf.exe を実行する必要はありません。）

wsf.exe は、インストーラと同じディレクトリにあります。

wsf.exe を実行するには（インストーラによって要求された場合のみ）、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを使用して wsf.exe を実行します。Oracle Universal Installer が起動され、Windows システム・ファイルがインストールされます。

CD-ROM の場合（E: が CD-ROM ドライブであると想定します）：

E:> **wsf.exe**

DVD の場合（E: が DVD ドライブであると想定します）：

```
E:> cd application_server
E:> wsf.exe
```

2. インストーラの画面に従います。

表 3-4 Windows システム・ファイルのインストール画面

画面	操作
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. ファイルの場所の指定	名前：wsf の Oracle ホームの名前を入力します。 パス：任意のフルパスを入力します。インストーラは、このフィールドに入力された値に関係なく、適切なシステム・ディレクトリにファイルをインストールします。 「次へ」をクリックします。
3. 警告：システムを再起動してください	この画面が表示された場合、インストーラはこのインストールの終わりにコンピュータを自動的に再起動して、Windows システム・ファイルのインストールを完了させます。コンピュータで実行しているアプリケーション（インストーラ以外）を保存して閉じます。 「次へ」をクリックします。
4. サマリー	「次へ」をクリックして、Windows システム・ファイルのインストールを開始します。
5. インストールの終了	「終了」をクリックして、インストーラを終了します。

3. インストール時に「警告：システムを再起動してください」という画面が表示されると、インストーラによってコンピュータが再起動されます。再起動されない場合は、続行する前にコンピュータを再起動します。

3.4 ポート

Oracle HTTP Server、OracleAS Web Cache、Oracle Enterprise Manager 10g など、多くの Oracle Application Server コンポーネントでポートを使用します。インストーラにデフォルトのポート番号を割り当ててもらうことも、ユーザーが指定したポート番号を使用することもできます。

- [第 3.4.1 項「エフェメラル・ポートの概要」](#)
- [第 3.4.2 項「ポートが使用中かどうかの確認」](#)
- [第 3.4.3 項「デフォルトのポート番号の使用」](#)
- [第 3.4.4 項「カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）」](#)
- [第 3.4.5 項「ポート 1521 が使用されている場合」](#)

3.4.1 エフェメラル・ポートの概要

エフェメラル・ポートは、オペレーティング・システムがサービスやプロセスに一時的に割り当てることのできるポート番号です。従来、一部のサービスやプロセスには、永続的なポート番号が割り当てられます。それ以外の場合は、割り当てられたポート番号の範囲からエフェメラル・ポート番号が、一時的に（リクエストが完了するまでの期間）割り当てられます。

エフェメラル・ポートの範囲

Microsoft Windows でのエフェメラル・ポートの範囲は、1024～5000 です。

Windows では、この範囲の上限値のみ調整できます。他のほとんどのオペレーティング・システムでは、エフェメラル・ポートのデフォルトの範囲が広く、範囲の上限と下限の両方を調整できます。

Oracle HTTP Server、OracleAS Web Cache、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control および OC4J などの Oracle Application Server プロセスの一部では、エフェメラル・ポートの範囲内のポートを使用します。これらのプロセスは、必要なポートがクライアントで使用されている場合に起動できません。

問題：エフェメラル・ポートが競合しているためにコンポーネントを起動できない

まれに、必要なポートが使用不可なために Oracle Application Server プロセスを起動できない場合があります。プロセスの起動が失敗するか、またはポートにバインドできないことがレポートされる場合があります。この問題は一時的な場合があり、影響を受けたプロセスを後で再起動すると、正常に起動する場合があります。

この問題の原因は、Oracle Application Server がデフォルトでエフェメラル・ポートの範囲内のポート番号を使用することです。エフェメラル・ポートは通常、クライアント / サーバーの TCP/IP 接続のクライアント側で使用されます。通常、クライアント・プロセスは接続のクライアント側で使用されるポートの値と関係ないため、すべての TCP/IP 実装では、クライアント側で使用するポート値の選択をオペレーティング・システムに依存させることができます。オペレーティング・システムは、このタイプの各クライアント接続用のエフェメラル・ポートの範囲から 1 つのポートを選択します。

一方、サーバー・プロセス（たとえば、Oracle Application Server プロセス）はエフェメラル・ポートを使用できません。サーバー・プロセスでは、クライアントが常に同じサーバー・ポートに接続してサーバーと通信できるように、固定のポート値を使用する必要があります。

エフェメラル・ポートとのポートの競合は、Oracle Application Server プロセスがエフェメラル・ポートの範囲内のポートを使用するように構成されている場合に発生します。Oracle Application Server プロセスが起動しようとすると、必要なポートがクライアント・プロセス（オペレーティング・システムからエフェメラル・ポートを割り当てられたクライアント）によって使用されていることを検出します。このクライアントは、TCP/IP を介して通信可能なコンピュータ上の任意のプロセスである可能性があります。Oracle Application Server プロセスは、必要なポートが使用不可である場合、起動に失敗します。

この問題は、他のオペレーティング・システムと比較して Microsoft Windows で頻繁に発生します。これは、Windows で使用されるエフェメラル・クライアント接続用のポートの範囲が狭いためです。

エフェメラル・ポートとの競合を回避する方法

エフェメラル・ポートとの競合を回避するには、次の方法があります。

- staticports.ini を使用して Oracle Application Server をインストールします。これによって、Oracle Application Server コンポーネントがエフェメラル・ポートの範囲内のポートを使用しなくなります。staticports.ini ファイルでは、1024 より小さいポート番号または 5000 より大きいポート番号を使用します。

詳細は、[第 3.4.4 項「カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）](#) を参照してください。

- Oracle Application Server をインストール済の場合、1024 より小さいポートまたは 5000 より大きいポートを使用するようにコンポーネントを再構成できます。Application Server プロセスが使用している現行のポートを変更する方法については、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

- (この方法はインストール後に実行できます。) コンピュータでエフェメラル・ポートの範囲を変更します。この方法は、前述の 2 つの方法がいずれも実行できない場合に実行してください。この方法では Windows のレジストリが変更され、コンピュータで実行するすべての製品が影響を受けるため、この方法の優先順位は最も低くなります。

この方法を実行すると、エフェメラル・ポートの範囲が新しい範囲に変更されます。変更を行う前に、コンピュータで使用しているいずれの製品（Oracle 製品および Oracle 以外の製品）も、エフェメラル・ポートの範囲内の非エフェメラル・ポートを使用していないことを確認する必要があります。使用している場合、その製品を新しい ReservedPorts の範囲内（後述を参照）のポートに再配置する必要があります。このポートは、新しいエフェメラル・ポートの範囲の上限より大きいか、またはポート 1024 より小さくなります。

このオプションを実施するには、次の手順を実行します。

- エフェメラル・ポートの範囲の上限値を大きくして、範囲のサイズを拡張します。

レジストリの MaxUserPort 値を 13000 ~ 65534 に設定します。MaxUserPort は、エフェメラル・ポートの範囲の上限です。

設定手順については、Microsoft Knowledge Base のアーティクル 196271 ([http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;\[LN\];196271](http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;[LN];196271)) を参照してください。

- 新しく拡張したエフェメラル・ポートの範囲の一部を Oracle Application Server で使用するために予約します。

レジストリの ReservedPorts 値を変更し、ポート 1024 ~ 8000 を Oracle Application Server 用に予約します。予約した範囲は、Oracle Application Server によって通常使用されるポートの範囲に組み込まれます。

設定手順については、Microsoft Knowledge Base のアーティクル 812873 ([http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;\[LN\];812873](http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;[LN];812873)) を参照してください。

- コンピュータを再起動して、変更を有効にします。

これらの手順を実行すると、1024 ~ 8000 のポートは Oracle Application Server 用に予約され、8001 ~ 13000 のポートが新しいエフェメラル・ポートの範囲（MaxUserPort を 13000 に設定した場合）になります。予約した範囲は Oracle Application Server によって通常使用されるポートの範囲に組み込まれ、エフェメラル・ポートの範囲は元のサイズと同じになります。

3.4.2 ポートが使用中かどうかの確認

ポートが使用されているかどうかを確認するには、`netstat` コマンドを次のように実行します。

```
C:\> netstat -an | find "portnum"
```

ポート番号は、二重引用符で囲む必要があることに注意してください。

3.4.3 デフォルトのポート番号の使用

コンポーネントでデフォルトのポート番号を使用する場合は、特に何もする必要はありません。デフォルトのポート番号および範囲のリストについては、[付録 C 「デフォルトのポート番号」](#) を参照してください。各コンポーネントに対し、ポート範囲内で1つ以上のポートが使用できることを確認します。インストーラが空きポートを範囲内で検出できない場合、そのインストールは失敗します。

次の点に注意してください。

- インストーラは、デフォルト・ポートが他のアプリケーションによって使用されていない場合にのみ、そのデフォルト・ポートをコンポーネントに割り当てます。デフォルト・ポートが使用中である場合、インストーラは、そのコンポーネントに対してポート番号範囲内の別のポートの割当てを試行します。たとえば、中間層の Oracle HTTP Server のデフォルトの非 SSL ポートはポート 80 です。このポートが別のアプリケーションによって使用されている場合、インストーラは 7777 ~ 7877 の範囲内のポートを割り当てます。
- Oracle HTTP Server のデフォルト・ポートは、インストール・タイプに応じて異なります（[表 3-5](#)）。中間層は、アプリケーションが配置されるポートである、ポート 80 および 443 を取得します。ユーザーは、中間層の Oracle HTTP Server および OracleAS Web Cache にリクエストを送信して、アプリケーションにアクセスします。

[表 3-5](#) に、デフォルト・ポートが使用中である場合に、インストーラが Oracle HTTP Server への割当てを試行する値（カッコ内の値）を示します。

表 3-5 Oracle HTTP Server のデフォルト・ポート

インストール・タイプ	デフォルトの非 SSL ポート	デフォルトの SSL ポート
OracleAS Infrastructure	7777 (7777 ~ 7877)	4443 (4443 ~ 4543)
中間層	80 (7777 ~ 7877)	443 (4443 ~ 4543)

- インストーラは、`services` ファイルでポートが使用中であるかどうかを確認しません。`services` ファイルは、`C:\%SystemRoot%\system32\drivers\etc` ディレクトリに格納されています。ここで、`%SystemRoot%` は、Windows Server 2003 では `winnt` です。

OracleAS Infrastructure と中間層を同じコンピュータにインストールする場合

同じコンピュータに複数のインスタンス（OracleAS Infrastructure と中間層、または複数の中間層）をインストールする場合、最初にインストールされるインスタンスのみがデフォルト・ポートを使用します。追加のインスタンスをインストールする際、インストーラによってデフォルト・ポートが最初のインスタンスによって使用されていることが検出され、追加のインスタンスに他のポートが割り当てられます。

これを最もわかりやすく表すコンポーネントが Oracle HTTP Server と OracleAS Web Cache です（次の表を参照）。

表 3-6 異なるシナリオでの Oracle HTTP Server のポート

シナリオ	非 SSL ポート	SSL ポート
OracleAS Infrastructure と中間層が同じコンピュータにインストールされている場合	OracleAS Infrastructure の Oracle HTTP Server: 7777 中間層の Oracle HTTP Server: 80	OracleAS Infrastructure の Oracle HTTP Server: 4443 中間層の Oracle HTTP Server: 443
2つの中間層が同じコンピュー タにインストールされている場合	1 つの中間層の Oracle HTTP Server: 80 2 つの中間層の Oracle HTTP Server: 7777	1 つの中間層の Oracle HTTP Server: 443 2 つの中間層の Oracle HTTP Server: 4443

3.4.4 カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）

インストーラがコンポーネントにカスタムのポート番号を割り当てるようにするには、次の手順を実行します。

1. コンポーネント名とポート番号の入ったファイルを作成します。ファイルの書式は、[第 3.4.4.1 項「staticports.ini ファイルの書式」](#) を参照してください。このファイルは通常 staticports.ini ファイルという名前ですが、任意の名前を付けることができます。
2. インストーラの「ポート構成オプションの指定」画面で、「手動」を選択し、staticports.ini ファイルへのフルパスを指定します。

ファイルへのフルパスを指定しないと、インストーラはファイルを見つけることができません。この場合、インストーラはすべてのコンポーネントにデフォルトのポートを割り当てますが、警告は一切表示されません。

3.4.4.1 staticports.ini ファイルの書式

staticports.ini ファイルの書式は次のとおりです。port_num は、コンポーネントに使用するポート番号に置き換えます。

```
# J2EE and Web Cache
Oracle HTTP Server port = port_num
Oracle HTTP Server Listen port = port_num
Oracle HTTP Server SSL port = port_num
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = port_num
Oracle HTTP Server Diagnostic port = port_num
Java Object Cache port = port_num
DCM Java Object Cache port = port_num
DCM Discovery port = port_num
Oracle Notification Server Request port = port_num
Oracle Notification Server Local port = port_num
Oracle Notification Server Remote port = port_num
Application Server Control port = port_num
Application Server Control RMI port = port_num
Oracle Management Agent port = port_num
Web Cache HTTP Listen port = port_num
Web Cache HTTP Listen (SSL) port = port_num
Web Cache Administration port = port_num
Web Cache Invalidation port = port_num
Web Cache Statistics port = port_num
Log Loader port = port_num
ASG port = port_num

# Business Intelligence and Forms
Discoverer Preference port = port_num
Reports Services SQL*Net port = port_num
Reports Services discoveryService port = port_num
Reports Services bridge port = port_num
```

```
# Infrastructure
Oracle Internet Directory port = port_num
Oracle Internet Directory (SSL) port = port_num
Oracle Certificate Authority SSL Server Authentication port = port_num
Oracle Certificate Authority SSL Mutual Authentication port = port_num
Ultra Search HTTP port number = port_num
```

このファイルを作成する最も簡単な方法は、CD-ROM (Disk 1) または DVD にある staticports.ini ファイルをテンプレートとして使用することです。

1. staticports.ini ファイルを CD-ROM または DVD からハード・ディスクにコピーします。

表 3-7 CD-ROM および DVD 内の staticports.ini ファイルの場所

メディア	staticports.ini ファイルの場所 (E: が CD-ROM または DVD ドライブであると想定)
CD-ROM	Disk 1: E:\stage\Responses\staticports.ini
DVD	E:\Application_server\stage\Response\staticports.ini

2. ローカル・コピー (ハード・ディスク上にあるファイル) を編集して必要なポート番号を含めます。

staticports.ini ファイルですべてのコンポーネントのポート番号を指定する必要はありません。ファイルにないコンポーネントでは、インストーラによりデフォルトのポート番号が使用されます。

インストール中に OracleAS Metadata Repository で使用されるポート (ポート 1521) の変更はできませんが、インストール後に変更できます。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

次の例では、Application Server Control のポートといくつかの OracleAS Web Cache のポートを設定します。指定されていないコンポーネントには、インストーラによってデフォルトのポート番号が割り当てられます。

```
Application Server Control port = 2000
Web Cache Administration port = 2001
Web Cache Invalidiation port = 2002
Web Cache Statistics port = 2003
```

インストールが完了したら、%ORACLE_HOME%\install\portlist.ini ファイルで、割り当てられたポートを確認できます。

ポート番号の選択に関する注意 :

- ポート番号は 65535 を超えることはできません。
- Oracle HTTP Server と OracleAS Web Cache のポート番号を設定する場合は、第 3.4.4.3 項「[Oracle HTTP Server および OracleAS Web Cache のポート](#)」を必ずお読みください。

インストーラでは、メモリーをチェックすることにより、ファイルに指定されたポートが使用可能であることが確認されます。つまり、インストーラが検出できるのは、実行中のプロセスで使用されているポートのみです。アプリケーションで使用されているポートを調べるために構成ファイルが確認されることはありません。

指定されたポートが使用できないことが検出されると、インストーラにより警告が表示されます。インストーラでは、使用できないポートの割当では行われません。この問題を解決するには、次の手順を実行します。

1. staticports.ini ファイルを編集して別のポートを指定するか、そのポートを使用しているアプリケーションをシャットダウンします。
2. 「再試行」をクリックします。インストーラは staticports.ini ファイルの再読み取りを行い、ファイル内のエントリを再確認します。

staticports.ini ファイルとしての portlist.ini の使用

staticports.ini ファイルは、Oracle Application Server のインストール後に作成される %ORACLE_HOME%\install\portlist.ini ファイルと同じ書式を使用しています。Oracle Application Server をすでにインストールしている場合で、同じポート番号を別のインストールでも使用するには、最初のインストールの portlist.ini ファイルを、それ以降のインストールの staticports.ini ファイルとして使用できます。

ただし、staticports.ini では「Oracle Management Agent port」の行は、portlist.ini の「Enterprise Manager Agent port」に相当するという違いに注意してください。

3.4.4.2 インストーラが指定されたポートではなくデフォルトのポートを使用する原因となるエラー条件

staticports.ini ファイルは念入りに確認してください。間違いがあると、インストーラでは警告を表示せずにデフォルトのポートを使用します。次のような点を確認します。

- 複数のコンポーネントに対して同じポートを指定すると、インストーラでは最初のコンポーネントに指定されたポートを使用し、それ以外のコンポーネントにはそれぞれのデフォルトのポートを使用します。インストーラは複数のコンポーネントに同じポートが指定されていることに対する警告を発しません。
- 複数行のあるコンポーネントで異なるポートを指定すると、インストーラはそのコンポーネントに対してデフォルトのポートを割り当てます。インストーラは1つのコンポーネントに異なるポートが指定されていることに対する警告を発しません。
- 複数行のあるコンポーネントで同一ポートを指定すると、インストーラはそのコンポーネントに対してデフォルトのポートを割り当てます。インストーラは複数行に同じポートが指定されていることに対する警告を発しません。
- staticports.ini ファイルに構文エラーがある場合 (= が抜けている行があるなど)、インストーラはその行を無視します。インストーラは、このような行で指定されているコンポーネントにはデフォルトのポートを割り当てます。インストーラは構文エラーのある行に対する警告を発しません。
- コンポーネント名のスペルを間違えると、インストーラはそのコンポーネントに対してデフォルトのポートを割り当てます。ファイル内のコンポーネント名では大文字と小文字が区別されます。インストーラは認識できない名前が指定された行に対する警告を発しません。
- ポート番号に数値以外の値を指定すると、インストーラはその行を無視し、そのコンポーネントにはデフォルトのポート番号を割り当てます。これも警告を表示せずに行われます。
- staticports.ini ファイルへの相対パス (.%\staticports.ini または単に staticports.ini など) を指定すると、インストーラではファイルを見つけることができません。インストーラは警告を表示せずに続行し、すべてのコンポーネントにデフォルトのポートを割り当てます。staticports.ini ファイルはフルパスで指定する必要があります。

3.4.4.3 Oracle HTTP Server および OracleAS Web Cache のポート

これらのコンポーネントのポートを設定する場合は、次の点を理解しておく必要があります。

Oracle HTTP Server の httpd.conf ファイルでは、Port および Listen の各ディレクティブに、OracleAS Web Cache と Oracle HTTP Server で使用するポートを指定します。 staticports.ini ファイルでこれらのポートを設定するための行は、どのコンポーネントを構成するかによって異なります。

OracleAS Web Cache および Oracle HTTP Server を構成する場合

1. OracleAS Web Cache のポートを設定します。

OracleAS Web Cache では、Port ディレクティブで指定されたポートを使用します（図 3-1）。このポートを設定するには、staticports.ini ファイルで次の行を使用します。

```
Web Cache HTTP Listen port = port_number
```

OracleAS Web Cache の SSL ポートを構成するには、次の行を使用します。

```
Web Cache HTTP Listen (SSL) port = port_number
```

この場合、「Oracle HTTP Server port」の行を使用してポート番号を設定することはできません。 staticports.ini ファイルに「Oracle HTTP Server port」と「Web Cache HTTP Listen port」の両方の行がある場合、「Oracle HTTP Server port」行は無視されます。たとえば、 staticports.ini に次の行があるとします。

```
Web Cache HTTP Listen port = 7979
```

```
Oracle HTTP Server port = 8080
```

Port ディレクティブは 7979 に設定されます。

2. Oracle HTTP Server のポートを設定します。

Oracle HTTP Server では、Listen ディレクティブで指定されたポートを使用します。このポートを設定するには、staticports.ini ファイルで次の行を使用します。

```
Oracle HTTP Server Listen port = port_number
```

SSL のリスニング・ポートを構成するには、次の行を使用します。

```
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = port_number
```

図 3-1 OracleAS Web Cache および Oracle HTTP Server の構成



Oracle HTTP Server のみを構成する場合（OracleAS Web Cache は構成しない）

Oracle HTTP Server のみを構成する場合、Oracle HTTP Server で Port と Listen の両方のディレクティブを使用します（図 3-2）。この場合、両方のディレクティブが同じポート番号を使用するように設定する必要があります。

これらのポートを設定するには、staticports.ini ファイルの「Oracle HTTP Server port」と「Oracle HTTP Server Listen port」の行を使用します。たとえば、次のようにになります。

```
Oracle HTTP Server port = 8080
Oracle HTTP Server Listen port = 8080
```

これらのポートの SSL バージョンを設定するには、次の行を使用します。SSL 非対応バージョンと同様、ポート番号は同じである必要があります。

```
Oracle HTTP Server SSL port = 443
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = 443
```

staticports.ini の Web Cache の行を指定しても、OracleAS Web Cache は構成していないため、それらの行は無視されます。

図 3-2 Oracle HTTP Server のみの構成



3.4.5 ポート 1521 が使用されている場合

インストーラはポート 1521 を OracleAS Metadata Repository のリスナー（リリース 10.1.0.3）用に構成します。このポートは staticports.ini ファイルでは変更できません。

注意： コンピュータに、EXTPROC キーで IPC プロトコルを使用するリスナーがある場合、そのキーが別の値を持つように変更する必要があります。これは、OracleAS Metadata Repository のリスナーが EXTPROC キーを使用する必要があるためです。

Oracle データベース・リスナーなどの既存のアプリケーションがポート 1521 をすでに使用している場合、インストーラを実行する前になんらかの措置が必要になることがあります。詳細は次の項を参照してください。

- [第 3.4.5.1 項 「ポート 1521 が既存の Oracle データベースで使用されている場合」](#)
- [第 3.4.5.2 項 「ポート 1521 が他のアプリケーションで使用されている場合」](#)

3.4.5.1 ポート 1521 が既存の Oracle データベースで使用されている場合

Oracle データベースをすでに実行しているコンピュータに OracleAS Metadata Repository 用の新規のデータベースをインストールする場合は、両方のデータベースのリスナーが競合しないことを確認してください。

既存のデータベースと OracleAS Metadata Repository のデータベースの両方で同じリスナーが使用できる場合があります。これには、既存のリスナーのリリースとポート番号を考慮する必要があります。表 3-8 に、各種シナリオとその結果を示します。

インストール後、OracleAS Metadata Repository のリスナーが別のポートを使用するように変更できます。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

表 3-8 OracleAS Metadata Repository をインストールするコンピュータに既存のデータベースがある場合のシナリオとその結果

既存のリスナーのリリース	既存のリスナーがポート 1521 を使用	既存のリスナーがポート 1521 以外を使用
10.1.0.2 より前	既存データベース用と OracleAS Metadata Repository 用の 2 つのリスナーが必要です。	既存データベース用と OracleAS Metadata Repository 用の 2 つのリスナーが必要です。
10.1.0.2 以上	既存のリスナーは、既存のデータベースと OracleAS Metadata Repository の両方をサポートします。	既存データベース用と OracleAS Metadata Repository 用の 2 つのリスナーが必要です。

リスナーのリリースを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
C:\> cd %ORACLE_HOME%\bin
C:\> lsnrctl version
```

ここで ORACLE_HOME は、データベースのホーム・ディレクトリです。

同じコマンドを使用して、リスナーのポートを確認することもできます。

コマンドの出力例を次に示します。

```
C:\OraHome_1\BIN>lsnrctl VERSION
LSNRCTL for 64-bit Windows: Version 10.1.0.4.2 - Production on 13-JUL-2005 16:47:00
Copyright (c) 1991, 2004, Oracle. All rights reserved.
Connecting to
(DESCRIPTION=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=as-pc.oracle.com) (PORT=1521)))
TNSLSNR for 64-bit Windows: Version 10.1.0.4.2 - Production
    TNS for 64-bit Windows: Version 10.1.0.4.0 - Production
    Oracle Bequeath Windows 2003 Protocol Adapter for 64-bit Windows: Version
10.1.0.4.0 - Production
        Windows 2003 Named Pipes NT Protocol Adapter for 64-bit Windows: Version
10.1.0.4.0 - Production
        Windows 2003 TCP/IP NT Protocol Adapter for 64-bit Windows: Version 10.1.0.4.0
- Production,
The command completed successfully
```

3.4.5.2 ポート 1521 が他のアプリケーションで使用されている場合

ポート 1521 でリスニングしているアプリケーションが他にある場合、それらが別のポートでリスニングするように再構成する必要があります。それが可能ではない場合は、OracleAS Metadata Repository のインストール中はそのアプリケーションをシャットダウンしてください。インストール後、OracleAS Metadata Repository が 1521 以外のポートを使用するように再構成できます。手順については、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

3.5 オペレーティング・システム・ユーザー

インストールを実行するオペレーティング・システム・ユーザーは、Administrators グループに所属している必要があります。

注意： ユーザーは Administrators グループに直接リストされている必要があります。ユーザーは間接的に Administrators グループに所属することはできません（たとえば、Administrators グループに属するグループのメンバーになるなど）。

自分が Administrators グループに所属しているかどうかを確認するには、次の手順を実行します。

1. 「コンピュータの管理」ダイアログ・ボックスを表示します。

Windows Server 2003 の場合：デスクトップ上でローカル・コンピュータのアイコンを右クリックし、「**管理**」を選択します。

2. 左側で「ローカルユーザーとグループ」を展開し、「ユーザー」を選択します。
3. 右側のフレームで、ユーザーを右クリックして「プロパティ」を選択します。そのプロパティ・ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. プロパティ・ダイアログ・ボックスで、「所属するグループ」タブをクリックします。

自分が Administrators グループのメンバーでない場合、自分を Administrators グループに追加するように管理者に依頼するか、または Administrators グループのメンバーであるユーザーでログオンします。

3.6 環境変数

Oracle Application Server をインストールするオペレーティング・システム・ユーザーは、次の環境変数を設定（または設定解除）する必要があります。

表 3-9 に、環境変数の設定または設定解除の概要を示します。

表 3-9 環境変数の概要

環境変数	設定または設定解除
ORACLE_HOME および ORACLE_SID	設定しないでください。
PATH	最大 1023 文字です。
TNS_ADMIN	設定しないでください。
TEMP	任意です。設定解除した場合、デフォルトで C:\temp に設定されます。

3.6.1 環境変数の設定方法

この項では、Windows で環境変数を設定する方法を説明します。

1. 「システムのプロパティ」コントロール・パネルを表示します。

Windows Server 2003 の場合：「スタート」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。

2. 「詳細設定」タブを選択します。
3. 「環境変数」をクリックします。
4. 変数の値を変更するには、変更する変数を選択し、「編集」をクリックします。

3.6.2 ORACLE_HOME および ORACLE_SID

これらの環境変数は設定しないでください。

3.6.3 PATH

環境変数 PATH は最大 1023 文字です。これを超えると、インストールは失敗します。

3.6.4 TNS_ADMIN

インストーラの実行時に環境変数 TNS_ADMIN が設定されていないことを確認します。設定されている場合、インストール中にエラーが発生する可能性があります。このようなエラーについては、[第 H.3.12 項「Database Configuration Assistant \(DBCA\) の失敗」](#) を参照してください。

3.6.5 TEMP

インストール中、インストーラでは一時ファイルを一時ディレクトリに書き込む必要があります。デフォルトでは、C:\temp が一時ディレクトリです。

インストーラで C:\temp 以外のディレクトリを使用するには、環境変数 TEMP にかわりのディレクトリのフルパスを設定します。このディレクトリは、[表 3-2](#) に示した要件を満たしている必要があります。

この環境変数を設定していないと、デフォルトのディレクトリの領域が十分でない場合に、環境変数が設定されていないことを示すエラー・メッセージが表示されます。異なるディレクトリを指すように環境変数を設定するか、またはデフォルトのディレクトリに十分な領域を確保する必要があります。いずれの場合でも、インストールをやり直す必要があります。

3.7 %WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイル

%WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイルの内容は、次の項目に影響します。

- [第 3.7.1 項「デフォルトの Oracle Identity Management レルムの場所」](#)
- [第 3.7.2 項「OracleAS Single Sign-On のホスト名」](#)

ただし、hosts ファイルを編集せずに別の方法で必要な値を入力できます。詳細は、次の項を参照してください。

%WINDIR% は、Windows オペレーティング・システム・ディレクトリを示します。通常、Windows Server 2003 の場合は C:\WINDOWS です。

3.7.1 デフォルトの Oracle Identity Management レルムの場所

インストーラによって hosts ファイルが読み取られ、デフォルトの Oracle Identity Management レルムの場所が作成されます。「Internet Directory のネームスペースの指定」画面にこの場所が表示されます。

hosts ファイルは次のような書式になっている必要があります。

```
ip_address    fully_qualified_hostname    short_hostname
```

例：

```
123.45.67.89    primaryHost.mydomain.com    primaryHost
```

この例では、デフォルトの Oracle Identity Management レルムの場所は、「dc=mydomain,dc=com」のようになります。

このファイルが別の書式を使用している場合は、インストーラは正しくない値を画面に表示します。たとえば、hosts ファイルに次の行が含まれていると想定します。

```
123.45.67.89    primaryHost    primaryHost.mydomain.com <--- incorrect format
```

この場合、インストーラは、デフォルトの Oracle Identity Management レルムとして「dc=primaryHost,dc=com」を表示します。通常、これは、デフォルトの Oracle Identity Management レルムとして指定する値ではありません。

ヒント: hosts ファイルに別の書式を使用する必要がある場合は、必要な書式が使用できるようにファイルを編集し、インストールを実行してから、インストール後にファイルを元の書式に戻すことができます。

hosts ファイルを編集できない、または編集しない場合は、デフォルトの Oracle Identity Management レルムに設定する値を「Internet Directory のネームスペースの指定」画面の「カスタム・ネームスペース」フィールドに入力できます。

3.7.2 OracleAS Single Sign-On のホスト名

OracleAS Single Sign-On をインストールするときに、hosts ファイルにコンピュータのホスト名しかなく、ドメイン名が含まれていない場合は、ホスト名（ドメイン名なし）を使用した Single Sign-On Server へのサインオンのみが可能になります。

Single Sign-On Server への接続にドメイン名が必要になるようにするには、hosts ファイルを編集し、ドメイン名を入れます。このファイルを編集しない場合は、インストーラのコマンドライン・パラメータ OUI_HOSTNAME を使用し、hosts の値を変更できます。たとえば、次のようにになります。

```
E:\> setup.exe OUI_HOSTNAME=myserver.mydomain.com
```

3.8 ネットワーク関連項目

通常、Oracle Application Server をインストールするコンピュータはネットワークに接続されており、Oracle Application Server インストールが入るだけのローカル記憶域があり、表示モニターと CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブがあります。

この項では、このような典型的なシナリオとは異なるコンピュータに Oracle Application Server をインストールする方法について説明します。次のような場合を扱います。

- 第 3.8.1 項「DHCP 接続のコンピュータへのインストール」
- 第 3.8.2 項「複数のホーム（複数の IP）を持つコンピュータへのインストール」
- 第 3.8.3 項「複数の別名を持つコンピュータへのインストール」
- 第 3.8.4 項「ネットワークに接続されていないコンピュータへのインストール」
- 第 3.8.5 項「後でネットワークから切断する、静的 IP を持つコンピュータへのインストール」
- 第 3.8.6 項「ループバック・アダプタのインストール」
- 第 3.8.7 項「CD-ROM または DVD からハード・ドライブへのコピーとハード・ドライブからのインストール」
- 第 3.8.8 項「リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからのインストール」
- 第 3.8.9 項「リモート制御ソフトウェアを介したリモート・コンピュータへのインストール」

3.8.1 DHCP 接続のコンピュータへのインストール

次の制限は DHCP 接続のコンピュータで Oracle Application Server を実行している場合にのみ適用されることに注意してください。DHCP 接続のコンピュータ上の Oracle Application Server インスタンスは、他のコンピュータで実行されている他のインスタンスと通信できません。たとえば、2 台のコンピュータのいずれか 1 台でも DHCP を使用している場合、OracleAS Infrastructure を 1 台のコンピュータで実行し、中間層をもう 1 台のコンピュータで実行することはできません。通信する必要があるすべてのインスタンスは、同じコンピュータで実行する必要があります。クライアントに制限はありません。クライアント・コンピュータがネットワーク上の DHCP 接続のコンピュータを解決できるかぎり、そのコンピュータのクライアントから DHCP 接続のコンピュータで実行されているインスタンスにアクセスできます。

DHCP 接続のコンピュータに Oracle Application Server をインストールする前に、次の手順を実行します。

1. DHCP 接続のコンピュータにループバック・アダプタをインストールします。

ループバック・アダプタをインストールすると、ループバック・アダプタによってコンピュータにローカル IP が割り当てられます。ループバック・アダプタをインストールしてローカル IP アドレスを取得すると、Oracle Application Server のインストール後に (DHCP によって) IP アドレスが変更されるたびに `chgpghost` スクリプトを実行する必要がなくなります。

プライマリ・ネットワーク・アダプタの決定方法

Windows では、ループバック・アダプタがネットワーク・アダプタの一種としてみなされます。コンピュータにループバック・アダプタをインストールした後、コンピュータにはネットワーク・アダプタとループバック・アダプタの少なくとも 2 つのネットワーク・アダプタがインストールされています。

Windows には、ループバック・アダプタをプライマリ・アダプタとして使用させる必要があります。プライマリ・アダプタは、アダプタをインストールした順序によって決まります。

- Windows Server 2003 では、最後にインストールしたアダプタがプライマリ・アダプタになります。そのため、ループバック・アダプタをインストールするのみで済みます。ただし、ループバック・アダプタのインストール後に追加のネットワーク・アダプタをインストールした場合、ループバック・アダプタを削除して再インストールする必要があります。

様々な Windows プラットフォームにループバック・アダプタをインストールする方法については、[第 3.8.6 項「ループバック・アダプタのインストール」](#) を参照してください。

2. Oracle Application Server をインストールする各コンピュータに ping します。

- ホスト名のみを使用して、また完全修飾名を使用して、コンピュータからそのコンピュータ自体に ping します。
- たとえば、`mycomputer` というコンピュータにループバック・アダプタをインストールした場合、次のコマンドを実行します。

<code>prompt> ping mycomputer</code>	<i>Ping itself using just the hostname.</i>
<code>Reply from 10.10.10.10</code>	<i>Returns loopback adapter IP.</i>
<code>prompt> ping mycomputer.mydomain.com</code>	<i>Ping using a fully qualified name.</i>
<code>Reply from 10.10.10.10</code>	<i>Returns loopback adapter IP.</i>

注意： コンピュータからそのコンピュータ自体に ping コマンドを実行すると、ループバック・アダプタの IP が戻されます。コンピュータのネットワーク IP は戻されません。

- ホスト名のみを使用して、また完全修飾名を使用して、ネットワーク上の他のコンピュータからループバック・アダプタをインストールしたコンピュータに ping します。
- この場合、ping コマンドを実行するとコンピュータのネットワーク IP が戻されます。

<code>prompt> ping mycomputer</code>	<i>Ping using the hostname.</i>
<code>Reply from 139.185.140.166</code>	<i>Returns network IP.</i>
<code>prompt> ping mycomputer.mydomain.com</code>	<i>Ping using a fully qualified name.</i>
<code>Reply from 139.185.140.166</code>	<i>Returns network IP.</i>

ping が失敗した場合は、ネットワーク管理者に問い合わせてください。

3.8.2 複数のホーム（複数のIP）を持つコンピュータへのインストール

Oracle データベースを複数のホームを持つコンピュータにインストールできます。複数のホームを持つコンピュータは、複数の IP アドレスに関連付けられます。通常、これはコンピュータに複数のネットワーク・カードを取り付けることによって実現されます。各 IP アドレスは 1 つのホスト名に関連付けられます。また、ホスト名に別名を設定することもできます。デフォルトでは、Oracle Universal Installer は環境変数 ORACLE_HOSTNAME の設定を使用してホスト名を検索します。複数のネットワーク・カードを持つコンピュータが設置されているが ORACLE_HOSTNAME が設定されていない場合、Oracle Universal Installer は hosts ファイル（一般的な場所は DRIVE LETTER:¥WINDOWS¥system32¥drivers¥etc）の最初の名前を使用して、ホスト名とします。

クライアントは、このホスト名を使用して（またはこのホスト名の別名を使用して）、そのコンピュータにアクセスできる必要があります。これを確認するには、短縮名（ホスト名のみ）とフルネーム（ホスト名とドメイン名）を使用して、クライアント・コンピュータからホスト名に ping します。いずれのコマンドも正常に実行される必要があります。

環境変数の設定の詳細は、[第 3.6.1 項「環境変数の設定方法」](#) を参照してください。

3.8.3 複数の別名を持つコンピュータへのインストール

複数の別名を持つコンピュータは、1 つの IP（ただし複数の別名）でネーミング・サービスに登録されます。ネーミング・サービスは、これらのすべての別名を同じコンピュータに解決します。このようなコンピュータに Oracle Application Server をインストールする場合は、環境変数 ORACLE_HOSTNAME を、使用するホスト名を持つコンピュータにあらかじめ設定しておきます。

環境変数の設定の詳細は、[第 3.6.1 項「環境変数の設定方法」](#) を参照してください。

3.8.4 ネットワークに接続されていないコンピュータへのインストール

Oracle Application Server は、ノート型コンピュータなどの、ネットワークに接続されていないコンピュータにインストールできます。ネットワークに接続されていないコンピュータは他のコンピュータにアクセスできないため、そのコンピュータに必要なすべてのコンポーネントをインストールする必要があります。次に例を示します。

- Oracle Identity Management やファーム・リポジトリを使用しない J2EE and Web Cache 中間層をインストールできます。詳細は、[第 6.1 項「中間層タイプ」](#) を参照してください。
- インフラストラクチャ・サービスが必要な中間層をインストールする場合、OracleAS Infrastructure と中間層の両方をコンピュータにインストールする必要があります。コンピュータに、両方のインスタンスを実行するために十分なリソースがあることを確認します。詳細は、[第 3.2.1 項「同じコンピュータ上で複数のインスタンスを実行する場合のメモリーおよびページング・ファイルの要件」](#) を参照してください。

ネットワークに接続されていないコンピュータに Oracle Application Server をインストールする場合でも、コンピュータにはネットワーク機能が必要であることに注意してください。ネットワークに接続されていないとは、コンピュータがネットワークに接続されていない状態を意味します。

ネットワークに接続されていないコンピュータに Oracle Application Server をインストールし、インストール後もそのコンピュータをネットワークに接続しない場合は、先に進み、そのコンピュータに Oracle Application Server をインストールできます。

ただし、ネットワークに接続されていないコンピュータへのインストール後にそのコンピュータをネットワークに接続する場合は、Oracle Application Server のインストール前に次の手順を実行します。

1. コンピュータにループバック・アダプタをインストールします。詳細は、[第 3.8.6 項「ループバック・アダプタのインストール」](#) を参照してください。

ループバック・アダプタとローカル IP アドレスによって、仮想的にネットワークに接続されたコンピュータとして動作します。そのコンピュータをネットワークに接続した場合、Oracle Application Server は同じローカル IP とホスト名を使用します。

2. ホスト名のみを使用して、また完全修飾名を使用して、コンピュータからそのコンピュータ自身に ping します。

たとえば、mycomputer というコンピュータにループバック・アダプタをインストールした場合、次のコマンドを実行します。

<code>prompt> ping mycomputer</code>	<i>Ping itself using just the hostname.</i>
<code>Reply from 10.10.10.10</code>	<i>Returns loopback adapter IP.</i>
<code>prompt> ping mycomputer.mydomain.com</code>	<i>Ping using a fully qualified name.</i>
<code>Reply from 10.10.10.10</code>	<i>Returns loopback adapter IP.</i>

注意: コンピュータからそのコンピュータ自身に ping コマンドを実行すると、ループバック・アダプタの IP が戻されます。

ping が失敗した場合は、ネットワーク管理者に問い合わせてください。

インストール後のネットワークへのコンピュータの接続

インストール後にコンピュータをネットワークに接続した場合、そのコンピュータ上の Oracle Application Server インスタンスは、ネットワーク上の他のインスタンスと連携して機能します。コンピュータにループバック・アダプタをインストールしている必要があることに注意してください。接続しているネットワークに応じて、コンピュータに静的 IP または DHCP を使用できます。

詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

3.8.5 後でネットワークから切断する、静的 IP を持つコンピュータへのインストール

ネットワークに接続された静的 IP を持つコンピュータに Oracle Application Server をインストールして、そのコンピュータをネットワークから切断した後でも Oracle Application Server を実行可能にする場合、Oracle Application Server のインストール前に次の手順を実行します。

1. コンピュータにループバック・アダプタをインストールします。詳細は、[第 3.8.6 項「ループバック・アダプタのインストール」](#) を参照してください。

ループバック・アダプタをインストールしないと、ネットワークからコンピュータを切断した際に静的 IP が使用不可になるため、Oracle Application Server が正常に機能しません。

2. ループバック・アダプタがプライマリ・ネットワーク・アダプタであることを確認します。詳細は、[3-19 ページの「プライマリ・ネットワーク・アダプタの決定方法」](#) を参照してください。これを行うには、(1) ホスト名のみを使用して、また (2) 完全修飾名を使用して、コンピュータからそのコンピュータ自身に ping コマンドを実行します。

たとえば、mycomputer というコンピュータにループバック・アダプタをインストールした場合、次のコマンドを実行します。

<code>prompt> ping mycomputer</code>	<i>Ping itself using just the hostname.</i>
<code>Reply from 10.10.10.10</code>	<i>Returns loopback adapter IP.</i>
<code>prompt> ping mycomputer.mydomain.com</code>	<i>Ping using a fully qualified name.</i>
<code>Reply from 10.10.10.10</code>	<i>Returns loopback adapter IP.</i>

コンピュータからそのコンピュータ自身に ping コマンドを実行すると、ループバック・アダプタの IP が戻されます。コンピュータのネットワーク IP は戻されません。

これらの手順は、コンピュータが静的 IP を使用するか DHCP を使用するかにかかわらず実行する必要があります。DHCP 接続のコンピュータにループバック・アダプタが必要であることについては、[第 3.8.1 項「DHCP 接続のコンピュータへのインストール」](#) を参照してください。

ネットワークからコンピュータを切断すると、そのコンピュータはすべてのネットワーク・リソースにアクセスできなくなります。コンピュータに必要なすべてのインスタンス (OracleAS Infrastructure や中間層など) がインストールされていることを確認します。

3.8.6 ループバック・アダプタのインストール

ループバック・アダプタは、次のすべてのシナリオで必要です。

- DHCP 接続のコンピュータにインストールする場合（[第 3.8.1 項「DHCP 接続のコンピュータへのインストール」](#)を参照）。
- ネットワークに接続されていないコンピュータにインストールして、インストール後にそのコンピュータをネットワークに接続する場合（[第 3.8.4 項「ネットワークに接続されていないコンピュータへのインストール」](#)を参照）。
- 複数の別名を持つコンピュータにインストールする場合（[第 3.8.3 項「複数の別名を持つコンピュータへのインストール」](#)を参照）。
- （静的 IP または DHCP を介して）ネットワークに接続されたコンピュータにインストールして、そのコンピュータをネットワークから切断した後でも Oracle Application Server を実行可能にする場合。

ループバック・アダプタのインストール手順は、Windows のバージョンによって異なります。

- [第 3.8.6.1 項「コンピュータにループバック・アダプタがインストールされているかどうかの確認」](#)
- [第 3.8.6.2 項「Windows Server 2003 へのループバック・アダプタのインストール」](#)
- [第 3.8.6.3 項「ホスト名の確認」](#)
- [第 3.8.6.4 項「Windows Server 2003 からのループバック・アダプタの削除」](#)

3.8.6.1 コンピュータにループバック・アダプタがインストールされているかどうかの確認

コンピュータにループバック・アダプタがインストールされているかどうかを確認するには、`ipconfig /all` コマンドを実行します。

```
prompt> ipconfig /all
```

ループバック・アダプタがインストールされている場合、ループバック・アダプタの値が表示されます。たとえば、次のようにになります。

```
Ethernet adapter Local Area Connection 2:
  Connection-specific DNS Suffix . :
  Description . . . . . : Microsoft Loopback Adapter
  Physical Address. . . . . : 02-00-4C-4F-4F-50
  DHCP Enabled. . . . . : Yes
  Autoconfiguration Enabled . . . . . : Yes
  Autoconfiguration IP Address. . . . : 169.254.25.129
  Subnet Mask . . . . . : 255.255.0.0
```

3.8.6.2 Windows Server 2003 へのループバック・アダプタのインストール

Windows Server 2003 にループバック・アダプタをインストールするには、次の手順を実行します。

1. Windows のコントロール・パネルを開きます。

Windows Server 2003 の場合：「スタート」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。

2. 「ハードウェアの追加」をダブルクリックして、ハードウェアの追加ウィザードを開始します。
3. 「ようこそ」ウィンドウで「次へ」をクリックします。
4. 「ハードウェアは接続されていますか？」ウィンドウで、「はい、ハードウェアを接続しています」を選択して、「次へ」をクリックします。

5. 「次のハードウェアは既にコンピュータ上にインストールされています。」 ウィンドウに、インストールされているハードウェアの一覧が表示されます。「**新しいハードウェアデバイスの追加**」を選択して、「次へ」をクリックします。
6. 「ウィザードで、ほかのハードウェアをインストールできます。」 ウィンドウで、「**一覧から選択したハードウェアをインストールする**」を選択して、「次へ」をクリックします。
7. 「次の一覧からインストールするハードウェアの種類を選択してください。」 ウィンドウで、「**ネットワークアダプタ**」を選択して、「次へ」をクリックします。
8. 「ネットワークアダプタの選択」 ウィンドウで、次の手順を実行します。
 - **製造元 : Microsoft** を選択します。
 - **ネットワークアダプタ : Microsoft Loopback Adapter** を選択します。
9. 「次へ」をクリックします。
10. 「ハードウェアをインストールする準備ができました。」 ウィンドウで、「次へ」をクリックします。
11. 「ハードウェアの追加と削除ウィザードの完了」 ウィンドウで、「完了」をクリックします。
12. Windows Server 2003 を使用している場合は、コンピュータを再起動します。
13. デスクトップ上で、「マイネットワーク」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。「ネットワーク接続」コントロール・パネルが表示されます。
14. 前述の手順で作成した接続を右クリックします。通常、この名前は「ローカルエリア接続2」です。「プロパティ」を選択します。
15. 「全般」タブで、「インターネットプロトコル(TCP/IP)」を選択して、「プロパティ」をクリックします。
16. 「インターネットプロトコル(TCP/IP)のプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「次のIPアドレスを使う」をクリックして、次の手順を実行します。
 - a. **IPアドレス** : ループバック・アダプタのプライベートIPを入力します。次のプライベート・アドレスを使用することをお薦めします。
 - 192.168.x.x (xは1~255の数字)
 - 10.10.10.10
 - b. **サブネットマスク** : 255.255.255.0と入力します。
 - c. 入力した値を記録しておきます。この値は、この後の手順で必要になります。
 - d. 他のフィールドは空白のままにします。
 - e. 「OK」をクリックします。
17. 「ローカルエリア接続2のプロパティ」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。
18. 「ネットワーク接続」を閉じます。
19. コンピュータを再起動します。
20. C:\Windows\system32\drivers\etc\hosts ファイルで、localhost行のすぐ後に、次の書式の行を追加します。

IP_address hostname.domainname hostname

説明 :

- *IP_address* は、手順14で入力したプライベートIPアドレスに置き換えます。
- *hostname* は、コンピュータの名前です。
- *domainname* は、ドメインの名前です。

たとえば、次のようになります。

10.10.10.10 mycomputer.mydomain.com mycomputer

21. ネットワーク構成を確認します。

- a. コントロール・パネルで「システム」を開き、「コンピュータ名」タブを選択します。「フルコンピュータ名」に、ホスト名とドメイン名が表示されていることを確認します（例：sales.us.mycompany.com）。
- b. 「変更」をクリックします。「コンピュータ名」にホスト名が表示され、「フルコンピュータ名」にホスト名とドメイン名が表示されていることを確認します。前の例を使用すると、ホスト名は sales、ドメイン名は us.mycompany.com となります。
- c. 「詳細」をクリックします。「このコンピュータのプライマリ DNS サフィックス」に、ドメイン名が表示されます（例：us.mycompany.com）。

3.8.6.3 ホスト名の確認

DHCP サーバーによって（IP アドレスの割当て以外に）コンピュータのホスト名も割り当てられる場合、インストーラは、ユーザーがローカルに定義したホスト名のかわりにこのホスト名を使用する場合があります。

インストーラでローカルのホスト名を使用するには、2 つの方法があります。

- 方法 1: OUI_HOSTNAME パラメータを指定してインストーラを起動します。このパラメータで、使用的するホスト名を指定します。
E:\> setup.exe OUI_HOSTNAME=myhostname.mydomain.com
- 方法 2: インストーラを実行する前に、C:\winnt\system32\drivers\etc\hosts ファイルに次の書式で行を追加します。

IP_address hostname.domainname hostname

この行は、ファイルの localhost 行の下に追加する必要があります。

IP_address は、ループバック・アダプタの IP アドレスに置き換えます。これは、プライベート IP アドレスにする必要があります。

hostname と *domainname* は適切な値に置き換えます。

例：

10.10.10.10 mycomputer.mydomain.com mycomputer

Oracle Application Server をインストール済である場合は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』に記載されている IP/ ホスト名の変更手順を使用して、インストール後にホスト名を変更できます。

3.8.6.4 Windows Server 2003 からのループバック・アダプタの削除

Windows Server 2003 からループバック・アダプタを削除するには、次の手順を実行します。

1. 「システムのプロパティ」コントロール・パネルを表示します。
Windows Server 2003 の場合：「スタート」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。
2. 「ハードウェア」タブで、「デバイスマネージャ」をクリックします。
3. 「デバイスマネージャ」ウィンドウで、「ネットワークアダプタ」を展開します。「Microsoft Loopback Adapter」が表示されます。
4. 「Microsoft Loopback Adapter」を右クリックし、「削除」を選択します。
5. 「OK」をクリックします。

3.8.7 CD-ROM または DVD からハード・ドライブへのコピーとハード・ドライブからのインストール

Oracle Application Server の CD-ROM または DVD からインストールするかわりに、CD-ROM または DVD の内容をハード・ドライブにコピーし、そこからインストールを行うこともできます。これは、ネットワーク上に Oracle Application Server インスタンスを多数インストールする場合、または Oracle Application Server をインストールするコンピュータに CD-ROM または DVD ドライブがない場合に便利です。

(リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD ドライブからもインストールできます。[第 3.8.8 項「リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからのインストール」](#) を参照してください。)

ハード・ドライブからインストールする場合、インストーラにより、CD-ROM を交換するよう要求されません。ファイルが正しい場所にあれば、検出されます ([図 3-3 を参照](#))。

他のコンピュータからのハード・ドライブへのアクセス

CD-ROM または DVD の内容をコピーしたハード・ドライブからリモート・コンピュータに Oracle Application Server をインストールするには、次の手順を実行します。

1. ローカル・コンピュータで、ハード・ドライブを共有化します。
2. Oracle Application Server をインストールするコンピュータで、共有化したハード・ドライブを割り当てます。
3. Oracle Application Server をインストールするリモート・コンピュータからインストーラを実行します。

インストーラにアクセスするには、割り当てたドライブのドライブ文字（たとえば、H:\appserver10_1_2\setup.exe）を使用する必要があります。

汎用命名規則 (UNC) の構文 (\\$\\$hostname\\$sharename) を使用してインストーラにアクセスすることはできません。

領域の要件

ハード・ドライブに、CD-ROM の内容または DVD の application_server ディレクトリの内容が入るだけの十分な空き領域があることを確認してください。各 CD-ROM は、約 650MB です。つまり、4 枚の CD-ROM をコピーする場合、約 2.1GB のディスク領域を必要とします。

DVD の application_server ディレクトリは約 1.6GB です。

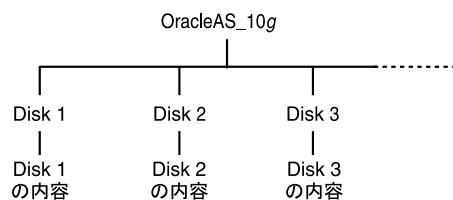
この領域を、Oracle Application Server のインストールに必要な領域 ([表 3-2 を参照](#)) に加えます。

CD-ROM の内容をコピーする方法

1. [図 3-3](#) に示すようなディレクトリ構造をハード・ドライブ上に作成します。

親ディレクトリ（この例では OracleAS_10g になっていますが、任意の名前を付けることができます）を作成し、親ディレクトリの下に Disk1、Disk2 などのサブディレクトリを作成します。サブディレクトリの名前は DiskN にします。ここで N は CD-ROM の番号です。

図 3-3 CD-ROM をハード・ディスクにコピーするためのディレクトリ構造



2. 各 CD-ROM の内容を、対応するディレクトリにコピーします。

Windows のエクスプローラまたはコマンドラインを使用してファイルをコピーできます。コマンドラインを使用する場合、xcopy コマンドを使用します。

次の例では、E: が CD-ROM ドライブ、C:¥OracleAS_10g¥DiskN が CD-ROM の内容をコピーするディレクトリであると想定しています。

```
E:¥> xcopy /e /i E:¥1012disk1 C:¥OracleAS_10g¥Disk1
E:¥> xcopy /e /i E:¥1012disk2 C:¥OracleAS_10g¥Disk2
... Repeat for each CD-ROM.
```

コピーしたファイルからインストーラを実行するには、Disk1 ディレクトリから setup.exe 実行可能ファイルを実行します。Oracle Application Server を実行するコンピュータから実行します。

```
C:¥> cd OracleAS_10g¥Disk1
C:¥OracleAS_10g¥Disk1> setup.exe
```

DVD の application_server ディレクトリの内容をコピーする方法

Windows のエクスプローラまたはコマンドラインを使用して application_server ディレクトリをコピーできます。コマンドラインを使用する場合、次の手順を実行します。

1. (オプション) application_server ディレクトリをコピーするディレクトリを作成します。
2. application_server ディレクトリを DVD からハード・ディスクにコピーします。

次の例では、E: が DVD ドライブ、C:¥application_server がコピー先のディレクトリであると想定しています。

```
E:¥> xcopy /e /i E:¥application_server C:¥application_server
```

コピーしたファイルからインストーラを実行するには、Oracle Application Server を実行するコンピュータから setup.exe 実行可能ファイルを実行します。

```
C:¥> cd application_server
C:¥application_server> setup.exe
```

3.8.8 リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからのインストール

Oracle Application Server をインストールするコンピュータに CD-ROM または DVD ドライブがない場合は、リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD ドライブからインストールを実行することができます。次の手順が実行済であることを確認します。

リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD ドライブの共有化

使用するリモート・コンピュータの CD-ROM または DVD ドライブは、共有化する必要があります。これを行うには、リモート・コンピュータ (CD-ROM または DVD ドライブがあるコンピュータ) で次の手順を実行します。

1. 管理者ユーザーとしてログオンします。
2. Windows エクスプローラを起動します。
3. CD-ROM または DVD ドライブ文字を右クリックし、「共有」または「共有とセキュリティ」を選択します (Windows Server 2003 の場合)。

4. 「共有」タブ（図 3-4）で、次の手順を実行します。

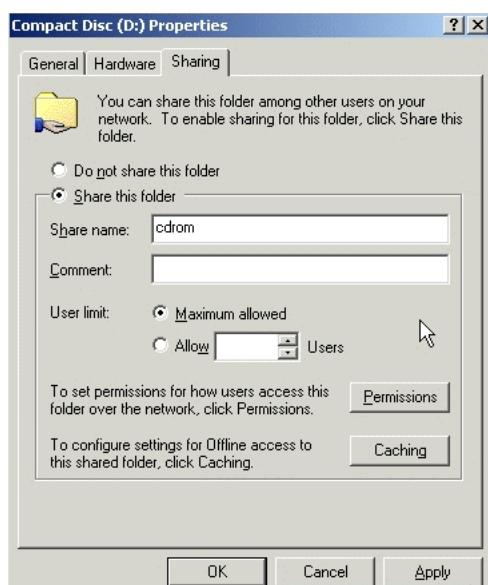
「このフォルダを共有する」を選択します。

共有名 : cdrom や dvd などの共有名を指定します。ローカル・コンピュータで CD-ROM または DVD ドライブを割り当てる際にこの名前を使用します。詳細は、[3-27 ページ](#)の手順 d を参照してください。

「アクセス許可」をクリックします。CD-ROM または DVD ドライブにアクセスして Oracle Application Server をインストールするユーザーに、少なくとも読み取り権限が必要です。

終了時に「OK」をクリックします。

図 3-4 CD-ROM ドライブの共有



5. CD-ROM の場合 : Oracle Application Server Disk 1 を CD-ROM ドライブに挿入します。

DVD の場合 : Oracle Application Server DVD を DVD ドライブに挿入します。

ローカル・コンピュータでの CD-ROM または DVD ドライブの割当て

ローカル・コンピュータで CD-ROM または DVD ドライブを割り当てる、インストーラを実行するには、次の手順を実行します。

1. リモート・コンピュータの CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブを割り当てます。
 - a. ローカル・コンピュータで Windows エクスプローラを起動します。
 - b. 「ツール」→「ネットワーク ドライブの割り当て」を選択します。「ネットワーク ドライブの割り当て」ダイアログ・ボックスが表示されます。
 - c. リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD ドライブに使用するドライブ文字を選択します。
 - d. 「フォルダ」に、次の書式を使用してリモート・コンピュータの CD-ROM または DVD ドライブの場所を入力します。

`¥¥remote_hostname¥share_name`

`remote_hostname` は、CD-ROM または DVD ドライブがあるリモート・コンピュータの名前に置き換えます。

`share_name` は、[3-27 ページ](#)の手順 4 で入力した共有名に置き換えます。

例 : `¥¥computer2¥cdrom`

- e. 別のユーザーとしてリモート・コンピュータに接続する必要がある場合、次の操作を実行します。
 - 「異なるユーザー名」をクリックし、ユーザー名を入力します。
 - 「完了」をクリックします。
2. 割り当てた CD-ROM または DVD ドライブからインストーラを実行します。

インストーラによって CD-ROM を交換するように要求されたら、CD-ROM を取り出して、必要な CD-ROM を挿入します。

注意： CD-ROM を交換するときには、インストーラが実行中である必要があります。CD-ROM を交換するときにインストーラを終了しないでください。インストーラを終了すると、中断したところから再開することができません。また、インストーラにより作成された部分的なインストールは使用できないため、手動で削除する必要があります。

3.8.9 リモート制御ソフトウェアを介したリモート・コンピュータへのインストール

リモート・コンピュータに Oracle Application Server をインストールして実行する（つまり、ハード・ドライブがあるリモート・コンピュータで Oracle Application Server コンポーネントを実行する）場合、そのコンピュータに物理的にアクセスできない場合でも、VNC や Symantec pcAnywhere などのリモート制御ソフトウェアを実行している場合は、そのリモート・コンピュータにインストールを実行できます。この場合、ローカル・コンピュータでもリモート制御ソフトウェアを実行している必要があります。

リモート・コンピュータには、次の 2 つの方法のいずれかで Oracle Application Server をインストールできます。

- Oracle Application Server の CD-ROM または DVD の内容をハード・ドライブにコピーしている場合、ハード・ドライブからインストールできます。
- CD-ROM または DVD をローカル・コンピュータのドライブに挿入して、その CD-ROM または DVD からインストールできます。

ハード・ドライブからのインストール

Oracle Application Server の CD-ROM または DVD の内容をハード・ドライブにコピーしている場合、ハード・ドライブからインストールできます。

これを行うには、次の手順を実行します。

1. リモート制御ソフトウェアがリモート・コンピュータとローカル・コンピュータにインストールされ、実行されていることを確認します。
2. Oracle Application Server の CD-ROM または DVD を含むハード・ドライブを共有化します。
3. リモート・コンピュータで、共有化したハード・ドライブにドライブ文字を割り当てます。リモート・コンピュータで、リモート制御ソフトウェアを使用してこの操作を実行します。
4. リモート制御ソフトウェアを介して、リモート・コンピュータでインストーラを実行します。共有ハード・ドライブからインストーラを実行します。

リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD ドライブからのインストール

CD-ROM または DVD をローカル・コンピュータのドライブに挿入して、その CD または DVD からインストールできます。これは、[第 3.8.8 項「リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからのインストール」](#) のシナリオに類似しています。

これを行うには、次の手順を実行します。

1. リモート制御ソフトウェアがリモート・コンピュータとローカル・コンピュータにインストールされ、実行されていることを確認します。

2. ローカル・コンピュータで、CD-ROM または DVD ドライブを共有化します。

リモート・コンピュータで、共有化した CD-ROM または DVD ドライブにドライブ文字を割り当てます。リモート・コンピュータで、リモート制御ソフトウェアを使用してこの操作を実行します。

これらの手順の詳細は、[第 3.8.8 項「リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからのインストール」](#) を参照してください。

3. リモート制御ソフトウェアを介して、リモート・コンピュータでインストーラを実行します。共有化した CD-ROM または DVD ドライブからインストーラを実行します。

3.9 インストーラにより実行される前提条件チェック

[表 3-10](#) に、インストーラにより実行される前提条件チェックを示します。

表 3-10 インストーラにより実行される前提条件チェック

項目	説明
ユーザー	インストーラにより、ユーザーが管理権限を持っているかどうかがチェックされます。
モニター	インストーラにより、モニターが 256 色以上を表示できるように構成されていることがチェックされます。
オペレーティング・システム のバージョン	サポートされているバージョンについては、 表 3-2 を参照してください。
Windows の Service Pack	サポートされている Service Pack については、 表 3-2 を参照してください。
メモリー	推奨値については、 表 3-2 を参照してください。
総ページング・ファイル (仮想メモリー)・サイズ	推奨値については、 表 3-2 を参照してください。
TEMP ディレクトリ内の領域	推奨値については、 表 3-2 を参照してください。
インスタンス名	インストーラにより、Oracle Application Server のインストール先のコンピュータに同じ名前のインスタンスがすでに存在しないことがチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリ名	インストーラにより、Oracle ホーム・ディレクトリ名に空白が含まれていないことがチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリへのパス	インストーラにより、Oracle ホーム・ディレクトリへのパスが 127 文字を超えていないことがチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリの内容	インストーラにより、Oracle ホーム・ディレクトリにインストールの妨げとなるファイルがないことがチェックされます。
ポート 1521	ポート 1521 が、すべてのリリースのデータベース・リスナーを含む他のアプリケーションによって使用されている場合、インストーラにより警告が表示されます。ポート 1521 を使用しているアプリケーションを停止してから、警告ダイアログの「OK」をクリックします。 データベース・リスナーがポート 1521 を使用している場合は、それをメタデータ・リポジトリ・データベースに使用できる可能性があります。詳細は、 第 3.4.5 項「ポート 1521 が使用されている場合」 を参照してください。
	他のアプリケーションがポート 1521 を使用している場合、そのアプリケーションを停止するか、別のポートを使用するように構成する必要があります。または、データベース・リスナーが 1521 以外のポートを使用するように変更することができますが、これはインストール終了後に行います。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

表 3-10 インストーラにより実行される前提条件チェック（続き）

項目	説明
静的ポートの競合	指定されている場合、インストーラにより、staticports.ini ファイルに一覧表示されているポートがチェックされます。詳細は、 第 3.4 項「ポート」 を参照してください。
環境変数 DBCA_RAW_CONFIG	OracleAS Infrastructure を Real Application Clusters 環境にインストールする場合、RAW パーティションの場所が記載されているファイルを示すように、この環境変数を設定する必要があります。
クラスタ・ファイル・システム	インストーラにより、Oracle Application Server をクラスタ・ファイル・システム (CFS) にインストールするのではないことがチェックされます。
Oracle Enterprise Manager 10g ディレクトリが書き込み可能か	インストーラがこのチェックを実行するのは、中間層を拡張する場合と、Oracle Application Server を同じ Oracle ホームに再インストールする場合のみです。インストーラを実行するオペレーティング・システム・ユーザーが次のディレクトリに書き込めることがチェックされます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ %ORACLE_HOME%\sysman\emd ■ %ORACLE_HOME%\sysman\config ■ %ORACLE_HOME%\sysman\webapps\emd\WEB-INF\config
Oracle Enterprise Manager 10g ファイルの存在	インストーラがこのチェックを実行るのは、中間層を拡張する場合と、Oracle Application Server を同じ Oracle ホームに再インストールする場合のみです。インストーラにより、次のファイルがあることがチェックされます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ %ORACLE_HOME%\sysman\config\iasadmin.properties ■ %ORACLE_HOME%\sysman\webapps\emd\WEB-INF\config\ConsoleConfig.xml

4

インストールを開始する前に 知っておく必要のあること

この章の内容は次のとおりです。

- 第 4.1 項 「基本概念」
- 第 4.2 項 「インストールの順序」
- 第 4.3 項 「Oracle Application Server をインストールする場所」
- 第 4.4 項 「Oracle ホーム・ディレクトリ」
- 第 4.5 項 「Oracle ホームの名前」
- 第 4.6 項 「追加の言語のインストール」
- 第 4.7 項 「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」
- 第 4.8 項 「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」
- 第 4.9 項 「コンポーネントのインストールとコンポーネントの構成」
- 第 4.10 項 「インストーラがファイルを書き込む場所」
- 第 4.11 項 「Oracle Application Server インスタンス・インストール時の他のインスタンスの修正」
- 第 4.12 項 「SSL 接続を介した Oracle Internet Directory への接続」
- 第 4.13 項 「Oracle Universal Installer の起動」

4.1 基本概念

Oracle Application Server は次のものから構成されています。

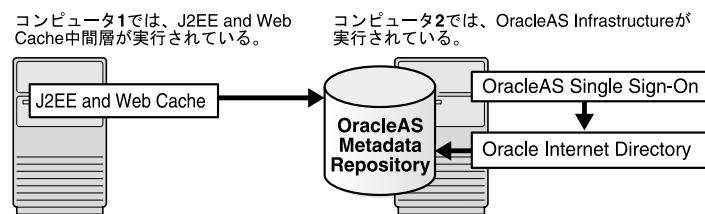
- Oracle Application Server 中間層
- OracleAS Infrastructure

アプリケーションは Oracle Application Server の中間層に配置して実行します。インフラストラクチャは、中間層が使用するサービスを提供します。1つ以上の中間層でインフラストラクチャ・サービスを共用できます。

インストーラを実行するとき、中間層またはインフラストラクチャのどちらをインストールするかを選択します。通常は両方必要なので、インストーラを2回実行することになります。

図 4-1 に、簡単な Oracle Application Server のインストールを示します。コンピュータ1で実行されている J2EE and Web Cache 中間層は、コンピュータ2で実行されている OracleAS Infrastructure を使用します。この図は、OracleAS Metadata Repository と 2つの Identity Management サービス（OracleAS Single Sign-On および Oracle Internet Directory）を示しています。

図 4-1 インフラストラクチャ・サービスを使用する中間層



4.2 インストールの順序

中間層が OracleAS Infrastructure のサービスを必要とするため、ほとんどの場合、最初に OracleAS Infrastructure をインストールします。インフラストラクチャがオプションとなるのは、J2EE and Web Cache 中間層タイプのみです（[第 6.4 項「J2EE and Web Cache 中間層用の構成オプション」](#)を参照）。

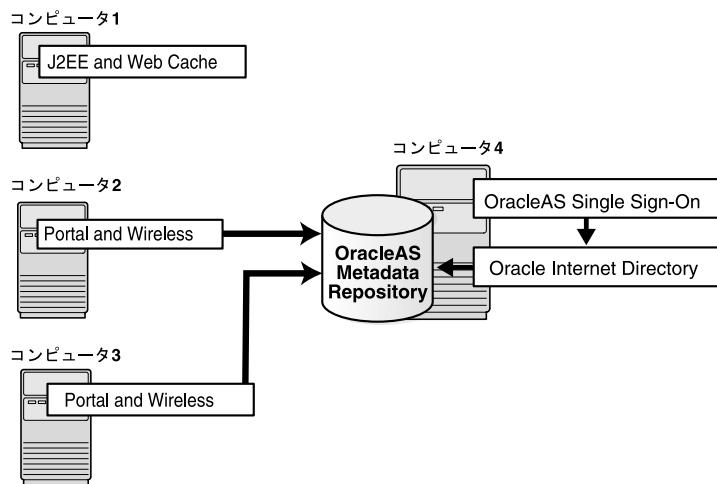
4.3 Oracle Application Server をインストールする場所

中間層とインフラストラクチャは、同じコンピュータ上にインストールすることも、別のコンピュータにインストールすることもできます。インフラストラクチャを独自のコンピュータにインストールし、中間層を他のコンピュータにインストールすると、パフォーマンスが向上します。

たとえば、**図 4-2** に、4台のコンピュータからなるトポロジを示します。

- コンピュータ1では、インフラストラクチャ・サービスを使用していない J2EE and Web Cache インスタンスが実行されています。
- コンピュータ2では、コンピュータ4で実行されているインフラストラクチャ・インスタンスのサービスを使用する Portal and Wireless 中間層が実行されています。
- コンピュータ3では、コンピュータ4で実行されているインフラストラクチャ・インスタンスのサービスを使用する別の Portal and Wireless 中間層が実行されています。
- コンピュータ4では OracleAS Infrastructure が実行されています。

各種トポロジ例については、[第 14 章「推奨されるトポロジ」](#)を参照してください。

図 4-2 複数の中間層と 1 つのインフラストラクチャを含む構成

注意： 中間層およびインフラストラクチャの各コンポーネントは、異なるプラットフォームにインストールできます。唯一の例外は複数の J2EE and Web Cache 中間層をクラスタ化する場合で、それらは同一のプラットフォーム上に置く必要があります。ただし、このクラスタのインフラストラクチャは別のプラットフォーム上に置くことができます。

4.4 Oracle ホーム・ディレクトリ

Oracle Application Server をインストールするディレクトリを Oracle ホームと呼びます。インストール中に、このディレクトリのフルパスと Oracle ホームの名前を指定します。

たとえば、OracleAS Infrastructure を C:\oracle\OraHome_Infra にインストールして、「Infra」という名前を付けることができます。

注意：

- Oracle ホーム・ディレクトリへのパスには空白を使用できません。たとえば「C:\program files\oracle\Infra」では「program files」に空白が含まれているため、このディレクトリにインストールできません。インストーラでは、このパスの入力後にいくつかの画面が進むまで、これがチェックされません。
 - ドライブを割り当てても、別のコンピュータにはインストールできません。別のコンピュータへのインストールは、リモート・コントロール・ソフトウェアを介して実行できます。詳細は、[第 3.8.9 項「リモート制御ソフトウェアを介したリモート・コンピュータへのインストール」](#)を参照してください。
-

名前の使用方法については、[第 4.5 項「Oracle ホームの名前」](#)も参照してください。

中間層とインフラストラクチャを同じコンピュータにインストールする場合、それらを異なる Oracle ホーム・ディレクトリにインストールする必要があります。インストーラでは、中間層とインフラストラクチャを同じ Oracle ホームにインストールすることはできません。中間層とインフラストラクチャを同じコンピュータにインストールする場合の構成については、[第 14.2 項「Portal and Wireless 開発者トポロジ」](#)で説明します。

ヒント： 同じコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンス（たとえば、OracleAS Infrastructure と中間層）をインストールする場合は、インスタンスごとに環境設定のスクリプトを作成します。これによって、バイナリが適切な Oracle ホームから実行されるようにします。設定する必要がある環境変数には、ORACLE_HOME や PATH が含まれます。

4.4.1 既存の Oracle ホームへのインストール

通常、既存の Oracle ホームに Oracle Application Server をインストールすることはできません。次の 2 つの例外があります。

- Oracle Application Server の中間層は、Oracle Developer Suite 10g リリース 2 (10.1.2) を含む既存の Oracle ホームにインストールすることができます。ただしインストールを実行する前に、ファイル %ORACLE_HOME%\j2ee\home\config\default-web-site.xml でプロトコルが http ではなく「ajp13」に設定されていること、およびポートが 0 (ゼロ) に設定されていることをチェックしてください。

注意： Oracle Application Server を既存の Oracle Developer Suite 10g リリース 2 (10.1.2) ホームにインストールすると、いくつかの Oracle Developer Suite の機能が失われます。具体的には、*hostname:8888* という URL を使用して Oracle Developer Suite の OC4J ホーム・インスタンスに直接アクセスできなくなります。

- 既存の中間層を拡張すると、Oracle Application Server の中間層をそこにインストールすることができます。詳細は、[第 6.14 項「中間層の拡張」](#) を参照してください。

4.4.2 空ではない Oracle ホームへのインストール

Oracle Application Server は、いくつかのファイルがすでに含まれているディレクトリにはインストールできません。ただし、[第 4.4.1 項「既存の Oracle ホームへのインストール」](#) に説明した場合は例外です。たとえば、インストールを取り消した場合やインストールに失敗した場合は、ディレクトリをクリーンアップしてから、そのディレクトリに Oracle Application Server を再インストールする必要があります。また、インストーラはインストールを修復することもできません。ディレクトリのクリーンアップ方法の手順は、[第 H.3.2 項「空でないディレクトリへのインストールに関するメッセージ」](#) を参照してください。

4.5 Oracle ホームの名前

インストーラの画面の 1 つで、Oracle ホーム・ディレクトリ（インストール先のディレクトリ）および Oracle ホームの名前を入力するように求められます。この Oracle ホームの名前は、ディレクトリ名と同じでなくてもかまいません。

Oracle ホームの名前には英数字およびアンダースコア（_）を使用でき、最大 128 文字です。

Oracle ホームの名前は、次のように使用されます。

- Oracle Application Server の一部のコンポーネントは、Windows サービスとして実行されます。インストーラは、これらのサービスに名前を付ける場合、次の書式でサービス名に Oracle ホームの名前を含めます。

Oracle<OracleHomeName><ComponentName>

たとえば、Oracle ホームに「Infra」という名前を付ける場合、プロセス管理サービスの名前は OracleInfraProcessManager になります。

- インストーラは、Oracle ホームの名前を「スタート」メニューの項目にも使用します。たとえば、Oracle ホームの名前が「Infra」である場合、次のメニュー項目が表示されます。

- 「スタート」→「プログラム」→「Oracle - Infra」
- 「スタート」→「プログラム」→「OracleAS 10g - Infra」

OracleAS Infrastructure と中間層を同じコンピュータにインストールする場合

中間層は OracleAS Infrastructure のサービスを必要とするため、OracleAS Infrastructure のサービスを開始した後に中間層のサービスを開始する必要があります。これは、次の方法で行うことができます。

- OracleAS Infrastructure に、アルファベット順で中間層の名前より前になる Oracle ホームの名前を付けます（通常、Windows では、コンピュータの再起動時にアルファベット順でサービスが開始されます）。たとえば、OracleAS Infrastructure に「Infra」という名前を付け、中間層に「J2EE」という名前を付けます。
- （レジストリ・エディタを使用して）レジストリを編集し、OracleAS Infrastructure と中間層のサービス間の依存関係を設定して、中間層のサービスの開始を遅らせます。OracleAS Infrastructure と中間層の両方をインストールした後にこの編集を行います。詳細は、[第 15.6 項「サービスの依存関係」](#) を参照してください。

4.6 追加の言語のインストール

デフォルトでは、インストーラによって、英語およびオペレーティング・システムの言語のテキストで Oracle Application Server がインストールされます。追加の言語が必要な場合は、「インストールする製品の選択」画面の「製品の言語」をクリックします。

インストールする追加の言語を選択すると、選択した言語でテキストがインストールされます。また、その言語の表示に必要なフォントもインストールされます。

一部のコンポーネントでは、インストール時に選択した場合にのみ、その言語がインストールされます。この場合、使用できない言語でアプリケーションにアクセスすると、サーバーのロケール言語に戻されます。

他のコンポーネントでは、インストール時に選択した言語に関係なく使用可能な言語がインストールされます。ただし、この場合、フォントは明示的に選択した言語用のみがインストールされます。アプリケーションにアクセスすると、言語はインストールされているため、ご使用の言語でテキストが使用されます。ただし、テキストをレンダリングするための適切なフォントがない場合は、テキストは四角いボックスで表示されます。

フォントはインストール後にインストールできます。[第 H.3.7 項「ユーザー・インターフェースが希望の言語で表示されない、または正しく表示されない」](#) を参照してください。

インストール後に追加の言語をインストールできないことに注意してください。すべての必要な言語はインストール中にインストールする必要があります。インストールしていない言語を使用する環境で Oracle Application Server を実行すると、ユーザー・インターフェースはその言語または英語で表示されます。または、（フォントがないために）テキストのかわりに四角いボックスが表示される場合もあります。

4.7 Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名

インフラストラクチャまたは中間層をインストールすると、Oracle Application Server インスタンスができます。インストーラにより、インストールする Oracle Application Server インスタンスの名前を入力するように求められます。たとえば、「infra」や「J2EE」のような名前を付けることができます。この名前は、Oracle ホームの名前と同じでなくてもかまいません。

インストール後に、この名前を変更することはできません。

Oracle Application Server では、指定されたインスタンス名にホスト名とドメイン名を追加し、完全なインスタンス名にします。たとえば、c1 という名前のコンピュータにインスタンスをインストールする場合、インスタンスの名前を infra1 にすると、ドメイン名が mydomain.com であれば、インスタンスのフルネームは infra1.c1.mydomain.com になります。

インスタンス名に使用できる文字

インスタンス名には、英数字（A-Z、a-z、0-9）および_（アンダースコア）文字のみを使用できます。

インスタンス名の最大長は 64 文字です。

Oracle Application Server インスタンス名での制限

Oracle Application Server インスタンスの名前には、コンピュータのホスト名を使用しないでください。

Oracle Application Server インスタンスを OracleAS Cluster に配置する計画がある場合は、インスタンス名には次のものを含めないでください。

- OracleAS Cluster 内のコンピュータのホスト名または IP アドレス
- OracleAS Cluster 内の Oracle Application Server インストールの Oracle ホーム

Oracle Application Server でのインスタンス名の使用

インスタンス名が重要なのは、Oracle Application Server でインスタンスを一意に識別するのに使用されるためです。つまり、同じコンピュータ上に複数の Oracle Application Server インスタンスをインストールした場合（OracleAS Infrastructure インスタンスと J2EE and Web Cache インスタンスなど）、それぞれに異なる名前を付ける必要があります。

Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control（または略して Application Server Control）を使用して Oracle Application Server を管理する場合、画面にインスタンス名が表示されます。インスタンス名をクリックして、そのインスタンスにインストールされているコンポーネント、コンポーネントの稼働 / 停止状態、コンポーネントのログ・ファイルなどのインスタンスの詳細を表示できます。Application Server Control は、Oracle Application Server のためのブラウザベースの管理ツールです。管理ツールの詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

インスタンス名は「スタート」メニューのメニュー項目にも表示され、関連付けられたインスタンスのコンポーネントを次のように起動および停止できます。

- 「スタート」→「プログラム」→「OracleAS 10g - OracleHomeName」→「Start instanceName」
- 「スタート」→「プログラム」→「OracleAS 10g - OracleHomeName」→「Stop instanceName」

また、一部の dcmctl コマンドには、パラメータとしてインスタンス名が必要なものもあります。dcmctl は、Oracle Application Server インスタンスを管理するためのコマンドライン・ツールです。dcmctl の詳細は、『Distributed Configuration Management 管理者ガイド』を参照してください。

4.8 ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限

インストーラにより、ias_admin ユーザーのパスワードを指定するように求められます。ias_admin ユーザーは、Oracle Application Server インスタンスの管理ユーザーです。

Application Server Control を使用して Oracle Application Server インスタンスを管理するには、ias_admin としてログインします。

コンピュータ上に、それぞれが一意のインスタンス名を持つ複数の Oracle Application Server インスタンスをインストールできますが、管理ユーザーの名前はどのインスタンスでも ias_admin です。ias_admin ユーザーのパスワードは、インスタンスごとに別にすることができます。

ias_admin ユーザーのパスワード

ias_admin ユーザーのパスワードは、Oracle Internet Directory のパスワード・ポリシーに準拠している必要があります。

- Oracle Application Server のこのリリースとともに出荷されている Oracle Internet Directory を使用している場合で、デフォルトのパスワード・ポリシーを変更していないときは、パスワードに次の制限があります。
 - 5 文字以上の英数字を指定します。
 - 1 文字以上は数字にします。

- Oracle Internet Directory の他のリリースを使用している場合（たとえば既存の Oracle Internet Directory を使用している場合）、Oracle Internet Directory の管理者によって別のパスワード・ポリシーが定義されている可能性があります。入力する `ias_admin` ユーザーのパスワードは、既存の Oracle Internet Directory のパスワード・ポリシーに準拠している必要があります。

Oracle Internet Directory に定義されたパスワード・ポリシーに加え、`ias_admin` ユーザーのパスワードには次の制限もあります。

- パスワードは 30 文字より短くします。
- パスワードには、データベース・キャラクタ・セットの英数字、アンダースコア (_), ドル記号 (\$) およびシャープ記号 (#) のみを使用できます。
- パスワードは、アルファベット文字で始める必要があります。パスワードは、数字、アンダースコア (_), ドル記号 (\$) またはシャープ記号 (#) から始めることはできません。
- パスワードに Oracle の予約語を使用することはできません。予約語については、『Oracle Database SQL リファレンス』のリストを参照してください。このマニュアルは、次の OTN (Oracle Technology Network) のサイトにあります。

<http://www.oracle.com/technology/documentation>.

または、単に予約語のような形式の語の使用を避ける方法もあります。

注意： パスワードを入力する際には、[Caps Lock] キーが適切な状態になっていることを確認します。パスワードでは、大 / 小文字が区別されます。

パスワードは、次の作業を実行するときに入力する必要があるため、覚えておく必要があります。

- Oracle Application Server を管理するために Application Server Control にログインするときは、`ias_admin` ユーザーとしてログインします。
- 中間層のインストールの場合は、すでに中間層のある ORACLE_HOME により大きい中間層をインストールするとき（たとえば、既存の J2EE and Web Cache タイプの上に Portal and Wireless タイプをインストールするなど）に、インストール中に既存のパスワードを入力する必要があります。

パスワードを忘れた場合は、リセットできます。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

4.9 コンポーネントのインストールとコンポーネントの構成

「構成オプションの選択」画面でコンポーネントを選択すると、インストーラにより、選択したコンポーネントがインストールされ、構成されます。選択していないコンポーネントもインストールされますが、構成されません。

ほとんどの場合、「構成オプションの選択」画面で選択しなかったコンポーネントは、インストール後に Application Server Control を使用して構成できます。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

4.10 インストーラがファイルを書き込む場所

インストーラは、次のディレクトリにファイルを書き込みます。

表 4-1 インストーラがファイルを書き込むディレクトリ

ディレクトリ	説明
Oracle ホーム・ディレクトリ	このディレクトリには Oracle Application Server のファイルが入っています。このディレクトリは、Oracle Application Server のインストール時に指定します。
インベントリ・ディレクトリ (<i>system_drive</i> :¥Program Files¥Oracle¥Inventory)	インストーラは、インベントリ・ディレクトリを使用して、コンピュータにインストールされた Oracle 製品の履歴を取ります。インベントリ・ディレクトリは、コンピュータに Oracle 製品を初めてインストールするときに作成されます。それ以降のインストールでも、インストーラは同じインベントリ・ディレクトリを使用します。
TEMP ディレクトリ	インストーラは、インストール時に必要なファイルを一時ディレクトリに書き込みます。一時ディレクトリは、環境変数 TEMP によって指定されます。

また、インストーラは Windows レジストリにエントリを作成します。

4.11 Oracle Application Server インスタンス・インストール時の他のインスタンスの修正

Oracle Application Server インスタンスのインストール時に、使用している環境の他のインストールの構成やパスワードを変更しないでください。たとえば、使用している環境に OracleAS Infrastructure がインストールされている場合、中間層のインストール時にこれを修正しないでください。

4.12 SSL 接続を介した Oracle Internet Directory への接続

OracleAS Infrastructure または中間層をインストールするとき、Oracle Application Server コンポーネントが SSL 接続のみを介して Oracle Internet Directory に接続するように指定できます。Oracle Internet Directory のホスト名とポートを指定する画面で、「**Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用**」チェック・ボックスを選択できます。

インストール中は Oracle HTTP Server は SSL 接続を行うように設定されないように注意してください。Oracle HTTP Server で SSL を使用する必要がある場合は、インストール後に設定を行います。詳細は、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』を参照してください。

4.13 Oracle Universal Installer の起動

1. Windows の Administrators グループのメンバーであるユーザーとしてコンピュータにログオンします。
2. 複数のホームを持つコンピュータ、または複数の別名を使用するコンピュータに Oracle Application Server をインストールする場合は、Windows の「システムのプロパティ」コントロール・パネルでシステム環境変数 ORACLE_HOSTNAME を作成します。Oracle Application Server をインストールするコンピュータのホスト名を指すようにこの変数を設定します。

関連項目 :

- 第 3.6.1 項 「環境変数の設定方法」
- 第 3.8.2 項 「複数のホーム（複数の IP）を持つコンピュータへのインストール」
- 第 3.8.3 項 「複数の別名を持つコンピュータへのインストール」

3. ハード・ドライブからインストールする場合、次の手順に進みます。

CD-ROM ユーザーの場合 : Oracle Application Server Disk 1 を CD-ROM ドライブに挿入します。

DVD ユーザーの場合 : Oracle Application Server DVD を DVD ドライブに挿入します。

4. CD-ROM または DVD からインストールする際に、コンピュータが自動実行機能をサポートしている場合は、インストーラが自動的に起動されます。

ハード・ドライブからインストールする場合、またはコンピュータで自動実行機能がサポートされていない場合は、次のようにインストーラを手動で起動する必要があります。

注意 : Oracle Database 10g がすでに実行されているコンピュータでインストーラを実行する場合は、次のオプションを指定してインストーラを起動する必要があります。

E:\> **setup.exe -J-Dsun.java2d.noddraw=true**

オプションを指定しないでインストーラを起動すると、インストーラは表示されません。

CD-ROM ユーザーの場合 : CD のメイン・ディレクトリにある **setup.exe** ファイルをダブルクリックします。

DVD ユーザーの場合 : **application_server** ディレクトリの **setup.exe** ファイルをダブルクリックします。

ハード・ドライブ・ユーザーの場合 : Disk 1 のファイルを解凍したディレクトリにある **setup.exe** をダブルクリックします。

Oracle Universal Installer が起動します。これを使用して Oracle Application Server をインストールします。

5

OracleAS Infrastructure のインストール

表 5-1 この章の内容

トピック	手順
<ul style="list-style-type: none">■ 第 5.1 項「インフラストラクチャのインストール・タイプ」■ 第 5.2 項「異なるインフラストラクチャのインストール・タイプを選択する理由」■ 第 5.3 項「インフラストラクチャのインストールの順序」■ 第 5.4 項「コンポーネントの別々のコンピュータへのインストール」■ 第 5.5 項「Oracle Identity Management コンポーネントを別々にインストールするためのヒント」■ 第 5.6 項「Oracle Delegated Administration Services または Oracle Directory Integration and Provisioning コンポーネントの必要性」■ 第 5.7 項「インストール後のコンポーネントの構成」■ 第 5.8 項「OracleAS Metadata Repository に対する既存のデータベースの使用」■ 第 5.9 項「OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録とパスワードのランダム化」■ 第 5.10 項「OracleAS Metadata Repository の内容」■ 第 5.11 項「複数のメタデータ・リポジトリの使用」■ 第 5.12 項「Oracle Application Server でサポートされる高可用性オプション」■ 第 5.13 項「SYS、SYSTEM、SYSMAN、およびDBSNMP ユーザー用のパスワードの制限」■ 第 5.14 項「NE8ISO8859P10 および CEL8ISO8859P14 キャラクタ・セットのサポート」■ 第 5.15 項「Internet Directory のネームスペースの指定」画面での入力】■ 第 5.16 項「コンポーネントが使用するポート番号の確認方法」■ 第 5.17 項「インストール後の OCA の追加」■ 第 5.18 項「個々のホストへの Oracle Delegated Administration Services の配置」	<ul style="list-style-type: none">■ 第 5.19 項「OracleAS Infrastructure のインストール」■ 第 5.20 項「OracleAS Metadata Repository の新規データベースへのインストール」■ 第 5.21 項「Oracle Identity Management コンポーネントのみ (Oracle Internet Directory を含む) のインストール」■ 第 5.22 項「Oracle Identity Management コンポーネントのみ (Oracle Internet Directory を除く) のインストール」■ 第 5.21 項「Oracle Identity Management コンポーネントのみ (Oracle Internet Directory を含む) のインストール」■ 第 5.24 項「OCA と OracleAS Metadata Repository のみのインストール」■ 第 5.25 項「インストールの一部：インストールの最初のいくつかの画面」■ 第 5.26 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」■ 第 5.27 項「インストールの一部：データベースの画面」■ 第 5.28 項「インストールの一部：OCA の画面」

5.1 インフラストラクチャのインストール・タイプ

インフラストラクチャ・コンポーネントは、Oracle Identity Management コンポーネントと OracleAS Metadata Repository コンポーネントに分けられます。表 5-2 に、これらのコンポーネントの説明を示します。

表 5-2 OracleAS Infrastructure コンポーネント

インフラストラクチャ・コンポーネント	説明
Oracle Identity Management コンポーネント	<p>これらのコンポーネントでは、ディレクトリ、セキュリティおよびユーザー管理機能を提供します。一部のコンポーネントでは、OracleAS Metadata Repository にスキーマがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Internet Directory ■ OracleAS Single Sign-On ■ Oracle Delegated Administration Services ■ Oracle Directory Integration and Provisioning ■ OracleAS Certificate Authority
OracleAS Metadata Repository	<p>OracleAS Metadata Repository は、他の Oracle Application Server コンポーネントにより使用されるスキーマの集合です。スキーマは、次のカテゴリに分けられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 製品メタデータ ■ Oracle Identity Management メタデータ ■ 管理メタデータ <p>詳細は、第 5.10 項「OracleAS Metadata Repository の内容」 を参照してください。</p>

インフラストラクチャのインストール時に、インストーラによって、Oracle Identity Management コンポーネントまたは OracleAS Metadata Repository のいずれか、あるいは両方をインストールするかどうかを尋ねられます。OracleAS Infrastructure のインストール・タイプは次のとおりです。

- Oracle Identity Management および OracleAS Metadata Repository
- Oracle Identity Management
- OracleAS Metadata Repository

表 5-2 に示したコンポーネントに加えて、OracleAS Infrastructure をインストールするときは、Oracle HTTP Server、Oracle Application Server Containers for J2EE および Oracle Enterprise Manager 10g コンポーネントもインストールされます。これらのコンポーネントは、選択したインストール・タイプに関係なく常にインストールおよび構成されます。

次の項の[第 5.2 項「異なるインフラストラクチャのインストール・タイプを選択する理由」](#) を参照してください。

5.2 異なるインフラストラクチャのインストール・タイプを選択する理由

インフラストラクチャを Oracle Identity Management コンポーネントと OracleAS Metadata Repository に分けることにより、インストーラでは OracleAS Infrastructure コンポーネントを複数のコンピュータにインストールすることが可能になります。たとえば、OracleAS Metadata Repository を 1 台のコンピュータに、Oracle Identity Management コンポーネントを別のコンピュータにインストールできます。Oracle Identity Management オプションでは、Oracle Identity Management コンポーネントを複数のコンピュータにインストールすることもできます。

また、これらのオプションにより、OracleAS Metadata Repository 用の新規データベースを作成するかまたは既存のデータベースを使用できます。「OracleAS Metadata Repository」オプションまたは「OracleAS Metadata Repository and Identity Management」オプションのいずれかを選択すると、インストーラは新規データベースを作成して、そのデータベースに OracleAS Metadata Repository を移入します。

既存のデータベースを使用するには、[第 5.8 項 「OracleAS Metadata Repository に対する既存のデータベースの使用」](#) を参照してください。

5.3 インフラストラクチャのインストールの順序

OracleAS Metadata Repository および Oracle Identity Management コンポーネントの両方を同じコンピュータにインストールする場合は、「Identity Management and OracleAS Metadata Repository」オプションを選択します。インストーラにより、コンポーネントが適切な順序でインストールされます。段階的な手順については、[第 5.19 項 「OracleAS Infrastructure のインストール」](#) を参照してください。

インフラストラクチャ・コンポーネントを別々のコンピュータにインストールする場合は、次の順序でインストールします。

1. OracleAS Metadata Repository をインストールします。

インストーラで新規データベースを作成し、そのデータベースに OracleAS Metadata Repository を移入するか、または Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行して既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールできます。

Oracle Internet Directory がまだインストールされていないので、この時点では OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録できないことに注意してください。登録は、次の手順で行います。

関連項目 :

- [第 5.20 項 「OracleAS Metadata Repository の新規データベースへのインストール」](#)
- 既存データベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール方法については、[Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のユーザーズ・ガイド](#) を参照してください。

2. Oracle Identity Management コンポーネントをインストールします。

インストーラにより、OracleAS Metadata Repository データベース用の接続情報を入力するよう要求されます。

段階的な手順については、[第 5.21 項 「Oracle Identity Management コンポーネントのみ \(Oracle Internet Directory を含む\) のインストール」](#) を参照してください。

インストーラにより、OracleAS Metadata Repository が新しく作成された Oracle Internet Directory に登録されます。登録の詳細は、[第 5.9 項 「OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録とパスワードのランダム化」](#) を参照してください。

OracleAS Metadata Repository のみをインストールしても Oracle Application Server インスタンスは生成されない

インフラストラクチャのインストール時に OracleAS Metadata Repository のみをインストールする場合は、インストーラでは新規データベースを作成し、そのデータベースに OracleAS Metadata Repository スキーマを移入します。このインスタンスは、次の点で他の Oracle Application Server インスタンスと異なります。

- インストーラにより、この Oracle Application Server インスタンスに対して名前を付けるよう要求されません。
- Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control は、このインスタンスには構成されていないので、インストール終了時に起動されません。メタデータ・リポジトリ・データベースのみから構成されるインスタンスを管理するには、これは不要です。
このインスタンスを管理するには、データベース管理ツールを使用します。詳細は、Oracle Application Server 管理者ガイドの「管理ツールの概要」の章を参照してください。
- Oracle HTTP Server も、このインスタンスの管理に必要ないので、インストール終了時に起動されません。

5.4 コンポーネントの別々のコンピュータへのインストール

前述したように、Oracle Application Server インスタンスは別々のコンピュータにインストールできます。それに加えて、コンポーネントを複数のコンピュータに分散することもできます。これは、特にインフラストラクチャ・コンポーネントで役立ちます。分散すると、インフラストラクチャ・サービスのパフォーマンス、セキュリティ、スケーラビリティおよび可用性向上させることができます。

次に例を示します。

- OracleAS Infrastructure は、OracleAS Metadata Repository の格納に Oracle データベースを使用します。このデータベースを独自のコンピュータにインストールできます。
- Oracle Identity Management コンポーネントを1台以上のコンピュータのインフラストラクチャにインストールできます。

表 5-3 に、OracleAS Infrastructure の可能な構成を示します。

表 5-3 OracleAS Infrastructure の構成

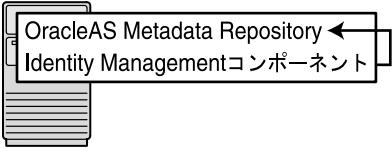
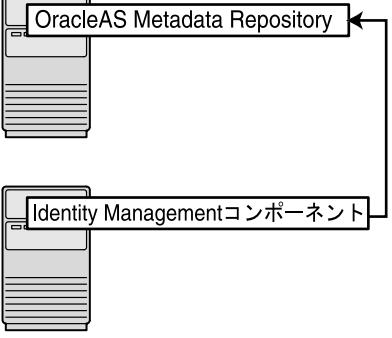
構成	説明 / インストール方法
	<p>この構成では、OracleAS Metadata Repository と Oracle Identity Management コンポーネントが同じ Oracle ホームから実行されます。</p> <p>この構成をインストールするには、OracleAS Metadata Repository と Oracle Identity Management コンポーネントを同時にインストールします。インストール手順については、第 5.19 項「OracleAS Infrastructure のインストール」 を参照してください。</p>
	<p>この構成では、OracleAS Metadata Repository と Oracle Identity Management コンポーネントが別々のコンピュータで実行されます。</p> <p>この構成をインストールするには、次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. OracleAS Metadata Repository をインストールします。第 5.20 項「OracleAS Metadata Repository の新規データベースへのインストール」 を参照してください。 2. Oracle Identity Management コンポーネントをインストールします。第 5.21 項「Oracle Identity Management コンポーネントのみ（Oracle Internet Directory を含む）のインストール」 を参照してください。 <p>または、OracleAS Metadata Repository を既存のデータベースにインストールします。第 13 章「既存のデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール」 を参照してください。</p>

表 5-3 OracleAS Infrastructure の構成（続き）

構成	説明 / インストール方法
<p>OracleAS Metadata Repository Oracle Internet Directory Identity Managementコンポーネント - Oracle Directory Integration and Provisioning - Oracle Delegated Administration Services - OracleAS Single Sign-On - OracleAS Certificate Authority</p>	<p>この構成では、OracleAS Metadata Repository が 1 つ目のコンピュータで実行され、Oracle Internet Directory が 2 つ目のコンピュータで実行され、残りの Oracle Identity Management コンポーネントが 3 つ目のコンピュータで実行されます。</p> <p>この構成をインストールするには、次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. OracleAS Metadata Repository をインストールします。第 5.20 項「OracleAS Metadata Repository の新規データベースへのインストール」を参照してください。 2. Oracle Internet Directory をインストールします。第 5.21 項「Oracle Identity Management コンポーネントのみ（Oracle Internet Directory を含む）のインストール」を参照してください。 3. 残りの Oracle Identity Management コンポーネントをインストールします。第 5.22 項「Oracle Identity Management コンポーネントのみ（Oracle Internet Directory を除く）のインストール」を参照してください。
<p>Oracle Internet Directory OracleAS Metadata Repository Identity Managementコンポーネント - Oracle Directory Integration and Provisioning - Oracle Delegated Administration Services - OracleAS Single Sign-On - OracleAS Certificate Authority</p> <p>OracleAS Certificate Authority OracleAS Metadata Repository</p>	<p>この構成では、（セキュリティ上の理由で）OCA にそれ専用の OracleAS Metadata Repository を使用します。他の Oracle Identity Management コンポーネントには、別の OracleAS Metadata Repository を使用します。</p> <p>この構成をインストールするには、次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. OracleAS Metadata Repository と Oracle Identity Management コンポーネントをインストールしますが、OCA はインストールしません。 これらすべてのコンポーネントを同じ Oracle ホームにインストールできます（最初の構成を参照）。または、複数のコンピュータに分散することもできます。この図では、分散構成を示しています。 2. OCA をそれ専用の OracleAS Metadata Repository とともにインストールします。

OracleAS Metadata Repository から個々のコンピュータに Oracle Identity Management コンポーネントをインストールする場合、OracleAS Metadata Repository は Oracle Identity Management コンポーネントへのネットワーク・アクセスが必要です。

複数のコンピュータや分散コンポーネントを含む構成については、第 14 章「[推奨されるトポロジ](#)」を参照してください。

5.5 Oracle Identity Management コンポーネントを別々にインストールするためのヒント

Oracle Identity Management コンポーネントを別々にインストールする場合、「構成オプションの選択」画面で構成するコンポーネントを選択するときには次のガイドラインを念頭においてください。

- 同じ OracleAS Metadata Repository に対して複数の OCA をインストールおよび構成することはできません。同じ OracleAS Metadata Repository に対して複数の OracleAS Single Sign-On、Oracle Delegated Administration Services または Oracle Directory Integration and Provisioning をインストールおよび構成することはできます。同じ OracleAS Metadata Repository に対して複数の Oracle Internet Directory を構成する場合は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。
- 構成するコンポーネントを 1 つ以上選択する必要があります。そうしないと、インストールは成功しません。
- 同じ Oracle Internet Directory に対し、別々のインストールで OracleAS Single Sign-On と Oracle Delegated Administration Services を構成する場合は、Oracle Delegated Administration Services の前に OracleAS Single Sign-On を構成する必要があります。これは、Oracle Delegated Administration Services が mod_osso に依存し、mod_osso が示す Oracle Internet Directory に OracleAS Single Sign-On が事前に構成されていないと、インストール中に mod_osso が構成されないためです。
- Oracle Identity Management をインストールする際に、Oracle Directory Integration and Provisioning は含めるが Oracle Internet Directory は含めない場合でも、opmnctl ステータスの出力に Oracle Internet Directory プロセスが表示されます。これは、oidmon をインストールし起動して、Oracle Directory Integration and Provisioning プロセスを起動する必要があるためです。

5.6 Oracle Delegated Administration Services または Oracle Directory Integration and Provisioning コンポーネントの必要性

これらのコンポーネントはオプションですが、次のサービスを提供しているためインストールすることをお薦めします。

- Oracle Delegated Administration Services は Oracle Internet Directory へのプラウザベースのインターフェースを提供します。ユーザーは、このインターフェースを使用して、ユーザーのパスワードの変更、ディレクトリ内の他のユーザーの検索、グループの作成などの作業を実行できます。ユーザーは、追加ユーザーを作成することもできます（適切な権限を持っている場合）。
- Oracle Directory Integration and Provisioning によって、アプリケーションおよびサード・パーティの LDAP ディレクトリを Oracle Internet Directory と統合できます。Oracle Directory Integration and Provisioning を使用して、すべてのディレクトリのデータを同期化したり、Oracle Internet Directory 内のデータが変更されたとき（Oracle Internet Directory にユーザー や グループ が 追加されたときなど）にアプリケーションに通知を送信することができます。

5.7 インストール後のコンポーネントの構成

インストール時にコンポーネントを構成しなかった（つまり、「構成オプションの選択」画面でコンポーネントを選択しなかった）場合は、インストール後に一部のコンポーネントを構成できます。

インストール後に、Oracle Internet Directory を構成することはできません。Oracle Internet Directory は、インストーラを使用してインストールおよび構成する必要があります。

詳細は、第 15.10 項「[インストール後のコンポーネントの構成](#)」を参照してください。

5.8 OracleAS Metadata Repository に対する既存のデータベースの使用

OracleAS Metadata Repository を新規データベースまたは既存のデータベースにインストールできます。

既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする場合の詳細は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のユーザーズ・ガイドを参照してください。

5.9 OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録とパスワードのランダム化

OracleAS Metadata Repository と Oracle Internet Directory は緊密に連携して動きます。OracleAS Metadata Repository を使用する前に（ほとんどの場合）、Oracle Internet Directory に登録されていることを確認してください。

Database-Based Farm 機能を使用し、Oracle Identity Management Access 機能を使用せずに J2EE and Web Cache 中間層を使用する場合は例外です。この場合は、OracleAS Metadata Repository が必要ですが、Oracle Internet Directory に登録する必要はありません。

表 5-4 に、インストーラが OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に自動的に登録するシナリオとユーザーが登録を決定するシナリオを示します。

表 5-4 データベース登録シナリオ

シナリオ	登録	スキーマ・パスワード
同じインストール・セッションで OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory をインストールし構成する 手順については、 第 5.19 項「OracleAS Infrastructure のインストール」 を参照してください。	自動	ランダム化
既存の Oracle Internet Directory に対して OracleAS Metadata Repository をインストールする	自動	ランダム化
既存の OracleAS Metadata Repository に対して Oracle Internet Directory をインストールする 第 5.21 項「 Oracle Identity Management コンポーネントのみ (Oracle Internet Directory を含む) のインストール 」を参照してください。	自動	ランダム化 (メタデータ・リポジトリ・スキーマには新しいランダム化されたパスワードが与えられます)
OracleAS Metadata Repository のみをインストールし (Oracle Identity Management コンポーネントはインストールしない)、Oracle Internet Directory に登録することを選択する このシナリオは、新規データベースまたは既存のデータベースにインストールする場合に該当します。 第 5.20 項「OracleAS Metadata Repository の新規データベースへのインストール」 第 13 章「既存のデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール」	する	ランダム化
OracleAS Metadata Repository のみをインストールし (Oracle Identity Management コンポーネントはインストールしない)、Oracle Internet Directory に登録しないことを選択する このシナリオは、新規データベースまたは既存のデータベースにインストールする場合に該当します。	しない	スキーマはロックされ、パスワードは期限切れになります。

最後の 2 つのシナリオでは、インストーラにより OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録するかどうかを尋ねられます。「はい」の場合は、Oracle Internet Directory の接続情報を入力します。「いいえ」の場合は、インストーラは OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録しません。

注意： インストール時に OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録しなかった場合は、インストール後に Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を使用してそれを登録できます。詳細は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のユーザーズ・ガイドを参照してください。

5.10 OracleAS Metadata Repository の内容

OracleAS Metadata Repository には、次のカテゴリに分類されるスキーマが含まれています。

- 製品メタデータ・スキーマ

これらのスキーマは、OracleAS Portal、OracleAS Wireless などの中間層コンポーネントで使用されます。

- Oracle Identity Management スキーマ

これらのスキーマは、Oracle Internet Directory、OracleAS Single Sign-On、OCA などの Oracle Identity Management コンポーネントで使用されます。

- 管理スキーマ

これらのスキーマは、DCM などのコンポーネントで使用されます。

すべてのスキーマの名前の表示については、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のユーザーズ・ガイドを参照してください。

5.11 複数のメタデータ・リポジトリの使用

複数のメタデータ・リポジトリをインストールしてパフォーマンスを向上させることができます。このようにすると、トポロジ内に異なるコンポーネントで異なるメタデータ・リポジトリを使用できるようになります。複数のメタデータ・リポジトリを使用するには、次のガイドラインに従います。

- Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms 中間層が、製品メタデータに 2 つ目のメタデータ・リポジトリを使用できるようにするには、次のようにします。

- a. 2 つ目のメタデータ・リポジトリをインストールし、Oracle Internet Directory に登録します。

これは、インストーラまたは OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を使用して行うことができます。OracleAS Metadata Repository を含む新規データベースを作成するにはインストーラを使用し、既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールするには OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を使用します。詳細は、[第 13 章「既存のデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール」](#) を参照してください。

- b. Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms 中間層のインストール時に、登録されたリポジトリのリストから 2 つ目のメタデータ・リポジトリを選択します。これは、中間層がその製品メタデータ用に使用するメタデータ・リポジトリです。

- J2EE and Web Cache 中間層に 2 つ目のメタデータ・リポジトリを使用する場合、J2EE and Web Cache のどの機能が必要かによってオプションが異なります。

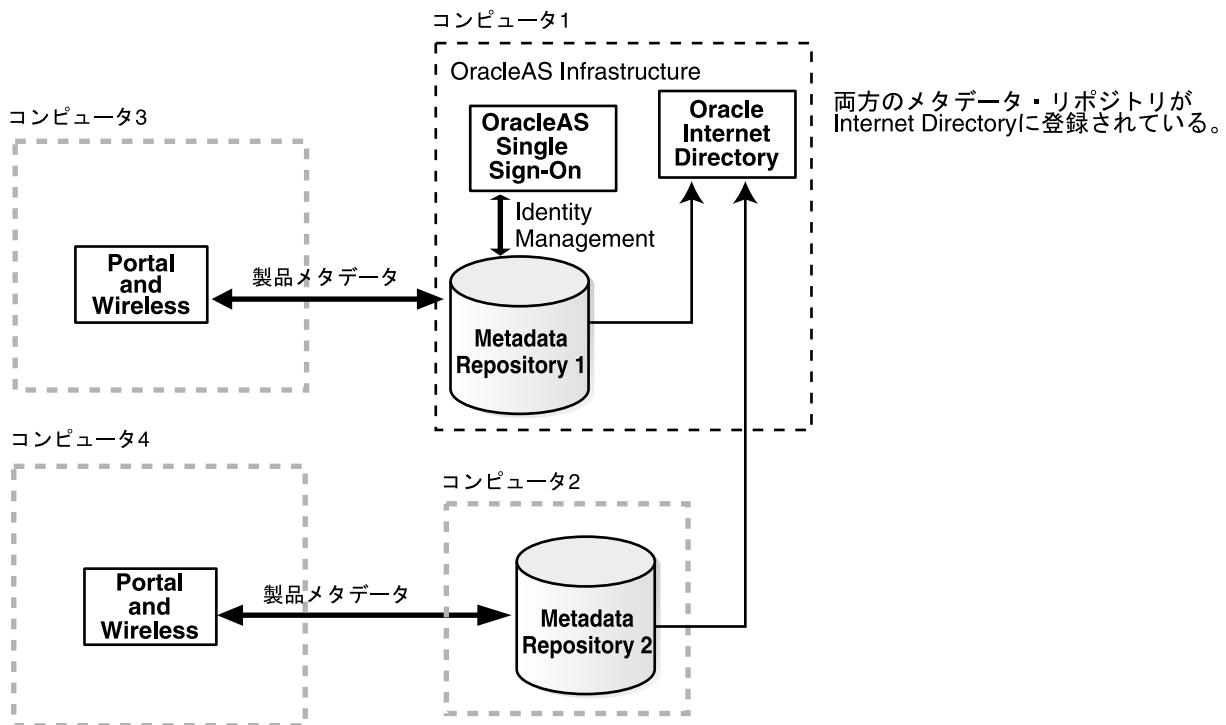
- Oracle Identity Management Access 機能と Database-Based Farm 機能の両方が必要な場合は、2 つ目のメタデータ・リポジトリを Oracle Internet Directory に登録する必要があります。

- Database-Based Farm 機能のみが必要な場合は、2つ目のメタデータ・リポジトリを登録する必要はありません。これは、Oracle Internet Directory を使用していない場合があるためです。

図 5-1 に、2つのメタデータ・リポジトリを持つトポロジを示します。ここでは、4つのコンピュータを使用しています。

- コンピュータ 1 では、メタデータ・リポジトリと Oracle Identity Management コンポーネントが実行されています。Oracle Identity Management コンポーネントでは、このメタデータ・リポジトリを使用します。
- コンピュータ 2 には、コンピュータ 1 で実行されている Oracle Internet Directory に登録されたメタデータ・リポジトリがあります。
- コンピュータ 3 には、Portal and Wireless 中間層があります。この中間層ではその製品メタデータに使用するコンピュータ 1 上のメタデータ・リポジトリを検知します。これは、インストール時にその製品メタデータがそのメタデータ・リポジトリに登録されたためです。
- コンピュータ 4 には、Portal and Wireless 中間層もあります。この中間層ではその製品メタデータに使用するコンピュータ 2 上のメタデータ・リポジトリを検知します。これは、インストール時にその製品メタデータがそのメタデータ・リポジトリに登録されたためです。

図 5-1 複数のメタデータ・リポジトリが使用されている例



注意：

- 同じコンピュータに複数のメタデータ・リポジトリをインストールする場合は、各メタデータ・リポジトリには一意のグローバル・データベース名とシステム識別子 (SID) が必要です。
- 複数のメタデータ・リポジトリを同じ Oracle Internet Directory に登録する場合は、各メタデータ・リポジトリには一意のグローバル・データベース名とシステム識別子 (SID) が必要です。そうでない場合は、同じ名前で 2 番目のメタデータ・リポジトリをインストールするときに Oracle Internet Directory Configuration Assistant が失敗します。

5.12 Oracle Application Server でサポートされる高可用性オプション

次の高可用性環境で Oracle Application Server を実行できます。

- OracleAS Cold Failover Cluster
- OracleAS Cluster (Identity Management)
- OracleAS Disaster Recovery

詳細は、[第 9 章 「高可用性環境へのインストール : 概要」](#) を参照してください。

5.13 SYS、SYSTEM、SYSMAN、および DBSNMP ユーザー用のパスワードの制限

OracleAS Metadata Repository を新規データベースにインストールするとき、インストーラにより、そのデータベースの特権ユーザーである SYS、SYSTEM、SYSMAN、および DBSNMP ユーザーのパスワードを設定するように求められます。これらのユーザーのパスワードには、次のような制限があります。

- パスワードは 30 文字より短くします。
- パスワードには、データベース・キャラクタ・セットの英数字、アンダースコア (_)、ドル記号 (\$) およびシャープ記号 (#) のみを使用できます。
- パスワードは、アルファベット文字で始める必要があります。パスワードは、数字、アンダースコア (_)、ドル記号 (\$) またはシャープ記号 (#) から始めることはできません。
- パスワードに Oracle の予約語を使用することはできません。予約語については、『Oracle Database SQL リファレンス』のリストを参照してください。このマニュアルは、OTN (Oracle Technology Network) のサイト (<http://www.oracle.com/technology/documentation>) にあります。
または、単に予約語のような形式の語の使用を避ける方法もあります。
- パスワードにデフォルトのパスワード (change_on_install および manager) を使用することはできません。

5.14 NE8ISO8859P10 および CEL8ISO8859P14 キャラクタ・セットのサポート

NE8ISO8859P10 または CEL8ISO8859P14 キャラクタ・セットの文字を使用する場合は、データベースで Unicode キャラクタ・セット AL32UTF8 を使用する必要があります。新しいデータベースをインストールする場合は、「データベース構成オプションの指定」画面で「AL32UTF8」を選択します。

これは、Java では NE8ISO8859P10 または CEL8ISO8859P14 キャラクタ・セットがサポートされていないためです。Java でサポートされていないキャラクタ・セットを使用するようにデータベースを構成すると、OracleAS Portal に「サポートされていない IANA キャラクタ・エンコーディング」エラーが表示されます。

5.15 「Internet Directory のネームスペースの指定」画面での入力

この画面で指定する識別名 (DN) は、ユーザーおよびグループを管理する Oracle Internet Directory 内のネームスペースに指定されます。

推奨されるネームスペースが配置要件を満たす場合は、そのネームスペースを選択します。そうでない場合は、「カスタム・ネームスペース」フィールドに必要な DN を入力します。インストーラは、推奨されるネームスペースを %WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイルで確認します。[第 3.7 項「%WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイル」](#) を参照してください。

Oracle Identity Management コンポーネントをサード・パーティのディレクトリと統合する場合は、サード・パーティのディレクトリ内にあるデフォルトのネームスペースの DN に一致するネームスペースの DN を指定する必要があります。サード・パーティのディレクトリとの統合の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

5.16 コンポーネントが使用するポート番号の確認方法

インストール時に、特定の Oracle Application Server コンポーネントが使用するポート番号を確認する必要がある場合があります。たとえば、既存の Oracle Internet Directory に対して OracleAS Infrastructure をインストールする場合、インストーラにより Oracle Internet Directory のホスト名とポート番号の入力を求められます。

ポート番号のリストは、次の方法で取得できます。

- Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control を使用します。
Enterprise Manager ホーム・ページ上の「ポート」リンクをクリックします。これにより、使用されているすべてのポートと様々なコンポーネントの推奨されるポート範囲を示すページが表示されます。
- %ORACLE_HOME%\install\portlist.ini ファイルを確認します。ORACLE_HOME は、Oracle Application Server インストールが格納されているディレクトリです。
インストール後にコンポーネントのポート番号を変更しても、portlist.ini ファイルは更新されません。portlist.ini ファイルは、インストール後は更新されません。

5.17 インストール後の OCA の追加

OracleAS Infrastructure をインストールしたが OCA を構成していない場合に、後で OCA を使用することに決めたときは、別の Oracle ホームにインストールする必要があります。既存の Oracle ホームにインストールすることはできません。

新しい Oracle ホームに OCA をインストールする場合は、OracleAS Infrastructure と同じまたは異なるコンピュータのいずれにもインストールできます。これ独自の OracleAS Metadata Repository とともにインストールするか、または既存の OracleAS Metadata Repository に対してインストールできます。

- OCA のみをインストールします。
OCA では、インストール済の OracleAS Metadata Repository が共有されます。OracleAS Infrastructure インスタンスと同じコンピュータに OCA をインストールする場合は、パフォーマンスの理由により、このオプションを選択することを検討します。(2つ目のオプションは、2つのデータベースが同じコンピュータで実行されている必要があります。これは、パフォーマンスを低下させます。)
詳細は、[第 5.22 項「Oracle Identity Management コンポーネントのみ（Oracle Internet Directory を除く）のインストール」](#)を参照してください。「構成オプションの選択」画面で、「**OracleAS Certificate Authority (OCA)**」のみを選択します。
- OCA をそれ専用の OracleAS Metadata Repository とともにインストールします。
詳細は、[第 14.7 項「OCA トポロジ」](#)を参照してください。

5.18 個々のホストへの Oracle Delegated Administration Services の配置

個々の Oracle ホームに Oracle Delegated Administration Services を構成するには、スタンダードのインストールを実行します。そのためには、Identity Management インストール・タイプを選択して、「構成オプション」画面で「Delegated Administration Services」を選択します。

5.19 OracleAS Infrastructure のインストール

OracleAS Metadata Repository および Oracle Identity Management コンポーネントをインストールするには、この手順を実行します。この手順を実行すると、1つの Oracle ホームに完全な OracleAS Infrastructure がインストールされます。

OracleAS Metadata Repository に既存のデータベースを使用する場合は、[第 13 章「既存のデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール」](#) を参照してください。

表 5-5 OracleAS Infrastructure のインストール手順

画面	操作
1. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第 5.25 項「インストールの一部：インストールの最初のいくつかの画面」 を参照してください。</p> <p>注意：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「インストール・タイプの選択」画面で、「Identity Management and OracleAS Metadata Repository」を選択します。
2. 構成オプションの選択	<p>「Oracle Internet Directory」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server Single Sign-On」を選択します。</p> <p>「OracleAS Delegated Administration Service」を選択します。</p> <p>「OracleAS Directory Integration and Provisioning」を選択します。</p> <p>ユーザーおよびサーバーに対して証明書を発行できる独自の認証局を構成する場合は、「OracleAS Certificate Authority (OCA)」を選択します。</p> <p>「高可用性およびレプリケーション」は選択しないでください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. ポート構成オプションの選択	<p>コンポーネントにデフォルトのポートを使用する場合は、「自動」を選択します。</p> <p>staticports.ini ファイルをすでに作成していて、デフォルトのポートを使用しない場合は、「手動」を選択し、staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. Internet Directory のネームスペースの指定	<p>推奨されるネームスペースを選択するか、またはデフォルトの Oracle Identity Management レルムの場所のカスタム・ネームスペースを入力します。</p> <p>「推奨ネームスペース」に表示された値が配置要件を満たしていることを確認します。要件を満たさない場合は、「カスタム・ネームスペース」に必要な値を入力します。第 5.15 項「Internet Directory のネームスペースの指定」画面での入力 を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. OCA の画面	<p>「構成オプションの選択」画面で「OracleAS Certificate Authority (OCA)」を選択すると、インストーラにより OCA の情報を入力するための画面が表示されます。第 5.28 項「インストールの一部：OCA の画面」 を参照してください。</p>
6. Oracle Database の画面	<p>OracleAS Metadata Repository データベースの情報を入力します。第 5.27 項「インストールの一部：データベースの画面」 を参照してください。</p>

表 5-5 OracleAS Infrastructure のインストール手順（続き）

画面	操作
7. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	<p>インスタンス名：このインフラストラクチャ・インスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_（アンダースコア）文字を使用できます。1台のコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第 4.7 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。</p> <p>例：infra</p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」：ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、第 4.8 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。</p> <p>例：welcome99</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
8. --	インストールを終了します。詳細は、 第 5.26 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。

5.20 OracleAS Metadata Repository の新規データベースへのインストール

新規データベースを作成し、OracleAS Metadata Repository を移入するには、この手順を実行します。この手順では、Oracle Identity Management コンポーネントはインストールされません。

表 5-6 新規データベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール手順

画面	操作
1. --	インストーラを起動します。詳細は、 第 4.13 項「Oracle Universal Installer の起動」 を参照してください。
2. ようこそ	「次へ」をクリックします。
3. ファイルの場所の指定	<p>名前：この Oracle ホームを識別する名前を入力します。Oracle ホームの名前には英数字およびアンダースコア（_）のみを使用でき、最大 128 文字です。</p> <p>例：OH_MR</p> <p>パス：インストール先のディレクトリへのフルパスを入力します。これは Oracle ホームです。Oracle ホーム・ディレクトリが存在しない場合は、インストーラによって作成されます。必要に応じて、事前にディレクトリを作成することもできます。</p> <p>例：C:\oracle\appserver\infra</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. インストールする製品の選択	<p>「OracleAS Infrastructure」を選択します。</p> <p>追加の言語をインストールする必要がある場合は、「製品の言語」をクリックします。詳細は、第 4.6 項「追加の言語のインストール」 を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. インストール・タイプの選択	<p>「OracleAS Metadata Repository」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p> <p>環境変数 TEMP が設定されていないことを示すエラー・メッセージが表示された場合は、デフォルトの一時ディレクトリの領域が十分ではないことを示しています。異なるディレクトリを指すように環境変数 TEMP を設定するか、またはデフォルトの一時ディレクトリに十分な領域を確保する必要があります。</p> <p>環境変数 TEMP の詳細は、第 3.6.5 項「TEMP」 を参照してください。</p>
6. インストール前の要件の確認	使用しているコンピュータがすべての要件を満たしていることを確認します。「次へ」をクリックします。

表 5-6 新規データベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール手順（続き）

画面	操作
7. 構成オプションの選択	新規データベースに OracleAS Metadata Repository をインストールするための構成オプションはありません。 「次へ」をクリックします。
8. OracleAS Metadata Repository の登録	Oracle Internet Directory がすでにあり、その接続情報がわかっている場合は、「はい」を選択し、Oracle Internet Directory が実行されているコンピュータの名前とポート番号を入力します。ポート番号がわからない場合は、第 5.16 項「コンポーネントが使用するポート番号の確認方法」を参照してください。 Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用 : Oracle Application Server コンポーネントが Oracle Internet Directory への接続に SSL のみを使用するようにする場合は、このオプションを選択します。 Oracle Internet Directory がない場合、またはその接続情報がわからない場合は、「いいえ」を選択します。 「次へ」をクリックします。
9. Oracle Internet Directory に対するログインの指定	この画面は、前の画面で「はい」を選択した場合にのみ表示されます。 ユーザー名 : Oracle Internet Directory ログインするためのユーザー名を入力します。ユーザーは、Oracle Internet Directory の iAS Admins グループに属している必要があります。 パスワード : パスワードを入力します。 レルム : このフィールドは、Oracle Internet Directory に複数のレルムがある場合にのみ表示されます。ユーザーの認証に使用するレルムの名前を入力します。 「次へ」をクリックします。
10. Oracle Database の画面	OracleAS Metadata Repository データベースの情報を入力します。詳細は、第 5.27 項「インストールの一部：データベースの画面」を参照してください。
11. --	インストールを終了します。詳細は、第 5.26 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」を参照してください。
12. --	dcm スキーマをロック解除し、そのパスワードを設定します。この手順は、中間層インスタンスのデータベース・クラスタリングにメタデータ・リポジトリを使用する場合にのみ必要です。 <ol style="list-style-type: none"> 環境変数 ORACLE_HOME に OracleAS Metadata Repository をインストールしたディレクトリのフルパスを設定します。 環境変数 ORACLE_SID に OracleAS Metadata Repository の SID を設定します。 SQL*Plus を使用して、dcm スキーマをロック解除し、そのパスワードを設定します。 次の alter user コマンドは、パスワードを「welcome1」に設定しますが、パスワードには任意の値を設定できます。 <pre>C:\> %ORACLE_HOME%\bin\sqlplus "sys/password as sysdba" SQL> alter user dcm identified by welcome1 account unlock;</pre>

5.21 Oracle Identity Management コンポーネントのみ（Oracle Internet Directory を含む）のインストール

OracleAS Metadata Repository をインストールしないで、Oracle Identity Management コンポーネントをインストールするには、この手順を実行します。

リモート OracleAS Metadata Repository に対して Oracle Internet Directory を構成するには、この手順に従います。OracleAS Metadata Repository は、既存のデータベース（[第 13 章「既存のデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール」](#)を参照）、または新規データベース（[第 5.20 項「OracleAS Metadata Repository の新規データベースへのインストール」](#)を参照）にインストール済です。

前提条件 : Oracle Internet Directory に登録されていない OracleAS Metadata Repository

表 5-7 Oracle Identity Management コンポーネントのみ（Oracle Internet Directory を含む）のインストール手順

画面	操作
1. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第 5.25 項「インストールの一部：インストールの最初のいくつかの画面」を参照してください。</p> <p>注意：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「インストール・タイプの選択」画面で、「Oracle Identity Management」を選択します。
2. 構成オプションの選択	<p>「Oracle Internet Directory」を選択します。</p> <p>「OracleAS Single Sign-On」を選択します。</p> <p>OracleAS Delegated Administration Service や OracleAS Directory Integration and Provisioning が提供するサービスが必要な場合は、これらの両方またはいずれかを選択します。第 5.6 項「Oracle Delegated Administration Services または Oracle Directory Integration and Provisioning コンポーネントの必要性」を参照してください。</p> <p>ユーザーおよびサーバーに対して証明書を発行できる独自の認証局を構成する場合は、「OracleAS Certificate Authority (OCA)」を選択します。</p> <p>「高可用性およびレプリケーション」は選択しないでください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. ポート構成オプションの選択	<p>コンポーネントにデフォルトのポートを使用する場合は、「自動」を選択します。</p> <p>staticports.ini ファイルをすでに作成していて、デフォルトのポートを使用しない場合は、「手動」を選択し、staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. リポジトリの指定	<p>ユーザー名 : OracleAS Metadata Repository データベースにログインするためのユーザー名を入力します。ユーザーは、DBA 権限を持っている必要があります。</p> <p>パスワード : ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>ホスト名とポート : データベースが稼働しているコンピュータの名前を入力し、そのコンピュータによってリスニングが行われているポートのポート番号を入力します。書式には、host:port を使用します。</p> <p>サービス名 : データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。</p> <p>例 : orcl.mydomain.com</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 5-7 Oracle Identity Management コンポーネントのみ (Oracle Internet Directory を含む) のインストール手順 (続き)

画面	操作
5. Internet Directory のネームスペースの指定	<p>推奨されるネームスペースを選択するか、またはデフォルトの Oracle Identity Management レベルの場所のカスタム・ネームスペースを入力します。</p> <p>「推奨ネームスペース」に表示された値が配置要件を満たしていることを確認します。要件を満たさない場合は、「カスタム・ネームスペース」に必要な値を入力します。第 5.15 項 「Internet Directory のネームスペースの指定」画面での入力 を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. OCA を構成するための情報の入力	OCA の画面に従って情報を入力します。詳細は、 第 5.28 項 「インストールの一部：OCA の画面」 を参照してください。
7. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	<p>インスタンス名 : このインフラストラクチャ・インスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_ (アンダースコア) 文字を使用できます。1台のコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第 4.7 項 「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。</p> <p>例: id_mgmt</p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」: ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、第 4.8 項 「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。</p> <p>例: welcome99</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
8. --	インストールを終了します。詳細は、 第 5.26 項 「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。

5.22 Oracle Identity Management コンポーネントのみ（Oracle Internet Directory を除く）のインストール

OracleAS Metadata Repository または Oracle Internet Directory をインストールしないで、Oracle Identity Management コンポーネントをインストールするには、この手順を実行します。

追加の OracleAS Single Sign-On、Oracle Delegated Administration Services または Oracle Directory Integration and Provisioning コンポーネントを既存の Oracle Internet Directory に対してインストールするには、この手順を使用します。

前提条件 : OracleAS Metadata Repository、Oracle Internet Directory リリース 9.0.4 以上。

表 5-8 Oracle Identity Management コンポーネントのみ（Oracle Internet Directory を除く）のインストール手順

画面	操作
1. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第 5.25 項「インストールの一部：インストールの最初のいくつかの画面」を参照してください。</p> <p>注意：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「インストール・タイプの選択」画面で、「Oracle Identity Management」を選択します。
2. 構成オプションの選択	<p>「Oracle Internet Directory」は選択しないでください。</p> <p>「OracleAS Single Sign-On」を選択します。</p> <p>OracleAS Delegated Administration Service や OracleAS Directory Integration and Provisioning が提供するサービスが必要な場合は、これらの両方またはいずれかを選択します。第 5.6 項「Oracle Delegated Administration Services または Oracle Directory Integration and Provisioning コンポーネントの必要性」を参照してください。</p> <p>ユーザーおよびサーバーに対して証明書を発行できる独自の認証局を構成する場合は、「OracleAS Certificate Authority (OCA)」を選択します。</p> <p>「高可用性およびレプリケーション」は選択しないでください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. ポート構成オプションの選択	<p>コンポーネントにデフォルトのポートを使用する場合は、「自動」を選択します。</p> <p>staticports.ini ファイルをすでに作成していて、デフォルトのポートを使用しない場合は、「手動」を選択し、staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. Oracle Internet Directory への登録	<p>ホスト名 : Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を入力します。</p> <p>ポート : Oracle Internet Directory がリスニングしているポートのポート番号を入力します。ポート番号がわからない場合は、第 5.16 項「コンポーネントが使用するポート番号の確認方法」を参照してください。</p> <p>Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用 : Oracle Application Server コンポーネントが Oracle Internet Directory への接続に SSL のみを使用するようにする場合は、このオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. Oracle Internet Directory に対するログインの指定	<p>ユーザー名 : Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名を入力します。Oracle Internet Directory の必要なグループに属しているユーザーとしてログインする必要があります。必要なグループは、インストールするコンポーネントによって異なります。詳細は、第 7.3 項「コンポーネントの構成または削除に必要なグループ」を参照してください。</p> <p>パスワード : ユーザー名のパスワードを入力します。</p> <p>レルム : ユーザー名の妥当性を検証するレルムを入力します。このフィールドは、Oracle Internet Directory に複数のレルムがある場合にのみ表示されます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 5-8 Oracle Identity Management コンポーネントのみ（Oracle Internet Directory を除く）のインストール手順（続き）

画面	操作
6. ODS パスワードの指定	OracleAS Metadata Repository 内の ODS スキーマのパスワードを入力します。ODS スキーマは、Oracle Internet Directory で使用される主要スキーマです。 デフォルトでは、ODS パスワードは ias_admin パスワード（「インスタンス名と ias_admin パスワードの指定」画面で入力したパスワード）と同じです。 「次へ」をクリックします。
6. OCA を構成するための情報の入力	OCA の画面に従って情報を入力します。詳細は、 第 5.28 項「インストールの一部：OCA の画面」 を参照してください。
7. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	インスタンス名 ：このインフラストラクチャ・インスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_（アンダースコア）文字を使用できます。1台のコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、 第 4.7 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。 例：id_mgmt 「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」 ：ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、 第 4.8 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。 例：welcome99 「次へ」をクリックします。
8. --	インストールを終了します。詳細は、 第 5.26 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。

5.23 Oracle Internet Directory のみのインストール

Oracle Internet Directory をインストールするには、この手順を実行します。

前提条件 : OracleAS Metadata Repository

表 5-9 Oracle Internet Directory のインストール手順

画面	操作
1. --	インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、 第 5.25 項「インストールの一部：インストールの最初のいくつかの画面」 を参照してください。 注意： <ul style="list-style-type: none">■ 「インストール・タイプの選択」画面で、「Oracle Identity Management」を選択します。
2. 構成オプションの選択	「Oracle Internet Directory」を選択します。 「OracleAS Single Sign-On」は選択しないでください。 「OracleAS Delegated Administration Service」は選択しないでください。 「OracleAS Directory Integration and Provisioning」は選択しないでください。 「OracleAS Certificate Authority (OCA)」は選択しないでください。 「高可用性およびレプリケーション」は選択しないでください。 「次へ」をクリックします。
3. ポート構成オプションの選択	コンポーネントにデフォルトのポートを使用する場合は、「自動」を選択します。 staticports.ini ファイルをすでに作成していて、デフォルトのポートを使用しない場合は、「手動」を選択し、staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。 「次へ」をクリックします。

表 5-9 Oracle Internet Directory のインストール手順（続き）

画面	操作
4. リポジトリの指定	<p>ユーザー名 : OracleAS Metadata Repository データベースにログインするためのユーザー名を入力します。ユーザーは、DBA 権限を持っている必要があります。</p> <p>パスワード : ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>ホスト名とポート : データベースが稼働しているコンピュータの名前を入力し、そのコンピュータによってリスニングが行われているポートのポート番号を入力します。書式には、<i>host:port</i> を使用します。</p> <p>サービス名 : データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。</p> <p>例: <code>orcl.mydomain.com</code></p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. Internet Directory のネームスペースの指定	<p>推奨されるネームスペースを選択するか、またはデフォルトの Oracle Identity Management レベルの場所のカスタム・ネームスペースを入力します。</p> <p>「推奨ネームスペース」に表示された値が配置要件を満たしていることを確認します。要件を満たさない場合は、「カスタム・ネームスペース」に必要な値を入力します。第 5.15 項「Internet Directory のネームスペースの指定」画面での入力 を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	<p>インスタンス名 : このインフラストラクチャ・インスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_（アンダースコア）文字を使用できます。1つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第 4.7 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。</p> <p>例: <code>infra</code></p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」: ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、第 4.8 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。</p> <p>例: <code>welcome99</code></p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. --	<p>インストールを終了します。詳細は、第 5.26 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。</p>

5.24 OCA と OracleAS Metadata Repository のみのインストール

OCA および OracleAS Metadata Repository コンポーネントのみをインストールするには、この手順を実行します。このシナリオは、[第 14.7 項「OCA トポロジ」](#) で使用します。

表 5-10 OCA と OracleAS Metadata Repository のインストール手順

画面	操作
1. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第 5.25 項「インストールの一部：インストールの最初のいくつかの画面」 を参照してください。</p> <p>注意：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「インストール・タイプの選択」画面で、「Identity Management and OracleAS Metadata Repository」を選択します。
2. 構成オプションの選択	<p>既存のものを使用するため、「Oracle Internet Directory」は選択しないでください。 「OracleAS Single Sign-On」は選択しないでください。 「OracleAS Delegated Administration Service」は選択しないでください。 「OracleAS Directory Integration and Provisioning」は選択しないでください。 「OracleAS Certificate Authority (OCA)」を選択します。 「高可用性およびレプリケーション」は選択しないでください。 「次へ」をクリックします。</p>
3. ポート構成オプションの指定	<p>コンポーネントにデフォルトのポートを使用する場合は、「自動」を選択します。 staticports.ini ファイルをすでに作成していて、デフォルトのポートを使用しない場合は、「手動」を選択し、staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。 「次へ」をクリックします。</p>
4. Oracle Internet Directory への登録	<p>ホスト名 : Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を入力します。 ポート : Oracle Internet Directory がリスニングしているポートのポート番号を入力します。ポート番号がわからない場合は、第 5.16 項「コンポーネントが使用するポート番号の確認方法」 を参照してください。</p> <p>Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用 : Oracle Application Server コンポーネントが Oracle Internet Directory への接続に SSL のみを使用するようにする場合は、このオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. OID ログインの指定	<p>ユーザー名 : Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名を入力します。Oracle Internet Directory の信頼できるアプリケーションの管理者グループおよび iAS Admins グループに属しているユーザーとしてログインします。</p> <p>パスワード : ユーザー名のパスワードを入力します。</p> <p>レルム : ユーザー名の妥当性を検証するレルムを入力します。このフィールドは、Oracle Internet Directory に複数のレルムがある場合にのみ表示されます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. OCA の画面	<p>OCA を構成するための情報を入力します。第 5.28 項「インストールの一部：OCA の画面」 を参照してください。</p>
7. Oracle Database の画面	<p>OracleAS Metadata Repository データベースの情報を入力します。第 5.27 項「インストールの一部：データベースの画面」 を参照してください。</p>

表 5-10 OCA と OracleAS Metadata Repository のインストール手順（続き）

画面	操作
8. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	<p>インスタンス名：このインフラストラクチャ・インスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_（アンダースコア）文字を使用できます。1台のコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第 4.7 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。</p> <p>例：infra_oca</p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」：ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、第 4.8 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。</p> <p>例：welcome99</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
9. --	インストールを終了します。詳細は、 第 5.26 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。

5.25 インストールの一部：インストールの最初のいくつかの画面

インストーラの最初のいくつかの画面はすべてのインストールで同じであるため、ここで説明します。この章のほとんどのインストール手順では、この項を開始点として参照しています。

表 5-11 インストールの最初のいくつかの画面

画面	操作
1. --	インストーラを起動します。詳細は、 第 4.13 項「Oracle Universal Installer の起動」 を参照してください。
2. ようこそ	「次へ」をクリックします。
3. ファイルの場所の指定	<p>名前：この Oracle ホームを識別する名前を入力します。Oracle ホームの名前には英数字およびアンダースコア（_）のみを使用でき、最大 128 文字です。</p> <p>例：OH_INFRA</p> <p>パス：インストール先のディレクトリへのフルパスを入力します。これは Oracle ホームです。Oracle ホーム・ディレクトリが存在しない場合は、インストーラによって作成されます。必要に応じて、事前にディレクトリを作成することもできます。</p> <p>（インストーラを実行している）ローカル・コンピュータのディレクトリを指定する必要があります。別のコンピュータに割り当てられているドライブには、インストールできません。</p> <p>例：C:\oracle\appserver\infra</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. インストールする製品の選択	<p>「OracleAS Infrastructure」を選択します。</p> <p>追加の言語をインストールする必要がある場合は、「製品の言語」をクリックします。詳細は、第 4.6 項「追加の言語のインストール」 を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 5-11 インストールの最初のいくつかの画面（続き）

画面	操作
5. インストール・タイプの選択	<p>この画面に表示されるオプションは、「インストールする製品の選択」画面で選択したものによって異なります。</p> <p>OracleAS Infrastructure のインストール・タイプには次のものがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Identity Management および メタデータ・リポジトリ ■ Identity Management ■ メタデータ・リポジトリ <p>「次へ」をクリックします。</p> <p>環境変数 TEMP が設定されていないことを示すエラー・メッセージが表示された場合は、デフォルトの一時ディレクトリの領域が十分ではないことを示しています。異なるディレクトリを指すように環境変数 TEMP を設定するか、またはデフォルトの一時ディレクトリに十分な領域を確保する必要があります。</p> <p>環境変数 TEMP の詳細は、第 3.6.5 項「TEMP」 を参照してください。</p>
7. インストール前の要件の確認	使用しているコンピュータがすべての要件を満たしていることを確認します。「次へ」をクリックします。

5.26 インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面

インストーラの最後のいくつかの画面はすべてのインストールで同じであるため、この項で説明します。この章のほとんどのインストール手順では、この項を終了点として参照しています。

表 5-12 インストールの最後のいくつかの画面

画面	操作
1. サマリー	選択した内容を確認し、「インストール」をクリックします。
2. インストール進捗	この画面には、インストールの進捗状況が表示されます。
3. Configuration Assistant	この画面には、Configuration Assistant の進捗状況が表示されます。Configuration Assistant によって、コンポーネントが構成されます。
4. インストールの終了	「終了」をクリックして、インストーラを終了します。

5.27 インストールの一部：データベースの画面

OracleAS Metadata Repository 用の新規データベースをインストールすると、インストーラに次の画面が表示されます。

表 5-13 データベースの画面

画面	操作
1. データベース ID の指定	<p>グローバル・データベース名: OracleAS Metadata Repository データベースの名前を入力します。ドメイン名をデータベース名に追加します。グローバル・データベース名でのこのドメイン名は、ご使用のネットワーク・ドメイン名とは異なる名前にすることができます。</p> <p>グローバル・データベース名のドメイン名の部分には、次のネーミング制限があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 英数字、アンダースコア（_）およびシャープ（#）文字のみを使用できます。 ■ 最大 128 文字です。 <p>グローバル・データベース名のデータベース名の部分には、次のネーミング制限があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 英数字のみを使用できます。 ■ 最大 8 文字です。 <p>■ PORT または HOST を大文字で使用することはできません。「host」または「port」を含む名前にする場合は、小文字を使用します。</p> <p>例: orcl.mydomain.com</p> <p>注意: 2つ以上のピリオドと一緒に入力しないでください (例: orcl.mydomain.com)。これに関してインストーラはチェックを行わないので、後で、これがインストール・プロセス中のエラーの原因になります。</p> <p>SID: OracleAS Metadata Repository データベースのシステム識別子を入力します。通常、これはグローバル・データベース名と同じですが、ドメイン名は含まれません。SID は、すべてのデータベースで一意である必要があります。</p> <p>SID には、次のネーミング制限があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 英数字のみを使用できます。 ■ 最大 8 文字です。 <p>■ PORT または HOST を大文字で使用することはできません。「host」または「port」を含む名前にする場合は、小文字を使用します。</p> <p>例: orcl</p> <p>データベース・キャラクタ・セットの選択: 使用するキャラクタ・セットを選択します。</p> <p>データベース・ファイルの位置の指定: データ・ファイル・ディレクトリの親ディレクトリへのフルパスを入力します。この親ディレクトリはすでに存在している必要があります、このディレクトリへの書き込み権限を所有している必要があります。</p> <p>インストーラによって、この親ディレクトリにサブディレクトリが作成されます。サブディレクトリは SID と同じ名前になります。データ・ファイルは、このサブディレクトリに配置されます。</p> <p>たとえば、C:\oradata と入力し、SID が orcl の場合、データ・ファイルは C:\oradata\orcl に配置されます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
2. データベース・スキーマの パスワードの指定	<p>権限付きデータベース・スキーマ (SYS、SYSTEM、SYSMAN および DBSNMP) のパスワードを設定します。各スキーマに対して異なるパスワードを設定することも、すべてのスキーマに同じパスワードを設定することもできます</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

5.28 インストールの一部 : OCA の画面

OracleAS Infrastructure のインストール時に「構成オプションの選択」画面で「**OracleAS Certificate Authority (OCA)**」を選択すると、表 5-14 に示す画面が表示されます。

同じ OracleAS Metadata Repository に対して複数の OCA をインストールすることはできません。Oracle Identity Management コンポーネントを既存の OracleAS Metadata Repository に対してのみインストールするときには、Metadata Repository に対してすでに OCA のインスタンスが構成されていないことを確認します。

例 : OCA を含む OracleAS Metadata Repository および Oracle Identity Management コンポーネントをコンピュータにインストールします。次に、同じ OracleAS Metadata Repository に対して追加の Oracle Identity Management コンポーネント (OCA を含む) を同じまたは別のコンピュータにインストールすると、このインストールは失敗します。

表 5-14 OCA の画面

画面	操作
1. 「OracleAS Metadata Repository」の選択	<p>この画面は、OCA を構成するときに、既存の Oracle Internet Directory および既存の OracleAS Metadata Repository を使用している場合にのみ表示されます。Oracle Internet Directory には、使用する OracleAS Metadata Repository が登録されている必要があります。</p> <p>OCA で使用する OracleAS Metadata Repository を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
2. OCA 識別名の指定	<p>OCA では、この画面で指定された DN を、発行される証明書の「発行者」フィールドに移入します。</p> <p>標準 DN: DN にこのセクションに一覧表示された属性のみを使用する場合は、このセクションを使用します。このセクションで指定された属性をすべて入力する必要はありません。o (組織) 属性のみが必須です。どの属性でも、' (一重引用符) 文字は無効です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 一般名 (CN): 証明書に必要な名前を入力します。この名前は、ホスト名とは異なる必要があります。例: John Doe ■ 組織単位 (OU): 地区または部門の名前を入力します。例: Sales ■ 組織 (o): 会社または組織の名前を入力します。例: Oracle Corporation ■ 国 (C): ドロップダウン・リストから国を選択します。 <p>カスタム DN: DN に標準 DN セクションで一覧表示されない属性を使用する場合は、このセクションで DN を指定します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. OCA 鍵の長さの指定	<p>鍵の長さ (ビット): OCA で発行されるすべての証明書に署名するために RSA アルゴリズムで使用される鍵の長さを選択します。2048 ビット以上の鍵の長さを使用することをお薦めします。鍵の長さが長いほどセキュリティが強化されますが、新しい証明書を発行するための時間が長くなります。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. OCA 管理者パスワードの指定	<p>「管理者のパスワード」および「パスワードの確認」: OCA 管理者のパスワードを指定して、確認します。パスワードには、次の制限があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 8 文字以上である必要があります。 ■ 英字を 1 文字以上使用する必要があります。 ■ 英字以外の文字 (数字など) を 1 文字以上使用する必要があります。 ■ 先頭の文字を数字にすることはできません。 <p>OCA を管理するには、このパスワードが必要です。このパスワードは、OCA Configuration Assistant でも使用します。</p> <p>インストール後に、ocactl コマンドを使用してパスワードを変更できます。詳細は、OCA のオンライン・ヘルプを参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

6

中間層のインストール

表 6-1 この章の内容

トピック	手順
<ul style="list-style-type: none">■ 第 6.1 項「中間層タイプ」■ 第 6.2 項「中間層のコンポーネント」■ 第 6.3 項「必要なコンポーネント」■ 第 6.4 項「J2EE and Web Cache 中間層用の構成オプション」■ 第 6.5 項「DCM スキーマのパスワードの確認方法」■ 第 6.6 項「コンポーネントが使用するポート番号の確認方法」■ 第 6.7 項「アップグレードした Oracle Internet Directory に中間層をインストールする場合」	<ul style="list-style-type: none">■ 第 6.8 項「インフラストラクチャなしでの J2EE and Web Cache のインストール」■ 第 6.9 項「Database-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール (Oracle Identity Management Access を使用する場合)」■ 第 6.10 項「Database-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール (Oracle Identity Management Access を使用しない場合)」■ 第 6.11 項「File-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール (Oracle Identity Management Access を使用しない場合)」■ 第 6.12 項「File-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール (Oracle Identity Management Access を使用する場合)」■ 第 6.13 項「Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms のインストール」■ 第 6.14 項「中間層の拡張」■ 第 6.15 項「インストールの一部：中間層をインストールする最初のいくつかの画面」■ 第 6.16 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」

6.1 中間層タイプ

Oracle Application Server の中間層のインストール時に、必要な中間層のタイプを選択します。Oracle Application Server には、次のタイプの中間層があります。

- J2EE and Web Cache
- Portal and Wireless
- Business Intelligence and Forms

中間層は、アプリケーションの配置および実行のためのコンポーネントを提供します。異なるタイプの中間層は、異なるコンポーネントを提供します（[第 6.2 項「中間層のコンポーネント」](#)を参照）。

中間層とインフラストラクチャ

Portal and Wireless および Business Intelligence and Forms の中間層には、OracleAS Infrastructure が必要です。これは、これらの中間層のコンポーネントは OracleAS Metadata Repository のスキーマにアクセスする必要があるためです。

J2EE and Web Cache タイプでは、「Database-Based Farm」オプションまたは「Oracle Identity Management Access」オプション（あるいはその両方）を選択する場合にのみ、一部のインフラストラクチャ・コンポーネントが必要となります。J2EE and Web Cache 中間層のインストール時に、これらのオプションを選択しない場合、OracleAS Infrastructure は必要ありません。詳細は、[第 6.4 項「J2EE and Web Cache 中間層用の構成オプション」](#) を参照してください。

6.2 中間層のコンポーネント

[表 6-2](#) に、各タイプの中間層にインストールされるコンポーネントを示します。

小さい中間層タイプのコンポーネントは、大きい中間層タイプのサブセットです。大きいタイプには、小さいタイプのすべてのコンポーネントが含まれています。

- J2EE and Web Cache タイプは最小タイプです。
- Portal and Wireless タイプには、J2EE and Web Cache タイプに含まれるすべてのコンポーネントに加えて、Portal and Wireless タイプに固有のコンポーネントも含まれています。
- Business Intelligence and Forms タイプには、すべての中間層コンポーネントが含まれます。

表 6-2 中間層のコンポーネント

	J2EE and Web Cache	Portal and Wireless	Business Intelligence and Forms
Oracle HTTP Server	あり	あり	あり
Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)	あり	あり	あり
OracleAS Web Cache	あり	あり	あり
Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control	あり	あり	あり
OracleAS Portal		あり	あり
OracleAS Wireless		あり	あり
OracleAS Personalization			あり
OracleBI Discoverer (OracleBI Discoverer Plus、OracleBI Discoverer Viewer、OracleBI Discoverer Portlet Provider を含む)			あり
OracleAS Reports Services			あり
OracleAS Forms Services			あり

6.3 必要なコンポーネント

アプリケーションは、中間層インスタンス上に配置します。アプリケーションで必要なコンポーネントが提供される中間層タイプを選択します。

アプリケーションで使用するコンポーネントがわかっている場合は、適切な中間層タイプを選択できます。たとえば、Portal の機能が必要な場合は、Portal and Wireless タイプをインストールします。また、Business Intelligence and Forms タイプも、OracleAS Portal コンポーネントを含むため、インストールできます。

必要なタイプがわからない場合でもディスク領域にゆとりがあれば、Business Intelligence and Forms タイプをインストールできます。このタイプを選択すると、すべてのコンポーネントがインストールされます。ディスク領域にゆとりがない場合は、小さい中間層タイプをインストールし、必要に応じて後でより大きなタイプに拡張できます。たとえば、J2EE and Web Cache 中間層を Business Intelligence and Forms 中間層に拡張できます。詳細は、[第 6.14 項「中間層の拡張」](#) を参照してください。

[表 6-3](#) に、いくつかの機能とそれに適したコンポーネントを示します。

表 6-3 機能とコンポーネントの対応付け

必要な機能	このコンポーネントを提供する中間層タイプを選択
J2EE (JavaServer Pages、サーブレットおよび Enterprise JavaBeans アプリケーションの開発用)	Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)
Web サービス	OC4J
UDDI	OracleAS Portal UDDI は、アプリケーションの配置に OC4J を、様々な UDDI データ構造の格納に OracleAS Metadata Repository を、ユーザーおよびグループの管理に Oracle Internet Directory を使用するため、Portal and Wireless (または Business Intelligence and Forms) 中間層タイプが必要です。J2EE and Web Cache インストール・タイプには、OracleAS Metadata Repository も Oracle Internet Directory も必要ありません。
Oracle Ultra Search	OracleAS Portal Oracle Ultra Search インスタンスを作成および構成するには、「 Oracle Application Server 10g Portal 」を選択する必要があることに注意してください。「 Oracle Application Server 10g Portal 」を選択していない場合は、インストール後に Application Server Control を使用して Oracle Ultra Search インスタンスを作成および構成することはできません。
ポータル	OracleAS Portal
Reports and Discoverer プロバイダ (OracleAS Portal と連携可能)	OracleAS Reports Services、OracleBI Discoverer
PL/SQL アプリケーション	Oracle HTTP Server
携帯電話や PDA などのモバイル機器への配信	OracleAS Wireless
Oracle Sensor Edge Server	OracleAS Wireless この中間層コンポーネントを使用すると、Radio Frequency ID (RFID) デバイス、レーザー・ダイオード、温度センサーなどのセンサーからの情報を処理することで、インベントリ管理が可能になります。 Oracle Sensor Edge Server の管理の詳細は、『 Oracle Application Server Wireless 管理者ガイド 』を参照してください。Oracle Sensor Edge Server コンポーネントの開発の詳細は、『 Oracle Application Server Wireless 開発者ガイド 』を参照してください。

表 6-3 機能とコンポーネントの対応付け（続き）

必要な機能	このコンポーネントを提供する中間層タイプを選択
データ・マイニング	OracleAS Personalization
Business Intelligence アプリケーション	OracleAS Reports Services, OracleBI Discoverer
レポート	OracleAS Reports Services
Forms	OracleAS Forms Services

6.4 J2EE and Web Cache 中間層用の構成オプション

J2EE and Web Cache 中間層をインストールする場合、表 6-4 に示すオプションが「構成オプションの選択」画面に表示されます。

これらのオプションの一部では、表に示すように OracleAS Infrastructure の特定のコンポーネントが必要です。必要なインフラストラクチャ・コンポーネントをインストールしてからでなければ、これらのオプションを使用して J2EE and Web Cache 中間層をインストールすることはできません。

表 6-4 J2EE and Web Cache 中間層用の「構成オプションの選択」画面のオプション

オプション	説明および要件
Oracle Application Server 10g Farm Repository	<p>この J2EE and Web Cache インスタンスをファームの一部にするには、このオプションを選択します。ファームおよびクラスタについては、第 6.4.1 項「ファーム」 および第 6.4.2 項「OracleAS Cluster」 を参照してください。</p> <p>このオプションを選択すると、「リポジトリ・タイプの選択」画面が表示されます。この画面で、新しいファイルベース・リポジトリの作成、既存のファイルベース・リポジトリの追加またはデータベースベース・リポジトリの追加を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「新しいファイルベース・リポジトリの作成」を選択した場合、インストールするインスタンスが、リポジトリ・ホストになります。このインスタンスには、リポジトリ情報が格納されます。他のインスタンスでこのインスタンスに格納されたリポジトリ情報を使用するように指定することもできます。通常、1 番目の J2EE and Web Cache インスタンスには、このオプションを選択します（ファイルベース・リポジトリを使用するように選択した場合）。 ■ 「既存のファイルベース・リポジトリに追加」を選択した場合、インストーラによってリポジトリ・ホストとポートの場所が求められます。 <pre>C:> %ORACLE_HOME%bin\dcmctl getRepositoryID File-based Repository ID mymachine2.mydomain.com:7102</pre> <p><code>ORACLE_HOME</code> は、追加するファームに属している任意の既存の Oracle Application Server インスタンスのホーム・ディレクトリを示します。前述の例では、リポジトリ・ホストは <code>mymachine2.mydomain.com</code> で、ポートは 7102 です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「既存のデータベースベース・リポジトリに追加」を選択した場合、インストーラによって OracleAS Metadata Repository の場所が求められます。このオプションには Oracle Internet Directory は必要ないため、OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録する必要はありません。このオプションには、Oracle Identity Management コンポーネントは必要ありません。

表 6-4 J2EE and Web Cache 中間層用の「構成オプションの選択」画面のオプション（続き）

オプション	説明および要件
Oracle Identity Management Access	<p>アプリケーションで OracleAS Single Sign-On、Oracle Internet Directory などの Oracle Identity Management サービスが必要な場合は、このオプションを選択します。</p> <p>このオプションには、事前にインストールされた Oracle Internet Directory、 OracleAS Single Sign-On および OracleAS Metadata Repository コンポーネントが必要です。OracleAS Infrastructure をインストールすると、これらのコンポーネントをインストールできます。</p> <p>さらに、 OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録する必要があります。第 5.9 項 「OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録とパスワードのランダム化」 を参照してください。</p>
Oracle Application Server 10g Web Cache	OracleAS Web Cache をインストールおよび構成するには、このオプションを選択します。先にインストールしておく必要のあるコンポーネントはありません。

6.4.1 ファーム

ファームは、同じメタデータ・リポジトリを共有する 1つ以上のインスタンスの集合です。インスタンスがファームに属している場合は、インスタンスをグループとして管理したり、クラスタ化することもできます。

Oracle Application Server は、リポジトリ情報をデータベース（データベースベース・リポジトリ）またはファイル・システム（ファイルベース・リポジトリ）に格納できます。リポジトリ情報には、ファームに属するインスタンスのリスト、インスタンスがクラスタ化されているかどうかに関する情報、クラスタの構成情報などが含まれます。

ファイルベース・リポジトリの場合、リポジトリ情報は特定のインスタンスを使用して格納されます。このインスタンスを、リポジトリ・ホストと呼びます。

データベースベース・リポジトリの場合、リポジトリ情報は OracleAS Metadata Repository に格納されます。

インストール中またはインストール後に、J2EE and Web Cache インスタンスをファームに属するように設定できます。インストール時に決定できない場合は、インスタンスをスタンダードアロンのインスタンス（ファームには属さない）としてインストールできます。インストール後、必要に応じて、インスタンスをファームに関連付けることができます。また、インスタンスをファームの一部としてインストールし、インストール後に、そのインスタンスをスタンダードアロンのインスタンスに変換することもできます。

ファームの詳細は、『Distributed Configuration Management 管理者ガイド』および『Oracle Application Server 高可用性ガイド』を参照してください。

6.4.2 OracleAS Cluster

ファームに属するインスタンスをクラスタ化することができます。クラスタ内のすべてのインスタンスの構成は同じです。クラスタ内に任意のインスタンスで、クラスタの任意のメンバー宛の要求を処理できます。

インストーラでは、インスタンスはクラスタ化されません。これは、インストール後に実行する必要があります。

OracleAS Cluster の詳細は、『Distributed Configuration Management 管理者ガイド』および『Oracle Application Server 高可用性ガイド』を参照してください。

6.4.3 OracleAS File-Based Repository を使用する J2EE and Web Cache インスタンスのファイアウォールを越えたインストールの要件

OracleAS File-Based Repository 機能を使用する J2EE and Web Cache インスタンスをインストールし、それらのインスタンスがファイアウォールで区切られている場合は、これらのインスタンスがファイアウォールを越えて互いに通信できるようにする必要があります。

この方法でインスタンスをインストールする例に、myJ2EECompany.com アーキテクチャがあります。このアーキテクチャでは、OracleAS Web Cache を Web 層に、OC4J をアプリケーション層にインストールします。これらの層はファイアウォールで区切られています。

myJ2EECompany.com アーキテクチャの詳細は、『Oracle Application Server エンタープライズ・デプロイメント・ガイド』を参照してください。

ファイアウォールを越えてインスタンスが互いに通信できるようにするには、最初のインストール後にファイアウォールのいくつかのポートを開く必要があります。詳細は、『Oracle Application Server エンタープライズ・デプロイメント・ガイド』の第3章「myJ2EECompany.com 用のアプリケーション・インフラストラクチャの構成」を参照してください。

6.5 DCM スキーマのパスワードの確認方法

J2EE and Web Cache 中間層を、「**OracleAS Database-Based Farm Repository**」オプションは選択し、「**Oracle Identity Management Access**」オプションは選択しないでインストールする場合、インストーラによって OracleAS Metadata Repository 内の DCM スキーマのパスワードを入力するよう要求されます。

このパスワードは、ランダムに生成されます。2つの選択肢があります。

- [ランダム・パスワードの変更 \(6-6 ページ\)](#)
- [Oracle Internet Directory を使用したランダム・パスワードの確認 \(6-6 ページ\)](#)

ランダム・パスワードの変更

OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録しなかった場合は、ランダム・パスワードを既知の値に変更する必要があります。これには、SQL*Plus の SQL コマンド alter user を使用します。次の例では、パスワードが「newpassword」に変更されます。

```
C:\> %ORACLE_HOME%\bin\sqlplus "sys/sys_password as sysdba"
SQL> alter user dcm identified by newpassword;
```

パスワードを変更するには、sys ユーザーとしてログインする必要があります。

Oracle Internet Directory を使用したランダム・パスワードの確認

注意： この手順は、Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) のみが実行できます。

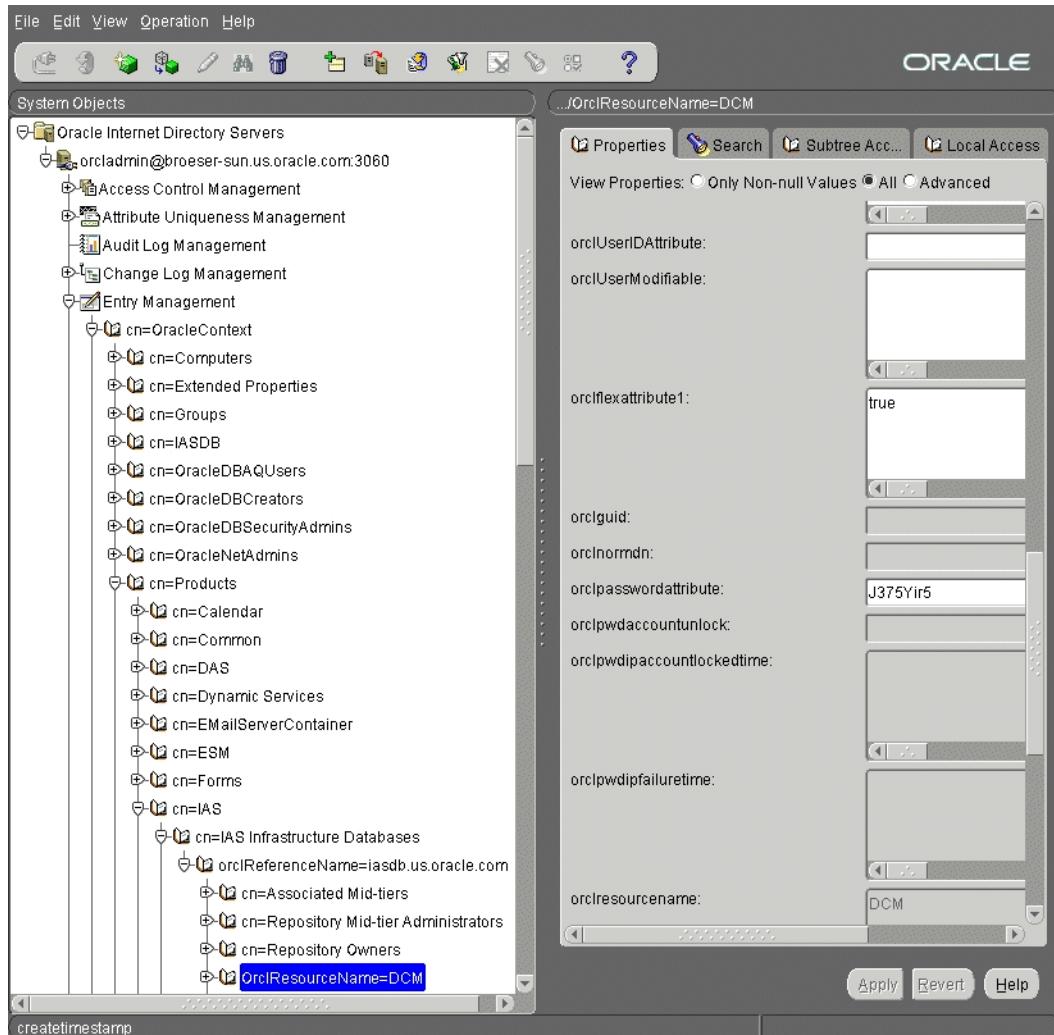
OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録した場合は、Oracle Directory Manager を使用してランダム・パスワードを確認できます。

ただし、Oracle Internet Directory があり、OracleAS Metadata Repository がそれに登録されている場合は、「構成オプションの選択」画面で「**OracleAS Database-Based Farm Repository**」と「**Oracle Identity Management Access**」の両方を選択することをお薦めします。両方を選択すると、インストーラにより DCM パスワードを入力するよう要求されません。

Oracle Internet Directory 内のランダム・パスワードを確認するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Directory Manager を起動します。
「スタート」→「プログラム」→「Oracle - OracleHomeName」→「Integrated Management Tools」→「Oracle Directory Manager」を選択します。
2. Oracle Internet Directory に cn=orcladmin スーパーユーザーとしてログインします。
3. 図 6-1 に示すように、構造を展開します。図に示すように、左側で OrclResourceName=DCM を選択します。DCM スキーマのパスワードが、右側の orclpasswordattribute フィールドに表示されます。

図 6-1 Oracle Internet Directory 内の DCM スキーマのパスワードの表示



6.6 コンポーネントが使用するポート番号の確認方法

インストール時に、特定のコンポーネントが使用するポート番号を確認する必要がある場合があります。たとえば、Oracle Application Server の中間層のインストール時に、インストーラによって Oracle Internet Directory ポートの入力を要求されます。

ポート番号のリストは、次の方法で取得できます。

- Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control を使用します。

Enterprise Manager ホーム・ページ上の「ポート」リンクをクリックします。これにより、使用されているすべてのポートと様々なコンポーネントの推奨されるポート範囲を示すページが表示されます。

- %ORACLE_HOME%\install\portlist.ini ファイルを確認します。ORACLE_HOME は、Oracle Application Server インストールが格納されているディレクトリです。

インストール後にコンポーネントのポート番号を変更しても、portlist.ini ファイルは更新されません。portlist.ini ファイルは、インストール後は更新されません。

6.7 アップグレードした Oracle Internet Directory に中間層をインストールする場合

リリース 9.2.0.x から最新リリースにアップグレードした Oracle Internet Directory に対して中間層をインストールする場合は、『Oracle Application Server アップグレードおよび互換性ガイド』に記載されている Oracle Internet Directory 9.2.0.x のアップグレード手順に従う必要があります。これらの手順は、「Oracle Identity Management サービスのアップグレード」の章に記載されています。

6.8 インフラストラクチャなしでの J2EE and Web Cache のインストール

インフラストラクチャを必要としない J2EE and Web Cache インスタンスをインストールするには、この手順を実行します。

表 6-5 J2EE and Web Cache のインストール手順

画面	操作
1. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第 6.15 項 「インストールの一部：中間層をインストールする最初のいくつかの画面」 を参照してください。</p> <p>注意：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「インストール・タイプの選択」画面で、「J2EE and Web Cache」を選択します。 <p>「次へ」をクリックします。</p>
2. 構成オプションの選択	<p>「Oracle Application Server 10g Web Cache」を選択します。</p> <p>「Identity Management Access」オプションは、Oracle Internet Directory および OracleAS Single Sign-On を必要とするので、このオプションは選択しないでください。</p> <p>「Oracle Application Server 10g Farm Repository」は選択しないでください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
2. ポート構成オプションの指定	<p>コンポーネントにデフォルトのポートを使用する場合は、「自動」を選択します。</p> <p>staticports.ini ファイルをすでに作成していて、デフォルトのポートを使用しない場合は、「手動」を選択し、指定されたフィールドで staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 6-5 J2EE and Web Cache のインストール手順 (続き)

画面	操作
3. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	<p>インスタンス名 : このインスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_（アンダースコア）文字を使用できます。1台のコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第 4.7 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。</p> <p>例 : J2EE</p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」: ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、第 4.8 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。</p> <p>例 : welcome99</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. --	インストールを終了します。 第 6.16 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。

6.9 Database-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール (Oracle Identity Management Access を使用する場合)

Oracle Identity Management Access を使用して、J2EE and Web Cache 中間層を Database-Based Farm Repository にインストールするには、次の手順を実行します。

前提条件 : OracleAS Infrastructure

表 6-6 Database-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール手順 (Oracle Identity Management Access を使用する場合)

画面	操作
1. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第 6.15 項「インストールの一部：中間層をインストールする最初のいくつかの画面」 を参照してください。</p> <p>注意 :</p> <ul style="list-style-type: none"> 「インストール・タイプの選択」画面で、「J2EE and Web Cache」を選択します。
2. 構成オプションの選択	<p>「Oracle Application Server 10g Web Cache」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server 10g Farm Repository」を選択します。</p> <p>「Identity Management Access」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. ポート構成オプションの指定	<p>コンポーネントにデフォルトのポートを使用する場合は、「自動」を選択します。</p> <p>staticports.ini ファイルをすでに作成していて、デフォルトのポートを使用しない場合は、「手動」を選択し、指定されたフィールドで staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. リポジトリ・タイプの選択	<p>「既存の OracleAS Database-Based Farm に追加」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 6-6 Database-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール手順 (Oracle Identity Management Access を使用する場合) (続き)

画面	操作
5. Oracle Internet Directory への登録	<p>ホスト : Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を入力します。</p> <p>ポート : Oracle Internet Directory がリスニングしているポートのポート番号を入力します。ポート番号がわからない場合は、第 6.6 項「コンポーネントが使用するポート番号の確認方法」 を参照してください。</p> <p>Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用 : Oracle Application Server コンポーネントが Oracle Internet Directory への接続に SSL のみを使用するようにする場合は、このオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. OID ログインの指定	<p>ユーザー名 : Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名を入力します。Oracle Internet Directory の必要なグループに属しているユーザーとしてログインする必要があります。必要なグループは、インストールするコンポーネントによって異なります。詳細は、第 7.3 項「コンポーネントの構成または削除に必要なグループ」 を参照してください。</p> <p>パスワード : ユーザー名のパスワードを入力します。</p> <p>レルム : ユーザー名の妥当性を検証するレルムを入力します。このフィールドは、Oracle Internet Directory に複数のレルムがある場合にのみ表示されます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. データベースの管理対象クラスタ用 Metadata Repository の選択	<p>リストから「OracleAS Metadata Repository」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
8. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	<p>インスタンス名 : このインスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_（アンダースコア）文字を使用できます。1台のコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第 4.7 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。</p> <p>例:j2ee</p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」: ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、第 4.8 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。</p> <p>例:welcome99</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
9. --	<p>インストールを終了します。第 6.16 項「インストールの一部: インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。</p>

6.10 Database-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール (Oracle Identity Management Access を使用しない場合)

Oracle Identity Management Access を使用しないで、J2EE and Web Cache 中間層を Database-Based Farm Repository にインストールするには、次の手順を実行します。

前提条件 : OracleAS Metadata Repository

表 6-7 Database-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール手順 (Oracle Identity Management Access を使用しない場合)

画面	操作
1. --	インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、 第 6.15 項「インストールの一部：中間層をインストールする最初のいくつかの画面」 を参照してください。 注意： <ul style="list-style-type: none">■ 「インストール・タイプの選択」画面で、「J2EE and Web Cache」を選択します。
2. 構成オプションの選択	「 Oracle Application Server 10g Web Cache 」を選択します。 「 OracleAS Farm Repository 」を選択します。 「 Identity Management Access 」を選択解除します。 「次へ」をクリックします。
3. ポート構成オプションの指定	コンポーネントにデフォルトのポートを使用する場合は、「 自動 」を選択します。 staticports.ini ファイルをすでに作成していて、デフォルトのポートを使用しない場合は、「 手動 」を選択し、指定されたフィールドで staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。 「次へ」をクリックします。
4. リポジトリ・タイプの選択	「 既存の OracleAS Database-Based Farm に追加 」を選択します。 「次へ」をクリックします。
5. データベースの管理対象クラスタ用 Metadata Repository の指定	パスワード : DCM スキーマのパスワードを入力します。このスキーマの最初のパスワードは、dcm です。詳細は、 第 6.5 項「DCM スキーマのパスワードの確認方法」 を参照してください。 ホスト名とポート : データベースが稼働しているコンピュータの名前を入力し、そのコンピュータによってリスニングが行われているポートのポート番号を入力します。書式には、host.domain:port を使用します。例 : myhost.mydomain.com:1521 サービス名 : データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。 例 : orcl.mydomain.com 「次へ」をクリックします。
6. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	インスタンス名 : このインスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_（アンダースコア）文字を使用できます。1台のコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、 第 4.7 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。 例 : j2ee 「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」 : ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、 第 4.8 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。 例 : welcome99 「次へ」をクリックします。
7. --	インストールを終了します。 第 6.16 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。

6.11 File-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール (Oracle Identity Management Access を使用しない場合)

Oracle Identity Management Access を使用しないで、J2EE and Web Cache 中間層を File-Based Farm Repository にインストールするには、次の手順を実行します。

表 6-8 File-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール手順 (Oracle Identity Management Access を使用しない場合)

操作	画面
1. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第6.15項「インストールの一部：中間層をインストールする最初のいくつかの画面」を参照してください。</p> <p>注意：</p> <ul style="list-style-type: none"> 「インストール・タイプの選択」画面で、「J2EE and Web Cache」を選択します。 <p>「次へ」をクリックします。</p>
2. 構成オプションの選択	<p>「Oracle Application Server 10g Web Cache」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server 10g Farm Repository」を選択します。</p> <p>「Identity Management Access」オプションは、Oracle Internet Directory および OracleAS Single Sign-On を必要とするので、このオプションは選択しないでください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. ポート構成オプションの指定	<p>コンポーネントにデフォルトのポートを使用する場合は、「自動」を選択します。</p> <p>staticports.ini ファイルをすでに作成していて、デフォルトのポートを使用しない場合は、「手動」を選択し、指定されたフィールドで staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. リポジトリ・タイプの選択	<p>新しいファイルベース・ファームを起動する場合は、「このインスタンスに新規 Oracle Application Server File-based Farm を作成」を選択します。</p> <p>このインスタンスを既存のファイルベース・ファームに追加する場合は、「既存の Oracle Application Server File-based Farm に追加」を選択します。インストーラによって、既存のファームの場所を指示するように求められます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. File-Based Farm Repository の指定	<p>この画面で、既存の File-Based Farm Repository の場所を入力します。この画面は、前の画面で「既存の OracleAS File-Based Farm に追加」を選択した場合のみ表示されます。</p> <p>リポジトリ・ホスト：既存のファームがホストされているコンピュータの名前を入力します。</p> <p>リポジトリ・ポート：リポジトリのポート番号を入力します。</p> <pre>C:> %ORACLE_HOME%\dcm\bin\dcmctl getRepositoryID File-based Repository ID mymachine2.mydomain.com:7102</pre> <p>ORACLE_HOME は、追加するファームに属している任意の既存の Oracle Application Server インスタンスのホーム・ディレクトリを示します。前述の例では、リポジトリ・ホストは mymachine2.mydomain.com で、ポートは 7102 です。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 6-8 File-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール手順 (Oracle Identity Management Access を使用しない場合) (続き)

画面	操作
6. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	<p>インスタンス名 : このインスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および _ (アンダースコア) 文字を使用できます。1台のコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第 4.7 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。</p> <p>例: J2EE</p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」: ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、第 4.8 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。</p> <p>例: welcome99</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. --	<p>インストールを終了します。第 6.16 項「インストールの一部: インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。</p>

6.12 File-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール (Oracle Identity Management Access を使用する場合)

Oracle Identity Management Access を使用して、J2EE and Web Cache 中間層を File-Based Farm Repository にインストールするには、次の手順を実行します。

前提条件: Oracle Internet Directory

表 6-9 File-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール手順 (Oracle Identity Management Access を使用する場合)

画面	操作
1. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第 6.15 項「インストールの一部: 中間層をインストールする最初のいくつかの画面」 を参照してください。</p> <p>注意:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「インストール・タイプの選択」画面で、「J2EE and Web Cache」を選択します。 <p>「次へ」をクリックします。</p>
2. 構成オプションの選択	<p>「Oracle Application Server 10g Web Cache」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server 10g Farm Repository」を選択します。</p> <p>「Identity Management Access」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. ポート構成オプションの指定	<p>コンポーネントにデフォルトのポートを使用する場合は、「自動」を選択します。</p> <p>staticports.ini ファイルをすでに作成していて、デフォルトのポートを使用しない場合は、「手動」を選択し、指定されたフィールドで staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. リポジトリ・タイプの選択	<p>新しいファイルベース・ファームを起動する場合は、「このインスタンスに新規 Oracle Application Server File-based Farm を作成」を選択します。</p> <p>このインスタンスを既存のファイルベース・ファームに追加する場合は、「既存の Oracle Application Server File-based Farm に追加」を選択します。インストーラによって、既存のファームの場所を指示するように求められます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 6-9 File-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール手順（Oracle Identity Management Access を使用する場合）（続き）

画面	操作
5. File-Based Farm Repository の指定	<p>この画面で、既存の File-Based Farm Repository の場所を入力します。この画面は、前の画面で「既存の Oracle Application Server File-based Farm に追加」を選択した場合のみ表示されます。</p> <p>リポジトリ・ホスト：既存のファームがホストされているコンピュータの名前を入力します。</p> <p>リポジトリ・ポート：リポジトリのポート番号を入力します。</p> <p>dcmctl getRepositoryID コマンドを実行すると、リポジトリ・ホストおよびポートを確認できます。</p> <pre>C:\> %ORACLE_HOME%\dcm\bin\dcmctl getRepositoryID File-based Repository ID mymachine2.mydomain.com:7102</pre> <p><i>ORACLE_HOME</i> は、追加するファームに属している任意の既存の Oracle Application Server インスタンスのホーム・ディレクトリを示します。前述の例では、リポジトリ・ホストは <i>mymachine2.mydomain.com</i> で、ポートは 7102 です。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. Oracle Internet Directory への登録	<p>ホスト：Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を入力します。</p> <p>ポート：Oracle Internet Directory がリスニングしているポートのポート番号を入力します。ポート番号がわからない場合は、第 6.6 項「コンポーネントが使用するポート番号の確認方法」 を参照してください。</p> <p>Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用：Oracle Application Server コンポーネントが Oracle Internet Directory への接続に SSL のみを使用するようにする場合は、このオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. Oracle Internet Directory	<p>ユーザー名：Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名を入力します。Oracle Internet Directory の必要なグループに属しているユーザーとしてログインする必要があります。必要なグループは、インストールするコンポーネントによって異なります。詳細は、第 7.3 項「コンポーネントの構成または削除に必要なグループ」 を参照してください。</p> <p>パスワード：ユーザー名のパスワードを入力します。</p> <p>レルム：ユーザー名の妥当性を検証するレルムを入力します。このフィールドは、Oracle Internet Directory に複数のレルムがある場合にのみ表示されます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
8. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	<p>インスタンス名：このインスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_（アンダースコア）文字を使用できます。1台のコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第 4.7 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。</p> <p>例：J2EE</p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」：ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、第 4.8 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。</p> <p>例：welcome99</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
9. --	<p>インストールを終了します。第 6.16 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。</p>

6.13 Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms のインストール

Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms 中間層をインストールするには、この手順を実行します。

前提条件 : OracleAS Infrastructure

Oracle Reports セキュリティを構成するには、OracleAS Portal をインストールしてセキュリティ情報を OracleAS Portal リポジトリに格納する必要があります。OracleAS Reports Services セキュリティ情報を格納する OracleAS Portal の構成については、次の OTN サイトにある Securing Oracle Reports のホワイト・ペーパーを参照してください。

<http://www.oracle.com/technology/products/reports/htdocs/getstart/whitepapers/securing9i.pdf>

表 6-10 Portal and Wireless と Business Intelligence and Forms のインストール手順

画面	操作
1. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第 6.15 項「インストールの一部：中間層をインストールする最初のいくつかの画面」を参照してください。</p> <p>注意 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「インストール・タイプの選択」画面で、「Portal and Wireless」または「Business Intelligence and Forms」を選択します。
2. 構成オプションの選択	<p>使用するコンポーネントを選択し、「次へ」をクリックします。すべてのコンポーネントを選択する必要はありません。</p> <p>Portal and Wireless のオプションを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Application Server 10g Portal ■ Oracle Application Server 10g Wireless <p>Business Intelligence and Forms のオプションを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Application Server 10g Portal ■ Oracle Application Server 10g Wireless ■ Oracle Business Intelligence Discoverer ■ Oracle Application Server 10g Personalization ■ Oracle Application Server 10g Reports Services ■ Oracle Application Server 10g Forms Services
3. ポート構成オプションの指定	<p>コンポーネントにデフォルトのポートを使用する場合は、「自動」を選択します。</p> <p>staticports.ini ファイルをすでに作成していて、デフォルトのポートを使用しない場合は、「手動」を選択し、指定されたフィールドで staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. Oracle Internet Directoryへの登録	<p>ホスト : Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を入力します。</p> <p>ポート : Oracle Internet Directory がリスニングしているポートのポート番号を入力します。ポート番号がわからない場合は、第 6.6 項「コンポーネントが使用するポート番号の確認方法」を参照してください。</p> <p>Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用 : Oracle Application Server コンポーネントが Oracle Internet Directory への接続に SSL のみを使用するようにする場合は、このオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 6-10 Portal and Wireless と Business Intelligence and Forms のインストール手順（続き）

画面	操作
5. Oracle Internet Directory に対するログインの指定	<p>ユーザー名 : Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名を入力します。Oracle Internet Directory の必要なグループに属しているユーザーとしてログインする必要があります。必要なグループは、インストールするコンポーネントによって異なります。詳細は、第 7.3 項「コンポーネントの構成または削除に必要なグループ」を参照してください。</p> <p>パスワード : ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>レルム : ユーザーの妥当性を検証するレルムを入力します。このフィールドは、Oracle Internet Directory に複数のレルムがある場合にのみ表示されます。Oracle Internet Directory にレルムが 1 つのみ含まれる場合は、インストーラによってそのレルムに対してユーザーの妥当性が検証されます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. Oracle Application Server 10g Metadata Repository の選択	<p>データベース接続文字列 : この中間層インスタンスで使用する OracleAS Metadata Repository を選択します。インストーラでは、このインスタンスを選択された OracleAS Metadata Repository に登録します。「次へ」をクリックします。</p>
7. 送信メール・サーバー情報の指定	<p>この画面は、「構成オプションの選択」画面で「Oracle Application Server 10g Reports Services」または「Oracle Business Intelligence Discoverer」を選択した場合にのみ表示されます。</p> <p>OracleAS Reports Services で使用する送信メール（SMTP）サーバーの名前を入力します。ここで入力せずに後で構成することもできます。「次へ」をクリックします。</p>
8. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	<p>インスタンス名 : このインスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_（アンダースコア）文字を使用できます。1 台のコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第 4.7 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」を参照してください。</p> <p>例 1: PortalWireless 例 2: BI_Forms</p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」 : ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、第 4.8 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」を参照してください。</p> <p>例: welcome99 「次へ」をクリックします。</p>
9. --	<p>インストールを終了します。第 6.16 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」を参照してください。</p>

6.14 中間層の拡張

中間層をインストールして使用した後に、より大きな中間層のコンポーネントが必要になる場合があります。たとえば、J2EE and Web Cache 中間層をインストールしてから OracleAS Portal が必要になる場合などです。

この場合は、J2EE and Web Cache インスタンスと同じ Oracle ホームに Portal and Wireless タイプ（または Business Intelligence and Forms タイプ）をインストールできます。インストーラにより、既存のコンポーネントの構成を変更することなく、より大きい中間層に含まれる追加のコンポーネントがインストールされ、構成されます。

中間層は次の方法で拡張できます。

- J2EE and Web Cache から Portal and Wireless
- J2EE and Web Cache から Business Intelligence and Forms
- Portal and Wireless から Business Intelligence and Forms

中間層の拡張は、次の点を除けば、新しい中間層のインストールと同じです。

- 「ファイルの場所の指定」画面で、拡張する中間層の Oracle ホーム・ディレクトリを入力します。
- 拡張する中間層の `ias_admin` ユーザーのパスワードが必要です。
インストーラにより、インスタンス名と `ias_admin` パスワードの指定画面ではなく、「Specify `ias_admin` Password」画面が表示されます。この画面では、`ias_admin` ユーザーの既存のパスワードを入力します。
- インスタンス名は変わりません。

注意： OracleAS Web Cache は、J2EE and Web Cache インスタンスを拡張する前に構成する必要があります。インストール時に OracleAS Web Cache を構成しなかった場合、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。ここでは、インストール後に追加コンポーネントを構成する方法について説明しています。

Portal and Wireless と Business Intelligence and Forms 中間層には、OracleAS Infrastructure が必要です。

中間層を縮小することはできません。つまり、大きい中間層から小さい中間層に移行することはできません。

インフラストラクチャは拡張できません。

手順：中間層の拡張

中間層を拡張するには、次の手順を実行します。

表 6-11 中間層の拡張手順

画面	操作
1. --	<p>拡張する中間層に関連付けられているすべてのプロセスを停止します。プロセスの停止方法については、Oracle Application Server 管理者ガイドを参照してください。</p> <p>また、拡張する前に Application Server Control および DCM は必ず停止します。</p> <p>Application Server Control を停止するには、次のコマンドを実行します。</p> <pre>C:> %ORACLE_HOME%\bin\emctl stop iasconsole</pre> <p>OracleAS Web Cache（構成している場合）を停止するには、次のコマンドを実行します。</p> <pre>C:> %ORACLE_HOME%\opmn\bin\opmnctl stopproc ias-component=WebCache</pre> <p>DCM が停止していることを確認するには、次のコマンドを実行します。</p> <pre>C:> %ORACLE_HOME%\dcm\bin\dcmctl shutdown</pre>
2. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第 6.15 項「インストールの一部：中間層をインストールする最初のいくつかの画面」を参照してください。</p> <p>注意：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「ファイルの場所の指定」画面で、拡張する中間層の Oracle ホーム・ディレクトリを入力します。 ■ 「インストール・タイプの選択」画面で、「Portal and Wireless」または「Business Intelligence and Forms」を選択します。

表 6-11 中間層の拡張手順（続き）

画面	操作
3. 構成オプションの選択	<p>必要なコンポーネントを選択し、「次へ」をクリックします。</p> <p>Portal and Wireless のオプションを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ Oracle Application Server 10g Portal ▪ Oracle Application Server 10g Wireless <p>Business Intelligence and Forms のオプションを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ Oracle Application Server 10g Portal ▪ Oracle Application Server 10g Wireless ▪ Oracle Business Intelligence Discoverer ▪ Oracle Application Server 10g Personalization ▪ Oracle Application Server 10g Reports Services ▪ Oracle Application Server 10g Forms Services
4. ポート構成オプションの指定	<p>コンポーネントにデフォルトのポートを使用する場合は、「自動」を選択します。</p> <p>staticports.ini ファイルをすでに作成していて、デフォルトのポートを使用しない場合は、「手動」を選択し、指定されたフィールドで staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. Oracle Internet Directory への登録	<p>ホスト : Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を入力します。</p> <p>ポート : Oracle Internet Directory がリスニングしているポートのポート番号を入力します。ポート番号がわからない場合は、第 6.6 項「コンポーネントが使用するポート番号の確認方法」を参照してください。</p> <p>Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用 : Oracle Application Server コンポーネントが Oracle Internet Directory への接続に SSL のみを使用するようにする場合は、このオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. OID ログインの指定	<p>ユーザー名 : Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名を入力します。</p> <p>Oracle Internet Directory の必要なグループに属しているユーザーとしてログインする必要があります。必要なグループは、インストールするコンポーネントによって異なります。詳細は、第 7.3 項「コンポーネントの構成または削除に必要なグループ」を参照してください。</p> <p>パスワード : ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>レルム : ユーザーの妥当性を検証するレルムを入力します。このフィールドは、Oracle Internet Directory に複数のレルムがある場合にのみ表示されます。Oracle Internet Directory にレルムが 1 つのみ含まれる場合は、インストーラによってそのレルムに対してユーザーの妥当性が検証されます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
8. 送信メール・サーバー情報の指定	<p>この画面は、「構成オプションの選択」画面で「Oracle Application Server 10g Reports Services」または「Oracle Business Intelligence Discoverer」を選択した場合にのみ表示されます。</p> <p>OracleAS Reports Services で使用する送信メール（SMTP）サーバーの名前を入力します。ここで入力せずに後で構成することもできます。「次へ」をクリックします。</p>
7. Oracle Application Server 10g Metadata Repository の選択	<p>データベース接続文字列 : この中間層インスタンスで使用する OracleAS Metadata Repository を選択します。インストーラでは、このインスタンスを選択された OracleAS Metadata Repository に登録します。「次へ」をクリックします。</p>
9. ias_admin パスワードの指定	<p>ias_admin パスワード : 拡張する中間層の ias_admin ユーザーのパスワードを入力します。「次へ」をクリックします。</p>
10. --	<p>インストールを終了します。詳細は、第 6.16 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」を参照してください。</p>

拡張を実行する際に DCM を停止しなかった場合、中間層の拡張後に OracleAS Web Cache は使用できなくなります。この場合は、次の手順を実行します。

1. %ORACLE_HOME%\opmn\conf\opmn.xml ファイルで、OracleAS Web Cache のステータスを「enabled」に変更して有効にします。

```
<ias-component id="WebCache" status="enabled">
```

2. OPMN を再ロードします。

```
C:\> %ORACLE_HOME%\opmn\bin\opmnctl reload
```

6.15 インストールの一部：中間層をインストールする最初のいくつかの画面

インストーラの最初のいくつかの画面はすべてのインストールで同じであるため、ここで説明します。この章のほとんどのインストール手順では、この項を開始点として参照しています。

表 6-12 中間層のインストールの最初のいくつかの画面

画面	操作
1. --	インストーラを起動します。詳細は、 第 4.13 項「Oracle Universal Installer の起動」 を参照してください。
2. ようこそ	「次へ」をクリックします。
3. ファイルの場所の指定	<p>名前: この Oracle ホームを識別する名前を入力します。Oracle ホームの名前には英数字およびアンダースコア (_) のみを使用でき、最大 128 文字です。 例: OH_J2EE</p> <p>パス: インストール先のディレクトリへのフルパスを入力します。これは Oracle ホームです。Oracle ホーム・ディレクトリが存在しない場合は、インストーラによって作成されます。必要に応じて、事前にディレクトリを作成することもできます。 (インストーラを実行している) ローカル・コンピュータのディレクトリを指定する必要があります。別のコンピュータに割り当てられているドライブには、インストールできません。 例: C:\oracle\OraJ2EE</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. インストールする製品の選択	<p>「Oracle Application Server 10g」を選択して、中間層をインストールします。</p> <p>追加の言語をインストールする必要がある場合は、「製品の言語」をクリックします。 詳細は、第 4.6 項「追加の言語のインストール」 を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. インストール・タイプの選択	<p>この画面に表示されるオプションは、「インストールする製品の選択」画面で選択したものによって異なります。</p> <p>「Oracle Application Server 10g」(Oracle Application Server 中間層) を選択すると、次のオプションが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ J2EE and Web Cache ■ Portal and Wireless ■ Business Intelligence and Forms <p>「次へ」をクリックします。</p> <p>環境変数 TEMP が設定されていないことを示すエラー・メッセージが表示された場合は、デフォルトの一時ディレクトリの領域が十分ではないことを示しています。異なるディレクトリを指すように環境変数 TEMP を設定するか、またはデフォルトの一時ディレクトリに十分な領域を確保する必要があります。</p> <p>環境変数 TEMP の詳細は、第 3.6.5 項「TEMP」 を参照してください。</p>

表 6-12 中間層のインストールの最初のいくつかの画面（続き）

画面	操作
6. インストール前の要件の確認	表示されたすべての要件を満たしていることを確認し、「次へ」をクリックします。 認証

6.16 インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面

インストーラの最後のいくつかの画面はすべてのインストールで同じであるため、この項で説明します。この章のほとんどのインストール手順では、この項を終了点として参照しています。

表 6-13 インストールの最後のいくつかの画面

画面	操作
1. サマリー	選択した内容を確認し、「インストール」をクリックします。
2. インストール進捗	この画面には、インストールの進捗状況が表示されます。
3. Configuration Assistant	この画面には、Configuration Assistant の進捗状況が表示されます。Configuration Assistant によって、コンポーネントが構成されます。
4. インストールの終了	「終了」をクリックして、インストーラを終了します。

Oracle Application Server のインストール 権限のための Oracle Internet Directory の構成

特定の中間層またはインフラストラクチャ・コンポーネントをインストールするときには、インストーラにより、Oracle Internet Directory ヘログインするためのユーザー名を入力するよう求められます。インストールを正常に行うためには、このユーザーは Oracle Internet Directory 内の特定のグループに属している必要があります。必要なグループは、インストールするものによって異なります。

ユーザーをグループに入れることにより、他のユーザーがインストールを実行できるようになります。インストールを実行するために、ユーザーは cn=orcladmin スーパーユーザーとしてログインする必要はありません。

この章の内容は次のとおりです。

- [第 7.1 項 「Oracle Internet Directory のデフォルト・ユーザー」](#)
- [第 7.2 項 「Oracle Internet Directory のグループ」](#)
- [第 7.3 項 「コンポーネントの構成または削除に必要なグループ」](#)
- [第 7.4 項 「中間層のインストールに必要なグループ」](#)
- [第 7.5 項 「追加のメタデータ・リポジトリのインストールに必要なグループ」](#)
- [第 7.6 項 「異なるユーザーによるインストールの例」](#)
- [第 7.7 項 「Oracle Internet Directory でのユーザーの作成方法」](#)
- [第 7.8 項 「Oracle Internet Directory 内のグループへのユーザーの追加方法」](#)
- [第 7.9 項 「新しい Oracle Internet Directory の内容」](#)
- [第 7.10 項 「「Oracle Internet Directory に対するログインの指定」画面で入力するユーザー名とレルム」](#)

7.1 Oracle Internet Directory のデフォルト・ユーザー

Oracle Internet Directory をインストールすると、2人のユーザー、`cn=orcladmin` と `orcladmin` が作成されます。

- `cn=orcladmin` は、Oracle Internet Directory のスーパーユーザーです。このユーザーは、Oracle Internet Directory 内のすべてのタスクを実行するすべての権限を持ちます。

`cn=orcladmin` の初期のパスワードは、Oracle Application Server インスタンスの `ias_admin` ユーザーのパスワードと同じです。インストール時にこのパスワードを指定しています。

`cn=orcladmin` は、同じインストール・セッションで作成されたオブジェクトの所有者です。たとえば、Oracle Internet Directory、OracleAS Metadata Repository および Oracle Delegated Administration Services をインストールすると、`cn=orcladmin` ユーザーが作成され、リポジトリ所有者グループおよび DAS コンポーネント所有者グループのメンバーになります。`cn=orcladmin` は、IAS Admins グループのメンバーにもなります。

Oracle Delegated Administration Services を使用してスーパーユーザー (`cn=orcladmin`) として Oracle Internet Directory にログインすることはできません。`cn=orcladmin` としてログインするには、Oracle Directory Manager を使用する必要があります。

- Oracle Internet Directory のインストール時に、`orcladmin` ユーザーも作成されます。このユーザーの DN は、`cn=orcladmin, cn=users, <default realm DN>` です。

`orcladmin` の初期のパスワードは、Oracle Application Server インスタンスの `ias_admin` ユーザーのパスワードと同じです。インストール時にこのパスワードを指定しています。

他の Oracle Internet Directory ユーザーを管理するために、Oracle Delegated Administration Services を使用して `orcladmin` として Oracle Internet Directory にログインできます。これが可能なのは、`orcladmin` が有効な OracleAS Single Sign-On ユーザーであるためです。

`cn=orcladmin` および `orcladmin` ユーザーの詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

7.2 Oracle Internet Directory のグループ

Oracle Internet Directory のグループは、次のカテゴリに分類できます。

- 第 7.2.1 項「グローバル・グループ」
- 第 7.2.2 項「各メタデータ・リポジトリのグループ」
- 第 7.2.3 項「各コンポーネントのグループ」

7.2.1 グローバル・グループ

表 7-1 は、すべての Oracle Application Server インスタンスおよび Oracle Internet Directory に登録されたコンポーネントに影響するグループについて説明しています。

表 7-1 グローバル・グループ

グループ	説明
IAS Admins	IAS Admins には、次の権限があります。
DN: <code>cn=IASAdmins, cn=groups, cn=OracleContext</code>	<ul style="list-style-type: none"> ■ 新しいメタデータ・リポジトリのインストールおよび登録。IAS Admins には、Oracle Internet Directory にすでに登録されている既存のリポジトリを管理する権限はありません。 ■ 中間層のインストール。
信頼できるアプリケーションの管理者 DN: <code>cn=Trusted Application Admins, cn=groups, cn=OracleContext</code>	Oracle Identity Management、OracleAS Portal または OracleAS Wireless コンポーネントをインストールするには、複数のグループに属する必要があり、そのうちの1つが信頼できるアプリケーションの管理者グループです。表 7-4 に、各コンポーネントに必要なグループを示しています。

表 7-1 グローバル・グループ（続き）

グループ	説明
IAS およびユーザー管理アプリケーションの管理者	OracleAS Portal または OracleAS Wireless をインストールするには、複数のグループに属する必要があり、そのうちの 1 つが、IAS およびユーザー管理アプリケーションの管理者グループです。表 7-4 は、各コンポーネントに必要なグループを示しています。
DN: cn=IAS & User Mgmt Application Admins, cn=groups, cn=OracleContext	

7.2.2 各メタデータ・リポジトリのグループ

表 7-2 に示すように、Oracle Internet Directory に登録された各メタデータ・リポジトリにはそれぞれ独自のグループがあります。これにより、各リポジトリに異なる所有者およびユーザーを割り当てることができます。

表 7-2 Oracle Internet Directory に登録された各メタデータ・リポジトリに関連付けられたグループ

グループ	説明
リポジトリ所有者	メタデータ・リポジトリをインストールしたユーザーは、このグループのメンバーになります。
DN: cn=Repository Owners, orclReferenceName=dbName, cn=IAS Infrastructure Databases, cn=IAS, cn=Products, cn=OracleContext	リポジトリ所有者には、次の権限があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ このグループに対するユーザーの追加および削除。 ■ このリポジトリの登録解除。 ■ このリポジトリの中間層の管理者グループに対するユーザーの追加および削除。 ■ このリポジトリに対する中間層インスタンスの追加および削除。 ■ 中間層の管理者グループのすべての権限。
中間層の管理者	中間層の管理者には次の権限があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ このリポジトリの関連の中間層グループからの中間層インスタンスの追加および削除。これは、中間層をインストールするために、または別のリポジトリを使用するように中間層コンポーネントを構成するために必要です。 ■ リポジトリ・データベース・オブジェクトのメタデータへのアクセス。
関連の中間層	このグループのメンバーは、このメタデータ・リポジトリに関連付けられた中間層インスタンスです。中間層インスタンスは、インストール中にこのグループに追加されます。このグループにインスタンスを手動で追加する必要はありません。 <p>このグループのメンバーには、次の権限があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ リポジトリ・データベース・オブジェクトとそのスキーマのメタデータへのアクセス。

7.2.3 各コンポーネントのグループ

Oracle Application Server コンポーネントのグループも、Oracle Internet Directory にあります。各コンポーネントには、表 7-3 に示すように、コンポーネント所有者グループと関連の中間層グループがあります。

表 7-3 各コンポーネントに関連付けられたグループ

グループ	説明
コンポーネント所有者	コンポーネント所有者には、次の権限があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ このコンポーネントの所有者の追加および削除。 ■ このコンポーネントの登録解除。 ■ 追加の中間層とこのコンポーネントの関連付け。
DN: cn=Component Owners, orclApplicationCommonName=componentCommonName, cn=componentName, cn=Products, cn=OracleContext	

表 7-3 各コンポーネントに関連付けられたグループ（続き）

グループ	説明
関連の中間層 DN: cn=Associated Mid-tiers, orclApplicationCommonName=componentCo mmonName, cn=componentName, cn=Products, cn=OracleContext	このグループのメンバーは、中間層インスタンスです。

図 7-6 に、Oracle Delegated Administration Services コンポーネント用のこれらのグループを示します。

7.3 コンポーネントの構成または削除に必要なグループ

表 7-4 に、Oracle Application Server コンポーネントを構成または削除するためにユーザーが属する必要のあるグループを示します。

コンポーネントをインストールおよび構成するユーザーが、そのコンポーネントの所有者になります。

表 7-4 コンポーネントの構成に必要な Oracle Internet Directory グループ

構成するコンポーネント	ユーザーがメンバーである必要があるグループのリスト
インフラストラクチャ・コンポーネント	
OracleAS Metadata Repository	Oracle Internet Directory に対して OracleAS Metadata Repository を登録するには、IAS Admins グループに属しているユーザーとして Oracle Internet Directory にログインする必要があります。
Oracle Internet Directory	OracleAS Cluster (Identity Management) 環境では、最初のインスタンスの後に、後続の Oracle Internet Directory インスタンスをインストールするには、ユーザーは Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) である必要があります。
Oracle Delegated Administration Services	<ul style="list-style-type: none"> ■ 信頼できるアプリケーションの管理者 ■ IAS Admins ■ OracleAS Single Sign-On が使用するメタデータ・リポジトリ用の中間層の管理者グループ <p>OracleAS Single Sign-On で使用されるメタデータ・リポジトリが不明な場合は、7-6 ページの「OracleAS Single Sign-On が使用するメタデータ・リポジトリを確認する方法」を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Delegated Administration Services コンポーネントのコンポーネント所有者 <p>注意: これは、Oracle Delegated Administration Services の複数のインスタンスをインストールする場合にのみ必要です。2 番目およびそれ以降のインスタンスをインストールするときには、コンポーネント所有者グループに属す必要があります。最初の Oracle Delegated Administration Services インスタンスをインストールするときには、このグループのメンバーである必要はありません。</p> <p>グループへのユーザーの追加方法の手順は、第 7.8.1 項「Oracle Directory Manager を使用したグループへのユーザーの追加」を参照してください。</p>
OracleAS Single Sign-On	OracleAS Single Sign-On をスーパーユーザー (cn=orcladmin) としてインストールする必要があります。

表 7-4 コンポーネントの構成に必要な Oracle Internet Directory グループ（続き）

構成するコンポーネント	ユーザーがメンバーである必要があるグループのリスト
Oracle Directory Integration and Provisioning	<ul style="list-style-type: none"> ■ iAS Admins ■ 信頼できるアプリケーションの管理者 ■ 「cn=dipadmingrp,cn=odi,cn=oracle internet directory」で識別される Oracle Directory Integration and Provisioning の管理者 ■ OracleAS Single Sign-On が使用するメタデータ・リポジトリの中間層の管理者グループ OracleAS Single Sign-On で使用されるメタデータ・リポジトリが不明な場合は、7-6 ページの「OracleAS Single Sign-On が使用するメタデータ・リポジトリを確認する方法」を参照してください。
既存の OracleAS Metadata Repository に対して構成された OCA	<ul style="list-style-type: none"> ■ 信頼できるアプリケーションの管理者 ■ iAS Admins ■ 既存のメタデータ・リポジトリのリポジトリ所有者グループ
新しい OracleAS Metadata Repository に対して構成された OCA（つまり、同じインストール・セッションで OCA および OracleAS Metadata Repository をインストールし構成する）	<ul style="list-style-type: none"> ■ 信頼できるアプリケーションの管理者 ■ iAS Admins
J2EE and Web Cache 中間層の機能	
Oracle Identity Management Access のみ	<ul style="list-style-type: none"> ■ iAS Admins
Oracle Identity Management Access および Farm Repository（データベースベースまたはファイルベース）	<ul style="list-style-type: none"> ■ iAS Admins ■ メタデータ・リポジトリの中間層の管理者またはリポジトリ所有者グループ
Portal and Wireless および Business Intelligence and Forms 中間層コンポーネント	
OracleAS Portal	<ul style="list-style-type: none"> ■ 信頼できるアプリケーションの管理者 ■ IAS およびユーザー管理アプリケーションの管理者 ■ iAS Admins ■ メタデータ・リポジトリの中間層の管理者またはリポジトリ所有者グループ ■ OracleAS Portal コンポーネントのコンポーネント所有者グループ 注意：このグループは、追加の OracleAS Portal インスタンスをインストールする場合にのみ適用できます。最初の OracleAS Portal のインストールには適用されません。それ以降の OracleAS Portal のインストールの場合は、最初のインストールを実行した Oracle Internet Directory ユーザーと同じユーザーとしてインストールを実行できます。OracleAS Portal を別の Oracle Internet Directory ユーザーがインストールできるようにする場合は、そのユーザーを Portal アプリケーション・エンティティのコンポーネント所有者グループに追加する必要があります。

表 7-4 コンポーネントの構成に必要な Oracle Internet Directory グループ（続き）

構成するコンポーネント	ユーザーがメンバーである必要があるグループのリスト
OracleAS Wireless	<ul style="list-style-type: none"> ■ IAS およびユーザー管理アプリケーションの管理者 ■ iAS Admins ■ メタデータ・リポジトリの中間層の管理者またはリポジトリ所有者グループ ■ OracleAS Wireless コンポーネントのコンポーネント所有者グループ <p>注意：このグループは、追加の OracleAS Wireless インスタンスをインストールする場合にのみ適用できます。最初の OracleAS Wireless のインストールには適用されません。それ以降の OracleAS Wireless のインストールの場合は、最初のインストールを実行した Oracle Internet Directory ユーザーと同じユーザーとしてインストールを実行できます。OracleAS Wireless を別の Oracle Internet Directory ユーザーがインストールできるようにする場合は、そのユーザーを Wireless アプリケーション・エンティティのコンポーネント所有者グループに追加する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ また、ユーザーは OracleAS Wireless アプリケーション・エンティティの所有者の 1 人である必要があります。OracleAS Wireless アプリケーション・エンティティの名前を確認するには、OracleAS Wireless の最初のインストールから次のコマンドを実行します。 <pre>prompt> %ORACLE_HOME%\wireless\bin\getAppEntityName.bat</pre> <p>次に、このアプリケーション・エンティティのコンポーネント所有者としてユーザーを追加します。これは、Deployment Delegation コンソールまたは Oracle Directory Manager を使用して実行できます。</p>
OracleAS Reports Services	<ul style="list-style-type: none"> ■ iAS Admins
OracleAS Forms Services	<ul style="list-style-type: none"> ■ メタデータ・リポジトリの中間層の管理者またはリポジトリ所有者グループ
OracleAS Personalization	
OracleBI Discoverer	

OracleAS Single Sign-On が使用するメタデータ・リポジトリを確認する方法

1. 次のコマンド（すべてを 1 行で）を実行します。

```
C:\> ldapsearch -h oidhostname -p oidport -D cn=orcladmin -w password
      -b "orclapplicationcommonname=orasso_ssoserver,cn=sso,cn=products,
      cn=oraclecontext"
      -s base "objectclass=*" seealso
```

次の値を入力します。

oidhostname: Oracle Internet Directory を実行するコンピュータの名前。例：
dbmachine.mydomain.com

oidport: Oracle Internet Directory がリスニングしているポートの番号。例：389

password: cn=orcladmin ユーザーのパスワード。

2. 前の手順のコマンドがメタデータ・リポジトリの名前を戻さない場合は、次のコマンドを実行します。
 - a. まず次のコマンドを実行して、その次のコマンドに必要な「orcreplicaid」値を取得します。

```
C:\> ldapsearch -h oidhostname -p oidport -D cn=orcladmin -w password
      -b "" -s base "objectclass=*" orcreplicaid
```

- b. その後、次のコマンドを実行します。

```
C:\> ldapsearch -h oidhostname -p oidport -D cn=orcladmin -w password
-b "orclreplicaid=value_from_previous_command,cn=replication configuration"
-s base "objectclass=*" seealso
```

このコマンドを実行すると、*cn=Metadata repository DB Name, cn=oraclecontext* という書式の「*seealso*」値が戻されます。

7.4 中間層のインストールに必要なグループ

中間層のインストール時に、インストーラにより、Oracle Internet Directory にログインするよう求められます。次のグループのメンバーであるユーザーとしてログインします。

- [第 7.4.1 項 「必要なメタデータ・リポジトリに対してインストールするのに必要なグループ」](#)
- [第 7.4.2 項 「中間層コンポーネントのインストールに必要なグループ」](#)

7.4.1 必要なメタデータ・リポジトリに対してインストールするのに必要なグループ

メタデータ・リポジトリに対して中間層をインストールするには、ユーザーは次のグループに属している必要があります。

- IAS Admins グループ
- 中間層とともに使用するメタデータ・リポジトリ用の中間層の管理者グループ。インストーラによってこの中間層に使用する OracleAS Metadata Repository が要求されるときは、ユーザーが中間層の管理者であるメタデータ・リポジトリのみが表示されます。たとえば、[図 7-2](#) では、ユーザー A には orcl.oracle.com のリポジトリのみが表示され、ユーザー B には orcl1.oracle.com のリポジトリのみが表示されます。

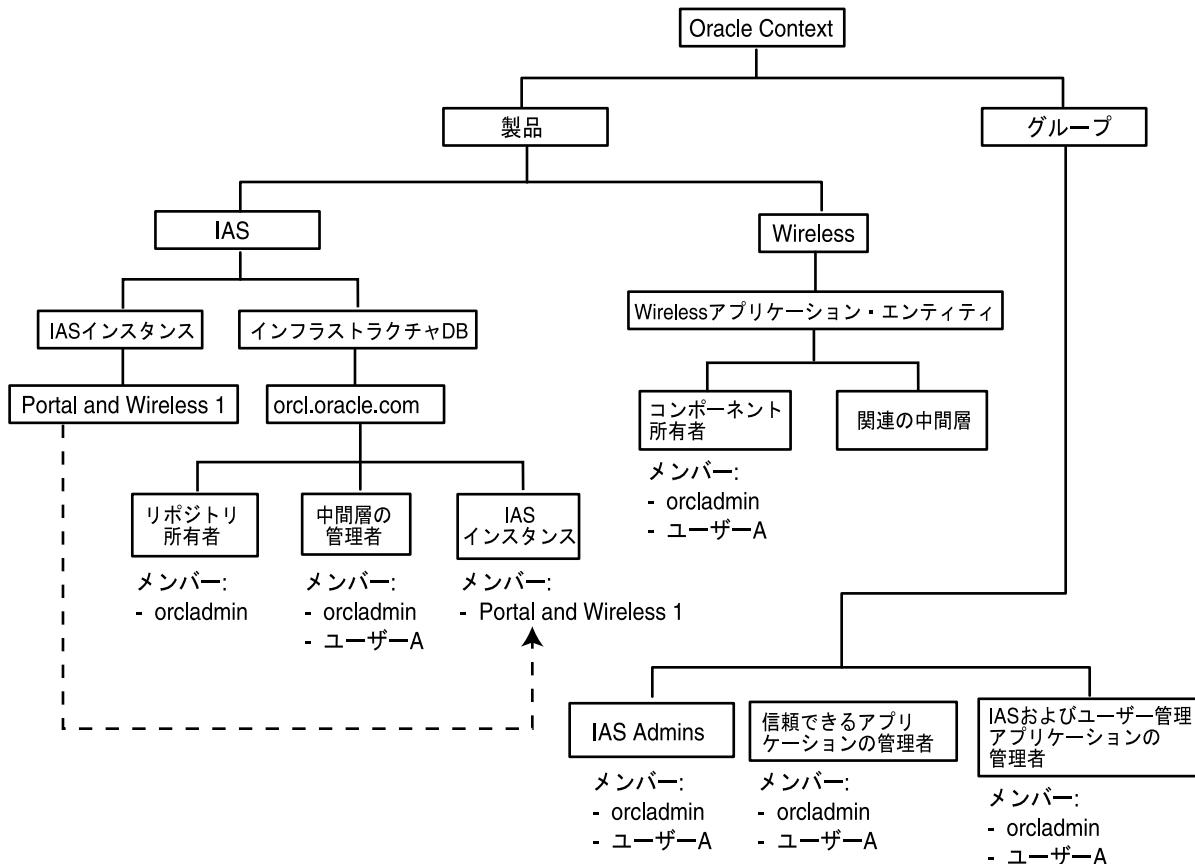
7.4.2 中間層コンポーネントのインストールに必要なグループ

OracleAS Portal や OracleAS Wireless などの中間層コンポーネントをインストールするには、ユーザーは追加のグループにも属している必要があります。コンポーネントおよび必要なグループの一覧は、[表 7-4](#) を参照してください。

7.4.3 例

[図 7-1](#) に、メタデータ・リポジトリが 1 つ、中間層インスタンスが 1 つの場合の Oracle Internet Directory を示しています。ユーザー A は中間層の管理者グループおよび IAS Admins グループに属しているため、orcl メタデータ・リポジトリに対して中間層をインストールできます。また、ユーザー A は信頼できるアプリケーションの管理者グループ、IAS およびユーザー管理アプリケーションの管理者グループ、Wireless のコンポーネント所有者グループに属しているため、中間層コンポーネントもインストールできます。

図 7-1 Infrastructure が 1 つ、中間層が 1 つある場合の Oracle Internet Directory の内容



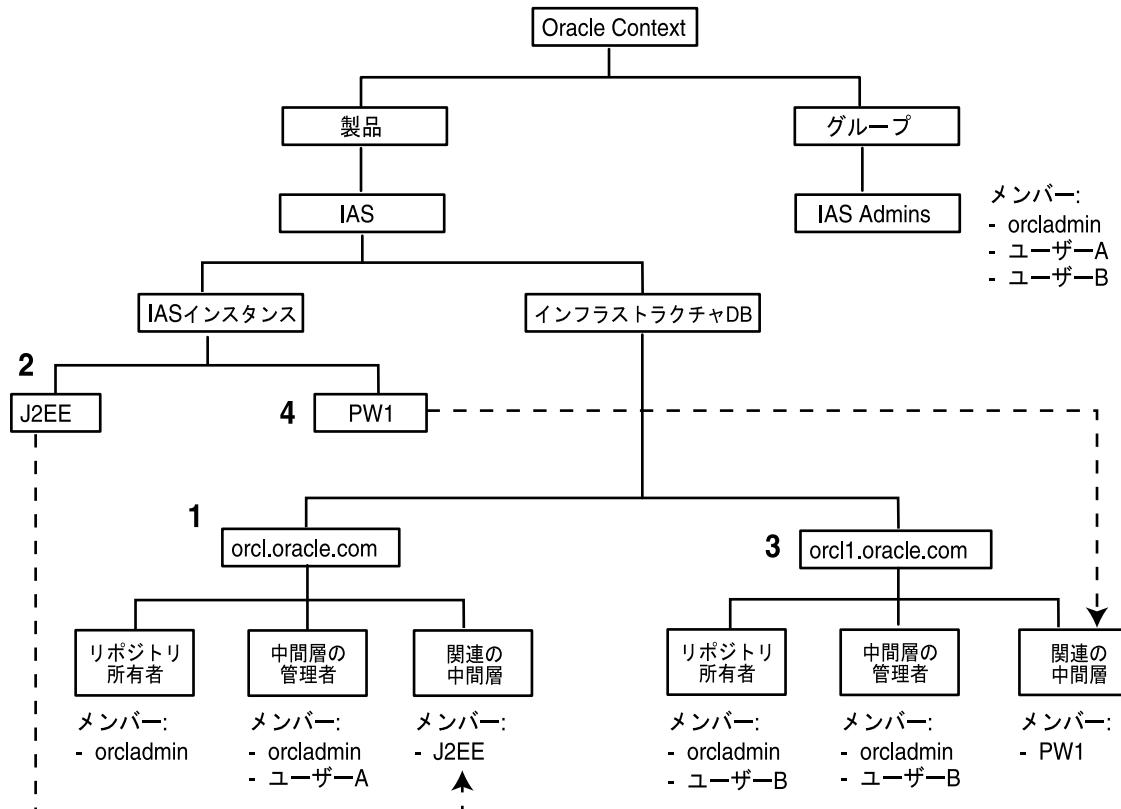
7.5 追加のメタデータ・リポジトリのインストールに必要なグループ

追加のメタデータ・リポジトリをインストールするには、ユーザーは **IAS Admins** グループのメンバーである必要があります。インストール後、ユーザーはそのメタデータ・リポジトリのリポジトリ所有者グループのメンバーになります。

7.6 異なるユーザーによるインストールの例

図 7-2 に、異なるユーザーによってインストールされた 2 つのメタデータ・リポジトリと 2 つの中間層がある場合の Oracle Internet Directory を示しています。

図 7-2 2 つのメタデータ・リポジトリと 2 つの中間層がある場合の Oracle Internet Directory



図の中の番号は、次の各手順に対応しています。

1. OracleAS Infrastructure (Oracle Internet Directory および OracleAS Metadata Repository を含む) のインストール

最初のインストールでは、Oracle Internet Directory およびメタデータ・リポジトリが作成されます。

インストーラは、「orcl.oracle.com」エントリを作成することにより Oracle Internet Directory にメタデータ・リポジトリを登録します。

orcladmin ユーザーが、このリポジトリのリポジトリ所有者グループおよび中間層の管理者グループのメンバーになります。

2. J2EE and Web Cache 中間層のインストール

ユーザー A は、次のグループに追加されました。

- 「orcl.oracle.com」の中間層の管理者グループ

これにより、ユーザー A がこの中間層の「orcl.oracle.com」リポジトリを使用できるようになります。このグループは、「OracleAS Database-Based Cluster」オプションを使用して J2EE and Web Cache 中間層をインストールする場合にのみ必要です。このオプションを使用しないで中間層をインストールする場合は、ユーザー A はこの中間層の管理者グループに属す必要はありません。

- iAS Admins グループ

インストーラは、「J2EE」エントリを作成することにより、この中間層を Oracle Internet Directory に登録します（「J2EE」は、ユーザー A が指定した中間層インスタンスの名前です）。中間層は、「orcl.oracle.com」の関連の中間層グループのメンバーになります。

3. OracleAS Infrastructure (OracleAS Metadata Repository のみ) のインストール

ユーザー B は、このインストールを実行できるように、iAS Admins グループに追加されました。詳細は、[第 7.5 項「追加のメタデータ・リポジトリのインストールに必要なグループ」](#) を参照してください。

インストーラは、「orcl1.oracle.com」エントリを作成することにより、この新しいリポジトリを Oracle Internet Directory に登録します。

ユーザー B は、新しいリポジトリのリポジトリ所有者グループと中間層の管理者グループのメンバーになります。

4. Portal and Wireless 中間層のインストール

ユーザー B は、次のグループに追加されました。

- 「orcl1.oracle.com」の中間層の管理者グループ。これによってユーザー B がこの中間層のリポジトリを使用できます。
- 信頼できるアプリケーションの管理者。OracleAS Portal のインストールに必要です。
- IAS およびユーザー管理アプリケーションの管理者。OracleAS Portal および OracleAS Wireless のインストールに必要です。
- iAS Admins。OracleAS Portal および OracleAS Wireless のインストールに必要です。

インストーラは、「PW1」エントリを作成することにより、この中間層を Oracle Internet Directory に登録します。

中間層は、「orcl1.oracle.com」の関連の中間層グループのメンバーになります。

7.7 Oracle Internet Directory でのユーザーの作成方法

Oracle Delegated Administration Services の一部であるセルフ・サービス・コンソールを使用して Oracle Internet Directory にユーザーを作成できます。詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

注意： Oracle Delegated Administration Services コンソールを使用して、cn=orcladmin スーパーユーザーとして Oracle Internet Directory に接続することはできません。Oracle Internet Directory にスーパーユーザーとして接続するには、Oracle Directory Manager を使用します。

7.8 Oracle Internet Directory 内のグループへのユーザーの追加方法

Oracle Internet Directory 内のグループにユーザーを追加するには、次のツールを使用できます。

- Oracle Internet Directory の管理のための Java ベースのツールである Oracle Directory Manager。
- エンドユーザーがパスワードの変更や個人情報の編集などの作業を実行するための Web ベースのツールである Oracle Delegated Administration Services。ユーザーが適切な権限を持っている場合は、このツールを使用してグループおよびユーザーの作成もできます。

注意： Oracle Delegated Administration Services を使用して `cn=orcladmin` スーパーアカウントとして Oracle Internet Directory にログインすることはできません。ユーザーまたはグループを追加するためにスーパーアカウントとしてログインする（または Oracle Internet Directory 関連の作業を実行する）必要がある場合は、Oracle Directory Manager を使用する必要があります。

7.8.1 Oracle Directory Manager を使用したグループへのユーザーの追加

ユーザーをグループへ追加するために `cn=orcladmin` スーパーアカウントとしてログインする必要があるときには、Oracle Delegated Administration Services のかわりに Oracle Directory Manager を使用する必要があります。

Oracle Directory Manager を使用してユーザーを追加するには、次のようにします。

1. Oracle Directory Manager を起動します。ORACLE_HOME は、Oracle Internet Directory がインストールされているホーム・ディレクトリのことです。
「スタート」→「プログラム」→「Oracle - OracleHomeName」→「Integrated Management Tools」→「Oracle Directory Manager」を選択します。
2. 「Oracle Internet Directory の接続」画面で、Oracle Internet Directory 用の接続情報を次のように入力します。
 - ユーザー : `cn=orcladmin` を入力します。
 - パスワード : `cn=orcladmin` のパスワードを入力します。
 - 「サーバー」と「ポート」 : フィールドの右側のアイコンをクリックして、Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前と Oracle Internet Directory がリスニングしているポートの番号を入力します。
 - 「ログイン」をクリックします。
3. 左側で、ユーザーを追加するグループに移動します。左側にあるグループを選択して、その属性を右側に表示します。
グローバル・グループに移動するには、[第 7.8.1.1 項「グローバル・グループへの移動」](#) を参照してください。
メタデータ・リポジトリのグループに移動するには、[第 7.8.1.2 項「メタデータ・リポジトリのグループへの移動」](#) を参照してください。
コンポーネントのグループに移動するには、[第 7.8.1.3 項「コンポーネントのグループへの移動」](#) を参照してください。
4. ユーザーの DN を `uniquemember` 属性に追加して、新しいユーザーをグループに追加します。

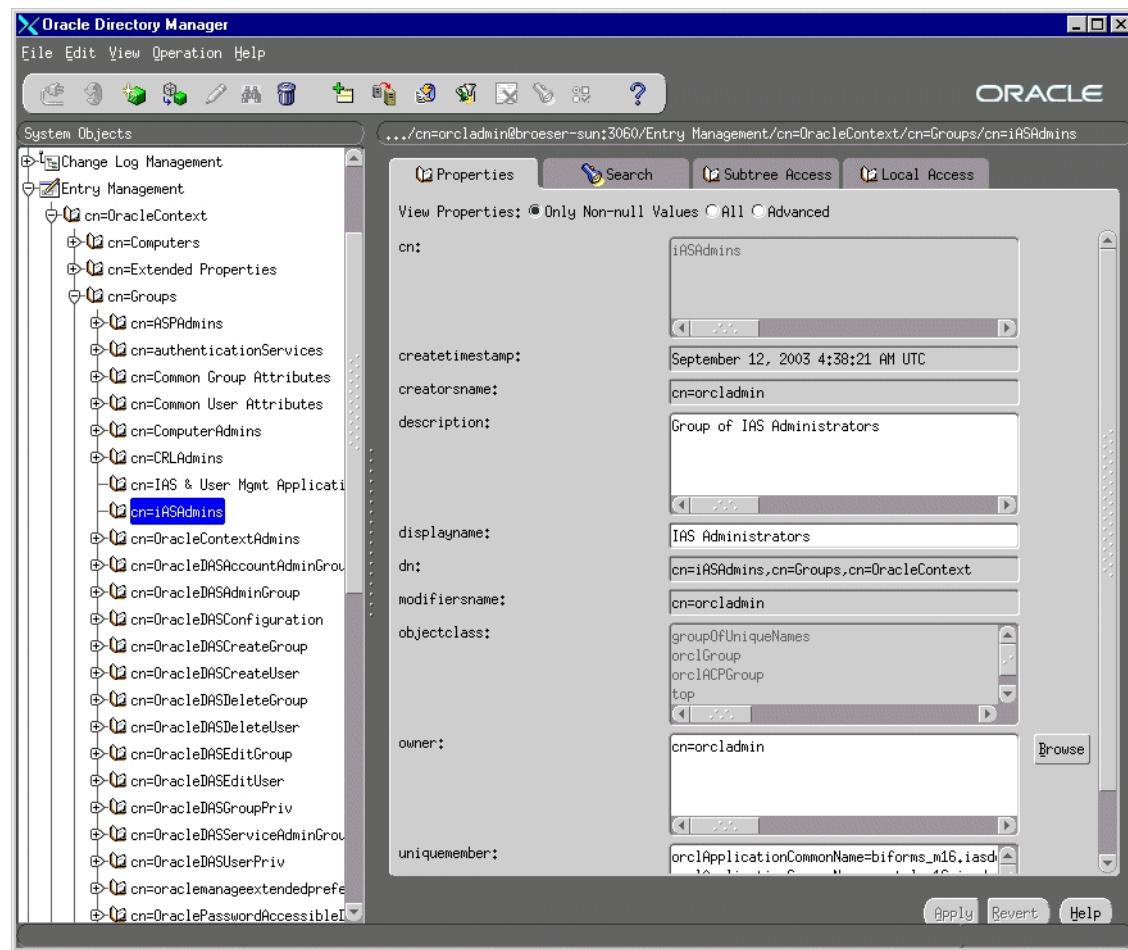
7.8.1.1 グローバル・グループへの移動

グローバル・グループは、[表 7-1](#) に示されています。

一般的なナビゲーション・パスは次のとおりです。画面表示は、[図 7-3](#) を参照してください。

1. 最上位のエントリ、「Oracle Internet Directory サーバー」を展開します。
2. 特定の Oracle Internet Directory を展開します。
3. 次のエントリを展開します。「エントリ管理」→「cn=OracleContext」→「cn=Groups」
4. ユーザーを追加するグループをクリックします。[図 7-3](#) に、iASAdmins グループを選択した場合の Oracle Directory Manager を示します。

図 7-3 Oracle Directory Manager を使用したグローバル・グループへのユーザーの追加



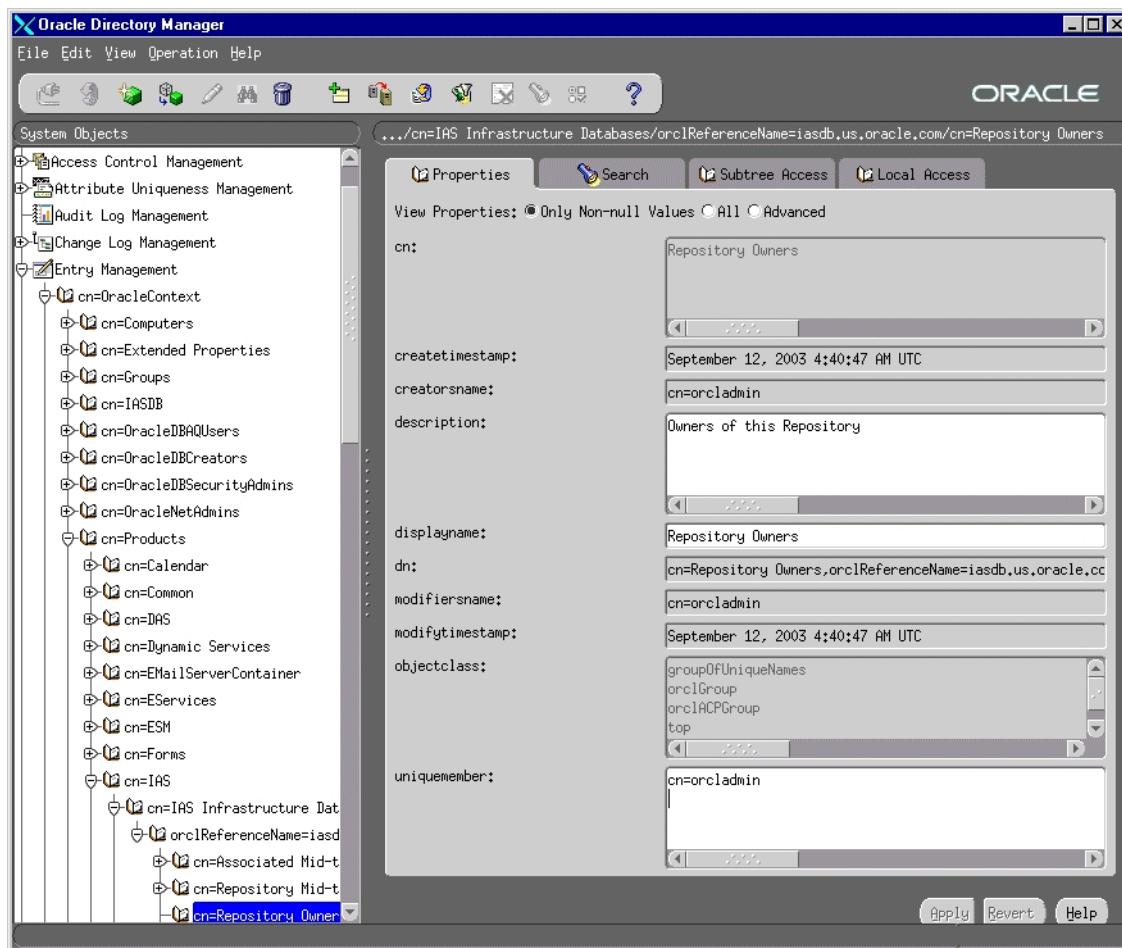
7.8.1.2 メタデータ・リポジトリのグループへの移動

メタデータ・リポジトリのグループは、表 7-2 に示されています。

一般的なナビゲーション・パスは次のとおりです。画面表示は、図 7-4 を参照してください。

1. 最上位のエントリ、「Oracle Internet Directory サーバー」を展開します。
2. 特定の Oracle Internet Directory を展開します。
3. 次のエントリを展開します。「エントリ管理」→「cn=OracleContext」→「cn=Products」→「cn=IAS」→「cn=IAS Infrastructure Databases」→「orclReferenceName=dbName」。
dbName は OracleAS Metadata Repository データベースの名前です。
4. ユーザーを追加するグループをクリックします。図 7-4 は、orcl.us.oracle.com データベースのリポジトリ管理者グループを選択した場合の Oracle Directory Manager を示しています。

図 7-4 Oracle Directory Manager を使用したメタデータ・リポジトリのグループへのユーザーの追加



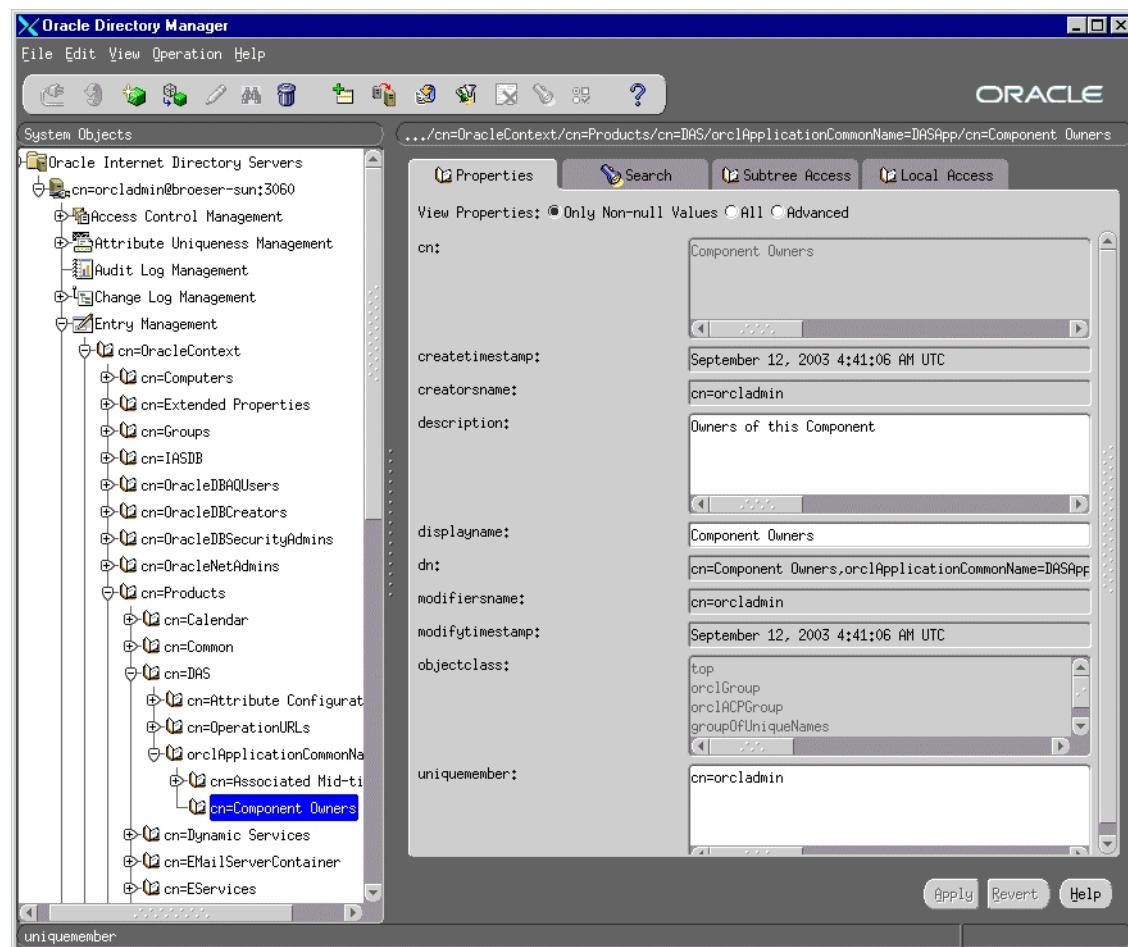
7.8.1.3 コンポーネントのグループへの移動

コンポーネントのグループは、[表 7-3](#) に示されています。

一般的なナビゲーション・パスは次のとおりです。画面表示は、[図 7-5](#) を参照してください。

1. 最上位のエントリ、「Oracle Internet Directory サーバー」を展開します。
2. 特定の Oracle Internet Directory を展開します。
3. 次のエントリを展開します。「エントリ管理」→「cn=OracleContext」→「cn=Products」
4. ユーザーを追加するグループが属している特定のコンポーネント（たとえば **cn=DAS**）を開けます。
5. 「**orc1ApplicationCommonName=appName**」を開けます。*appName* は、コンポーネントおよびアプリケーション・サーバー・インスタンスに固有です。1つのコンポーネントの複数のインスタンスをインストールした場合は、このエントリの複数のインスタンスが表示されます。
6. ユーザーを追加するグループをクリックします。[図 7-5](#) は、Oracle Delegated Administration Services のコンポーネント所有者グループを選択した場合の Oracle Directory Manager を示しています。

図 7-5 Oracle Directory Manager を使用した Oracle Delegated Administration Services コンポーネント所有者グループへのユーザーの追加



7.8.2 Deployment Delegation コンソールを使用したグループへのユーザーの追加

Oracle Delegated Administration Services の一部としてインストールされる Deployment Delegation コンソールを使用して、次のグループに対してユーザーを追加または削除できます。

- リポジトリ所有者
- 中間層の管理者
- コンポーネント所有者

注意： これらのグループに cn=orcladmin スーパーユーザー以外の既存のメンバーがある場合にのみ、ユーザーを追加できます。これらのグループの唯一のメンバーがスーパーユーザーである場合は、Oracle Directory Manager を使用してこれらのグループにユーザーを追加する必要があります。詳細は、[第 7.8.1 項「Oracle Directory Manager を使用したグループへのユーザーの追加」](#) を参照してください。

ユーザーをこれらのグループに追加するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Delegated Administration Services および Oracle Internet Directory が稼働していることを確認します。

2. 「Deployment Delegation コンソール」ページを表示します。URL を次に示します。

<http://hostname:port/oiddas/ui/oidinstallhome>

hostname は、Oracle Delegated Administration Services をインストールしたコンピュータの名前を指定します。

port は、Oracle HTTP Server がリスニングしているポートを指定します。

3. 「ログイン」をクリックします。
4. Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名とパスワードを入力して、「ログイン」をクリックします。ログイン・ユーザーには、必要なグループへのユーザーの追加を可能にするのに十分な権限が必要です。

ユーザーを追加するグループ	ログインするユーザーが属しているグループ
リポジトリ所有者	同じリポジトリ所有者グループ。
中間層の管理者	同じリポジトリのリポジトリ所有者グループ。
コンポーネント所有者	同じコンポーネント所有者グループ。

5. 必要なグループにユーザーを追加するには、次の手順を実行します。

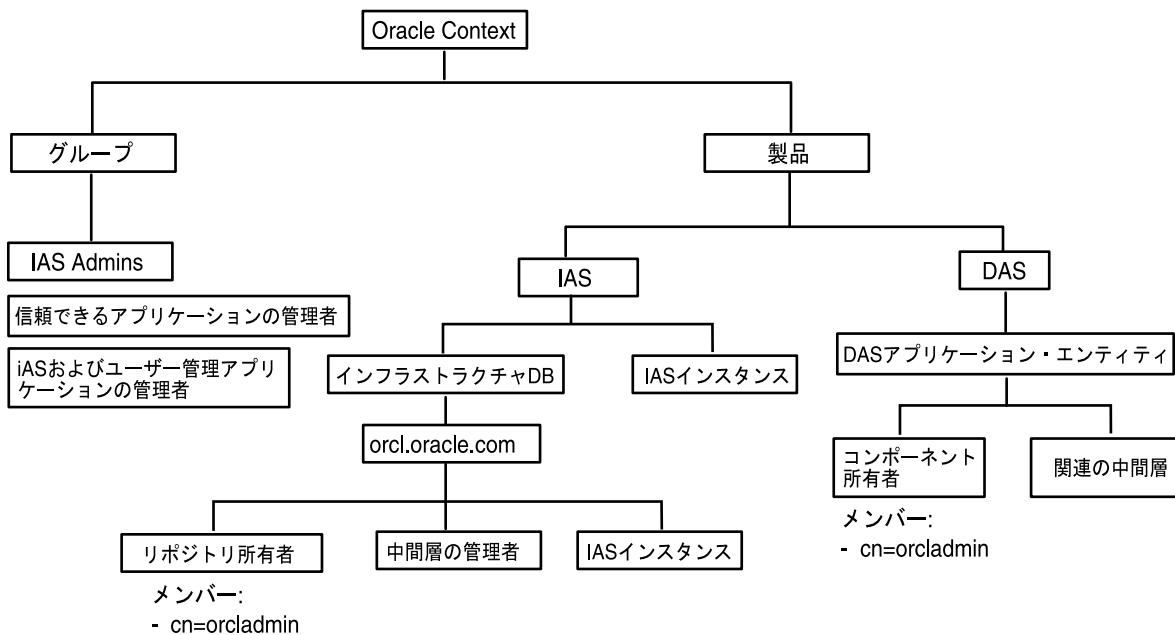
ユーザーをリポジトリ所有者グループに追加するには	ユーザーを中間層の管理者グループに追加するには	ユーザーをコンポーネント所有者グループに追加するには
<ol style="list-style-type: none"> 1. 「リポジトリ」タブをクリックします。 これにより、所有しているすべてのメタデータ・リポジトリが表示されます。 2. ユーザーを追加するメタデータ・リポジトリを選択し、「所有者の管理」をクリックします。 3. 現在の所有者を表示するページで、「追加」をクリックします。 4. ユーザーの名前の最初のいくつかの文字を「検索」フィールドに入力し、「実行」をクリックします。「検索」フィールドを空のままにして「実行」をクリックすると、Oracle Internet Directory に含まれるすべてのユーザーが一覧表示されます。 5. リポジトリ所有者グループに追加するユーザーを選択し、「選択」をクリックします。 6. 「リポジトリ所有者の管理」ページで「送信」をクリックします。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「リポジトリ」タブをクリックします。 これにより、所有しているすべてのメタデータ・リポジトリが表示されます。 2. ユーザーを追加するメタデータ・リポジトリを選択し、「管理者の管理」を選択します。 3. 現在の管理者を表示するページで、「追加」をクリックします。 4. ユーザーの名前の最初のいくつかの文字を「検索」フィールドに入力し、「実行」をクリックします。「検索」フィールドを空のままにして「実行」をクリックすると、Oracle Internet Directory に含まれるすべてのユーザーが一覧表示されます。 5. 中間層の管理者グループに追加するユーザーを選択し、「選択」をクリックします。 6. 「管理者の管理」ページで「送信」をクリックします。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「コンポーネント」タブをクリックします。 これにより、所有しているすべてのコンポーネントが表示されます。 2. ユーザーを追加するコンポーネントを選択し、「所有者の管理」をクリックします。 3. 現在のコンポーネントの所有者を表示するページで、「追加」をクリックします。 4. ユーザーの名前の最初のいくつかの文字を「検索」フィールドに入力し、「実行」をクリックします。「検索」フィールドを空のままにして「実行」をクリックすると、Oracle Internet Directory に含まれるすべてのユーザーが一覧表示されます。 5. コンポーネント所有者グループに追加するユーザーを選択し、「選択」をクリックします。 6. 「コンポーネントの所有者の管理」ページで「送信」をクリックします。

7.9 新しい Oracle Internet Directory の内容

OracleAS Infrastructure を Oracle Internet Directory、OracleAS Metadata Repository および Oracle Delegated Administration Services とともにインストールする場合、Oracle Internet Directory には次のオブジェクト（図 7-6）が含まれます。

- 表 7-1 に示したグローバル・グループ。
- cn=orcladmin スーパーユーザー
- デフォルトのレルムに属す orcladmin ユーザー
- Oracle Internet Directory に登録されたメタデータ・リポジトリのエントリ。このメタデータ・リポジトリは、表 7-2 に示したグループに関連付けられています。cn=orcladmin スーパーユーザーは、リポジトリ所有者グループのメンバーです。
- Oracle Delegated Administration Services コンポーネントのアプリケーション・エンティティ・エントリ。このコンポーネントは、表 7-3 に示したグループに関連付けられています。cn=orcladmin スーパーユーザーは、コンポーネント所有者グループのメンバーです。
他のユーザーが Oracle Delegated Administration Services の追加インスタンスをインストールできるようにするには、cn=orcladmin として Oracle Directory Manager にログインし、ユーザーをコンポーネント所有者グループに追加します。詳細は、第 7.8.1 項「[Oracle Directory Manager を使用したグループへのユーザーの追加](#)」を参照してください。

図 7-6 新しい Oracle Internet Directory の内容



7.10 「Oracle Internet Directory に対するログインの指定」画面で入力するユーザー名とレルム

次の場合、インストーラによって、「Oracle Internet Directory に対するログインの指定」画面が表示されます。

- OracleAS Infrastructure をインストールし、既存の Oracle Internet Directory を使用する場合
- Infrastructure を必要とする中間層をインストールする場合

この画面では、Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名とパスワードを入力するように求められます。

ユーザー名

「ユーザー名」フィールドで、単純なユーザー名またはユーザーの DN のいずれかを入力します。

単純なユーザー名の例 : `jdoe`

DN の例 : `cn=orcladmin`

ユーザーは、特定のコンポーネントをインストールおよび構成するためには特定のグループに属す必要があります。詳細は、[表 7-4](#) を参照してください。

スーパーユーザーを指定する場合は、`orcladmin`だけではなく、`cn=orcladmin`と入力します。

レルム

「レルム」フィールドは、Oracle Internet Directory に複数のレルムが含まれる場合にのみ表示されます。入力したユーザー名は、指定されたレルムに対して認証されます。レルム名が不明な場合は、Oracle Internet Directory 管理者に問い合わせてください。

例 1: ホストされている配置では、レルム名は、ホストされている会社の名前、`XYZcorp`に近い名前である場合があります。

例 2: 企業内で、社内ユーザーと社外ユーザー用のレルムが異なる場合があります。社外ユーザー用のレルム名は、`externalUsers`などの可能性があります。

8

レプリケーション・モードでの Oracle Internet Directory のインストール

この章では、Oracle Internet Directory をレプリケーション・モードでインストールする方法（Oracle Internet Directory のマスターとレプリカのインストール方法）について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 第 8.1 項 「Oracle Internet Directory レプリケーションの概要」
- 第 8.2 項 「要件」
- 第 8.3 項 「インストールの順序」
- 第 8.4 項 「マスター Oracle Internet Directory のインストール」
- 第 8.5 項 「Oracle Internet Directory レプリカのインストール」
- 第 8.6 項「OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services へのアクセス」

8.1 Oracle Internet Directory レプリケーションの概要

レプリケーション環境で Oracle Internet Directory を実行するということは、複数の Oracle Internet Directory があり、それぞには固有の OracleAS Metadata Repository があることを意味します。Oracle Internet Directory インスタンスはメタデータ・リポジトリ内のデータを同期化するため、リポジトリ内のデータはほぼ一貫性があります。つまり、リポジトリ内のデータはリアル・タイムでの同期は保証されませんが、許容範囲内で同一となります。

参照先

この章では、インストールについて説明します。レプリケーションの詳細は、次のドキュメントを参照してください。

- Oracle Internet Directory レプリケーションの概要および管理については、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。
- Oracle Internet Directory レプリケーションの配置シナリオについては、『Oracle Identity Management 概要および配置プランニング・ガイド』を参照してください。

レプリケーションのタイプ

レプリケーションには、次の2つのタイプがあります。インストール時に、希望するレプリケーションのタイプを選択します。

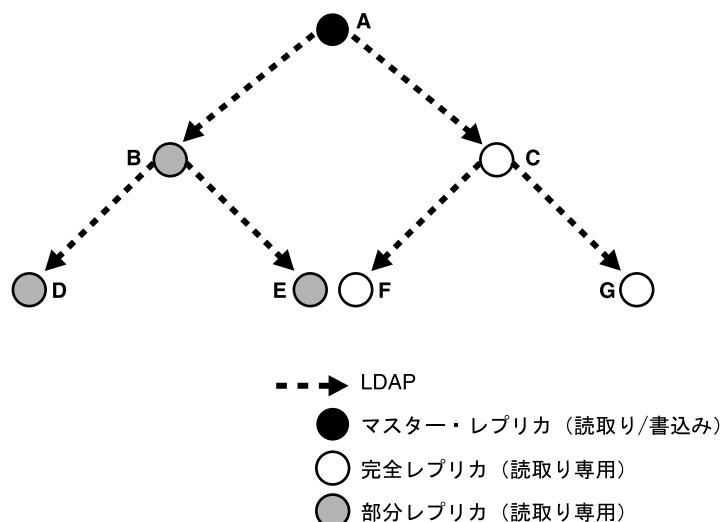
- 第 8.1.1 項「ファンアウト・レプリケーション (LDAP レプリケーション)」
- 第 8.1.2 項「マルチマスター・レプリケーション (アドバンスト・レプリケーション)」

8.1.1 ファンアウト・レプリケーション (LDAP レプリケーション)

ファンアウト・レプリケーションでは、1つの Oracle Internet Directory がマスターとなり、他の Oracle Internet Directory インスタンスは Oracle Internet Directory レプリカと呼ばれます。

クライアントは、マスター Oracle Internet Directory 内のデータのみを変更します。その後で、マスターはレプリカに対し変更を伝播します。これらのレプリカは、順を追って他の Oracle Internet Directory レプリカを更新できます。

図 8-1 ファンアウト・レプリケーション (LDAP レプリケーション) の例



ファンアウト・レプリケーションでは、Oracle Internet Directory インスタンス間の通信に LDAP プロトコルが使用されます。インストーラの「Oracle Internet Directory レプリケーション・モードの選択」画面では、ファンアウト・レプリケーションを「LDAP レプリケーション」という用語で示しています。

マスター Oracle Internet Directory のインストール手順は、通常の（レプリケートされない）Oracle Internet Directory のインストールと同じです。

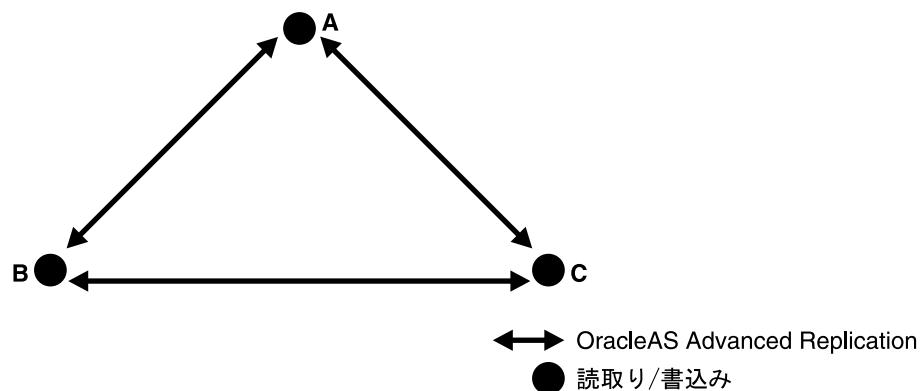
レプリカのインストール手順は異なります。レプリカをインストールする場合は、「構成オプションの選択」画面で「高可用性およびレプリケーション」オプションを選択し、マスター Oracle Internet Directory への接続情報も指定する必要があります。

Oracle Internet Directory（マスターまたはレプリカ）を実行する Oracle Application Server インスタンスは、OracleAS Metadata Repository、OracleAS Single Sign-On、Oracle Delegated Administration Services、Oracle Directory Integration and Provisioning など、他の Oracle Application Server コンポーネントも実行できます。

8.1.2 マルチマスター・レプリケーション（アドバンスト・レプリケーション）

マルチマスター・レプリケーションでは、1つ以上のマスター Oracle Internet Directory インスタンスを保有できます。また、レプリカである他の Oracle Internet Directory インスタンスも保有できます。クライアントは、任意の Oracle Internet Directory (マスターまたはレプリカ) 内のデータを更新できます。Oracle Internet Directory インスタンス間で、変更が伝播されます。

図 8-2 マルチマスター・レプリケーション（アドバンスト・レプリケーション）の例



マルチマスター・レプリケーションでは、Oracle Internet Directory インスタンス間の通信に Oracle Database Advanced Replication プロトコルが使用されます。インストーラの「Oracle Internet Directory レプリケーション・モードの選択」画面では、マルチマスター・レプリケーションを「アドバンスト・レプリケーション」という用語で示しています。

マスター Oracle Internet Directory のインストール手順は、通常の（レプリケートされない）Oracle Internet Directory のインストールと同じです。

レプリカのインストール手順は異なります。レプリカをインストールする場合は、「構成オプションの選択」画面で「高可用性およびレプリケーション」オプションを選択し、マスター Oracle Internet Directory への接続情報も指定する必要があります。

Oracle Internet Directory（マスターまたはレプリカ）を実行する Oracle Application Server インスタンスは、OracleAS Metadata Repository、OracleAS Single Sign-On、Oracle Delegated Administration Services、Oracle Directory Integration and Provisioning など、他の Oracle Application Server コンポーネントも実行できます。

8.2 要件

レプリケーション・モードで Oracle Internet Directory をインストールするには、次の要件を満たしていることを確認します。

- 第8.2.1項「データベース要件」
 - 第8.2.2項「時計の同期化」

8.2.1 データベース要件

各 Oracle Internet Directory (マスター、レプリカに関係なく) には、それぞれ固有の OracleAS Metadata Repository が必要です。新しい OracleAS Metadata Repository とともにインストールするか、または既存の OracleAS Metadata Repository にインストールできます。

既存の OracleAS Metadata Repository にインストールする場合、2つの方法で既存の OracleAS Metadata Repository を作成できます。

- 「インストール・タイプの選択」画面で「**OracleAS Metadata Repository**」オプションを選択してインストールできます。
- 既存データベースに OracleAS Metadata Repository をインストールできます。既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository をロードする方法の詳細は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のユーザーズ・ガイドを参照してください。

既存の OracleAS Metadata Repository にインストールする場合、その OracleAS Metadata Repository は、別の Oracle Internet Directory に登録されていてはいけません。Oracle Internet Directory にすでに登録されている OracleAS Metadata Repository を指定すると、インストーラは高可用性環境をインストールするとみなし、レプリケーション・オプションは表示されません。

8.2.2 時計の同期化

マスターを実行しているコンピュータの時計とレプリカを実行しているコンピュータの時計の誤差が、250 秒以内であることを確認します。

8.3 インストールの順序

レプリケーション・モードで Oracle Internet Directory をインストールするには、1つのマスター Oracle Internet Directory と、1つ以上の Oracle Internet Directory レプリカが必要です。次の順序でそれらをインストールします。

1. 最初にマスター Oracle Internet Directory をインストールします。
2. Oracle Internet Directory レプリカをインストールします。インストーラによって、マスター Oracle Internet Directory の接続情報を入力するよう求められます。

8.4 マスター Oracle Internet Directory のインストール

マスター Oracle Internet Directory のインストール手順は、通常の（レプリケートされない） Oracle Internet Directory のインストールと同じです。マスター Oracle Internet Directory は、既存データベースに対して、または新しいデータベースとともにインストールできます。

注意：

- 「構成オプションの選択」画面で、「**Oracle Internet Directory**」を選択する必要があります。必要に応じて、他のコンポーネントを選択して構成できます。
 - また、「構成オプションの選択」画面では、「**高可用性およびレプリケーション**」を選択する必要はありません。この Oracle Application Server インスタンスを高可用性構成にインストールする場合にのみ、このオプションを選択します。
 - 「構成オプションの選択」画面で「**高可用性およびレプリケーション**」オプションを選択すると、「**高可用性オプションの選択**」画面が表示されます。ここでは、「**レプリケーション**」オプションは選択しないでください。これは、このオプションがマスター Oracle Internet Directory ではなく、レプリカ Oracle Internet Directory をインストールするためのオプションであるためです。
-

第5章「OracleAS Infrastructure のインストール」の手順を使用して、マスター Oracle Internet Directory をインストールできます。次に例を示します。

- 新しいデータベースとともにマスター Oracle Internet Directory をインストールするには、[第5.19項「OracleAS Infrastructure のインストール」](#)の手順に従います。
- 既存のデータベースを使用してマスター Oracle Internet Directory をインストールするには、[第5.21項「Oracle Identity Management コンポーネントのみ \(Oracle Internet Directory を含む\) のインストール」](#)または[第5.21項「Oracle Identity Management コンポーネントのみ \(Oracle Internet Directory を含む\) のインストール」](#)の手順に従います。

また、高可用性環境にマスター Oracle Internet Directory をインストールすることもできます。詳細は、[第10章「高可用性環境へのインストール: OracleAS Cold Failover Cluster」](#)および[第11章「高可用性環境へのインストール: OracleAS Cluster \(Identity Management\)」](#)を参照してください。

8.5 Oracle Internet Directory レプリカのインストール

Oracle Internet Directory レプリカを既存のデータベースに対して、または新しいデータベースとともにインストールできます。

この項の内容は次のとおりです。

- [第8.5.1項「レプリカのインストールの概要」](#)
- [第8.5.2項「新しいデータベースと Oracle Internet Directory レプリカのインストール」](#)
- [第8.5.3項「既存データベースへの Oracle Internet Directory レプリカのインストール」](#)

8.5.1 レプリカのインストールの概要

Oracle Internet Directory レプリカをインストールする場合は、次のことに注意します。

- 「構成オプションの選択」画面で、「**Oracle Internet Directory**」および「**高可用性およびレプリケーション**」を選択する必要があります。
- 「高可用性オプションの選択」画面で、「**レプリケーション**」を選択します。
- インストーラにより、マスター Oracle Internet Directory の接続情報を入力するように求められた場合は、Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (`cn=orcladmin`) として接続する必要があります。スーパーユーザーのパスワードが必要になります。
- マスター Oracle Internet Directory には、レプリカに使用する OracleAS Metadata Repository と同じグローバル・データベース名または SID を持つデータベースが登録されていてはいけません。
- レプリカの OracleAS Metadata Repository は、いずれの Oracle Internet Directory にも登録しておくことはできません。

8.5.2 新しいデータベースと Oracle Internet Directory レプリカのインストール

新しいデータベースとともに Oracle Internet Directory レプリカをインストールするには、次の手順を実行します。

表 8-1 新しいデータベースと Oracle Internet Directory レプリカのインストール

画面	操作
1. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第5.25項「インストールの一部: インストールの最初のいくつかの画面」を参照してください。</p> <p>注意:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「インストールする製品の選択」画面で、「Oracle Application Server Infrastructure 10g」を選択します。 ■ 「インストール・タイプの選択」画面で、「Oracle Identity Management and OracleAS Metadata Repository」を選択します。

表 8-1 新しいデータベースと Oracle Internet Directory レプリカのインストール（続き）

画面	操作
2. 構成オプションの選択	「Oracle Internet Directory」を選択します。 「高可用性およびレプリケーション」を選択します。 この画面の他のオプションは任意です。 必要なコンポーネントに応じて、「Oracle Application Server Single Sign-On」、「Oracle Application Server Delegated Administration Service」、「Oracle Application Server Directory Integration and Provisioning」、「Oracle Application Server Certificate Authority (OCA)」を選択します。 「次へ」をクリックします。
3. ポート構成オプションの指定	コンポーネントにデフォルトのポートを使用する場合は、「自動」を選択します。 staticports.ini ファイルをすでに作成していて、デフォルトのポートを使用しない場合は、「自動」を選択し、指定されたフィールドで staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。 「次へ」をクリックします。
4. 高可用性またはレプリケーション・オプションの選択	この画面は、レプリカのインストールに必要です。この画面は、「構成オプションの選択」画面で「高可用性およびレプリケーション」を選択した場合にのみ表示されます。 「レプリケーション」を選択し、「次へ」をクリックします。
5. Oracle Internet Directory レプリケーション・モードの選択	ファンアウト・レプリケーションが必要な場合は、「LDAP レプリケーション」を選択します。 マルチマスター・レプリケーションが必要な場合は、「アドバンスト・レプリケーション」を選択します。 「次へ」をクリックします。
6. Oracle Internet Directory マスター・ノードの指定	ホスト名：マスター Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を入力します。 ポート：マスター Oracle Internet Directory がリスニングしているポートのポート番号を入力します。 「Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用」は選択しないでください。Oracle Internet Directory を SSL のみのモードで実行する場合は、インストール後にこの構成を変更することができます。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。 「次へ」をクリックします。
7. マスター Oracle Internet Directory へのログインの指定	ユーザー名：スーパーユーザーとしてマスター Oracle Internet Directory に接続する必要があるため、cn=orcladmin を入力します。 パスワード：スーパーユーザーのパスワードを入力します。 「次へ」をクリックします。
8. Internet Directory のネームスペースの指定	推奨されるネームスペースを選択するか、またはデフォルトの Oracle Identity Management レルムの場所のカスタム・ネームスペースを入力します。 「推奨ネームスペース」に表示された値が配置要件を満たしていることを確認します。要件を満たさない場合は、「カスタム・ネームスペース」に必要な値を入力します。詳細は、第 5.15 項「[Internet Directory のネームスペースの指定] 画面での入力」を参照してください。 「次へ」をクリックします。
9. OCA の画面	「構成オプションの選択」画面で「Oracle Application Server Certificate Authority (OCA)」を選択した場合、インストーラによって OCA を構成するための画面が表示されます。詳細は、第 5.28 項「[インストールの一部 : OCA の画面]」を参照してください。

表 8-1 新しいデータベースと Oracle Internet Directory レプリカのインストール（続き）

画面	操作
10. データベース構成オプションの指定	<p>グローバル・データベース名: OracleAS Metadata Repository データベースの名前を入力します。コンピュータのドメイン名をデータベース名に追加します。 例: orcl.mydomain.com</p> <p>注意: マスター Oracle Internet Directory には、同じグローバル・データベース名または SID を持つデータベースが登録されていてはいけません（これはインストーラによってチェックされます）。</p> <p>SID: OracleAS Metadata Repository データベースのシステム識別子を入力します。通常、これはグローバル・データベース名と同じですが、ドメイン名は含まれません。SID は、すべてのデータベースで一意である必要があります。SID は最大 8 文字です。 例: orcl</p> <p>データベース・キャラクタ・セットの選択: 使用するキャラクタ・セットを選択します。</p> <p>データベース・ファイルの位置の指定: データ・ファイル・ディレクトリの親ディレクトリへのフルパスを入力します。この親ディレクトリはすでに存在している必要があり、このディレクトリへの書き込み権限を所有している必要があります。</p> <p>インストーラによって、この親ディレクトリにサブディレクトリが作成されます。サブディレクトリは SID と同じ名前になります。データ・ファイルは、このサブディレクトリに配置されます。</p> <p>たとえば、/u02/oradata と入力し、SID が orcl である場合、データ・ファイルは /u02/oradata/orcl に配置されます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
11. データベース・スキーマのパスワードの指定	<p>権限付きデータベース・スキーマ (SYS、SYSTEM、SYSMAN および DBSNMP) のパスワードを設定します。各スキーマに対して異なるパスワードを設定することも、すべてのスキーマに同じパスワードを設定することもできます。</p> <p>これらのアカウントのパスワードを設定するための規則については、第 5.13 項「SYS、SYSTEM、SYSMAN、および DBSNMP ユーザー用のパスワードの制限」 を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
12. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	<p>インスタンス名: このインフラストラクチャ・インスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_（アンダースコア）文字を使用できます。1 台のコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第 4.7 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。</p> <p>例: infra</p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」: ias_admin ユーザーのパスワードを入力して、確認します。これはこのインフラストラクチャ・インスタンスの管理ユーザーです。</p> <p>このパスワードは、次のユーザーのパスワードにもなります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) ■ Oracle Internet Directory データベースのユーザー (ods) ■ レプリケーション DN (レプリケーション・サーバーが使用する ID)。DN は 「cn=replication_dn, orcreplicaid=replica_ID, cn=replication configuration」で、replica_ID はインストールする Oracle Internet Directory のレプリカ ID です。 <p>パスワード要件については、第 4.8 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。</p> <p>例: welcome99</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
13. --	<p>インストールを終了します。詳細は、第 5.26 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。</p>

8.5.3 既存データベースへの Oracle Internet Directory レプリカのインストール

既存データベースに Oracle Internet Directory レプリカをインストールするには、次の手順を行います。

表 8-2 既存データベースへの Oracle Internet Directory レプリカのインストール

画面	操作
1. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第 5.25 項 「インストールの一部：インストールの最初のいくつかの画面」 を参照してください。</p> <p>注意：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「インストールする製品の選択」画面で、「Oracle Application Server Infrastructure 10g」を選択します。 ■ 「インストール・タイプの選択」画面で、「Oracle Identity Management」を選択します。
2. 構成オプションの選択	<p>「Oracle Internet Directory」を選択します。</p> <p>「高可用性およびレプリケーション」を選択します。</p> <p>この画面の他のオプションは任意です。</p> <p>必要なコンポーネントに応じて、「Oracle Application Server Single Sign-On」、「Oracle Application Server Delegated Administration Service」、「Oracle Application Server Directory Integration and Provisioning」、「Oracle Application Server Certificate Authority (OCA)」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. ポート構成オプションの指定	<p>コンポーネントにデフォルトのポートを使用する場合は、「自動」を選択します。</p> <p>staticports.ini ファイルをすでに作成していて、デフォルトのポートを使用しない場合は、「自動」を選択し、指定されたフィールドで staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. リポジトリの指定	<p>レプリカに使用する OracleAS Metadata Repository の情報を入力します。</p> <p>注意：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ この OracleAS Metadata Repository は、いずれの Oracle Internet Directory にも登録しておくことはできません。 ■ 手順 7. で指定するマスター Oracle Internet Directory には、この OracleAS Metadata Repository と同じグローバル・データベース名または SID を持つデータベースが登録されていてはいけません（これはインストーラによってチェックされません）。 <p>ユーザー名 : OracleAS Metadata Repository データベースにログインするために使用するユーザー名を入力します。ユーザーは、DBA 権限を持っている必要があります。</p> <p>パスワード : ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>ホスト名とポート : データベースが稼働しているコンピュータの名前を入力し、そのコンピュータによってリスニングが行われているポートのポート番号を入力します。書式には、<i>host:port</i> を使用します。</p> <p>サービス名 : データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。</p> <p>例：<code>orcl.mydomain.com</code></p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. 高可用性またはレプリケーション・オプションの選択	<p>この画面は、レプリカのインストールに必要です。この画面が表示されない場合は、「構成オプションの」画面に戻り、「高可用性およびレプリケーション」が選択されていることを確認します。</p> <p>「レプリケーション」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 8-2 既存データベースへの Oracle Internet Directory レプリカのインストール（続き）

画面	操作
6. Oracle Internet Directory レプリケーション・モードの選択	<p>ファンアウト・レプリケーションが必要な場合は、「LDAP レプリケーション」を選択します。</p> <p>マルチマスター・レプリケーションが必要な場合は、「アドバンスト・レプリケーション」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. Oracle Internet Directory マスター・ノードの指定	<p>ホスト名：マスター Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を入力します。</p> <p>ポート：マスター Oracle Internet Directory がリスニングしているポートを入力します。</p> <p>「Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用」は選択しないでください。Oracle Internet Directory を SSL のみのモードで実行する場合は、インストール後にこの構成を変更することができます。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
8. マスター Oracle Internet Directory へのログインの指定	<p>ユーザー名：スーパーユーザーとしてマスター Oracle Internet Directory に接続する必要があるため、cn=orcladmin を入力します。</p> <p>パスワード：スーパーユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
9. Internet Directory のネームスペースの指定	<p>推奨されるネームスペースを選択するか、またはデフォルトの Oracle Identity Management ルームの場所のカスタム・ネームスペースを入力します。</p> <p>「推奨ネームスペース」に表示された値が配置要件を満たしていることを確認します。要件を満たさない場合は、「カスタム・ネームスペース」に必要な値を入力します。詳細は、第 1.15 項 「[Internet Directory のネームスペースの指定] 画面での入力」 を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
10. OCA の画面	<p>「構成オプションの選択」画面で「Oracle Application Server Certificate Authority (OCA)」を選択した場合、インストーラによって OCA を構成するための画面が表示されます。詳細は、第 5.28 項 「インストールの一部: OCA の画面」 を参照してください。</p>
11. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	<p>インスタンス名：このインフラストラクチャ・インスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_（アンダースコア）文字を使用できます。1つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第 4.7 項 「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。</p> <p>例: id_mgmt</p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」：ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。</p> <p>このパスワードは、次のユーザーのパスワードにもなります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Internet Directory のスーパーユーザー（「cn=orcladmin」） ■ Oracle Internet Directory データベースのユーザー（「ods」） ■ レプリケーション DN（レプリケーション・サーバーが使用する ID）。DN は「cn=replication_dn, orclreplica_id=replica_ID, cn=replication_configuration」で、replica_ID はインストールする Oracle Internet Directory のレプリカ ID です。 <p>パスワードの制限については、第 4.8 項 「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。</p> <p>例: welcome99</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 8-2 既存データベースへの Oracle Internet Directory レプリカのインストール（続き）

画面	操作
12. --	インストールを終了します。詳細は、 第 5.26 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。

8.6 OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Servicesへのアクセス

レプリカ・ノードの OracleAS Single Sign-On または Oracle Delegated Administration Services にアクセスするには、レプリカ Oracle Internet Directory ではなくマスター Oracle Internet Directory で、`orcladmin` ユーザーのパスワードを使用する必要があります。

例：

1. ブラウザに OracleAS Single Sign-On または Oracle Delegated Administration Services の URL を入力します。

OracleAS Single Sign-On の場合の URL: `http://host:port/pls/orasso`

Oracle Delegated Administration Services の場合の URL: `http://host:port/oiddas`

host には、Oracle Internet Directory レプリカをインストールしたコンピュータの名前を指定します。

port には、Oracle HTTP Server がリスニングしているポート番号を指定します。

2. ログインするには、ユーザー名として `orcladmin`、およびマスター Oracle Internet Directory をインストールした際に入力したパスワードを入力します。レプリカ Oracle Internet Directory のパスワードを入力すると、ログインに失敗します。

9

高可用性環境へのインストール：概要

この章では、Oracle Application Server でサポートされている高可用性構成の概要を説明します。詳細は、後続の章で説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 第 9.1 項 「高可用性構成の概要」
- 第 9.2 項 「高可用性構成のインストール順序」

9.1 高可用性構成の概要

この章では、Oracle Application Server での高可用性構成の概要のみを説明します。構成の詳細は、『Oracle Application Server 高可用性ガイド』を参照してください。

Oracle Application Server は、次のタイプの高可用性構成をサポートします。

- 第 9.1.1 項 「OracleAS Cold Failover Cluster」
- 第 9.1.2 項 「OracleAS Cluster」
- 第 9.1.3 項 「OracleAS Disaster Recovery」
- 第 9.1.4 項 「相違の概要」

高可用性構成の一覧は、第 9.1.4 項 「相違の概要」 を参照してください。

9.1.1 OracleAS Cold Failover Cluster

Oracle Application Server は、OracleAS Cold Failover Cluster を使用しているそのコンポーネントすべてに対し、アクティブ - パッシブ・モデルを提供します。OracleAS Cold Failover Cluster 構成では、2つ以上のアプリケーション・サーバーのインスタンスが同じアプリケーションのワークロードを処理するように構成されていますが、一度にアクティブになるサーバーは1つのみです。これらのインスタンスは1台のマシンまたは別々のマシンに常駐できます。

OracleAS Cold Failover Cluster 構成の最も一般的なプロパティは次のとおりです。

- 共有記憶域

アクティブ - パッシブ構成におけるパッシブな Oracle Application Server インスタンスは、アクティブなインスタンスと同じ Oracle バイナリ、構成ファイルおよびデータにアクセスできます。

- 仮想ホスト名

OracleAS Infrastructure のインストール中は、「仮想ホストの指定」画面で仮想ホスト名を指定できます。この OracleAS Infrastructure 仮想ホスト名は、ハードウェア・クラスタまたはロード・バランサで管理でき、OracleAS Infrastructure にアクセスするために中間層と OracleAS Infrastructure のコンポーネントによって使用されます。これは、OracleAS Infrastructure が OracleAS Cold Failover Cluster ソリューションまたは OracleAS Cluster ソリューションにおいてシングル・ノードのインストールであるかどうかに左右されません。

仮想ホスト名は、仮想 IP と関連付けられます。これは、ハードウェア・クラスタまたはロード・バランサによって Oracle Application Server の中間層が OracleAS Infrastructure の単一のシステム・ビューを表示できるようにするために選択される名前です。この名前と IP のエントリは、サイトが使用する DNS に追加する必要があります。それによって、このエントリをローカルの /etc/hosts (またはそれと同等の) ファイルに追加しなくとも、中間層ノードを OracleAS Infrastructure と関連付けることができるようになります。たとえば、ハードウェア・クラスタの2つの物理的なホスト名が node1.mycompany.com と node2.mycompany.com である場合は、selfservice.mycompany.com という名前によって、このクラスタの単一のビューがもたらされます。DNS では、selfservice は、ハードウェア・クラスタを経由して node1 と node2 の間で移動する OracleAS Infrastructure の仮想 IP アドレスにマップされるか、ロード・バランサによって node1 と node2 の間で移動する仮想アドレス IP にマップされます。この移動はすべて、どちらの物理ノードがアクティブになっていて、特定のリクエストを実際に処理しているかを中間層が把握していくなくても行われます。

関連項目： 『Oracle Application Server 高可用性ガイド』

Oracle Application Server 中間層のインストール中に仮想ホスト名を指定することはできませんが、Cold Failover Cluster 中間層用のインストール後の構成手順に従うことにより、ハードウェア・クラスタまたはロード・バランサを経由して仮想ホスト名を使用することができます。

- フェイルオーバー手順

アクティブ・パッシブ構成には、アクティブなインスタンスの障害を検出し、パッシブなインスタンスにフェイルオーバーしてダウンタイムを最小にするための一連のスクリプトと手順も含まれています。

OracleAS Cold Failover Cluster 構成の利点は次のとおりです。

- 可用性の強化

アクティブなインスタンスに何らかの理由で障害が発生するか、オフラインにしなければならない場合、同一の構成を持つパッシブのインスタンスがアクティブなインスタンスを引き継ぐために常に待機しています。

- 運営コストの削減

アクティブ・パッシブ構成では、1つのセットのプロセスのみが稼働し、リクエストを処理します。通常、アクティブなインスタンスの管理は、多数のアクティブなインスタンスの管理よりも楽な作業で済みます。

- アプリケーションの独立性

アプリケーションの中には、アクティブ・アクティブ構成が適していないものがあります。このようなアプリケーションには、アプリケーションの状態や、ローカルで格納される情報に大きく依存するものがあります。アクティブ・パッシブ構成では、常に1つのインスタンスのみがリクエストを処理します。

一般的に、「OracleAS Cold Failover Cluster」という用語は、Oracle Application Server のインスタンス・レベルにおけるクラスタ化を示します。ただし、クラスタ化されている特定のタイプのインスタンスが必要な場合、このドキュメントでは OracleAS Cold Failover Cluster (タイプ) を使用してクラスタ・ソリューションを特徴付けます。たとえば、次のようになります。

- OracleAS Cold Failover Cluster (Identity Management)

- OracleAS Cold Failover Cluster (中間層)

Oracle Application Server システム (コンテンツのキャッシュ) のエントリ・ポイントからバックエンド・レイヤー (データ・ソース) に至るまで、クライアントのリクエストが通過するすべての層は、OracleAS Cluster を使用した冗長的なアクティブ・アクティブ構成、または OracleAS Cold Failover Cluster を使用したアクティブ・パッシブ構成を使用して構成できます。

インストールの詳細は、[第 10 章「高可用性環境へのインストール : OracleAS Cold Failover Cluster」](#) を参照してください。

9.1.2 OracleAS Cluster

Oracle Application Server は、OracleAS Cluster を使用したそのすべてのコンポーネントに対してアクティブ・アクティブな冗長モデルを用意しています。OracleAS Cluster では、2つ以上の Oracle Application Server のインスタンスが同じアプリケーション・ワーカロードを処理するように構成されます。これらのインスタンスは1台のマシンまたは別々のマシンに常駐できます。アクティブなインスタンスは、外部のロード・バランサによってフロントエンドとして使用し、任意のアクティブなインスタンスにリクエストをリダイレクトするか、アドレス・リストなどの他のアプリケーションレベルの構成によってリクエストを分散することができます。

OracleAS Cluster 構成の最も一般的なプロパティは次のとおりです。

- 同一のインスタンスの構成

各インスタンスは同じワーカロードまたはアプリケーションを処理します。この構成では、同一のリプライが同じリクエストに配信されることが保証されます。構成プロパティには、同一のものと、ローカル・ホスト名情報のようにインスタンスごとに異なるものがあります。

- 総合管理

アクティブ・アクティブ構成では、通常は1つのシステムに行われた変更を他のシステムに伝播する必要があります。

- 独立した運用

可用性を最大化するために、アクティブ - アクティブ構成における 1 つの Oracle Application Server インスタンスを失っても、リクエストの処理を継続する他のインスタンスの能力に影響が及ばないようにする必要があります。

OracleAS Cluster 構成の利点は次のとおりです。

- 可用性の強化

アクティブ - アクティブ構成は、冗長構成です。1 つのインスタンスを失っても、他のインスタンスが同じリクエストを継続して処理できます。

- スケーラビリティとパフォーマンスの強化

同一の構成を持つ複数のインスタンスは、分散されたワークロードを各マシンおよびプロセス間で共有できるようにする機能を備えています。正しく構成すれば、アプリケーションの需要拡大に合わせて新しいインスタンスを追加することもできます。

一般的に、「OracleAS Cluster」という用語は、Oracle Application Server のインスタンス・レベルにおけるクラスタ化を示します。ただし、クラスタ化されている特定のタイプのインスタンスが必要な場合、このドキュメントでは OracleAS Cluster (タイプ) を使用してクラスタ・ソリューションを特徴付けます。たとえば、次のようにになります。

- OracleAS Cluster (J2EE) として知られる 2 つ以上の J2EE インスタンス
- OracleAS Cluster (Portal) として知られる 2 つ以上の OracleAS Portal のインスタンス
- OracleAS Cluster (Identity Management) として知られる 2 つ以上の Oracle Identity Management のインスタンス

OracleAS Cluster (Identity Management) の詳細は、[第 11 章「高可用性環境へのインストール: OracleAS Cluster \(Identity Management\)」](#) を参照してください。

9.1.3 OracleAS Disaster Recovery

OracleAS Disaster Recovery 構成には、次の特性があります。

- 本番サイトとその本番サイトをミラーリングするスタンバイ・サイト。通常、これらのサイトは、洪水、火災、地震などのサイト障害に備えて、互いに離れた場所に設置されます。正常動作時には、本場サイトがすべてのリクエストを処理します。本番サイトが停止すると、スタンバイ・サイトが引き継ぎ、すべてのリクエストを処理します。
- 各サイトには、ハードウェアおよび実行するソフトウェアがすべて備わっています。また、OracleAS Infrastructure の実行用ノードと中間層、ロード・バランサおよび DNS サーバーも含まれています。

OracleAS Disaster Recovery には、OracleAS Infrastructure および中間層が含まれます。詳細は、[第 12 章「高可用性環境へのインストール: OracleAS Disaster Recovery」](#) を参照してください。

9.1.4 相違の概要

表 9-1 は、高可用性構成間の相違をまとめたものです。

表 9-1 高可用性構成間での相違

	OracleAS Cold Failover Cluster	OracleAS Cluster	OracleAS Disaster Recovery
ノード構成	アクティブ - パッシブ	アクティブ - アクティブ	アクティブ - パッシブ
ハードウェア・クラスタ	あり	なし	オプション (OracleAS Infrastructure を OracleAS Cold Failover Cluster 構成にインストールする場合にのみハードウェア・クラスタが必要です)
仮想ホスト名	あり	なし	あり

表 9-1 高可用性構成間での相違（続き）

	OracleAS Cold Failover Cluster	OracleAS Cluster	OracleAS Disaster Recovery
ロード・バランサ	なし	あり	なし
共有記憶域	あり	なし	なし

9.2 高可用性構成のインストール順序

高可用性構成では、コンポーネントは次の順序でインストールします。

1. OracleAS Metadata Repository
2. Oracle Identity Management コンポーネント

Oracle Identity Management のコンポーネントを分散する場合は、それらのコンポーネントを次の順序でインストールします。

- a. Oracle Internet Directory および Oracle Directory Integration and Provisioning
 - b. OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services
3. 中間層

中間層は、他のコンポーネントより先にインストールし、他のコンポーネントのインストールが完了した後に、中間層に高可用性構成を再度関連付けることができます。

10

高可用性環境へのインストール： OracleAS Cold Failover Cluster

この章では、OracleAS Cold Failover Cluster 構成で Oracle Application Server をインストールする方法について説明します。

- 第 10.1 項 「OracleAS Cold Failover Cluster: 概要」
- 第 10.2 項 「OracleAS Cold Failover Cluster のインストール前の手順」
- 第 10.3 項 「OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) 構成のインストール」
- 第 10.4 項 「分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) 構成のインストール」
- 第 10.5 項 「OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) 構成のインストール」
- 第 10.6 項 「分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) 構成のインストール」
- 第 10.7 項 「OracleAS Cold Failover Cluster への Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On のインストール」
- 第 10.8 項 「OracleAS Cold Failover Cluster 環境への OracleAS Metadata Repository のみのインストール」
- 第 10.9 項 「OracleAS Cold Failover Cluster (中間層) のインストール」
- 第 10.10 項 「同じノードへの OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) および OracleAS Cold Failover Cluster (中間層) のインストール」
- 第 10.11 項 「OracleAS Cold Failover Cluster のインストール後の手順」
- 第 10.11 項 「OracleAS Cold Failover Cluster のインストール後の手順」
- 第 10.13 項 「OracleAS Cold Failover Cluster Infrastructure への中間層のインストール」
- 第 10.14 項 「OracleAS Cold Failover Cluster ノードへの標準の中間層のインストール」

10.1 OracleAS Cold Failover Cluster: 概要

OracleAS Cold Failover Cluster 構成では、アクティブおよびパッシブ・ノードがあり、いずれのノードでもアクセスできる共有記憶域があります。

正常動作時は、アクティブ・ノードで Oracle Application Server プロセスが実行され、クライアントからのリクエストが処理されます。アクティブ・ノードに障害が発生すると、フェイルオーバー・イベントが発生します。パッシブ・ノードが引き継ぎ、アクティブ・ノードになります。これによって、共有記憶域がマウントされ、プロセスが実行されます。

構成

OracleAS Cold Failover Cluster は、次の構成でインストールできます。

- OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure)。[第 10.3 項](#)を参照してください。
- 分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure)。[第 10.4 項](#)を参照してください。
- OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management)。[第 10.5 項](#)を参照してください。
- 分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management)。[第 10.6 項](#)を参照してください。
- OracleAS Cold Failover Cluster (中間層)。[第 10.9 項](#)を参照してください。

10.1.1 対称ノードに関する考慮事項

クラスタのノードが対称である場合は、共有ディスクに OracleAS Cold Failover Cluster を構成する際に、より速い手順を選択できます。

クラスタの 2 つのノードが対称かどうかを判断するには、次の情報を確認してください。

OracleAS Cold Failover Cluster の 2 つのノードが同一である場合、それらは対称です。

- ハードウェアの構成 (メモリーや CPU の仕様などが同じ)
- ソフトウェアの構成 (オペレーティング・システムのバージョンやパッチ・レベルなどが同じ)
- Oracle の構成 (両方のノードにインストールされている Oracle 製品や Oracle ホームなどが同じ)

10.2 OracleAS Cold Failover Cluster のインストール前の手順

OracleAS Cold Failover Cluster に Oracle Application Server をインストールする前に、次の手順を実行します。

- [第 10.2.1 項 「Event Log サービスの実行の確認」](#)
- [第 10.2.2 項 「クラスタの仮想アドレスの取得」](#)
- [第 10.2.3 項 「両方のノードへの Microsoft Cluster Server \(MSCS\) のインストールの確認」](#)
- [第 10.2.4 項 「クラスタの名前の確認」](#)
- [第 10.2.5 項 「Oracle Fail Safe を管理するドメイン・ユーザーの決定」](#)
- [第 10.2.6 項 「各ノードのローカル記憶域への Oracle Fail Safe のインストール」](#)
- [第 10.2.7 項 「Oracle Fail Safe でのグループの作成」](#)

10.2.1 Event Log サービスの実行の確認

クラスタ内の両方のノード上で、Event Log サービスが実行されている必要があります。これは「サービス」ダイアログ・ボックスで確認できます。「サービス」ダイアログ・ボックスを表示するには、次の手順を実行します。

- Windows Server 2003 の場合：「スタート」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。

10.2.2 クラスタの仮想アドレスの取得

クラスタに仮想アドレスを関連付ける必要があります。仮想アドレスは、仮想ホスト名および IP アドレスで構成されます。クライアントは仮想ホスト名を使用して OracleAS Cold Failover Cluster にアクセスします。各ノードには、ノード自体のホスト名および IP アドレスに加えて、仮想アドレスが必要です。[図 10-13](#) に、クラスタ内の 2 つのノードの仮想アドレスを示します。

仮想アドレスを取得するには、ネットワーク管理者に連絡してください。仮想ホスト名と仮想 IP アドレスは、クラスタを含むサブネットのコンテキスト内で有効な任意のホスト名および IP アドレスです。

注意： 仮想ホスト名および仮想 IP アドレスは、アクティブ・ノードにのみマップします。仮想ホスト名と IP アドレスを同時にアクティブ・ノードとセカンダリ・ノードの両方にマップしないでください。フェイルオーバーしたときにのみ、アクティブ・ノードになったセカンダリ・ノードに仮想ホスト名と IP アドレスをマップします。

10.2.3 両方のノードへの Microsoft Cluster Server (MSCS) のインストールの確認

MSCS がコンピュータにインストールされていることを確認するには、「スタート」メニューから「クラスタ アドミニストレータ」を起動できることを確認します。

Windows Server 2003 の場合：「スタート」→「管理ツール」→「クラスタ アドミニストレータ」を選択します。

MSCS が使用するクラスタ IP アドレスおよびクラスタ名は、前述の手順で作成した仮想 IP および仮想ホスト名とは異なります。

10.2.4 クラスタの名前の確認

クラスタ・アドミニストレータを使用すると、クラスタの名前を確認できます。

10.2.5 Oracle Fail Safe を管理する ドメイン・ユーザーの決定

OracleMSCSServices サービスを所有する ドメイン・ユーザーが必要です。このサービスは、Oracle Fail Safe のインストール時にインストールされます。

このユーザーの要件は、次のとおりです。

- このユーザーは、(ローカルではなく) ドメイン・レベルで定義されている必要があります。インストール中に、両方のノードで同じユーザーを指定する必要があるためです。
- いずれのノードにも同じ名前を持つローカル・ユーザーが存在しないことを確認します。
- このユーザーは、クラスタ内の両方のノードで管理者権限を持っている必要があります。
- このユーザーは、DBA グループにも属している必要があります。

Oracle Fail Safe のインストール時に、*domainname\username* 形式を使用して、ドメインおよびユーザーを指定します。

10.2.6 各ノードのローカル記憶域への Oracle Fail Safe のインストール

両方のノードのローカル記憶域に Oracle Fail Safe をインストールする必要があります。たとえば、図 10-13 は、両方のノードの C:\Oracle\OFS にインストールされた Oracle Fail Safe を示しています。

Oracle Fail Safe は、Oracle Application Server に付属しています。Oracle Fail Safe は、Oracle Fail Safe の CD-ROM からインストールできます。

両方のノードへ Oracle Fail Safe をインストールする手順の概要

各ノードに Oracle Fail Safe をインストールする手順の概要は、次のとおりです。

1. Oracle Fail Safe のインストールを開始する前に、OracleMSCSServices サービスを所有するドメインおよびユーザーを知っておく必要があります。このサービスは、Oracle Fail Safe のインストール時にインストールされます。このユーザーの詳細は、第 10.2.5 項「Oracle Fail Safe を管理するドメイン・ユーザーの決定」を参照してください。
2. ノード 1 に Oracle Fail Safe をインストールします。詳細は、10-4 ページの「Oracle Fail Safe のインストール手順」を参照してください。
3. ノード 1 を再起動します。
4. ノード 2 に Oracle Fail Safe をインストールします。
5. ノード 2 を再起動します。
6. Oracle Fail Safe Manager を使用して、クラスタを検証します。

Oracle Fail Safe のインストール手順

この項では、Oracle Fail Safe をインストールする際の画面について説明します。各画面の詳細は、『Oracle Fail Safe のインストレーション・ガイド』を参照してください。

1. Oracle Fail Safe CD-ROM を挿入し、setup.exe をダブルクリックしてインストーラを起動します。
2. 「ようこそ」画面：「次へ」をクリックします。
3. 「ファイルの場所の指定」画面で、次の操作を行います。

名前: この Oracle ホームの名前を入力します。たとえば、ofs と入力します。

パス（「インストール先」セクション内）: Oracle Fail Safe のインストール先をフルパスで入力します。Oracle Fail Safe は、ローカル記憶域にインストールする必要があります。たとえば、C:\Oracle\OFS と入力します。

「次へ」をクリックします。

4. 「インストール・タイプの選択」画面：「標準」を選択して「次へ」をクリックします。
次のコンポーネントがインストールされます。

- Oracle Fail Safe Manager
- Oracle Services for MSCS

5. 「インストール終了後再起動してください」画面：この画面では、インストール終了後にコンピュータを再起動する必要があることを示すメッセージが表示されます。「次へ」をクリックします。

6. 「サマリー」画面：「インストール」をクリックします。

7. 「Oracle Services for MSCS のアカウント / パスワードを指定する」画面で、次の操作を行います。

「ドメイン￥ユーザー名￥」: OracleMSCSServices サービスを実行するドメイン名およびユーザー名を入力します。

「パスワード」および「パスワードの確認」: ユーザーのパスワードを指定し、確認します。

「OK」をクリックします。

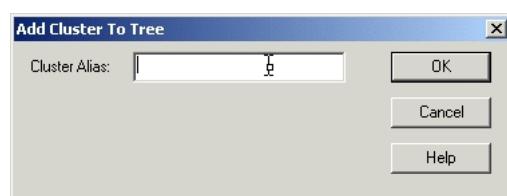
8. 「Configuration Assistants」画面：実行されたコンフィギュレーション・アシスタントの進捗状況が表示されます。
9. 「インストールの終了」：「終了」をクリックします。

クラスタの検証

Oracle Fail Safe のインストール後、Oracle Fail Safe Manager を使用してクラスタを検証します。

1. 「スタート」メニューから Oracle Fail Safe Manager を起動します。
「スタート」→「プログラム」→「Oracle - OracleHomeName」→「Oracle Fail Safe Manager」を選択します。
ここで、*OracleHomeName* は、Oracle Fail Safe をインストールした Oracle ホームの名前です。
2. 「ツリーにクラスタを追加」ダイアログ・ボックスの「クラスタの別名」に、クラスタ名を入力します (図 10-1)。クラスタ名は、クラスタ・アドミニストレータを使用して定義します。「OK」をクリックします。

図 10-1 Oracle Fail Safe Manager: 「ツリーにクラスタを追加」ダイアログ・ボックス



3. 左フレームでクラスタを選択します。Oracle Fail Safe Manager に「ようこそ」ダイアログ・ボックスが表示されます (図 10-2)。この図では、「FSWIN-CLU1」がクラスタ名です。

「クラスタの検証」をクリックします。

Oracle ソフトウェアに関連する警告が表示される場合があります。この警告は、クラスタにまだ製品がインストールされていないために表示されます。この警告は無視できます。ただし、システム警告が表示された場合は、調査する必要があります。

図 10-2 Oracle Fail Safe Manager: 「ようこそ」および「クラスタの検証」ダイアログ・ボックス



10.2.7 Oracle Fail Safe でのグループの作成

Oracle Fail Safe のグループとは、スタンバイ・ノードに一括してフェイルオーバーされる、リソースの論理的な集合です。OracleAS Cold Failover Cluster に OracleAS Infrastructure をインストールする前に Oracle Fail Safe Manager を使用してグループを作成し、そのグループに次のリソースを追加する必要があります。

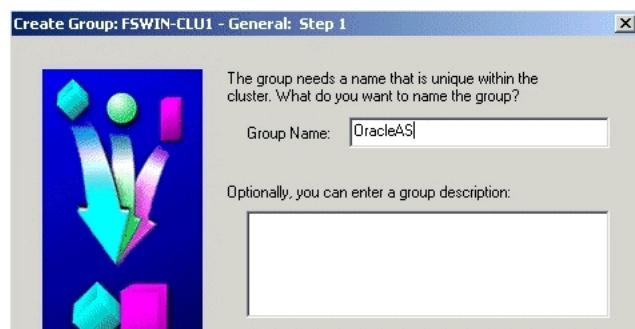
表 10-1 OracleAS Infrastructure のインストール前にグループに追加するリソース OracleAS Infrastructure

グループに追加するリソース	使用するツール
仮想ホストの IP	Oracle Fail Safe Manager
仮想ホスト名	Oracle Fail Safe Manager
共有ディスク	クラスタ・アドミニストレータ

グループを作成および設定するには、次の手順を実行します。この手順を実行すると、(フェイルオーバー・ポリシーやフェイルバック・ポリシー用の) デフォルト属性を持つグループが作成されます。これらの属性は、必要に応じて後で変更できます。詳細は、Oracle Application Server 高可用性ガイドおよび Oracle Fail Safe のドキュメントを参照してください。

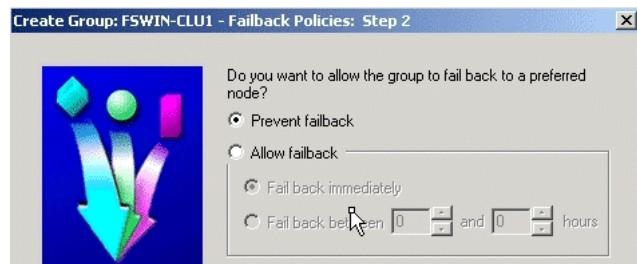
1. 「スタート」メニューから Oracle Fail Safe Manager を起動します。
「スタート」→「プログラム」→「Oracle - OracleHomeName」→「Oracle Fail Safe Manager」を選択します。
ここで、*OracleHomeName* は、Oracle Fail Safe をインストールした Oracle ホーム・ディレクトリの名前です。
2. 左側でクラスタを展開します。
3. 「グループ」を右クリックし、ポップアップ・メニューから「作成」を選択します。グループの作成ウィザードが起動されます。
4. グループの作成ウィザードの画面に従って、「OracleAS」というグループを作成します。
 - a. 「一般：ステップ 1」画面：インフラストラクチャ・リソースのグループ名を入力し、「次へ」をクリックします。このマニュアルでは、「OracleAS」というグループを使用します。

図 10-3 Oracle Fail Safe Manager: グループの作成ウィザードの「一般：ステップ 1」画面



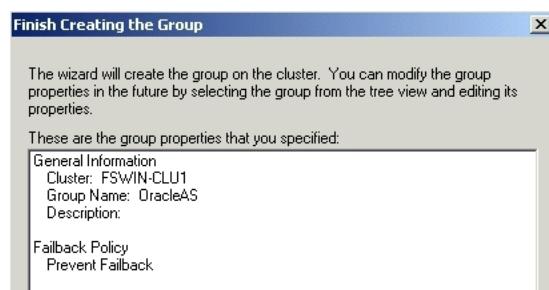
- b. 「フェイルバック・ポリシー：ステップ 2」画面：フェイルバックしないを選択し、「次へ」をクリックします。

図 10-4 Oracle Fail Safe Manager: グループの作成ウィザードの「フェイルバック・ポリシー：ステップ 2」画面



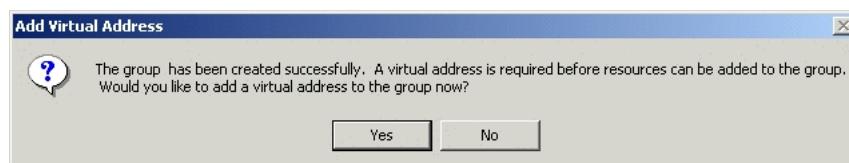
c. 「グループ作成の終了」画面：情報を確認して「OK」をクリックします。

図 10-5 Oracle Fail Safe Manager: グループの作成ウィザードの「グループ作成の終了」画面



d. 「仮想アドレスの追加」画面：「はい」をクリックします。

図 10-6 Oracle Fail Safe Manager: グループの作成ウィザードの「仮想アドレスの追加」画面



e. 「リソースをグループに追加 - 仮想アドレス」画面で、次の操作を行います。

「クライアントからアクセス可能なネットワークの表示」を選択します。

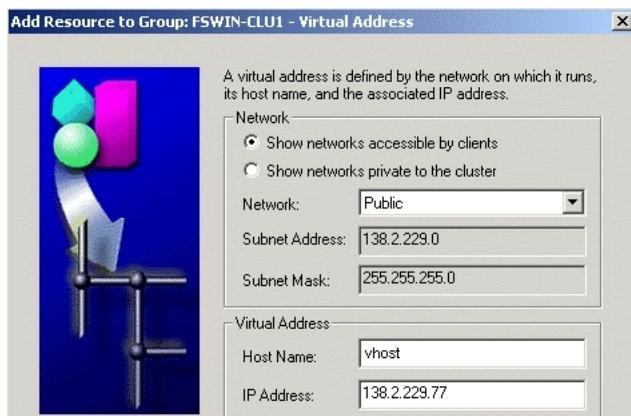
ネットワーク：ノードのプライマリ・ネットワーク・インターフェース・カードに関連付けられている名前を選択します。デフォルトでは、これは「ローカル・エリア接続」です。

ホスト名：仮想ホスト名を入力します。たとえば、vhost と入力します。

IP アドレス：仮想ホスト名の IP を入力します。たとえば、138.2.229.77 と入力します。

「次へ」をクリックします。

図 10-7 Oracle Fail Safe Manager: グループの作成ウィザードの「リソースをグループに追加 - 仮想アドレス」画面



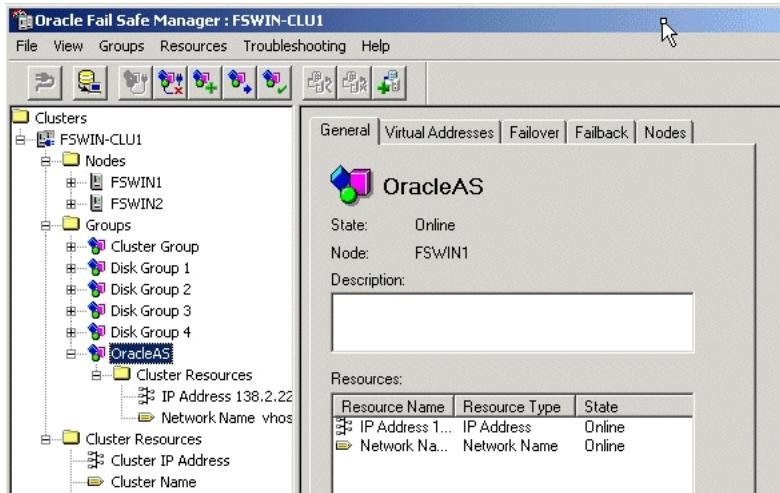
- f. 「仮想アドレスのグループへの追加の完了」画面：情報を確認して、「OK」をクリックします。

図 10-8 Oracle Fail Safe Manager: グループの作成ウィザードの「仮想アドレスのグループへの追加の完了」画面



5. Oracle Fail Safe Manager (図 10-9) で、作成したグループが表示されていること、およびそのグループに次の 2 つのリソースが定義されていることを確認します。
- 仮想ホストの IP アドレス
 - 仮想ホスト名（ネットワーク名として表示）

図 10-9 Oracle Fail Safe Manager での新しいグループのリソースの表示



6. クラスタ・アドミニストレータを使用して、OracleAS Infrastructure をインストールする共有ディスクを、Oracle Fail Safe Manager で作成したグループに移動します。

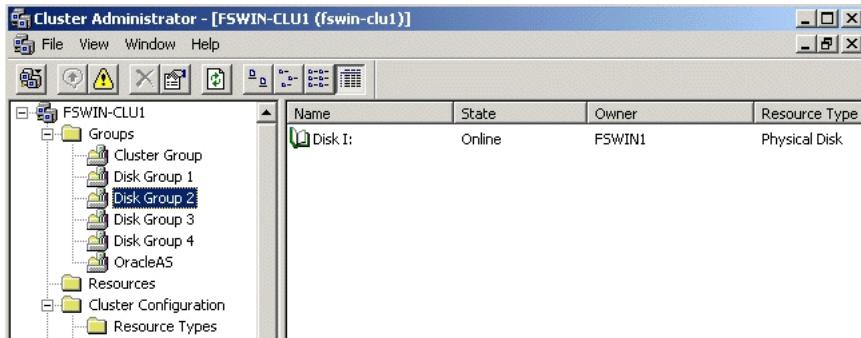
- a. 「スタート」メニューからクラスタ・アドミニストレータを起動します。

Windows Server 2003 の場合：「スタート」→「管理ツール」→「クラスタ アドミニストレータ」を選択します。

- b. 左側で、共有ディスクを含むディスク・グループを選択します。図 10-10 では、Disk I が共有ディスクです。

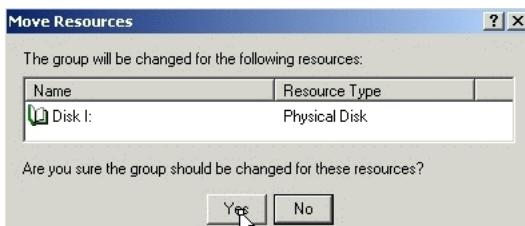
左側の「OracleAS」グループに注意してください。これは、Oracle Fail Safe Manager で作成したグループです。

図 10-10 クラスタ・アドミニストレータでの共有ディスクの表示



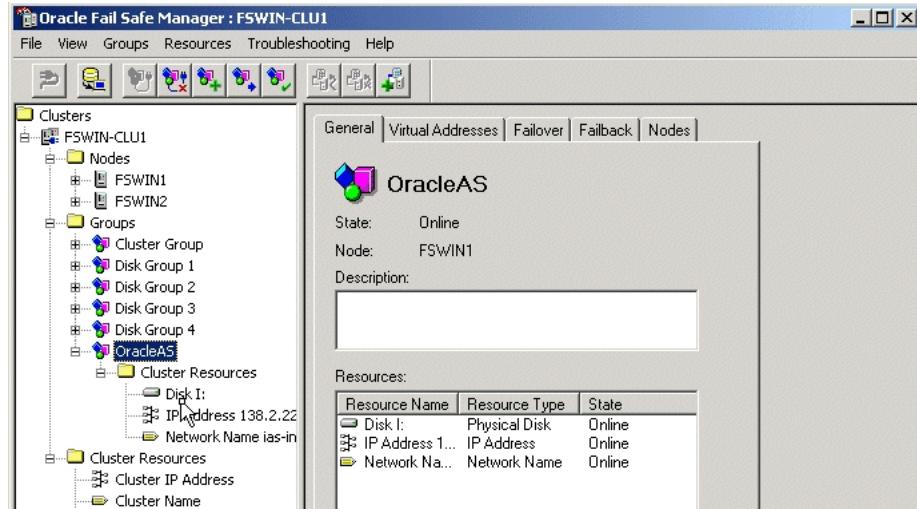
- c. 右側の共有ディスク（この例では Disk I）を左側の「OracleAS」グループへドラッグ・アンド・ドロップします。確認を求めるダイアログ・ボックスが表示されたら（図 10-11）、「はい」をクリックします。

図 10-11 クラスタ・アドミニストレータ：「Move Resources」ダイアログ・ボックス



7. Oracle Fail Safe Manager で、グループに共有ディスクが追加されたことを確認します。

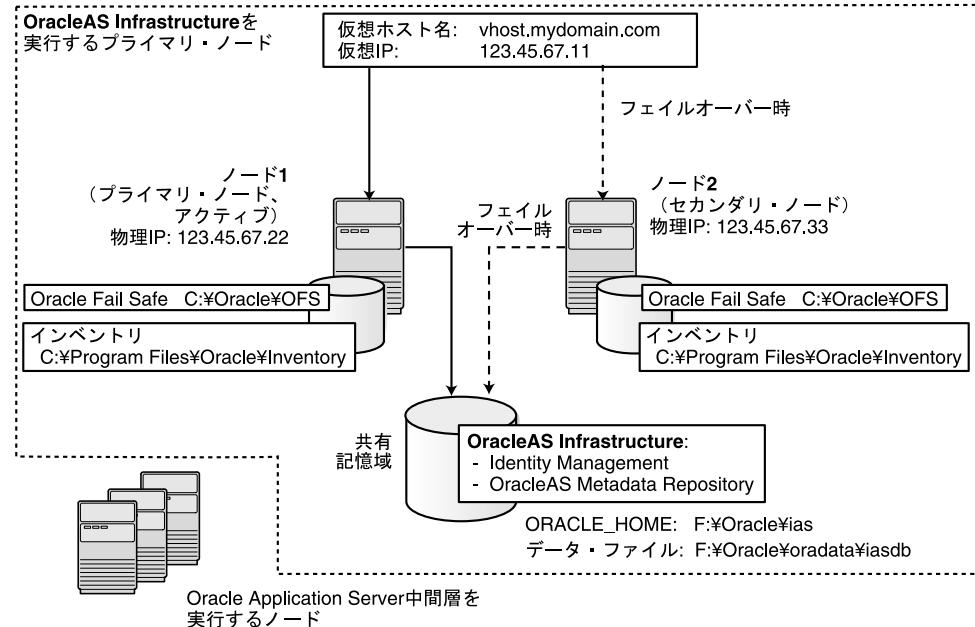
図 10-12 グループへ共有ディスクを追加した後の Oracle Fail Safe Manager の表示



10.3 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) 構成のインストール

図 10-13 に、OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) 構成を示します。

図 10-13 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) 構成



この図では、次のことが示されています。

- Oracle Fail Safe を実行する 2 つのノード。Oracle Fail Safe は、フェイルオーバー時にデータベース・リスナーの構成、他のノードでの OracleAS Infrastructure プロセスの正しい順序での起動など、OracleAS Infrastructure に固有のタスクを実行します。
- 各ノード独自の記憶デバイス
- 両方のノードからアクセスできる記憶デバイス。OracleAS Infrastructure は、共有記憶デバイスにインストールします。

正常動作時には、1 つのノード（ノード 1）がアクティブ・ノードとして機能します。このノードは、共有記憶域をマウントして OracleAS Infrastructure ファイルにアクセスし、OracleAS Infrastructure プロセスを実行して、すべてのリクエストを処理します。

アクティブ・ノードがなんらかの理由で停止すると、MSCS によって OracleAS Infrastructure プロセスがもう一方のノード（ノード 2）にフェイルオーバーされ、ノード 2 がアクティブ・ノードになります。このノードは、共有記憶域をマウントしてプロセスを実行し、すべてのリクエストを処理します。

これらのノードは、仮想アドレスを使用することによって、クライアントからは 1 つのコンピュータとして認識されます。中間層コンポーネント、アプリケーションなどのクライアントは、OracleAS Infrastructure にアクセスするために、クラスタに関連付けられた仮想アドレスを使用します。仮想アドレスは、アクティブ・ノード（正常動作時にはノード 1、ノード 1 が停止した場合はノード 2）に関連付けられます。どちらのノード（ノード 1 またはノード 2）がリクエストを処理しているかをクライアントが認識する必要はありません。

インフラストラクチャにアクセスする URL に仮想ホスト名を使用します。たとえば、`vhost.mydomain.com` が仮想ホスト名である場合、Oracle HTTP Server および Application Server Control の URL は次のようにになります。

次のものの URL	URL の例
Oracle HTTP Server、「ようこそ」ページ	<code>http://vhost.mydomain.com:80</code>
Oracle HTTP Server、セキュア・モード	<code>https://vhost.mydomain.com:443</code>
Application Server Control	<code>http://vhost.mydomain.com:18100</code>

ソフトウェアの場所

表 10-2 に、次の記憶デバイス上での主要ソフトウェアの場所を示します。

表 10-2 Infrastructure ノードのソフトウェア

ソフトウェア	インストール場所
Oracle Fail Safe リリース 3.3.3	各ノードのローカル記憶デバイス
Microsoft Cluster Server (MSCS)	各ノードのローカル記憶デバイス
OracleAS Infrastructure	共有記憶デバイス

MSCS 要件

これらのノードでは MSCS が使用されるため、ノードが MSCS のハードウェア要件を満たしていることを確認してください。詳細は、Microsoft のサイト (<http://www.microsoft.com>) を参照してください。

注意： ノードでは MSCS が使用されるため、ノードの IP アドレスは静的である必要があります。DHCP は使用できません。

Oracle Application Server 中間層

他のノード (OracleAS Infrastructure を実行していないノード) に中間層をインストールして実行できます。インストール時に、共有記憶デバイスにインストールした OracleAS Infrastructure からのサービスを使用するように中間層を設定します。

中間層用の OracleAS Cold Failover Cluster 構成を使用せずにクラスタ・ノードに中間層をインストールして実行することもできます。その場合には、通常のインストール・プロセスを使用して中間層をインストールします。これを行う場合は、フェイルオーバーが発生したときに中間層のポートが OracleAS Infrastructure のポートと競合しないことを確認してください。

OracleAS Infrastructure を実行している同一クラスタの OracleAS Cold Failover Cluster 構成に中間層をインストールして実行する場合は、[第 10.10 項「同じノードへの OracleAS Cold Failover Cluster \(Infrastructure\) および OracleAS Cold Failover Cluster \(中間層\) のインストール」](#) を参照してください。

10.3.1 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) : インストール手順の概要

OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) 構成を設定するには、次の手順を実行します。

注意: クラスタのノードが非対称の場合、OracleAS Infrastructure は、ノード 1 とノード 2 から 1 回ずつ、合計 2 回インストールする必要があります。これによって、各ノードのローカル記憶域が、適切な情報 (Windows レジストリやインベントリ情報など) で更新されます。

OracleAS Infrastructure をノード 2 からインストールする前に、ノード 1 からインストールしたファイルを削除する必要があります。

表 10-3 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) のインストール手順の概要

手順	説明
1. インストール前の手順の実行	インストール前の作業の詳細は、 第 10.2 項 を参照してください。内容は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 第 10.2.1 項「Event Log サービスの実行の確認」 ■ 第 10.2.2 項「クラスタの仮想アドレスの取得」 ■ 第 10.2.3 項「両方のノードへの Microsoft Cluster Server (MSCS) のインストールの確認」 ■ 第 10.2.4 項「クラスタの名前の確認」 ■ 第 10.2.5 項「Oracle Fail Safe を管理するドメイン・ユーザーの決定」 ■ 第 10.2.6 項「各ノードのローカル記憶域への Oracle Fail Safe のインストール」 ■ 第 10.2.7 項「Oracle Fail Safe でのグループの作成」
2. ノード 1 から共有ドライブへの OracleAS Infrastructure のインストール	この手順では、ノード 1 からインストーラを実行して、共有ドライブに OracleAS Infrastructure をインストールします。
3. ノード 1 での OracleAS Infrastructure サービスの停止およびスタートアップの種類の手動への設定	Oracle ホームを削除するため、OracleAS Infrastructure サービスを停止します。
4. ノード 2 の構成	OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) をインストールするノードが対称か非対称かであるかによって、この部分で実行する手順は異なります。
5. ノード 2 の再起動	ノード 2 を再起動します。
6. ノード 2 へのグループの移動	ノード 2 のコントロールの下へ、作成した Oracle Fail Safe グループを移動します。

表 10-3 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) のインストール手順の概要（続き）

手順	説明
7. ノード 2 での OracleAS Infrastructure サービスの開始	ノード 2 で OracleAS Infrastructure サービスを開始します。
8. インストールの検証	OracleAS Metadata Repository、OPMN および Application Server Control の高可用性設定を行う前に、Application Server Control にアクセスして、OracleAS Infrastructure が正しくインストールされていることを確認します。
10. データベースの pfile の作成	OracleAS Metadata Repository データベースの pfile（パラメータ・テキスト・ファイル）を作成します。この pfile は Oracle Fail Safe によって使用されます。
11. OracleAS Metadata Repository の高可用性設定	Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして OracleAS Metadata Repository を追加します。
12. リスナーへの共有ディスクの依存関係の追加	この手順を実行すると、リスナーによるフェイルオーバーが正常に行われるようになります。
13. OPMN の高可用性設定	Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして OPMN を追加します。
14. Application Server Control の高可用性設定	Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして Application Server Control を追加します。
15. 正しいリスナーがアクティブであることの確認	この時点では、リスナーは 2 つです。正しい方が実行されていることを確認します。

10.3.2 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) : インストール手順の詳細

この項では、OracleAS Infrastructure を OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) 構成でインストールするための手順を示します。

手順 1 インストール前の手順の実行

第 10.2 項「OracleAS Cold Failover Cluster のインストール前の手順」に示すインストール前の手順を実行します。

手順 2 ノード 1 から共有ドライブへの OracleAS Infrastructure のインストール

OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) では、「インストール・タイプの選択」画面で「Identity Management and Metadata Repository」を選択して、OracleAS Metadata Repository と Oracle Identity Management の両方を同じ Oracle ホームにインストールします。このオプションにより、OracleAS Metadata Repository 用の新規のデータベースと新規の Oracle Internet Directory が作成されます。

注意 :

- インストール先のディレクトリとして、共有ディスク上のディレクトリを指定する必要があります。
- 「構成オプションの選択」画面で「高可用性およびレプリケーション」を選択する必要があります。デフォルトでは、このオプションは選択されていません。
- 「仮想ホストの指定」画面で、仮想ホスト名を入力します。

インストーラの画面

表 10-4 に示す順序で、インストーラを実行して画面に従います。

表 10-4 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) への OracleAS Infrastructure のインストール

画面	操作
1. --	インストーラを起動します。詳細は、 第 4.13 項「Oracle Universal Installer の起動」 を参照してください。
2. ようこそ	「次へ」をクリックします。
3. ファイルの場所の指定	<p>名前: この Oracle ホームを識別する名前を入力します。Oracle ホームの名前には英数字およびアンダースコア (_) のみを使用でき、最大 128 文字です。</p> <p>例: OH_INFRA</p> <p>「インストール先」の「パス」: 共有ドライブ上のインストール先のディレクトリのフルパスを入力します。これは Oracle ホームです。</p> <p>注意:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ OracleAS Infrastructure は共有ドライブにインストールする必要があります。 ■ 新しい Oracle ホームの名前およびディレクトリを入力する必要があります。ドロップダウン・リストから既存の Oracle ホームを選択しないでください。 <p>例: F:\\$oracle\\$OraInfra</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. インストールする製品の選択	<p>インフラストラクチャをインストールする OracleAS Infrastructure を選択します。</p> <p>追加の言語をインストールする必要がある場合は、「製品の言語」をクリックします。詳細は、第 4.6 項「追加の言語のインストール」 を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. インストール・タイプの選択	<p>「Identity Management and Metadata Repository」を選択します。「次へ」をクリックします。</p> <p>環境変数 TEMP が設定されていないことを示すエラー・メッセージが表示された場合は、デフォルトの一時ディレクトリの領域が十分ではないことを示しています。異なるディレクトリを指すように環境変数 TEMP を設定するか、またはデフォルトの一時ディレクトリに十分な領域を確保する必要があります。</p> <p>環境変数 TEMP の詳細は、第 3.6.5 項「TEMP」 を参照してください。</p>
6. インストール前の要件の確認	表示されたすべての要件を満たしていることを確認し、「次へ」をクリックします。
7. 構成オプションの選択	<p>「Oracle Internet Directory」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server Single Sign-On」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server Delegated Administration Service」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server Directory Integration and Provisioning」を選択します。</p> <p>認証局が必要な場合は、「Oracle Application Server Certificate Authority (OCA)」を選択します。</p> <p>「高可用性およびレプリケーション」を選択します。このオプションは選択する必要があります。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 10-4 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) への OracleAS Infrastructure のインストール（続き）

画面	操作
8. ポート構成オプションの指定	コンポーネントにデフォルトのポートを使用する場合は、「自動」を選択します。 staticports.ini ファイルをすでに作成していて、デフォルトのポートを使用しない場合は、「手動」を選択し、指定されたフィールドに staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。 「次へ」をクリックします。
9. 高可用性またはレプリケーション・オプションの選択	「仮想ホスト」を選択し、「次へ」をクリックします。
10. Internet Directory のネームスペースの指定	推奨されるネームスペースを選択するか、またはデフォルトの Oracle Identity Management レルムの場所のカスタム・ネームスペースを入力します。 「推奨ネームスペース」に表示された値が配置要件を満たしていることを確認します。要件を満たさない場合は、「カスタム・ネームスペース」に必要な値を入力します。手順については、 第 5.15 項「[Internet Directory のネームスペースの指定] 画面での入力 を参照してください。 「次へ」をクリックします。
11. 仮想ホストの指定	注意: これは、インフラストラクチャを OracleAS Cold Failover Cluster にインストールするときに重要な画面です。この画面が表示されない場合は、次の項目を確認してください。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 「高可用性またはレプリケーション・オプションの選択」画面に戻り、「仮想ホスト」を選択していることを確認します。 ■ 「構成オプションの選択」画面に戻り、「高可用性およびレプリケーション」を選択していることを確認します。 仮想ホスト名: OracleAS Cold Failover Cluster の仮想ホスト名を入力します。仮想 CE%f 名は 第 10.2.2 項「クラスタの仮想アドレスの取得」 で作成しています。 例: vhost.mydomain.com 「次へ」をクリックします。
12. OCA の画面	「構成オプションの選択」画面で「 Oracle Application Server Certificate Authority (OCA) 」を選択した場合、インストーラによって OCA を構成するための画面が表示されます。詳細は、 第 5.28 項「インストールの一部: OCA の画面」 を参照してください。

表 10-4 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) への OracleAS Infrastructure のインストール (続き)

画面	操作
13. データベース構成オプションの指定	<p>グローバル・データベース名: OracleAS Metadata Repository データベースの名前を入力します。コンピュータのドメイン名をデータベース名に追加します。グローバル・データベース名でのこのドメイン名は、ご使用のネットワーク・ドメイン名とは異なる名前にすることができます。</p> <p>グローバル・データベース名のドメイン名の部分には、次のネーミング制限があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 英数字、アンダースコア (_) およびシャープ (#) 文字のみを使用できます。 ■ 最大 128 文字です。 <p>グローバル・データベース名のデータベース名の部分には、次のネーミング制限があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 英数字のみを使用できます。 ■ 最大 8 文字です。 <p>■ PORT または HOST を大文字で使用することはできません。「host」または「port」を含む名前にする場合は、小文字を使用します。</p> <p>例: orcl.mydomain.com</p> <p>注意: 2つ以上のピリオドと一緒に入力しないでください。たとえば、orcl.mydomain.com です。これに関してインストーラはチェックを行わないので、後で、これがインストール・プロセス中のエラーの原因になります。</p> <p>SID: OracleAS Metadata Repository データベースのシステム識別子を入力します。通常、これはグローバル・データベース名と同じですが、ドメイン名は含まれません。SID は、すべてのデータベースで一意である必要があります。</p> <p>SID には、次のネーミング制限があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 英数字のみを使用できます。 ■ 最大 8 文字です。 <p>■ PORT または HOST を大文字で使用することはできません。「host」または「port」を含む名前にする場合は、小文字を使用します。</p> <p>例: orcl</p> <p>データベース・キャラクタ・セット: 使用するキャラクタ・セットを選択します。詳細は、第 5.14 項「NE8ISO8859P10 および CEL8ISO8859P14 キャラクタ・セットのサポート」 を参照してください。</p> <p>データベース・ファイルの場所: データ・ファイル・ディレクトリの親ディレクトリへのフルパスを入力します。この親ディレクトリはすでに存在している必要があります、このディレクトリへの書き込み権限を所有している必要があります。</p> <p>注意: ディレクトリ上の共有ドライブを入力する必要があります。</p> <p>インストーラによって、この親ディレクトリにサブディレクトリが作成されます。サブディレクトリは SID と同じ名前になります。データ・ファイルは、このサブディレクトリに配置されます。</p> <p>たとえば、F:\oracle\oradata と入力し、SID が orcl の場合、データ・ファイルは F:\oracle\oradata\orcl に配置されます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
14. データベース・スキーマのパスワードの指定	<p>権限付きデータベース・スキーマ (SYS、SYSTEM、SYSMAN および DBSNMP) のパスワードを設定します。各スキーマに対して異なるパスワードを設定することも、すべてのスキーマに同じパスワードを設定することもできます。</p> <p>これらのアカウントのパスワードを設定するための規則については、第 5.13 項「SYS、SYSTEM、SYSMAN、および DBSNMP ユーザー用のパスワードの制限」 を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
15. --	<p>インストールを終了します。詳細は、第 5.26 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。</p>

手順3 ノード1でのOracleAS Infrastructureサービスの停止およびスタートアップの種類の手動への設定

- 「サービス」 ウィンドウを表示します。

Windows Server 2003 の場合：「スタート」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。

- 次のサービスを停止します。

- Oracle<OracleHomeName>ASControl
- Oracle<OracleHomeName>ProcessManager
- Oracle<OracleHomeName>TNSListener
- OracleService<SID>

サービスを停止するには、サービスを右クリックし、ポップアップ・メニューから「停止」を選択します。

- 前述のサービスのスタートアップの種類を、手動に設定します。

- サービスを右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- 「スタートアップの種類」セクションで「手動」を選択して、「OK」をクリックします。

手順4 ノード2の構成

OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) をインストールするノードが対称である場合は、A: ノードが対称の場合の手順を実行してノード2を構成できます。ノードが対称でない場合は、B: ノードが非対称の場合の手順を実行する必要があります。ノードが対称かどうかを判断するには、第10.1.1項「対称ノードに関する考慮事項」を参照してください。

A: ノードが対称の場合

- ノード1からOracleレジストリの設定をエクスポートします。

- ノード1から、Windowsの「スタート」→「ファイル名を指定して実行」を選択して、表示されたテキスト・フィールドに「regedit」と入力します。
- Windowsレジストリで HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Oracle を検索して選択します。
- 「レジストリ」メニューで「レジストリ ファイルのエクスポート」を選択します。
- 標示されたダイアログ・ボックスで、「選択された部分」ラジオ・ボタンが選択されていること、および「HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Oracle」部分が選択されていることを確認します。
- エクスポートされたレジストリ・ファイルに名前を入力して、「保存」をクリックします。

たとえば、「oracle_registry_entries」のように入力します。

レジストリ・ファイルは、ローカル・ディスクと共有ディスクのいずれにも保存できます。ローカル・ディスクに保存する場合は、ノード2にファイルをコピーする必要があります。

2. ノード1からノード2にOracleインベントリをコピーします。

Oracle Universal Installer のインベントリには、ホスト上のすべての Oracle ホームにインストールされたすべての Oracle ソフトウェア製品に関する情報が格納されます。ただし、インストール作業で Oracle Universal Installer を使用した製品に限られます。

Oracle インベントリ情報は、Extensible Markup Language (XML) 形式で、ホストの单一ディレクトリ構造に格納されます。このインベントリは通常、Windows システムでは次のディレクトリに配置されます。

C:\Program Files\Oracle\Inventory

Windows レジストリで次のレジストリ・キーを選択し、inst_loc 文字列の値を参照すると、インベントリの場所がいつでもわかります。

\HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Oracle

ノード2にOracleインベントリをコピーするには、ディレクトリ全体（例：C:\Program Files\Oracle\Inventory）を選択して、ノード2の同じ場所にコピーします。

3. ノード2のWindowsレジストリに、レジストリ設定をインポートします。

- a. ノード2にログインします。
- b. ノード1からレジストリ・エントリをエクスポートしたときに作成した oracle_registry_entries.reg ファイルをダブルクリックします。
- c. レジストリ・エントリの追加を求められたら、「はい」をクリックします。

4. 10g リリース 2 (10.1.2) に必要な Windows サービスを作成して起動します。

ノード2にWindowsサービスを作成するには、SC ツール (sc.exe) を使用できます。これは、Microsoft 社が提供するサービス・コントロール管理ツールです。

注意： この手順を実行する前に、使用する sc.exe プログラムのバージョンが 5.0.2134.1 以降であることを確認してください。詳細は、Microsoft 社の Web サイトを参照してください。

SC ツールを使用して、必要なサービスをノード2に作成します。SC ツールでは、各オプションの後ろにスペースが必要です。

- a. Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN) の場合：

```
sc create Oracle<home name>ProcessManager
    binPath= "ORACLE_HOME\opmn\bin\opmn.exe -S"
```

たとえば、次のようにになります。

```
sc create OracleINFRAProcessManager
    binPath= "C:\oracle\OraInfras\bin\opmn.exe -S"
```

- b. Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control の場合：

```
sc create Oracle<home name>ASControl
    binPath= "ORACLE_HOME\bin\nmesrvc.exe"
```

たとえば、次のようにになります。

```
sc create OracleINFRAASControl
    binPath= "C:\oracle\OraInfras\bin\nmesrvc.exe"
```

- c. OracleAS Metadata Repository データベース・リスナーの場合 :

```
sc create Oracle<home name>TNSListener
binPath= "ORACLE_HOME\bin\TNSLSNR"
```

たとえば、次のようになります。

```
sc create OracleINFRATNSListener
binPath= "C:\oracle\OraInfra\bin\TNSLSNR"
```

- d. OracleAS Metadata Repository データベースの場合 :

```
sc create OracleService<oracle_sid>
binPath= "ORACLE_HOME\bin\oracle.exe oracle_sid"
```

oracle_sid は大文字にしてください。たとえば、次のようになります。

```
sc create OracleServiceORCL
binPath= "C:\oracle\OraInfra\bin\ORACLE.EXE ORCL"
```

- e. Database Console の場合 :

```
sc create OracleDBConsole<oracle_sid>
binPath= "ORACLE_HOME\bin\nmesrvc"
```

oracle_sid は大文字にしてください。たとえば、次のようになります。

```
sc create OracleDBConsoleORCL
binPath= "C:\oracle\OraInfra\bin\nmesrvc"
```

- f. Oracle Job Scheduler の場合 :

```
sc create OracleJobScheduler<oracle_sid>
binPath= "ORACLE_HOME\bin\extjob.exe oracle_sid"
```

oracle_sid は大文字にしてください。たとえば、次のようになります。

```
sc create OracleJobSchedulerORCL
binPath= "C:\oracle\OraInfra\bin\extjob.exe ORCL"
```

5. 必要なパスを環境変数 PATH に追加します。

「システムのプロパティ」コントロール・パネルで、Windows の変数 PATH の先頭に次の内容を追加します。

```
%ORACLE_HOME%\bin;%ORACLE_HOME%\jlib;
```

関連項目 : 具体的な Windows プラットフォームに変数 PATH を設定する方法に関する説明は、Windows のオンライン・ヘルプを参照してください。

6. グローバルな環境変数を作成します。

「システムのプロパティ」コントロール・パネルで、環境変数 ORACLE_HOSTNAME を作成して、値を仮想ホスト名に設定します。

環境変数の設定方法の詳細は、[第 3.6.1 項「環境変数の設定方法」](#) を参照してください。

7. データベース・インスタンスを削除します。

ノード1で次のコマンドを実行して、OracleAS Metadata Repository データベース・インスタンスを削除します。

```
F:\>oracle\bin> oradim -delete -sid sid
```

8. ノード1を再起動します。

ノード1を再起動します。再起動中、「OracleAS」グループの下に定義されたリソースはノード2にフェイルオーバーされます。リソースには、仮想ホスト名、仮想ホストのIPおよび共有ディスクが含まれます。フェイルオーバー後は、ノード2がこれらのリソースを所有します。

B: ノードが非対称の場合

2つのノードが対称でない場合は、次の手順を実行してノード2を構成します。

1. データベース・インスタンスを削除します。

ノード1で次のコマンドを実行して、OracleAS Metadata Repository データベース・インスタンスを削除します。

```
F:\>oracle\bin> oradim -delete -sid sid
```

2. ノード1を再起動します。

ノード1を再起動します。再起動中、「OracleAS」グループの下に定義されたリソースはノード2にフェイルオーバーされます。リソースには、仮想ホスト名、仮想ホストのIPおよび共有ディスクが含まれます。フェイルオーバー後は、ノード2がこれらのリソースを所有します。

3. Oracle ホームを削除します。

ノード2から、共有ディスク上の次のディレクトリを削除します。

- OracleAS Infrastructure をインストールした Oracle ホーム・ディレクトリ
- データベース・ファイルをインストールしたディレクトリ

ノード2からインストールを実行すると、これらのディレクトリにファイルがインストールされるため、これらのディレクトリを削除しておく必要があります。次の手順を参照してください。

4. ノード2から共有ディスクに OracleAS Infrastructure をインストールします。

OracleAS Infrastructure を共有ドライブに再度インストールします。ただし、今回は、ノード2からインストールを実行します。ノード1からインストールを実行したときに使用した値と同じ値（同じ Oracle ホームの名前とインストール先のディレクトリ、同じインスタンス名とパスワードなど）を使用します。

インストーラによってノード2のローカル記憶域上の Windows レジストリおよびインベントリ情報が更新されるように、ノード2から OracleAS Infrastructure をインストールする必要があります。

具体的な手順は、[10-13 ページ](#)の手順2 「ノード1から共有ドライブへの OracleAS Infrastructure のインストール」を参照してください。

手順 5 ノード 2 の再起動

ノード 2 を再起動します。

ノード 2 の再起動中に共有ドライブはノード 1 にフェイルオーバーされるため、OracleAS Infrastructure サービスを開始できないことに注意してください。ノード 2 からは、共有ドライブにアクセスして Infrastructure サービスを開始することはできません。

「OK」をクリックします。

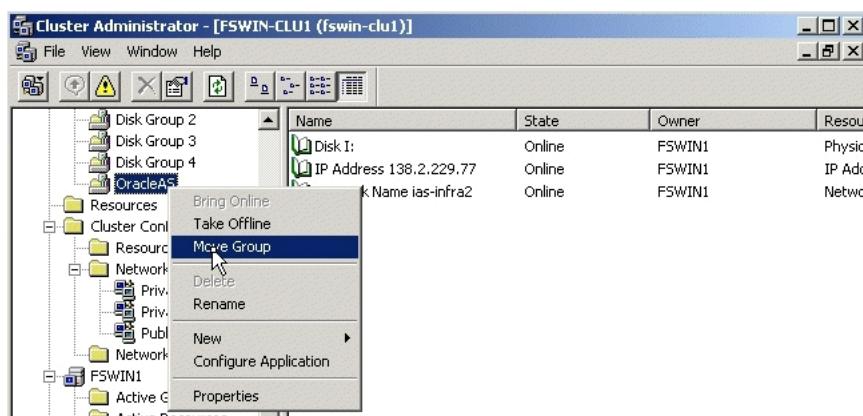
図 10-14 ノード 2 の起動時のエラー・メッセージ



手順 6 ノード 2 へのグループの移動

ノード 2 の起動後に、グループをノード 2 に移動します。クラスタ・アドミニストレータで、グループを右クリックして、「グループの移動」を選択します（図 10-15）。

図 10-15 クラスタ・アドミニストレータ：ノード 2 へのグループの移動



手順 7 ノード 2 での OracleAS Infrastructure サービスの開始

グループをノード 2 へ移動した後、ノード 2 で OracleAS Infrastructure サービスを開始します。

1. データベース・サービスを開始します。

- OracleService<SID>
- Oracle<OracleHomeName>TNSListener

2. データベースが起動していない場合は起動します。データベースが起動しているかどうかを確認するには、SQL*Plus を使用してデータベースにログインします。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
```

アイドル状態のインスタンスに接続されたことが SQL*Plus によって報告された場合、データベースは起動していません。SQL*Plus で次のコマンドを実行して、データベースを起動します。

```
SQL> startup
```

3. 残りのサービスを開始します。

- Oracle<OracleHomeName>ProcessManager
- Oracle<OracleHomeName>ASControl

手順 8 インストールの検証

OracleAS Infrastructure が正しくインストールされていることを検証するには、URL に仮想ホスト名を使用して (<http://vhost.mydomain.com:1156> など)、OracleAS Infrastructure の「Application Server Control」ページにアクセスします。

仮想ホスト名は、「仮想ホストの指定」画面で入力した値です ([10-15 ページ](#)の手順 11. を参照)。

デフォルトのポート番号は、1156 です。ポート番号は、ORACLE_HOME\$\install\portlist.ini ファイルを参照することによって確認できます。

手順 9 データベースの pfile の作成

Oracle Fail Safe では、データベースに pfile (データベースのパラメータが格納されているテキスト・ファイル) があることが必須です。具体的な手順は、[第 10.12.1 項「データベースの pfile の作成」](#)を参照してください。

手順 10 OracleAS Metadata Repository の高可用性設定

Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして OracleAS Metadata Repository を追加します。これによって、プライマリ・ノードに障害が発生した場合、Oracle Fail Safe が OracleAS Metadata Repository をセカンダリ・ノードにフェイルオーバーできるようになります。

詳細は、[第 10.12.2 項「OracleAS Metadata Repository の高可用性設定」](#)を参照してください。

手順 11 リスナーへの共有ディスクの依存関係の追加

これを実行すると、リスナーによるフェイルオーバーが正常に行われるようになります。これは Oracle Fail Safe を使用して実行します。詳細は、[第 10.12.3 項「リスナーへの共有ディスクの依存関係の追加」](#)を参照してください。

手順 12 OPMN の高可用性設定

Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして OPMN を追加します。詳細は、[第 10.12.4 項「OPMN の高可用性設定」](#)を参照してください。

手順 13 Application Server Control の高可用性設定

Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして Application Server Control を追加します。詳細は、[第 10.12.6 項「Application Server Control の高可用性設定」](#)を参照してください。

手順 14 正しいリスナーがアクティブであることの確認

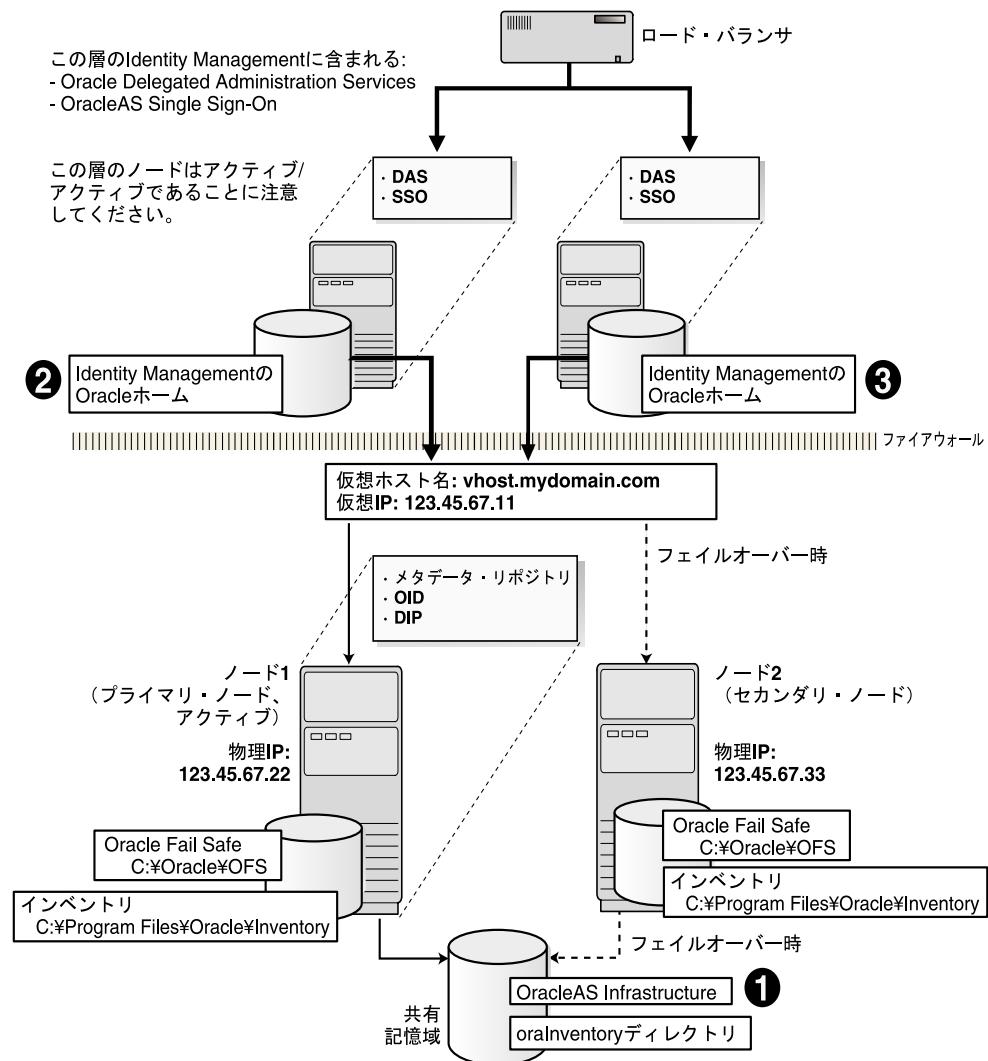
Oracle Fail Safe によって別のリスナーが作成されます。このリスナーは実行しておく必要があります。詳細は、[第 10.12.7 項「正しいリスナーがアクティブであることの確認」](#)を参照してください。

10.4 分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) 構成のインストール

図 10-16 に、分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) 構成を示します。

この構成は、OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services コンポーネントをアクティブ - アクティブ構成で別のノードに個別にインストールすること以外、第 10.3 項「OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) 構成のインストール」に示す構成と同様です。

図 10-16 分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) 構成



分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) 構成では、OracleAS Metadata Repository、Oracle Internet Directory および Oracle Directory Integration and Provisioning をアクティブ - パッシブ構成で実行します。

ただし、OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services コンポーネントは、アクティブ - アクティブ構成で実行します。これらのコンポーネントを実行しているノードにリクエストを送るためのロード・バランサがあります。

10.4.1 分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) : インストール手順の概要

分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) 構成を設定するには、次の手順を実行します。

注意: クラスタのノードが非対称の場合、OracleAS Infrastructure は、ノード 1 とノード 2 から 1 回ずつ、合計 2 回インストールする必要があります。これによって、各ノードのローカル記憶域が、適切な情報 (Windows レジストリやインベントリ情報など) で更新されます。

OracleAS Infrastructure をノード 2 からインストールする前に、ノード 1 からインストールしたファイルを削除する必要があります。

表 10-5 分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) のインストール手順の概要

手順	説明
1. インストール前の手順の実行	インストール前の作業の詳細は、第 10.2 項を参照してください。内容は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 第 10.2.1 項「Event Log サービスの実行の確認」 ■ 第 10.2.2 項「クラスタの仮想アドレスの取得」 ■ 第 10.2.3 項「両方のノードへの Microsoft Cluster Server (MSCS) のインストールの確認」 ■ 第 10.2.4 項「クラスタの名前の確認」 ■ 第 10.2.5 項「Oracle Fail Safe を管理するドメイン・ユーザーの決定」 ■ 第 10.2.6 項「各ノードのローカル記憶域への Oracle Fail Safe のインストール」 ■ 第 10.2.7 項「Oracle Fail Safe でのグループの作成」
2. ノード 1 から共有ドライブへの OracleAS Infrastructure のインストール	この手順では、ノード 1 からインストーラを実行して、共有ドライブに OracleAS Infrastructure をインストールします。OracleAS Single Sign-On、Oracle Delegated Administration Services、および OCA 以外のすべてのコンポーネントをインストールします。
3. ノード 1 での OracleAS Infrastructure サービスの停止およびスタートアップの種類の手動への設定	Oracle ホームを削除するため、OracleAS Infrastructure サービスを停止します。
4. ノード 2 の構成	OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) をインストールするノードが対称か非対称かであるかによって、この部分で実行する手順は異なります。
5. ノード 2 の再起動	ノード 2 を再起動します。
6. ノード 2 へのグループの移動	ノード 2 のコントロールの下に、Oracle Fail Safe で作成したグループを移動します。
7. ノード 2 での OracleAS Infrastructure サービスの開始	ノード 2 で OracleAS Infrastructure サービスを開始します。
8. インストールの検証	OracleAS Metadata Repository、OPMN および Application Server Control の高可用性設定を行う前に、Application Server Control にアクセスして、OracleAS Infrastructure が正しくインストールされていることを確認します。
9. データベースの pfile の作成	Oracle Fail Safe の pfile (パラメータ・テキスト・ファイル) を作成します。
10. OracleAS Metadata Repository の高可用性設定	Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして OracleAS Metadata Repository を追加します。

表 10-5 分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) のインストール手順の概要（続き）

手順	説明
11. リスナーへの共有ディスクの依存関係の追加	この手順を実行すると、リスナーによるフェイルオーバーが正常に行われるようになります。
12. OPMN の高可用性設定	Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして OPMN を追加します。
13. Application Server Control の高可用性設定	Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして Application Server Control を追加します。
14. 正しいリスナーがアクティブであることの確認	この時点では、リスナーは 2 つです。正しい方が実行されていることを確認します。
15. OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services のインストール	この手順では、OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services をインストールします。

10.4.2 分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) : インストール手順の詳細

手順 1 インストール前の手順の実行

第 10.2 項「OracleAS Cold Failover Cluster のインストール前の手順」に示すインストール前の手順を実行します。

手順 2 ノード 1 から共有ドライブへの OracleAS Infrastructure のインストール

分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) 構成では、「インストール・タイプの選択」画面で「Identity Management and Metadata Repository」を選択して、OracleAS Metadata Repository と Oracle Identity Management の両方を同じ Oracle ホームにインストールします。このオプションにより、OracleAS Metadata Repository 用の新規のデータベースと新規の Oracle Internet Directory が作成されます。

手順は、「構成オプションの選択」画面で「OracleAS Single Sign-On」、「Oracle Application Server Delegated Administration Services」および「OracleAS Certificate Authority (OCA)」を選択しないこと以外は、10-13 ページの手順 2 「ノード 1 から共有ドライブへの OracleAS Infrastructure のインストール」と同じです。

手順 3 ノード 1 での OracleAS Infrastructure サービスの停止およびスタートアップの種類の手動への設定

1. 「サービス」 ウィンドウを表示します。

Windows Server 2003 の場合：「スタート」 → 「管理ツール」 → 「サービス」を選択します。

2. 次のサービスを停止します。

- Oracle<OracleHomeName>ASControl
- Oracle<OracleHomeName>ProcessManager
- Oracle<OracleHomeName>TNSListener
- OracleService<SID>

サービスを停止するには、サービスを右クリックし、ポップアップ・メニューから「停止」を選択します。

3. 前述のサービスのスタートアップの種類を、手動に設定します。

- a. サービスを右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- b. 「スタートアップの種類」セクションで「手動」を選択して、「OK」をクリックします。

手順 4 ノード 2 の構成

OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) をインストールするノードが対称である場合は、**A: ノードが対称の場合**の手順を実行してノード 2 を構成できます。ノードが対称でない場合は、**B: ノードが非対称の場合**の手順を実行する必要があります。ノードが対称かどうかを判断するには、第 10.1.1 項「対称ノードに関する考慮事項」を参照してください。

A: ノードが対称の場合

1. ノード 1 から Oracle レジストリの設定をエクスポートします。
 - a. ノード 1 から、Windows の「スタート」→「ファイル名を指定して実行」を選択して、表示されたテキスト・フィールドに「regedit」と入力します。
 - b. Windows レジストリで HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Oracle を検索して選択します。
 - c. 「レジストリ」メニューで「レジストリ ファイルのエクスポート」を選択します。
 - d. 標示されたダイアログ・ボックスで、「選択された部分」ラジオ・ボタンが選択されていること、および「HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Oracle」部分が選択されていることを確認します。
 - e. エクスポートされたレジストリ・ファイルに名前を入力して、「保存」をクリックします。
たとえば、「oracle_registry_entries」のように入力します。

レジストリ・ファイルは、ローカル・ディスクと共有ディスクのいずれにも保存できます。ローカル・ディスクに保存する場合は、ノード 2 にファイルをコピーする必要があります。

2. ノード 1 からノード 2 に Oracle インベントリをコピーします。

Oracle Universal Installer のインベントリには、ホスト上のすべての Oracle ホームにインストールされたすべての Oracle ソフトウェア製品に関する情報が格納されます。ただし、インストール作業で Oracle Universal Installer を使用した製品に限られます。

Oracle インベントリ情報は、Extensible Markup Language (XML) 形式で、ホストの单一ディレクトリ構造に格納されます。このインベントリは通常、Windows システムでは次のディレクトリに配置されます。

C:\Program Files\Oracle\Inventory

Windows レジストリで次のレジストリ・キーを選択し、inst_loc 文字列の値を参照すると、インベントリの場所がいつでもわかります。

\HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Oracle\

ノード 2 に Oracle インベントリをコピーするには、ディレクトリ全体（例：C:\Program Files\Oracle\Inventory）を選択して、ノード 2 の同じ場所にコピーします。

3. ノード 2 の Windows レジストリに、レジストリ設定をインポートします。

- a. ノード 2 にログインします。
- b. ノード 1 からレジストリ・エントリをエクスポートしたときに作成した oracle_registry_entries.reg ファイルをダブルクリックします。
- c. レジストリ・エントリの追加を求められたら、「はい」をクリックします。

4. 10g リリース 2 (10.1.2) に必要な Windows サービスを作成して起動します。

ノード 2 に Windows サービスを作成するには、SC ツール (sc.exe) を使用できます。これは、Microsoft 社が提供するサービス・コントロール管理ツールです。

注意： この手順を実行する前に、使用する sc.exe プログラムのバージョンが 5.0.2134.1 以降であることを確認してください。詳細は、Microsoft 社の Web サイトを参照してください。

SC ツールを使用して、必要なサービスをノード 2 に作成します。SC ツールでは、各オプションの後ろにスペースが必要です。

- a. Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN) の場合 :

```
sc create Oracle<home name>ProcessManager
binPath= "ORACLE_HOME\opmn\bin\opmn.exe -S"
```

たとえば、次のようになります。

```
sc create OracleINFRAProcessManager
binPath= "C:\oracle\OraInfra\opmn\bin\opmn.exe -S"
```

- b. Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control の場合 :

```
sc create Oracle<home name>ASControl
binPath= "ORACLE_HOME\bin\nmesrvc.exe"
```

たとえば、次のようになります。

```
sc create OracleINFRAASControl
binPath= "C:\oracle\OraInfra\bin\nmesrvc.exe"
```

- c. OracleAS Metadata Repository データベース・リスナーの場合 :

```
sc create Oracle<home name>TNSListener
binPath= "ORACLE_HOME\bin\TNSLSNR"
```

たとえば、次のようになります。

```
sc create OracleINFRATNSListener
binPath= "C:\oracle\OraInfra\bin\TNSLSNR"
```

- d. OracleAS Metadata Repository データベースの場合 :

```
sc create OracleService<oracle_sid>
binPath= "ORACLE_HOME\bin\oracle.exe oracle_sid"
```

oracle_sid は大文字にしてください。たとえば、次のようになります。

```
sc create OracleServiceORCL
binPath= "C:\oracle\OraInfra\bin\ORACLE.EXE ORCL"
```

- e. Database Console の場合 :

```
sc create OracleDBConsole<oracle_sid>
binPath= "ORACLE_HOME\bin\nmesrvc"
```

oracle_sid は大文字にしてください。たとえば、次のようになります。

```
sc create OracleDBConsoleORCL
binPath= "C:\oracle\OraInfra\bin\nmesrvc"
```

- f. Oracle Job Scheduler の場合 :

```
sc create OracleJobScheduler<oracle_sid>
binPath= "ORACLE_HOME\bin\extjob.exe oracle_sid"
```

oracle_sid は大文字にしてください。たとえば、次のようになります。

```
sc create OracleJobSchedulerORCL
binPath= "C:\oracle\OraInfra\bin\extjob.exe ORCL"
```

5. 必要なパスを環境変数 PATH に追加します。

「システムのプロパティ」コントロール・パネルで、Windows の変数 PATH の先頭に次の内容を追加します。

```
%ORACLE_HOME%\bin;%ORACLE_HOME%\jlib;
```

関連項目： 具体的な Windows プラットフォームに変数 PATH を設定する方法に関する説明は、Windows のオンライン・ヘルプを参照してください。

6. グローバルな環境変数を作成します。

「システムのプロパティ」コントロール・パネルで、環境変数 ORACLE_HOSTNAME を作成して、値を仮想ホスト名に設定します。

環境変数の設定方法の詳細は、[第 3.6.1 項「環境変数の設定方法」](#) を参照してください。

7. データベース・インスタンスを削除します。

ノード 1 で次のコマンドを実行して、OracleAS Metadata Repository データベース・インスタンスを削除します。

```
F:\oracle\bin> oradim -delete -sid sid
```

8. ノード 1 を再起動します。

ノード 1 を再起動します。再起動中、「OracleAS」グループの下に定義されたリソースはノード 2 にフェイルオーバーされます。リソースには、仮想ホスト名、仮想ホストの IP および共有ディスクが含まれます。フェイルオーバー後は、ノード 2 がこれらのリソースを所有します。

B: ノードが非対称の場合

2 つのノードが対称でない場合は、次の手順を実行してノード 2 を構成します。

1. データベース・インスタンスを削除します。

ノード 1 で次のコマンドを実行して、OracleAS Metadata Repository データベース・インスタンスを削除します。

```
F:\oracle\bin> oradim -delete -sid sid
```

2. ノード 1 を再起動します。

ノード 1 を再起動します。再起動中、「OracleAS」グループの下に定義されたリソースはノード 2 にフェイルオーバーされます。リソースには、仮想ホスト名、仮想ホストの IP および共有ディスクが含まれます。フェイルオーバー後は、ノード 2 がこれらのリソースを所有します。

3. Oracle ホームを削除します。

ノード 2 から、共有ディスク上の次のディレクトリを削除します。

- OracleAS Infrastructure をインストールした Oracle ホーム・ディレクトリ
- データベース・ファイルをインストールしたディレクトリ

ノード 2 からインストールを実行すると、これらのディレクトリにファイルがインストールされるため、これらのディレクトリを削除しておく必要があります。次の手順を参照してください。

4. ノード 2 から共有ディスクに OracleAS Infrastructure をインストールします。

OracleAS Infrastructure を共有ドライブに再度インストールします。ただし、今回は、ノード 2 からインストールを実行します。ノード 1 からインストールを実行したときに使用した値と同じ値（同じ Oracle ホームの名前とインストール先のディレクトリ、同じインスタンス名とパスワードなど）を使用します。

インストーラによってノード2のローカル記憶域上のWindowsレジストリおよびインベントリ情報が更新されるように、ノード2からOracleAS Infrastructureをインストールする必要があります。

具体的な手順は、[10-13ページ](#)の手順2「ノード1から共有ドライブへのOracleAS Infrastructureのインストール」を参照してください。

手順5 ノード2の再起動

ノード2を再起動します。

ノード2の再起動中に共有ドライブはノード1にフェイルオーバーされるため、OracleAS Infrastructureサービスを開始できないことに注意してください。ノード2からは、共有ドライブにアクセスしてInfrastructureサービスを開始することはできません。

「OK」をクリックします。

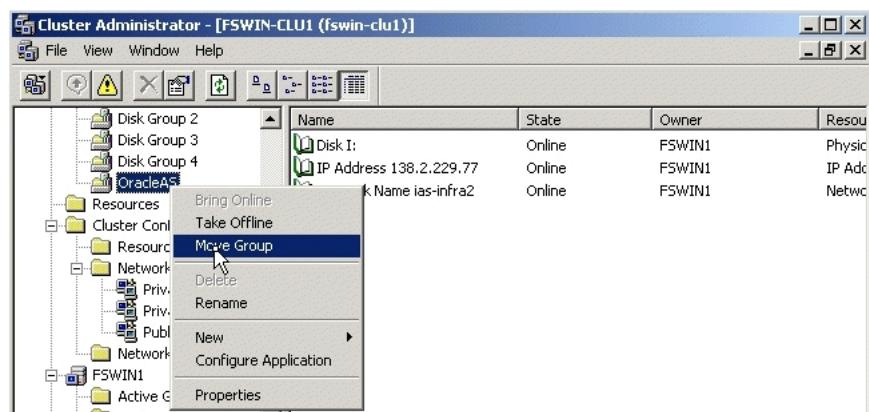
図10-17 ノード2の起動時のエラー・メッセージ



手順6 ノード2へのグループの移動

ノード2の起動後に、グループをノード2に移動します。クラスタ・アドミニストレータで、グループを右クリックして、「グループの移動」を選択します(図10-18)。

図10-18 クラスタ・アドミニストレータ：ノード2へのグループの移動



手順7 ノード2でのOracleAS Infrastructureサービスの開始

グループをノード2へ移動した後、ノード2でOracleAS Infrastructureサービスを開始します。

1. データベース・サービスを開始します。

- OracleService<SID>
- Oracle<OracleHomeName>TNSListener

2. データベースが起動していない場合は起動します。データベースが起動しているかどうかを確認するには、SQL*Plusを使用してデータベースにログインします。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
```

アイドル状態のインスタンスに接続されたことが SQL*Plus によって報告された場合、データベースは起動していません。SQL*Plus で次のコマンドを実行して、データベースを起動します。

```
SQL> startup
```

3. 残りのサービスを開始します。

- Oracle<OracleHomeName>ProcessManager
- Oracle<OracleHomeName>ASControl

手順 8 インストールの検証

OracleAS Infrastructure が正しくインストールされていることを検証するには、URL に仮想ホスト名を使用して (<http://vhost.mydomain.com:1156> など)、OracleAS Infrastructure の「Application Server Control」ページにアクセスします。

仮想ホスト名は、「仮想ホストの指定」画面で入力した値です ([10-15 ページ](#) の手順 11. を参照)。

デフォルトのポート番号は、1156 です。ポート番号は、`ORACLE_HOME\install\portlist.ini` ファイルを参照することによって確認できます。

手順 9 データベースの pfile の作成

Oracle Fail Safe では、データベースに pfile (データベースのパラメータが格納されているテキスト・ファイル) があることが必須です。具体的な手順は、[10-13 ページ](#) の手順第 10.12.1 項「データベースの pfile の作成」「ノード 1 から共有ドライブへの OracleAS Infrastructure のインストール」を参照してください。

手順 10 OracleAS Metadata Repository の高可用性設定

Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして OracleAS Metadata Repository を追加します。これによって、プライマリ・ノードに障害が発生した場合、Oracle Fail Safe が OracleAS Metadata Repository をセカンダリ・ノードにフェイルオーバーできるようになります。

詳細は、[第 10.12.2 項「OracleAS Metadata Repository の高可用性設定」](#) を参照してください。

手順 11 リスナーへの共有ディスクの依存関係の追加

これを実行すると、リスナーによるフェイルオーバーが正常に行われるようになります。これは Oracle Fail Safe を使用して実行します。詳細は、[第 10.12.3 項「リスナーへの共有ディスクの依存関係の追加」](#) を参照してください。

手順 12 OPMN の高可用性設定

Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして OPMN を追加します。詳細は、[第 10.12.4 項「OPMN の高可用性設定」](#) を参照してください。

手順 13 Application Server Control の高可用性設定

Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして Application Server Control を追加します。詳細は、[第 10.12.6 項「Application Server Control の高可用性設定」](#) を参照してください。

手順 14 正しいリスナーがアクティブであることの確認

Oracle Fail Safe によって別のリスナーが作成されます。このリスナーは実行しておく必要があります。詳細は、[第 10.12.7 項「正しいリスナーがアクティブであることの確認」](#) を参照してください。

手順 15 OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services のインストール

OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services を各ノードのローカル・ディスクにインストールします。これらのインストールは、個別に行います。

インストール前の手順

このインストールは、実際には OracleAS Cluster (Identity Management) インストールです。このため、[第 11 章「高可用性環境へのインストール : OracleAS Cluster \(Identity Management\)」](#) に示す OracleAS Cluster (Identity Management) の設定手順を実行します。

- 第 11.2.1 項 「Oracle ホーム・ディレクトリでの同じパスの使用 (推奨)」
- 第 11.2.2 項 「すべてのノードでの時計の同期化」
- 第 11.2.3 項 「ロード・バランサに対する仮想サーバーの名前およびポートの構成」
- 第 11.2.5 項 「ロード・バランサへの Cookie 永続性の設定」

インストール手順

この手順は、[第 11.6.5 項「各ノードへの OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services のインストール」](#) に示したものと同じです。

10.5 OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) 構成のインストール

図 10-19 に、OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) 構成を示します。

この構成は、別の高可用性環境に OracleAS Metadata Repository データベースがあり、Oracle Identity Management コンポーネント用にアクティブ - パッシブ構成を使用する場合に適しています。OracleAS Metadata Repository データベースが格納されている共有ディスクとは異なる共有ディスクに Oracle Identity Management コンポーネントをインストールします。

構成内容は次のとおりです。

- クラスタ化された 2 つのノード
- 各ノード独自の記憶デバイス
- 両方のノードからアクセスできる 2 つの共有ディスク。1 つの共有ディスクには (OracleAS Metadata Repository のロード先の) データベースの Oracle ホームを格納し、もう 1 つの共有ディスクには、Oracle Identity Management をインストールします。

正常動作時には、プライマリ・ノードであるノード 1 がアクティブ・ノードです。これは、両方の共有ディスクをマウントして Oracle Identity Management およびデータベース・ファイルにアクセスし、Oracle Identity Management およびデータベース・プロセスを実行して、すべてのリクエストを処理します。

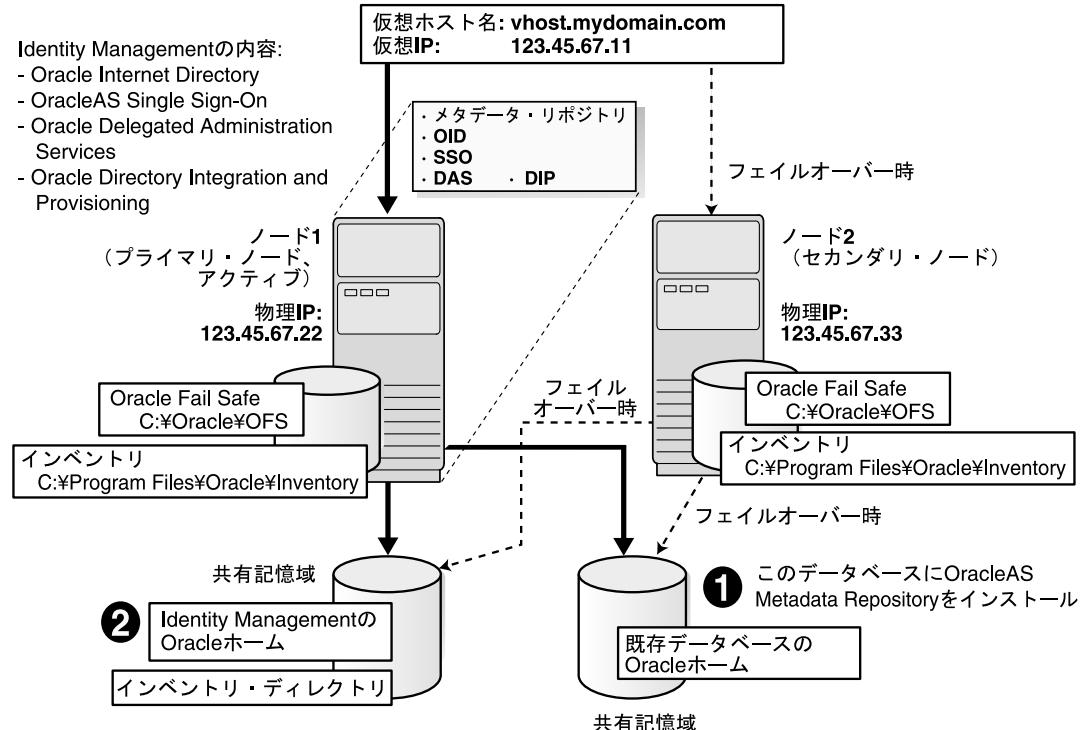
なんらかの理由でノード 1 が停止すると、クラスタウェアは Oracle Identity Management およびデータベース・プロセスをノード 2 にフェイルオーバーします。ノード 2 がアクティブ・ノードとなり、共有ディスクをマウントしてプロセスを実行し、すべてのリクエストを処理します。

OracleAS Cold Failover Cluster 内のアクティブ・ノードにアクセスするには、中間層コンポーネント、アプリケーションなどのクライアントは、OracleAS Cold Failover Cluster に関連付けられた仮想ホスト名を使用します。仮想ホスト名は、アクティブ・ノード（正常動作時にはノード 1、ノード 1 が停止した場合はノード 2）に関連付けられます。どちらのノード（プライマリまたはセカンダリ）がリクエストを処理しているかを、クライアントが知る必要はありません。

インフラストラクチャにアクセスする URL に仮想ホスト名を使用することもできます。たとえば、vhost.mydomain.com が仮想ホストの名前である場合は、Oracle HTTP Server および Application Server Control の URL は次のようにになります。

次のものの URL	URL の例
Oracle HTTP Server、「ようこそ」ページ	http://vhost.mydomain.com:80
Oracle HTTP Server、セキュア・モード	https://vhost.mydomain.com:443
Application Server Control	http://vhost.mydomain.com:18100

図 10-19 OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) 構成



10.5.1 OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) : インストール手順の概要

Cold Failover Cluster データベースに OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) 構成を作成するには、次の手順を実行します。

注意: OracleAS Infrastructure は、ノード 1 とノード 2 から 1 回ずつ、合計 2 回インストールする必要があります。これによって、各ノードのローカル記憶域が、適切な情報（Windows レジストリやインベントリ情報など）で更新されます。

OracleAS Infrastructure をノード 2 からインストールする前に、ノード 1 からインストールしたファイルを削除する必要があります。

表 10-6 OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) のインストール手順の概要

手順	説明
1. インストール前の手順の実行	インストール前の作業の詳細は、 第 10.2 項 を参照してください。 内容は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 第 10.2.1 項「Event Log サービスの実行の確認」 ■ 第 10.2.2 項「クラスタの仮想アドレスの取得」 ■ 第 10.2.3 項「両方のノードへの Microsoft Cluster Server (MSCS) のインストールの確認」 ■ 第 10.2.4 項「クラスタの名前の確認」 ■ 第 10.2.5 項「Oracle Fail Safe を管理するドメイン・ユーザーの決定」 ■ 第 10.2.6 項「各ノードのローカル記憶域への Oracle Fail Safe のインストール」 ■ 第 10.2.7 項「Oracle Fail Safe でのグループの作成」
2. OracleAS Metadata Repository のインストール	既存の Cold Failover Cluster データベースに OracleAS Metadata Repository をインストールします。
3. Oracle Identity Management コンポーネントをインストールします。	ノード 1 から Oracle Identity Management コンポーネントをインストールします。
4. ノード 1 での Oracle Application Server サービスの停止およびスタートアップの種類の手動への設定	Oracle ホームを削除するため、OracleAS Infrastructure サービスを停止します。
5. ノード 2 の構成	OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) をインストールするノードが対称か非対称かであるかによって、この部分で実行する手順は異なります。
6. ノード 2 の再起動	ノード 2 を再起動します。
7. ノード 2 へのグループの移動	ノード 2 のコントロールの下に、Oracle Fail Safe で作成したグループを移動します。
8. ノード 2 での OracleAS Infrastructure サービスの開始	ノード 2 で OracleAS Infrastructure サービスを開始します。
9. インストールの検証	OracleAS Metadata Repository、OPMN および Application Server Control の高可用性設定を行う前に、Application Server Control にアクセスして、OracleAS Infrastructure が正しくインストールされていることを確認します。
10. OPMN の高可用性設定	Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして OPMN を追加します。
11. Application Server Control の高可用性設定	Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして Application Server Control を追加します。

10.5.2 OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) : インストール手順の詳細

次の手順を実行して、Oracle Application Server を OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) 構成にインストールします。

手順 1 インストール前の手順の実行

[第 10.2 項「OracleAS Cold Failover Cluster のインストール前の手順」](#) に示すインストール前の手順を実行します。

手順 2 OracleAS Metadata Repository のインストール

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を使用して、OracleAS Metadata Repository を既存のデータベースにインストールします。詳細は、[Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のユーザーズ・ガイド](#)を参照してください。

既存のデータベースがない場合は、インストーラを使用して作成できます。仮想ホスト名を使用してデータベースを作成する必要があることに注意してください。詳細は、[第 10.8 項「OracleAS Cold Failover Cluster 環境への OracleAS Metadata Repository のみのインストール」](#) を参照してください。

手順 3 Oracle Identity Management コンポーネントをインストールします。

Oracle Identity Management は、他の共有ディスクにインストールします。表 10-7 の手順に従います。

注意:

- インストーラによって Oracle ホームのパスが要求されたら、共有ディスクのパスを入力します。両方のノードがこのパスにアクセスできることを確認します。
- 「高可用性またはレプリケーション・オプションの選択」画面で、「仮想ホスト」を選択します。
- 「仮想ホストの指定」画面で、仮想ホスト名を入力します。

インストーラの画面

表 10-7 Oracle Identity Management コンポーネントのインストール

画面	操作
1. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第 5.25 項「インストールの一部: インストールの最初のいくつかの画面」 を参照してください。</p> <p>注意:</p> <p>「インストール・タイプの選択」画面で、「Oracle Identity Management」を選択します。</p>
2. 構成オプションの選択	<p>「Oracle Internet Directory」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server Single Sign-On」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server Delegated Administration Service」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server Directory Integration and Provisioning」を選択します。</p> <p>認証局が必要な場合は、「Oracle Application Server Certificate Authority (OCA)」を選択します。</p> <p>「高可用性およびレプリケーション」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 10-7 Oracle Identity Management コンポーネントのインストール（続き）

画面	操作
3. ポート構成オプションの指定	コンポーネントにデフォルトのポートを使用する場合は、「自動」を選択します。 staticports.ini ファイルをすでに作成していて、デフォルトのポートを使用しない場合は、「手動」を選択し、指定されたフィールドで staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。 「次へ」をクリックします。
4. リポジトリの指定	ユーザー名 : OracleAS Metadata Repository データベースにログインするために使用するユーザー名を入力します。ユーザーは、DBA 権限を持っている必要があります。 パスワード : ユーザーのパスワードを入力します。 ホスト名とポート : データベースが稼働しているコンピュータの名前を入力し、そのコンピュータによってリスニングが行われているポートのポート番号を入力します。書式には、host:port を使用します。 サービス名 : データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。 例: orcl.mydomain.com 「次へ」をクリックします。
5. 高可用性またはレプリケーション・オプションの選択	「仮想ホスト」を選択し、「次へ」をクリックします。
6. Internet Directory のネームスペースの指定	推奨されるネームスペースを選択するか、またはデフォルトの Oracle Identity Management レルムの場所のカスタム・ネームスペースを入力します。 「推奨ネームスペース」に表示された値が配置要件を満たしていることを確認します。要件を満たさない場合は、「カスタム・ネームスペース」に必要な値を入力します。 第 5.15 項「[Internet Directory] のネームスペースの指定」画面での入力 を参照してください。 「次へ」をクリックします。
7. 仮想ホストの指定	注意 : これは、インフラストラクチャを OracleAS Cold Failover Cluster にインストールするときに重要な画面です。この画面が表示されない場合は、次の項目を確認してください。 <ul style="list-style-type: none"> 「高可用性またはレプリケーション・オプションの選択」画面に戻り、「仮想ホスト」を選択していることを確認します。 「構成オプションの選択」画面に戻り、「高可用性およびレプリケーション」を選択していることを確認します。 仮想ホスト名 : OracleAS Cold Failover Cluster 構成の仮想ホスト名を入力します。 例: vhost.mydomain.com 「次へ」をクリックします。
8. OCA の画面	「構成オプションの選択」画面で「 Oracle Application Server Certificate Authority (OCA) 」を選択した場合、インストーラによって OCA を構成するための画面が表示されます。詳細は、 第 5.28 項「インストールの一部: OCA の画面」 を参照してください。
9. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	インスタンス名 : このインフラストラクチャ・インスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_（アンダースコア）文字を使用できます。1つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、 第 4.7 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。 例: id_mgmt ias_admin パスワード および パスワードの確認 : ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、 第 4.8 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。 例: welcome99 「次へ」をクリックします。

表 10-7 Oracle Identity Management コンポーネントのインストール（続き）

画面	操作
10. --	インストールを終了します。詳細は、 第 5.26 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。

手順 4 ノード 1 での Oracle Application Server サービスの停止およびスタートアップの種類の手動への設定

1. 「サービス」 ウィンドウを表示します。

Windows Server 2003 の場合：「スタート」 → 「管理ツール」 → 「サービス」を選択します。

2. 次のサービスを停止します。

- Oracle<OracleHomeName>ASControl
- Oracle<OracleHomeName>ProcessManager

サービスを停止するには、サービスを右クリックし、ポップアップ・メニューから「停止」を選択します。

3. 前述のサービスのスタートアップの種類を、手動に設定します。

- a. サービスを右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- b. 「スタートアップの種類」セクションで「手動」を選択して、「OK」をクリックします。

手順 5 ノード 2 の構成

OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) をインストールするノードが対称である場合は、A: ノードが対称の場合の手順を実行してノード 2 を構成できます。ノードが対称でない場合は、B: ノードが非対称の場合の手順を実行する必要があります。ノードが対称かどうかを判断するには、[第 10.1.1 項「対称ノードに関する考慮事項」](#) を参照してください。

A: ノードが対称の場合

1. ノード 1 から Oracle レジストリの設定をエクスポートします。

- a. ノード 1 から、Windows の「スタート」 → 「ファイル名を指定して実行」を選択して、表示されたテキスト・フィールドに「regedit」と入力します。
- b. Windows レジストリで HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Oracle を検索して選択します。
- c. 「レジストリ」メニューで「レジストリ ファイルのエクスポート」を選択します。
- d. 標示されたダイアログ・ボックスで、「選択された部分」ラジオ・ボタンが選択されていること、および「HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Oracle」部分が選択されていることを確認します。
- e. エクスポートされたレジストリ・ファイルに名前を入力して、「保存」をクリックします。

たとえば、「oracle_registry_entries」のように入力します。

レジストリ・ファイルは、ローカル・ディスクと共有ディスクのいずれにも保存できます。ローカル・ディスクに保存する場合は、ノード 2 にファイルをコピーする必要があります。

2. ノード 1 からノード 2 に Oracle インベントリをコピーします。

Oracle Universal Installer のインベントリには、ホスト上のすべての Oracle ホームにインストールされたすべての Oracle ソフトウェア製品に関する情報が格納されます。ただし、インストール作業で Oracle Universal Installer を使用した製品に限られます。

Oracle インベントリ情報は、Extensible Markup Language (XML) 形式で、ホストの單一ディレクトリ構造に格納されます。このインベントリは通常、Windows システムでは次のディレクトリに配置されます。

```
C:\Program Files\Oracle\Inventory
```

Windows レジストリで次のレジストリ・キーを選択し、inst_loc 文字列の値を参照すると、インベントリの場所がいつでもわかります。

```
\HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Oracle
```

ノード 2 に Oracle インベントリをコピーするには、ディレクトリ全体（例：C:\Program Files\Oracle\Inventory）を選択して、ノード 2 の同じ場所にコピーします。

3. ノード 2 の Windows レジストリに、レジストリ設定をインポートします。
 - a. ノード 2 にログインします。
 - b. ノード 1 からレジストリ・エントリをエクスポートしたときに作成した oracle_registry_entries.reg ファイルをダブルクリックします。
 - c. レジストリ・エントリの追加を求められたら、「はい」をクリックします。
4. 10g リリース 2 (10.1.2) に必要な Windows サービスを作成して起動します。

ノード 2 に Windows サービスを作成するには、SC ツール (sc.exe) を使用できます。これは、Microsoft 社が提供するサービス・コントロール管理ツールです。

注意： この手順を実行する前に、使用する sc.exe プログラムのバージョンが 5.0.2134.1 以降であることを確認してください。詳細は、Microsoft 社の Web サイトを参照してください。

SC ツールを使用して、必要なサービスをノード 2 に作成します。SC ツールでは、各オプションの後ろにスペースが必要です。

- a. Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN) の場合：

```
sc create Oracle<home name>ProcessManager
binPath= "ORACLE_HOME\opmn\bin\opmn.exe -S"
```

たとえば、次のようになります。

```
sc create OracleINFRAProcessManager
binPath= "C:\oracle\OraInfra\opmn\bin\opmn.exe -S"
```

- b. Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control の場合：

```
sc create Oracle<home name>ASControl
binPath= "ORACLE_HOME\bin\omesrvc.exe"
```

たとえば、次のようになります。

```
sc create OracleINFRAASControl
binPath= "C:\oracle\OraInfra\bin\omesrvc.exe"
```

5. 必要なパスを環境変数 PATH に追加します。

「システムのプロパティ」コントロール・パネルで、Windows の変数 PATH の先頭に次の内容を追加します。

```
%ORACLE_HOME%\bin;%ORACLE_HOME%\jlib;
```

関連項目： 具体的な Windows プラットフォームに変数 PATH を設定する方法に関する説明は、Windows のオンライン・ヘルプを参照してください。

6. ノード 1 を再起動します。

ノード 1 を再起動します。再起動中、「OracleAS」グループの下に定義されたリソースはノード 2 にフェイルオーバーされます。リソースには、仮想ホスト名、仮想ホストの IP および共有ディスクが含まれます。フェイルオーバー後は、ノード 2 がこれらのリソースを所有します。

B: ノードが非対称の場合

2 つのノードが対称でない場合は、次の手順を実行してノード 2 を構成します。

1. ノード 1 を再起動します。

ノード 1 を再起動します。再起動中、「OracleAS」グループの下に定義されたリソースはノード 2 にフェイルオーバーされます。リソースには、仮想ホスト名、仮想ホストの IP および共有ディスクが含まれます。フェイルオーバー後は、ノード 2 がこれらのリソースを所有します。

2. Oracle ホームを削除します。

ノード 2 から、共有ディスク上の次のディレクトリを削除します。

- OracleAS Infrastructure をインストールした Oracle ホーム・ディレクトリ
- データベース・ファイルをインストールしたディレクトリ

ノード 2 からインストールを実行すると、これらのディレクトリにファイルがインストールされるため、これらのディレクトリを削除しておく必要があります。次の手順を参照してください。

3. ノード 2 から共有ディスクに Oracle Identity Management コンポーネントをインストールします。

OracleAS Infrastructure コンポーネントを共有ドライブに再度インストールします。ただし、今回は、ノード 2 からインストールを実行します。ノード 1 からインストールを実行したときに使用した値と同じ値（同じ Oracle ホームの名前とインストール先のディレクトリ、同じインスタンス名とパスワードなど）を使用します。

インストーラによってノード 2 のローカル記憶域上の Windows レジストリおよびインベントリ情報が更新されるように、ノード 2 から OracleAS Infrastructure コンポーネントをインストールする必要があります。

具体的な手順は、[10-34 ページ](#)の手順 3 「Oracle Identity Management コンポーネントをインストールします。」を参照してください。

手順 6 ノード 2 の再起動

ノード 2 を再起動します。

ノード 2 の再起動中に共有ドライブはノード 1 にフェイルオーバーされるため、OracleAS Infrastructure サービスを開始できないことに注意してください。ノード 2 からは、共有ドライブにアクセスして Infrastructure サービスを開始することはできません。

「OK」をクリックします。

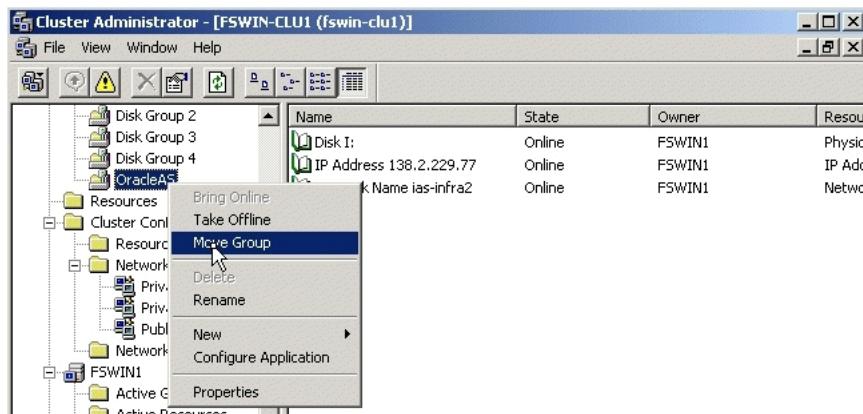
図 10-20 ノード 2 の起動時のエラー・メッセージ



手順 7 ノード 2 へのグループの移動

ノード 2 の起動後に、グループをノード 2 に移動します。クラスタ・アドミニストレータで、グループを右クリックして、「グループの移動」を選択します (図 10-21)。

図 10-21 クラスタ・アドミニストレータ：ノード 2 へのグループの移動



手順 8 ノード 2 での OracleAS Infrastructure サービスの開始

グループをノード 2 へ移動した後、ノード 2 で OracleAS Infrastructure サービスを開始します。

- データベースが起動していない場合は起動します。データベースが起動しているかどうかを確認するには、SQL*Plus を使用してデータベースにログインします。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
```

アイドル状態のインスタンスに接続されたことが SQL*Plus によって報告された場合、データベースは起動していません。SQL*Plus で次のコマンドを実行して、データベースを起動します。

```
SQL> startup
```

- サービスを開始します。

- Oracle<OracleHomeName>ProcessManager
- Oracle<OracleHomeName>ASControl

手順 9 インストールの検証

Oracle Identity Management コンポーネントが正しくインストールされていることを検証するには、URL に仮想ホスト名を使用して (<http://vhost.mydomain.com:1156> など)、「Application Server Control」ページにアクセスします。

仮想ホスト名は、「仮想ホストの指定」画面で入力した値です (10-35 ページの手順 7. を参照)。

デフォルトのポート番号は、1156 です。ポート番号は、ORACLE_HOME\$\install\portlist.ini ファイルを参照することによって確認できます。

手順 10 OPMN の高可用性設定

Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして OPMN を追加します。詳細は、第 10.12.4 項「OPMN の高可用性設定」を参照してください。

手順 11 Application Server Control の高可用性設定

Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして Application Server Control を追加します。詳細は、第 10.12.6 項「Application Server Control の高可用性設定」を参照してください。

10.6 分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) 構成のインストール

この構成は、次のような場合に適しています。

- データベースと同じ層で Oracle Internet Directory および Oracle Directory Integration and Provisioning を実行し、異なる層で Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On を実行する場合
- 既存の Cold Failover Cluster データベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする場合

[図 10-22](#) に、分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) 構成を示します。

この構成内容は次のとおりです。

- Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On を実行している 2 つのノード。これらのノードには、ロード・バランサを介してアクセスします。
アクティブ - パッシブ構成で実行されている 2 つのノード。これらのノードでは、既存の Cold Failover Cluster データベース、Oracle Internet Directory および Oracle Directory Integration and Provisioning が実行されます。
- 各ノード独自の記憶デバイス
- 2 つの共有ディスク。1 つの共有ディスクには、データベースの Oracle ホームを格納します。もう 1 つの共有ディスクには、Oracle Internet Directory および Oracle Directory Integration and Provisioning をインストールします。
- 層を区切るファイアウォール

Oracle Internet Directory、Oracle Directory Integration and Provisioning およびデータベースが実行されている層

この層では、正常動作時は、アクティブ・ノードが共有ディスクをマウントして Oracle Identity Management およびデータベースにアクセスし、Oracle Internet Directory、Oracle Directory Integration and Provisioning およびデータベース・プロセスを実行して、すべてのリクエストを処理します。

なんらかの理由でアクティブ・ノードが停止すると、クラスタウェアはプロセスをセカンダリ・ノード（ノード 2）にフェイルオーバーします。ノード 2 が新しいアクティブ・ノードになり、共有ディスクをマウントしてプロセスを実行し、すべてのリクエストを処理します。

中間層コンポーネントおよびアプリケーションが格納されているアクティブ・ノードやクライアントにアクセスするには、仮想ホスト名を使用します。仮想ホスト名は、アクティブ・ノード（正常動作時はプライマリ・ノード、フェイルオーバー時はセカンダリ・ノード）に関連付けられています。どちらのノード（プライマリまたはセカンダリ）がリクエストを処理しているかを、クライアントが知る必要はありません。

アクティブ・ノードにアクセスするには、URL に仮想ホスト名を使用する必要があります。たとえば、vhost.mydomain.com が仮想ホスト名である場合、この層での Oracle HTTP Server および Application Server Control の URL は次のようにになります。

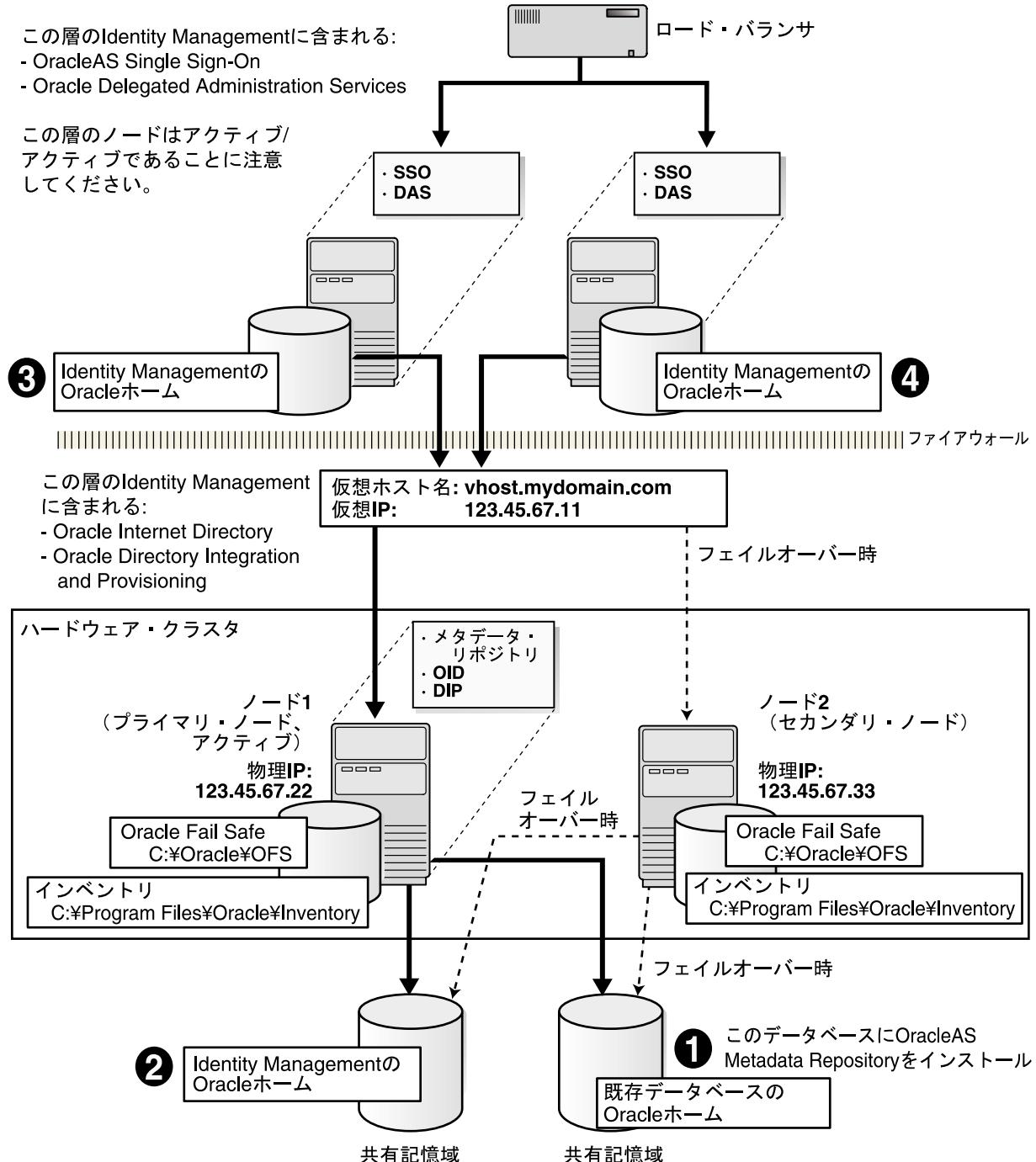
次のものの URL	URL の例
Oracle HTTP Server、「ようこそ」ページ	http://vhost.mydomain.com:80
Oracle HTTP Server、セキュア・モード	https://vhost.mydomain.com:443
Application Server Control	http://vhost.mydomain.com:18100

Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On が実行されている層

この層のノードはクラスタ化されないことに注意してください。両方のノードは同時にアクティブであり、ファイルは各ノードでローカルにインストールします。これらのノードにアクセスするために、クライアントはロード・バランサを介します。たとえば、ロード・バランサの名前が loadbalance1.mydomain.com である場合、この層での Oracle HTTP Server および Application Server Control の URL は次のようになります。

次のものの URL	URL の例
Oracle HTTP Server、「ようこそ」ページ	http://vhost.mydomain.com:80
Oracle HTTP Server、セキュア・モード	https://vhost.mydomain.com:443
Application Server Control	http://vhost.mydomain.com:18100

図 10-22 分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) 構成



10.6.1 分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) : インストール手順の概要

Cold Failover Cluster データベースに分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) 構成を作成するには、次の手順を実行します。

注意: クラスタのノードが非対称の場合、OracleAS Infrastructure は、ノード 1 とノード 2 から 1 回ずつ、合計 2 回インストールする必要があります。これによって、各ノードのローカル記憶域が、適切な情報 (Windows レジストリやインベントリ情報など) で更新されます。

OracleAS Infrastructure をノード 2 からインストールする前に、ノード 1 からインストールしたファイルを削除する必要があります。

表 10-8 分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) のインストール手順の概要

手順	説明
1. インストール前の手順の実行	インストール前の作業の詳細は、第 10.2 項を参照してください。内容は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 第 10.2.1 項「Event Log サービスの実行の確認」 ■ 第 10.2.2 項「クラスタの仮想アドレスの取得」 ■ 第 10.2.3 項「両方のノードへの Microsoft Cluster Server (MSCS) のインストールの確認」 ■ 第 10.2.4 項「クラスタの名前の確認」 ■ 第 10.2.5 項「Oracle Fail Safe を管理するドメイン・ユーザーの決定」 ■ 第 10.2.6 項「各ノードのローカル記憶域への Oracle Fail Safe のインストール」 ■ 第 10.2.7 項「Oracle Fail Safe でのグループの作成」
2. OracleAS Metadata Repository のインストール	既存の Cold Failover Cluster データベースに OracleAS Metadata Repository をインストールします。
3. Oracle Internet Directory および Oracle Directory Integration and Provisioning のインストール	ノード 1 から Oracle Internet Directory および Oracle Directory Integration and Provisioning コンポーネントをインストールします。
4. ノード 1 での Oracle Application Server サービスの停止およびスタートアップの種類の手動への設定	Oracle ホームを削除するため、OracleAS Infrastructure サービスを停止します。
5. ノード 2 の構成	OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) をインストールするノードが対称か非対称かであるかによって、この部分で実行する手順は異なります。
6. ノード 2 の再起動	ノード 2 を再起動します。
7. ノード 2 へのグループの移動	ノード 2 のコントロールの下へ、Oracle Fail Safe で作成したグループを移動します。
8. ノード 2 での OracleAS Infrastructure サービスの開始	ノード 2 で OracleAS Infrastructure サービスを開始します。
9. インストールの検証	OracleAS Metadata Repository、OPMN および Application Server Control の高可用性設定を行う前に、Application Server Control にアクセスして、OracleAS Infrastructure が正しくインストールされていることを確認します。
10. OPMN の高可用性設定	Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして OPMN を追加します。

表 10-8 分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) のインストール手順の概要（続き）

手順	説明
11. Application Server Control の高可用性設定	Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして Application Server Control を追加します。
12. OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services のインストール	この手順では、OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services コンポーネントをインストールします。

10.6.2 分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management) : インストール手順の詳細

手順 1 インストール前の手順の実行

[第 10.2 項 「OracleAS Cold Failover Cluster のインストール前の手順」](#) に示すインストール前の手順を実行します。

手順 2 OracleAS Metadata Repository のインストール

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を使用して、OracleAS Metadata Repository を既存のデータベースにインストールします。詳細は、[Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のユーザーズ・ガイド](#)を参照してください。

既存のデータベースがない場合は、インストーラを使用して作成できます。仮想ホスト名を使用してデータベースを作成する必要があることに注意してください。データベースは通常はハードウェア・クラスタ上で、アクティブ-パッシブ構成で実行する必要があります。詳細は、[第 10.8 項 「OracleAS Cold Failover Cluster 環境への OracleAS Metadata Repository のみのインストール」](#) を参照してください。

手順 3 Oracle Internet Directory および Oracle Directory Integration and Provisioning のインストール

Oracle Internet Directory および Oracle Directory Integration and Provisioning コンポーネントは、他の共有ディスクにインストールします。[表 10-9](#) に示すインストール手順に従います。

注意 :

- 「インストール・タイプの選択」画面で、「**Oracle Identity Management**」を選択します。
- 「構成オプションの選択」画面で、「**Oracle Internet Directory**」、「**Oracle Application Server Directory Integration and Provisioning**」および「**高可用性およびレプリケーション**」を選択する必要があります。
- 「高可用性またはレプリケーション・オプションの選択」画面で、「**仮想ホスト**」を選択します。
- 「仮想ホストの指定」画面で、仮想ホスト名を入力します。

インストーラの画面

表 10-9 Oracle Internet Directory および Oracle Directory Integration and Provisioning のインストール

画面	操作
1. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第 5.25 項 「インストールの一部：インストールの最初のいくつかの画面」 を参照してください。</p> <p>注意：</p> <p>「インストール・タイプの選択」画面で、「Oracle Identity Management」を選択します。</p>

表 10-9 Oracle Internet Directory および Oracle Directory Integration and Provisioning のインストール（続き）

画面	操作
2. 構成オプションの選択	「Oracle Internet Directory」を選択します。 「OracleAS Single Sign-On」は選択しないでください。 「OracleAS Delegated Administration Service」は選択しないでください。 「Oracle Application Server Directory Integration and Provisioning」を選択します。 「OracleAS Certificate Authority (OCA)」は選択しないでください。 「高可用性およびレプリケーション」を選択します。 「次へ」をクリックします。
3. ポート構成オプションの指定	コンポーネントにデフォルトのポートを使用する場合は、「自動」を選択します。 staticports.ini ファイルをすでに作成していて、デフォルトのポートを使用しない場合は、「手動」を選択し、指定されたフィールドで staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。 「次へ」をクリックします。
4. リポジトリの指定	ユーザー名 : OracleAS Metadata Repository データベースにログインするために使用するユーザー名を入力します。ユーザーは、DBA 権限を持っている必要があります。 パスワード : ユーザーのパスワードを入力します。 ホスト名とポート : データベースが稼働しているコンピュータの名前を入力し、そのコンピュータによってリスニングが行われているポートのポート番号を入力します。書式には、host:port を使用します。 サービス名 : データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。 例: orcl.mydomain.com 「次へ」をクリックします。
5. 高可用性またはレプリケーション・オプションの選択	「仮想ホスト」を選択し、「次へ」をクリックします。
6. Internet Directory のネームスペースの指定	推奨されるネームスペースを選択するか、またはデフォルトの Oracle Identity Management レルムの場所のカスタム・ネームスペースを入力します。 「推奨ネームスペース」に表示された値が配置要件を満たしていることを確認します。要件を満たさない場合は、「カスタム・ネームスペース」に必要な値を入力します。詳細は、 第 5.15 項「Internet Directory のネームスペースの指定」画面での入力 を参照してください。 「次へ」をクリックします。
7. 仮想ホストの指定	注意 : これは、インフラストラクチャを OracleAS Cold Failover Cluster にインストールするときに重要な画面です。この画面が表示されない場合は、次の項目を確認してください。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 「高可用性またはレプリケーション・オプションの選択」画面に戻り、「仮想ホスト」を選択していることを確認します。 ■ 「構成オプションの選択」画面に戻り、「高可用性およびレプリケーション」を選択していることを確認します。 仮想ホスト名 : OracleAS Cold Failover Cluster 構成の仮想ホスト名を入力します。 例: vhost.mydomain.com 「次へ」をクリックします。

表 10-9 Oracle Internet Directory および Oracle Directory Integration and Provisioning のインストール（続き）

画面	操作
8. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	<p>インスタンス名：このインフラストラクチャ・インスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_（アンダースコア）文字を使用できます。1つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第 4.7 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。</p> <p>例: oid_dip</p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」：ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、第 4.8 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。</p> <p>例: welcome99</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
9. --	インストールを終了します。詳細は、 第 5.26 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。

手順 4 ノード 1 での Oracle Application Server サービスの停止およびスタートアップの種類の手動への設定

1. 「サービス」 ウィンドウを表示します。

Windows Server 2003 の場合：「スタート」 → 「管理ツール」 → 「サービス」を選択します。

2. 次のサービスを停止します。

- Oracle<OracleHomeName>ASControl
- Oracle<OracleHomeName>ProcessManager

サービスを停止するには、サービスを右クリックし、ポップアップ・メニューから「停止」を選択します。

3. 前述のサービスのスタートアップの種類を、手動に設定します。

- a. サービスを右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- b. 「スタートアップの種類」セクションで「手動」を選択して、「OK」をクリックします。

手順 5 ノード 2 の構成

OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) をインストールするノードが対称である場合は、[A: ノードが対称の場合](#) の手順を実行してノード 2 を構成できます。ノードが対称でない場合は、[B: ノードが非対称の場合](#) の手順を実行する必要があります。ノードが対称かどうかを判断するには、[第 10.1.1 項「対称ノードに関する考慮事項」](#) を参照してください。

A: ノードが対称の場合

1. ノード 1 から Oracle レジストリの設定をエクスポートします。

- a. ノード 1 から、Windows の「スタート」 → 「ファイル名を指定して実行」を選択して、表示されたテキスト・フィールドに「regedit」と入力します。
- b. Windows レジストリで HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Oracle を検索して選択します。
- c. 「レジストリ」メニューで「レジストリ ファイルのエクスポート」を選択します。
- d. 標示されたダイアログ・ボックスで、「選択された部分」ラジオ・ボタンが選択されていること、および「HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Oracle」部分が選択されていることを確認します。

- e. エクスポートされたレジストリ・ファイルに名前を入力して、「**保存**」をクリックします。

たとえば、「oracle_registry_entries」のように入力します。

レジストリ・ファイルは、ローカル・ディスクと共有ディスクのいずれにも保存できます。ローカル・ディスクに保存する場合は、ノード2にファイルをコピーする必要があります。

- 2.** ノード1からノード2にOracleインベントリをコピーします。

Oracle Universal Installer のインベントリには、ホスト上のすべての Oracle ホームにインストールされたすべての Oracle ソフトウェア製品に関する情報が格納されます。ただし、インストール作業で Oracle Universal Installer を使用した製品に限られます。

Oracle インベントリ情報は、Extensible Markup Language (XML) 形式で、ホストの单一ディレクトリ構造に格納されます。このインベントリは通常、Windows システムでは次のディレクトリに配置されます。

C:\Program Files\Oracle\Inventory

Windows レジストリで次のレジストリ・キーを選択し、inst_loc 文字列の値を参照すると、インベントリの場所がいつでもわかります。

\HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Oracle\

ノード2にOracleインベントリをコピーするには、ディレクトリ全体（例：C:\Program Files\Oracle\Inventory）を選択して、ノード2の同じ場所にコピーします。

- 3.** ノード2のWindowsレジストリに、レジストリ設定をインポートします。

a. ノード2にログインします。

b. ノード1からレジストリ・エントリをエクスポートしたときに作成した oracle_registry_entries.reg ファイルをダブルクリックします。

c. レジストリ・エントリの追加を求められたら、「**はい**」をクリックします。

- 4.** 10g リリース 2 (10.1.2) に必要な Windows サービスを作成して起動します。

ノード2にWindowsサービスを作成するには、SCツール (sc.exe) を使用できます。これは、Microsoft社が提供するサービス・コントロール管理ツールです。

注意： この手順を実行する前に、使用する sc.exe プログラムのバージョンが 5.0.2134.1 以降であることを確認してください。詳細は、Microsoft社の Web サイトを参照してください。

SCツールを使用して、必要なサービスをノード2に作成します。SCツールでは、各オプションの後ろにスペースが必要です。

a. Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN) の場合：

```
sc create Oracle<home name>ProcessManager
    binPath= "ORACLE_HOME\opmn\bin\opmn.exe -S"
```

たとえば、次のようになります。

```
sc create OracleINFRAProcessManager
    binPath= "C:\oracle\OraInfr\opmn\bin\opmn.exe -S"
```

b. Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control の場合 :

```
sc create Oracle<home name>ASControl
binPath= "ORACLE_HOME\bin\nmesrvc.exe"
```

たとえば、次のようになります。

```
sc create OracleINFRAASControl
binPath= "C:\oracle\OraInfr\bin\nmesrvc.exe"
```

5. 必要なパスを環境変数 PATH に追加します。

「システムのプロパティ」コントロール・パネルで、Windows の変数 PATH の先頭に次の内容を追加します。

```
%ORACLE_HOME%\bin;%ORACLE_HOME%\lib;
```

関連項目 : 具体的な Windows プラットフォームに変数 PATH を設定する方法に関する説明は、Windows のオンライン・ヘルプを参照してください。

6. ノード 1 を再起動します。

ノード 1 を再起動します。再起動中、「OracleAS」グループの下に定義されたリソースはノード 2 にフェイルオーバーされます。リソースには、仮想ホスト名、仮想ホストの IP および共有ディスクが含まれます。フェイルオーバー後は、ノード 2 がこれらのリソースを所有します。

B: ノードが非対称の場合

2 つのノードが対称でない場合は、次の手順を実行してノード 2 を構成します。

1. ノード 1 を再起動します。

ノード 1 を再起動します。再起動中、「OracleAS」グループの下に定義されたリソースはノード 2 にフェイルオーバーされます。リソースには、仮想ホスト名、仮想ホストの IP および共有ディスクが含まれます。フェイルオーバー後は、ノード 2 がこれらのリソースを所有します。

2. Oracle ホームを削除します。

ノード 2 から、共有ディスク上の次のディレクトリを削除します。

- OracleAS Infrastructure をインストールした Oracle ホーム・ディレクトリ
- データベース・ファイルをインストールしたディレクトリ

ノード 2 からインストールを実行すると、これらのディレクトリにファイルがインストールされるため、これらのディレクトリを削除しておく必要があります。次の手順を参照してください。

3. ノード 2 から共有ディスクに Oracle Identity Management コンポーネントをインストールします。

OracleAS Infrastructure コンポーネントを共有ドライブに再度インストールします。ただし、今回は、ノード 2 からインストールを実行します。ノード 1 からインストールを実行したときに使用した値と同じ値（同じ Oracle ホームの名前とインストール先のディレクトリ、同じインスタンス名とパスワードなど）を使用します。

インストーラによってノード 2 のローカル記憶域上の Windows レジストリおよびインベントリ情報が更新されるように、ノード 2 から OracleAS Infrastructure コンポーネントをインストールする必要があります。

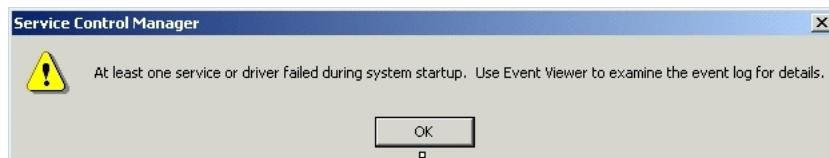
手順 6 ノード 2 の再起動

ノード 2 を再起動します。

ノード 2 の再起動中に共有ドライブはノード 1 にフェイルオーバーされるため、OracleAS Infrastructure サービスを開始できないことに注意してください。ノード 2 からは、共有ドライブにアクセスして Infrastructure サービスを開始することはできません。

「OK」をクリックします。

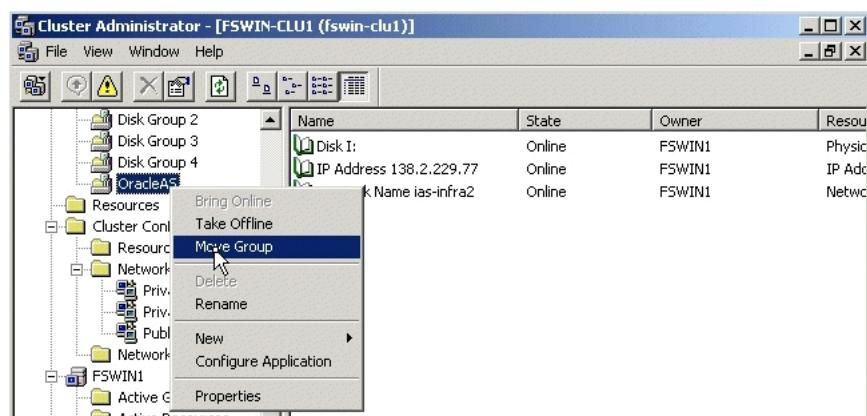
図 10-23 ノード 2 の起動時のエラー・メッセージ



手順 7 ノード 2 へのグループの移動

ノード 2 の起動後に、グループをノード 2 に移動します。クラスタ・アドミニストレータで、グループを右クリックして、「グループの移動」を選択します（図 10-24）。

図 10-24 クラスタ・アドミニストレータ：ノード 2 へのグループの移動



手順 8 ノード 2 での OracleAS Infrastructure サービスの開始

グループをノード 2 へ移動した後、ノード 2 で OracleAS Infrastructure サービスを開始します。

- データベースが起動していない場合は起動します。データベースが起動しているかどうかを確認するには、SQL*Plus を使用してデータベースにログインします。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
```

アイドル状態のインスタンスに接続されたことが SQL*Plus によって報告された場合、データベースは起動していません。SQL*Plus で次のコマンドを実行して、データベースを起動します。

```
SQL> startup
```

- サービスを開始します。

- Oracle<OracleHomeName>ProcessManager
- Oracle<OracleHomeName>ASControl

手順 9 インストールの検証

Oracle Identity Management コンポーネントが正しくインストールされていることを検証するには、URL に仮想ホスト名を使用して (<http://vhost.mydomain.com:1156> など)、「Application Server Control」ページにアクセスします。

仮想ホスト名は、「仮想ホストの指定」画面で入力した値です（[10-35 ページ](#)の手順 7. を参照）。

デフォルトのポート番号は、1156 です。ポート番号は、`ORACLE_HOME\install\portlist.ini` ファイルを参照することによって確認できます。

手順 10 OPMN の高可用性設定

Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして OPMN を追加します。詳細は、[第 10.12.4 項「OPMN の高可用性設定」](#) を参照してください。

手順 11 Application Server Control の高可用性設定

Oracle Fail Safe で作成したグループに、リソースとして Application Server Control を追加します。詳細は、[第 10.12.6 項「Application Server Control の高可用性設定」](#) を参照してください。

手順 12 OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services のインストール

これらのコンポーネントを OracleAS Cluster (Identity Management) 構成でインストールします。この構成では、各ノードのローカル・ディスクにインストールします。これらのインストールは、個別に行います。

インストール前の手順：このインストールは、実際は OracleAS Cluster (Identity Management) のインストールであるため、[第 11 章「高可用性環境へのインストール：OracleAS Cluster \(Identity Management\)」](#) に示す OracleAS Cluster (Identity Management) の設定手順に従うことができます。

- [第 11.2.1 項「Oracle ホーム・ディレクトリでの同じパスの使用 \(推奨\)」](#)
- [第 11.2.2 項「すべてのノードでの時計の同期化」](#)
- [第 11.2.3 項「ロード・バランサに対する仮想サーバーの名前およびポートの構成」](#)
- [第 11.2.5 項「ロード・バランサへの Cookie 永続性の設定」](#)

インストール手順：インストール手順は、[第 11.6.5 項「各ノードへの OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services のインストール」](#) を参照してください。

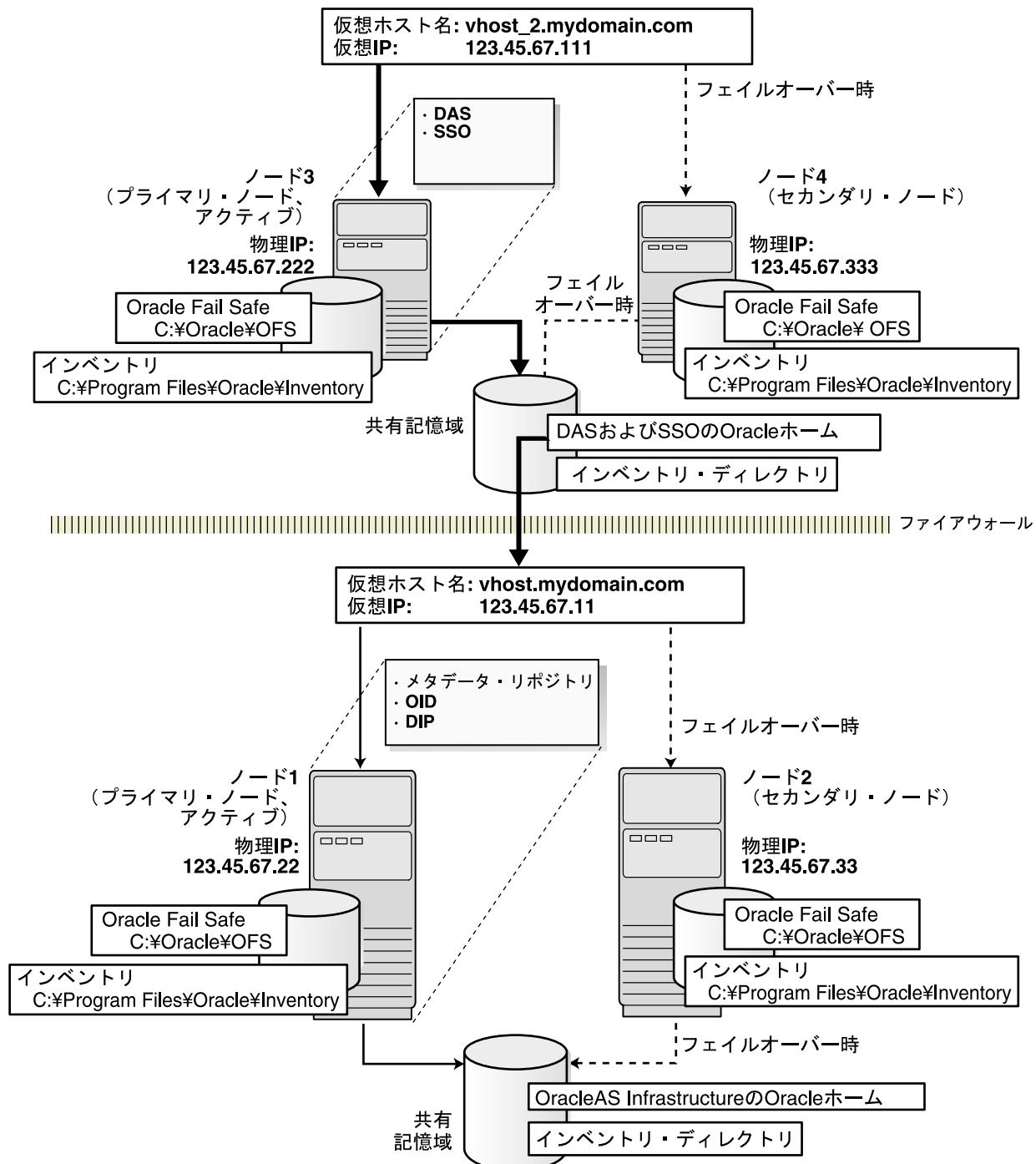
10.7 OracleAS Cold Failover Cluster への Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On のインストール

この項で説明する構成は、[第 10.4 項「分散 OracleAS Cold Failover Cluster \(Infrastructure\) 構成のインストール」](#) で説明した構成に類似しています。相違点は、この項で説明する構成で、OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services が OracleAS Cold Failover Cluster 構成で実行される点です。

2 セットのクラスタ・ノードが必要です。詳細は、[図 10-25](#) を参照してください。1 つのセットで OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory を実行し、もう 1 つのセットで Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On を実行します。

各セットには、共有記憶域および仮想ホスト名が必要です。Oracle Application Server の様々なコンポーネントの Oracle ホームを共有記憶域にインストールします。

図 10-25 Cold Failover Cluster の Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On



10.7.1 OracleAS Cold Failover Cluster の Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On: インストール手順の概要

注意: この構成のインストール順序は、他の構成とは異なります。1つの層で複数のインストールを完了した後、移動して次の層で複数のコンポーネントをインストールするかわりに、ある層のノードから1つのインストールを実行した後で、別の層のノードから1つのインストールを実行する必要があります。このため、各層の別のノードから同じインストールを実行できるようするために、最初のインストールを削除する必要があります。この順序でインストール手順を実行して、同じコンポーネントを Oracle Internet Directory に再登録しようとしていることを示すエラー・メッセージを回避する必要があります。

表 10-10 Oracle Delegated Administration Services と OracleAS Single Sign-On のインストール手順

手順	説明
1. インストール前の手順の実行	インストール前の作業の詳細は、 第 10.2 項 を参照してください。 内容は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 第 10.2.1 項「Event Log サービスの実行の確認」 ■ 第 10.2.2 項「クラスタの仮想アドレスの取得」。2つの仮想アドレスを取得する必要があります。ノードの各セットで1つずつです。 ■ 第 10.2.3 項「両方のノードへの Microsoft Cluster Server (MSCS) のインストールの確認」。すべてのノードに MSCS をインストールする必要があります。 ■ 第 10.2.4 項「クラスタの名前の確認」。2つのクラスタが必要です。ノードの各セットで1つずつです。 ■ 第 10.2.5 項「Oracle Fail Safe を管理する ドメイン・ユーザーの決定」 ■ 第 10.2.6 項「各ノードのローカル記憶域への Oracle Fail Safe のインストール」 ■ 第 10.2.7 項「Oracle Fail Safe でのグループの作成」。2つのグループが必要です。ノードの各セットで1つずつです。
2. staticports.ini ファイルの作成	2つの staticports.ini ファイルを作成します。ノードの各セットで1つずつです。これによって、インストーラは同じポートを使用してコンポーネントを構成します。
3. ノード 1 から共有ドライブへの OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory のインストール	ノード 1 から共有ディスクに OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory をインストールします。 手順は、「構成オプションの選択」画面で「 Oracle Internet Directory 」、「 Oracle Application Server Directory Integration and Provisioning 」および「 高可用性およびレプリケーション 」のみを選択すること以外は、 10-13 ページ の手順 2 「ノード 1 から共有ドライブへの OracleAS Infrastructure のインストール」と同じです。
4. ノード 3 からの Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On のインストール	ノード 3 から共有ディスクに Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On をインストールします。
5. ノード 1 での OracleAS Infrastructure サービスの停止およびスタートアップの種類の手動への設定	Oracle ホームを削除するため、ノード 1 から OracleAS Infrastructure サービスを停止します。
6. ノード 3 での OracleAS Infrastructure サービスの停止およびスタートアップの種類の手動への設定	Oracle ホームを削除するため、ノード 3 から OracleAS Infrastructure サービスを停止します。

表 10-10 Oracle Delegated Administration Services と OracleAS Single Sign-On のインストール手順（続き）

手順	説明
7. データベース・インスタンスの削除	ノード 1 から oradim コマンドを実行して、データベース・インスタンスを削除します。後でノード 2 から再インストールします。
8. OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory の Oracle ホームの削除	ノード 1 から OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory の Oracle ホーム・ディレクトリを削除します。
9. Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On の Oracle ホームを削除します。	ノード 3 から Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On の Oracle ホーム・ディレクトリを削除します。
10. OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory のインストール	ノード 2 から共有ディスクに OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory をインストールします。手順 2. で使用した同じ値（Oracle ホーム名、Oracle ホーム・ディレクトリ、インスタンス名など）を使用します。
11. Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On のインストール	ノード 4 から共有ディスクに Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On をインストールします。手順 4. で使用した同じ値（Oracle ホーム名、Oracle ホーム・ディレクトリ、インスタンス名など）を使用します。
12. データベースの pfile の作成	OracleAS Metadata Repository データベースの pfile（パラメータ・テキスト・ファイル）を作成します。この pfile は Oracle Fail Safe に必要です。
13. OracleAS Metadata Repository の高可用性設定	Oracle Fail Safe の「MROID」グループに、リソースとして OracleAS Metadata Repository を追加します。
14. リスナーへの共有ディスクの依存関係の追加	共有ディスクのリスナーの依存関係を作成します。
15. OPMN の高可用性設定	Oracle Fail Safe の「MROID」グループに、リソースとして OPMN を追加します。
16. Application Server Control の高可用性設定	Oracle Fail Safe の「MROID」グループに、リソースとして Application Server Control を追加します。
17. ノード 4 への「SSODAS」グループの移動	Oracle Fail Safe の「SSODAS」グループをノード 4 に移動します。
18. ノード 4 の Oracle ホームでのサービスの開始	ノード 4 で Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On を起動します。
19. インストールの検証	Application Server Control にアクセスして、インストールを検証します。
20. OPMN の高可用性設定	Oracle Fail Safe の「SSODAS」グループに、リソースとして OPMN を追加します。
21. OPMN への共有ディスクの依存関係の追加	OPMN に共有ディスクの依存関係を作成します。
22. Application Server Control の高可用性設定	Oracle Fail Safe の「SSODAS」グループに、リソースとして Application Server Control を追加します。
23. 正しいリスナーがアクティブであることを確認	この時点で、リスナーは 2 つです。正しい方が実行されていることを確認します。

10.7.2 OracleAS Cold Failover Cluster の Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On: インストール手順の詳細

手順 1 インストール前の手順の実行

第 10.2 項「[OracleAS Cold Failover Cluster のインストール前の手順](#)」に示すインストール前の手順を実行します。インストール前の作業の内容は次のとおりです。

- [第 10.2.1 項「Event Log サービスの実行の確認」](#)
- [第 10.2.2 項「クラスタの仮想アドレスの取得」](#)
2 つの仮想アドレスを取得する必要があります。ノードの各セットで 1 つずつです。
- [第 10.2.3 項「両方のノードへの Microsoft Cluster Server \(MSCS\) のインストールの確認」](#)
すべてのノードに MSCS をインストールする必要があります。
- [第 10.2.4 項「クラスタの名前の確認」](#)
2 つのクラスタが必要です。ノードの各セットで 1 つずつです。
- [第 10.2.5 項「Oracle Fail Safe を管理するドメイン・ユーザーの決定」](#)
- [第 10.2.6 項「各ノードのローカル記憶域への Oracle Fail Safe のインストール」](#)
- [第 10.2.7 項「Oracle Fail Safe でのグループの作成」](#)

2 つのグループを作成する必要があります。ノードの各セットで 1 つずつです。次の手順で使用する Oracle Fail Safe グループのサンプル名は次のとおりです。

OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory インストールでは、グループを「MROID」と呼びます。

Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On インストールでは、グループを「SSODAS」と呼びます。

手順 2 staticports.ini ファイルの作成

2 つの staticports.ini ファイルを作成します。ノードの各セットで 1 つずつです。各ノードからインストールする際に同じポートを取得する必要があるため、staticports.ini ファイルが必要です。staticports.ini については、[第 3.4.4 項「カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）](#) を参照してください。

手順 3 ノード 1 から共有ドライブへの OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory のインストール

「インストール・タイプの選択」画面で「Identity Management and OracleAS Metadata Repository」を選択して、OracleAS Metadata Repository と Oracle Internet Directory を同じ Oracle ホームにインストールします。このオプションにより、OracleAS Metadata Repository 用の新規のデータベースと新規の Oracle Internet Directory が作成されます。

この手順は、次に示す相違点以外は、[10-13 ページ](#)の手順 2 「ノード 1 から共有ドライブへの OracleAS Infrastructure のインストール」と同じです。

- 「構成オプションの選択」画面で、次のコンポーネント / オプションを選択します。

- Oracle Internet Directory
- **Oracle Application Server Directory Integration and Provisioning**
- **高可用性およびレプリケーション**

次のコンポーネントは選択しないでください。

- Oracle Application Server Single Sign-On
- **Oracle Application Server Delegated Administration Service**
- **Oracle Application Server Certificate Authority (OCA)**

- 「ポート構成オプションの指定」画面で、「**手動**」を選択し、前述の手順で作成した staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。

手順 4 ノード 3 からの Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On のインストール

表 10-11 の手順に従い、ノード 3 から共有ディスクに Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On をインストールします。

注意：

- インストーラによって Oracle ホームのパスが要求されたら、共有ディスクのパスを入力します。両方のノードがこのパスにアクセスできることを確認します。
- 「高可用性またはレプリケーション・オプションの選択」画面で、「**仮想ホスト**」を選択します。
- 「仮想ホストの指定」画面で、仮想ホスト名を入力します。

表 10-11 Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On のインストール

画面	操作
1. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第 5.25 項 「インストールの一部：インストールの最初のいくつかの画面」 を参照してください。</p> <p>注意：</p> <p>「インストール・タイプの選択」画面で、「Oracle Identity Management」を選択します。</p>
2. 構成オプションの選択	<p>「Oracle Internet Directory」は選択しないでください。</p> <p>「Oracle Application Server Single Sign-On」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server Delegated Administration Service」を選択します。</p> <p>「OracleAS Directory Integration and Provisioning」は選択しないでください。</p> <p>「OracleAS Certificate Authority (OCA)」は選択しないでください。</p> <p>「高可用性およびレプリケーション」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. ポート構成オプションの指定	<p>「手動」を選択し、表示されたフィールドに staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。staticports.ini ファイルは、10-53 ページの手順 2 「staticports.ini ファイルの作成」 で作成しました。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. 高可用性またはレプリケーション・オプションの選択	「 仮想ホスト 」を選択し、「 次へ 」をクリックします。
5. Oracle Internet Directory への登録	<p>以前にインストールした Oracle Internet Directory の接続情報を入力します。</p> <p>ホスト名 : Oracle Internet Directory のホストにアクセスする仮想ホスト名を入力します。</p> <p>ポート : Oracle Internet Directory がリスニングしているポートのポート番号を入力します。ポート番号がわからない場合は、第 5.16 項 「コンポーネントが使用するポート番号の確認方法」 を参照してください。</p> <p>Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用 : Oracle Internet Directory への接続に SSL のみを使用するようにする場合は、このオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 10-11 Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On のインストール（続き）

画面	操作
6. Oracle Internet Directory へのログインの指定	<p>ユーザー名 : Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名を入力します。</p> <p>パスワード : ユーザー名のパスワードを入力します。</p> <p>レルム : ユーザー名の妥当性を検証するレルムを入力します。このフィールドは、Oracle Internet Directory に複数のレルムがある場合にのみ表示されます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. 仮想ホストの指定	<p>注意: これは、OracleAS Cold Failover Cluster にインストールする際の重要な画面です。この画面が表示されない場合は、次の項目を確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「高可用性またはレプリケーション・オプションの選択」画面に戻り、「仮想ホスト」を選択していることを確認します。 ■ 「構成オプションの選択」画面に戻り、「高可用性およびレプリケーション」を選択していることを確認します。 <p>仮想ホスト名 : OracleAS Cold Failover Cluster 構成の仮想ホスト名を入力します。</p> <p>例: vhost_2.mydomain.com</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
8. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	<p>インスタンス名 : インスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_（アンダースコア）文字を使用できます。1つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第 4.7 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。</p> <p>例: sso_das</p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」 : ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、第 4.8 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。</p> <p>例: welcome99</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
9. --	<p>インストールを終了します。詳細は、第 5.26 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。</p>

手順 5 ノード 1 での OracleAS Infrastructure サービスの停止およびスタートアップの種類の手動への設定

1. 「サービス」 ウィンドウを表示します。

Windows Server 2003 の場合: 「スタート」 → 「管理ツール」 → 「サービス」 を選択します。

2. 次のサービスを停止します。

- Oracle<OracleHomeName>ASControl
- Oracle<OracleHomeName>ProcessManager
- Oracle<OracleHomeName>TNSListener
- OracleService<SID>

サービスを停止するには、サービスを右クリックし、ポップアップ・メニューから「停止」を選択します。

3. 前述のサービスのスタートアップの種類を、手動に設定します。

- a. サービスを右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- b. 「スタートアップの種類」セクションで「手動」を選択して、「OK」をクリックします。

手順 6 ノード 3 での OracleAS Infrastructure サービスの停止およびスタートアップの種類の手動への設定

- 「サービス」 ウィンドウを表示します。

Windows Server 2003 の場合：「スタート」 → 「管理ツール」 → 「サービス」 を選択します。

- 次のサービスを停止します。

- Oracle<OracleHomeName>ASControl
- Oracle<OracleHomeName>ProcessManager

サービスを停止するには、サービスを右クリックし、ポップアップ・メニューから「停止」を選択します。

- 前述のサービスのスタートアップの種類を、手動に設定します。

- サービスを右クリックして、「プロパティ」を選択します。

- 「スタートアップの種類」セクションで「手動」を選択して、「OK」をクリックします。

手順 7 データベース・インスタンスの削除

ノード 1 で次のコマンドを実行して、OracleAS Metadata Repository データベース・インスタンスを削除します。

```
F:\oracle\bin> oradim -delete -sid sid
```

手順 8 OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory の Oracle ホームの削除

ノード 1 から OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory の Oracle ホームを削除します。ノード 2 から再び同じディレクトリにインストールするため、削除しておく必要があります。

手順 9 Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On の Oracle ホームを削除します。

ノード 3 から Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On の Oracle ホームを削除します。ノード 4 から再び同じディレクトリにインストールするため、削除しておく必要があります。

手順 10 OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory のインストール

ノード 2 から OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory をインストールします。Oracle ホーム、インスタンス名、SID などは、ノード 1 からインストールしたときと同じ値を使用します。[10-53 ページ](#)の手順 3 「ノード 1 から共有ドライブへの OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory のインストール」に従います。

手順 11 Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On のインストール

ノード 4 から Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On をインストールします。Oracle ホーム、インスタンス名、SID などは、ノード 3 からインストールしたときと同じ値を使用します。[10-54 ページ](#)の手順 4 「ノード 3 からの Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On のインストール」に従います。

手順 12 データベースの pfile の作成

Oracle Fail Safe では、データベースに pfile (データベースのパラメータが格納されているテキスト・ファイル) があることが必須です。具体的な手順は、[第 10.12.1 項「データベースの pfile の作成」](#) を参照してください。

手順 13 OracleAS Metadata Repository の高可用性設定

Oracle Fail Safe の「MROID」グループに、リソースとして OracleAS Metadata Repository を追加します。これによって、プライマリ・ノードに障害が発生した場合、Oracle Fail Safe が OracleAS Metadata Repository をセカンダリ・ノードにフェイルオーバーできるようになります。詳細は、[第 10.12.2 項「OracleAS Metadata Repository の高可用性設定」](#)を参照してください。

手順 14 リスナーへの共有ディスクの依存関係の追加

これによって、Oracle Fail Safe が共有ディスクにアクセスしてから、その共有ディスクにインストールしたリスナーにアクセスできるようになります。詳細は、[第 10.12.3 項「リスナーへの共有ディスクの依存関係の追加」](#)を参照してください。

手順 15 OPMN の高可用性設定

Oracle Fail Safe の「MROID」グループに、リソースとして OPMN を追加します。詳細は、[第 10.12.4 項「OPMN の高可用性設定」](#)を参照してください。

手順 16 Application Server Control の高可用性設定

Oracle Fail Safe の「MROID」グループに、リソースとして Application Server Control を追加します。詳細は、[第 10.12.6 項「Application Server Control の高可用性設定」](#)を参照してください。

手順 17 ノード 4 への「SSODAS」グループの移動

クラスタ・アドミニストレータを使用して、「SSODAS」グループをノード 4 に移動します。クラスタ・アドミニストレータで、グループを右クリックして、「グループの移動」を選択します。

手順 18 ノード 4 の Oracle ホームでのサービスの開始

ノード 4 の Oracle ホームに関連付けられているサービスを開始します。

- Oracle<OracleHomeName>ProcessManager
- Oracle<OracleHomeName>ASControl

手順 19 インストールの検証

ノード 1 およびノード 2 のインストールを検証するには、URL に仮想ホスト名を使用して (<http://vhost.mydomain.com:1156> など)、ノードの「Application Server Control」ページにアクセスします。

仮想ホスト名は、「仮想ホストの指定」画面で入力した値です ([10-15 ページ](#)の手順 11. を参照)。デフォルトのポート番号は、1156 です。ポート番号は、ORACLE_HOME\$\install\$\portlist.ini ファイルを参照することによって確認できます。

同様に、ノード 3 およびノード 4 のインストールを検証するには、URL に仮想ホスト名を使用して (http://vhost_2.mydomain.com:1156 など)、ノードの「Application Server Control」ページにアクセスします。

仮想ホスト名は、「仮想ホストの指定」画面で入力した値です ([10-55 ページ](#)の手順 7. を参照)。

手順 20 OPMN の高可用性設定

Oracle Fail Safe の「SSODAS」グループに、リソースとして OPMN を追加します。詳細は、[第 10.12.4 項「OPMN の高可用性設定」](#)を参照してください。

手順 21 OPMN への共有ディスクの依存関係の追加

これによって、OPMN を起動する前に、Oracle Fail Safe が共有ディスクにアクセスできるようになります。詳細は、[第 10.12.5 項「OPMN への共有ディスクの依存関係の追加」](#)を参照してください。

手順 22 Application Server Control の高可用性設定

Oracle Fail Safe の「SSODAS」グループに、リソースとして Application Server Control を追加します。詳細は、[第 10.12.6 項「Application Server Control の高可用性設定」](#)を参照してください。

手順 23 正しいリスナーがアクティブであることの確認

Oracle Fail Safe によって別のリスナーが作成されます。このリスナーは実行しておく必要があります。詳細は、[第 10.12.7 項「正しいリスナーがアクティブであることの確認」](#)を参照してください。

10.8 OracleAS Cold Failover Cluster 環境への OracleAS Metadata Repository のみのインストール

この項では、OracleAS Metadata Repository を新しいデータベースをインストールする（インストーラによって、新しいデータベースが作成され、OracleAS Metadata Repository が移入される）方法について説明します。このデータベースは、OracleAS Cold Failover Cluster 環境で使用できます。

前提条件：

- 仮想ホスト名および仮想 IP が構成済であることを確認します。

表 10-12 OracleAS Metadata Repository のみのインストール

画面	操作
1. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第 5.25 項「インストールの一部：インストールの最初のいくつかの画面」を参照してください。</p> <p>注意：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「インストール・タイプの選択」画面で、Oracle Identity Management and Metadata Repository を選択します。 <p>注意：「Metadata Repository」オプションは選択しないでください。このオプションにより、OracleAS Metadata Repository を使用する新しいデータベースが作成されますが、このデータベースは OracleAS Cold Failover Cluster 用には構成されません。</p>
2. 構成オプションの選択	<p>「Oracle Internet Directory」は選択しないでください。</p> <p>「OracleAS Single Sign-On」は選択しないでください。</p> <p>「OracleAS Delegated Administration Service」は選択しないでください。</p> <p>「OracleAS Directory Integration and Provisioning」は選択しないでください。</p> <p>「OracleAS Certificate Authority (OCA)」は選択しないでください。</p> <p>「高可用性およびレプリケーション」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. ポート構成オプションの指定	<p>「自動」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. 高可用性オプションの選択	<p>「仮想ホスト」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 10-12 OracleAS Metadata Repository のみのインストール（続き）

画面	操作
5. Oracle Application Server Metadata Repository の登録	<p>Oracle Internet Directory がすでにあり、その接続情報がわかっている場合は、「はい」を選択し、Oracle Internet Directory が実行されているコンピュータの名前とポート番号を入力します。ポート番号がわからない場合は、第 5.16 項「コンポーネントが使用するポート番号の確認方法」 を参照してください。</p> <p>Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用 : Oracle Application Server コンポーネントが Oracle Internet Directory への接続に SSL のみを使用するようにする場合は、このオプションを選択します。</p> <p>Oracle Internet Directoryがない場合、またはその接続情報がわからない場合は、「いいえ」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. Oracle Internet Directory へのログインの指定	<p>この画面は、前の画面で「はい」を選択した場合にのみ表示されます。</p> <p>ユーザー名 : Oracle Internet Directory ログインするためのユーザー名を入力します。ユーザーは、Oracle Internet Directory の iAS Admins グループに属している必要があります。</p> <p>パスワード : パスワードを入力します。</p> <p>レルム : このフィールドは、Oracle Internet Directory に複数のレルムがある場合にのみ表示されます。ユーザーの認証に使用するレルムの名前を入力します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. 仮想ホストの指定	<p>仮想ホスト名 : 仮想ホスト名を入力します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
8. Oracle Database の画面	<p>OracleAS Metadata Repository データベースの情報を入力します。詳細は、第 5.27 項「インストールの一部：データベースの画面」 を参照してください。</p>
9. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	<p>インスタンス名 : このインスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_（アンダースコア）文字を使用できます。1つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第 10.9 項「OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）のインストール」 を参照してください。</p> <p>例: infra</p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」: ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、第 4.9 項「コンポーネントのインストールとコンポーネントの構成」 を参照してください。</p> <p>例: welcome99</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
10. --	<p>インストールを終了します。詳細は、第 5.26 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。</p>

10.9 OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）のインストール

各ノードのローカル記憶域に個別の Oracle ホームを持つ（図 10-26 を参照）か、共有ディスクに 1 つの Oracle ホームを持つ（図 10-27 を参照） OracleAS Cold Failover Cluster 構成で Oracle Application Server 中間層をインストールすることもできます。

OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）構成には、アクティブなノードとパッシブなノードがあります。OracleAS Cold Failover Cluster（Infrastructure）とは異なり、OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）は共有ディスクにインストールすることも、クラスタの各ノードに対応している個別の Oracle ホームにインストールすることもできます。OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）の各インストール・オプションには、次のような異なる利点があります。

- 単一の Oracle ホームに対するインストールでは、1 つの Oracle ホームで構成を更新すれば済むので、管理、パッチの適用および保守が簡単になります。
- 個別の Oracle ホームでは、ローリング・モードでのインスタンスのアップグレードまたはパッチの適用が可能です。

单一の Oracle ホームのインストールは、OracleAS Wireless を含むインストールに対してはサポートされていないことに注意してください。

次の項では、OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）のインストール手順について説明します。

- 第 10.9.1 項「個別の Oracle ホームへのインストール」

- 第 10.9.2 項「1 つの Oracle ホームへのインストール」

また、既存のインストールを拡張する手順は次の項で説明されています。

- 第 10.9.3 項「中間層の拡張」

仮想ホスト名

クライアントは、仮想ホスト名（図 10-26 および図 10-27 の vhost_mt.mydomain.com）を使用して、アクティブ・ノード（ノード 1 など）にアクセスします。ノード 1 に障害が発生すると、仮想ホスト名はノード 2 を指し、ノード 2 がアクティブ・ノードになります。

図 10-26 個別の Oracle ホームを使用した OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）の構成

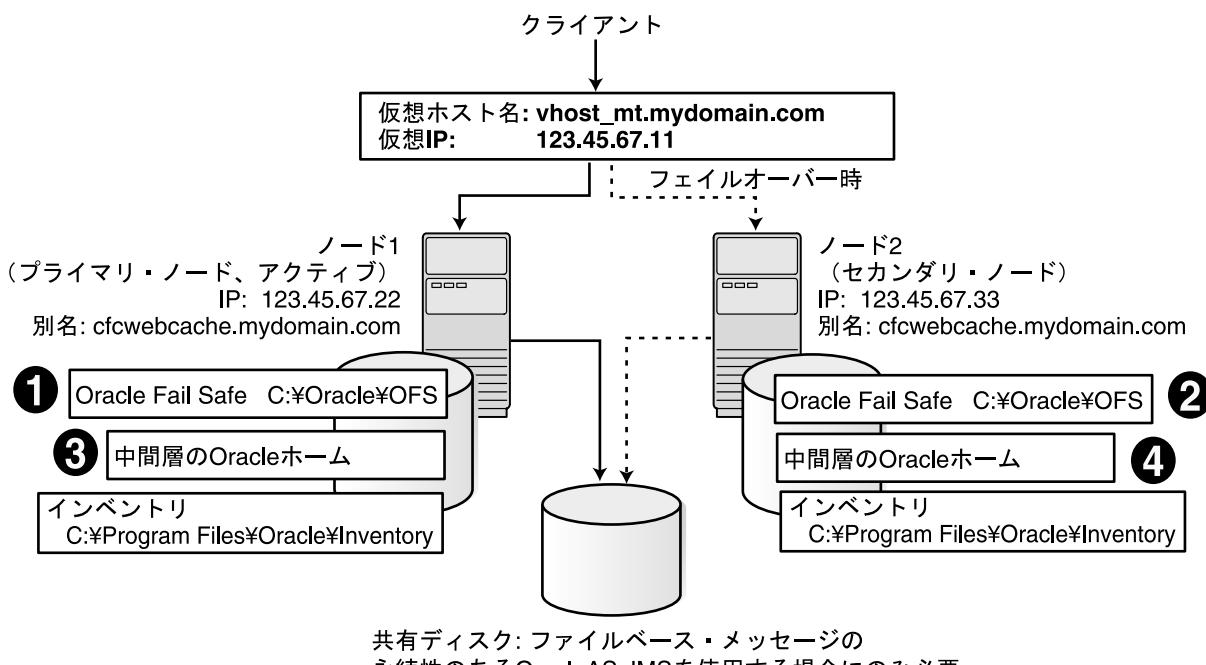
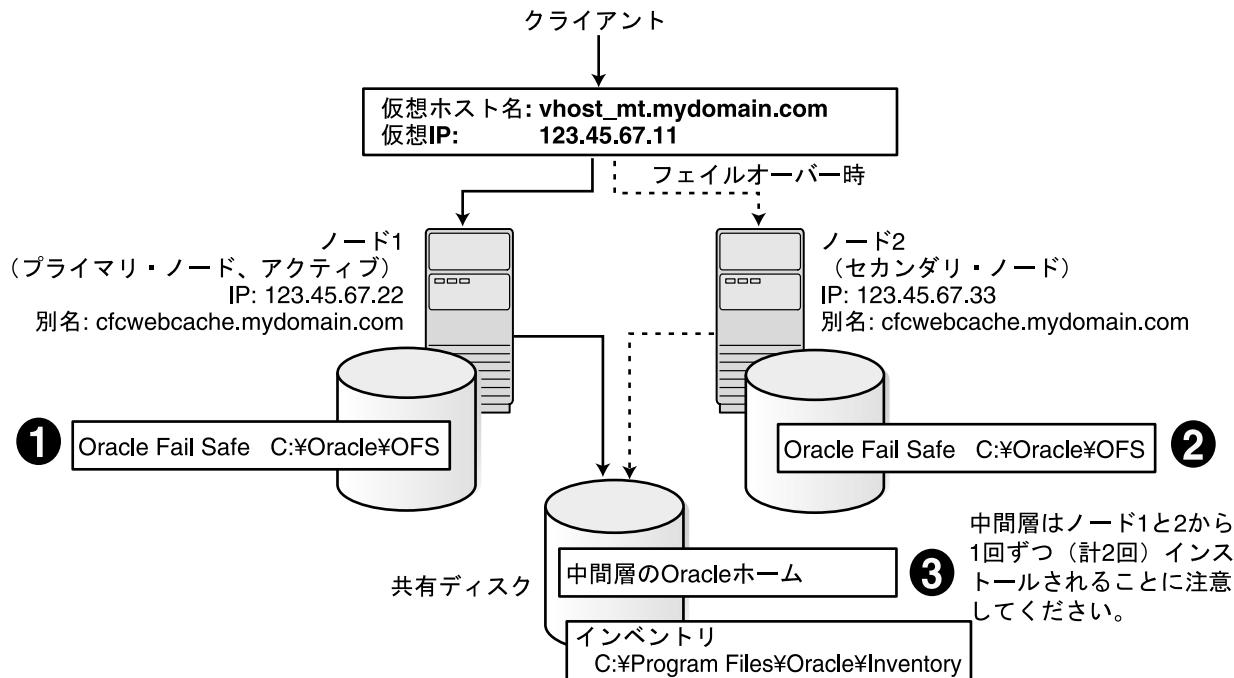


図 10-27 1 つの Oracle ホームを使用した OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）の構成



10.9.1 個別の Oracle ホームへのインストール

OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）を個別の Oracle ホームにインストールするには、次の手順を実行します。

10.9.1.1 インストール前の手順

中間層をインストールする前に、次の項に記載したインストール前の一般的な手順を実行します。

- 第 10.2.1 項「Event Log サービスの実行の確認」
 - 第 10.2.2 項「クラスタの仮想アドレスの取得」
 - 第 10.2.3 項「両方のノードへの Microsoft Cluster Server (MSCS) のインストールの確認」
 - 第 10.2.4 項「クラスタの名前の確認」
 - 第 10.2.5 項「Oracle Fail Safe を管理するドメイン・ユーザーの決定」
 - 第 10.2.6 項「各ノードのローカル記憶域への Oracle Fail Safe のインストール」
- また、次の手順も実行する必要があります。
- 第 10.9.1.1.1 項「staticports.ini ファイルの設定」
 - 第 10.9.1.1.2 項「ホスト名の別名の作成」

10.9.1.1.1 staticports.ini ファイルの設定

両方のインストールで、同じポートを使用する必要があります。これを行うには、中間層のインストール時に使用する staticports.ini ファイルを設定します。 staticports.ini ファイルの作成の詳細は、[第 3.4.4 項「カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）](#) を参照してください。

注意： 中間層で使用するポートは、同じクラスタにインストールしたインフラストラクチャで使用するものとは異なっている必要があります。

10.9.1.1.2 ホスト名の別名の作成

Oracle Application Server インスタンスに OracleAS Web Cache を含める場合は、ホスト名の別名を作成する必要があります。

これを行うには、各ノードで `C:\%SystemRoot%\system32\drivers\etc\hosts` ファイルに行を追加します。`%SystemRoot%` は、Winnt と Windows のいずれかです。

`hosts` ファイルの行の書式は次のとおりです。1つ以上の別名を指定できます。

`ip_address official_hostname aliases...`

たとえば、`node1` および `node2` というノードがあり、別名を `cfcwebcache` とする場合は、次の行を `hosts` ファイルに追加します。

- `node1` の `hosts` ファイルに、次の行を追加します。

```
123.45.67.22 node1.mydomain.com node1 cfcwebcache.mydomain.com
```

- `node2` の `hosts` ファイルに、次の行を追加します。

```
123.45.67.33 node2.mydomain.com node2 cfcwebcache.mydomain.com
```

10.9.1.2 中間層のインストール

中間層を各ノードのローカル記憶域にインストールします。

ヒント： 時間を節約するために、中間層を両方のノードに別々にインストールするかわりに、同時にインストールできます。

インストールを実行する際には、次のことに注意してください。

- 両方のインストールで同じ Oracle ホームのパスを使用します。
- インストール時に[第 10.9.1.1 項「インストール前の手順](#)」で作成した staticports.ini ファイルを指定します。
- 両方のインストールで同じインスタンス名を使用します。これは必須ではありませんが、お薦めします。

J2EE and Web Cache 中間層をインストールするには、[第 6.9 項「Database-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール（Oracle Identity Management Access を使用する場合）」](#) を参照してください。

Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms 中間層をインストールするには、[第 6.13 項「Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms のインストール」](#) を参照してください。

10.9.1.3 インストール後の手順

中間層を Cold Failover Cluster モードで実行する前に、次のインストール後の手順を実行します。

- 第 10.9.1.3.1 項「(オプション) SSL を使用する中間層インスタンスの構成」
- 第 10.9.1.3.2 項「インストール（中間層および OracleAS Infrastructure）のバックアップ」
- 第 10.9.1.3.3 項「Oracle Fail Safe でのグループの作成」
- 第 10.9.1.3.4 項「(オプション) 共有ディスクでの OracleAS JMS のファイルベースの永続性用のファイル・システムの作成」
- 第 10.9.1.3.5 項「ノード 1 のコンポーネント構成の更新」
- 第 10.9.1.3.6 項「ノード 2 のコンポーネント構成の更新」
- 第 10.9.1.3.7 項「ファイルのバックアップ」

最後の項、第 10.9.1.3.8 項「既知の状態へのファイルのリストア」では、回復不能なエラーが変換中に発生した場合に既知の状態に戻す方法について説明します。

10.9.1.3.1 (オプション) SSL を使用する中間層インスタンスの構成

中間層インスタンスで SSL を使用する場合は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』の手順に従います。OracleAS Cold Failover Cluster 用に中間層を構成する前に、この SSL 構成を実行する必要があります。

10.9.1.3.2 インストール（中間層および OracleAS Infrastructure）のバックアップ

chgtocfmt スクリプト（第 10.9.1.3.5 項「ノード 1 のコンポーネント構成の更新」）を実行する前に、両方のノードの中間層と、OracleAS Metadata Repository および Oracle Identity Management コンポーネントを含む OracleAS Infrastructure をバックアップする必要があります。バックアップは、『Oracle Application Server 管理者ガイド』に説明されている OracleAS Backup and Recovery Tool を使用して実行できます。バックアップ・ファイルがあれば、変換中にエラーが発生した場合に、リストア操作を実行することができます。

10.9.1.3.3 Oracle Fail Safe でのグループの作成

node1 で Oracle Fail Safe にグループを作成し、そのグループに仮想ホスト名と仮想 IP を追加します。これは、第 10.2.7 項「Oracle Fail Safe でのグループの作成」の手順を実行して行うことができます。

共有ディスクをグループに追加する必要がないため、手順 6 で終了する必要があることに注意してください。

10.9.1.3.4 (オプション) 共有ディスクでの OracleAS JMS のファイルベースの永続性用のファイル・システムの作成

ファイルベースの永続性がある OracleAS JMS を使用する場合は、共有ディスクで OracleAS JMS キュー用のファイル・システムを作成します。クラスタ・アドミニストレータを使用して、この共有ディスクを Oracle Fail Safe グループに追加します。これは、第 10.2.7 項「Oracle Fail Safe でのグループの作成」の手順 6 と 7 を実行して行うことができます。

10.9.1.3.5 ノード 1 のコンポーネント構成の更新

次の手順を実行して、node1 にインストールした中間層の Oracle ホームで一部のコンポーネント構成を更新します。

1. 変換コマンド chgtocfmt をノード 1 で実行します。

注意： インストール後に、コンポーネントのポート番号を変更した場合は、この手順を実行する前に、ORACLE_HOME\$\install\portlist.ini にあるファイルを手動で更新する必要があります。

```
C:\> %ORACLE_HOME%\bin\chgtocfmt -v vhost_mt.mydomain.com -p password -n [-s] [-b]
[-e] [-w cfcwebcache.mydomain.com]
```

説明

- **-v** は、インストールが変換された完全修飾仮想ホスト名を指定します。仮想ホスト名は現在のホスト上で有効である必要があります。
- **-p** は、Oracle Internet Directory のパスワードを指定します。
- **-n** は、インストールが共有ディスクではないことを示します。
- **-s** は、SSL が中間層で有効であることを示します。
- **-b** は、OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）でインスタンスの変換を実行する前に、現在の構成のバックアップを実行することを示します。このオプションを使用するには、OracleAS Backup and Recovery Tool を事前に構成する必要があります。これを行うには、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
- **-e** は、OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）インストールを拡張することを示します。このオプションを使用するのは、既存の OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）に新しいコンポーネントを追加するか、追加のコンポーネントを構成する場合のみです。
- **-w** は、このノードの OracleAS Web Cache で使用される C:\%SystemRoot%\system32\drivers\etc\hosts にある別名を指定します。
%SystemRoot% は、Winnt と Windows のいずれかです。

2. エラーを調べるには、次のログ・ファイルを確認します。

- chgtocmt.log
- chgip0.log
- chgip1.log

これらのファイルは、ORACLE_HOME\chgip\log ディレクトリにあります。

3. ノード 1 の変更を検証します。

インストールを検証するには、URL 上の仮想ホスト名（たとえば、http://vhost_mt.mydomain.com:1156）を使用して Application Server Control ページにアクセスします。

デフォルトのポート番号は、1156 です。ポート番号は、ORACLE_HOME\install\portlist.ini ファイルを参照することによって確認できます。

4. OracleAS JMS の変更

- a. 使用を計画している OC4J インスタンスの jms.xml ファイルで、jms-server 内の host 属性を仮想ホスト名（vhost_mt.mydomain.com など）に設定します。

```
<jms-server host="vhost_mt.mydomain.com" port="9127">
...
</jms-server>
```

- b. キューにファイルベースのメッセージ永続性が使用されている場合、ファイルの場所は共有ディスク上であることが適しています。この場合、共有ディスクは仮想 IP とともにフェイルオーバーする必要があります。これを構成するには、queue の persistence-file 属性の値を共有ディスク上のファイルにする必要があります。

```
<queue name="Demo Queue" location="jms/demoQueue"
      persistence-file="/path/to/shared_file_system/demoQueueFile">
    <description>A dummy queue</description>
</queue>
```

- c. DCM リポジトリを更新して、コンポーネントを再起動します。

```
C:> %ORACLE_HOME%\dcm\bin\dcmtcl updateConfig -ct oc4j
C:> %ORACLE_HOME%\bin\emctl stop iasconsole
C:> %ORACLE_HOME%\opmn\bin\opmnctl stopall
C:> %ORACLE_HOME%\opmn\bin\opmnctl startall
C:> %ORACLE_HOME%\bin\emctl start iasconsole
```

5. ノード 2 への仮想 IP のフェイルオーバー

- a. node1 のすべての Oracle Application Server プロセスを停止します。

```
C:> %ORACLE_HOME%\bin\emctl stop iasconsole
C:> %ORACLE_HOME%\opmn\bin\opmnctl stopall
```

- b. 仮想ホスト名 *vhost_mt.mydomain.com* をノード 1 からノード 2 にフェイルオーバーします。

Oracle Fail Safe を使用して、Oracle Fail Safe で作成したグループを移動します。

Oracle Fail Safe Manager を起動します。

グループを右クリックして「別のノードに移動」を選択します。

10.9.1.3.6 ノード 2 のコンポーネント構成の更新

ノード 2 にインストールした中間層の Oracle ホームで次の手順を実行します。

1. 変換コマンド chgtocfmt を、[第 10.9.1.3.5 項](#)の手順 1 と同じようにしてノード 2 で実行します。
2. ノード 2 のログ・ファイルを、[第 10.9.1.3.5 項](#)の手順 2 と同じようにしてノード 2 で確認します。
3. ノード 2 の変更を、[第 10.9.1.3.5 項](#)の手順 3 と同じようにして検証します。
4. ノード 2 の OracleAS JMS を、[第 10.9.1.3.5 項](#)の手順 4 と同じようにして変更します。

10.9.1.3.7 ファイルのバックアップ

中間層が OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）トポロジに正常に変換されたら、ファイルを再びバックアップします。以前のバックアップは、構成を変更したために無効になっています。両方のノードの中間層すべてと、OracleAS Infrastructure をバックアップする必要があります。

OracleAS Backup and Recovery Tool を使用してバックアップを実行できます。手順は『Oracle Application Server 管理者ガイド』に記載されています。

10.9.1.3.8 既知の状態へのファイルのリストア

この項では、変換中にエラーが発生した場合に、ファイルを既知の状態にリストアする方法について説明します。

変換中に回復不能なエラーが発生した場合は、[第 10.9.1.3.2 項「インストール（中間層および OracleAS Infrastructure）のバックアップ」](#)で作成したバックアップ・ファイルを使用して、中間層と OracleAS Infrastructure を既知の状態に戻すことができます。リストアの操作を実行するには、OracleAS Backup and Recovery Tool を使用します。

バックアップ・ファイルがない場合は、chgtocfmt スクリプトを再度実行し、このスクリプトで行った変更を元に戻すことを試みることができます。ただしこのときには -v と -w の両方のオプションに *physical hostname* を使用します。たとえば、次のようにになります。

```
C:> %ORACLE_HOME%\bin\chgtocfmt -v physhost_mt.mydomain.com -p password -n [-s] [-b]
[-e] [-w physhost_mt.mydomain.com]
```

スクリプトを再実行してもうまくいかない場合があることに注意してください。仮想ホストベース環境に変換したときにスクリプトでエラーが発生した場合は、スクリプトを再実行して物理的なホストベース環境に戻すときにも同じエラーが発生するおそれがあります。

10.9.2 1つのOracleホームへのインストール

OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）を共有ディスクにインストールするには、次の手順を実行します。

注意： 1つのOracleホームのインストールは、OracleAS Wirelessを含むインストールに対してはサポートされていません。

10.9.2.1 インストール前の手順

中間層をインストールする前に、次の項に記載したインストール前の一般的な手順を実行します。

- [第10.2.1項「Event Logサービスの実行の確認」](#)
- [第10.2.2項「クラスタの仮想アドレスの取得」](#)
- [第10.2.3項「両方のノードへのMicrosoft Cluster Server \(MSCS\) のインストールの確認」](#)
- [第10.2.4項「クラスタの名前の確認」](#)
- [第10.2.5項「Oracle Fail Safeを管理するドメイン・ユーザーの決定」](#)
- [第10.2.6項「各ノードのローカル記憶域へのOracle Fail Safeのインストール」](#)

また、次の手順も実行する必要があります。

- [第10.9.2.1.1項「ホスト名の別名の作成」](#)
- [第10.9.2.1.2項「staticports.iniファイルの設定」](#)
- [第10.9.2.1.3項「Oracle Fail Safeでのグループの作成」](#)

10.9.2.1.1 ホスト名の別名の作成

Oracle Application ServerインスタンスにOracleAS Web Cacheを含める場合は、ホスト名の別名を作成する必要があります。

これを行うには、各ノードで C: $\%SystemRoot%\system32\drivers\etc\hosts ファイル$ に行を追加します。%SystemRoot%は、WinntとWindowsのいずれかです。

hosts ファイルの行の書式は次のとおりです。1つ以上の別名を指定できます。

ip_address official_hostname aliases...

たとえば、node1およびnode2というノードがあり、別名を cfcwebcacheとする場合は、次の行を hosts ファイルに追加します。

- node1のhosts ファイルに、次の行を追加します。

123.45.67.22 node1.mydomain.com node1 cfcwebcache.mydomain.com

- node2のhosts ファイルに、次の行を追加します。

123.45.67.33 node2.mydomain.com node2 cfcwebcache.mydomain.com

10.9.2.1.2 staticports.ini ファイルの設定

中間層のインストール時に使用する staticports.ini ファイルを設定します。staticports.ini ファイルの作成の詳細は、[第3.4.4項「カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）](#)を参照してください。

10.9.2.1.3 Oracle Fail Safeでのグループの作成 node1でOracle Fail Safeにグループを作成し、そのグループに仮想ホスト名と仮想IPを追加します。これは、[第10.2.7項「Oracle Fail Safeでのグループの作成」](#)の手順を実行して行うことができます。

10.9.2.2 中間層のインストール

ハードウェア・クラスタの共有ディスクに中間層をインストールするには、次の手順を実行します。

1. ハードウェア・クラスタの共有ディスクに、ノード1から中間層をインストールします。
2. ノード1で Oracle Application Server サービスを停止し、スタートアップの種類を手動に設定します。

- a. 「サービス」 ウィンドウを表示します。

Windows Server 2003 の場合：「スタート」 → 「管理ツール」 → 「サービス」 を選択します。

- b. 次のサービスを停止します。

```
Oracle<OracleHomeName>ASControl
```

```
Oracle<OracleHomeName>ProcessManager
```

サービスを停止するには、サービスを右クリックし、ポップアップ・メニューから「**停止**」を選択します。

- c. 前述のサービスのスタートアップの種類を、手動に設定します。

サービスを右クリックして、「**プロパティ**」を選択します。

「スタートアップの種類」セクションで「**手動**」を選択して、「**OK**」をクリックします。

3. Deconfig ツールを使用して、ノード1から中間層インスタンスの構成を解除します。

```
C:> cd %ORACLE_HOME%bin  
C:> ORACLE_HOME\perl\5.8.3\bin\MSWin32-IA64-multi-thread\perl.exe deconfig.pl  
[-u oid_user]  
[-w password] [-r realm] [-dbp sys_db_password]
```

Deconfig ツールの使用の詳細は、[付録 F 「削除および再インストール」](#) を参照してください。

4. ORACLE_HOME ディレクトリを削除します。

5. インストール前の作業で作成したクラスタ・グループを、ノード2にフェイルオーバーします。

- Oracle Fail Safe を使用して、Oracle Fail Safe で作成したグループを移動します。
- Oracle Fail Safe Manager を起動します。
- グループを右クリックして「別のノードに移動」を選択します。

6. ハードウェア・クラスタの共有ディスクに、ノード2から中間層をインストールします。ここで使用する値は、前のインストールで使用したものにしてください。

注意： インストール時に、[第 10.9.2.1 項「インストール前の手順」](#) で作成した staticports.ini ファイルを指定します。

J2EE and Web Cache 中間層をインストールするには、[第 6.9 項「Database-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール（Oracle Identity Management Access を使用する場合）」](#) を参照してください。

Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms 中間層をインストールするには、[第 6.13 項「Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms のインストール」](#) を参照してください。

10.9.2.3 インストール後の手順

中間層を Cold Failover Cluster モードで実行する前に、次のインストール後の手順を実行します。

- 第 10.9.2.3.1 項「(オプション) SSL を使用する中間層インスタンスの構成」
- 第 10.9.2.3.2 項「インストール（中間層および OracleAS Infrastructure）のバックアップ」
- 第 10.9.2.3.3 項「(オプション) 共有ディスクでの OracleAS JMS のファイルベースの永続性用のファイル・システムの作成」
- 第 10.9.2.3.4 項「コンポーネント構成の更新」
- 第 10.9.2.3.5 項「ファイルのバックアップ」
- 第 10.9.2.3.6 項「既知の状態へのファイルのリストア」

10.9.2.3.1 (オプション) SSL を使用する中間層インスタンスの構成

中間層インスタンスで SSL を使用する場合は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』の手順に従います。OracleAS Cold Failover Cluster 用に中間層を構成する前に、この SSL 構成を実行する必要があります。

10.9.2.3.2 インストール（中間層および OracleAS Infrastructure）のバックアップ

chgtocfmt スクリプト（第 10.9.2.3.4 項「コンポーネント構成の更新」）を実行する前に、両方のノードの中間層と、OracleAS Metadata Repository および Oracle Identity Management コンポーネントを含む OracleAS Infrastructure をバックアップする必要があります。バックアップは、『Oracle Application Server 管理者ガイド』に説明されている OracleAS Backup and Recovery Tool を使用して実行できます。バックアップ・ファイルがあれば、変換中にエラーが発生した場合に、リストア操作を実行することができます。

-b オプションを chgtocfmt スクリプトに使用してもファイルをバックアップできますが、次の点に注意してください。

- -b オプションでは、中間層インスタンスのみバックアップされます。OracleAS Infrastructure はバックアップされません。-b オプションは、スタンドアロンの J2EE and Web Cache 中間層（つまり、OracleAS Infrastructure を必要としない中間層）にのみ使用してください。
- -b オプションでは、OracleAS Backup and Recovery Tool をコールしてバックアップを行います。これは、-b オプションを使用する前に、前もって OracleAS Backup and Recovery Tool が構成されている必要があることを意味します。

10.9.2.3.3 (オプション) 共有ディスクでの OracleAS JMS のファイルベースの永続性用のファイル・システムの作成

ファイルベースの永続性がある OracleAS JMS を使用する場合は、共有ディスクで OracleAS JMS キュー用のファイル・システムを作成します。クラスタ・アドミニストレータを使用して、この共有ディスクを Oracle Fail Safe グループに追加します。これは、第 10.2.7 項「Oracle Fail Safe でのグループの作成」の手順 6 と 7 を実行して行うことができます。

10.9.2.3.4 コンポーネント構成の更新

次の手順を実行して、共有ディスクにインストールした中間層の Oracle ホームで一部のコンポーネント構成を更新します。

1. 変換コマンド chgtocfmt をノード 2 で実行します。

注意： インストール後に、コンポーネントのポート番号を変更した場合は、この手順を実行する前に、ORACLE_HOME\$\install\portlist.ini にあるファイルを手動で更新する必要があります。

```
C:\> %ORACLE_HOME%\bin\chgtocfmt -v vhost_mt.mydomain.com -p password [-n] [-s]
[-b] [-e] [-w cfcwebcache.mydomain.com]
```

説明

- **-v** は、インストールが変換された完全修飾仮想ホスト名を指定します。仮想ホスト名は現在のホスト上で有効である必要があります。
- **-p** は、Oracle Internet Directory のパスワードを指定します。
- **-n** は、インストールが共有ディスクではないことを示します。
- **-s** は、SSL が中間層で有効であることを示します。
- **-b** は、OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）でインスタンスの変換を実行する前に、現在の構成のバックアップを実行することを示します。このオプションは OracleAS Backup and Recovery Tool を起動して、バックアップを実行します。つまり、このオプションを使用するには、あらかじめ OracleAS Backup and Recovery Tool を構成する必要があります。これを行うには、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
- b オプションはすべての中間層で使用できますが、スタンドアロンの中間層(OracleAS Infrastructure と関連づけられていない中間層)でのみ使用することを強くお薦めします。その理由は、これがバックアップする対象が中間層のみであり、OracleAS Infrastructure をバックアップしないからです。OracleAS Infrastructure を使用する中間層については、OracleAS Backup and Recovery Tool を使用して、中間層と OracleAS Infrastructure の両方をバックアップします。
- **-e** は、OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）インストールを拡張することを示します。このオプションを使用するのは、既存の OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）に新しいコンポーネントを追加するか、追加のコンポーネントを構成する場合のみです。
- **-w** は、このノードの OracleAS Web Cache で使用される C:\%SystemRoot%\system32\drivers\etc\hosts にある別名を指定します。
%SystemRoot% は、Winnt と Windows のいずれかです。

2. エラーを調べるには、次のログ・ファイルを確認します。

- chgtocmt.log
- chgip0.log
- chgip1.log

これらのファイルは、ORACLE_HOME\chgip\Log ディレクトリにあります。

3. ノード 2 の変更を検証します。

インストールを検証するには、URL 上の仮想ホスト名（たとえば、http://vhost_mt.mydomain.com:1156）を使用して Application Server Control ページにアクセスします。

デフォルトのポート番号は、1156 です。ポート番号は、ORACLE_HOME\install\portlist.ini ファイルを参照することによって確認できます。

4. OracleAS JMS の変更

- a. 使用を計画している OC4J インスタンスの jms.xml ファイルで、jms-server 内の host 属性を仮想ホスト名 (vhost_mt.mydomain.com など) に設定します。

```
<jms-server host="vhost_mt.mydomain.com" port="9127">
...
</jms-server>
```

- b. キューにファイルベースのメッセージ永続性が使用されている場合、ファイルの場所は共有ディスク上であることが適しています。この場合、共有ディスクは仮想 IPとともにフェイルオーバーする必要があります。これを構成するには、queue の persistence-file 属性の値を共有ディスク上のファイルにする必要があります。

```
<queue name="Demo Queue" location="jms/demoQueue"
      persistence-file="/path/to/shared_file_system/demoQueueFile">
    <description>A dummy queue</description>
</queue>
```

- c. DCM リポジトリを更新して、コンポーネントを再起動します。

```
C:> %ORACLE_HOME%bin\dcmctl updateConfig -ct oc4j
C:> %ORACLE_HOME%bin\emctl stop iasconsole
C:> %ORACLE_HOME%\opmn\bin\opmnctl stopall
C:> %ORACLE_HOME%\opmn\bin\opmnctl startall
C:> %ORACLE_HOME%\bin\emctl start iasconsole
```

5. ノード 1 への仮想 IP のフェイルオーバー

- a. node1 のすべての Oracle Application Server プロセスを停止します。

```
C:> %ORACLE_HOME%\bin\emctl stop iasconsole
C:> %ORACLE_HOME%\opmn\bin\opmnctl stopall
```

- b. 仮想ホスト名 vhost_mt.mydomain.com をノード 2 からノード 1 にフェイルオーバーします。

Oracle Fail Safe を使用して、Oracle Fail Safe で作成したグループを移動します。

Oracle Fail Safe Manager を起動します。

グループを右クリックして「別のノードに移動」を選択します。

- c. Oracle ホームをホストしている共有ディスクをフェイルオーバーします。

6. ノード 1 のインストールを、手順 3 のときと同じようにして検証します。

10.9.2.3.5 ファイルのバックアップ

中間層が OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）トポロジに正常に変換されたら、ファイルを再びバックアップしてください。以前のバックアップは、構成を変更したために無効になっています。すべての中間層と、OracleAS Infrastructure をバックアップする必要があります。

OracleAS Backup and Recovery Tool を使用してバックアップを実行できます。手順は『Oracle Application Server 管理者ガイド』に記載されています。

10.9.2.3.6 既知の状態へのファイルのリストア

この項では、変換中にエラーが発生した場合に、ファイルを既知の状態にリストアする方法について説明します。

変換中に回復不能なエラーが発生した場合は、[第 10.9.1.3.2 項「インストール（中間層および OracleAS Infrastructure）のバックアップ」](#)で作成したバックアップ・ファイルを使用して、中間層と OracleAS Infrastructure を既知の状態に戻すことができます。リストアの操作を実行するには、OracleAS Backup and Recovery Tool を使用します。

バックアップ・ファイルがない場合は、chgtocfmt スクリプトを再度実行し、このスクリプトで行った変更を元に戻すことを試みることができます。ただしこのときには -v と -w の両方のオプションに physical hostname を使用します。たとえば、次のようになります。

```
C:> %ORACLE_HOME%\bin\chgtocfmt -v physhost_mt.mydomain.com -p password -n [-s] [-b]
[-e] [-w physhost_mt.mydomain.com]
```

スクリプトを再実行してもうまくいかない場合があることに注意してください。仮想ホストベース環境に変換したときにスクリプトでエラーが発生した場合は、スクリプトを再実行して物理的なホストベース環境に戻すときにも同じエラーが発生するおそれがあります。

10.9.3 中間層の拡張

OracleAS Cold Failover Cluster (中間層) をインストールした後に、中間層にインストールされていないか、構成されていないコンポーネントが必要となることがあります。

コンポーネントをさらに追加する場合のインストール手順については、[第 6.14 項「中間層の拡張」](#) を参照してください。以前に構成されていないコンポーネントを構成する必要がある場合は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。個別の Oracle ホームにインストールするには、クラスタの両方のノードにある中間層を拡張する必要があります。

OracleAS Wireless コンポーネントは Oracle ホームにインストールされている OracleAS Cold Failover Cluster (中間層) に対してはサポートされていないことに注意してください。

さらにコンポーネントを追加または構成した後は、-e オプションを指定して chgtocfmt コマンドを実行する必要があります。その他すべてのオプションは、最初に実行したときと同じします。たとえば、最初に実行したのが次のコマンドであるとします。

```
C:\> %ORACLE_HOME%\bin\chgtocfmt -v vhost_mt.mydomain.com -p password -w cfcwebcache.mydomain.com
```

その場合は、中間層を拡張した後に次のコマンドを実行します。

```
C:\> %ORACLE_HOME%\bin\chgtocfmt -v vhost_mt.mydomain.com -p password -w cfcwebcache.mydomain.com -e
```

個別の Oracle ホームにインストールするには、クラスタの両方のノードで chgtocfmt コマンドを実行する必要があります。

10.10 同じノードへの OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) および OracleAS Cold Failover Cluster (中間層) のインストール

この構成は、[第 10.3 項「OracleAS Cold Failover Cluster \(Infrastructure\) 構成のインストール」](#) と [第 10.9 項「OracleAS Cold Failover Cluster \(中間層\) のインストール」](#) を組み合せたものです。この項では、同じノードにこれらの構成をインストールする方法について説明します。

[図 10-28](#) に、コンポーネントをインストールする場所と、それらを実行するノードを示します。

正常動作時には、OracleAS Infrastructure はノード 1 で実行され、中間層はノード 2 で実行されます。通常の Cold Failover Cluster 構成とは異なり、この場合は両方のノードがアクティブですが、異なるコンポーネント (OracleAS Infrastructure コンポーネントまたは中間層コンポーネントのいずれか) が実行されます。

仮想ホスト名

2 つの仮想ホスト名が必要です。1 つ目の仮想ホスト名 (vhost_infra など) は OracleAS Infrastructure を実行しているノードを指し、2 つ目の仮想ホスト名 (vhost_mt など) は中間層を実行しているノードを指します。

フェイルオーバー

ノード 1 に障害が発生すると ([図 10-29](#))、OracleAS Infrastructure プロセスはノード 2 にフェイルオーバーされます。ノード 1 を指していた仮想ホスト名はノード 2 を指すようになります。

ノード 2 に障害が発生すると ([図 10-30](#))、中間層プロセスはノード 1 にフェイルオーバーされます。ノード 2 を指していた仮想ホスト名はノード 1 を指すようになります。インストール後に、中間層が他のノードにフェイルオーバーされるように構成する必要があることに注意してください。

Oracle ホームの場所

OracleAS Infrastructure は共有記憶域にインストールし、中間層は各ノードのローカル記憶域にインストールします。中間層は各ノードに対し 1 回ずつ、合計 2 回インストールします。

OracleAS Infrastructure または中間層にアクセスするには、クライアントは OracleAS Infrastructure または中間層コンポーネントを実行しているノードに関連付けられた仮想ホスト名を使用します。

また、URL でも仮想ホスト名を使用します。たとえば、vhost_infra.mydomain.com が OracleAS Infrastructure の仮想ホスト名である場合、Oracle HTTP Server および Application Server Control の URL は次のようにになります。

次のものの URL	URL の例
Oracle HTTP Server、「ようこそ」ページ	http://vhost.mydomain.com:80
Oracle HTTP Server、セキュア・モード	https://vhost.mydomain.com:443
Application Server Control	http://vhost.mydomain.com:18100

図 10-28 同じノードへの OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) および OracleAS Cold Failover Cluster (中間層)

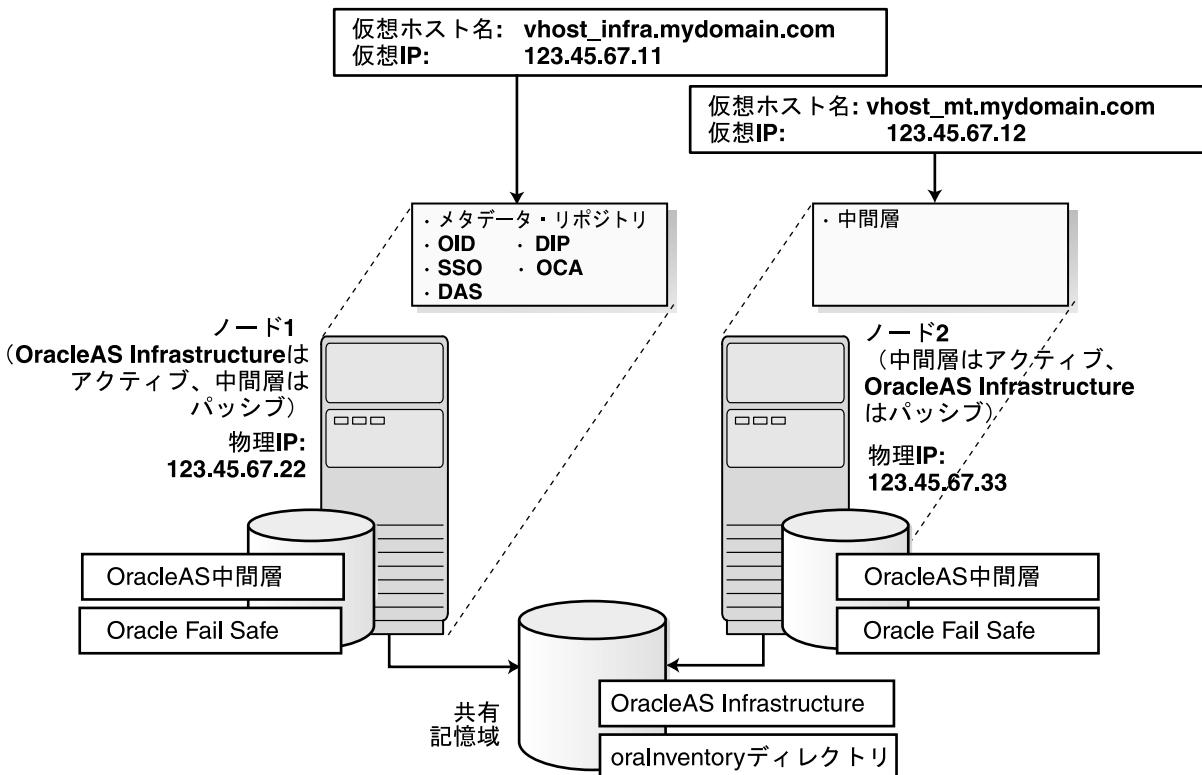


図 10-29 ノード 1 に障害が発生した場合

OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) および OracleAS Cold Failover Cluster (中間層)

ノード1に障害が
発生した場合

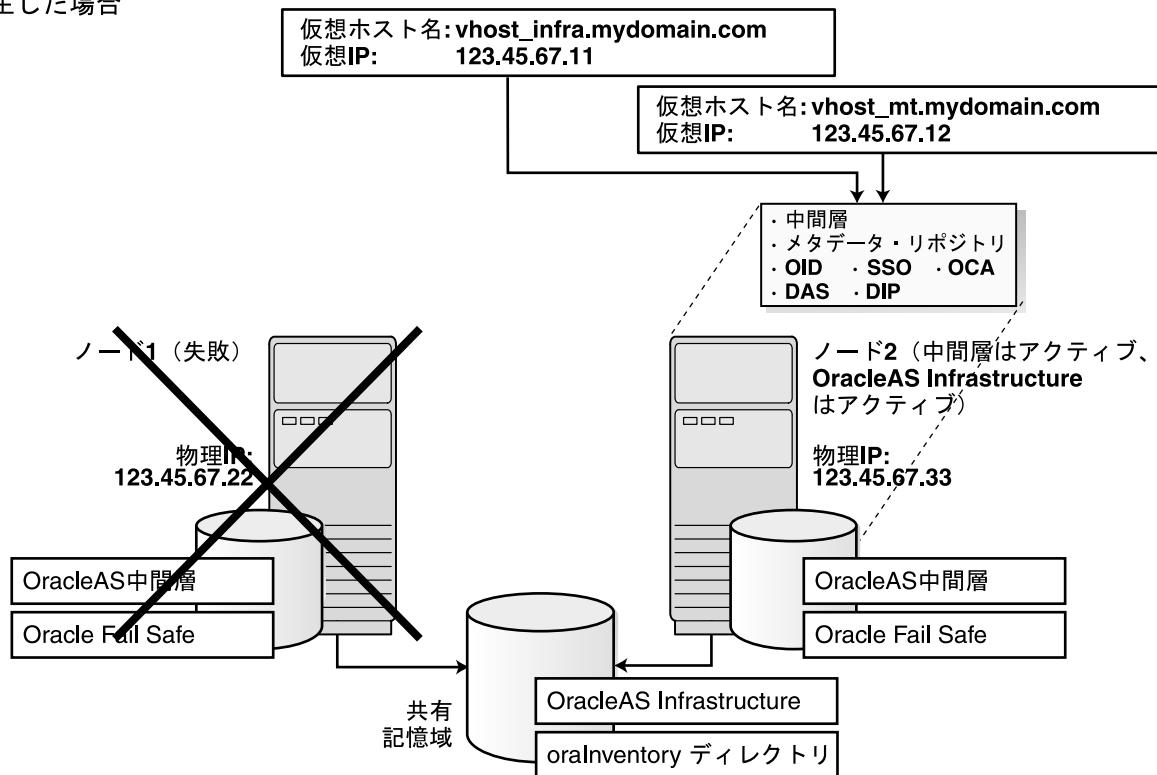
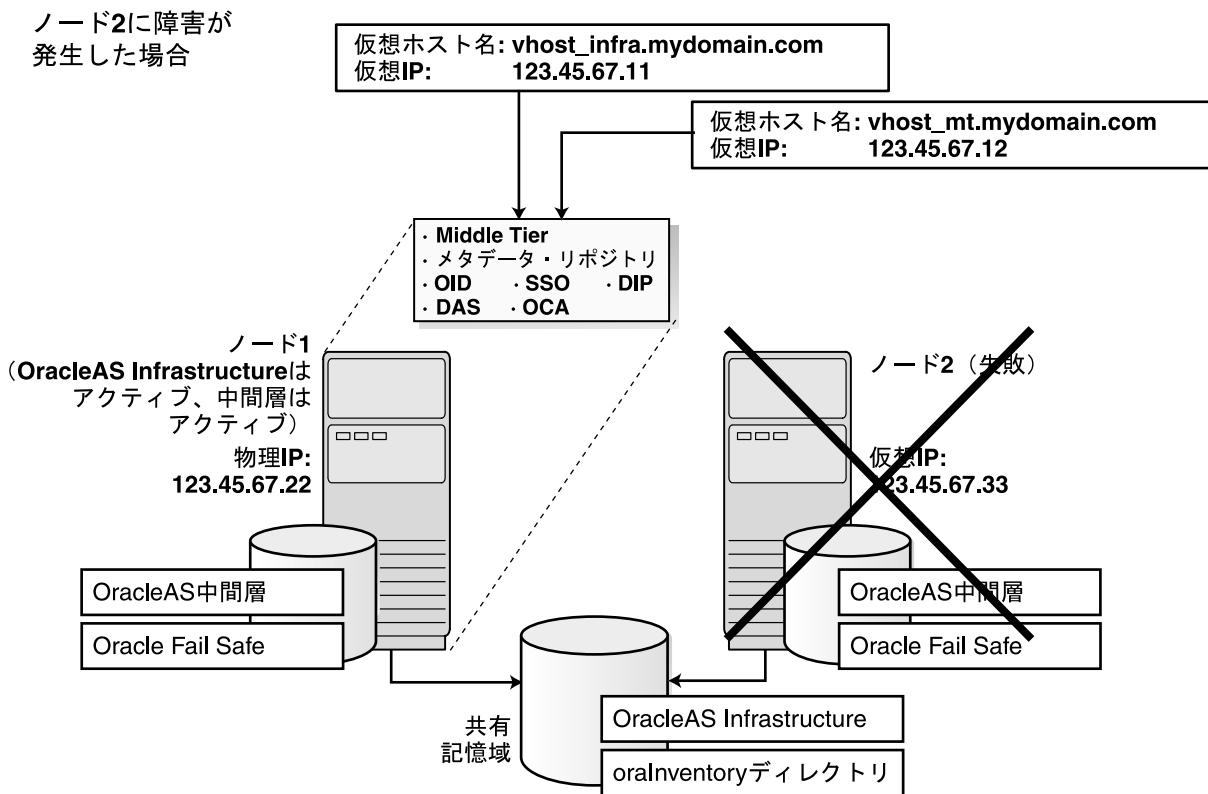


図 10-30 ノード 2 に障害が発生した場合

OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure) および OracleAS Cold Failover Cluster (中間層)



10.10.1 インストール手順

この構成を作成するには、次の手順を実行します。

1. 環境を設定します。

- 第 10.2.1 項 「Event Log サービスの実行の確認」
- 第 10.2.2 項 「クラスタの仮想アドレスの取得」
- 第 10.2.3 項 「両方のノードへの Microsoft Cluster Server (MSCS) のインストールの確認」
- 第 10.2.4 項 「クラスタの名前の確認」
- 第 10.2.5 項 「Oracle Fail Safe を管理するドメイン・ユーザーの決定」
- 第 10.2.6 項 「各ノードのローカル記憶域への Oracle Fail Safe のインストール」
- 第 10.2.7 項 「Oracle Fail Safe でのグループの作成」

2. ホスト名の別名を作成します。

これを行うには、各ノードで `C:\%SystemRoot%\system32\drivers\etc\hosts` ファイルに行を追加します。`%SystemRoot%` は、Winnt と Windows のいずれかです。

`hosts` ファイルの行の書式は次のとおりです。1つ以上の別名を指定できます。

`ip_address official_hostname aliases...`

たとえば、node1 および node2 というノードがあり、別名を cfcwebcache とする場合は、次の行を hosts ファイルに追加します。

- node1 の hosts ファイルに、次の行を追加します。

```
123.45.67.22 node1.mydomain.com node1 cfcwebcache.mydomain.com
```

- node2 の hosts ファイルに、次の行を追加します。

```
123.45.67.33 node2.mydomain.com node2 cfcwebcache.mydomain.com
```

3. 共有記憶域に OracleAS Infrastructure をインストールします。詳細は、[第 10.3.2 項「OracleAS Cold Failover Cluster \(Infrastructure\) : インストール手順の詳細」](#) を参照してください。
4. 中間層用の staticports.ini ファイルを作成します。これによって、中間層が同じポートを使用し、そのポートが OracleAS Infrastructure によって使用されるポートとは異なるようにできます。

いずれかのノードで障害が発生すると、フェイルオーバー・イベントが発生し、すべての OracleAS Infrastructure および中間層コンポーネントが同じノードで実行されるようになります。コンポーネントの動作を継続するためには、ポートの競合が発生しないようにする必要があります。

5. 中間層を各ノードのローカル記憶域にインストールします。

中間層をインストールする際の注意点を次に示します。

- 両方のノードに対して同じ Oracle ホームのパスを使用する必要があります。
- 同じ Oracle Application Server インスタンス名を使用する必要があります。
- インストーラによって Oracle Internet Directory のホスト名の入力を要求されたら、OracleAS Infrastructure の *virtual hostname* を入力します。
- J2EE and Web Cache 中間層をインストールするには、[第 6.9 項「Database-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール \(Oracle Identity Management Access を使用する場合\)」](#) を参照してください。
- Portal and Wireless 中間層をインストールするには、[第 6.13 項「Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms のインストール」](#) を参照してください。

10.10.2 インストール後の手順

node1 および node2 に対し、[第 10.9.2.3 項「インストール後の手順」](#) に示すインストール後の手順を実行します。

10.11 OracleAS Cold Failover Cluster のインストール後の手順

- [第 10.11.1 項「ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥htdocs¥index.html ファイルの編集」](#)

10.11.1 ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥htdocs¥index.html ファイルの編集

ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥htdocs¥index.html ファイルで、すべての物理ホスト名 (node1 など) を仮想ホスト名 (vhost) に変更します。ここで、node1 はホスト名を示します。

node1 が Oracle Application Server インスタンス名の一部として使用されている場合は、変更しないでください。

10.12 サポートされる手順

この項では、サポートされている手順について説明します。この章の前半にある構成に関する説明では、次の手順が参照されています。ご使用の構成に関連する手順のみを実行します。

- [第 10.12.1 項「データベースの pfile の作成」](#)
- [第 10.12.2 項「OracleAS Metadata Repository の高可用性設定」](#)
- [第 10.12.3 項「リスナーへの共有ディスクの依存関係の追加」](#)
- [第 10.12.4 項「OPMN の高可用性設定」](#)
- [第 10.12.5 項「OPMN への共有ディスクの依存関係の追加」](#)
- [第 10.12.6 項「Application Server Control の高可用性設定」](#)
- [第 10.12.7 項「正しいリスナーがアクティブであることの確認」](#)

10.12.1 データベースの pfile の作成

pfile は、データベースの初期化パラメータが格納されているテキスト・ファイルです。Oracle Fail Safe ではデータベースに pfile が必要です。データベースをグループに追加する際に、pfile へのフルパスを「パラメータ・ファイル」に入力します（[図 10-33](#) を参照）。

1. ORACLE_HOME¥database ディレクトリに init<SID>.ora というファイルを作成します。
2. ファイルに次の行を追加します。

```
spfile=<ORACLE_HOME>¥database¥spfile<SID>.ora
remote_login_passwordfile=<PARAMETER_VALUE>
local_listener="(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=<Virtual_IP>)(PORT=1521))"
```

<ORACLE_HOME> は、Oracle ホーム・ディレクトリのフルパスに置き換えます。

<SID> は、データベースの SID に置き換えます。

<PARAMETER_VALUE> は、EXCLUSIVE または SHARED に置き換えます。

<Virtual_IP> は、仮想ホスト名の仮想 IP に置き換えます。

10.12.2 OracleAS Metadata Repository の高可用性設定

任意のノードのローカル・ディスクにデータベースをインストールしてから OracleAS Metadata Repository をインストールした場合は、OracleAS Metadata Repository の高可用性を設定する前に、一部のファイルを移動する必要があります。表領域をインストールした共有ディスクに、次のファイルを移動します。

- ORACLE_HOME¥dbs¥init.ora
- ORACLE_HOME¥oradata¥ORACLE_SID¥control01.ctl
- ORACLE_HOME¥oradata¥ORACLE_SID¥control02.ctl
- ORACLE_HOME¥oradata¥ORACLE_SID¥control03.ctl
- ORACLE_HOME¥oradata¥ORACLE_SID¥redo01.log
- ORACLE_HOME¥oradata¥ORACLE_SID¥redo02.log
- ORACLE_HOME¥oradata¥ORACLE_SID¥redo03.log

OracleAS Metadata Repository の高可用性設定を行うには、グループに OracleAS Metadata Repository を追加します。

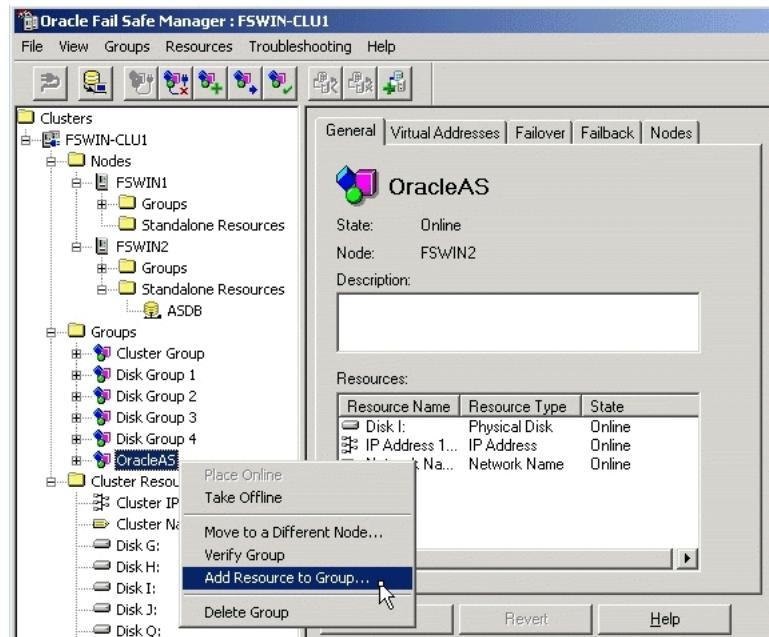
- ノード 2 で、「スタート」メニューから Oracle Fail Safe Manager を起動します。

「スタート」→「プログラム」→「Oracle - OracleHomeName」→「Oracle Fail Safe Manager」を選択します。

ここで、*OracleHomeName* は、Oracle Fail Safe をインストールした Oracle ホーム・ディレクトリの名前です。

- 左側で「グループ」を展開して、[第 10.2.7 項「Oracle Fail Safe でのグループの作成」](#)で作成したグループを右クリックし、「リソースをグループに追加」を選択します。リソースをグループに追加ウィザードが起動されます。

図 10-31 Oracle Fail Safe Manager: 「リソースをグループに追加」

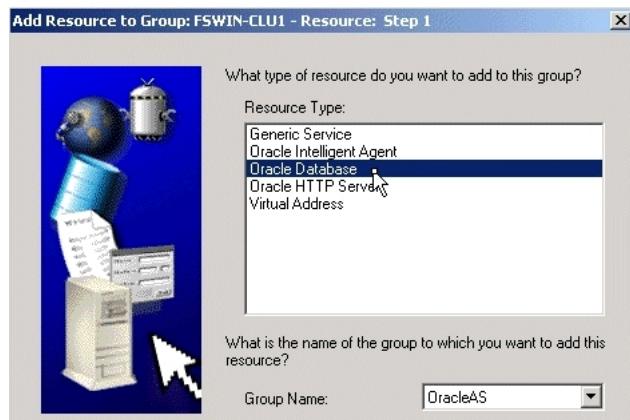


- リソースをグループに追加ウィザードで、次の手順を実行します。

- 「リソース : ステップ 1」

「Oracle Database」およびグループを選択して、「次へ」をクリックします。

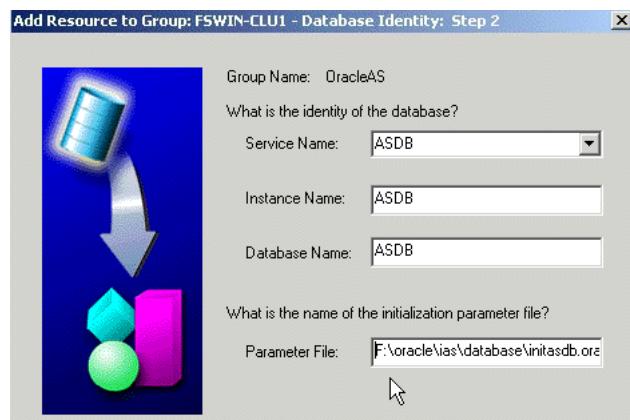
図 10-32 「リソースをグループに追加」 ウィザード（データベースの追加）の「リソース：ステップ 1」画面



b. 「データベース識別情報：ステップ 2」

サービス名、インスタンス名およびデータベース名を入力して、「次へ」をクリックします。

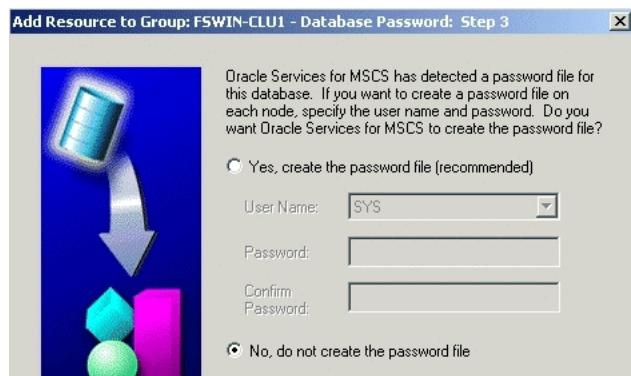
図 10-33 「リソースをグループに追加」 ウィザード（データベースの追加）の「データベース識別情報：ステップ 2」画面



c. 「データベース・パスワード：ステップ 3」

「いいえ、パスワード・ファイルを作成しません」を選択し、「完了」をクリックします。

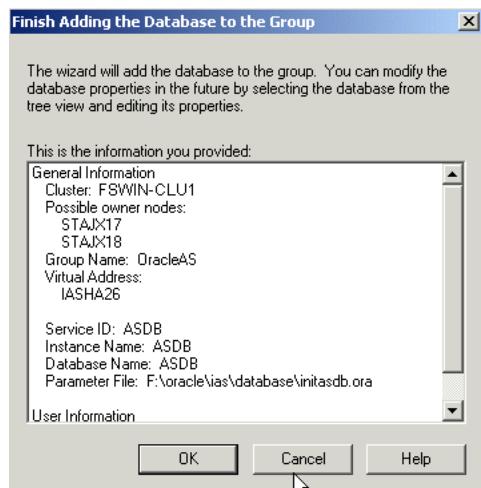
図 10-34 「リソースをグループに追加」 ウィザード（データベースの追加）の「データベース・パスワード：ステップ 3」画面



d. 「データベースのグループへの追加の完了」画面

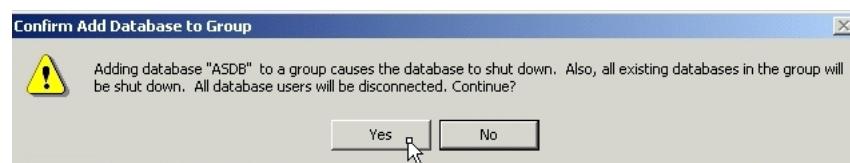
情報を確認して、「OK」をクリックします。特に、クラスタの両方のノードが、「可能所有者ノード」の下に表示されていることを確認します。

図 10-35 「リソースをグループに追加」 ウィザード（データベースの追加）の「データベースのグループへの追加の完了」画面



e. 「データベースのグループへの追加の確認」画面：「はい」をクリックします。

図 10-36 「リソースをグループに追加」 ウィザード（データベースの追加）の「データベースのグループへの追加の確認」画面



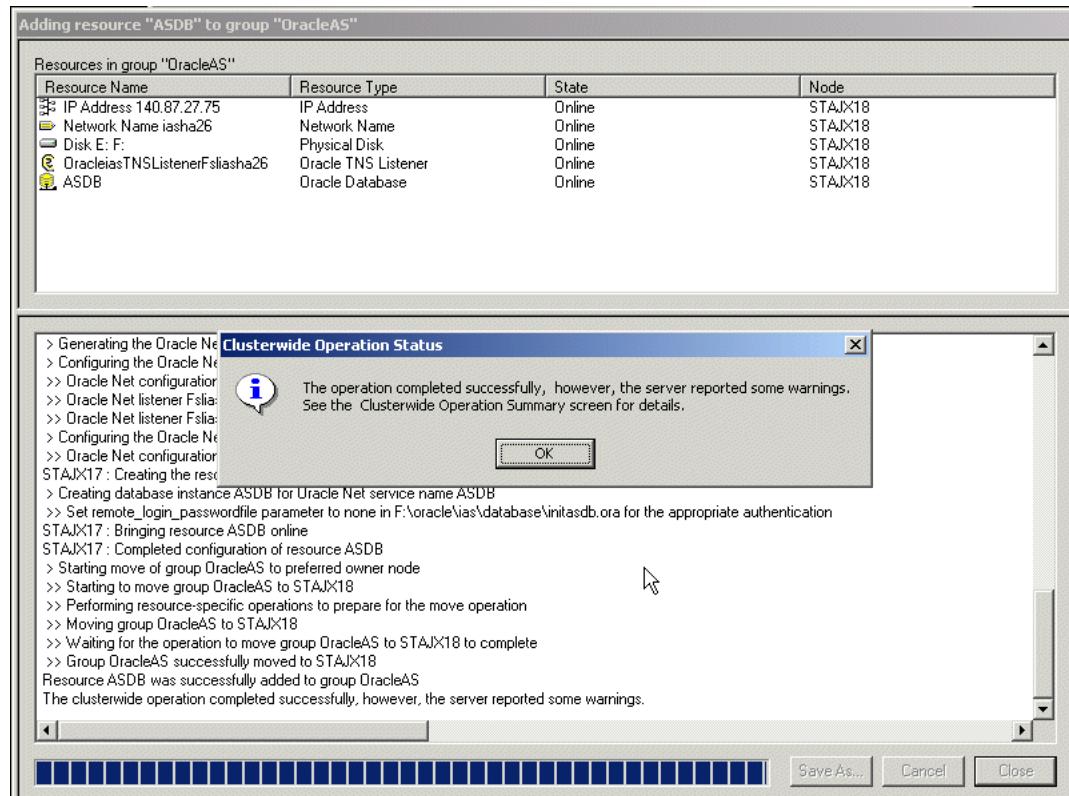
- f. リスナーに関する「FS-10230: Oracle Net リスナー LISTENER はホスト・アドレス・パラメータのホスト名を使用します。」という警告が表示された場合、「はい」をクリックします。Oracle Fail Safe によって、矛盾が修正されます。Oracle Fail Safe では、Oracle<OracleHomeName>TNSListenerFsl<virtualHostName>という名前でリスナー・サービスを設定する必要があります。これは、クラスタ内のノードで実行する唯一のリスナー・サービスです。

図 10-37 FS-10230 の警告



- g. クラスタ内の両方のノードでデータベースを実行できるように、Oracle Fail Safe Manager によってデータベースが構成されます。構成中は、図 10-38 の「ノード」列に示されているとおり、Oracle Fail Safe Manager によって、ノード 2 からノード 1 へデータベースがフェイルオーバーされます（「STAJX17」はノード 1 です）。構成が完了すると、図 10-38 に類似した画面が表示されます。

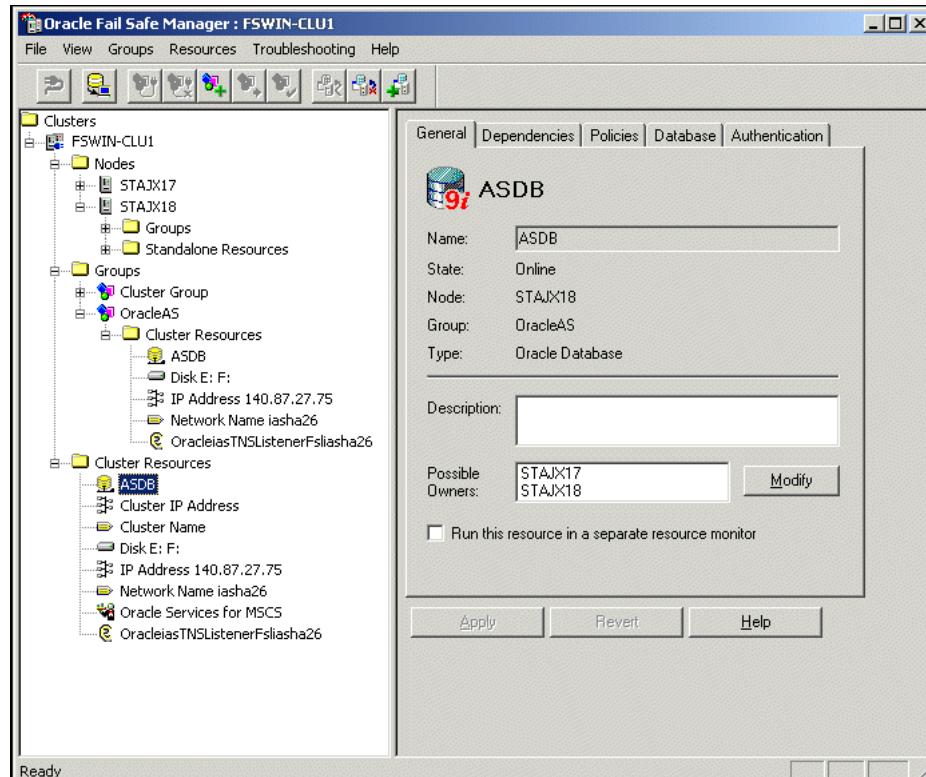
図 10-38 「リソースをグループに追加」ウィザード（データベースの追加）の最後の画面



Oracle ソフトウェアに関する警告は無視できます。ただし、システムに関する警告は、調査する必要があります。ステータスを示すダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。

- h.** Oracle Fail Safe Manager で、グループの下にデータベースが表示されていることを確認します（図 10-39）。データベース SID とデータベース・リスナーの両方が表示されていることを確認します。リスナーが、Oracle<OracleHomeName>TNSListener ではなく、Oracle<OracleHomeName>TNSListenerF\$1<virtualHostName> であることに注意してください。後で、Oracle<OracleHomeName>TNSListener リスナーは無効にします（第 10.12.7 項「正しいリスナーがアクティブであることの確認」を参照）。

図 10-39 データベースをグループに追加した後の Oracle Fail Safe Manager の表示



10.12.3 リスナーへの共有ディスクの依存関係の追加

リスナーに対し共有ディスクの依存関係を設定する必要があります（例では Disk X）。これは、コマンドを実行するか、クラスタ・アドミニストレータから行います。間違いの可能性が低くなるため、クラスタ・アドミニストレータの使用をお薦めします。

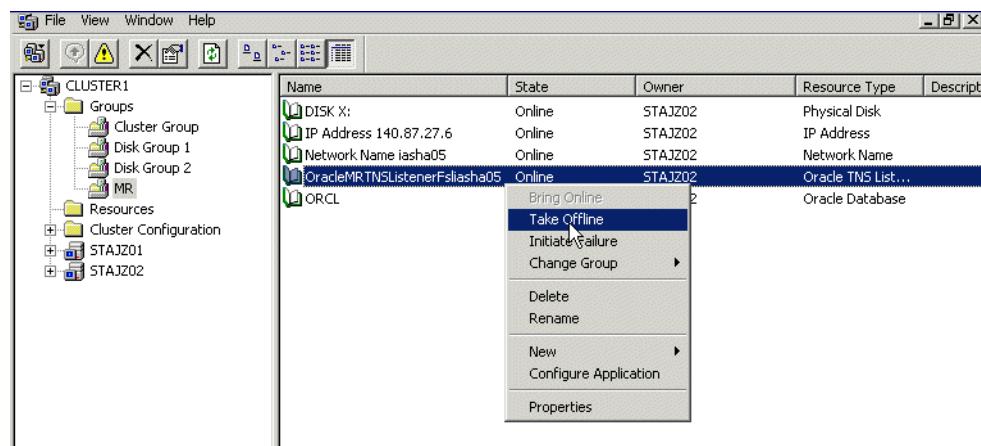
クラスタ・アドミニストレータの使用

- 「スタート」メニューからクラスタ・アドミニストレータを起動します。

Windows Server 2003 の場合：「スタート」→「管理ツール」→「クラスタ アドミニストレータ」を選択します。

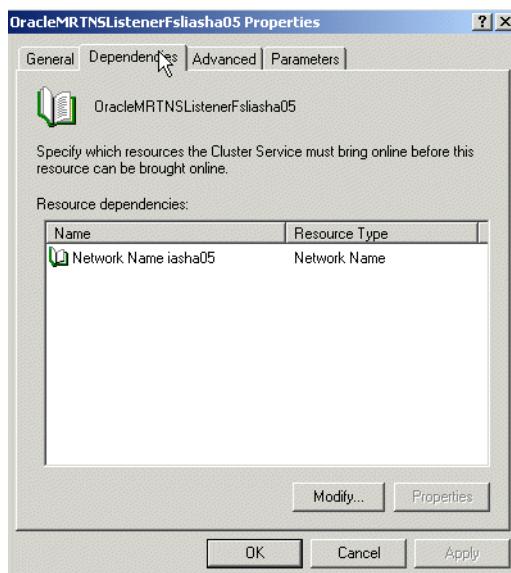
- リスナーをオフラインにします。これには、次の手順を実行します。
 - 左側で「グループ」を展開します。
 - 左側で、以前に作成したグループを選択します。
 - 右側で、リスナーを右クリックして「オフラインにする」を選択します。

図 10-40 クラスタ・アドミニストレータ - リスナーのオフライン



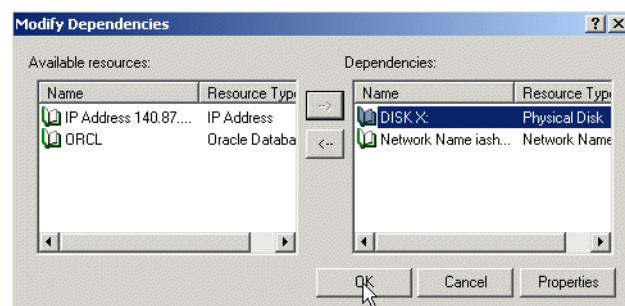
3. 右側で、リスナーを右クリックして「プロパティ」を選択します。
4. 「依存関係」タブを選択して、「変更」をクリックします。

図 10-41 クラスタ・アドミニストレータ - 「依存関係」タブが表示されている「プロパティ」画面



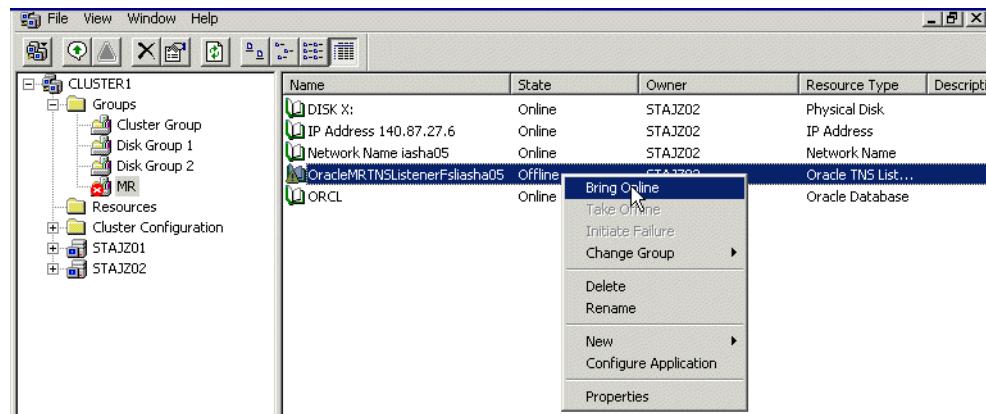
5. ディスクを「依存関係」リストに移動して「OK」をクリックします。

図 10-42 クラスタ・アドミニストレータ - 「依存性関係の変更」画面



6. プロパティ・ダイアログ・ボックスで「適用」をクリックします。
7. リスナーをオンラインにします。これを行うには、右側でリスナーを右クリックして「オンラインにする」を選択します。

図 10-43 クラスタ・アドミニストレータ - リスナーのオンライン



コマンドの使用

クラスタ・アドミニストレータを使用するかわりに、シェルからコマンドを実行できます。

1. リスナーをオフラインにします。これはクラスタ・アドミニストレータを使用して実行できます。前述の「クラスタ・アドミニストレータの使用」の項の最初の 2 つの手順を参照してください。
2. 次のコマンドを実行します。

```
C:\> cluster resource OracleiasTNSListenerFslasha26 /offline
C:\> cluster resource OracleiasTNSListenerFslasha26 /addDep:"Disk F:"
C:\> cluster resource OracleiasTNSListenerFslasha26 /online
```

OracleiasTNSListenerFslasha26 は、ご使用のリスナー名に置き換えてください。リスナー名には、*Oracle<OracleHomeName>TNSListenerFsl<virtualHostName>* という形式を使用します。

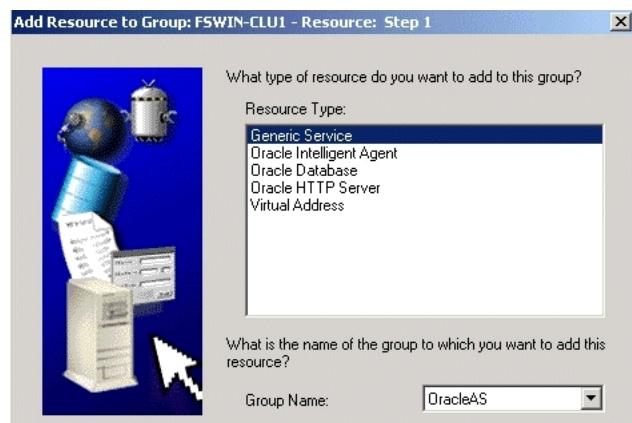
Disk F: は、ご使用の共有ディスク名に置き換えてください。

10.12.4 OPMN の高可用性設定

OPMN の高可用性設定を行うには、[第 10.2.7 項「Oracle Fail Safe でのグループの作成」](#) で作成した Oracle Fail Safe グループに OPMN を追加します。OPMN は、*Oracle<OracleHomeName>ProcessManager* サービスに対応します。

1. Oracle Fail Safe Manager を起動します。
2. 左側で「グループ」を展開して、[第 10.2.7 項「Oracle Fail Safe でのグループの作成」](#) で作成したグループを右クリックし、「リソースをグループに追加」を選択します。リソースをグループに追加ウィザードが起動されます。
このグループおよびメニュー項目は、データベースをグループに追加したときに選択したグループおよびメニュー項目と同じです（[図 10-31](#) を参照）。
3. リソースをグループに追加ウィザードで、次の手順を実行します。
 - a. 「リソース：ステップ 1」
「汎用サービス」を選択して、グループが正しいことを確認し、「次へ」をクリックします。

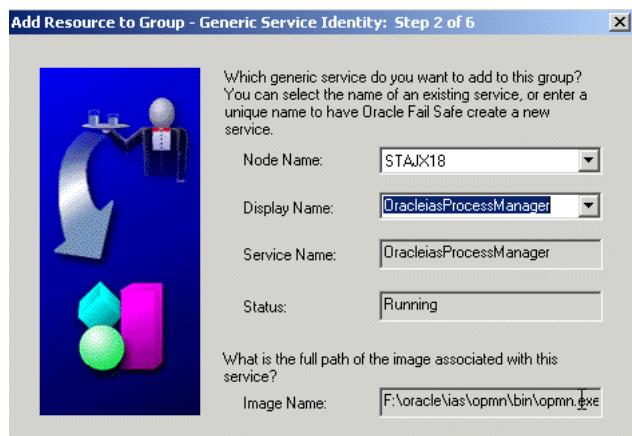
図 10-44 「リソースをグループに追加」 ウィザード (OPMN の追加) の「リソース : ステップ 1」画面



b. 「汎用サービスの識別情報 : ステップ 2」

「表示名」で「Oracle<OracleHomeName>ProcessManager」を選択して、「次へ」をクリックします。

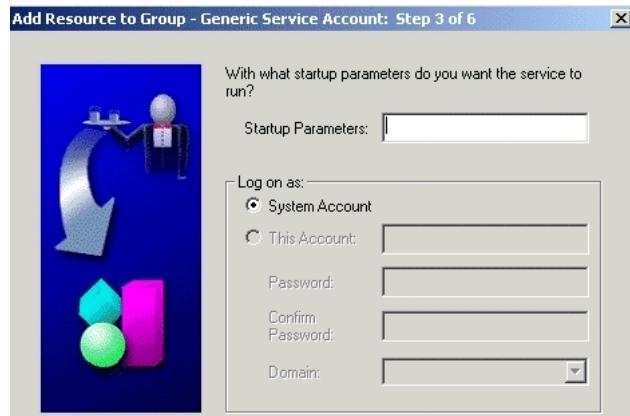
図 10-45 「リソースをグループに追加」 ウィザード (OPMN の追加) の「汎用サービスの識別情報 : ステップ 2」画面



c. 「汎用サービスのアカウント : ステップ 3」

OPMN の起動パラメータは存在しません。「次へ」をクリックします。

図 10-46 「リソースをグループに追加」 ウィザード (OPMN の追加) の「汎用サービスのアカウント : ステップ 3」画面



d. 「汎用サービスのディスク : ステップ 4」

「選択済ディスク」には、何も表示されていない必要があります。「次へ」をクリックします。

図 10-47 「リソースをグループに追加」 ウィザード (OPMN の追加) の「汎用サービスのディスク : ステップ 4」画面



e. 「汎用サービスの依存性 : ステップ 5」

使用可能リソースには、グループのリソースが表示されます。リソースの依存性に移動する必要があるリソースは、インストールする構成によって異なります。

表 10-13 リソースの依存性

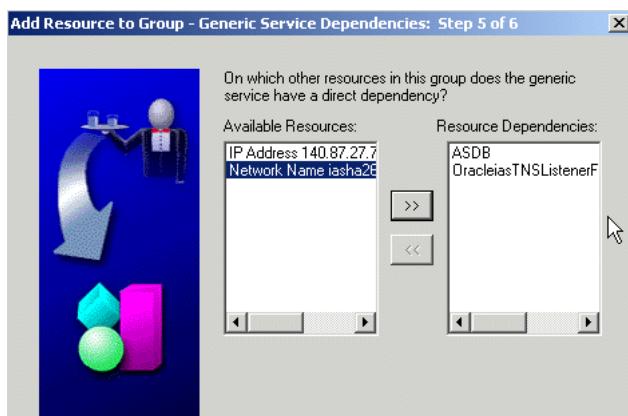
インストールする構成	「リソースの依存性」に移動するアイテム	「使用可能なリソース」に残すアイテム
■ OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure)	■ データベース SID	■ IP アドレス
■ 分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure)	■ データベース TNS リスナー	■ ネットワーク名
■ OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management)	なし	■ IP アドレス ■ ネットワーク名
■ 分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Oracle Identity Management)。		
■ OracleAS Cold Failover Cluster (中間層)		
Oracle Delegated Administration Services の OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory ノード、および OracleAS Cold Failover Cluster の OracleAS Single Sign-On	■ データベース SID ■ データベース TNS リスナー	■ IP アドレス ■ ネットワーク名

表 10-13 リソースの依存性（続き）

インストールする構成	「リソースの依存性」に移動するアイテム	「使用可能なリソース」に残すアイテム
Oracle Delegated Administration Services の Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On ノード、および OracleAS Cold Failover Cluster の OracleAS Single Sign-On	なし	<ul style="list-style-type: none"> ■ IP アドレス ■ ネットワーク名

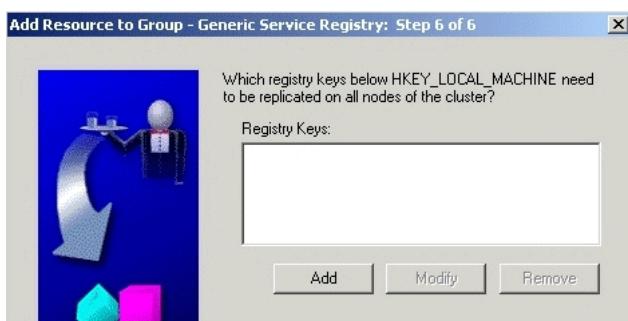
「次へ」をクリックします。

図 10-48 「リソースをグループに追加」ウィザード（OPMN の追加）の「汎用サービスの依存性：ステップ 5」画面



f. 汎用サービスのレジストリ：ステップ 6: 「終了」をクリックします。

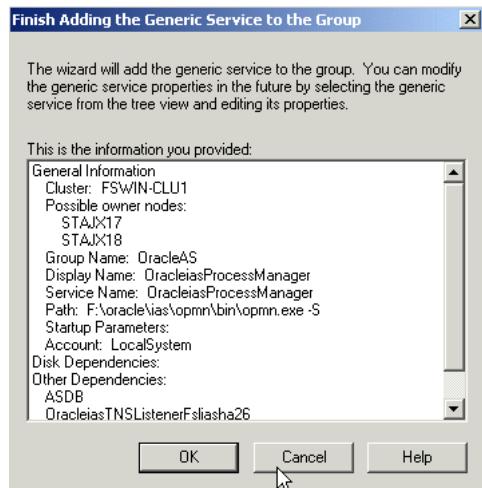
図 10-49 「リソースをグループに追加」ウィザード（OPMN の追加）の「汎用サービスのレジストリ：ステップ 6」画面



g. 「汎用サービスのグループへの追加の完了」

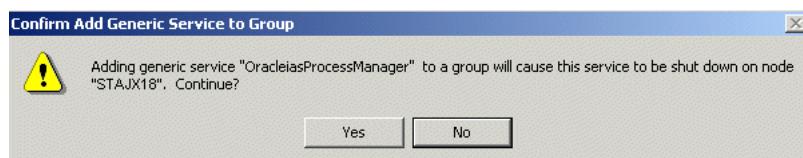
情報を確認して、「OK」をクリックします。特に、クラスタの両方のノードが、「可能所有者ノード」の下に表示されていることを確認します。

図 10-50 「リソースをグループに追加」 ウィザード (OPMN の追加) の「汎用サービスのグループへの追加の完了」画面



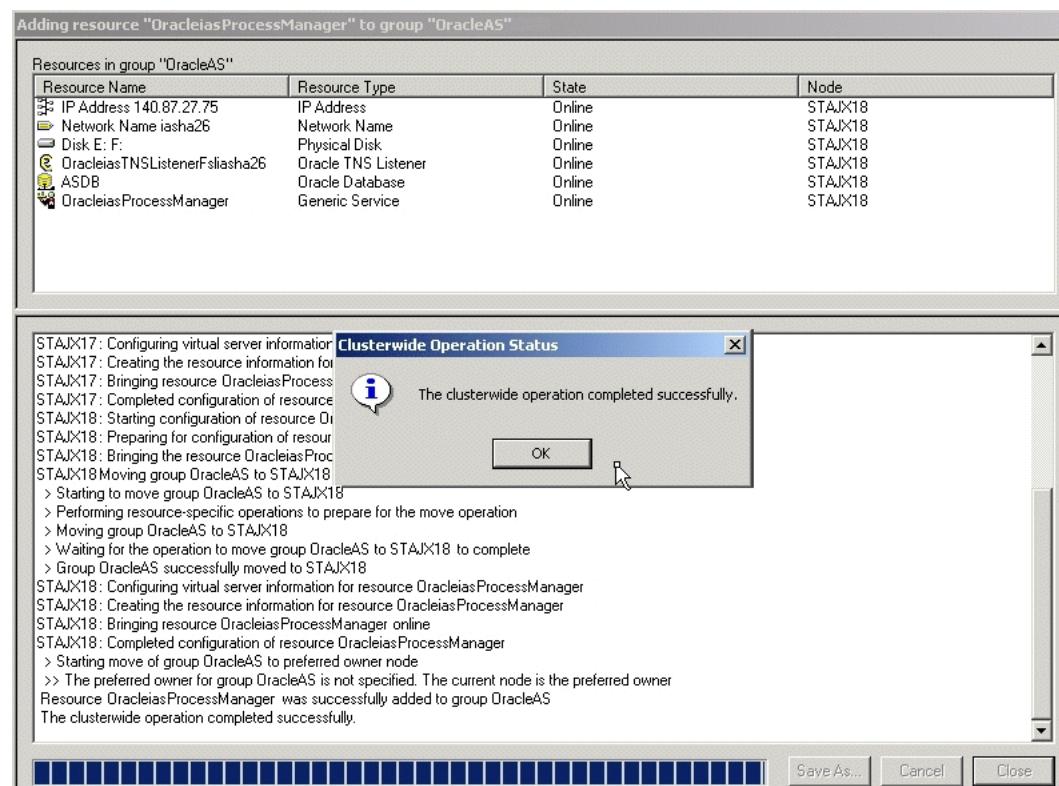
h. 「グループへ汎用サービスの追加の確認」画面：「はい」をクリックします。

図 10-51 「リソースをグループに追加」 ウィザード (OPMN の追加) の「グループへ汎用サービスの追加の確認」画面



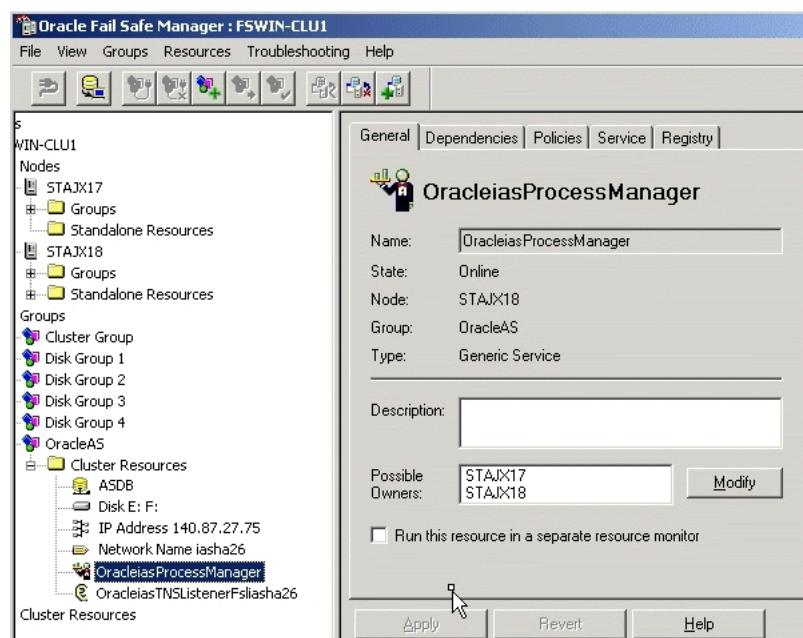
クラスタ内の両方のノードが Process Manager サービスを実行できるように、Oracle Fail Safe Manager によって Process Manager サービスが構成されます。構成が完了すると、図 10-52 に類似した画面が表示されます。成功したことを示すダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。

図 10-52 「リソースをグループに追加」 ウィザード (OPMN の追加) の最後の画面



- i. Oracle Fail Safe Manager で、グループの下に Process Manager サービスが表示されていることを確認します。

図 10-53 Process Manager サービスをグループに追加した後の Oracle Fail Safe Manager の表示



10.12.5 OPMN への共有ディスクの依存関係の追加

この手順は、[第 10.12.3 項「リスナーへの共有ディスクの依存関係の追加」](#) とほぼ同様です。異なる点は、クラスタ・アドミニストレータでリスナーを選択するかわりに、`Oracle<OracleHomeName>ProcessManager` を選択することのみです。

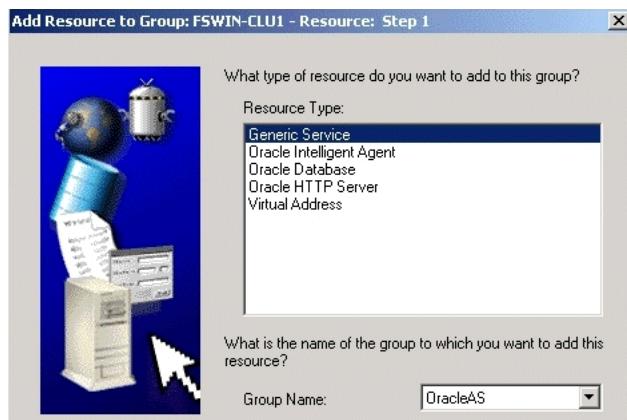
1. 「スタート」メニューからクラスタ・アドミニストレータを起動します。
Windows Server 2003 の場合：「スタート」→「管理ツール」→「クラスタ アドミニストレータ」を選択します。
2. OPMN をオフラインにします。これには、次の手順を実行します。
 - a. 左側で「グループ」を展開します。
 - b. 左側で、以前に作成したグループを選択します。
 - c. 右側で、`Oracle<OracleHomeName>ProcessManager` を右クリックして「オフラインにする」を選択します。
3. 右側で、`Oracle<OracleHomeName>ProcessManager` を右クリックして「プロパティ」を選択します。
4. 「依存関係」タブを選択して、「変更」をクリックします。
5. ディスクを「依存関係」リストに移動して「OK」をクリックします。
6. プロパティ・ダイアログ・ボックスで「適用」をクリックします。
7. OPMN をオンラインにします。これを行うには、右側で
`Oracle<OracleHomeName>ProcessManager` を右クリックして「オフラインにする」を選択します。

10.12.6 Application Server Control の高可用性設定

Application Server Control の高可用性設定を行うには、[第 10.2.7 項「Oracle Fail Safe でのグループの作成」](#) で作成した Oracle Fail Safe グループに Application Server Control を追加します。Application Server Control は、`Oracle<OracleHomeName>ASControl` サービスに対応します。

1. Oracle Fail Safe Manager を起動します。
2. 左側で「グループ」を展開して、[第 10.2.7 項「Oracle Fail Safe でのグループの作成」](#) で作成したグループを右クリックし、「リソースをグループに追加」を選択します。リソースをグループに追加ウィザードが起動されます。
このグループおよびメニュー項目は、データベースをグループに追加したときに選択したグループおよびメニュー項目と同じです（[図 10-31](#) を参照）。
3. リソースをグループに追加ウィザードで、次の手順を実行します。
 - a. 「リソース：ステップ 1」
「汎用サービス」を選択して、グループが正しいことを確認し、「次へ」をクリックします。

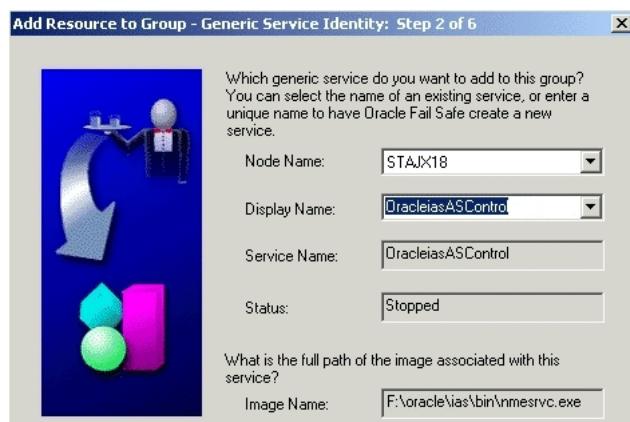
図 10-54 「リソースをグループに追加」 ウィザード (Application Server Control の追加) の「リソース : ステップ 1」画面



b. 「汎用サービスの識別情報 : ステップ 2」

「表示名」で「Oracle<OracleHomeName>ASControl」を選択して、「次へ」をクリックします。

図 10-55 「リソースをグループに追加」 ウィザード (Application Server Control の追加) の「汎用サービスの識別情報 : ステップ 2」画面



c. 「汎用サービスのアカウント : ステップ 3」

Application Server Control の起動パラメータは存在しません。「次へ」をクリックします。

図 10-56 「リソースをグループに追加」 ウィザード (Application Server Control の追加) の「汎用サービスのアカウント : ステップ 3」画面



d. 「汎用サービスのディスク : ステップ 4」

「選択済ディスク」には、何も表示されていない必要があります。「次へ」をクリックします。

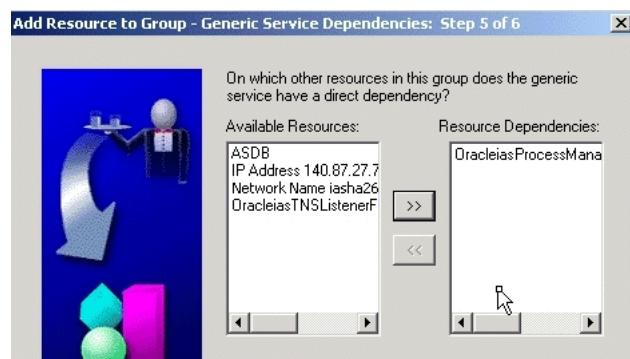
図 10-57 「リソースをグループに追加」 ウィザード (Application Server Control の追加) の「汎用サービスのアカウント : ステップ 4」画面



e. 「汎用サービスの依存性 : ステップ 5」

Process Manager サービスを、「リソースの依存性」列に移動します。「次へ」をクリックします。

図 10-58 「リソースをグループに追加」 ウィザード (Application Server Control の追加) の「汎用サービスの依存性 : ステップ 5」画面



f. 汎用サービスのレジストリ : ステップ 6: 「終了」をクリックします。

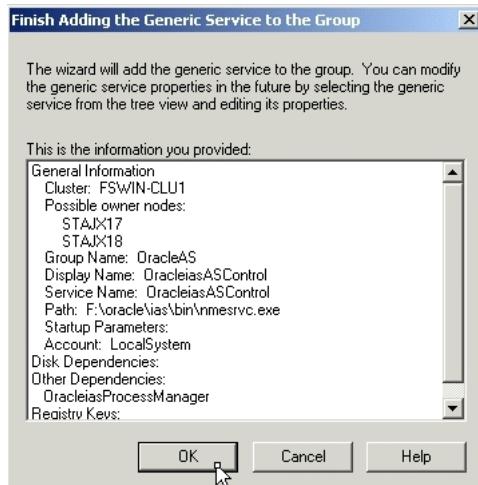
図 10-59 「リソースをグループに追加」 ウィザード (Application Server Control の追加) の「汎用サービスのレジストリ : ステップ 6」画面



g. 「汎用サービスのグループへの追加の完了」

情報を確認して、「OK」をクリックします。特に、クラスタの両方のノードが、「可能所有者ノード」の下に表示されていることを確認します。

図 10-60 「リソースをグループに追加」 ウィザード (Application Server Control の追加) の「汎用サービスのグループへの追加の完了」画面



h. 「グループへ汎用サービスの追加の確認」画面：「はい」をクリックします。

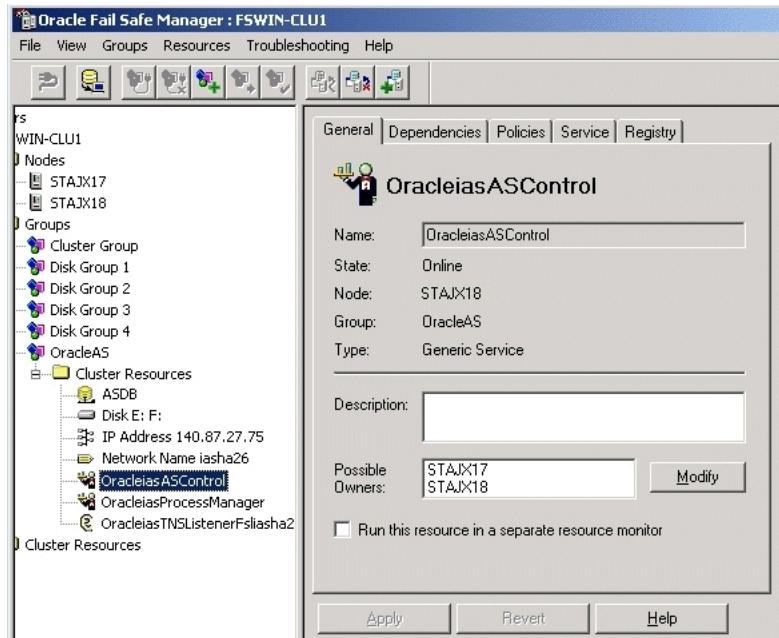
図 10-61 「リソースをグループに追加」 ウィザード (Application Server Control の追加) の「グループへ汎用サービスの追加の確認」画面



クラスタ内の両方のノードが Application Server Control サービスを実行できるように、Oracle Fail Safe Manager によって Application Server Control サービスが構成されます。構成が完了したら、成功したことを示すダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。

i. Oracle Fail Safe Manager で、グループの下に Application Server Control サービスが表示されていることを確認します。

図 10-62 Application Server Control サービスをグループに追加した後の Oracle Fail Safe Manager の表示



10.12.7 正しいリスナーがアクティブであることの確認

データベースをグループに追加すると（[第 10.12.2 項 「OracleAS Metadata Repository の高可用性設定」](#)を参照）、Oracle Fail Safe によって、`Oracle<OracleHomeName>TNSListenerFsl<virtualHostName>` というリスナーが作成されます。このリスナーがアクティブであることおよび実行されていることを確認します。

もう 1 つのリスナー `Oracle<OracleHomeName>TNSListener` は使用されません。このリスナーを停止して（実行されている場合）、スタートアップの種類を手動に設定し、このリスナーが自動的に開始されないようにする必要があります。

10.13 OracleAS Cold Failover Cluster Infrastructure への中間層のインストール

この項では、OracleAS Cold Failover Cluster Infrastructure に Cold Failover Cluster 構成ではない中間層をインストールする方法について説明します。

Cold Failover Cluster 機能を使用できる中間層をインストールする場合は、[第 10.9 項 「OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）のインストール」](#) または [第 10.10 項 「同じノードへの OracleAS Cold Failover Cluster（Infrastructure）および OracleAS Cold Failover Cluster（中間層）のインストール」](#) を参照してください。

OracleAS Cold Failover Cluster で非 Cold Failover Cluster の中間層が OracleAS Infrastructure とともに動作するためには、クラスタ外のコンピュータまたはクラスタ内のノードに中間層をインストールできます。

注意： 非 Cold Failover Cluster の中間層を OracleAS Cold Failover Cluster 外のノードにインストールして実行することをお薦めします。

10.13.1 中間層を OracleAS Cold Failover Cluster のノードにインストールする場合

非 Cold Failover Cluster の中間層を OracleAS Cold Failover Cluster のノード（プライマリまたはセカンダリ）にインストールする場合は、中間層をインストールする前に次のタスクを実行します。

- [第 10.13.1.1 項「中間層用の staticports.ini ファイルの作成」](#)

10.13.1.1 中間層用の staticports.ini ファイルの作成

中間層で使用されるポートが、インフラストラクチャで使用されるポートと同じでないようになります。これは、インフラストラクチャがプライマリ・ノードからセカンダリ・ノード（またはこの逆）にフェイルオーバーすることがあり、いずれのノードでもポートの競合が発生しないようにするためにです。両方のノード上のインフラストラクチャに同じポートを確保する必要があります。

中間層をインストールするノードでインフラストラクチャが実行中の場合は、インストーラはどのポートが使用されているかを検出して、中間層に別のポートを選択します。たとえば、インフラストラクチャがプライマリ・ノードで実行されており、中間層をインストールするためにはインストーラをプライマリ・ノードで実行する場合は、インストーラによって別のポートが中間層に割り当てられます。

ただし、中間層をインストールするのとは異なるノードでインフラストラクチャが実行されている場合は、インストーラはインフラストラクチャがどのポートを使用しているかを検出できません。たとえば、インフラストラクチャがプライマリ・ノード上で実行されていて、中間層をセカンダリ・ノードにインストールする場合は、インストーラはインフラストラクチャがどのポートを使用しているかを検出できません。この場合、中間層用のポート番号を指定するために staticports.ini ファイルを設定する必要があります。詳細は、[第 3.4.4 項「カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）](#) を参照してください。

インフラストラクチャが使用しているポートは、ORACLE_HOME\install\portlist.ini ファイルで確認できます。ここで、ORACLE_HOME は、インフラストラクチャをインストールしたディレクトリです。

10.13.2 OracleAS Cold Failover Cluster のインフラストラクチャへの中間層のインストール手順

OracleAS Cold Failover Cluster 内の OracleAS Infrastructure に中間層をインストールするには、[第 6 章「中間層のインストール」](#) に記載された手順に従います。ただし、次の点を除きます。

- 「Oracle Internet Directory への登録」画面で、「ホスト名」フィールドに仮想ホスト名を入力します。
- OracleAS Cold Failover Cluster のノードに中間層をインストールする場合は、次の追加要件に従う必要があります。
 - [第 10.13.1 項「中間層を OracleAS Cold Failover Cluster のノードにインストールする場合」](#) を参照してください。

10.14 OracleAS Cold Failover Cluster ノードへの標準の中間層のインストール

Cold Failover Cluster 構成にない中間層を OracleAS Cold Failover Cluster インフラストラクチャと同じノードにインストールする場合、中間層に使用するポートは同じクラスタにインストールされている OracleAS Infrastructure に使用されているものとは別にする必要があります。また同じノード上の他の Oracle ホームで使用するポートとも異なっている必要があります。Oracle ホームのコンポーネントに割り当てられたポートを確認するには、Application Server Control コンソールのポート関連のページを参照してください。

中間層をインストールするときには、staticports.ini ファイルを使用する必要があります。詳細は、[第 3.4.4 章「カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）](#) を参照してください。

11

高可用性環境へのインストール： OracleAS Cluster (Identity Management)

この章では、Oracle Application Server を OracleAS Cluster (Identity Management) 構成にインストールする方法について説明します。

- 第 11.1 項 「OracleAS Cluster (Identity Management) : 概要」
- 第 11.2 項 「OracleAS Cluster (Identity Management) のインストール前の手順」
- 第 11.3 項 「Oracle Internet Directory パスワード」
- 第 11.4 項 「Oracle HTTP Server 用の SSL ポートおよび非 SSL ポート構成」
- 第 11.5 項 「OracleAS Cluster (Identity Management) 構成のインストール」
- 第 11.6 項 「分散 OracleAS Cluster (Identity Management) 構成のインストール」
- 第 11.7 項 「インストール後の手順」
- 第 11.8 項 「OracleAS Cluster (Identity Management) 構成への中間層のインストール」

11.1 OracleAS Cluster (Identity Management) : 概要

OracleAS Cluster (Identity Management) 構成では、Oracle Identity Management コンポーネントおよび OracleAS Metadata Repository が別々のノードで実行されます。OracleAS Cluster (Identity Management) 構成のすべてのノードがアクティブです。中間層などのクライアントからのリクエストは、ロード・バランサに送られ、次に、アクティブないずれかのノードに送られます。[図 11-1](#) を参照してください。

これらのノードは、ハードウェア・クラスタに属することができますが、必須ではありません。

これらの構成は、OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services のコンポーネントがクラスタ化されているため、「OracleAS Cluster (Identity Management)」と呼ばれます。つまり、これらのコンポーネントはノード間で同様に構成されています。

データベース (OracleAS Metadata Repository) の要件

OracleAS Cluster (Identity Management) 構成をインストールするには、既存のデータベースが必要です。OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を使用して、このデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールします。OracleAS Metadata Repository Creation Assistant でサポートされているいずれのデータベース構成も使用可能です。サポートされているデータベース構成については、[Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant](#) のユーザーズ・ガイドを参照してください。OracleAS Cluster (Identity Management) 構成には、Real Application Clusters や Cold Failover Cluster などの高可用性データベース構成を使用することをお薦めします。

OracleAS Metadata Repository には、1 つの OracleAS Cluster (Identity Management) のみインストールできます。

注意: OracleAS Cluster (Identity Management) 構成では、インストーラの「**Oracle Identity Management and OracleAS Metadata Repository**」オプションは選択しません。常に、「**Oracle Identity Management**」オプションを選択します。このため、OracleAS Metadata Repository 用に既存のデータベースが必要になります。

常に同じコンポーネントを選択

OracleAS Cluster (Identity Management) 構成内のコンポーネントはインストーラによってクラスタ化されるため、クラスタ内のですべてのノードに対して、「構成オプションの選択」画面で同じコンポーネントを選択する必要があります。

たとえば、ノード 1 へのインストール時に Oracle Internet Directory、OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services を選択した場合は、後続のインストールでも同じコンポーネントを選択する必要があります。

各インストールで異なるコンポーネントを選択すると、クラスタ化に失敗します。

構成

OracleAS Cluster (Identity Management) は、次の構成でインストールできます。

- OracleAS Cluster (Identity Management)。[第 11.5 項](#) を参照してください。
- 分散 OracleAS Cluster (Identity Management)。[第 11.6 項](#) を参照してください。

11.2 OracleAS Cluster (Identity Management) のインストール前の手順

OracleAS Cluster (Identity Management) 構成をインストールする前に、次の項目を設定する必要があります。

- 第 11.2.1 項 「Oracle ホーム・ディレクトリでの同じパスの使用 (推奨)」
- 第 11.2.2 項 「すべてのノードでの時計の同期化」
- 第 11.2.3 項 「ロード・バランサに対する仮想サーバーの名前およびポートの構成」
- 第 11.2.4 項 「LDAP 仮想サーバーの構成」
- 第 11.2.5 項 「ロード・バランサへの Cookie 永続性の設定」

11.2.1 Oracle ホーム・ディレクトリでの同じパスの使用 (推奨)

Oracle Identity Management コンポーネントが実行されるすべてのノードの Oracle ホームで、同じフルパスを使用します。この方法をお薦めしますが、必須ではありません。

11.2.2 すべてのノードでの時計の同期化

すべてのノードの誤差は 250 秒以内となるよう各ノードでシステム時計を同期化します。システム時計を同期化するときは、時計を必ず同じタイム・ゾーンに設定します。

注意 : 時計を同期化しないと、ディレクトリ・エントリの動作属性、およびパスワード状態ボリシーの動作に不整合が生じます。その結果、インスタンスが不要にフェイルオーバーします。

11.2.3 ロード・バランサに対する仮想サーバーの名前およびポートの構成

2 つの仮想サーバー名および関連付けられたポートを指定してロード・バランサを構成します。

- LDAP 接続用に仮想サーバー名を構成します。この仮想サーバーには、SSL 接続用および非 SSL 接続用に 2 つのポートを構成する必要があります。

注意 : LDAP 仮想サーバー用に構成したポートと同じポートが、Oracle Internet Directory をインストールするノードで使用可能であることを確認してください。

インストーラによって、LDAP 仮想サーバーで構成されているポート番号と同じポート番号を使用するように Oracle Internet Directory が構成されます。つまり、すべてのノードおよび LDAP 仮想サーバー上の Oracle Internet Directory で、同じポート番号が使用されます。ポート番号が staticports.ini ファイルに設定されている場合でも、ロード・バランサのインストーラに入力されたポートが優先されます。

- HTTP 接続用に仮想サーバー名を構成します。この仮想サーバーにも、SSL 接続用または非 SSL 接続用のポートを構成する必要があります。HTTPS を使用してクライアントをロード・バランサに接続する場合は、SSL 接続用のポートを構成します。HTTP を使用してクライアントをロード・バランサに接続する場合は、非 SSL 接続用のポートを構成します。

注意 : HTTP 仮想サーバーのポートは、Oracle HTTP Server の Listen ポートと異なる場合があります。

インストーラによって、仮想サーバー名およびポート番号を指定するように要求されます。LDAP 仮想サーバーおよび HTTP 仮想サーバーの構成に使用したものと同じ仮想サーバー名をインストーラに入力します。仮想サーバー名には、完全修飾名を使用する場合と、非完全修飾名を使用する場合とがあります。たとえば、LDAP 仮想サーバーの構成時に完全修飾ホスト名を使用した場合は、同じ完全修飾ホスト名をインストーラに入力します。

注意: ロード・バランサはインストーラによってチェックされません。インストーラを実行する前に、ロード・バランサが正しく構成され、有効になっていることを確認してください。

さらに、次の内容を確認します。

- 仮想サーバー名が IP アドレスに関連付けられていて、DNS の一部になっていることを確認します。Oracle Application Server が実行されるノードは、これらの仮想サーバー名を解決できる必要があります。

11.2.4 LDAP 仮想サーバーの構成

ロード・バランサ上の LDAP 仮想サーバーを構成して、リクエストが最初にノード 1 に送られるようにします。他のノードを追加する手順は、ロード・バランサが LDAP サービスの監視をサポートしているかどうかによって異なります。

これらの手順は、ロード・バランサに構成された LDAP 仮想サーバーに対してのみ適用されます。ロード・バランサに構成された HTTP 仮想サーバーには適用されません。

11.2.4.1 ロード・バランサが LDAP サービスの監視をサポートしている場合

ロード・バランサが LDAP サービスの監視をサポートしている場合は、インストールを開始する前に、すべてのノードを LDAP 仮想サーバーに追加できます。

たとえば、3 つのノードがある場合は、次の手順を実行します。

1. リクエストがノード 1 にのみ送られるように LDAP 仮想サーバーを構成します。
2. ノード 2 を LDAP 仮想サーバーに追加します。
3. ノード 3 を LDAP 仮想サーバーに追加します。
4. ノード 1 に Oracle Identity Management コンポーネントをインストールします。
5. ノード 2 に Oracle Identity Management コンポーネントをインストールします。
6. ノード 3 に Oracle Identity Management コンポーネントをインストールします。

11.2.4.2 ロード・バランサが LDAP サービスの監視をサポートしていない場合

ロード・バランサが LDAP サービスの監視をサポートしていない場合は、インストールを開始する前に、LDAP 仮想サーバーを、ノード 1 にのみリクエストを送るように構成します。ノードへのインストールの完了後、そのノードを仮想サーバーに追加できます。

たとえば、3 つのノードがある場合は、次の手順を実行します。

1. リクエストがノード 1 にのみ送られるように LDAP 仮想サーバーを構成します。
2. ノード 1 に Oracle Identity Management コンポーネントをインストールします。
3. ノード 2 に Oracle Identity Management コンポーネントをインストールします。
4. ノード 2 を LDAP 仮想サーバーに追加します。
5. ノード 3 に Oracle Identity Management コンポーネントをインストールします。
6. ノード 3 を LDAP 仮想サーバーに追加します。

11.2.5 ロード・バランサへの Cookie 永続性の設定

ロード・バランサに、HTTP トライフィックの Cookie 永続性を設定します。具体的には、/oiddas/ で始まる URI に Cookie 永続性を設定します。これは、Oracle Delegated Administration Services の URI です。ロード・バランサに URI レベルで Cookie 永続性を設定できない場合は、すべての HTTP トライフィックの Cookie 永続性を設定します。いずれの場合も、ブラウザ・セッションが終了すると Cookie も終了するように Cookie を設定します。詳細は、ロード・バランサのドキュメントを参照してください。

11.3 Oracle Internet Directory パスワード

OracleAS Cluster (Identity Management) 構成では、複数のノードに Oracle Internet Directory をインストールし、各インストールの「インスタンス名と ias_admin パスワードの指定」画面でインスタンス・パスワードを入力します。

最初のインストールで指定したパスワードは、最初の Oracle Internet Directory のみでなく、クラスタ内のすべての Oracle Internet Directory インストールで cn=orcladmin および orcladmin ユーザーのパスワードとして使用されます。

つまり、いずれのノードの Oracle Internet Directory にアクセスする場合も最初のインストールで入力したパスワードを使用する必要があります。後続のインストールで入力したパスワードは使用できません。

Oracle Internet Directory にアクセスするには、次の操作を実行します。

- Oracle Delegated Administration Services (URL: `http://hostname:port/oiddas`) へのログイン
- OracleAS Single Sign-On (URL: `http://hostname:port/pls/orasso`) へのログイン
- Oracle Directory Manager を使用した Oracle Internet Directory への接続

Application Server Control にログインする場合は、後続のインストールで入力したパスワードも必要です。

11.4 Oracle HTTP Server 用の SSL ポートおよび非 SSL ポート構成

OracleAS Cluster (Identity Management) 構成をインストールする場合は、インストーラに「HTTP ロード・バランサのホストおよびリスニング・ポートの指定」画面が表示されます。

この画面には 2 つのセクションがあります。

- 「ロード・バランサ」セクション: ロード・バランサの HTTP 仮想サーバーの名前およびポート番号を指定します。また、ポートが SSL リクエスト用であるか、非 SSL リクエスト用であるかを指定します。
- 「Oracle HTTP Server」セクション: Oracle HTTP Server の Listen ポートで使用するポート番号を指定します。また、ポートが SSL リクエスト用であるか、非 SSL リクエスト用であるかを指定します。

仮想サーバーおよび Oracle HTTP Server の Listen ポートには、異なるポート番号を使用できます。

この画面を使用して、クライアント、ロード・バランサおよび Oracle HTTP Server 間での通信タイプ (SSL または非 SSL) を設定します。次の 3 つのケースがあります。

- ケース 1: クライアントとロード・バランサ間の通信で HTTP を使用し、ロード・バランサと Oracle HTTP Server 間の通信でも HTTP を使用します。詳細は、[第 11.4.1 項「ケース 1: クライアント ---\[HTTP\]---> ロード・バランサ ---\[HTTP\]---> Oracle HTTP Server」](#) を参照してください。
- ケース 2: クライアントとロード・バランサ間の通信で HTTPS を使用し、ロード・バランサと Oracle HTTP Server 間の通信でも HTTPS を使用します。詳細は、[第 11.4.2 項「ケース 2: クライアント ---\[HTTPS\]---> ロード・バランサ ---\[HTTPS\]---> Oracle HTTP Server」](#) を参照してください。

- ケース 3: クライアントとロード・バランサ間の通信では HTTPS を使用し、ロード・バランサと Oracle HTTP Server 間の通信では HTTP を使用します。詳細は、[第 11.4.3 項「ケース 3: クライアント ---\[HTTPS\]---> ロード・バランサ ---\[HTTP\]---> Oracle HTTP Server」](#) を参照してください。

注意: このダイアログ・ボックスで指定する値は staticports.ini ファイルに指定されている値より優先されるため、staticports.ini ファイルに Oracle HTTP Server の Listen ポートのポート番号は指定しないでください。

11.4.1 ケース 1: クライアント ---[HTTP]---> ロード・バランサ ---[HTTP]---> Oracle HTTP Server

HTTP リスナー: ポート: Oracle HTTP Server の Listen ポートとして使用するポート番号を入力します。これは、httpd.conf ファイルの Listen ディレクティブの値です。

SSL 有効: このオプションは選択しないでください。インストーラによって、SSL ポートのデフォルトのポート番号が使用されます。

HTTP ロード・バランサ: ホスト名: HTTP リクエストを処理するように構成されたロード・バランサ上の仮想サーバーの名前を入力します。

HTTP ロード・バランサ: ポート: HTTP 仮想サーバーでリスニングを行うポート番号を入力します。これは、httpd.conf ファイルの Port ディレクティブの値です。

SSL 有効: このオプションは選択しないでください。

表 11-1 ケース 1 の例

画面の値	構成ファイルに反映される値
HTTP リスナー: ポート : 8000	httpd.conf では次のようにになります。
SSL 有効: 選択しない	Port 80
HTTP ロード・バランサ: ポート : 80	Listen 8000
SSL 有効: 選択しない	ssl.conf では次のようにになります。
	Port <default port number assigned by installer> Listen <default port number assigned by installer>

11.4.2 ケース 2: クライアント ---[HTTPS]---> ロード・バランサ ---[HTTPS]---> Oracle HTTP Server

HTTP リスナー: ポート: Oracle HTTP Server でリスニングを行うポート番号を入力します。これは、ssl.conf ファイルの Listen ディレクティブの値です。

SSL 有効: 選択します。

HTTP ロード・バランサ: ホスト名: HTTPS リクエストを処理するように構成されたロード・バランサ上の仮想サーバーの名前を入力します。

HTTP ロード・バランサ: ポート: HTTP 仮想サーバーでリスニングを行うポート番号を入力します。これは、ssl.conf ファイルの Port ディレクティブの値です。

SSL 有効: このオプションは自動的に選択されており、選択解除できません。これは、HTTP リスナー用に「SSL 有効」を選択したためです。

opmn.xml では、インストーラによって、Oracle HTTP Server セクションの ssl-enabled 行が true に設定されます。

表 11-2 ケース 2 の例

画面の値	構成ファイルに反映される値
HTTP リスナー : ポート : 90	httpd.conf では次のようにになります。
SSL 有効 : 選択する	Port <default port number assigned by installer> Listen <default port number assigned by installer>
HTTP ロード・バランサ : ポート : 443	
SSL 有効 : 選択する	ssl.conf では次のようにになります。 Port 443 Listen 90

この場合は、追加の構成後の手順を実行する必要があることに注意してください。詳細は、[第 11.7.1 項「targets.xml の更新（ケース 2 のみ）」](#) を参照してください。

11.4.3 ケース 3: クライアント ---[HTTPS]---> ロード・バランサ ---[HTTP]---> Oracle HTTP Server

HTTP リスナー : ポート : Oracle HTTP Server でリスニングを行うポート番号を入力します。これは、**httpd.conf** ファイルの Listen ディレクティブの値です。

SSL 有効 : このオプションは選択しないでください。

HTTP ロード・バランサ : ホスト名 : HTTPS リクエストを処理するように構成されたロード・バランサ上の仮想サーバーの名前を入力します。

HTTP ロード・バランサ : ポート : HTTP 仮想サーバーでリスニングを行うポート番号を入力します。これは、**httpd.conf** ファイルの Port ディレクティブの値です。

SSL 有効 : 選択します。

この構成では、ロード・バランサに SSL アクセラレーション機能が必要です。この機能がない場合は、個別の SSL アクセラレータを追加する必要があります。HTTPS から HTTP への変換は、Oracle HTTP Server がリクエストを受信する前に実行されます。SSL アクセラレータは、インストール前に正しく構成しておく必要があります。これはインストーラによってチェックされません。

インストーラによって、次の行が変更されます。

- **opmn.xml** では、インストーラによって、Oracle HTTP Server セクションの **ssl-enabled** 行が **true** に設定されます。
- **httpd.conf** では、インストーラによって次の行が追加されます。

```
LoadModule certheaders_module libexec/mod_certheaders.so
SimulateHttps on
```

表 11-3 ケース 3 の例

画面の値	構成ファイルに反映される値
HTTP リスナー : ポート : 9000	httpd.conf では次のようにになります。
SSL 有効 : 選択しない	Port 443
HTTP ロード・バランサ : ポート : 443	Listen 9000
SSL 有効 : 選択する	ssl.conf では次のようにになります。 Port <default port number assigned by installer> Listen <default port number assigned by installer>

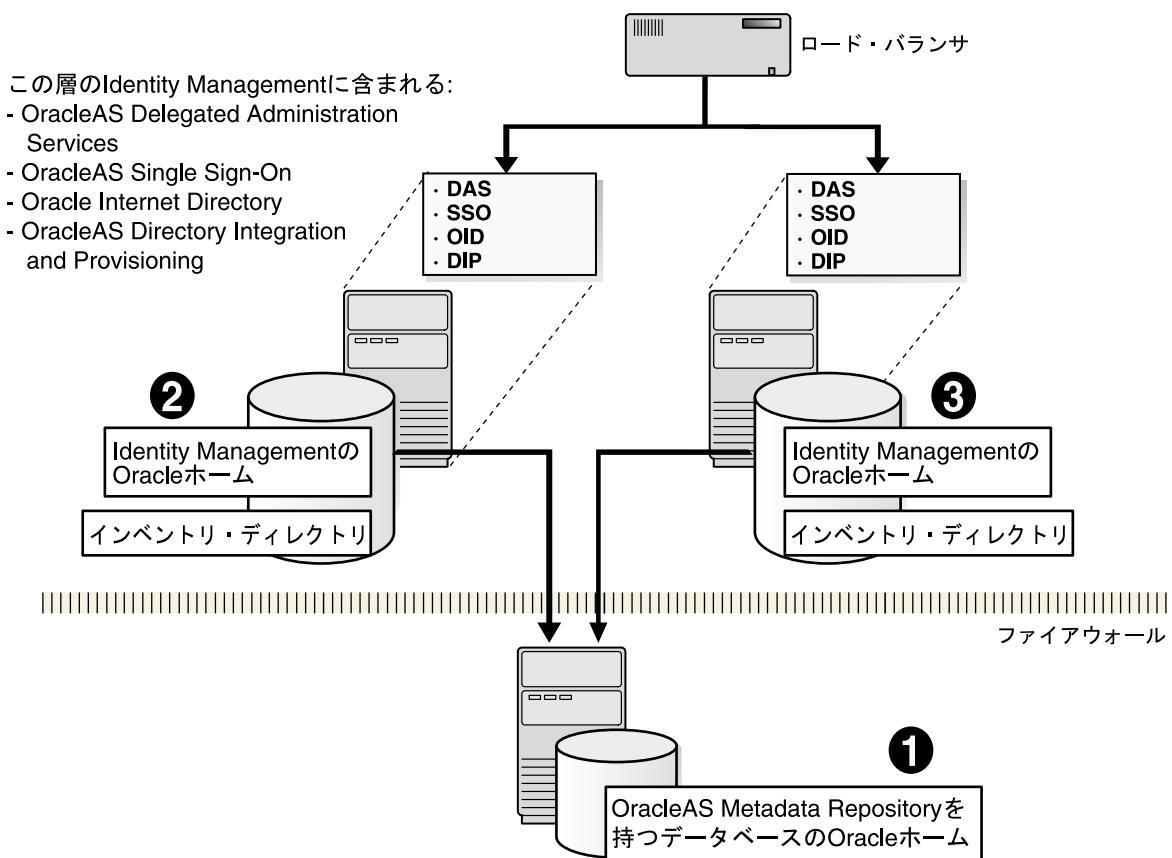
11.5 OracleAS Cluster (Identity Management) 構成のインストール

この構成には、既存のデータベースが必要で、それは OracleAS Metadata Repository Creation Assistant がサポートする構成内すでに実行されている必要があります。データベースは、Real Application Clusters など高可用性環境で実行することをお薦めします。また、Oracle Identity Management コンポーネントを実行する追加のノード（2つ以上）も必要です。この構成では、各ノードで Oracle Internet Directory、OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services が実行されます。これらのコンポーネントを分散する場合は、[第 11.6 項「分散 OracleAS Cluster \(Identity Management\) 構成のインストール」](#)を参照してください。

これらのノードには、ロード・バランサを介してアクセスします。詳細は、[図 11-1](#) を参照してください。

既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールした後、このデータベースに Oracle Identity Management コンポーネントをインストールします。

図 11-1 OracleAS Cluster (Identity Management) 構成



この項の内容は次のとおりです。

- [第 11.5.1 項「インストールの順序」](#)
- [第 11.5.2 項「OracleAS Metadata Repository のインストール」](#)
- [第 11.5.3 項「最初のノードへの OracleAS Cluster \(Identity Management\) のインストール」](#)
- [第 11.5.4 項「後続のノードへの OracleAS Cluster \(Identity Management\) のインストール」](#)
- [第 11.5.5 項「Cluster Configuration Assistant が失敗した場合」](#)

11.5.1 インストールの順序

OracleAS Cluster (Identity Management) 構成を作成するには、次の手順を実行します。

1. OracleAS Metadata Repository を既存のデータベースにインストールします。
2. 各ノードに Oracle Identity Management をインストールします。各ノードでインストーラを別々に実行します。
3. 中間層をインストールします。

11.5.2 OracleAS Metadata Repository のインストール

既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールするには、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を使用します。詳細は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のユーザーズ・ガイドを参照してください。

11.5.3 最初のノードへの OracleAS Cluster (Identity Management) のインストール

Oracle Identity Management コンポーネントをインストールする各ノードでインストーラを実行します。

Oracle Identity Management コンポーネントを最初のノードにインストールする手順は、後続のノードにコンポーネントをインストールする手順とは異なります。後続のノードにコンポーネントをインストールする方法については、[第 11.5.4 項「後続のノードへの OracleAS Cluster \(Identity Management\) のインストール」](#)を参照してください。

この項の内容は次のとおりです。

- [第 11.5.3.1 項「staticports.ini ファイルの作成」](#)
- [第 11.5.3.2 項「最初のノードのロード・バランサで TCP の監視を無効にする」](#)
- [第 11.5.3.3 項「OracleAS Metadata Repository がいずれの Oracle Internet Directory にも登録されていないことの確認」](#)
- [第 11.5.3.4 項「各ノードに対する同じコンポーネントの選択」](#)
- [第 11.5.3.5 項「インストーラの実行」](#)

11.5.3.1 staticports.ini ファイルの作成

Oracle HTTP Server または Oracle Internet Directory 以外のコンポーネントのカスタム・ポートを使用する場合は、このインストール用の staticports.ini ファイルを作成する必要があります。

Oracle HTTP Server または Oracle Internet Directory のカスタム・ポートが必要な場合は、「HTTP ロード・バランサのホストおよびリスニング・ポートの指定」および「LDAP 仮想ホストおよびポートの指定」画面でそれらを指定します。

staticports.ini ファイルにも Oracle HTTP Server および Oracle Internet Directory のカスタム・ポートを指定し、前述の画面でもポートを指定すると、画面で指定したポートが優先されます。

staticports.ini ファイルに Oracle HTTP Server および Oracle Internet Directory のポートが指定されないようにするには、staticports.ini ファイルに次の行が含まれないようにする必要があります。

```
Oracle HTTP Server port = port_num
Oracle HTTP Server Listen port = port_num
Oracle HTTP Server SSL port = port_num
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = port_num
Oracle Internet Directory port = port_num
Oracle Internet Directory (SSL) port = port_num
```

また、staticports.ini ファイルがある場合は、後続のノードへのインストールにも同じファイルを使用する必要があります。

11.5.3.2 最初のノードのロード・バランサで TCP の監視を無効にする

最初のノードにインストールする前に、そのノードの仮想 IP に対して、TCP の監視が無効になっていることを確認する必要があります。

11.5.3.3 OracleAS Metadata Repository がいずれの Oracle Internet Directory にも登録されていないことの確認

最初のノードへのインストールを実行する場合は、いずれの Oracle Internet Directory にも登録されていない OracleAS Metadata Repository を指定する必要があります。これはインストーラによって確認されます。OracleAS Metadata Repository が Oracle Internet Directory にすでに登録されていることがインストーラで確認されると、後続のノードへのインストールが行われており、最初のノードへのインストール時に作成されたクラスタに追加しようとしていると判断されます。既存のクラスタ名および Oracle Internet Directory の接続情報の入力を要求されます。

11.5.3.4 各ノードに対する同じコンポーネントの選択

各ノードへのインストール時に、「構成オプションの選択」画面で同じコンポーネントを選択する必要があります。たとえば、最初のノードで Oracle Internet Directory、OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services を選択した場合は、後続のノードでも同じコンポーネントを選択する必要があります。

11.5.3.5 インストーラの実行

表 11-4 の手順に従います。

最初のノードにインストールする場合の注意

- 「構成オプションの選択」画面で、コンポーネントの選択に加えて、「高可用性およびレプリケーション」を選択します。
- 「高可用性またはレプリケーション・オプションの選択」画面で、「OracleAS クラスタ (ID 管理)」を選択します。

表 11-4 最初のノードへの OracleAS Cluster (Identity Management) のインストール手順

画面	操作
1. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第 5.25 項「インストールの一部：インストールの最初のいくつかの画面」を参照してください。</p> <p>注意：</p> <p>「インストール・タイプの選択」画面で、「Oracle Identity Management」を選択します。</p>
2. 構成オプションの選択	<p>「Oracle Internet Directory」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server Single Sign-On」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server Delegated Administration Service」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server Directory Integration and Provisioning」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server Certificate Authority (OCA)」は選択しないでください。</p> <p>「高可用性およびレプリケーション」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. ポート構成オプションの指定	<p>「手動」を選択し、表示されたフィールドに staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。OracleAS Cluster (Identity Management) 構成には、staticports.ini ファイルを使用する必要があります。詳細は、第 11.5.3.1 項「staticports.ini ファイルの作成」を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 11-4 最初のノードへの OracleAS Cluster (Identity Management) のインストール手順 (続き)

画面	操作
4. リポジトリの指定	<p>最初のノードにインストールする場合、Oracle Internet Directory に登録されていない OracleAS Metadata Repository を指定する必要があります。後続のノードにインストールする場合、OracleAS Metadata Repository は最初のノード上の Oracle Internet Directory に登録されます。</p> <p>ユーザー名 : OracleAS Metadata Repository データベースにログインするために使用するユーザー名を入力します。ユーザーは、DBA 権限を持っている必要があります。</p> <p>パスワード : ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>ホスト名とポート : Real Application Clusters データベースが実行されているすべてのノードの名前およびポート番号を入力します。次の書式を使用します。</p> <p>host1.domain.com:port1, host2.domain.com:port2, ...</p> <p>サービス名 : データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。</p> <p>例: orcl.mydomain.com</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. 高可用性またはレプリケーション・オプションの選択	「OracleAS クラスタ (ID 管理)」を選択し、「次へ」をクリックします。
6. 新規 OracleAS クラスタ名の指定	<p>新規 OracleAS Cluster (Identity Management) の名前を入力します。クラスタ名では、大文字と小文字が区別されます。後続のノードのインストール時に使用できるよう、クラスタ名を書き留めておくことをお薦めします。</p> <p>例: cluster1</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. Internet Directory のネームスペースの指定	<p>推奨されるネームスペースを選択するか、またはデフォルトの Oracle Identity Management レルムの場所のカスタム・ネームスペースを入力します。</p> <p>「推奨ネームスペース」に表示された値が配置要件を満たしていることを確認します。要件を満たさない場合は、「カスタム・ネームスペース」に必要な値を入力します。詳細は、第 5.15 項 「Internet Directory のネームスペースの指定」画面での入力 を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 11-4 最初のノードへの OracleAS Cluster (Identity Management) のインストール手順 (続き)

画面	操作
8. LDAP 仮想ホストおよびポートの指定	<p>この画面で入力する値は、シナリオによって異なります。次の2つのシナリオが考えられます。</p> <p>シナリオ1: Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On から Oracle Internet Directory への LDAP トラフィックを処理するようにロード・バランサの仮想サーバーを構成済。</p> <p>シナリオ2: ロード・バランサなし。</p> <p>ホスト名: シナリオ1では、このフィールドに仮想サーバーの名前を入力します。ロード・バランサに構成されたものと同じ仮想サーバー名を入力します。シナリオ2では、Oracle Internet Directory が実行されているコンピュータの名前を入力します。</p> <p>ポート値に関する注意 (詳細は、第11.2.3項「ロード・バランサに対する仮想サーバーの名前およびポートの構成」を参照):</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ この画面で指定したポート番号は、staticports.ini ファイルに指定されている Oracle Internet Directory ポート番号より優先されます。 ■ 後続のノードの Oracle Internet Directory およびロード・バランサで同じポート番号が使用されます。 <p>SSLポート: シナリオ1では、SSL LDAP 接続を処理するように仮想サーバーに構成されたポートを入力します。シナリオ2では、Oracle Internet Directory で SSL 接続に使用するポートを入力します。SSL LDAP 接続の標準ポート番号は636ですが、任意のポートを使用できます。</p> <p>非SSLポート: シナリオ1では、非SSL LDAP 接続を処理するように仮想サーバーに構成されたポートを入力します。シナリオ2では、Oracle Internet Directory で非SSL接続に使用するポートを入力します。非SSL LDAP 接続の標準ポート番号は389ですが、任意のポートを使用できます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
9. HTTP ロード・バランサのホストおよびポートの指定	<p>詳細は、第11.4項「Oracle HTTP Server 用の SSL ポートおよび非 SSL ポート構成」 を参照してください。</p> <p>HTTP リスナー: ポート: Oracle HTTP Server でリスニングを行うポート番号を入力します。SSL有効: このオプションは、このポートで SSL に対応する Oracle HTTP Server を構成する場合に選択します。</p> <p>HTTP ロード・バランサ: ホスト名: ロード・バランサに構成された HTTP 仮想サーバーの名前を入力します。ロード・バランサに構成されたものと同じ仮想サーバー名を入力します。</p> <p>HTTP ロード・バランサ: ポート: HTTP 仮想サーバーのポートを入力します。SSL有効: このオプションは、このポートが SSL 通信のみに対応する場合に選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
10. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	<p>インスタンス名: このインフラストラクチャ・インスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_（アンダースコア）文字を使用できます。1つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第4.7項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。</p> <p>例: id_mgmt</p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」: ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、第4.8項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。</p> <p>例: welcome99</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
11. --	<p>インストールを終了します。詳細は、第5.26項「インストールの一部: インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。</p>

11.5.4 後続のノードへの OracleAS Cluster (Identity Management) のインストール

Oracle Identity Management コンポーネントをインストールする各ノードでインストーラを実行します。この手順は、最初のノード以外のノードに Oracle Identity Management をインストールする場合に実行します。最初のノードについては、[第 11.5.3 項「最初のノードへの OracleAS Cluster \(Identity Management\) のインストール」](#) を参照してください。

後続のノードにインストールする場合の注意

- 最初のノードへのインストール時に使用したものと同じ staticports.ini ファイルを使用して、すべてのノード上の同じコンポーネントで同じポート番号が使用されるようにします。
- 「HTTP ロード・バランサのホストおよびポートの指定」画面で、ロード・バランサの HTTP 仮想サーバー名および関連付けられたポートを入力します。この画面では、Oracle HTTP Server のポート番号も入力します。

表 11-5 の手順に従います。

表 11-5 後続のノードへの OracleAS Cluster (Identity Management) のインストール手順

画面	操作
1. --	インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、 第 5.25 項「インストールの一部：インストールの最初のいくつかの画面」 を参照してください。 注意： 「インストール・タイプの選択」画面で、「 Oracle Identity Management 」を選択します。
2. 構成オプションの選択	「 Oracle Internet Directory 」を選択します。 「 Oracle Application Server Single Sign-On 」を選択します。 「 Oracle Application Server Delegated Administration Service 」を選択します。 「 Oracle Application Server Directory Integration and Provisioning 」を選択します。 「 Oracle Application Server Certificate Authority (OCA) 」は選択しないでください。 「高可用性およびレプリケーション」を選択します。 「次へ」をクリックします。
3. ポート構成オプションの指定	「 手動 」を選択し、表示されたフィールドに staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。OracleAS Cluster (Identity Management) 構成には、staticports.ini ファイルを使用する必要があります。詳細は、 第 11.5.3.1 項「staticports.ini ファイルの作成」 を参照してください。 「次へ」をクリックします。
4. リポジトリの指定	最初のノードの Oracle Internet Directory に登録した OracleAS Metadata Repository を指定します。 ユーザー名 : OracleAS Metadata Repository データベースにログインするために使用するユーザー名を入力します。ユーザーは、DBA 権限を持っている必要があります。 パスワード : ユーザーのパスワードを入力します。 ホスト名とポート : Real Application Clusters データベースが実行されているすべてのノードの名前およびポート番号を入力します。次の書式を使用します。 host1.domain.com:port1, host2.domain.com:port2, ... サービス名 : データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。 例 : orcl.mydomain.com 「次へ」をクリックします。

表 11-5 後続のノードへの OracleAS Cluster (Identity Management) のインストール手順 (続き)

画面	操作
5. 警告	<p>この警告によって、インスタンスが OracleAS Cluster (Identity Management) の一部としてインストールされていること、およびクラスタ内のノードの時計を同期する必要があることが警告されます。詳細は、第 11.2.2 項「すべてのノードでの時計の同期化」 を参照してください。「OK」をクリックします。</p>
6. 既存の OracleAS クラスタ名の指定	<p>現行のインスタンスを追加する既存の OracleAS Cluster (Identity Management) を指定します。このクラスタは、同様のインストールを前回行った際に作成されたものです。クラスタ名では、大文字と小文字が区別されます。</p> <p>例: cluster1</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. ODS パスワードの指定	<p>OracleAS Metadata Repository 内の ODS スキーマのパスワードを入力します。ODS スキーマは、Oracle Internet Directory で使用される主要スキーマです。</p> <p>デフォルトでは、ODS パスワードは ias_admin パスワード（「インスタンス名と ias_admin パスワードの指定」画面で入力したパスワード）と同じです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
8. LDAP 仮想ホストおよびポートの指定	<p>この画面に入力する値は、最初のノードにインストールしたときに入力した値と同じです。インストーラはこれらの値を使用して、最初のノードの Oracle Internet Directory に接続します。</p> <p>ホスト名: ロード・バランサの LDAP 仮想サーバー名を入力します。ロード・バランサに構成されたものと同じ仮想サーバー名を入力します。</p> <p>SSL ポート: LDAP SSL 接続を処理するために、ロード・バランサに構成されたポートを入力します。</p> <p>非 SSL ポート: LDAP 非 SSL 接続を処理するために、ロード・バランサに構成されたポートを入力します。ロード・バランサが SSL のみのモードで実行されている場合、このフィールドは画面に表示されません。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
9. 警告	<p>この警告は、リクエストを既存の OracleAS Cluster (Identity Management) ノードに送信するように LDAP 仮想サーバーを設定し、インストール後にこのノードをその LDAP 仮想サーバーに追加する必要があることを示します。詳細は、第 11.2.4 項「LDAP 仮想サーバーの構成」 を参照してください。「OK」をクリックします。</p>
10. Oracle Internet Directory へのログインの指定	<p>ユーザー名: Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名を入力します。Oracle Internet Directory スーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインする必要があります。</p> <p>パスワード: ユーザー名のパスワードを入力します。</p> <p>レルム: ユーザー名の妥当性を検証するレルムを入力します。このフィールドは、Oracle Internet Directory に複数のレルムがある場合にのみ表示されます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
11. HTTP ロード・バランサの ホストおよびポートの指定	<p>詳細は、第 11.4 項「Oracle HTTP Server 用の SSL ポートおよび非 SSL ポート構成」 を参照してください。</p> <p>この画面に入力する値は、最初のノードにインストールしたときに入力した値と同じです。</p> <p>HTTP リスナー: ポート: Oracle HTTP Server でリスニングを行うポート番号を入力します。SSL 有効: このオプションは、このポートで SSL に対応する Oracle HTTP Server を構成する場合に選択します。</p> <p>HTTP ロード・バランサ: ホスト名: ロード・バランサに構成された HTTP 仮想サーバーの名前を入力します。ロード・バランサに構成されたものと同じ仮想サーバー名を入力します。</p> <p>HTTP ロード・バランサ: ポート: HTTP 仮想サーバーのポートを入力します。SSL 有効: このオプションは、このポートが SSL 通信のみに対応する場合に選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 11-5 後続のノードへの OracleAS Cluster (Identity Management) のインストール手順 (続き)

画面	操作
12. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	<p>インスタンス名 : このインフラストラクチャ・インスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および _ (アンダースコア) 文字を使用できます。1つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第 4.7 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。</p> <p>例: id_mgmt</p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」: ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、第 4.8 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。</p> <p>例: welcome99</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
13. --	インストールを終了します。詳細は、 第 5.26 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。

11.5.5 Cluster Configuration Assistant が失敗した場合

Cluster Configuration Assistant が失敗した場合でも、インストール後にインスタンスをクラスタ化できます。この場合、インスタンスをクラスタ化するには、Application Server Control ではなく、dcmctl joincluster コマンドを使用する必要があります。Application Server Control では使用できないコンポーネントが含まれているインスタンスはクラスタ化できないため、Application Server Control は使用できません。この場合は、OC4J ホーム・インスタンスが使用不可です。

11.6 分散 OracleAS Cluster (Identity Management) 構成のインストール

この構成には、既存のデータベースが必要で、それは OracleAS Metadata Repository Creation Assistant でサポートされている構成内ですでに実行されている必要があります。データベースは、Real Application Clusters など高可用性環境で実行することをお薦めします。このデータベースに、OracleAS Metadata Repository を格納します。

OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services のコンポーネントを実行するためのノードも 2 つ必要です。また、Oracle Internet Directory を実行するにはさらに 2 つのノードが必要です。これらのノードには、ロード・バランサを介してアクセスします。詳細は、[図 11-2](#) を参照してください。

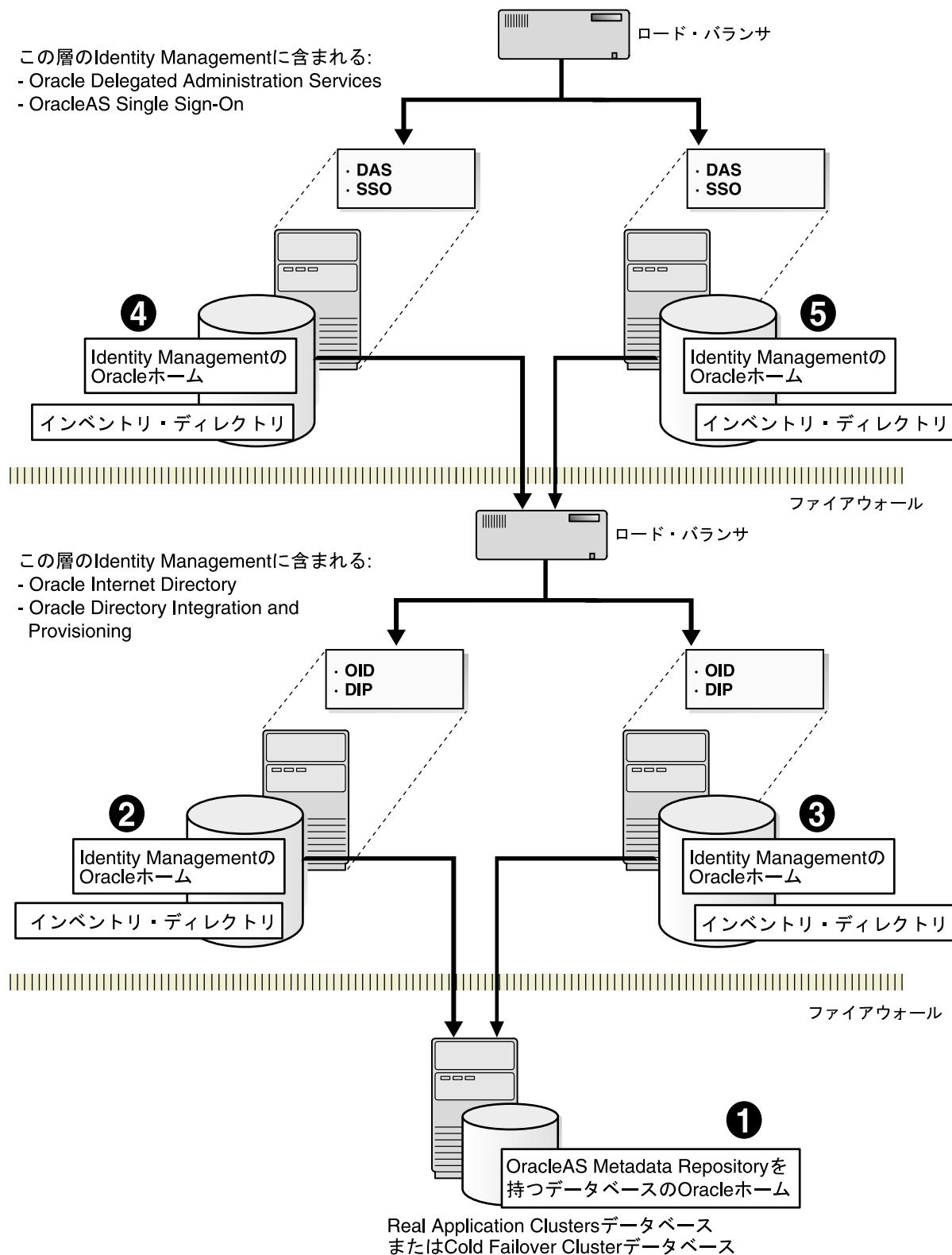
Oracle Directory Integration and Provisioning は最初のノードでのみ起動

インストーラでは、Oracle Directory Integration and Provisioning は、後続のノードで選択した場合でも、最初のノードでのみ起動されます。後続のノードでは、Oracle Directory Integration and Provisioning は構成されますが、起動されません。

Oracle Internet Directory によって SSL ポートのみリスニングする場合

Oracle Internet Directory によって SSL ポートでのみリスニングする場合は、OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services をインストールした後にこの構成を実行します。OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services のインストール時には、Oracle Internet Directory によって SSL および非 SSL の両方のポートでリスニングしている必要があります。

図 11-2 分散 OracleAS Cluster (Identity Management) 構成



この項の内容は次のとおりです。

- 第 11.6.1 項 「インストールの順序」
- 第 11.6.2 項 「OracleAS Metadata Repository のインストール」
- 第 11.6.3 項 「最初のノードへの Oracle Internet Directory のインストール」
- 第 11.6.4 項 「後続のノードへの Oracle Internet Directory のインストール」
- 第 11.6.5 項 「各ノードへの OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services のインストール」

11.6.1 インストールの順序

分散 OracleAS Cluster (Identity Management) 構成を作成するには、次の手順を実行します。

1. OracleAS Metadata Repository を既存のデータベースにインストールします。
2. 各ノードに Oracle Internet Directory をインストールします。各ノードでインストーラを別々に実行します。

注意： SSL ポートでのみリスニングするように Oracle Internet Directory を構成する場合は、OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services をインストールした後にこの構成を実行します。 OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services のインストール時には、Oracle Internet Directory が SSL および非 SSL の両方のポートでリスニングしている必要があります。

3. 各ノードに OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services をインストールします。各ノードでインストーラを別々に実行します。
4. 中間層をインストールします。

11.6.2 OracleAS Metadata Repository のインストール

既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールするには、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を使用します。詳細は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のユーザーズ・ガイドを参照してください。

11.6.3 最初のノードへの Oracle Internet Directory のインストール

各ノードで別々にインストーラを実行して、Oracle Identity Management コンポーネントをインストールします。

11.6.3.1 staticports.ini ファイルの設定

最初のノードに Oracle Internet Directory をインストールする場合、ロード・バランサは必要ありません。ロード・バランサは、後で設定および構成できます。ただし、Oracle Internet Directory で使用されるポート番号とロード・バランサで使用されるポート番号を同じにする必要があります。

この場合、staticports.ini ファイルを作成して Oracle Internet Directory で使用するポート番号を指定します。ロード・バランサで、LDAP 通信用のポート番号と同じポート番号が使用されるようになります。staticports.ini ファイルには、次の行を含める必要があります。

```
Oracle Internet Directory port = port_num
Oracle Internet Directory (SSL) port = port_num
```

11.6.3.2 各インストールでの同じコンポーネントの選択

2番目のノードを最初のノードのフェイルオーバーとして設定する場合は、インストールごとに「構成オプションの選択」画面で同じコンポーネントを選択する必要があります。たとえば、最初のノードで Oracle Internet Directory および Oracle Directory Integration and Provisioning を選択した場合は、後続のノードへのインストール時にもそれらを選択する必要があります。

11.6.3.3 インストーラの起動

最初のノードに Oracle Internet Directory をインストールするには、表 11-6 の次の手順に従います。

後続のノードに Oracle Internet Directory をインストールする方法については、第 11.6.4 項「後続のノードへの Oracle Internet Directory のインストール」を参照してください。

すべてのノードに対して「構成オプションの選択」画面で同じコンポーネントを選択する必要があります。たとえば、最初のノードで Oracle Internet Directory および Oracle Directory Integration and Provisioning の両方を選択した場合は、この層の後続のノードへのインストール時にもそれらを選択する必要があります。

表 11-6 最初のノードでの分散 OracleAS Cluster (Identity Management) への Oracle Internet Directory のインストール手順

画面	操作
1. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第 5.25 項「インストールの一部：インストールの最初のいくつかの画面」を参照してください。</p> <p>注意：</p> <p>「インストール・タイプの選択」画面で、「Oracle Identity Management」を選択します。</p>
2. 構成オプションの選択	<p>「Oracle Internet Directory」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server Single Sign-On」は選択しないでください。</p> <p>「Oracle Application Server Delegated Administration Service」は選択しないでください。</p> <p>このコンポーネントが必要な場合は、「Oracle Application Server Directory Integration and Provisioning」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server Certificate Authority (OCA)」は選択しないでください。</p> <p>「高可用性およびレプリケーション」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. ポート構成オプションの指定	<p>「手動」を選択し、表示されたフィールドに staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。OracleAS Cluster (Identity Management) 構成には、staticports.ini ファイルを使用する必要があります。詳細は、第 11.6.3.1 項「staticports.ini ファイルの設定」を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 11-6 最初のノードでの分散 OracleAS Cluster (Identity Management) への Oracle Internet Directory のインストール手順（続き）

画面	操作
4. リポジトリの指定	<p>最初のノードにインストールする場合、Oracle Internet Directory に登録されていない OracleAS Metadata Repository を指定する必要があります。後続のノードにインストールする場合、OracleAS Metadata Repository は最初のノード上の Oracle Internet Directory に登録されます。</p> <p>ユーザー名 : OracleAS Metadata Repository データベースにログインするために使用するユーザー名を入力します。ユーザーは、DBA 権限を持っている必要があります。</p> <p>パスワード : ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>ホスト名とポート : データベースが稼働しているコンピュータの名前を入力し、そのコンピュータによってリスニングが行われているポートのポート番号を入力します。書式には、<i>host:port</i> を使用します。</p> <p>サービス名 : データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。</p> <p>例: <code>orcl.mydomain.com</code></p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. 高可用性またはレプリケーション・オプションの選択	「OracleAS クラスタ (ID 管理)」を選択し、「次へ」をクリックします。
6. Internet Directory のネームスペースの指定	<p>推奨されるネームスペースを選択するか、またはデフォルトの Oracle Identity Management ルームの場所のカスタム・ネームスペースを入力します。</p> <p>「推奨ネームスペース」に表示された値が配置要件を満たしていることを確認します。要件を満たさない場合は、「カスタム・ネームスペース」に必要な値を入力します。詳細は、第 5.15 項 「Internet Directory のネームスペースの指定」画面での入力 を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	<p>インスタンス名 : このインフラストラクチャ・インスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_（アンダースコア）文字を使用できます。1つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第 4.7 項 「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。</p> <p>例: <code>oid_das</code></p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」: ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、第 4.8 項 「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。</p> <p>例: <code>welcome99</code></p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
8. --	インストールを終了します。詳細は、 第 5.26 項 「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。

11.6.4 後続のノードへの Oracle Internet Directory のインストール

この項の手順を実行する前に、[第 11.6.3 項「最初のノードへの Oracle Internet Directory のインストール」](#) の説明に従って、最初のノードに Oracle Internet Directory をインストールしておく必要があります。

11.6.4.1 staticports.ini ファイルは不要

このインストールでは、インストーラによって、最初のノードの Oracle Internet Directory と同じポートを使用するように Oracle Internet Directory が構成されるため、staticports.ini ファイルは必要ありません。

最初のノードの Oracle Internet Directory が起動され、実行されている必要があります。

11.6.4.2 各インストールでの同じコンポーネントの選択

2 番目のノードを最初のノードのフェイルオーバーとして設定する場合は、インストールごとに「構成オプションの選択」画面で同じコンポーネントを選択する必要があります。たとえば、最初のノードで OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services を選択した場合は、後続のノードへのインストール時にもそれらを選択する必要があります。

11.6.4.3 「Oracle Internet Directory への登録」画面の SSL に関するチェック・ボックスは選択しない

「Oracle Internet Directory への登録」画面の「**Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用**」チェック・ボックスは選択しないでください。

11.6.4.4 インストーラの起動

後続のノードに Oracle Internet Directory をインストールするには、次の手順を実行します。

表 11-7 後続のノードの分散 Oracle Internet Directory への OracleAS Cluster (Identity Management) のインストール手順

画面	操作
1. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第 5.25 項「インストールの一部：インストールの最初のいくつかの画面」 を参照してください。</p> <p>注意：</p> <p>「インストール・タイプの選択」画面で、「Oracle Identity Management」を選択します。</p>
2. 構成オプションの選択	<p>「Oracle Internet Directory」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server Single Sign-On」は選択しないでください。</p> <p>「Oracle Application Server Delegated Administration Service」は選択しないでください。</p> <p>このコンポーネントが必要な場合は、「Oracle Application Server Directory Integration and Provisioning」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server Certificate Authority (OCA)」は選択しないでください。</p> <p>「高可用性およびレプリケーション」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. ポート構成オプションの指定	<p>「自動」を選択します。インストーラによって、最初のノードの Oracle Internet Directory と同じポートを使用するように Oracle Internet Directory が構成されます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 11-7 後続のノードの分散 Oracle Internet Directory への OracleAS Cluster (Identity Management) のインストール手順（続き）

画面	操作
4. リポジトリの指定	<p>最初の Oracle Internet Directory に入力した内容と同じ接続情報を入力します。</p> <p>ユーザー名 : OracleAS Metadata Repository データベースにログインするために使用するユーザー名を入力します。ユーザーは、DBA 権限を持っている必要があります。</p> <p>パスワード : ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>ホスト名とポート : データベースが稼働しているコンピュータの名前を入力し、そのコンピュータによってリスニングが行われているポートのポート番号を入力します。書式には、<i>host : port</i> を使用します。</p> <p>サービス名 : データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。</p> <p>例: <code>orcl.mydomain.com</code></p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. 警告	<p>この警告によって、インスタンスが OracleAS Cluster (Identity Management) の一部としてインストールされていること、およびクラスタ内のノードの時計を同期する必要があることが警告されます。詳細は、第 11.2.2 項「すべてのノードでの時計の同期化」 を参照してください。「OK」をクリックします。</p>
6. ODS パスワードの指定	<p>OracleAS Metadata Repository 内の ODS スキーマのパスワードを入力します。ODS スキーマは、Oracle Internet Directory で使用される主要スキーマです。</p> <p>デフォルトでは、ODS パスワードは <code>ias_admin</code> パスワード（「インスタンス名と <code>ias_admin</code> パスワードの指定」画面で入力したパスワード）と同じです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. Oracle Internet Directory へのログインの指定	<p>ユーザー名 : 最初の Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名を入力します。Oracle Internet Directory スーパーユーザー (<code>cn=orcladmin</code>) としてログインする必要があります。</p> <p>パスワード : ユーザー名のパスワードを入力します。</p> <p>レルム : ユーザー名の妥当性を検証するレルムを入力します。このフィールドは、Oracle Internet Directory に複数のレルムがある場合にのみ表示されます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
8. インスタンス名と <code>ias_admin</code> パスワードの指定	<p>インスタンス名 : このインフラストラクチャ・インスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および _ (アンダースコア) 文字を使用できます。1つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第 4.7 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。</p> <p>例: <code>oid_das</code></p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」: <code>ias_admin</code> ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、第 4.8 項「<code>ias_admin</code> ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。</p> <p>例: <code>welcome99</code></p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

11.6.5 各ノードへの OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services のインストール

各ノードで別々にインストーラを実行して、次の Oracle Identity Management コンポーネントをインストールします。

11.6.5.1 staticports.ini ファイルの設定

Oracle HTTP Server 以外のコンポーネントのカスタム・ポートを使用する場合は、このインストール用の staticports.ini ファイルを作成する必要があります。

Oracle HTTP Server にカスタム・ポートが必要な場合は、「HTTP ロード・バランサのホストおよびリスニング・ポートの指定」画面でそれらを指定します。

staticports.ini ファイルにも Oracle HTTP Server のカスタム・ポートを指定し、前述の画面でもポートを指定すると、画面で指定したポートが優先されます。

staticports.ini ファイルに Oracle HTTP Server のポートが指定されないようにするには、 staticports.ini ファイルに次の行が含まれないようにする必要があります。

```
Oracle HTTP Server port = port_num
Oracle HTTP Server Listen port = port_num
Oracle HTTP Server SSL port = port_num
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = port_num
```

また、 staticports.ini ファイルがある場合は、後続のノードへのインストールにも同じファイルを使用する必要があります。

11.6.5.2 インストーラの起動

インストーラの起動に関する注意は次のとおりです。

- 「OracleAS クラスタの指定」画面で、最初のノードに対して「新しいクラスタを作成」を選択します。2番目のノードには、「既存のクラスタに追加」を選択して、最初のノードへのインストール時に作成したクラスタに追加します。
- 「HTTP ロード・バランサのホストおよびポートの指定」画面で、ロード・バランサの HTTP 仮想サーバー名および関連付けられたポートを入力します。この画面では、Oracle HTTP Server のポート番号も入力します。
- 「HTTP ロード・バランサのホストおよびポートの指定」画面では、すべてのノードに同じ仮想サーバー名およびポート番号を指定する必要があります。ただし、ノードごとに指定されたポートと通信するようにロード・バランサが構成されている場合は、異なるポート番号を各ノードの Oracle HTTP Server に指定できます。

表 11-8 分散 OracleAS Cluster (Identity Management) 構成への Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On のインストール

画面	操作
1. --	<p>インストーラを起動して、最初のいくつかの画面で情報を入力します。詳細は、第 5.25 項「インストールの一部：インストールの最初のいくつかの画面」 を参照してください。</p> <p>注意：</p> <p>「インストール・タイプの選択」画面で、「Oracle Identity Management」を選択します。</p>

表 11-8 分散 OracleAS Cluster (Identity Management) 構成への Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On のインストール（続き）

画面	操作
2. 構成オプションの選択	<p>「Oracle Internet Directory」を選択しないでください。</p> <p>「Oracle Application Server Single Sign-On」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server Delegated Administration Service」を選択します。</p> <p>このコンポーネントが必要な場合は、「Oracle Application Server Directory Integration and Provisioning」を選択します。</p> <p>「Oracle Application Server Certificate Authority (OCA)」は選択しないでください。</p> <p>「高可用性およびレプリケーション」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. ポート構成オプションの指定	<p>「手動」を選択し、表示されたフィールドに staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。OracleAS Cluster (Identity Management) 構成には、staticports.ini ファイルを使用する必要があります。詳細は、第 11.6.5.1 項「staticports.ini ファイルの設定」 を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. 高可用性オプションの選択	<p>「OracleAS クラスタ (ID 管理)」を選択し、「次へ」をクリックします。</p>
5. OracleAS クラスタ (ID 管理) の作成または追加	<p>最初のノードでは、「新規 OracleAS クラスタの作成」を選択します。</p> <p>後続のノードでは、「既存のクラスタに追加」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. 新規 OracleAS クラスタ名の指定 - または - 既存の OracleAS クラスタ名の指定	<p>最初のノードでは、新規 OracleAS Cluster (Identity Management) の名前を入力します。 例: cluster1</p> <p>後続のノードでは、既存の OracleAS Cluster (Identity Management) の名前を入力します。注意: 入力した名前が正しいことを確認してください。この名前の確認は、インストーラでは行われません。名前が正しくない場合、インストールに失敗します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. LDAP 仮想ホストおよびポートの指定	<p>インストーラで、この画面の値を使用して Oracle Internet Directory に接続します。</p> <p>ホスト名: ロード・バランサの LDAP 仮想サーバー名を入力します。ロード・バランサに構成されたものと同じ仮想サーバー名を入力します。</p> <p>SSL ポート: LDAP SSL 接続を処理するために、ロード・バランサに構成されたポートを入力します。</p> <p>Oracle Internet Directory が SSL のみに構成されている場合は、「この LDAP 仮想ホストには SSL 接続のみ使用」オプションを選択します。それ以外の場合は、「非 SSL ポート」フィールドに、このロード・バランサの非 SSL ポート番号を入力します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
8. Oracle Internet Directory へのログインの指定	<p>ユーザー名: 前述の画面で指定したロード・バランサのホストおよびポートを介してアクセスする Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名を入力します。</p> <p>Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) または Oracle Internet Directory で必要なグループに属するユーザーとしてログインします。必要なグループは、インストールするコンポーネントによって異なります。詳細は、第 7.3 項「コンポーネントの構成または削除に必要なグループ」 を参照してください。</p> <p>パスワード: ユーザー名のパスワードを入力します。</p> <p>レルム: ユーザー名の妥当性を検証するレルムを入力します。このフィールドは、Oracle Internet Directory に複数のレルムがある場合にのみ表示されます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 11-8 分散 OracleAS Cluster (Identity Management) 構成への Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On のインストール（続き）

画面	操作
9. HTTP ロード・バランサの指定	<p>詳細は、第 11.4 項「Oracle HTTP Server 用の SSL ポートおよび非 SSL ポート構成」 を参照してください。</p> <p>この画面に入力する値は、すべてのノードで共通である必要があります。</p> <p>HTTP リスナー：ポート : Oracle HTTP Server でリスニングを行うポート番号を入力します。SSL 有効 : このオプションは、このポートで SSL に対応する Oracle HTTP Server を構成する場合に選択します。</p> <p>HTTP ロード・バランサ：ホスト名 : ロード・バランサに構成された HTTP 仮想サーバーの名前を入力します。ロード・バランサに構成されたものと同じ仮想サーバー名を入力します。</p> <p>HTTP ロード・バランサ：ポート : HTTP 仮想サーバーのポートを入力します。SSL 有効 : このオプションは、このポートが SSL 通信のみに対応する場合に選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
10. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	<p>インスタンス名 : このインフラストラクチャ・インスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_（アンダースコア）文字を使用できます。1つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第 4.7 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」 を参照してください。</p> <p>例: das_sso</p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」: ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、第 4.8 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」 を参照してください。</p> <p>例: welcome99</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
11. --	<p>インストールを終了します。詳細は、第 5.26 項「インストールの一部：インストールの最後のいくつかの画面」 を参照してください。</p>

11.6.5.3 Cluster Configuration Assistant が失敗した場合

インストール後に、インスタンスをクラスタ化できます。詳細は、[第 11.5.5 項「Cluster Configuration Assistant が失敗した場合」](#) を参照してください。

11.7 インストール後の手順

すべてのノードに Oracle Identity Management コンポーネントをインストールした後、すべてのノードにリクエストが送られるようにロード・バランサを再構成します。インストールを開始する前に、リクエストがノード 1 にのみ送られるようにロード・バランサを構成したためです。詳細は、[第 11.2.4 項「LDAP 仮想サーバーの構成」](#) を参照してください。

11.7.1 targets.xml の更新（ケース 2 のみ）

次の構成手順は、[第 11.4.2 項「ケース 2: クライアント --\[HTTPS\]--> ロード・バランサ --\[HTTPS\]--> Oracle HTTP Server」](#) のインストールのシナリオにのみ必要です。

このケースでは、クラスタの物理ホストごとに、targets.xml ファイルの oracle_sso_server エントリを、ローカルの SSL ポートを監視するように再構成する必要があります。

注意：

ホスト名は同じままにしておきます。変更しないでください。

次の手順を実行して、クラスタの各ノードで `targets.xml` を更新します。

1. `targets.xml` ファイルのバックアップを作成します。

```
copy %ORACLE_HOME%/sysman/emd/targets.xml
      %ORACLE_HOME%/sysman/emd/targets.xml.BACKUP
```

2. ファイルを開き、`oracle_sso_server` のターゲットのタイプを検索します。このターゲット・エントリ内で、次の 2 つの属性を検索し編集します。

- `HTTPPort`: サーバーの SSL ポート番号。
- `HTTPProtocol`: サーバーのプロトコル。このケースでは `HTTPS` です。
たとえば、2 つの属性は次のように更新できます。

```
<Property NAME="HTTPPort" VALUE="4443"/>
<Property NAME="HTTPProtocol" VALUE="HTTPS"/>
```

3. ファイルを保存して閉じます。

4. OracleAS コンソールを再ロードします。

```
ORACLE_HOME/bin/emctl reload
```

11.8 OracleAS Cluster (Identity Management) 構成への中間層のインストール

インストール前

中間層のインストールを開始する前に、Oracle Internet Directory の 1 つのノードのみを指すように、Oracle Internet Directory で使用している LDAP ロード・バランサを構成します。

インストール

OracleAS Cluster (Identity Management) 構成に中間層をインストールする場合は、[第 6 章「中間層のインストール」](#) で説明している手順に従います。

Oracle Internet Directory のホストおよびポートを入力するようにインストーラによって要求された場合は、ロード・バランサに構成されている LDAP 仮想ホスト名および関連付けられたポートを入力します。

インストール後

中間層のインストール後、Oracle Internet Directory のすべてのノードを指すように LDAP ロード・バランサを再構成できます。

12

高可用性環境へのインストール： OracleAS Disaster Recovery

この章では、OracleAS Disaster Recovery 構成に Oracle Application Server をインストールする方法について説明します。OracleAS Disaster Recovery は、Oracle Application Server でサポートされている高可用性環境の 1 つです。

この章の内容は次のとおりです。

- 第 12.1 項 「OracleAS Disaster Recovery: 概要」
- 第 12.2 項 「OracleAS Disaster Recovery 環境の設定」
- 第 12.3 項 「OracleAS Disaster Recovery 環境への Oracle Application Server のインストール」
- 第 12.4 項 「次に読むマニュアル」

12.1 OracleAS Disaster Recovery: 概要

使用している環境に 2 つの物理的に分離したサイトが必要な場合は、OracleAS Disaster Recovery 環境を使用します。1 つは本番サイトであり、もう 1 つはスタンバイ・サイトです。本番サイトがアクティブの間、スタンバイ・サイトはパッシブです。本番サイトが停止すると、スタンバイ・サイトがアクティブになります。

OracleAS Disaster Recovery では、本番およびスタンバイ・サイトで Infrastructure および中間層の構成に使用できる、多数の基本トポロジをサポートしています。OracleAS Disaster Recovery がサポートする基本トポロジは次のとおりです。

- 対称トポロジ : Oracle Identity Management および OracleAS Metadata Repository Infrastructure がともにインストールされた本番サイトの完全なミラー
- 非対称トポロジ : Oracle Identity Management および OracleAS Metadata Repository Infrastructure がともにインストールされた簡単な非対称のスタンバイ・トポロジ
- Oracle Identity Management および OracleAS Metadata Repository Infrastructure がともにインストールされた OracleAS Portal 用の個別の OracleAS Metadata Repository (部門別トポロジ)
- Oracle Identity Management および OracleAS Metadata Repository Infrastructure がともにインストールされていない分散アプリケーションにおける OracleAS Metadata Repository

対称トポロジでは、スタンバイ・サイトの各ノードは本番サイトのノードに対応しています。この中には、OracleAS Infrastructure および中間層の両方を実行しているノードも含まれます。非対称トポロジのスタンバイ・サイトに必要なインスタンスの数は、本番サイトよりも少なく、スイッチオーバーまたはフェイルオーバー操作時のサイトの運用に最低限必要な数です。

OracleAS Cold Failover Cluster 環境の本番サイトに OracleAS Infrastructure を設定し、この環境を少し変更できます。詳細は、[第 12.2.4 項「本番サイトで OracleAS Cold Failover Cluster を使用する場合」](#) を参照してください。

これらのサポートされているトポロジでは、OracleAS Disaster Recovery ソリューションとして構成された本番およびスタンバイ・トポロジ内のすべてのシステムの Oracle ホームに、OracleAS Guard がインストールされます。

OracleAS Guard は、OracleAS Companion CD 2 に入っています。スタンダロン・インストール・キットとしてインストールできます。

図 12-1 に、対称型の OracleAS Disaster Recovery 環境の例を示します。各サイトには、中間層を実行するノードが 2 つと OracleAS Infrastructure を実行するノードが 1 つあります。

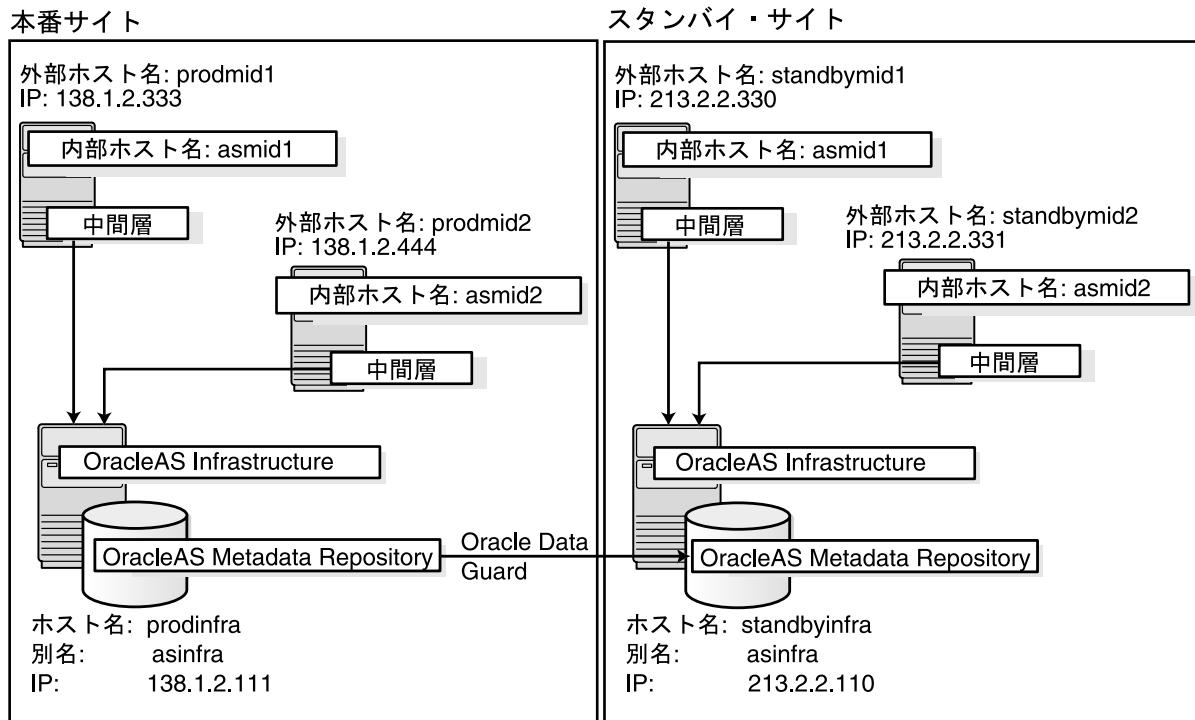
データの同期化

OracleAS Disaster Recovery を機能させるには、フェイルオーバーが即座に実行されるように本番サイトとスタンバイ・サイトのデータを同期化する必要があります。本番サイトで行った構成の変更は、スタンバイ・サイトにも反映させる必要があります。

2 つのタイプのデータを同期化する必要があります。同期化の方法は、データのタイプによって異なります。

- 本番サイトおよびスタンバイ・サイトの OracleAS Metadata Repository データベースのデータを同期化するには、Oracle Data Guard を使用します。同期化を実行するように Oracle Data Guard を構成できます。
- データベース外のデータ（構成ファイルに格納されたデータなど）を同期化するには、バックアップおよびリカバリのスクリプトを使用します。

Oracle Data Guard、およびバックアップおよびリカバリ・スクリプトの使用方法の詳細は、『Oracle Application Server 高可用性ガイド』を参照してください。

図 12-1 OracleAS Disaster Recovery 環境

12.2 OracleAS Disaster Recovery 環境の設定

OracleAS Disaster Recovery 環境内に Oracle Application Server をインストールする前に、次の手順を実行する必要があります。

- 第 12.2.1 項 「オペレーティング・システム・レベルでノードが同じであることの確認」
- 第 12.2.2 項 「staticports.ini ファイルの設定」
- 第 12.2.3 項 「本番およびスタンバイの両方のサイトでの同じホスト名の設定」
- 第 12.2.4 項 「本番サイトで OracleAS Cold Failover Cluster を使用する場合」

12.2.1 オペレーティング・システム・レベルでノードが同じであることの確認

次の条件についてノードが同じであることを確認します。

- すべてのノードが同じバージョンのオペレーティング・システムを実行している。
- すべてのノードに同じオペレーティング・システムのパッチおよびパッケージがある。
- すべてのノード上の同じディレクトリ・パスに Oracle Application Server をインストールできる。

12.2.2 staticports.ini ファイルの設定

同じコンポーネントでは、本番サイトでもスタンバイ・サイトでも同じポート番号を使用する必要があります。たとえば、Oracle HTTP Server が本番サイトでポート 80 を使用している場合は、スタンバイ・サイトでもポート 80 を使用する必要があります。これを確実にするためには、インストール時に使用する staticports.ini ファイルを作成します。このファイルで各コンポーネントのポート番号を指定できます。詳細は、第 3.4.4 項 「カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）」を参照してください。

12.2.3 本番およびスタンバイの両方のサイトでの同じホスト名の設定

サイト間でデータを同期化するときにデータを編集してホスト名を修正する必要がないように、本番サイトおよびスタンバイ・サイトの対応するノードの名前は同じである必要があります。

インフラストラクチャ・ノードの場合

インフラストラクチャを実行するノードの場合、仮想名を設定します。これを行うには、`C:\Windows\system32\drivers\etc\hosts` ファイルにノードの別名を指定します。

たとえば、本番サイトのインフラストラクチャ・ノードでは、`hosts` ファイル内の次の行は別名を `asinfra` に設定します。

```
138.1.2.111 prodinfra asinfra
```

スタンバイ・サイトでは、次の行はノードの別名を `asinfra` に設定します。

```
213.2.2.110 standbyinfra asinfra
```

本番サイトおよびスタンバイ・サイトに OracleAS Infrastructure をインストールする場合は、「仮想ホストの指定」画面でこの別名 (`asinfra`) を指定します。構成データには、インフラストラクチャ・ノード用のこの別名が含まれます。

中間層ノードの場合

中間層を実行するノードの場合、中間層のインストール時にインストーラによって「仮想ホストの指定」画面が表示されないため、インフラストラクチャ・ノードの場合のように別名を指定できません。中間層のインストールでは、インストーラによって `gethostname()` 関数がコールされ、自動的にホスト名が確認されます。本番サイトの各中間層ノードに対して、スタンバイ・サイトの対応するノードが同じホスト名を戻すようになります。

これを行うには、ローカルまたは内部のホスト名を設定します。このホスト名はパブリックまたは外部のホスト名と同じである必要はありません。スタンバイ・サイトのノードの名前を本番サイトの対応するノードの名前にあわせて変更するか、本番サイトとスタンバイ・サイトの両方のノードの名前が同じになるように変更できます。どちらの方法を使用するかは、ノード上で実行されている他のアプリケーション、およびノード名の変更によってこれらのアプリケーションが影響を受けるかどうかによって決定します。

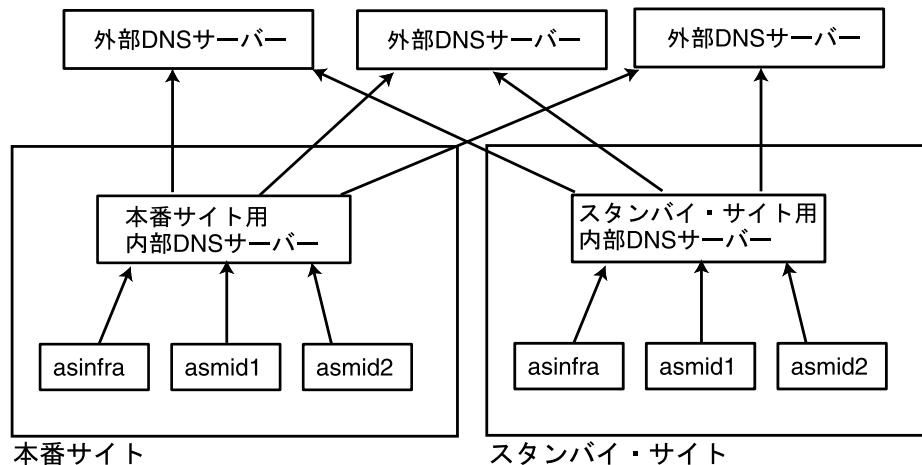
1. ローカル名を変更するノードで、環境変数 `_CLUSTER_NETWORK_NAME_` に、新しいローカルの完全修飾名 (`asmid1.oracle.com` など) を指定します。

注意: 環境変数 `_CLUSTER_NETWORK_NAME_` は、システム環境変数ではなくユーザー環境変数に設定する必要があります。

2. OracleAS Disaster Recovery 環境内の他のノードが新しいローカル・ホスト名を使用してこのノードを解決できるようにします。これは、次のいずれかの方法で行うことができます。

方法 1: 本番サイトとスタンバイ・サイトに異なる内部 DNS サーバーを設定します。この構成によって、各サイト（本番またはスタンバイ）のノードがサイト内でホスト名を解決できるようになります。内部 DNS サーバーの前には、企業、つまり外部の DNS サーバーがあります。内部 DNS サーバーは、信頼できないリクエストは外部 DNS サーバーへ転送します。外部 DNS サーバーは、内部 DNS サーバーの存在を知りません。詳細は、[図 12-2](#) を参照してください。

図 12-2 方法 1: DNS サーバーの使用



方法 1 の詳細

- 外部 DNS 名が外部 DNS ゾーンに定義されていることを確認します。

例：

```
prodmid1.us.oracle.com      IN A  138.1.2.333
prodmid2.us.oracle.com      IN A  138.1.2.444
prodinf.us.oracle.com       IN A  138.1.2.111
standbymid1.us.oracle.com  IN A  213.2.2.330
standbymid2.us.oracle.com  IN A  213.2.2.331
standbyinf.us.oracle.com   IN A  213.2.2.110
```

- 本番サイトで、外部ドメイン名とは異なるドメイン名を使用して本番サイトに新しいゾーンを作成します。これを行うには、OracleAS Disaster Recovery 環境内の各ノードのエントリをゾーン・データ・ファイルに移入します。

インフラストラクチャ・ノードの場合、仮想名または別名を使用します。

中間層ノードの場合、ノード名（環境変数 _CLUSTER_NETWORK_NAME_ 内の値）を使用します。

次の例では、新しいゾーンのドメイン名として「asha」を使用します。

```
asmid1.asha      IN A  138.1.2.333
asmid2.asha      IN A  138.1.2.444
asinfra.asha     IN A  138.1.2.111
```

スタンバイ・サイトに対しても同じことを行います。本番サイトに使用したドメイン名を使用します。

```
asmid1.asha      IN A  213.2.2.330
asmid1.asha      IN A  213.2.2.331
asinfra.asha     IN A  213.2.2.110
```

- 本番サイトの各ノードで、外部 DNS サーバーではなく内部 DNS サーバーを指すように DNS リゾルバを構成します。

表 12-1 内部 DNS サーバーを指すように DNS リゾルバを構成する方法

Windows Server 2003 の場合

1. 「ローカル エリア接続 状態」ダイアログ・ボックスを表示します。
Windows Server 2003 の場合：「スタート」→「コントロール パネル」→「ネットワーク接続」→「ローカル エリア接続」を選択します。
2. 「プロパティ」をクリックして、「ローカル エリア接続のプロパティ」ダイアログ・ボックスを表示します。
3. 「全般」タブでリスト・ボックスから「インターネットプロトコル(TCP/IP)」を選択して、「プロパティ」をクリックします。「インターネットプロトコル(TCP/IP)のプロパティ」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. 既存のネーム・サーバーの IP アドレスを、本番サイトの内部 DNS サーバーの IP アドレスに変更します。
5. 「詳細設定」をクリックします。「TCP/IP 詳細設定」ダイアログ・ボックスが表示されます。
6. 「DNS」タブを選択して、DNS サーバーのアドレスを更新します。

スタンバイ・サイトのノードに対しても同じ手順を実行します。ただし、スタンバイ・サイト用の内部 DNS サーバーの IP アドレスを使用します。

- d. 内部 DNS サーバー内の Oracle Data Guard 用に別のエントリを作成します。このエントリは、Oracle Data Guard がスタンバイ・サイトのデータベースに REDO データを送るために使用します。

次の例では、「remote_infra」エントリはスタンバイ・サイトのインフラストラクチャ・ノードを示します。この名前は、スイッチオーバーが発生した場合に TNS エントリを変更しなくともよいように、本番サイトとスタンバイ・サイトの両方の TNS エントリで使用されます。

図 12-3 内部 DNS サーバー内の Oracle Data Guard エントリ



本番サイトでは、DNS エントリは次のようにになります。

```
asmid1.asha      IN  A  138.1.2.333
asmid2.asha      IN  A  138.1.2.444
asinfra.asha     IN  A  138.1.2.111
remote_infra.asha IN  A  213.2.2.110
```

スタンバイ・サイトでは、DNS エントリは次のようにになります。

```
asmid1.asha      IN  A  213.2.2.330
asmid2.asha      IN  A  213.2.2.331
asinfra.asha     IN  A  213.2.2.110
remote_infra.asha IN  A  138.1.2.111
```

方法 2: 両サイトの各ノードの C:\Windows\system32\drivers\etc\hosts ファイルを編集します。この方法には、DNS サーバーの構成は含まれませんが、OracleAS Disaster Recovery 環境内の各ノードの hosts ファイルをメンテナンスする必要があります。たとえば、IP アドレスが変更されたら、すべてのノード上のファイルを更新し、ノードを再起動する必要があります。

方法 2 の詳細

- a. 本番サイトの各ノードで、C:\Windows\system32\drivers\etc\hosts ファイルに次の行を含めます。IP アドレスは、本番サイトのノードで解決します。

注意: hosts ファイルでは、現在のノードを識別する行を localhost 定義（アドレス 127.0.0.1 の行）の直後に指定してください。

```
127.0.0.1    localhost
138.1.2.333  asmid1.oracle.com  asmid1
138.1.2.444  asmid2.oracle.com  asmid2
138.1.2.111  asinfra.oracle.com  asinfra
```

- b. スタンバイ・サイトの各ノードで、hosts ファイルに次の行を含めます。IP アドレスは、スタンバイ・サイトのノードで解決します。

注意: hosts ファイルでは、現在のノードを識別する行を localhost 定義（アドレス 127.0.0.1 の行）の直後に指定してください。

```
127.0.0.1    localhost
213.2.2.330  asmid1.oracle.com  asmid1
213.2.2.331  asmid2.oracle.com  asmid2
213.2.2.110  asinfra.oracle.com  asinfra
```

- c. ホスト名の解決順序を設定して、ノードがホスト名を解決する際に hosts ファイルが最初に読み取られるようにします。hosts ファイルに目的のホスト名のエントリが含まれていない場合、ノードは DNS を介してホスト名を解決します。

これを行うには、hosts ファイルにエントリを追加した後で nbtstat -R コマンドを実行し、キャッシュされた情報の消去および名前表の再ロードを実行します。詳細は、システム管理者に問い合わせてください。

ノードがホスト名を正しく解決することの確認

変更を行い、ノードを再起動した後で、次のコマンドを実行して、ノードがホスト名を適切に解決することを確認します。

- 両サイトの中間層ノードで、hostname コマンドを実行します。これによって、内部ホスト名が戻されます。たとえば、prodmid1 および standbymid1 上でこのコマンドを実行すると、「asmid1」が戻されます。

```
C:> hostname
asmid1
```

- 各ノードで、内部ホスト名および外部ホスト名を使用して、環境内の他のノードに対して ping を実行します。このコマンドは成功する必要があります。たとえば、最初の中間層ノードである prodmid1 から、次のコマンドを実行します。

```
C:> ping prodinfra      ping the production infrastructure node
Pinging prodinfra [138.1.2.111] with 32 bytes of data:
Reply from 138.1.2.111: bytes=32 time<1ms TTL=128
```

```
C:> ping asinfra        ping the production infrastructure node
Pinging prodinfra [138.1.2.111] with 32 bytes of data:
Reply from 138.1.2.111: bytes=32 time<1ms TTL=128
```

```
C:> ping asmid2         ping the second production midtier node
Pinging asmid2 [138.1.2.444] with 32 bytes of data:
Reply from 138.1.2.444: bytes=32 time<1ms TTL=128
```

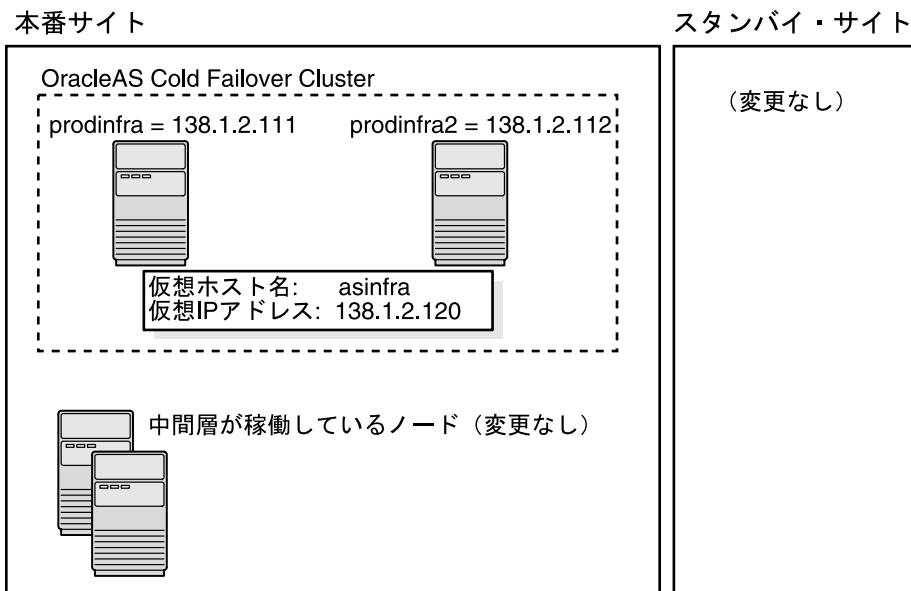
```
C:> ping prodmid2      ping the second production midtier node
Pinging asmid2 [138.1.2.444] with 32 bytes of data:
Reply from 138.1.2.444: bytes=32 time<1ms TTL=128

C:> ping standbymid1   ping the first standby midtier node
Pinging asmid2 [213.2.2.330] with 32 bytes of data:
Reply from 213.2.2.330: bytes=32 time<1ms TTL=128
```

12.2.4 本番サイトで OracleAS Cold Failover Cluster を使用する場合

OracleAS Disaster Recovery システムの本番サイトで OracleAS Infrastructure を設定し、 OracleAS Cold Failover Cluster 構成で実行できます。この場合、1つのハードウェア・クラスタに2つのノードがあり、 OracleAS Infrastructure を共有ディスクにインストールします。詳細は、[第10章「高可用性環境へのインストール：OracleAS Cold Failover Cluster」](#)を参照してください。

図 12-4 OracleAS Cold Failover Cluster 構成内のインフラストラクチャ



この環境で OracleAS Cold Failover Cluster を設定するには、本番サイト上の asinfra.asha に対して（物理 IP アドレスのかわりに）仮想 IP アドレスを使用します。次の例では、138.1.2.120 が仮想 IP アドレスであると仮定します。

asmid1.asha	IN A 138.1.2.333	
asmid2.asha	IN A 138.1.2.444	
asinfra.asha	IN A 138.1.2.120	これが仮想 IP アドレス
remote_infra.asha	IN A 213.2.2.110	

スタンバイ・サイトでは、asinfra.asha には引き続き物理 IP アドレスを使用しますが、remote_infra.asha には仮想 IP アドレスを使用します。

asmid1.asha	IN A 213.2.2.330	
asmid2.asha	IN A 213.2.2.331	
asinfra.asha	IN A 213.2.2.110	物理 IP アドレス
remote_infra.asha	IN A 138.1.2.120	仮想 IP アドレス

Oracle Fail Safe に作成が必要なパスワード・ファイル

OracleAS Disaster Recovery 環境で OracleAS Cold Failover Cluster を設定する場合は、OracleAS Metadata Repository を Oracle Fail Safe グループに追加するときにパスワード・ファイルを作成する必要があります。

第 10.12.2 項「[OracleAS Metadata Repository の高可用性設定](#)」の手順 c で、「はい、パスワード・ファイルを作成します」を選択します。

「ユーザー名」で、SYS と入力します。

「パスワード」と確認のために「[パスワードの確認](#)」にも、SYS ユーザーに設定するパスワードを入力します。

12.3 OracleAS Disaster Recovery 環境への Oracle Application Server のインストール

次のようにして Oracle Application Server をインストールします。

注意： すべてのインストールに対して、staticports.ini を使用してコンポーネントのポート番号を指定します。詳細は、[第 12.2.2 項「staticports.ini ファイルの設定」](#) を参照してください。

1. 本番サイトで OracleAS Infrastructure をインストールします。
2. スタンバイ・サイトで OracleAS Infrastructure をインストールします。
3. サイトに中間層をインストールする前に、各サイトで OracleAS Infrastructure を起動します。
4. 本番サイトで中間層をインストールします。
5. スタンバイ・サイトで中間層をインストールします。

12.3.1 OracleAS Infrastructure のインストール

OracleAS Infrastructure の Oracle Identity Management および OracleAS Metadata Repository コンポーネントを同じノードにインストールする必要があります。コンポーネントを複数のノードに分散することはできません。

インストール手順は、OracleAS Cold Failover Cluster の場合の手順と同様です。表示される一連の画面については、[第 10.3 項「OracleAS Cold Failover Cluster \(Infrastructure\) 構成のインストール」](#) を参照してください。次の点に注意してください。

- 「構成オプションの選択」画面：「[高可用性およびレプリケーション](#)」を指定します。[表 10-4](#) の手順 7. を参照してください。
- 「仮想ホストの指定」画面で、仮想アドレスとしてローカルの完全修飾ホスト名 (asinfra.oracle.com など) を入力します。[表 10-4](#) の手順 11. を参照してください。

12.3.2 中間層のインストール

任意の中間層タイプをインストールできます。

J2EE and Web Cache のインストールについては、[第 6.9 項「Database-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール \(Oracle Identity Management Access を使用する場合\)」](#) を参照してください。

Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms のインストールについては、[第 6.13 項「Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms のインストール」](#) を参照してください。

注意: インストーラによって、Oracle Internet Directory に登録し、Oracle Internet Directory のホスト名を入力するよう要求されたら、OracleAS Infrastructure を実行しているノードの別名（asinfra.oracle.com など）を入力します。

12.4 次に読むマニュアル

Oracle Data Guard の設定や OracleAS Metadata Repository データベースの構成などの、OracleAS Disaster Recovery 環境の管理方法については、『Oracle Application Server 高可用性ガイド』を参照してください。

13

既存のデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール

既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする方法については、
Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のユーザーズ・ガイドを参照
してください。

14

推奨されるトポロジ

この章では、インフラストラクチャと中間層を異なるトポロジでインストールして構成する方法について説明します。トポロジは、Oracle Application Server の柔軟性を示します。

この章の各項では、トポロジを 1 つずつ説明します。トポロジごとに、各項ではトポロジの図を示し、前提条件、特別な要件およびインストール手順について説明します。

表 14-1 に、推奨されるトポロジを示します。

表 14-1 推奨されるトポロジの概要

トポロジ	環境	インフラストラクチャの 必要な有無
第 14.1 項 「Java 開発者 トポロジ」	開発	いいえ
第 14.2 項 「Portal and Wireless 開発者 トポロジ」	開発	はい
第 14.3 項 「Forms、Reports および Discoverer 開発者 トポロジ」	開発	はい
第 14.4 項 「Integration B2B トポロジ」	開発	はい
第 14.5 項 「OracleAS Portal 用に個別の OracleAS Metadata Repository が使用される部門別トポロジ」	配置	はい
第 14.6 項 「開発ライフ・サイクル・サポート・トポロジ」	開発および配置	該当なし
第 14.7 項 「OCA トポロジ」	配置	はい

トポロジの詳細： エンタープライズ・トポロジについては、『Oracle Application Server エンタープライズ・デプロイメント・ガイド』を参照してください。

14.1 Java 開発者トポロジ

これは、J2EE アプリケーションを構築、実行およびテストできる、1 台のコンピュータからの開発トポロジです。OracleAS Infrastructure は必要ありません。

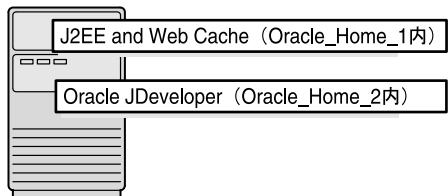
対象ユーザー

J2EE アプリケーションの開発者

[図 14-1](#) に、このトポロジの図を示します。

図 14-1 J2EE and Web Cache を使用する Oracle JDeveloper

コンピュータ1



14.1.1 説明

このトポロジの J2EE and Web Cache 中間層には、次のコンポーネントが含まれています。

- Oracle HTTP Server
- Oracle Application Server Containers for J2EE
- OracleAS Web Cache

開発ツールとして、Oracle Developer Suite の一部として含まれる Oracle JDeveloper IDE をインストールできます。

注意：

- インストール後にいつでも OracleAS Infrastructure を使用できるように、この J2EE and Web Cache インスタンスを構成できます。
 - このインスタンスで OracleAS Single Sign-On を使用するには、Oracle Internet Directory を使用してそれを構成する必要があります。OracleAS Infrastructure をインストールすれば、Oracle Internet Directory をインストールできます。
-

14.1.2 要件

この要件は、[第 3 章「要件」](#) に示したものと同じです。

14.1.3 インストールの手順

インストールを 2 回実行する必要があります。

- [第 6.8 項「インフラストラクチャなしでの J2EE and Web Cache のインストール」](#) で説明したとおりに、J2EE and Web Cache をインストールします。
- Oracle JDeveloper をインストールします。詳細は、Oracle Developer Suite のインストレーション・ガイドを参照してください。

これらの製品は、異なる Oracle ホームにインストールします。Oracle ホームは新しいディレクトリ（他の Oracle 製品の Oracle ホームでないディレクトリ）である必要があります。

J2EE and Web Cache 中間層および Oracle JDeveloper は、任意の順序でインストールできます。

14.2 Portal and Wireless 開発者トポロジ

これは、OracleAS Infrastructure と Portal and Wireless 中間層を含む、1台のコンピュータからなる開発トポロジです。OracleAS Infrastructure をインストールすると、新規の Oracle データベースと Oracle Internet Directory が作成されます。

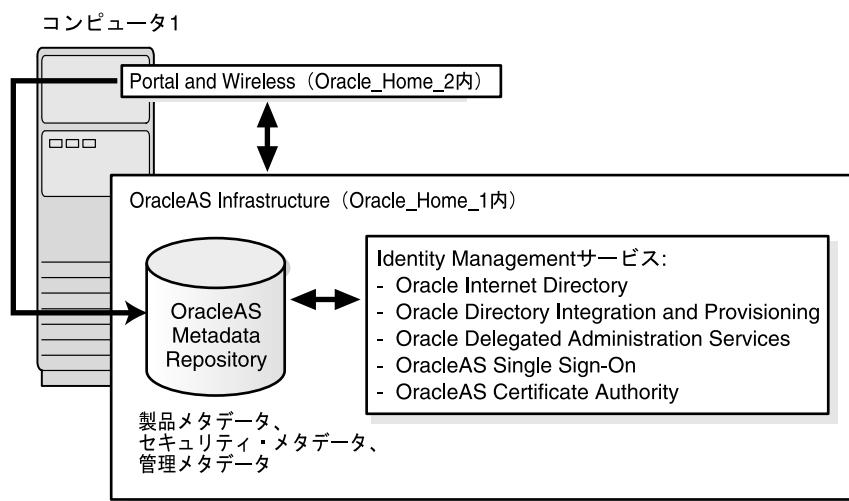
対象ユーザー

組み込まれたコンポーネントの機能にアクセスするアプリケーションを実行してテストするアプリケーション開発者

14.2.1 説明

このトポロジを使用すると、アプリケーション開発者は Portal and Wireless アプリケーションを開発してテストできます。このトポロジでは、同じコンピュータで OracleAS Infrastructure と Portal and Wireless 中間層を実行するため、[第 14.1 項「Java 開発者トポロジ」](#) で説明したトポロジよりも強力なコンピュータが必要です。インフラストラクチャと中間層は、異なる Oracle ホームにインストールされます。

図 14-2 Portal and Wireless 開発者トポロジ



14.2.2 要件

この要件は、[第 3 章「要件」](#) に示したものと同じです。

14.2.3 インストールの手順

次の手順でこのトポロジを作成します。

1. OracleAS Infrastructure をインストールします。

[第 5.19 項「OracleAS Infrastructure のインストール」](#) の手順に従って、新規の Oracle データベースでインフラストラクチャをインストールし、OracleAS Metadata Repository を格納します。この手順では、新しい Oracle Internet Directory もインストールされます。

2. Portal and Wireless 中間層をインストールします。

[第 6.13 項「Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms のインストール」](#) の手順に従います。

これらは、異なる Oracle ホームにインストールします。

14.3 Forms、Reports および Discoverer 開発者トポロジ

これは、次のコンポーネントを使用する單一コンピュータの開発トポロジです。

- 新規の Oracle データベースと Oracle Internet Directory をインストールする OracleAS Infrastructure
- Business Intelligence and Forms 中間層
- Forms Builder (Oracle Developer Suite の一部)
- Reports Builder (Oracle Developer Suite の一部)
- Discoverer Administrator (Oracle Developer Suite および Oracle Business Intelligence Tools の一部)

対象ユーザー

Forms、Reports および Discoverer アプリケーションの開発者

14.3.1 説明

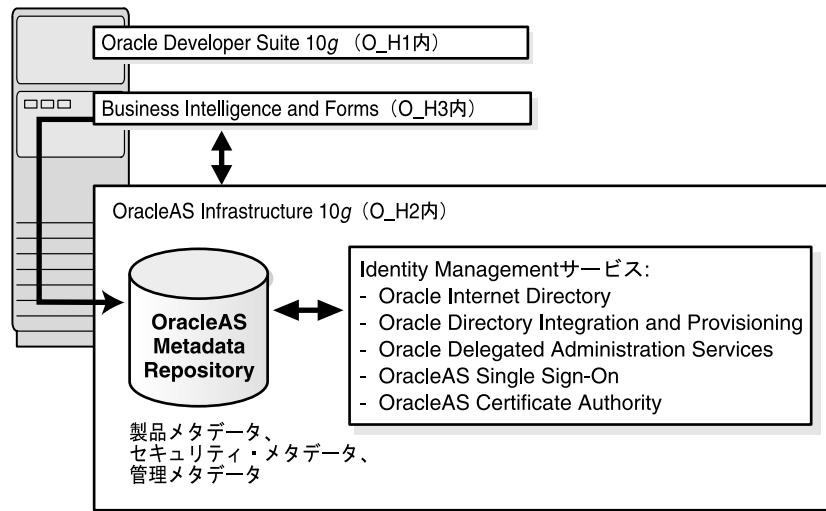
このトポロジを使用すると、Forms および Reports の開発者がそれぞれのアプリケーションを構築してテストできます。開発者は Forms Builder および Reports Builder を使用してアプリケーションを開発します。

その後、アプリケーションを Oracle Application Server に配置して、実行できます。Business Intelligence and Forms 中間層は、アプリケーションの実行に必要な OracleAS Forms Services コンポーネントおよび OracleAS Reports Services コンポーネントを提供します。

OracleAS Infrastructure および Business Intelligence and Forms 中間層は、別の Oracle ホームにインストールします。Forms Builder および Reports Builder は、3 つ目の Oracle ホームにインストールします。

図 14-3 Forms、Reports および Discoverer アプリケーションの開発トポロジ

コンピュータ1



14.3.2 要件

この要件は、[第3章「要件」](#)に示したものと同じです。

14.3.3 インストールの手順

次の順番で各アイテムをインストールします。各アイテムをそれ独自の Oracle ホームにインストールします。

1. Forms Builder、Reports Builder および Discoverer Administrator が含まれる Oracle Developer Suite または Oracle Business Intelligence Tools をインストールします。詳細は、Oracle Developer Suite のインストレーション・ガイドを参照してください。
2. OracleAS Infrastructure をインストールします。
[第 5.19 項「OracleAS Infrastructure のインストール」](#) の手順に従います。
3. Business Intelligence and Forms 中間層をインストールします。
[第 6.13 項「Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms のインストール」](#) の手順に従います。

14.4 Integration B2B トポロジ

この開発トポロジを使用すると、企業間で設計、配置、監視および管理を統合（B2B 統合とも呼ばれます）できます。OracleAS Integration B2B を使用すると、取引パートナは、RosettaNet、Electronic Data Interchange (EDI) またはカスタム・ビジネス・プロトコルを使用して取引を行うことができます。

対象読者

- B2B 統合を設計、配置、監視および管理するユーザー

14.4.1 説明

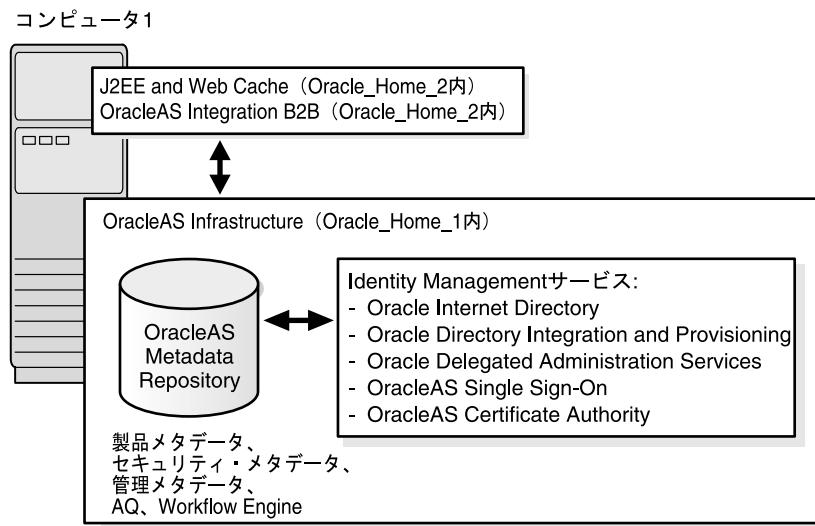
この開発トポロジには、次のものが含まれています。

- OracleAS Infrastructure
- J2EE and Web Cache 中間層
- 企業間のサービス、情報および製品の取引環境を提供する OracleAS Integration B2B。詳細は、『Oracle Application Server Integration B2B ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

OracleAS Integration B2B は独自の CD-ROM として Oracle Application Server に含まれています。OracleAS Integration B2B の CD-ROM には、『Oracle Application Server Integration B2B のインストレーション・ガイド』も含まれています。

Oracle Application Server の DVDをお持ちの場合は、OracleAS Integration B2B は b2b ディレクトリにあります。

図 14-4 Integration B2B トポロジ



14.4.2 要件

この要件は、[第3章「要件」](#)に示したものと同じです。

OracleAS Integration B2B の要件については、OracleAS Integration B2B の CD-ROM、または Oracle Application Server の DVD の b2b ディレクトリにある、『Oracle Application Server Integration B2B のインストレーション・ガイド』を参照してください。

14.4.3 前提条件

このトポロジには、次の前提条件があります。

- OracleAS Infrastructure をインストールするときに、新しい Oracle Internet Directory を作成する必要があります。
- OracleAS Infrastructure をインストールするときに、OracleAS Metadata Repository 用の新規のデータベースを作成する必要があります。この OracleAS Metadata Repository は、OracleAS Integration B2B によっても使用されます。

14.4.4 インストールの手順

次の順番で各アイテムをインストールします（[図 14-4](#) を参照）。

1. Oracle_Home_1 には、Oracle Identity Management サービスおよび OracleAS Metadata Repository を含めた OracleAS Infrastructure をインストールします。具体的な手順については、[第5.19項「OracleAS Infrastructure のインストール」](#) を参照してください。

これによって、OracleAS Metadata Repository を格納するためのデータベースが作成されます。また、Oracle Internet Directory も作成されます。

2. Oracle_Home_2 には、J2EE and Web Cache 中間層をインストールします。[第6.9項「Database-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール（Oracle Identity Management Access を使用する場合）」](#) を参照してください。

インストーラによって Oracle Internet Directory の入力を要求されたら、手順 1 で作成された Oracle Internet Directory の接続情報を入力します。

インストーラによって OracleAS Metadata Repository の入力を要求されたら、手順 1 でインストールした OracleAS Metadata Repository を選択します。

3. J2EE and Web Cache 中間層をインストールした Oracle ホームに OracleAS Integration B2B をインストールします。OracleAS Integration B2B のインストール方法の詳細は、『Oracle Application Server Integration B2B のインストレーション・ガイド』(OracleAS Integration B2B の CD-ROM、または Oracle Application Server の DVD の b2b ディレクトリ内) を参照してください。

14.5 OracleAS Portal 用に個別の OracleAS Metadata Repository が使用される部門別トポロジ

このトポロジは、『Oracle Application Server エンタープライズ・デプロイメント・ガイド』で説明されているトポロジを小規模にしたもので、これは、2つのメタデータ・リポジトリを含む OracleAS Infrastructure と複数の中間層から構成されます。

2つのメタデータ・リポジトリは、次のように使用されます。

- 1つ目の OracleAS Metadata Repository は、Oracle Internet Directory、OracleAS Single Sign-On などの Oracle Identity Management コンポーネントで使用されます。
- 2つ目の OracleAS Metadata Repository は、Portal and Wireless 中間層で使用されます。この OracleAS Metadata Repository は、この中間層のコンポーネント (OracleAS Portal、OracleAS Wireless など) によって使用されます。

対象ユーザー

このトポロジは、組織内の個々の部門で使用できます。このトポロジを利用するユーザーは、組織の内部にいる人々です。そのため、このトポロジでは外部ユーザーに関するセキュリティ要件は考慮されていません。

14.5.1 説明

このトポロジ (図 14-5) は、OracleAS Infrastructure といくつかの中間層 (Portal and Wireless 中間層を1つ以上含む) から構成されます。このトポロジでは、メタデータ・リポジトリを2つ使用します。

- Oracle Identity Management サービス用に1つ (コンピュータ1にインストールされる)。すべての中間層で、このメタデータ・リポジトリを Oracle Identity Management サービスに使用します。
- 製品メタデータ用に1つ (コンピュータ2にインストールされる)。Portal and Wireless 中間層では、このメタデータ・リポジトリを使用します。

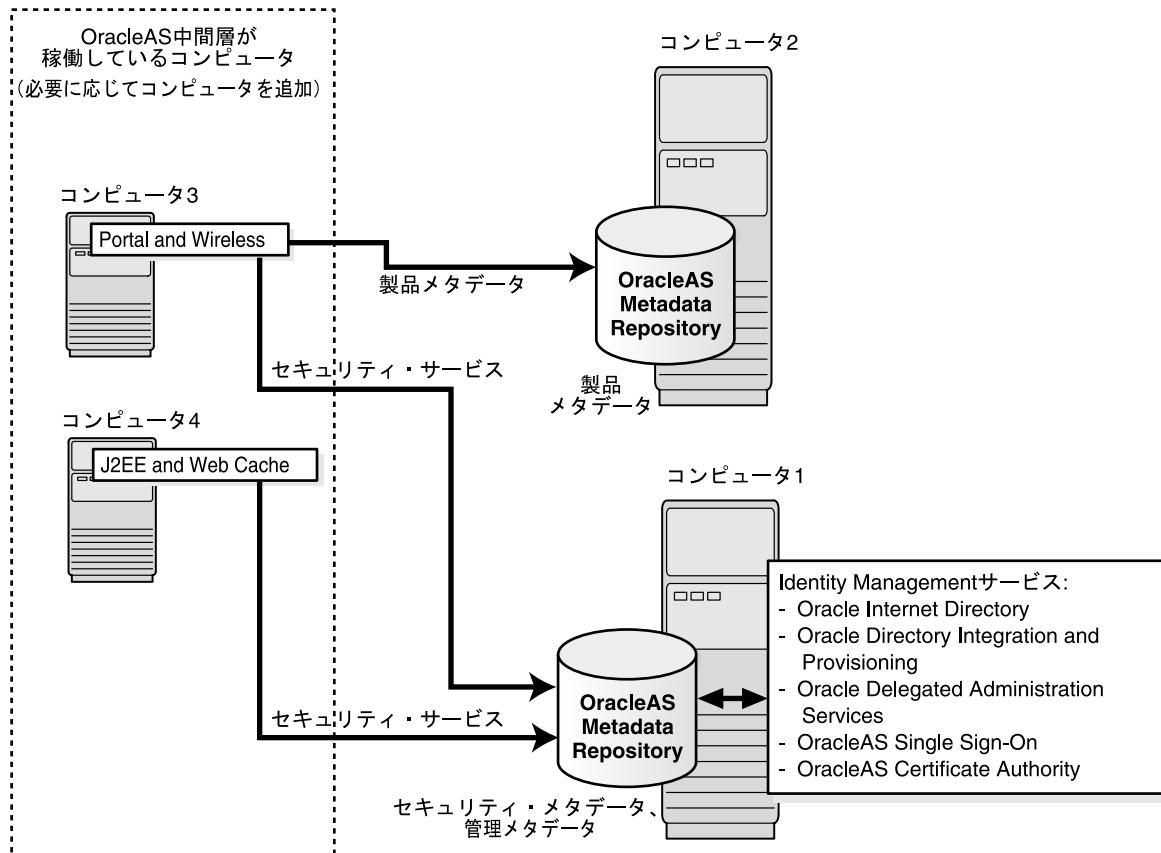
トポロジの拡張

必要に応じて、Oracle Application Server の中間層を他のコンピュータにもインストールできます。これらの中間層がどちらかのメタデータ・リポジトリを使用するように設定します。

高可用性機能の追加

第9章「[高可用性環境へのインストール: 概要](#)」で説明した高可用性環境のいずれかに OracleAS Infrastructure をインストールできます。

図 14-5 部内別トポロジ



14.5.2 要件

この要件は、[第3章「要件」](#)に示したものと同じです。

14.5.3 前提条件

このトポロジには、次の前提条件があります。

- OracleAS Infrastructure をインストールするときに、新しい Oracle Internet Directory を作成する必要があります。

14.5.4 インストールの手順

次の順番で各アイテムをインストールします。図 14-5 に、各コンピュータを示しています。

1. コンピュータ 1: Oracle Identity Management サービスおよび OracleAS Metadata Repository を含めた OracleAS Infrastructure をインストールします。具体的な手順については、[第5.19項「OracleAS Infrastructure のインストール」](#)を参照してください。

これによって、OracleAS Metadata Repository を格納するためのデータベースが作成されます。また、Oracle Internet Directory も作成されます。

2. コンピュータ 2: 2 番目の OracleAS Metadata Repository をインストールします。手順については、[第5.20項「OracleAS Metadata Repository の新規データベースへのインストール」](#)を参照してください。

インストーラによって OracleAS Metadata Repository を登録するように要求されたら、手順 1 で作成された Oracle Internet Directory の接続情報を入力します。

Portal and Wireless 中間層では、この 2 番目のメタデータ・リポジトリを製品メタデータに使用します。第 5.11 項「複数のメタデータ・リポジトリの使用」を参照してください。

3. コンピュータ 3: Portal and Wireless 中間層をインストールします。第 6.13 項「Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms のインストール」を参照してください。

インストーラによって Oracle Internet Directory の入力を要求されたら、手順 1 で作成された Oracle Internet Directory の接続情報を入力します。この Oracle Internet Directory には、手順 1 と 2 でインストールした OracleAS Metadata Repository の登録が含まれています。

インストーラによって OracleAS Metadata Repository の入力を要求されたら、手順 2 でインストールした OracleAS Metadata Repository を選択します。

4. コンピュータ 4: J2EE and Web Cache 中間層をインストールします。第 6.9 項「Database-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール (Oracle Identity Management Access を使用する場合)」を参照してください。

インストーラによって Oracle Internet Directory の入力を要求されたら、手順 1 で作成された Oracle Internet Directory の接続情報を入力します。

インストーラによって OracleAS Metadata Repository の入力を要求されたら、手順 1 でインストールした OracleAS Metadata Repository を選択します。

14.6 開発ライフ・サイクル・サポート・トポロジ

このトポロジは、テスト環境から、ステージング環境、本番環境へとアプリケーションを移行するのをサポートするトポロジの組合せです。

- テスト環境: アプリケーション開発者が独自の環境でアプリケーションをテストします。テスト環境の例については、次の項を参照してください。
 - 第 14.1 項「Java 開発者トポロジ」
 - 第 14.2 項「Portal and Wireless 開発者トポロジ」
 - 第 14.3 項「Forms、Reports および Discoverer 開発者トポロジ」
- ステージング環境: 本番環境に配置する前に、QA 担当者がすべてのアプリケーションをテストします。この環境では、第 14.5 項「OracleAS Portal 用に個別の OracleAS Metadata Repository が使用される部門別トポロジ」で説明したトポロジを使用できます。ステージング環境では、このトポロジのアプリケーションは、1 つの部門からだけではなく、すべての部門から実行します。
- 本番環境: アプリケーションは企業の内外のユーザーがいつでも使用できる状態にあります。

14.6.1 テストからステージングへのアプリケーションの移行

アプリケーションをテスト環境からステージング環境へ移行するには、それらをステージング環境の中間層に配置します。これらのアプリケーションは、ステージング環境の Oracle Identity Management および OracleAS Metadata Repository を使用します。

アプリケーションがデータベースのカスタム・データを使用する場合は、そのデータをステージング環境のデータベースに移行する必要があります。

14.6.2 ステージングから本番へのアプリケーションの移行

ステージング環境から本番環境へアプリケーションを移行するには、それらのアプリケーションを本番環境に配置し、アプリケーション固有のデータをステージング環境から本番環境へ移行します。

ステージング環境の中間層が別のインフラストラクチャを使用するように構成することもできます（つまり、その中間層が本番環境のインフラストラクチャを使用するようにします）。この機能を使用して、中間層（およびそのアプリケーション）をステージング環境から本番環境へ移行できます。

ただし、ステージング環境のデータベースに格納されているアプリケーション固有のデータは本番環境へ移行する必要があります。

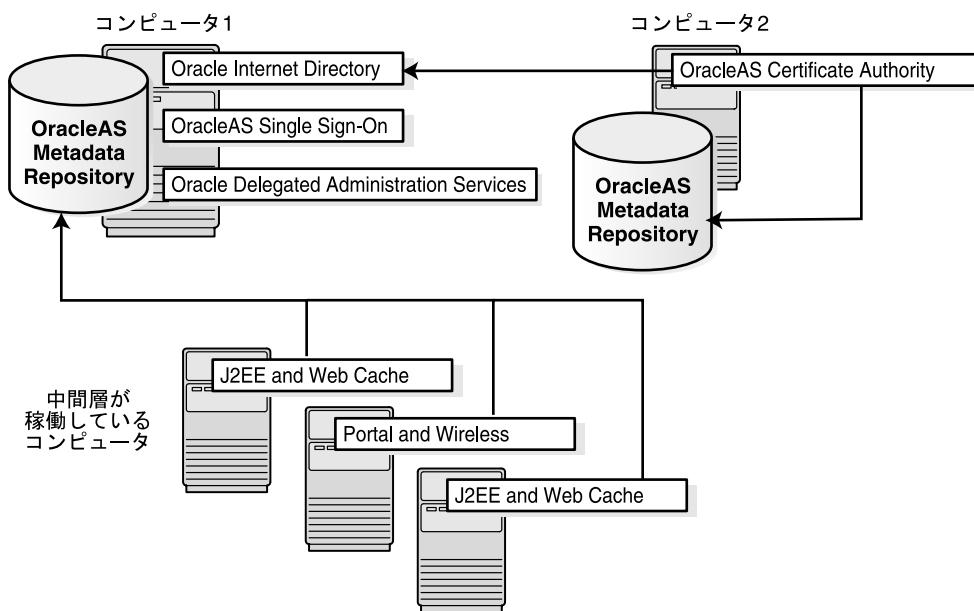
この方法は、本番環境にコンピュータを追加する必要がある場合に便利です。1つの手順で、すでに中間層がインストールされ、アプリケーションが配置されているコンピュータを追加します。

詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

14.7 OCA トポロジ

このトポロジでは、OCA に独自の OracleAS Metadata Repository があり、それらは他の OracleAS Infrastructure コンポーネントとは異なるコンピュータで実行されます（図 14-6）。他のコンポーネントでは、異なる OracleAS Metadata Repository が使用されます。

図 14-6 OCA のトポロジ



14.7.1 説明

他のインフラストラクチャ・コンポーネントと同じコンピュータに OCA をインストールすることができますが、OCA と独自の OracleAS Metadata Repository を別のコンピュータにインストールした方がセキュリティを強化できます。

- OracleAS Metadata Repository を他のコンピュータと共有しないことにより、偶発的または故意に OCA のセキュリティが侵害されないようにできます。
- OCA が実行されているコンピュータを安全な部屋に配置できます。

14.7.2 要件

第3章「要件」に、各コンピュータの要件を示しています。

14.7.3 インストールの手順

次の順番で各アイテムをインストールします。

1. コンピュータ 1: OCA 以外のインフラストラクチャ・コンポーネントをインストールします。手順については、[第 5.19 項「OracleAS Infrastructure のインストール」](#) を参照してください。

注意: OCA はコンピュータ 2 にインストールするため、「構成オプションの選択」画面で「OracleAS Certificate Authority (OCA)」を選択しないでください。

2. コンピュータ 2: OCA と 2 番目の OracleAS Metadata Repository をインストールします。詳細は、[第 5.24 項「OCA と OracleAS Metadata Repository のみのインストール」](#) を参照してください。

このインストール中に、コンピュータ 2 の OracleAS Metadata Repository を、コンピュータ 1 にインストールした Oracle Internet Directory に登録します。

3. 中間層をインストールします。それらの中間層が必ずコンピュータ 1 にインストールした OracleAS Metadata Repository を使用するようにします。中間層をインストールする手順については、次の項を参照してください。

- [第 6.9 項「Database-Based Farm Repository への J2EE and Web Cache のインストール \(Oracle Identity Management Access を使用する場合\)」](#)
- [第 6.13 項「Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms のインストール」](#)

15

インストール後の作業

この章の内容は次のとおりです。

- 第 15.1 項 「インストール後の Oracle Application Server インスタンスの状態」
- 第 15.2 項 「インストール後にコンピュータを再起動する場合」
- 第 15.3 項 「Oracle Application Server コンポーネントのパスワード」
- 第 15.4 項 「OracleAS ファイルベースのクラスタ化」
- 第 15.5 項 「OracleAS Metadata Repository のみのインストールに Application Server Control サービスは不要」
- 第 15.6 項 「サービスの依存関係」
- 第 15.7 項 「バックアップおよびリカバリ」
- 第 15.8 項 「SSL 対応」
- 第 15.9 項 「地域および言語オプションの設定および NLS_LANG パラメータ」
- 第 15.10 項 「インストール後のコンポーネントの構成」
- 第 15.11 項 「インストール後の作業を必要とするコンポーネント」
- 第 15.12 項 「次の作業」

15.1 インストール後の Oracle Application Server インスタンスの状態

インストール後、構成したコンポーネントが起動されます。

ブラウザに「ようこそ」ページおよび「Application Server Control」ページが表示されます。これらのページの URL は、インストーラの最後の画面に示されます。最後の画面の内容は、`ORACLE_HOME\install\setupinfo.txt` ファイルで確認できます。

Oracle Application Server の一部のコンポーネントは、Windows サービスとして実行されます。これらのコンポーネントは、「サービス」ダイアログ・ボックスで確認できます。「サービス」ダイアログ・ボックスを表示するには、次の手順を実行します。

Windows Server 2003 の場合：「スタート」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。

Oracle Application Server インスタンスを起動および停止するには、スクリプトまたは Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control を使用します。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

15.2 インストール後にコンピュータを再起動する場合

インストール後にコンピュータを再起動しても、再起動時にすべてのコンポーネントが起動されるわけではありません。サービスのみが自動的に開始されます。サービスを使用していないコンポーネント（OracleAS Portal、Oracle Internet Directory など）は、手動で起動しないかぎりは停止したままで。プロセスの起動方法の手順と起動順序については、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

サービスを正しく開始するには、サービスを構成する必要があります。詳細は、[第 15.6 項「サービスの依存関係」](#) を参照してください。

15.3 Oracle Application Server コンポーネントのパスワード

デフォルトでは、OracleAS Metadata Repository スキーマ・パスワードを除いて、Oracle Application Server コンポーネントのすべてのパスワードが Oracle Application Server インスタンス・パスワードと同じに設定されます。セキュリティ上の理由から、様々なコンポーネントのパスワードを異なる値に変更する必要があります。

インストールしたコンポーネントのパスワードを変更する方法の詳細は、Oracle Application Server ドキュメント・ライブラリの『Oracle Application Server 管理者ガイド』およびコンポーネントのマニュアルを参照してください。

15.4 OracleAS ファイルベースのクラスタ化

ファイルベース・リポジトリを使用して管理される OracleAS クラスタを設定する場合は、『Oracle Application Server 高可用性ガイド』に示す手順を実行する必要があります。

`dcmctl joinFarm` コマンドを実行すると、すべてのコンポーネントを停止させる `opmnctl stopall` が起動されるので注意してください。`dcmctl joinFarm` コマンドが完了した後で、`opmnctl startall` を実行して、コンポーネントを再起動する必要があります。

15.5 OracleAS Metadata Repository のみのインストールに Application Server Control サービスは不要

OracleAS Metadata Repository のみをインストールする場合、Application Server Control (`Oracle<OracleHomeName>ASControl`) サービスは必要ありません。ただし、スタートアップの種類が自動に設定されているサービスは、インストーラによってインストールおよび開始されます。インストール後にこのサービスを停止して、スタートアップの種類を手動に変更し、コンピュータを再起動するたびにサービスが自動的に開始されないようにする必要があります。

15.6 サービスの依存関係

この項の内容は、OracleAS Infrastructure と中間層を同じコンピュータにインストールした場合にのみ該当します。

Windows で、中間層の ProcessManager サービスが開始される前に、OracleAS Infrastructure の ProcessManager サービスが開始されていることを確認してください。Windows ではアルファベット順にサービスが開始されます。OracleAS Infrastructure の Oracle ホームの名前が、中間層の Oracle ホームの名前よりアルファベット順で後になる場合は、レジストリ・エディタを使用してサービスの依存関係を設定する必要があります。

1. 「スタート」→「ファイル名を指定して実行」を選択して `regedt32` と入力し、「OK」をクリックします。レジストリ・エディタが起動されます。

注意： この手順では、`regedit` ではなく `regedt32` を実行する必要があります。

2. レジストリ・エディタで「ローカルマシン上の HKEY_LOCAL_MACHINE」ウィンドウを選択し、「HKEY_LOCAL_MACHINE」→「SYSTEM」→「CurrentControlSet」→「Services」と移動して、中間層の ProcessManager サービスを検索します。サービスの名前は次のとおりです。
 - `OracleMiddleTierOracleHomeNameProcessManager`
3. 中間層の ProcessManager サービスに対して、次の手順を実行します。
 - a. 左フレームでサービスを選択します。
 - b. 「編集」→「値の追加」を選択します。「値の追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。
 - c. 「値の追加」ダイアログ・ボックスで、次の操作を実行します。
値の名前 : `DependOnService` と入力します。
データ型 : 「REG_MULTI_SZ」を選択します。
「OK」をクリックします。複数行文字列エディタが表示されます。
 - d. 複数行文字列エディタで、OracleAS Infrastructure の ProcessManager サービスの名前を入力します。
たとえば、OracleAS Infrastructure の Oracle ホーム名が「Infra」である場合、複数行文字列エディタで次の行を入力します。
`OracleInfraProcessManager`
 - e. 「OK」をクリックします。

詳細は、Microsoft 社の Web サイト (<http://www.microsoft.com>) のサポート技術情報 193888 「特定のサービスの読み込みを遅らせる方法」を参照してください。

15.7 バックアップおよびリカバリ

インストール後というのは、ファイルのバックアップを開始し、バックアップおよびリカバリの計画を立てるのによいタイミングです。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

15.8 SSL 対応

デフォルトでは、ほとんどのコンポーネントが SSL に対応するように構成されていません。SSL に対応させるには、『Oracle Application Server 管理者ガイド』の SSL に関する項を参照してください。

15.9 地域および言語オプションの設定および NLS_LANG パラメータ

アカウントの言語設定がシステムのデフォルト言語と一致することを確認します。NLS_LANG パラメータは、言語設定に基づいて Windows レジストリに自動的に定義されます。

インストール後、システムのデフォルト言語は変更しないでください。変更すると、NLS_LANG パラメータと言語設定で一貫性がなくなります。

15.10 インストール後のコンポーネントの構成

インストール時にコンポーネントを構成しなかった（つまり、「構成オプションの選択」画面でコンポーネントを選択しなかった）場合は、インストール後に一部のコンポーネントを構成できます。コンポーネントの中には、それを構成する前に依存関係を設定しておく必要があるものがあります。第 15.10.1 項「[mod_osso の構成 \(Oracle Delegated Administration Services に必要\)](#)」では、Oracle Delegated Administration Services を構成する前に行う必要がある mod_osso の構成方法について説明します。

15.10.1 mod_osso の構成 (Oracle Delegated Administration Services に必要)

インストール中に Oracle Delegated Administration Services を構成しなかった場合は、インストール後に Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control を使用してそれを構成できます。

Oracle Delegated Administration Services には OracleAS Single Sign-On および mod_osso が必要です。mod_osso は、Single Sign-On Server と通信する Oracle HTTP Server モジュールです。mod_osso が構成されていない場合は、それを構成してから、Oracle Delegated Administration Services を構成する必要があります。次の手順を実行します。

1. OracleAS Single Sign-On が Oracle Internet Directory に対して構成されていることを確認します。これらの 2 つのコンポーネントをインストーラからインストールして構成した場合は、この処理は済んでいます。
2. Oracle Delegated Administration Services を構成する ORACLE_HOME で mod_osso が構成されているかどうか確認します。

ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥conf¥httpd.conf ファイル内の次の行を調べます。ORACLE_HOME は、Oracle Delegated Administration Services を構成するディレクトリを指しています。

```
include "ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥conf¥mod_osso.conf"
```

その行が # で始まっている場合、その行はコメント・アウトされているため、mod_osso はこのインストールでは構成されていません。手順 3 を実行して mod_osso を構成します。

その行がコメント・アウトされていない場合、mod_osso は構成済です。先に進み、Application Server Control を使用して Oracle Delegated Administration Services を構成できます。手順 5 に進みます。

3. mod_osso を手動で構成するには、次の手順を実行します。
 - a. 環境変数 ORACLE_HOME に Oracle Delegated Administration Services が構成されるディレクトリのフルパスを設定します。
 - b. 環境変数 PATH に %ORACLE_HOME%¥lib が含まれるように設定します。

- c. 次のコマンド（すべてを1行で）を実行します。注意：-classpath パラメータでは、セミコロン（;）の後に空白文字を入力しないでください（<no spaces> で示します）。

```
prompt> %ORACLE_HOME%jdk\bin\java
        -classpath .;%ORACLE_HOME%\sso\lib\ossoreg.jar;<no spaces>
        %ORACLE_HOME%\lib\ojmisc.jar;<no spaces>
        %ORACLE_HOME%\lib\repository.jar;<no spaces>
        %ORACLE_HOME%\j2ee\home\jazn.jar;<no spaces>
        %ORACLE_HOME%\jdk\lib\dt.jar;<no spaces>
        %ORACLE_HOME%\jdk\lib\tools.jar;%ORACLE_HOME%\lib\infratool.jar
        oracle.ias.configtool.UseInfrastructure i
        -f %ORACLE_HOME%\config\infratool_mod_osso.properties
        -h OIDhost -p OIDport -u OIDadminName -w OIDclearTextPassword
        -o ORACLE_HOME -m ASinstanceName
        -infra infraGlobalDBname -mh host -sso true
        -sslp sslPort -sslf false
```

表 15-1 に、値を指定する必要があるパラメータを示します。

表 15-1 mod_osso を構成するためのパラメータ

パラメータ	説明
-h <i>OIDhost</i>	Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を指定します。この値は、ORACLE_HOME\config\ias.properties ファイルの OIDhost パラメータから判断できます。
-p <i>OIDport</i>	Oracle Internet Directory がリスニングしているポート番号を指定します。この値は、ORACLE_HOME\config\ias.properties ファイルの OIDport パラメータから判断できます。
-u <i>OIDadminName</i>	Oracle Internet Directory のログイン名を指定します。スーパーユーザー cn=orcladmin を使用します。
-w <i>OIDclearTextPassword</i>	Oracle Internet Directory ユーザーのパスワードを指定します。
-o <i>ORACLE_HOME</i>	OracleAS Infrastructure がインストールされたディレクトリへのフルパスを指定します。
-m <i>ASinstanceName</i>	mod_osso を構成する OracleAS Infrastructure インスタンスの名前を指定します。この値は、ORACLE_HOME\config\ias.properties ファイルの IASname パラメータから判断できます。
-infra <i>infraGlobalDBname</i>	OracleAS Metadata Repository データベースの名前を指定します。この値は、ORACLE_HOME\config\ias.properties ファイルの InfrastructureDBCommonName パラメータから判断できます。
-mh <i>host</i>	Oracle Delegated Administration Services を構成するコンピュータの完全なホスト名（ドメイン名を含む）を指定します。
-sslp <i>sslPort</i>	Oracle Internet Directory の SSL ポートを指定します。この値は、ORACLE_HOME\config\ias.properties ファイルの OIDsslport パラメータから判断できます。

4. OC4J および Oracle HTTP Server を再起動します。これには、opmnctl コマンドを使用します。

```
C:\> %ORACLE_HOME%\opmn\bin\opmnctl restartproc ias-component=OC4J
C:\> %ORACLE_HOME%\opmn\bin\opmnctl restartproc ias-component=HTTP_Server
```

5. mod_osso が構成されたら、Application Server Control を使用して Oracle Delegated Administration Services を構成できます。詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

15.11 インストール後の作業を必要とするコンポーネント

表 15-2 に示すコンポーネントのいずれかを使用する予定の場合は、インストール後（コンポーネントを使用する前）に、コンポーネントに固有のいくつかの手順を実行する必要があります。表 15-2 に、それらの手順が説明されているコンポーネントのマニュアルを示します。

表 15-2 インストール後に手順を実行する必要があるコンポーネント

コンポーネント	インストール後の手順が説明されているマニュアル
OracleAS Portal	『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』
OracleAS Wireless	『Oracle Application Server Wireless 管理者ガイド』
Oracle Ultra Search	『Oracle Ultra Search 管理者ガイド』
OracleBI Discoverer	分析用にリレーショナル・データを準備するには、ユーザーとロールを有効にし、セキュリティを設定します。詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。 注意：このガイドは、Oracle Business Intelligence Tools の CD に収録されています。 中間層のインストール後の作業の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』を参照してください。
OracleAS Reports Services	『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』
OracleAS Personalization	『Oracle Application Server Personalization 管理者ガイド』
OracleAS Certificate Authority	『Oracle Application Server Certificate Authority 管理者ガイド』

15.12 次の作業

Oracle Application Server をインストールした後で、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を読む必要があります。特に、「Oracle Application Server のインストール後に始めに行うこと」という章を読む必要があります。

また、Oracle Application Server のインストール後に Oracle Application Server 環境の完全なバックアップを行う必要があります。これにより、万一何か異常が発生した場合に作業環境をリストアできます。Oracle Application Server 環境の完全なバックアップの方法の詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Application Server 環境の完全なバックアップは、パッチセットのアップグレードが正常に行われた後や構成変更が正常に行われた後にも実行する必要があります。

A

OracleAS Developer Kits のインストール

OracleAS Developer Kits には、OracleAS Portal、OracleAS Wireless、XML および LDAP の各アプリケーションを開発するための API が用意されています。Developer Kits は、ステージング環境や本番環境ではなく、開発環境で使用します。OracleAS Developer Kits には完全な IDE（統合開発環境）は用意されていないので注意してください。IDE が必要な場合は、Oracle Developer Suite またはすべての Oracle Application Server エディションに含まれている Oracle JDeveloper をインストールできます。

OracleAS Developer Kits をインストールするには、次の手順を実行します。

表 A-1 OracleAS Developer Kits のインストール手順

画面	操作
1. --	インストーラを起動します。詳細は、 第 4.13 項「Oracle Universal Installer の起動」 を参照してください。
2. ようこそ	「次へ」をクリックします。
3. ファイルの場所の指定	名前: この Oracle ホームを識別する名前を入力します。これは、ディレクトリの名前ではありません。 例: OH_DEVKIT パス (「インストール先」の下): インストール先のディレクトリへのフルパスを入力します。これは Oracle ホームです。 (インストーラを実行している) ローカル・コンピュータのディレクトリを指定する必要があります。別のコンピュータに割り当てられているドライブには、インストールできません。 例: C:\oracle\OraDevKit 「次へ」をクリックします。
4. インストールする製品の選択	「 OracleAS Developer Kits 」を選択します。 追加の言語をインストールする必要がある場合は、「 製品の言語 」をクリックします。 詳細は、 第 4.6 項「追加の言語のインストール」 を参照してください。 「次へ」をクリックします。
5. ポート構成オプションの指定	コンポーネントにデフォルトのポートを使用する場合は、「 自動 」を選択します。 staticports.ini ファイルをすでに作成していて、デフォルトのポートを使用しない場合は、「 自動 」を選択し、指定されたフィールドで staticports.ini ファイルへのフルパスを入力します。 「次へ」をクリックします。

表 A-1 OracleAS Developer Kits のインストール手順（続き）

画面	操作
6. インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	<p>インスタンス名：このインスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字および_（アンダースコア）文字のみを使用できます。1つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。インスタンス名の詳細は、第 4.7 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」を参照してください。</p> <p>例 : devkits</p> <p>「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」：ias_admin ユーザーのパスワードを設定します。これはインスタンスの管理ユーザーです。パスワードの制限については、第 4.8 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」を参照してください。</p> <p>例 : welcome99</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. サマリー	選択した内容を確認し、「 インストール 」をクリックします。
8. インストール進捗状況	この画面には、インストールの進捗状況が表示されます。
9. Configuration Assistant	この画面には、Configuration Assistant の進捗状況が表示されます。Configuration Assistant によって、コンポーネントが構成されます。
10. インストールの終了	「 終了 」をクリックして、インストーラを終了します。

B

サイレント・インストールと 非対話型インストール

この付録では、Oracle Application Server をサイレント・モードでインストールする方法について説明します。内容は次のとおりです。

- 第 B.1 項「サイレント・インストール」
- 第 B.2 項「非対話型インストール」
- 第 B.3 項「インストール前」
- 第 B.4 項「サイレント・インストールおよび非対話型インストールに関する注意」
- 第 B.5 項「レスポンス・ファイルの作成」
- 第 B.6 項「インストールの開始」
- 第 B.7 項「インストール後」
- 第 B.8 項「サイレント・インストールおよび非対話型インストールでのセキュリティ上のヒント」
- 第 B.9 項「削除」

B.1 サイレント・インストール

サイレント・インストールでは画面表示やユーザーによる入力がないため、Oracle Application Server のインストールを監視する必要はありません。

Oracle Application Server のサイレント・インストールは、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを提供し、コマンドラインで `-silent` フラグを指定することによって実行します。このレスポンス・ファイルは、インストーラ・プロンプトにレスポンスする変数およびパラメータ値が含まれているテキスト・ファイルです。

Oracle Application Server を初めてインストールする場合は、開始する前にレジストリ・キーを作成する必要があります。レジストリ・キーの作成については、[第 B.3 項「インストール前」](#)を参照してください。

複数のコンピュータに同種のインストールが存在する場合は、Oracle Application Server のサイレント・インストールを使用してください。また、Oracle Application Server のインストールをリモートの位置からコマンドラインを使って行う場合は、サイレント・インストールを使用してください。

B.2 非対話型インストール

非対話型インストールでも、Oracle Application Server のインストールを自動化するためにレスポンス・ファイルが使用されます。非対話型インストールでは、画面表示が行われ、ユーザーが値を入力できます。

Oracle Application Server の非対話型インストールは、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを提供することによって実行しますが、コマンドラインで `-silent` フラグは指定しません。このレスポンス・ファイルは、インストーラ・プロンプトにレスポンスする変数およびパラメータ値が含まれているテキスト・ファイルです。レスポンスしていないインストーラ・プロンプトがある場合は、インストール中に情報を入力する必要があります。

Oracle Application Server を初めてインストールする場合は、開始する前にレジストリ・キーを作成する必要があります。レジストリ・キーの作成については、[第 B.3 項「インストール前」](#)を参照してください。

インストール時に特定の画面を監視する場合は、Oracle Application Server の非対話型インストールを使用します。

B.3 インストール前

コンピュータに Oracle Application Server をインストールしていない場合は、次のレジストリ・キーと値を作成する必要があります。

- HKEY_LOCAL_MACHINE / SOFTWARE / Oracle / inst_loc = *Inventory_Directory*

Inventory_Directory は、インストーラ・ファイルへのフルパスです。たとえば、次のようにになります。

C:\¥Program Files¥Oracle¥Inventory

B.4 サイレント・インストールおよび非対話型インストールに関する注意

この項では、サイレント・インストールまたは非対話型インストールを実行する場合の注意事項について説明します。

- [第 B.4.1 項「OracleAS Certificate Authority のインストール」](#)
- [第 B.4.2 項「中間層の拡張」](#)

B.4.1 OracleAS Certificate Authority のインストール

OCA をインストールする場合は、次のことに注意します。

- 既存の Oracle Internet Directory に OCA をインストールする場合は、Oracle Internet Directory に OracleAS Single Sign-On を構成する必要があります。構成しなかった場合、OCA Configuration Assistant は失敗します。
- 新規の Oracle Internet Directory とともに OCA をインストールする場合は、OracleAS Single Sign-On も構成する必要があります。構成しなかった場合、OCA Configuration Assistant は失敗します。

対話型モードでは、インストーラによって確認が行われ、要件が満たされていない場合は警告が表示されます。サイレント・モードまたは非対話型モードでは、インストーラによって警告は表示できません。

B.4.2 中間層の拡張

中間層を拡張する場合は、次のことに注意します。

- 拡張する中間層に関連付けられているすべてのプロセスを停止します。[第 6.14 項「中間層の拡張」](#) を参照してください。
- 新しいシェル・ウィンドウ（最初のインストールの完了後に起動されたシェル・ウィンドウ）で拡張インストールを開始します。

B.5 レスポンス・ファイルの作成

サイレント・インストールまたは非対話型インストールを行う前に、インストール固有の情報をレスポンス・ファイルに指定する必要があります。正しく構成されていないレスポンス・ファイルを使用してインストールを試行すると、インストーラは正常に実行されません。レスポンス・ファイルは、テキスト・エディタで作成または編集可能なテキスト・ファイルです。

B.5.1 テンプレートからのレスポンス・ファイルの作成

レスポンス・ファイルのテンプレートは、Oracle Application Server CD-ROM の Disk 1 の stage¥Response ディレクトリにあります。レスポンス・ファイルのテンプレートは、次のインストール・タイプに使用できます。

表 B-1 stage/Response ディレクトリ内のレスポンス・ファイルのテンプレート

インストール・タイプ	ファイル名
J2EE and Web Cache	oracle.iappserver.iapptop.J2EE.rsp
Portal and Wireless	oracle.iappserver.iapptop.Portals.rsp
Business Intelligence and Forms	oracle.iappserver.iapptop.Business.rsp
OracleAS Infrastructure: Oracle Identity Management および OracleAS Metadata Repository	oracle.iappserver.infrastructure.Infrastructure.rsp
OracleAS Infrastructure: Oracle Identity Management のみ	oracle.iappserver.infrastructure.Infrastructure_ID.rsp
OracleAS Infrastructure: OracleAS Metadata Repository のみ	oracle.iappserver.infrastructure.Infrastructure_Meta.rsp
OracleAS Developer Kits	oracle.iappserver.devcorner.DevKit.rsp

ファイル内のパラメータの記述については、テンプレート・ファイルを参照してください。

注意: ブール型パラメータには、true または false のどちらかを指定します。

B.5.2 インストーラの記録モードを使用したレスポンス・ファイルの作成

インストーラを記録モードで実行すると、後でレスポンス・ファイルとして使用可能なファイルに入力内容を保存できます。この機能は、異なるコンピュータで同じインストールを実行する必要がある場合に有効です。

インストーラを記録モードで実行するには、次の手順を実行します。

1. -record および -destinationFile パラメータを指定してインストーラを起動します。

```
E:> setup.exe -record -destinationFile newResponseFile
```

newResponseFile は、インストーラで作成するレスポンス・ファイルのフルパスに置き換えます。例: C:\myPortalResponse.rsp

2. インストーラの画面に値を入力します。これらの値は、インストーラによって、-destinationFile パラメータに指定されたファイルに書き込まれます。

「サマリー」画面に移動すると、インストーラによって、指定したファイルにすべての値が自動的に書き込まれます。この時点で、このコンピュータへのインストールを完了するか、またはインストールを実行せずに終了できます。

パスワードなどの保護情報はレスポンス・ファイルに書き込まれないため、レスポンス・ファイルは、使用する前に変更する必要があります。

すべてのインストールで、次のパラメータを変更します。

```
ACCEPT_LICENSE AGREEMENT=true
oracle.iappserver.instance:szl_InstanceInformation={"instancename", "instancepassword",
"instancepassword"}
PreReqConfigSelections=""
nValidationRepositoryHost=0
nValidationRepository=0
nValidationStartProcPortals=0
nValidationStartProcBusiness=0
nValidationClusterSupport=0
nValidationStartProcCore=0
nValidationClusterRepository=0
oracle.iappserver.instance:nValidationInstanceInfo=0
silent=true
```

中間層のインストールでは、次のパラメータを変更します。

```
oracle.iappserver.iapptop:startupProcesses=""
oracle.iappserver.iapptop:SHOW_IAS_COMPONENT_CONFIG_PAGE=false
oracle.iappserver.iapptop:n_ValidationPreReqConfigSelections=0
oracle.iappserver.iapptop:nValidationPortListSelect=0
oracle.iappserver.iapptop:nValidationOID2=0
oracle.iappserver.iapptop:nValidationInstanceInfo=0
oracle.iappserver.iapptop:nValidationOID=0
```

インフラストラクチャのインストールでは、次のパラメータを変更します。

```
oracle.iappserver.infrastructure:startupProcesses=""
oracle.iappserver.infrastructure:SHOW_IAS_COMPONENT_CONFIG_PAGE=false
oracle.iappserver.infrastructure:n_ValidationPreReqConfigSelections=0
oracle.iappserver.infrastructure:nValidationPortListSelect=0
oracle.iappserver.infrastructure:nValidationInstanceInfo=0
```

ファイル内のパラメータの記述については、生成されたレスポンス・ファイルを参照してください。

B.5.3 レスポンス・ファイルの例

次の項では、Oracle Application Server インストール・タイプのレスポンス・ファイルの例を示します。

- [第 B.5.3.1 項「スタンドアロンの J2EE and Web Cache のレスポンス・ファイルの例」](#)
- [第 B.5.3.2 項「OracleAS Infrastructure のレスポンス・ファイルの例」](#)
- [第 B.5.3.3 項「Portal and Wireless のレスポンス・ファイルの例」](#)

注意： この項で示す例の各 *parameter=value* の記述を参照し、環境に応じて *value* を編集してください。

B.5.3.1 スタンドアロンの J2EE and Web Cache のレスポンス・ファイルの例

次に、[第 6.8 項「インフラストラクチャなしでの J2EE and Web Cache のインストール](#)」で説明している J2EE and Web Cache のスタンドアロン・インスタンスのサイレント・インストール用のレスポンス・ファイルの例を示します。

CD-ROM をハード・ドライブにコピーしなかった場合、インストール時にインストーラによって CD-ROM の入替えを要求されます。要求が行われることなくインストールを実行するには、CD-ROM の内容をハード・ドライブにコピーし、LOCATION_FOR_DISK*n* パラメータを指定する必要があります。

```
RESPONSEFILE_VERSION=2.2.1.0.0
UNIX_GROUP_NAME=""
FROM_LOCATION="E:\Disk1\stage\products.xml"
FROM_LOCATION_CD_LABEL="Oracle Application Server 10G"
LOCATION_FOR_DISK2="C:\path\to\disk2\files"
LOCATION_FOR_DISK3="C:\path\to\disk3\files"
ORACLE_HOME="C:\oracle\ora_j2ee"
ORACLE_HOME_NAME="oracle_j2eehome_name"
TOLEVEL_COMPONENT={"oracle.iappserver.iaptop", "10.1.2.0.2"}
SHOW_SPLASH_SCREEN=false
SHOW_WELCOME_PAGE=false
SHOW_CUSTOM_TREE_PAGE=false
SHOW_COMPONENT_LOCATIONS_PAGE=false
SHOW_SUMMARY_PAGE=false
SHOW_INSTALL_PROGRESS_PAGE=false
SHOW_REQUIRED_CONFIG_TOOL_PAGE=false
SHOW_CONFIG_TOOL_PAGE=false
SHOW_RELEASE_NOTES=true
SHOW_END_SESSION_PAGE=false
SHOW_EXIT_CONFIRMATION=false
NEXT_SESSION=false
NEXT_SESSION_ON_FAIL=false
DEINSTALL_LIST={"oracle.iappserver.iaptop", "10.1.2.0.2"}
SHOW_DEINSTALL_CONFIRMATION=false
SHOW_DEINSTALL_PROGRESS=true
CLUSTER_NODES={}
ACCEPT_LICENSE AGREEMENT=true
SELECTED_LANGUAGES={"en"}
INSTALL_TYPE="J2EE and Web Cache"
oracle.iappserver.iaptop:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.iappserver.infrastructure:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.iappserver.devcorner:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.sysman.server:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.rdbms.sqlplus.isqlplus:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.options.ops.csscommon:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.networking.netca:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.options.ops.vipca:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.iappserver.iaptop:szl_PortListSelect={"YES", "C:\oracle\mystaticports.ini"}
oracle.iappserver.instance:szl_InstanceInformation={"j2ee", "password1", "password1"}
```

```
oracle.iappserver.iapptop:szOIDwithSSLStatus="N"
oracle.iappserver.iapptop:startupProcesses=""
n_farmRepository=0
mailServerName=""
b_securityAccess=false
b_reportsStartup=false
b_formsStartup=false
b_configureWireless=false
b_configurePortal=false
b_configurePersonalization=false
b_configureJazn=true
b_configureDisco=false
b_configureCalypso=true
b_clusterSupport=false
b_FileBasedClustering=false
b_FarmRepository=false
oracle.iappserver.iapptop:SHOW_IAS_COMPONENT_CONFIG_PAGE=false
PreReqConfigSelections=""
oracle.iappserver.iapptop:OIDport="389"
oracle.iappserver.iapptop:OIDhost=""
nValidationRepositoryHost=0
oracle.iappserver.iapptop:n_ValidationPreReqConfigSelections=0
nValidationStartProcPortals=0
nValidationStartProcBusiness=0
nValidationStartProcCore=0
oracle.iappserver.iapptop:nValidationPortListSelect=1
oracle.iappserver.iapptop:nValidationOID2=0
oracle.iappserver.iappdialog:nValidationOID2=0
oracle.iappserver.instance:nValidationInstanceInfo=0
oracle.java.jdbc.thin12:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_java_jdbc_thin12"
oracle.options.ano.ssl.own:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_options_ano_ssl_own"
oracle.networking.netclt:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle.networking.netclt"
oracle.java.javavm.javatools:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle.java.javavm.javatools"
oracle.xml.xsql:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_xml_xsql"
oracle.options.ano.ssl:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_options_ano_ssl"
oracle.networking.netmgr:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle.networking.netmgr"
oracle.networking.netca:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_networking_netca"
oracle.assistants.acf:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle.assistants.acf"
oracle.assistants.emcf:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle.assistants.emcf"
oracle.install.instcommon:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_install_instcommon"
oracle.rdbms.sqlplus:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle.rdbms.sqlplus"
oracle.rsf.net_rsf:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_rsf_net_rsf"
oracle.rdbms.aqapi:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_rdbms_aqapi"
oracle.rdbms.xml.xsu:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_rdbms_xml_xsua"
oracle.java.jdbc.thin14:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_java_jdbc_thin14"
oracle.java.jdbc.oci_common:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_java_jdbc_oci_common"
oracle.rsf.ssl_rsf:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_rsf_ssl_rsf"
oracle.rsf.nlsrtl_rsf:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_rsf_nlsrtl_rsf"
oracle.rsf.nlsrtl_rsf.lbuilder:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_rsf_nlsrtl_rsf"
oracle.rsf.ssl_rsf.sslrsf_ic:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_rsf_ssl_rsf_sslrsf_ic"
oracle.xml.classgen.java:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_xml_classgen_java"
oracle.options.ops.opscf:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle.options.ops.opscf"
oracle.java.jdbc.jdbc_common:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_java_jdbc_jdbc_common"
oracle.rsf.plsql_rsf:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_rsf_plsql_rsf"
oracle.rsf.precomp_rsf:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_rsf_precomp_rsf"
oracle.rsf.slax_rsf:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_rsf_slax_rsf"
oracle.rsf.agent_rsf:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_rsf_agent_rsf_agent_rsf_cmp"
oracle.rsf.clntsh_rsf:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_rsf_clntsh_rsf_clntsh_rsf_cmp"
oracle.rsf.rdbms_rsf:PROD_HOME="C:\oracle\ora_j2ee\oracle_rsf_rdbms_rsf"
```

```

oracle.rsf.has_rsf:PROD_HOME="C:\oracle\ora_12ee\oracle_rsf_has_rsf"
oracle.java.jdbc.thin14.thin14_ic:PROD_HOME="C:\oracle\ora_12ee\oracle_java_jdbc_thin14"
oracle.rsf.rdbms_rsf.rdbms_rsf_ic:PROD_HOME="C:\oracle\ora_12ee\oracle_rsf_rdbms_rsf_rdbms_rsf_ic"
oracle.rsf.xdk_rsf:PROD_HOME="C:\oracle\ora_12ee\oracle_rsf_rdbms_rsf"
oracle.rsf.dbjava_rsf:PROD_HOME="C:\oracle\ora_12ee\oracle_rsf_dbjava_rsf"
oracle.rsf.ops_rsf:PROD_HOME="C:\oracle\ora_12ee\oracle_rsf_net_rsf"
oracle.xml.parser.java:PROD_HOME="C:\oracle\ora_12ee\oracle.xml.parser.java"
oracle.java.jdbc.oci_common.ocicommon_ic:PROD_HOME="C:\oracle\ora_12ee\oracle.jdbc.oci_common_ocicommon_ic"
oracle.rsf.oracore_rsf:PROD_HOME="C:\oracle\ora_12ee\oracle_rsf_oracore_rsf"
silent=true

```

B.5.3.2 OracleAS Infrastructure のレスポンス・ファイルの例

次に、[第 5.19 項「OracleAS Infrastructure のインストール」](#)で説明している OracleAS Infrastructure のサイレント・インストール用のレスポンス・ファイルの例を示します。

CD-ROM をハード・ドライブにコピーしなかった場合、インストール時にインストーラによって CD-ROM の入替えを要求されます。要求が行われることなくインストールを実行するには、CD-ROM の内容をハード・ドライブにコピーし、LOCATION_FOR_DISKn パラメータを指定する必要があります。

```

RESPONSEFILE_VERSION=2.2.1.0.0
UNIX_GROUP_NAME=" "
FROM_LOCATION="E:\Disk1\stage\products.xml"
FROM_LOCATION_CD_LABEL="Oracle Application Server 10G"
LOCATION_FOR_DISK2="C:\path\to\disk2\files"
LOCATION_FOR_DISK3="C:\path\to\disk3\files"
ORACLE_HOME="C:\oracle\ora_infra"
ORACLE_HOME_NAME="oracle_infrahome_name"
TOLEVEL_COMPONENT={"oracle.iappserver.infrastructure", "10.1.2.0.2"}
SHOW_SPLASH_SCREEN=false
SHOW_WELCOME_PAGE=false
SHOW_COMPONENT_LOCATIONS_PAGE=false
SHOW_SUMMARY_PAGE=false
SHOW_INSTALL_PROGRESS_PAGE=false
SHOW_REQUIRED_CONFIG_TOOL_PAGE=false
SHOW_CONFIG_TOOL_PAGE=false
SHOW_RELEASE_NOTES=true
SHOW_END_SESSION_PAGE=false
SHOW_EXIT_CONFIRMATION=false
NEXT_SESSION=false
NEXT_SESSION_ON_FAIL=false
DEINSTALL_LIST={"oracle.iappserver.infrastructure", "10.1.2.0.2"}
SHOW_DEINSTALL_CONFIRMATION=false
SHOW_DEINSTALL_PROGRESS=true
CLUSTER_NODES={}
ACCEPT_LICENSE AGREEMENT=true
oracle.iappserver.iapptop:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.iappserver.infrastructure:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.iappserver.devcorner:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.rdbms.sqlplus.isqlplus:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.sysman.server:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.networking.netca:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.iappserver.infrastructure:szl_PortListSelect={"YES", "C:\oracle\mystaticports.ini"}
oracle.iappserver.instance:szl_InstanceInformation={"instancename", "instancepassword", "instancepassword"}
oracle.iappserver.iappdialog:szOIDwithSSLStatus="N"
oracle.iappserver.infrastructure:startupProcesses=""
oracle.iappserver.infrastructure:SHOW_IAS_COMPONENT_CONFIG_PAGE=false
PreReqConfigSelections=""

```

```
oracle.iappserver.iappdialog:OIDport="389"
oracle.iappserver.iappdialog:OIDhost="OIDhostname.us.oracle.com"
nValidationRepositoryHost=0
nValidationRepository=0
oracle.iappserver.infrastructure:n_ValidationPreReqConfigSelections=0
nValidationStartProcPortals=0
nValidationStartProcBusiness=0
nValidationClusterSupport=0
nValidationStartProcCore=0
oracle.iappserver.infrastructure:nValidationPortListSelect=0
nValidationClusterRepository=0
oracle.iappdialog:nValidationOID2=0
oracle.iappserver.infrastructure:nValidationInstanceInfo=0
oracle.iappserver.instance:nValidationInstanceInfo=0
oracle.iappserver.iappdialog:nValidationOID=0
SELECTED_LANGUAGES={"en"}
INSTALL_TYPE="Identity Management and Metadata Repository"
szInstallUpgradeChoice=""
nValidationCompConfigInfraMeta=-1
b_launchOHS=true
b_launchEMCA=false
b_infrastructureUpgrade=false
b_configureSSO=true
b_configureOID=true
b_configureOCA=false
b_configureMETA=true
b_configureHA=false
b_configureDIP=true
b_configureDAS=true
b_configureCentralMon=false
HAhostName="HAhostname.us.oracle.com"
nValidationCompConfigInfraID=0
nValidationCompConfigInfra=2
infra902ORACLE_HOME=""
oracle.options.partitioning:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle.options.partitioning"
oracle.cartridges.spatial:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle.cartridges.spatial"
oracle.options.olap:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$olap"
oracle.rdbms:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle_rdbms"
oracle.rdbms.xml:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle_rdbms_xml"
oracle.sysman.console.db:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle_sysman_console_db"
oracle.java.jdbc.thin12:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle_java_jdbc_thin12"
oracle.isearch.server:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle_rsf_ldap_rsf_cmp"
oracle.cartridges.context:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle.cartridges.context"
oracle.java.javavm:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle_java_javavm_cmp"
oracle.utilities.util:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle_utilities_util"
oracle.options.ano.ssl.own:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle_options_ano_ssl_own"
oracle.rdbms.csmig:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle_rdbms_expimp"
oracle.networking.netsrv:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle.networking.netsrv"
oracle.assistants.dbma:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle.assistants.dbma"
oracle.sysman.repository:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$sysman"
oracle.assistants.dbca:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle.assistants.dbca"
oracle.java.javavm.javatools:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_
infra\$oracle.java.javavm.javatools"
oracle.rdbms.aqapi:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle_rdbms_aqapi"
oracle.rdbms.plsql:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle_rdbms_plsql"
oracle.rdbms.sqlldr:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle_rdbms_sqlldr"
oracle.rdbms.dbv:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle_rdbms_dbv"
oracle.rdbms.expimp:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle_rdbms_expimp"
oracle.rdbms.oci:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle_rdbms_oci"
oracle.p2k.ott:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle.p2k.ott"
oracle.cartridges.locator:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle_cartridges_locator"
oracle.rdbms.hs_odbc:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle_rdbms_hs_odbc"
oracle.rdbms.hs_common:PROD_HOME="C:\$oracle\$ora_infra\$oracle_rdbms_hs_common"
```

```

oracle.rdbms.sqlplus:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle.rdbms.sqlplus"
oracle.options.ano.nis:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_options_ano_nis"
oracle.networking.netclt:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle.networking.netclt"
oracle.rdbms.rman:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rdbms_rman"
oracle.utilities.util_common:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_utilities_util_common"
oracle.options.ops.csscommon:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rsf_rdbms_rsf"
oracle.networking.netmgr:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle.networking.netmgr"
oracle.networking.netca:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_networking_netca"
oracle.assistants.acf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle.assistants.acf"
oracle.assistants.emcf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle.assistants.emcf"
oracle.install.instcommon:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_install_instcommon"
oracle.isearch.client:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra"
oracle.isearch.is_common:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra"
oracle.options.ano.ssl:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_options_ano_ssl"
oracle.xml.xsql:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_xml_xsql"
oracle.rsf.net_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rsf_net_rsf"
oracle.rdbms.xml.xsu:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rdbms_xml_xsu"
oracle.java.jdbc.thin14:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_java_jdbc_thin14"
oracle.java.jdbc_common:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_java_jdbc_jdbc_common"
oracle.rsf.ssl_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rsf_ssl_rsf"
oracle.rdbms.dbscripts:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rdbms_dbscripts"
oracle.rdbms.nid:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rdbms_nid"
oracle.rsf.oracore_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rsf_oracore_rsf"
oracle.rsf.nlsrtl_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rsf_nlsrtl_rsf"
oracle.rsf.plsql_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rsf_plsql_rsf"
oracle.xml.classgen.java:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_xml_classgen_java"
oracle.p2k.precomp_common:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle.p2k.precomp_common"
oracle.rsf.slax_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rsf_slax_rsf"
oracle.rsf.ssl_rsf.sslrsf_ic:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle.rsf.ssl_rsf.sslrsf_ic"
oracle.rsf.precomp_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rsf_precomp_rsf"
oracle.rdbms.gateway.plsql:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rdbms"
oracle.java.javavm.containers:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_java_j2ee_core"
oracle.rdbms.ovm:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle.rdbms.ovm"
oracle.cartridges.ordimg:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle.cartridges.ordimg"
oracle.cartridges.ordcom:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle.cartridges.ordcom"
oracle.options.intermedia.imcom:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_options_intermedia_imcom"
oracle.rsf.agent_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rsf_agent_rsf_agent_rsf_cmp"
oracle.options.intermedia.annotator:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_prod"
oracle.options.intermedia.imclient.imcisosamples:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_interMedia_imclient"
oracle.options.intermedia.jai:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_options_intermedia_jai"
oracle.rsf.nlsrtl_rsf.lbuilder:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rsf_nlsrtl_rsf"
oracle.rsf.clntsh_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rsf_clntsh_rsf_clntsh_rsf_cmp"
oracle.java.jdbc.thin14.thin14_ic:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_java_jdbc_thin14"
oracle.xml.transview:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_xml_transview"
oracle.xml.transx:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_xml_transx"
oracle.rdbms.advrep:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rdbms_advrep"
oracle.rsf.rdbms_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rsf_rdbms_rsf"
oracle.options.odm:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_odm"
oracle.options.ops.opscf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_options_ops_opscf"
oracle.rsf.xdk_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rsf_rdbms_rsf"
oracle.rsf.dbjava_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rsf_dbjava_rsf"
oracle.options.ano.sns.hybrid:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_options_ano_sns_hybrid"
oracle.rsf.sqlplus_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rsf_sqlplus_rsf"
oracle.rsf.has_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\Oracle_rsf_has_rsf"

```

```
oracle.rsf.ops_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\oracle_rsf_net_rsf"
oracle.options.olap.cwmLite:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra"
oracle.options.olap.api:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\oracle_options.olap_api"
oracle.xml.parser.java:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\oracle.xml.parser.java"
oracle.cartridges.context.knowbase:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\oracle_cartridges_context_knowbase"
oracle.rsf.hybrid:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\oracle_rsf_hybrid"
oracle.java.jdbc.oci_common:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\oracle_java_jdbc_oci_common"
oracle.java.jdbc.oci_common.ocicommon_ic:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_infra\oracle.java.jdbc.oci_common.ocicommon_ic"
szl_OCARespositoryUserInput={}
szl_LDAP_LoadBalancerInfo={}
szl_HighAvailabilityHost={}
szlDCMClusterName={}
szRegisterMetaStatus=""
s_ssoPort="7777"
s_masterOIDport="389"
s_masterOIDhost="OIDhostname.us.oracle.com"
s_masterOIDSSLPort=""
n_replication=0
n_cluster=0
b_RegisterRepositoryOID_IMMR=false
b_RegisterRepositoryOID=false
b_HTTPListenSSLMode=true
b_HTTPLBSSLMode=true
SSOselectStatus=""
SSOport="7777"
SSOhost="SSOhostname.us.oracle.com"
SSLPort=""
SSLOnly="False"
OIDpassword="infra12345"
OIDadminName="cn=orcladmin"
OIDrealm=""
DefaultLocation=""
DBhostPort={"DBhostname.us.oracle.com:1521"}
DBUsername=""
DBServiceName=""
DBSID=""
DBPort=""
DBPassword="infra12345"
DBHostname=""
szIdentityAdminContext=="dc=us,dc=oracle,dc=com"
nValidationSelectOCARespository=0
nValidationDCMClusterName=0
s_HTTPLBPort=""
s_HTTPLBHostname=""
n_multiBoxOrVirtualAddressingInstall=0
s_HTTPListenPort=""
nValidationODSPassword=0
nValidationOID_replication=0
nValidationRegisterMeta=0
nValidationOIDlogin_replication=0
nValidationHA=0
nValidationLDAPLoadBalancer=0
nValidationSpecifyRepository=0
silent=true
sl_keylengthInfo={}
s_dnSelection=""
s_dnOrgval=""
s_dnOUval=""
s_dnCntval=""
s_dnCNval=""
s_dncustom=""
```

```

sl_dlgASMCfgSelectableDisks={}
s_superAdminPasswdType="S"
s_dlgStarterDBConfigCreateStarterDB="Create a starter database"
s_dlgASMCfgRedundancyValue="2 (Norm)"
s_dlgASMCfgRedundancySelected="Normal"
s_dlgASMCfgNewDisksSize="0"
s_dlgASMCfgExistingFreeSpace="0"
s_dlgASMCfgDiskGroupName="DATA"
s_dlgASMCfgDiskDiscoveryString=""
s_dlgASMCfgAdditionalSpaceNeeded=" MB"
s_dbRetChar="West European WE8MSWIN1252"
sl_dlgASMDskGrpSelectedGroup={}
s_dlgStarterDBConfigOptionSelected="General Purpose"
s_DataorASMret=""
s_rawDeviceMapFileLocation=""
sl_dlgASMCfgDiskSelections={}
s_dbSid="orcl"
s_globalDBName="orcl.domain.com"
s_mountPoint="C:\oracle\oradata"
s_silentInstallFlag="1"
n_numentriesSelection=0
n_crypto=0
b_userpwdEncryption=true
b_dbinstance_exist=false
s_existingSID=""
s_nameForOPERGrp=" "
s_nameForDBAGrp=" "
s_group=" "
b_createDBRet=true

```

B.5.3.3 Portal and Wireless のレスポンス・ファイルの例

次に、[第 6.13 項「Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms のインストール」](#)で説明している Portal and Wireless のサイレント・インストール用のレスポンス・ファイルの例を示します。

CD-ROM をハード・ドライブにコピーしなかった場合、インストール時にインストーラによって CD-ROM の入替えを要求されます。要求が行われることなくインストールを実行するには、CD-ROM の内容をハード・ドライブにコピーし、LOCATION_FOR_DISK*n* パラメータを指定する必要があります。

```

RESPONSEFILE_VERSION=2.2.1.0.0
UNIX_GROUP_NAME=" "
FROM_LOCATION="E:\Disk1\stage\products.xml"
FROM_LOCATION_CD_LABEL="Oracle Application Server 10G"
LOCATION_FOR_DISK2="C:\path\to\disk2\files"
LOCATION_FOR_DISK3="C:\path\to\disk3\files"
ORACLE_HOME="C:\oracle\ora_portal"
ORACLE_HOME_NAME="oracle_home_name"
TOPLEVEL_COMPONENT={"oracle.iappserver.iapptop","10.1.2.0.2"}
SHOW_SPLASH_SCREEN=false
SHOW_WELCOME_PAGE=false
SHOW_CUSTOM_TREE_PAGE=false
SHOW_COMPONENT_LOCATIONS_PAGE=false
SHOW_SUMMARY_PAGE=false
SHOW_INSTALL_PROGRESS_PAGE=false
SHOW_REQUIRED_CONFIG_TOOL_PAGE=false
SHOW_CONFIG_TOOL_PAGE=false
SHOW_RELEASE_NOTES=true
SHOW_END_SESSION_PAGE=false
SHOW_EXIT_CONFIRMATION=false
NEXT_SESSION=false
NEXT_SESSION_ON_FAIL=false
DEINSTALL_LIST={"oracle.iappserver.iapptop","10.1.2.0.2"}

```

```
SHOW_DEINSTALL_CONFIRMATION=false
SHOW_DEINSTALL_PROGRESS=true
CLUSTER_NODES={}
ACCEPT_LICENSE AGREEMENT=true
SELECTED_LANGUAGES={"en"}
INSTALL_TYPE="Portal and Wireless"
oracle.iappserver.iapptop:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.iappserver.infrastructure:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.iappserver.devcorner:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.sysman.server:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.rdbms.sqlplus.isqlplus:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.options.ops.csscommon:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.networking.netca:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.options.ops.vipca:OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={}
oracle.iappserver.iapptop:szl_
RepositoryUserInput={"hostname.domain:1521:orcl:orcl.domain"}
oracle.iappserver.iapptop:szl_PortListSelect={"NO",""}
oracle.iappserver.instance:szl_InstanceInformation={"instancename", "instancepassword",
"instancepassword"}
szl_ClusterRepository={}
szlSpecifyRepositoryID={}
oracle.iappserver.iapptop:szlSpecifyOIDLogin={"orcladmin", "password", "realm"}
oracle.iappserver.iapptop:szOIDwithSSLStatus="N"
oracle.iappserver.iapptop:startupProcesses=""
n_farmRepository=0
mailServerName=""
b_securityAccess=true
b_reportsStartup=false
b_formsStartup=false
b_configureWireless=false
b_configurePortal=true
b_configurePersonalization=false
b_configureJazn=true
b_configureDisco=false
b_configureCalypso=true
b_clusterSupport=false
b_FileBasedClustering=false
b_FarmRepository=false
oracle.iappserver.iapptop:SHOW_IAS_COMPONENT_CONFIG_PAGE=false
PreReqConfigSelections=""
oracle.iappserver.iapptop:OIDport="389"
oracle.iappserver.iapptop:OIDhost="oidhost.us.oracle.com"
nValidationRepositoryHost=0
oracle.iapptop:n_ValidationPreReqConfigSelections=0
nValidationStartProcPortals=2
nValidationStartProcBusiness=0
nValidationStartProcCore=0
oracle.iapptop:nValidationPortListSelect=1
oracle.iapptop:nValidationOID2=0
oracle.iappdialog:nValidationOID2=0
oracle.iappserver.instance:nValidationInstanceInfo=0
oracle.java.jdbc.thin12:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_java_jdbc_thin12"
oracle.options.ano.ssl.own:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_options_ano_ssl_own"
oracle.utilities.util:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_utilities_util"
oracle.rdbms.csmig:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rdbms_expimp"
oracle.rdbms.plsql:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rdbms_plsql"
oracle.networking.netclt:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle.networking.netclt"
oracle.java.javavm.javatools:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_
portal\oracle.java.javavm.javatools"
oracle.rdbms.sqlldr:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rdbms_sqlldr"
oracle.xml.xsql:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_xml_xsql"
oracle.options.ano.ssl:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_options_ano_ssl"
oracle.networking.netmgr:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle.networking.netmgr"
```

```

oracle.rdbms.expimp:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rdbms_expimp"
oracle.networking.netca:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_networking_netca"
oracle.rdbms.rman:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rdbms_rman"
oracle.utilities.util_common:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_utilities_util_common"
oracle.assistants.acf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle.assistants.acf"
oracle.assistants.emcf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle.assistants.emcf"
oracle.install.instcommon:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_install_instcommon"
oracle.rdbms.sqlplus:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rdbms_sqlplus"
oracle.rsf.net_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rsf_net_rsf"
oracle.rdbms.aqapi:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rdbms_aqapi"
oracle.rdbms.xml.xsu:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rdbms_xml_xsu"
oracle.java.jdbc.thin14:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_java_jdbc_thin14"
oracle.java.jdbc.oci_common:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_java_jdbc_oci_common"
oracle.rsf.ssl_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rsf_ssl_rsf"
oracle.rdbms.dbscripts:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rdbms_dbscripts"
oracle.rdbms.nid:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rdbms_nid"
oracle.rsf.nlsrtl_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rsf_nlsrtl_rsf"
oracle.rsf.nlsrtl_rsf.lbuilder:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rsf_nlsrtl_rsf"
oracle.rsf.ssl_rsf.sslrsf_ic:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle.rsf.ssl_rsf.sslrsf_ic"
oracle.xml.classgen.java:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_xml_classgen_java"
oracle.options.ops.opscf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle.options.ops.opscf"
oracle.java.jdbc.jdbc_common:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_java_jdbc_jdbc_common"
oracle.rsf.plsql_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rsf_plsql_rsf"
oracle.rsf.precomp_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rsf_precomp_rsf"
oracle.rsf.slax_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rsf_slax_rsf"
oracle.rsf.agent_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rsf_agent_rsf_agent_rsf_cmp"
oracle.rsf.clnsh_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rsf_clnsh_rsf_clnsh_rsf_cmp"
oracle.rsf.rdbms_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rsf_rdbms_rsf"
oracle.rsf.has_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rsf_has_rsf"
oracle.java.jdbc.thin14.thin14_ic:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_java_jdbc_thin14"
oracle.rsf.rdbms_rsf.rdbms_rsf_ic:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rsf_rdbms_rsf_rdbms_rsf_ic"
oracle.rsf.xdk_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rsf_rdbms_rsf"
oracle.rsf.dbjava_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rsf_dbjava_rsf"
oracle.rsf.ops_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rsf_net_rsf"
oracle.isearch.client:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal"
oracle.isearch.is_common:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal"
oracle.xml.parser.java:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle.xml.parser.java"
oracle.java.jdbc.oci_common.ocicommon_ic:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_java_jdbc_ocicommon_ic"
oracle.rsf.oracore_rsf:PROD_HOME="C:\Oracle\ora_portal\oracle_rsf_oracore_rsf"
silent=true
s_groupid="nobody"
s_group="get_group_error"

```

注意： OracleAS Infrastructure の *ORACLE_HOME\install\portlist.ini* および *ORACLE_HOME\config\ias.properties* の各ファイルは、ポート割当てを示します。

B.6 インストールの開始

インストーラがレスポンス・ファイルを使用するには、使用するレスポンス・ファイルの場所をインストーラの起動時にパラメータとして指定します。

非対話型インストールを実行するには、次のように入力します。

```
E:> setup.exe -responseFile absolute_path_and_filename
```

サイレント・インストールを実行するには、パラメータ `-silent` を次のように使用します。

```
E:> setup.exe -silent -responseFile absolute_path_and_filename
```

B.7 インストール後

非対話型インストールおよびサイレント・インストールの成功または失敗は、`installActions.log` ファイルに記録されます。また、サイレント・インストールでは `silentInstall.log` ファイルが作成されます。ログ・ファイルは、`C:\Program Files\Oracle\Inventory\oui_inventory\Logs` ディレクトリに作成されます。

インストールが成功すると、`silentInstall.log` ファイルに次の行が記録されます。

```
The installation of OracleAS <Installation Type> was successful.
```

`installActions.log` ファイルには、Oracle Application Server の各インストール・タイプの情報が記録されます。

関連項目： [付録 G 「Configuration Assistant」](#)

注意： Application Server Control Configuration Assistant と DCM Repository Backup Assistant の成功メッセージは、Oracle Application Server を初めてインストールしたときに表示されます。

B.8 サイレント・インストールおよび非対話型インストールでのセキュリティ上のヒント

レスポンス・ファイルには、インストール・パスワード情報が含まれています。このパスワードの情報は、クリアテキストです。

レスポンス・ファイル内のパスワードに関するセキュリティ上の問題を最小にするには、次のガイドラインに従ってください。

- サイレント・インストールまたは非対話型インストールを実行しているオペレーティング・システム・ユーザーのみが読み取ることができるよう、レスポンス・ファイルに権限を設定します。
- 可能な場合は、サイレント・インストールまたは非対話型インストールの完了後、システムからレスポンス・ファイルを削除します。

OracleAS Metadata Repository をサイレント・モードまたは非対話型モードでインストールすると、インストーラによって次のログ・ファイルが作成されます。

- `ORACLE_HOME\admin\ORACLE_SID\create\ORACLE_SID.log`
- `ORACLE_HOME\cfgtoollogs\ORACLE_SID.log`

`ORACLE_SID` は、データベース SID の値です。

これらのログ・ファイルには、データベース・パスワード情報が含まれています。可能な場合、これらのファイルは、内容を確認した後、システムから削除してください。これらのログ・ファイルは、OracleAS Metadata Repository の操作には必要ありません。

B.9 削除

インストールに使用したレスポンス・ファイルに、サイレント・モードによる削除のパラメータを追加すると、サイレント・モードを使用して Oracle Application Server を削除できます。

インストール用のレスポンス・ファイルに次のパラメータを追加します。

```
REMOVE_HOMES={"<ORACLE_HOME to be removed>"}
```

たとえば、次のようにになります。

```
REMOVE_HOME="C:\oracle\ora_12ee"
```

注意： [付録F「削除および再インストール」](#)に示す削除手順に従う必要があります。重要な手順の1つに、サイレント・モードによる削除コマンドを実行する前に deconfig ツールを実行する手順があります。サイレント・モードによる削除コマンドは、インストーラを対話モードで実行してインスタンスを削除する手順のかわりにのみ実行できます。

サイレント・モードを使用した削除を実行するには、コマンドの入力時に、パラメータ -deinstall を次のように使用します。

```
E:\> setup.exe -silent -deinstall -responseFile absolute_path_and_filename
```


C

デフォルトのポート番号

デフォルトでは、インストーラはデフォルトのポート番号のセットからコンポーネントにポート番号を割り当てます。この付録には、それらのポート番号のリストが含まれています。

別のポート番号のセットを使用する場合は、使用するポート番号を含めた staticports.ini というファイルを作成する必要があります。詳細は、[第 3.4.4 項「カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）](#) を参照してください。

C.1 デフォルトのポート番号の割当て方法

インストーラは、次の方法を使用して、デフォルトのポート番号を各コンポーネントに割り当てます。

1. インストーラは、デフォルトのポート番号が使用中であるかどうかを確認します。使用中でなければ、それをコンポーネントに割り当てます。
2. デフォルトのポート番号が Oracle 製品または実行中のアプリケーションによってすでに使用されている場合は、ポート番号の範囲内で最も小さな番号が試されます。使用できる番号が見つかるまで、その範囲内のポート番号が試されます。

C.2 デフォルトのポート番号

表 C-1 に、コンポーネントに使用するデフォルトのポート番号を示します。この表の「staticports.ini での名前」列は、staticports.ini ファイルに表示されるときのコンポーネント名を示しています。これを使用して、デフォルトのポート番号を上書きできます。詳細は、[第 3.4.4 項「カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）](#) を参照してください。

表 C-1 デフォルトのポート番号と範囲（コンポーネント別）

コンポーネント	デフォルトのポート	ポート番号の範囲	staticports.ini での名前
Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN)			
Oracle 通知サーバー・リクエスト・ポート	6003	6003 - 6099	Oracle Notification Server Request port
Oracle 通知サーバー・ローカル・ポート	6100	6100 - 6199	Oracle Notification Server Local port
Oracle 通知サーバー・リモート・ポート	6200	6200 - 6299	Oracle Notification Server Remote port
Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)			
OC4J AJP	3301	3301 - 3400	staticports.ini では設定不可
OC4J RMI	3201	3201 - 3300	staticports.ini では設定不可
JMS	3701	3701 - 3800	staticports.ini では設定不可
IOP	3401	3401 - 3500	staticports.ini では設定不可
IIOPS1	3501	3501 - 3600	staticports.ini では設定不可
IIOPS2	3601	3601 - 3700	staticports.ini では設定不可
OracleBI Discoverer			
OracleBI Discoverer	--	--	Oracle HTTP Server と同じポートを使用
OracleAS Forms Services			
OracleAS Forms Services	--	--	Oracle HTTP Server と同じポートを使用
Oracle HTTP Server			
Oracle HTTP Server リスナー (OracleAS Web Cache を構成済でない)	中間層 : 80 インフラストラクチャ : 7777	7777 - 7877	Oracle HTTP Server Listen port

表 C-1 デフォルトのポート番号と範囲（コンポーネント別）（続き）

コンポーネント	デフォルトのポート	ポート番号の範囲	staticports.ini での名前
Oracle HTTP Server リスナー (SSL 対応)	中間層 : 443 インフラストラクチャ : 4443	4443 - 4543	Oracle HTTP Server Listen (SSL) port
Oracle HTTP Server リスナー (SSL 非対応、 OracleAS Web Cache を構成済)	中間層 : 80 インフラストラクチャ : 7777	7777 - 7877	Oracle HTTP Server port
Oracle HTTP Server リスナー (SSL 対応、 OracleAS Web Cache を構成済)	中間層 : 443 インフラストラクチャ : 4443	4443 - 4543	Oracle HTTP Server SSL port
Java Object Cache	7000	7000 - 7099	Java Object Cache port
DCM Java Object Cache	7100	7100 - 7199	DCM Java Object Cache port
DCM Discovery	7100	7100 - 7199	DCM Discovery port
SOAP server	9998	9998 - 9999	staticports.ini では設定不可
ポート・トンネリング	7501	7501 - 7599	staticports.ini では設定不可
Oracle HTTP Server Diagnostic port	7200	7200 - 7299	Oracle HTTP Server Diagnostic port
OracleAS Portal			
OracleAS Portal	--	--	Oracle HTTP Server と同じポートを使用
OracleAS Single Sign-On			
OracleAS Single Sign-On	--	--	Oracle HTTP Server と同じポートを使用
OracleAS Reports Services			
SQL*Net (6i の下位互換の目的で維持)	14040	14040 - 14049	Reports Services SQL*Net port
Discovery Service	14021	14021 - 14030	Reports Services discoveryService port
ブリッジ	14011	14011 - 14020	Reports Services bridge port
OracleAS Reports Services Visigenics CORBA	14000	14000 - 14010	staticports.ini では設定不可
OracleAS Web Cache			
OracleAS Web Cache - HTTP リスナー	80	80; 7777 - 7877	Web Cache HTTP Listen port
OracleAS Web Cache - HTTP リスナー (SSL 対応)	8250	8250 - 8350	Web Cache HTTP Listen (SSL) port
OracleAS Web Cache 管理	9400	9400 - 9499	Web Cache Administration port
OracleAS Web Cache の無効化	9401	9400 - 9499	Web Cache Invalidation port
OracleAS Web Cache 統計	9402	9400 - 9499	Web Cache Statistics port
OracleAS Wireless			
OracleAS Wireless	--	--	Oracle HTTP Server と同じポートを使用
Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control			

表 C-1 デフォルトのポート番号と範囲（コンポーネント別）（続き）

コンポーネント	デフォルトのポート	ポート番号の範囲	staticports.ini での名前
Application Server Control	1156	1156; 1810 - 1829	Application Server Control port
Oracle 管理エージェント	1157	1157; 1830 - 1849	staticports.ini では設定不可
Application Server Control - RMI	1850	1850 - 1869	Application Server Control RMI port
Application Server Control - SSL 対応	1810	1810 - 1829	このポート番号は、インストール後（Application Server Control を SSL に対応するように設定するとき）に割り当てられます。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
Enterprise Manager コンソールの HTTP ポート (orcl)	5500		staticports.ini では設定不可
Enterprise Manager エージェントのポート (orcl)	1831		staticports.ini では設定不可
Log Loader	44000	44000 - 44099	Log Loader port
Oracle Internet Directory			
Oracle Internet Directory	389	13060 - 13129	Oracle Internet Directory port
Oracle Internet Directory - SSL 対応	636	13130 - 13199	Oracle Internet Directory (SSL) port
OracleAS Certificate Authority (OCA)			
Server Authentication Virtual Host	6600	6600 - 6619	Oracle Certificate Authority SSL Server Authentication port
Mutual Authentication Virtual Host	6601	6600 - 6619	Oracle Certificate Authority SSL Mutual Authentication port

D

ファイアウォール内で開くポート

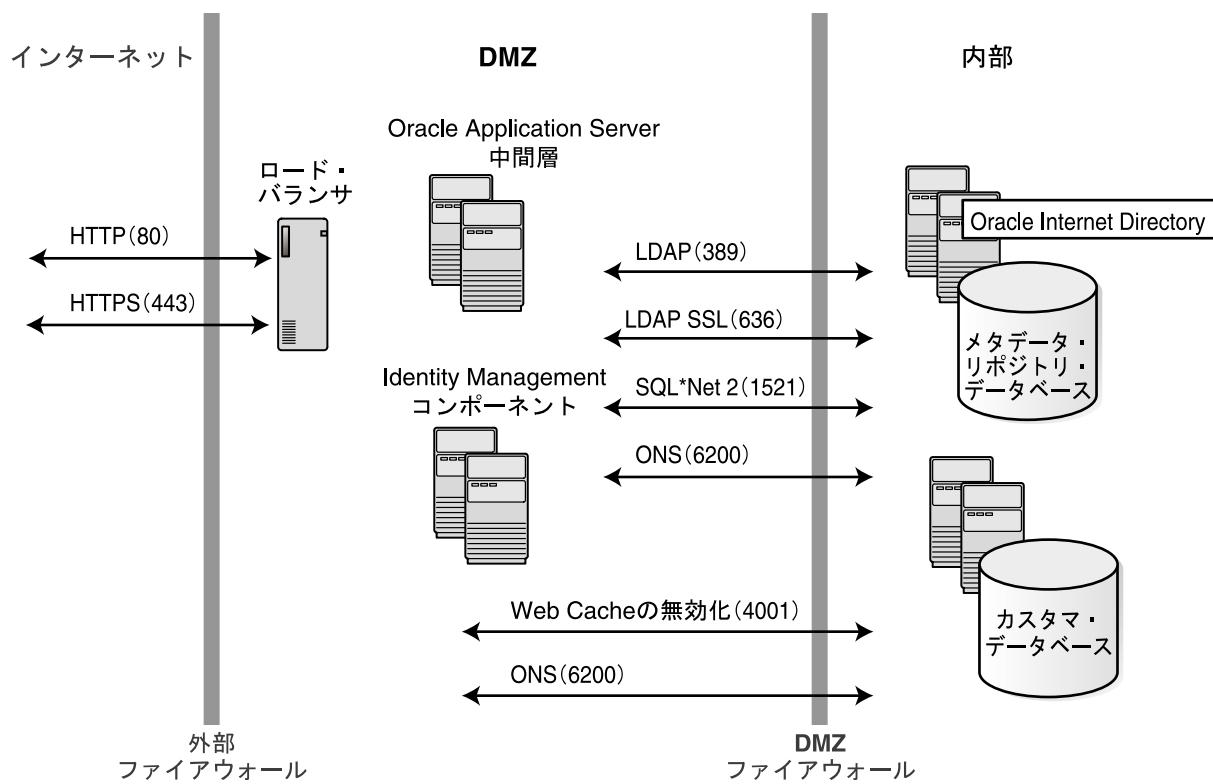
ファイアウォールの内側に Oracle Application Server をインストールする予定の場合は、インストール中に（実行時にも） ファイアウォール内で特定のポートを開く必要があります。

中間層または Oracle Identity Management のコンポーネントをインストールするときは、 Oracle Internet Directory、OracleAS Metadata Repository、Oracle 通知サーバーおよび OracleAS Web Cache（無効化ポート）にアクセスする必要があります。図 D-1 に示すように、これらのコンポーネントによって使用されるポートをファイアウォール内で開く必要があります。

- LDAP: ポート 389
- LDAP SSL: ポート 636
- SQL*Net 2: ポート 1521
- Oracle 通知サーバー: ポート 6200
- Web Cache の無効化: ポート 9401

注意: ここに示すポート番号は、各コンポーネントのデフォルトのポートです。使用している環境によっては、異なるポートが使用されることがあります。

図 D-1 ファイアウォールの内側に Oracle Application Server をインストールするときにファイアウォール内で開く必要があるポート



E

Java Access Bridge のインストール

この付録では、Java Access Bridge をインストールする方法について説明します。Java Access Bridge によって、Oracle コンポーネントでスクリーン・リーダーを使用できるようになります。
この付録では、次の項目について説明します。

- [第 E.1 項「概要」](#)
- [第 E.2 項「JRE 1.4.2 用の設定」](#)
- [第 E.3 項「インストール済の Oracle コンポーネント用の設定」](#)

E.1 概要

Java Access Bridge を使用すると、JAWS スクリーン・リーダーなどの補助技術によって、Windows プラットフォームで実行されている Java アプリケーションを読み取ることができます。補助技術によって、Java ベースのインターフェース（Oracle Universal Installer や Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control など）を読み取ることができます。

Oracle Application Server のインストール・メディアには、インストール時に Oracle Universal Installer で使用される Java Runtime Environment (JRE) 1.4.2 が含まれています。JRE によって、インストール時に Java Access Bridge を使用できるようになります。Oracle コンポーネントをインストールした後に Java Access Bridge をインストールおよび構成する方法については、[E-2 ページの第 E.3 項「インストール済の Oracle コンポーネント用の設定」](#)を参照してください。

E.2 JRE 1.4.2 用の設定

JRE 1.4.2 で Java Access Bridge を設定するには、Oracle インストール・メディアの次のバッチ・ファイルを実行します。

```
DRIVE LETTER:\install\access_setup.bat
```

バッチ・ファイルの実行後に、補助技術プログラムを再起動します。

E.3 インストール済の Oracle コンポーネント用の設定

この項では、Oracle コンポーネントのインストール後に Java Access Bridge for Windows をインストールおよび構成する方法について説明します。この項では、次の項目について説明します。

- [第 E.3.1 項「Java Access Bridge のインストール」](#)
- [第 E.3.2 項「Java Access Bridge を使用するための Oracle コンポーネントの構成」](#)

E.3.1 Java Access Bridge のインストール

Java Access Bridge をインストールするには、次の手順を実行します。

1. Oracle インストール・メディアで、AccessBridge ディレクトリに移動します。
 2. `accessbridge-1_0_4.zip` ファイルを選択し、Access Bridge をインストールするシステムに抽出します。たとえば、次のようになります。
- ```
C:\AccessBridge-1.0.4
```
3. [表 E-1](#) に示す Java Access Bridge ファイルを、Oracle コンポーネントで使用する JRE 1.4.2 ディレクトリにコピーします。Oracle コンポーネントで使用する JRE は、デフォルトで次の場所にインストールされます。
- ```
%ORACLE_HOME%\jre\1.4.2\lib\ext
```

[表 E-1](#) に、ハード・ドライブの Java Access Bridge の場所から Oracle コンポーネントで使用する JRE ディレクトリにコピーする必要があるファイルを示します。

表 E-1 JRE ディレクトリにコピーするファイル

コピーするファイル	コピー先のディレクトリ
<code>AccessBridge-1_0_4\installer\installerFiles\jaccess-1_4.jar</code>	<code>ORACLE_HOME\jre\1.4.2\lib\ext</code>
<code>AccessBridge-1_0_4\installer\installerFiles\access-bridge.jar</code>	<code>ORACLE_HOME\jre\1.4.2\lib\ext</code>
<code>AccessBridge-1_0_4\installer\installerFiles\JavaAccessBridge.dll</code>	<code>windows_directory\system32</code>

表 E-1 JRE ディレクトリにコピーするファイル（続き）

コピーするファイル	コピー先のディレクトリ
AccessBridge-1_0_4\installer\installerFiles\WindowsAccessBridge.dll	windows_directory\system32
AccessBridge-1_0_4\installer\installerFiles\JAWTAccessBridge.dll	windows_directory\system32
AccessBridge-1_0_4\installer\installerFiles\accessibility.properties	ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\jre\1.4.2\lib

4. jaccess-1_4.jar（現在は ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\jre\1.4.2\lib\ext にある）を jaccess.jar に変更します。
5. 正常にインストールが完了すると、次の場所にある Java Access Bridge のドキュメントにアクセスできます。

C:\AccessBridge-1.0.4\doc

E.3.2 Java Access Bridge を使用するための Oracle コンポーネントの構成

インストールの完了後に、Oracle コンポーネントを構成して Access Bridge を使用できます。使用するには、システム変数 ORACLE_OEM_CLASSPATH がインストールした Java Access Bridge ファイルを示すように設定する必要があります。

E.3.2.1 Windows Server 2003 用の構成

Oracle コンポーネントを構成して Windows Server 2003 で Access Bridge を使用するには、次の手順を実行します。

1. 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「システム」を選択し、「システムのプロパティ」を表示します。
2. 「詳細設定」タブを選択します。
3. 「環境変数」ボタンをクリックします。
4. システム環境変数リストの下の「新規」ボタンをクリックします。「新しいシステム変数」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 「変数名」フィールドで、ORACLE_OEM_CLASSPATH と入力します。
6. 「変数值」フィールドで、jaccess.jar および access-bridge.jar へのフルパスを入力します。

セミコロンを使用して 2 つのパスを区切ります。引用符または空白は使用しないでください。たとえば、JRE 1.4.2 がデフォルトの場所にインストールされている場合、設定は次のようにになります。

C:\oracle\product\10.1.0\Db_1\jre\1.4.2\lib\ext\jaccess.jar;C:\oracle\product\10.1.0\Db_1\jre\1.4.2\lib\ext\access-bridge.jar

7. 「OK」をクリックします。

F

削除および再インストール

この付録では、Oracle Application Server の削除および再インストールのプロセスについて説明します。

- 第 F.1 項 「新しいツール : Deconfig ツール」
- 第 F.2 項 「削除手順 : 概要」
- 第 F.3 項 「OracleAS Cold Failover Cluster インストールの削除」
- 第 F.4 項 「OracleAS Cluster (Identity Management) 内の OracleAS Single Sign-On インスタンスの削除」
- 第 F.5 項 「OracleAS Cluster (Identity Management) の削除」
- 第 F.6 項 「中間層の削除」
- 第 F.7 項 「OracleAS Infrastructure の削除」
- 第 F.8 項 「OracleAS Developer Kits の削除」
- 第 F.9 項 「ログ・ファイルで発生する害のないエラー」
- 第 F.10 項 「すべての Oracle 製品の手動での削除」
- 第 F.11 項 「再インストール」
- 第 F.12 項 「トラブルシューティング」

F.1 新しいツール : Deconfig ツール

今回のリリースでは、削除手順の一環として実行する必要がある Deconfig ツールと呼ばれる新しいツールがあります。このツールで、削除する Oracle Application Server インスタンスの OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory 内のエントリを削除します。

Deconfig ツールでは、パートナ・アプリケーションのエントリは削除されません。パートナ・アプリケーションのエントリを削除する必要がある場合は、[第 H.4.1 項「削除したパートナ URL が、OracleAS Single Sign-On の管理画面に残っている」](#) の手順に従います。

Deconfig ツールでは、ファームから OracleAS Cluster は削除されません。OracleAS Cluster を削除する場合は、インスタンスを削除した後に、dcmctl removecluster コマンドを実行する必要があります。詳細は、[第 F.5 項「OracleAS Cluster \(Identity Management\) の削除」](#) を参照してください。

Deconfig ツールを実行するには、ORACLE_HOME/bin/deconfig.pl スクリプトで Perl インタプリタを実行します。Oracle Application Server で用意されている Perl インタプリタを使用します。

```
C:> cd %ORACLE_HOME%\bin
C:> %ORACLE_HOME%\perl\5.8.3\bin\MSWin32-IA64-multi-thread\perl.exe deconfig.pl [-u
oid_user]
      [-w password] [-r realm] [-dbp sys_db_password]
```

パラメータを指定しないでツールを実行すると、必要な情報の入力を要求されます。

F.1.1 パラメータ

-u oid_user

Oracle Internet Directory ユーザーを指定します。

Oracle Internet Directory ユーザーは、単純なユーザー名または識別名 (DN) を使用して指定できます。たとえば、単純なユーザー名は jdoe@mycompany.com と指定できます。この名前は、DN の cn=jdoe, l=us, dc=mycompany, dc=com に対応します。

Oracle Internet Directory ユーザーには、削除する Oracle Application Server インスタンスに構成されているコンポーネントを削除するための権限が必要です。これらの権限は、コンポーネントをインストールおよび構成するための権限と同じです。

たとえば、Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On が実行されている OracleAS Infrastructure インスタンスを削除する場合は、これらのコンポーネントを構成するための権限をユーザーが持っていることを確認します。権限を付与するコンポーネントおよびグループのリストは、[第 7.3 項「コンポーネントの構成または削除に必要なグループ」](#) を参照してください。

Oracle Internet Directory のスーパーユーザーとしてツールを実行する場合は、orcladmin ではなく、cn=orcladmin を使用します。これらは、異なるユーザーです。これらのユーザーの詳細は、[第 7.1 項「Oracle Internet Directory のデフォルト・ユーザー」](#) を参照してください。

-w password

Oracle Internet Directory ユーザーのパスワードを指定します。

-r realm

ユーザーの認証を行うレルムを指定します。この値は、Oracle Internet Directory に複数のレルムが存在する場合にのみ必要です。

-dbp sys_db_password

データベース内の SYS ユーザーのパスワードを指定します。これは、Oracle Internet Directory で使用される OracleAS Metadata Repository データベースです。

この値は、Oracle Internet Directory が構成されている Oracle Identity Management のみのインスタンスを削除する場合にのみ必要です。

必要がない場合にこのパラメータを指定しても、このパスワードの値は使用されません。

-help または -h

-h または -help パラメータを指定して Deconfig ツールを実行し、ヘルプを表示することもできます。

```
C:\> %ORACLE_HOME%\perl\5.8.3\bin\MSWin32-IA64-multi-thread\perl.exe deconfig.pl -h
- or -
C:\> %ORACLE_HOME%\perl\5.8.3\bin\MSWin32-IA64-multi-thread\perl.exe deconfig.pl -help
```

F.1.2 Deconfig ツールで生成されるログ・ファイル

Deconfig ツールによって、ログが ORACLE_HOME\cfgtoollogs\DeconfigureWrapper.log ファイルに書き込まれます。

F.2 削除手順 : 概要

次の手順に従って、Oracle Application Server を削除します（詳細は、後述の項で説明します）。

1. 中間層インスタンスを削除します。
 - a. このインスタンスで Deconfig ツールを実行します。
 - b. インストーラを実行し、「**製品の削除**」をクリックします。
 - c. 残りのすべてのファイルをクリーンアップします。
2. OracleAS Infrastructure インスタンスを削除します。
 - a. このインスタンスで Deconfig ツールを実行します。
 - b. インストーラを実行し、「**製品の削除**」をクリックします。
 - c. 残りのすべてのファイルをクリーンアップします。

注意 :

- OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を使用して OracleAS Metadata Repository を既存のデータベースにインストールした後、OracleAS Metadata Repository を削除する場合は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の「削除」オプションを選択します。OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を使用して Oracle Internet Directory から登録を削除することもできます。
 - インフラストラクチャ・インスタンスを削除すると、そのインフラストラクチャに依存している中間層インスタンスがすべて機能しなくなります。中間層インスタンスを保持する場合は、別のインフラストラクチャのサービスを使用するようにそれらを構成できます。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
-

削除またはクリーンアップするアイテム

Oracle Application Server インスタンスを削除するには、表 F-1 に示すアイテムを削除する必要があります。削除手順は、この付録の後半で説明します。

表 F-1 削除するアイテム

クリーンアップするアイテム	使用するツール
Oracle ホーム・ディレクトリのファイル	インストーラ インストーラによってすべてのファイルが削除されない場合は、del コマンドを使用して残りのファイルを削除できます。
インベントリ・ディレクトリ内の削除済インスタンスのエントリ	インストーラ
ファーム・ページのインスタンス名	インストーラ
Windows レジストリ内の削除済インスタンスのエントリ	Deconfig ツール 9.0.4 の場合：これらのエントリは手動で削除する必要があります。詳細は、第 F.10 項「すべての Oracle 製品の手動での削除」を参照してください。 注意： この項で説明する手順を実行すると、すべての Oracle 製品のエントリが削除されるため、コンピュータが他の Oracle Application Server インスタンスまたは Oracle 製品を実行していない場合にのみ、エントリを削除してください。
Oracle Internet Directory 内の削除済インスタンスのエントリ	Deconfig ツール

インストーラでは、個々のコンポーネントをカスタムで削除することはできません。

F.3 OracleAS Cold Failover Cluster インストールの削除

OracleAS Cold Failover Cluster インストールを削除する場合は、次の手順を実行します。

1. Oracle Fail Safe グループ内のすべてのリソースをオフラインにします。
2. この付録で説明している手順を実行します。

リソースをオフラインにしなかった場合、Oracle Fail Safe によってリソースのフェイルオーバーが試行されるため、削除中にインストーラがハングします。

F.4 OracleAS Cluster (Identity Management) 内の OracleAS Single Sign-On インスタンスの削除

同じ Oracle Internet Directory に対してクラスタに複数の OracleAS Single Sign-On インスタンスがインストールされているとき、一部を実行したまま残りのインスタンスを削除する場合は、Deconfig ツールを実行する前に、次の手順を実行します。

削除する OracleAS Single Sign-On インスタンスが、Oracle Internet Directory に対してインストールされた最後のインスタンスの場合、この手順は実行できません。かわりに、第 F.7 項「OracleAS Infrastructure の削除」の手順に従います。

1. `ORACLE_HOME/deconfig/DeconfigWrapper.properties` ファイルを開いて編集します。
2. `SSO=` で始まる行を検索します。たとえば、次のような行が見つかります。

```
SSO=C:\OraHome_1\jdk\bin\java -jar C:\OraHome_1\sso\lib\ossoaca.jar deinstall
C:\OraHome_1 "%OID_USER%" "%OID_PASSWORD%"
```

3. 行の先頭にシャープ (#) 文字を付けて、この行をコメントアウトします。この例では、行は次のようにになります。

```
# SSO=C:\OraHome_1\jdk\bin\java -jar C:\OraHome_1\sso\lib\ossoca.jar deinstall
C:\OraHome_1 "%OID_USER%" "%OID_PASSWORD%"
```

ファイルを変更したら、[第 F.7 項「OracleAS Infrastructure の削除」](#) の手順を実行し、削除を行います。

F.5 OracleAS Cluster (Identity Management) の削除

OracleAS Cluster (Identity Management) を削除するには、次の手順を実行します。

1. 最後にインストールされたインスタンスを除いた、OracleAS Single Sign-On が含まれるすべてのインスタンスを削除します。削除を実行するには、[第 F.4 項「OracleAS Cluster \(Identity Management\) 内の OracleAS Single Sign-On インスタンスの削除」](#) の手順を使用します。
2. [第 F.7 項「OracleAS Infrastructure の削除」](#) の手順を使用して、最後の OracleAS Single Sign-On インスタンスを削除します。
3. 分散 OracleAS Cluster (Identity Management) を使用している場合は、[第 F.7 項「OracleAS Infrastructure の削除」](#) の手順を使用して、Oracle Internet Directory インスタンスを削除します。
4. すべてのインスタンスを削除したら、dcmctl removecluster コマンドを実行して、ファームから OracleAS Cluster (Identity Management) を削除します。

```
C:\> %ORACLE_HOME%\dcm\bin\dcmctl removecluster -cl cluster_name
```

F.6 中間層の削除

中間層を削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除するインスタンスをインストールしたオペレーティング・システム・ユーザーとしてログインします。
2. 削除するインスタンスに関連付けられているプロセスをすべて停止します。
プロセスの停止方法の詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
3. Deconfig ツールを実行します。

```
C:\> cd ORACLE_HOME\bin
C:\> %ORACLE_HOME%\perl\5.8.3\bin\MSWin32-IA64-multi-thread\perl.exe deconfig.pl
[parameters]
```

パラメータの詳細は、[第 F.1 項「新しいツール : Deconfig ツール」](#) を参照してください。

4. インストーラを起動します。
「スタート」→「プログラム」→「Oracle - OracleHomeName」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer」を選択します。
5. インストーラで次の手順に従います。
 - a. 「ようこそ」画面：「製品の削除」をクリックします。
 - b. 「インベントリ」画面：削除するインスタンスを選択して、「削除」をクリックします。
 - c. 「確認」画面：削除対象として選択したコンポーネントを確認します。「はい」をクリックして、続行します。
 - d. 「削除の進行状況」画面：削除の進行状況を監視します。
 - e. 削除が完了したら、インストーラを終了します。

6. コンピュータを再起動して、削除に関連する残りのプロセスをすべて停止します。

注意: 削除後に、Oracle<OracleHomeName>ProcessManager および Oracle<OracleHomeName>ASControl サービスが、「コントロールパネル」の「サービス」に表示される場合があります。コンピュータを再起動すると、これらのサービスは表示されなくなります。

7. 削除したインスタンスの Oracle ホーム・ディレクトリの残りのファイルをすべて削除します。

```
C:\> del %ORACLE_HOME%
```

8. インストーラでは、Windows レジストリから削除されないエントリもあります。すべてのレジストリ・エントリを削除する場合は、[第 F.10 項「すべての Oracle 製品の手動での削除」](#) を参照してください。

注意: [第 F.10 項「すべての Oracle 製品の手動での削除」](#) の手順を実行すると、すべての Oracle 製品のレジストリ・エントリがコンピュータから削除されます。コンピュータで他の Oracle Application Server インスタンスまたは Oracle 製品（Oracle データベース、Oracle Developer Suite など）を保持する場合は、この手順を実行しないでください。

9. Oracle Internet Directory 内の OracleAS Portal エントリは Deconfig ツールまたはインストーラでは削除されないことに注意してください。

F.7 OracleAS Infrastructure の削除

この項では、OracleAS Infrastructure インスタンスを削除する方法について説明します。内容は次のとおりです。

- [第 F.7.1 項「削除の順序」](#)
- [第 F.7.2 項「削除の手順」](#)

F.7.1 削除の順序

OracleAS Infrastructure インスタンスには、すべての OracleAS Infrastructure コンポーネントが含まれます。OracleAS Infrastructure の分散インストールを実行した場合は、コンポーネントのサブセットのみが含まれます。次に、一般的なシナリオおよび削除の順序を示します。

Oracle Identity Management と OracleAS Metadata Repository インスタンスが存在する場合、削除するインスタンスは 1 つのみです。

Oracle Identity Management と OracleAS Metadata Repository を別々にインストールした場合は、次の手順を実行します。

1. Oracle Identity Management インスタンスを削除します。
2. OracleAS Metadata Repository を削除します。

分散 Oracle Identity Management が存在する場合は、次の手順を実行します。

1. OracleAS Single Sign-On、Oracle Delegated Administration Services、Oracle Directory Integration and Provisioning または OCA（あるいはこれらのすべて）が実行されているインスタンスを削除します。
2. Oracle Internet Directory が実行されているインスタンスを削除します。
3. OracleAS Metadata Repository を削除します。

F.7.2 削除の手順

- 削除するインスタンスをインストールしたオペレーティング・システム・ユーザーとしてログインします。

- 削除するインスタンスに OCA が構成されている場合は、次のコマンドを実行します。

```
C:> %ORACLE_HOME%\ocal\bin\ocactl stop
C:> %ORACLE_HOME%\ocal\bin\cmdeinst ocaAdminPassword oidAdminPassword
```

ocaAdminPassword は、OCA 管理者のパスワードに置き換えます。

oidAdminPassword は、OCA をインストールした Oracle Internet Directory ユーザーのパスワードに置き換えます。ユーザーは、次のグループに属している必要があります。

- 信頼できるアプリケーションの管理者
 - iAS Admins
 - OCA が使用するメタデータ・リポジトリ用のリポジトリ所有者グループ
- ocactl stop コマンドで、OCA サービスを停止します。cmdeinst コマンドで、次の操作を行います。
- Oracle Internet Directory からの OCA エントリの削除
 - oca スキーマの表からのデータの削除
 - インストール時に OCA Configuration Assistant によって作成された OCA ファイルの削除

- 削除するインスタンスで Oracle Directory Integration and Provisioning が構成され、実行されている場合は、Oracle Directory Integration and Provisioning サーバーを停止します。

Oracle Internet Directory が実行されていることを確認します。

次のコマンドを実行して、Oracle Directory Integration and Provisioning を停止できます。

```
C:> cd %ORACLE_HOME%\bin
C:> oidctl connect=db_connect_string server=odisrv instance=1 stop
```

db_connect_string は、ORACLE_HOME\network\admin\tnsnames.ora ファイルに示されている TNS の別名です。

追加で起動した Oracle Directory Integration and Provisioning サーバーも停止する必要があります。詳細は、『Oracle Identity Management 統合ガイド』を参照してください。

- Oracle Internet Directory がレプリカとして構成されている場合は、このノードをディレクトリ・レプリケーション・グループ (DRG) から削除する必要があります。この手順については、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の第 25 章「Oracle Internet Directory レプリケーションの管理」を参照してください。

- Deconfig ツールを実行します。

```
C:> cd %ORACLE_HOME%\bin
C:> %ORACLE_HOME%\perl\5.8.3\bin\MSWin32-IA64-multi-thread\perl.exe deconfig.pl
[parameters]
```

パラメータの詳細は、[第 F.1 項「新しいツール : Deconfig ツール」](#) を参照してください。

注意： Oracle Internet Directory または OracleAS Single Sign-On のコンポーネントを含むインスタンスを削除する場合は、Oracle Internet Directory スーパーユーザー (cn=orcladmin) として Deconfig ツールを実行する必要があります。インスタンスに Oracle Internet Directory または OracleAS Single Sign-On が含まれていない場合は、[表 7-4](#) で説明したとおり、適切な権限を持つユーザーとしてツールを実行する必要があります。

6. インストーラを起動します。
「スタート」→「プログラム」→「Oracle - OracleHomeName」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer」を選択します。
 7. インストーラで次の手順に従います。
 - a. 「ようこそ」画面：「製品の削除」をクリックします。
 - b. 「インベントリ」画面：削除するインスタンスを選択して、「削除」をクリックします。
 - c. 「確認」画面：削除対象として選択したコンポーネントを確認します。「はい」をクリックして、続行します。
 - d. 「削除の進行状況」画面：削除の進行状況を監視します。
 - e. 削除が完了したら、インストーラを終了します。
 8. コンピュータを再起動して、削除に関連する残りのプロセスをすべて停止します。
 9. 削除したインスタンスの Oracle ホーム・ディレクトリの残りのファイルをすべて削除します。
- C:¥> del %ORACLE_HOME%
10. インストーラでは、Windows レジストリから削除されないエントリもあります。すべてのレジストリ・エントリを削除する場合は、[第 F.10 項「すべての Oracle 製品の手動での削除」](#) を参照してください。

注意： 第 F.10 項「すべての Oracle 製品の手動での削除」の手順を実行すると、すべての Oracle 製品のレジストリ・エントリがコンピュータから削除されます。コンピュータで他の Oracle Application Server インスタンスまたは Oracle 製品（Oracle データベース、Oracle Developer Suite など）を保持する場合は、この手順を実行しないでください。

F.8 OracleAS Developer Kits の削除

1. OracleAS Developer Kits をインストールしたオペレーティング・システム・ユーザーとしてログインします。
2. 削除するインスタンスに関連付けられているプロセスをすべて停止します。
プロセスの停止方法の詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
3. インストーラを起動します。
「スタート」→「プログラム」→「Oracle - OracleHomeName」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer」を選択します。
4. インストーラで次の手順に従います。
 - a. 「ようこそ」画面：「製品の削除」をクリックします。
 - b. 「インベントリ」画面：削除するインスタンスを選択して、「削除」をクリックします。
 - c. 「確認」画面：削除対象として選択したコンポーネントを確認します。「はい」をクリックして、続行します。
 - d. 「削除の進行状況」画面：削除の進行状況を監視します。
 - e. 削除が完了したら、インストーラを終了します。
5. コンピュータを再起動して、削除に関連する残りのプロセスをすべて停止します。

6. 削除したインスタンスの Oracle ホーム・ディレクトリの残りのファイルをすべて削除します。

```
C:\> del %ORACLE_HOME%
```

7. インストーラでは、Windows レジストリから削除されないエントリもあります。すべてのレジストリ・エントリを削除する場合は、[第 F.10 項「すべての Oracle 製品の手動での削除」](#) を参照してください。

注意: [第 F.10 項「すべての Oracle 製品の手動での削除」](#) の手順を実行する
と、すべての Oracle 製品のレジストリ・エントリがコンピュータから削除さ
れます。コンピュータで他の Oracle Application Server インスタンスまたは
Oracle 製品（Oracle データベース、Oracle Developer Suite など）を保持す
る場合は、この手順を実行しないでください。

F.9 ログ・ファイルで発生する害のないエラー

J2EE and Web Cache または Portal and Wireless のインスタンスを削除した後に
`oraInstalltimestamp.err` ファイルで発生する場合がある「ファイルを削除できません。」
および「Make ファイルが見つかりません。」エラーは、害のないエラー・メッセージです。

```
Ignoring Exception during de-install oracle.sysman.oiil.OoilDeinstallException:  
An error occurred during runtime. oracle.sysman.oiil.OoilDeinstallException:  
An error occurred during runtime.  
...  
Ignoring Exception during de-install oracle.sysman.oiil.OoilDeinstallException:  
Unable to delete file  
/home/j2ee/sysman/emd/targets.xml  
oracle.sysman.oiil.OoilDeinstallException: Unable to delete file  
/home/j2ee/sysman/emd/targets.xml  
at instantiateFileEx.deinstallAction(instantiateFileEx.java:935)  
...  
Ignoring Exception during de-install oracle.sysman.oiil.OoilDeinstallException:  
Unable to find make file:  
/home/j2ee/network/lib/ins_net_client.mk  
oracle.sysman.oiil.OoilDeinstallException: Unable to find make file:  
/home/j2ee/network/lib/ins_net_client.mk  
at ssmakeux.deinstallAction(ssmakeux.java:246)  
...
```

F.10 すべての Oracle 製品の手動での削除

すべての Oracle 製品をコンピュータから削除するには、次の手順を実行します。

注意: 次の手順を実行すると、すべての Oracle コンポーネント、サービ
スおよびレジストリ・エントリがコンピュータから削除されます。レジス
トリ・エントリの削除は、慎重に行ってください。間違ったエントリを削
除すると、コンピュータが停止する可能性があります。

1. レジストリ・キーを削除します。
 - a. 「スタート」→「ファイル名を指定して実行」を選択して `regedit` と入力し、「OK」を
クリックします。レジストリ・エディタが表示されます。
 - b. レジストリから次のフォルダを削除します。フォルダを削除するには、削除するフォ
ルダを選択して、メニューから「編集」→「削除」を選択します。

次のエントリでは、*OracleHomeName* は「ファイルの場所の指定」画面で入力した Oracle ホームの名前を示し、*Number* は Oracle ホームの名前に追加された任意の番号を示します。

- * HKEY_LOCAL_MACHINE / SOFTWARE / ORACLE
- * HKEY_LOCAL_MACHINE / SYSTEM / CurrentControlSet / Services / *OracleHomeName Number*
- * HKEY_LOCAL_MACHINE / SYSTEM / ControlSet X / Services / *OracleHomeName Number*
X は数字です (001 など)。
- * HKEY_CURRENT_USER / Software / *OracleHomeName Number*
- * HKEY_CLASSES_ROOT / ORACLE

c. レジストリ・エディタを終了します。

2. 環境変数を編集または削除します。

環境変数を表示するには、次の手順を実行します。

- デスクトップの「マイ コンピュータ」(Windows 2003 では、コンピュータ名の付いたアイコン) を右クリックし、「プロパティ」を選択します。「詳細設定」タブを選択して、「環境変数」をクリックします。

a. 次のシステム変数を削除します (存在する場合)。

- DISCO_JRE
- DISCO_VBROKER
- VBROKER_JAVAVM
- VBROKER_TAG -D
- WV_GATEWAY_CFG

b. システム変数 PATH を変更して、以前の Oracle ホームを参照するすべてのパスを削除します。

システム変数 PATH を選択します。「編集」ボタンをクリックして、「変数值」フィールドでパスを変更します。

たとえば、Oracle によって変更されたシステム変数 PATH は次のようにになります。

```
C:\OraHome\jdk\jre\bin\classic;C:\OraHome\jdk\jre\bin;C:\OraHome\bin;
C:\OraHome\jlib;C:\OraHome\jre\1.4.2\bin;C:\WINNT\system32;C:\WINNT;
C:\WINNT\System32\Wbem
```

Oracle ホームを参照するパスを削除すると、システム変数 PATH は次のようになります。

```
C:\WINNT\system32;C:\WINNT;C:\WINNT\System32\Wbem
```

3. 「OK」をクリックします。

4. Oracle のプログラム・フォルダを削除します。

「スタート」→「すべてのプログラム」を選択します (Windows 2003 の場合)。Oracle フォルダを右クリックし、「削除」を選択して Oracle フォルダを削除します。

5. Oracle ユーザーを削除します。

- a. 「マイ コンピュータ」(Windows 2003 では、コンピュータ名の付いたアイコン) を右クリックし、「管理」を選択します。
- b. 「ローカルユーザーとグループ」を展開します。
- c. 「ユーザー」を選択します。

- d. Oracle 製品をインストールしたユーザーを削除します。
 - e. デスクトップ上で「マイコンピュータ」をダブルクリックします。ハード・ドライブの「Documents and Settings」ディレクトリを検索し、Oracle ユーザー・エントリを削除します。
6. コンピュータを再起動します。
 7. ハード・ドライブから残りの Oracle ホーム・ディレクトリを削除します。
たとえば、次のようにになります。
`C:\Oracle*、C:\Program Files\Oracle*`
 8. コンピュータを再起動します。

F.11 再インストール

インストーラでは、すでに Oracle Application Server インスタンスが含まれているディレクトリに Oracle Application Server インスタンスを再インストールすることはできません。同じディレクトリに Oracle Application Server を再インストールするには、そのディレクトリを一度削除してから、インストールする必要があります。

F.12 トラブルシューティング

削除の一般的な問題については、[第 H.4 項「削除の問題および解決策」](#)を参照してください。

G

Configuration Assistant

この付録では、Configuration Assistant およびそのログ・ファイルの場所を示します。

- [第 G.1 項 「Configuration Assistant のトラブルシューティング」](#)
- [第 G.2 項 「Oracle Application Server Configuration Assistant の説明」](#)

G.1 Configuration Assistant のトラブルシューティング

この章の内容は次のとおりです。

- [第 G.1.1 項「一般的なヒント」](#)
- [第 G.1.2 項「Configuration Assistant の結果コード」](#)

G.1.1 一般的なヒント

Configuration Assistant が失敗した場合は、次の手順で障害を修正します。

1. [第 H.1 項「ログ・ファイル」](#) に示したインストール・ログ・ファイルを調べます。
2. 失敗した Configuration Assistant のログ・ファイルを調べます。[第 G.2 項「Oracle Application Server Configuration Assistant の説明」](#) に、Configuration Assistant のログ・ファイルを示します。エラーの原因となった問題を修正します。
3. 失敗した Configuration Assistant に依存関係がある場合は、その依存関係にあるものを再度実行します。依存関係にあるものが無事完了している場合でも、この作業は必ず行ってください。
4. インストーラで、失敗した Configuration Assistant を選択し、「再試行」をクリックして再度実行します。

「再試行」をクリックしても Configuration Assistant が再度失敗する場合は、
C:\temp\EM_CONFIG_INSTALL.lk ファイルを削除して、Configuration Assistant を再実行します。

「再試行」をクリックしても Configuration Assistant が再度失敗する場合は、
%ORACLE_HOME%\sysman\emd\targets.xml ファイルからコンポーネント・エントリを削除します。

5. オプションの Configuration Assistant が失敗した場合、その Configuration Assistant に依存関係がなければ、残りの Configuration Assistant を実行します。取り消されたオプションの Configuration Assistant の選択を解除し、次に示された Configuration Assistant を選択して、「再試行」をクリックします。
6. コマンドラインで Configuration Assistant の実行コマンドを実行しているときに、Configuration Assistant に障害が発生した場合は、Configuration Assistant の実行コマンドを再実行します。

ORACLE_HOME\bin ディレクトリにある configtoolcmds.pl という名前で生成されたスクリプト・ファイルを使用して、失敗した Configuration Assistant を再実行できます。 configtoolcmds.pl スクリプトは、インストーラを終了した後に生成されます。サイレント・インストールまたは非対話型インストールでは、Configuration Assistant が失敗した直後に、configtoolcmds.pl スクリプトが生成されます。

7. 「致命的エラーです。再インストールしてください。」というメッセージが表示された場合は、ログ・ファイルを分析して障害の原因を突き止めます。致命的エラーは、障害を修正して続行してもリカバリできません。現在のインストールを削除して、Oracle Application Server を再インストールする必要があります。次の説明に従って、リカバリ手順を実行してください。
 - a. [付録 F 「削除および再インストール」](#) に記載されている手順に従って、失敗したインストールを削除します。
 - b. 致命的エラーの原因を修正します。
 - c. Oracle Application Server を再インストールします。
 - d. 致命的エラーが再発する場合は、コンピュータ上の Oracle インストールをすべて削除する必要があります。手順については、[第 F.10 項「すべての Oracle 製品の手動での削除」](#) を参照してください。

G.1.2 Configuration Assistant の結果コード

Configuration Assistant が失敗すると、インストール画面の下半分にエラー・メッセージが表示され、Configuration Assistant によって次のログ・ファイルに結果コード（表 G-1）が書き込まれます。

C:\Program Files\Oracle\Inventory\logs\installActionstimestamp.log

表 G-1 Configuration Assistant の結果コード

結果コード	説明
0	Configuration Assistant の成功
1	Configuration Assistant の失敗
-1	Configuration Assistant の取消

G.2 Oracle Application Server Configuration Assistant の説明

表 G-2 に、Oracle Application Server Configuration Assistant をアルファベット順に示します。選択したインストール・タイプと構成オプションに応じて、インストールごとに使用する Configuration Assistant が異なります。

次のパスには、ディレクトリ・デリミタとして「/」が使用されていることに注意してください。これは、システムに応じて変更する必要がある場合があります。たとえば、Windows システムの場合は「\」を使用します。

表 G-2 Oracle Application Server Configuration Assistant

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
ADF Configuration Assistant	Oracle Application Development Framework Runtime Libraries を Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control と統合します。 この Configuration Assistant には、ORACLE_HOME/jlib/emConfigInstall.jar ファイルが必要です。	ORACLE_HOME/oraInventory/logs/installActionstimestamp.log
Application Server Control Configuration Assistant	Oracle 管理エージェントと Application Server Control を起動し、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control を介してアプリケーションを配置します。	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolstimestamp.log
Database Configuration Assistant	OracleAS Infrastructure の OracleAS Metadata Repository を構成します。	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolstimestamp.log
Database Migration Assistant	古いバージョンのインフラストラクチャ・データベースを現行バージョンのインフラストラクチャ・データベースに移行します。 この移行アシスタントを実行する前に、データベースが起動され、実行されていることを確認します。	ORACLE_HOMEassistants/dbma/logs
Database-managed OracleAS Cluster Assistant	選択したデータベースに対してクラスタの構成を有効にします。	ORACLE_HOME/config/infratool_dcm_repository.log ORACLE_HOME/cfgtoollogs/infratool_dcm_repository.log
DCM Repository Backup Assistant	DCM リポジトリをバックアップできます。	ORACLE_HOME/dcm/logs

表 G-2 Oracle Application Server Configuration Assistant (続き)

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
Delegated Administration Service Configuration Assistant	Oracle Delegated Administration Services の URL を Oracle Internet Directory 内に設定し、必要なアクセス制御権限を DAS エンティティに追加します。 この Configuration Assistant を実行する前に、Infrastructure Instance Configuration Assistant が正常に実行されたことを確認します。	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/dasca.log
Directory Integration Platform Configuration Assistant	Oracle Internet Directory を使用して構成されるときに、ORACLE_HOME/cfgtoollogs/dipca.log ディレクトリ統合サーバーを登録して起動します。 この Configuration Assistant を実行する前に、Oracle Internet Directory が適切に構成されていることを確認します。	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/dipca.log ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtooltimestamp.log
Discoverer Configuration Assistant	次のタスクを実行します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ discoconfig5.properties ファイルの内容を読み取ります。 ■ エントリを targets.xml ファイルに追加します。 ■ プロバイダをいくつかのパラメータとともに追加します。 ■ エントリを opmn.xml に追加します。 ■ OPMN を再ロードします。 ■ Discoverer セッションを登録します。 	ORACLE_HOME/oraInventory/logs/installActionstimestamp.log ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtooltimestamp.log
File-Based Farm Repository Configuration Assistant	Oracle Application Server コンポーネントのファイルベース・リポジトリを構成します。	ORACLE_HOME/config/infratool_filebased_repository.log ORACLE_HOME/cfgtoollogs/infratool_filebased_repository.log
Forms Configuration Assistant	OracleAS Forms Services サーバーを構成し、OracleAS Forms Services を Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control に統合します。エントリを targets.xml ファイルに追加します。 この Configuration Assistant を実行する前に、OracleAS Infrastructure が起動され、実行されていることを確認します。	ORACLE_HOME/forms90/config/formsConfig.log
HTTP Server Configuration Assistant	Oracle HTTP Server を構成し、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control に登録して、エントリを ORACLE_HOME/sysman/emd/targets.xml ファイルに追加します。	ORACLE_HOME/Apache/Apache/logs ORACLE_HOME/Apache/Apache/httpd.log ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtooltimestamp.log
Infrastructure Database Registration Assistant	Oracle Internet Directory に OracleAS Metadata Repository を登録します。	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/infratool_ldaporacfg.log
Infrastructure Instance Configuration Assistant	ORACLE_HOME/config/ias.properties ファイルを更新し、そのインスタンスを Oracle Internet Directory に登録して、Oracle Internet Directory の証明書を持つ ldap.ora ファイルを ORACLE_HOME/network/admin ファイルに作成します。 この Configuration Assistant を実行する前に、環境変数 PATH に ORACLE_HOME/lib ディレクトリが含まれていることを確認します。	ORACLE_HOME/config/infratool_instance_jazn.log ORACLE_HOME/cfgtoollogs/infratool_instance_jazn.log

表 G-2 Oracle Application Server Configuration Assistant (続き)

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
Infrastructure mod_osso Configuration Assistant	<p>mod_osso を登録して Oracle HTTP Server に接続し、ユーザー認証のために OracleAS Single Sign-On と統合します。</p> <p>この登録によって、OracleAS Infrastructure とともにインストールされた Oracle HTTP Server は、OracleAS Single Sign-On のパートナ・アプリケーションとして機能します。Oracle HTTP Server のもとで実行されるアプリケーションは、その URL を mod_osso に登録して保護できます。URL がリクエストされると、mod_osso は OracleAS Single Sign-On を使用してユーザーを認証し、その URL にアクセスできるようにします。</p>	ORACLE_HOME/config/infratool_mod_osso.log ORACLE_HOME/cfgtoollogs/infratool_mod_osso.log
Infrastructure Schema Configuration Assistant	<p>Infrastructure スキーマを Oracle Internet Directory に登録します。</p> <p>この Configuration Assistant を実行する前に、次のことを確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 環境変数 PATH に ORACLE_HOME\$lib ディレクトリが含まれていること ■ Internet Directory Configuration Assistant および Database Configuration Assistant が正常に実行されたこと 	ORACLE_HOME/config/schemaload.log ORACLE_HOME/cfgtoollogs/schemaload.log
Infrastructure Upgrade Instance Configuration Assistant	<p>SSO スキーマに対する ACL エントリを削除します。</p> <p>この Configuration Assistant を実行する前に、環境変数 PATH に ORACLE_HOME\$lib ディレクトリが含まれていることを確認します。</p>	ORACLE_HOME/config/infratool_infra_upgrade.log
Internet Directory Configuration Assistant	<p>Oracle Internet Directory を起動し、LDAP スキーマをロードして Oracle Identity Management レルムを設定します。</p> <p>Configuration Assistant を実行する前に、データベースが正常に作成されたこと、リスナーが起動され、実行されていること、および tnsnames.ora ファイルが構成されていることを確認します。</p>	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/oidca.log
Java Security Configuration Assistant	JAAS セキュリティのデフォルトのパスワードを変更し、新しいパスワードの設定または再割当てを行います。	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/jaznca.log
OC4J Configuration Assistant	<p>OC4J と Application Server Control を統合します。次の手順を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ エントリを targets.xml ファイルに追加します。 ■ エントリを iasadmin.properties ファイルに追加します。 <p>この Configuration Assistant には、deploy.ini ファイルが必要です。</p>	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolstimestamp.log
OC4J Instance Configuration Assistant	配置された Oracle Application Server アプリケーション用の OC4J インスタンスを構成します。	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolstimestamp.log
OPMN Configuration Assistant	OPMN と OPMN が管理するプロセスを起動します。	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolstimestamp.log ORACLE_HOME/cfgtoollogs/ipm.log ORACLE_HOME/cfgtoollogs/ons.log

表 G-2 Oracle Application Server Configuration Assistant (続き)

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
OPMN Configuration Assistant - DAS インスタンスの起動	OPMN を介して Oracle Delegated Administration Services インスタンスを起動します。	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolstimestamp.log ORACLE_HOME/cfgtoollogs/ipm.log ORACLE_HOME/cfgtoollogs/ons.log
OPMN Configuration Assistant - OCA の起動	OPMN を介して OCA を起動します。	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolstimestamp.log ORACLE_HOME/cfgtoollogs/ipm.log ORACLE_HOME/cfgtoollogs/ons.log
OPMN Configuration Assistant - Oracle HTTP Server の起動	OPMN を介して Oracle HTTP Server を起動します。	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolstimestamp.log ORACLE_HOME/cfgtoollogs/HTTP_Server~1
OCA Configuration Assistant	認証のために OracleAS Single Sign-On と統合された自己署名済認証局を構成します。 この Configuration Assistant を実行する前に、Oracle Internet Directory、OracleAS Metadata Repository、OracleAS Single Sign-On および Repository API が構成されていることを確認します。	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/oca_install.log
OracleAS File-Based Farm Repository Configuration Assistant	File-Based Farm Repository を構成します。	ORACLE_HOME/config/infratool_filebased_repository.log ORACLE_HOME/cfgtoollogs/infratool_filebased_repository.log
OracleAS Instance Configuration Assistant	インスタンスのエントリを ORACLE_HOME/config/target2add.xml ファイルに追加します。	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolstimestamp.log
OracleAS Randomize Password Configuration Assistant	すべてのスキーマのデフォルトのパスワードを変更します。	なし
Oracle mod_osso Configuration Assistant	インストール中に mod_osso を登録し、Oracle HTTP Server に接続して、ユーザー認証のために OracleAS Single Sign-On と統合します。この登録によって、Oracle Application Server 中間層とともにインストールされた Oracle HTTP Server は、OracleAS Single Sign-On のパートナ・アプリケーションとして機能します。 Oracle HTTP Server のもとで実行されるアプリケーションは、その URL を mod_osso に登録して保護できます。URL がリクエストされると、mod_osso は OracleAS Single Sign-On を使用してユーザーを認証し、その URL にアクセスできるようにします。	ORACLE_HOME/config/j2ee_mod_osso.log ORACLE_HOME/cfgtoollogs/j2ee_mod_osso.log
Oracle Net Configuration Assistant	デフォルトで LDAP ネーミングが使用されるようにデータベース・リスナーおよび中間層を構成します。	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/installActionstimestamp.log

表 G-2 Oracle Application Server Configuration Assistant (続き)

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
Personalization Configuration Assistant	OracleAS Personalization を構成します。	ORACLE_HOME/oraInventory/logs/installActionstimestamp.log
Portal Configuration Assistant	OracleAS Portal を構成します。 この Configuration Assistant を実行する前に、OracleAS Infrastructure が起動され、実行されていることを確認します。	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/install.log
Register DCM Plug-Ins With Oracle Enterprise Manager 10g Configuration Assistant	DCM プラグインを Oracle Enterprise Manager 10g に登録します。	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtooltimestamp.log ORACLE_HOME/dcm/logs/dcmctl_logs
Replication Configuration Assistant	ASR レプリカのインストールでは、新規 Oracle Internet Directory メタデータをマスター Oracle Internet Directory に書き込みます。 LDAP レプリカのインストールでは、デフォルトの構成で、マスター Oracle Internet Directory と新規 Oracle Internet Directory レプリカ間の LDAP ベース・レプリケーションを構成します。その後、Oracle Internet Directory レプリケーション・サーバーを起動し、Oracle Internet Directory レプリケーションの構成に使用します。 この Configuration Assistant を実行する前に、マスターおよび新規レプリカ用に Oracle Internet Directory が起動され、実行されていることを確認します。	ORACLE_HOME/ldap/log/remtool.log
Reports Configuration Assistant	OracleAS Reports Services サーバーを構成し、OracleAS Reports Services を Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control に統合します。 この Configuration Assistant を実行する前に、OracleAS Infrastructure が起動され、実行されていることを確認します。	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/reportsConfig.log
Single Sign-On Configuration Assistant	OracleAS Single Sign-On を構成します。 この Configuration Assistant を実行する前に、Oracle Internet Directory、OracleAS Metadata Repository および Repository API が構成されていることを確認します。	ORACLE_HOME/sso/log/ssoca.log ORACLE_HOME/sso/log/ssoreg.log
Ultra Search Configuration Assistant	次のタスクを実行します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Ultra Search を Oracle Application Server 中間層の内部に配置して構成します。 ■ Oracle Ultra Search バックエンド・アプリケーション・エンティティと Oracle Ultra Search 管理権限グループを作成します。 ■ Oracle Ultra Search 中間層のアプリケーション・エンティティを作成します。 ■ OracleAS Metadata Repository 内の Oracle Ultra Search メタデータをアップグレードおよびクリーンアップします。 	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/ultrasearch_config.log

表 G-2 Oracle Application Server Configuration Assistant (続き)

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
Unlock Metadata Repository Schemas Configuration Assistant	OracleAS Metadata Repository 内のスキーマをロック解除します。この Configuration Assistant は、Oracle Identity Management のインストールで実行されます。	ORACLE_HOME/config/infratool_unlock_schema.log
Use Infrastructure Configuration Assistant	ORACLE_HOME/config/ias.properties ファイルを更新し、そのインスタンスを Oracle Internet Directory に登録して、Oracle Internet Directory の証明書を持つ ldap.ora ファイルを ORACLE_HOME/network/admin ディレクトリに作成します。 この Configuration Assistant を実行する前に、環境変数 PATH に ORACLE_HOME/lib および ORACLE_HOME ディレクトリが含まれていることを確認します。	ORACLE_HOME/config/j2ee_instance_jazn.log ORACLE_HOME/cfgtoollogs/j2ee_instance_jazn.log
Use Metadata Repository Configuration Assistant	Oracle Application Server 中間層の OracleAS Metadata Repository を構成します。これには、J2EE and Web Cache 中間層をより大規模のインストール・タイプに拡張する機能が含まれます。 この Configuration Assistant を実行する前に、環境変数 PATH に ORACLE_HOME/lib ディレクトリが含まれていることを確認します。	ORACLE_HOME/config/infratool_midtier_upgrade.log
Web Cache Configuration Assistant	OracleAS Web Cache を構成し、それを Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control に登録します。	ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtooltimestamp.log
Wireless Configuration Assistant	OracleAS Wireless を構成します。	ORACLE_HOME/wireless/logs/wireless_CA.out ORACLE_HOME/cfgtoollogs/wireless_CA.out
OracleAS Wireless SDK Configuration Assistant	Wireless Development Kit を構成します。	ORACLE_HOME/wireless/logs/wdk_ca.out ORACLE_HOME/cfgtoollogs/wdk_ca.out

H

トラブルシューティング

この付録では、Oracle Application Server のインストール時に発生する可能性がある一般的な問題の解決策について説明します。内容は次のとおりです。

- 第 H.1 項 「ログ・ファイル」
- 第 H.2 項 「一般的なトラブルシューティングのヒント」
- 第 H.3 項 「インストールの問題および解決策」
- 第 H.4 項 「削除の問題および解決策」
- 第 H.5 項 「関連ドキュメント」

H.1 ログ・ファイル

次のログ・ファイルは、インストーラによって書き込まれます。

- *inventory_location*¥logs¥installActionstimestamp.log
- *inventory_location*¥logs¥oraInstalltimestamp.err
- *inventory_location*¥logs¥oraInstalltimestamp.out

デフォルトでは、*inventory_location* は次のディレクトリです。

C:¥Program Files¥Oracle¥Inventory

H.2 一般的なトラブルシューティングのヒント

インストール中にエラーが発生した場合は、次のように対処してください。

- 最新の更新については、Oracle Application Server のリリース・ノートを参照してください。このリリース・ノートは、プラットフォーム固有のドキュメントに付属しています。最新のリリース・ノートは、Oracle Technology Network の次のサイトで入手できます。
<http://www.oracle.com/technology/documentation>
- 第3章「要件」に示す要件をコンピュータが満たしていることを確認します。
- 中間層をインストールしている場合は、インストール中に、中間層と関連付ける OracleAS Infrastructure が実行されていることを確認します。
- インストール画面のいずれかで間違った情報を入力した場合は、「戻る」をクリックしてその画面まで戻ります。
- Configuration Assistant が失敗した場合は、その Configuration Assistant のログ・ファイルを確認します。第 G.2 項「Oracle Application Server Configuration Assistant の説明」に、Configuration Assistant およびそのログ・ファイルの場所を示します。Configuration Assistant のログ・ファイルが ORACLE_HOME¥cfgtoollogs ディレクトリにない場合は、インストーラを終了します。こうすると、インストーラによってこのディレクトリにログ・ファイルがコピーされます。
- インストーラでファイルのコピーやファイルへのリンクを実行しているときにエラーが発生した場合は、次のように対処してください。
 1. エラーの内容に注意し、インストール・ログ・ファイルを確認します。
 2. 付録 F「削除および再インストール」に記載されている手順に従って、失敗したインストールを削除します。
 3. エラーの原因となった問題を修正します。
 4. インストールをやり直します。

H.3 インストールの問題および解決策

この項では、インストールに関する一般的な問題および解決策について説明します。

- 第 H.3.1 項「ログ・ファイルの場所」
- 第 H.3.2 項「空でないディレクトリへのインストールに関するメッセージ」
- 第 H.3.3 項「インストーラが表示されない」
- 第 H.3.4 項「失敗したインストールをクリーンアップできない」
- 第 H.3.5 項「cn=orcladmin アカウントのパスワード忘れ」
- 第 H.3.6 項「cn=orcladmin アカウントのロック」
- 第 H.3.7 項「ユーザー・インターフェースが希望の言語で表示されない、または正しく表示されない」

- 第 H.3.8 項「インストーラに OracleAS Metadata Repository の正しいデータベース名が表示されない」
- 第 H.3.9 項「ネットワークに接続されているかどうかに関係なく Oracle Application Server を実行できない」
- 第 H.3.10 項「一般的な Configuration Assistant の失敗」
- 第 H.3.11 項「OracleAS Randomize Password Configuration Assistant の失敗」
- 第 H.3.12 項「Database Configuration Assistant (DBCA) の失敗」
- 第 H.3.13 項「Database Configuration Assistant (DBCA) からの害のないエラー・メッセージ」
- 第 H.3.14 項「「OPMN Configuration Assistant - Oracle HTTP Server の起動」の失敗」
- 第 H.3.15 項「「OPMN Configuration Assistant - DAS インスタンスの起動」の失敗」
- 第 H.3.16 項「「OPMN Configuration Assistant - OCA インスタンスの起動」の失敗」
- 第 H.3.17 項「chgtocfmt の再実行ができない」
- 第 H.3.18 項「警告 : DCM サービスが現時点で使用できない場合がある」

H.3.1 ログ・ファイルの場所

次の 2 つのセットのログ・ファイルがあります。

- 次のログ・ファイルは、インストーラによって書き込まれます。
 - *inventory_location*¥logs¥installActionstimestamp.log
 - *inventory_location*¥logs¥oraInstalltimestamp.err
 - *inventory_location*¥logs¥oraInstalltimestamp.out
 デフォルトでは、*inventory_location* は次のディレクトリです。
 C:¥Program Files¥Oracle¥Inventory
- ORACLE_HOME¥cfgtoollogs ディレクトリ内のログ・ファイルは、Configuration Assistant によって書き込まれます。
 Configuration Assistant によって作成されたログ・ファイルにアクセスする場合は、インストーラを終了しておく必要があります。インストーラを使用している場合、このログ・ファイルにはアクセスできません。

H.3.2 空でないディレクトリへのインストールに関するメッセージ

問題

インストーラによって、空でないディレクトリにインストールしていることを示すメッセージが表示されます。

解決策

インストールを開始して「ファイルの場所の指定」画面を過ぎた後は、インストールが完了していない場合でも、指定した Oracle ホーム・ディレクトリはすでにインストーラによって作成されています。後で、インストーラによって作成されたファイルを含む同じディレクトリに再度インストールしようとすると、ディレクトリが空でないことを示す警告がインストーラによって表示されます。

次の手順を実行します。

1. 「警告」ダイアログで、「いいえ」をクリックして「ファイルの場所の指定」画面に戻ります。
2. 「ファイルの場所の指定」画面で「インストールされた製品」をクリックします。「インベントリ」画面が表示されます。

「インベントリ」画面に Oracle ホームが表示されている場合は、その Oracle ホームを削除する必要があります。詳細は、[付録 F 「削除および再インストール」](#) を参照してください。

「インベントリ」画面に Oracle ホームが表示されていない場合は、Oracle ホームからファイルを削除するのみで、インストールを続行できます。

H.3.3 インストーラが表示されない

問題

`setup.exe` を実行してもインストーラが表示されません。

解決策

Oracle Database 10g がすでに実行されているコンピュータに Oracle Application Server をインストールする場合は、次のオプションを指定してインストーラを起動する必要があります。

```
C:\> setup.exe -J-Dsun.java2d.nodraw=true
```

H.3.4 失敗したインストールをクリーンアップできない

インストールに成功しなかった場合は、Oracle Application Server を再度インストールする前に、失敗したインストールを削除する必要があります。詳細は、[付録 F 「削除および再インストール」](#) を参照してください。

H.3.5 `cn=orcladmin` アカウントのパスワード忘れ

問題

`cn=orcladmin` アカウントのパスワードを忘れました。

解決策

データベースでパスワードを再設定できます。DSE のルート属性名は `orclsupassword` です。

接続の試行を特定の回数失敗すると、`cn=orcladmin` アカウントはロックされます。この場合、アカウントをロック解除する必要があります。アカウントをロック解除する方法については、[第 H.3.6 項 「`cn=orcladmin` アカウントのロック」](#) を参照してください。

H.3.6 `cn=orcladmin` アカウントのロック

問題

接続の試行に 10 回失敗すると `cn=orcladmin` アカウントがロックされます。これは、パスワード・ポリシーで制御されます。試行失敗回数のデフォルト値は 10 回です。

解決策

`cn=orcladmin` のパスワードがわかっている場合は、次のコマンドを実行してアカウントをロック解除できます。

```
C:\> ORACLE_HOME\bin\oidpasswd connect=dbsid unlock_su_acct=true
```

dbsid はデータベースの SID です。たとえば、次のようにになります。

```
C:\> ORACLE_HOME\bin\oidpasswd connect=orcl unlock_su_acct=true
OID DB user password: enter_ODS_password
OID superuser account unlocked successfully.
```

このコマンドによって、ODS スキーマのパスワードの入力を要求されます。デフォルトでは、ODS パスワードは、インストール時に入力した *cn=orcladmin* および *ias_admin* アカウントのパスワードと同じです。

パスワード・ポリシーを変更する場合は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

H.3.7 ユーザー・インターフェースが希望の言語で表示されない、または正しく表示されない

問題

メッセージが希望の言語で表示されない、または正しく表示されません。

解決策

現在、Oracle Application Server では、インストール後の言語の追加または削除はサポートされていません。

英語以外の内容を表示する場合は、インストール時に、すべての必要な言語を追加してください。インストール時に言語を追加するには、「インストールする製品の選択」画面の「**製品の言語**」ボタンをクリックします。デフォルトでインストールされている言語を確認する場合は、[第 4.6 項「追加の言語のインストール」](#) を参照してください。

英語以外の内容を表示する場合、インストール時に「製品の言語」をクリックし忘ると、必要なフォントがインストールされないため、ユーザー・インターフェースが正しく表示されないことがあります。この問題を解決するには、OracleAS Metadata Repository Upgrade Assistant and Utilities の CD-ROM または Oracle Application Server の DVD から必要なフォントをインストールします。

1. OracleAS Metadata Repository Upgrade Assistant and Utilities の CD-ROM または Oracle Application Server の DVD を挿入してマウントします。
2. CD-ROM の場合 : CD-ROM に含まれている `utilities/fonts` ディレクトリの内容を `ORACLE_HOME/jdk/jre/lib/fonts` ディレクトリにコピーします。

DVD の場合 : DVD に含まれている `repca_utilities/utilities/fonts` ディレクトリの内容を `ORACLE_HOME/jdk/jre/lib/fonts` ディレクトリにコピーします。

H.3.8 インストーラに OracleAS Metadata Repository の正しいデータベース名が表示されない

問題

中間層のインストール時に、インストーラの「OracleAS Metadata Repository の選択」画面（中間層で使用する OracleAS Metadata Repository を選択する画面）に選択可能な OracleAS Metadata Repository データベースの名前が正しく表示されません。

解決策

`C:\Program Files\Oracle\Inventory\logs\installActions\timestamp.log` ログ・ファイルを確認します。次の行がある場合は注意してください。

```
*** Select OracleAS Metadata Repository Page***
Error:*** Alert: Error validating repository on multiple hosts and ports.
A database hostname or port is missing.
```

これは、OracleAS Metadata Repository データベース名に大文字の PORT または HOST が含まれていることを意味します。この問題を修正するには、大文字の PORT または HOST が含まれないようにデータベース名を変更します。

H.3.9 ネットワークに接続されているかどうかに関係なく Oracle Application Server を実行できない

問題

コンピュータがネットワークに接続されているときにインストールした Oracle Application Server を、ネットワークに接続せずに使用する必要があります。

解決策

ネットワークに接続されているかどうかに関係なく Oracle Application Server を実行する場合は、ループバック・アダプタをインストールする必要があります。静的 IP アドレスを持つコンピュータでは、ネットワークに接続していない場合、Ethernet アダプタが停止します（切断されたケーブルが ipconfig に表示されます）。ipconfig でこの IP は解決できません。

ループバック・アダプタの詳細は、[第 3.8.6 項「ループバック・アダプタのインストール」](#) を参照してください。

H.3.10 一般的な Configuration Assistant の失敗

この項では、Configuration Assistant の失敗に対するトラブルシューティングでの一般的なヒントを示します。特定の Configuration Assistant の失敗については、次の項を参照してください。

関連項目： [付録 G 「Configuration Assistant」](#)

問題

Configuration Assistant の失敗

解決策

Configuration Assistant の失敗には、様々な原因があります。次に、確認可能な事項を示します。

- OracleAS Infrastructure に関連付けられているリスナー、データベースおよび Oracle Internet Directory が起動され、実行されていることを確認します。それらが実行されていない場合は起動し、「再試行」ボタンをクリックし、失敗した Configuration Assistant を再実行します。
- 失敗した Configuration Assistant のログ・ファイルを確認して問題を判別します。ログ・ファイルは、ORACLE_HOME¥cfgtoollogs ディレクトリにあります。

ログ・ファイルに示された問題を修正し、「再試行」をクリックして、失敗した Configuration Assistant を再実行します。

H.3.11 OracleAS Randomize Password Configuration Assistant の失敗

OracleAS Randomize Password Configuration Assistant を再実行する前に、次の手順を実行する必要があります。

1. Oracle Directory Manager を起動します。
2. Oracle Internet Directory のホスト名、ポート、ユーザー名およびパスワードを入力します。
3. 「エントリ管理」→「cn=OracleContext」→「cn=Products」→「cn=IAS」→「cn=IAS Infrastructure Databases」の順に展開します。
4. 「orclreferencename=your_globaldb_name」を選択します。

5. *your_globaldb_name* ツリーの下にあるスキーマごとに、`orclreferencename` エントリがあります。`orclreferencename` エントリに対して、次の手順を実行します。
 - `orclpassword` 属性の値をスキーマ名に変更します。たとえば、スキーマ名が `wireless` の場合は、`orclpassword` 属性の値を `wireless` に変更します。
 - `orclflextattribute1` を `false` に変更します。

「適用」をクリックします。

ODS および OEM_REPOSITORY を除くすべてのスキーマに対して、これらの手順を実行します。
 6. SQL*Plus を使用して、OracleAS Randomize Password Configuration Assistant が失敗したデータベースにログインし、次のスクリプトを実行します。
- ```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> @ORACLE_HOME\assistants\dbca\admin\unlock.sql
```
- password* は、SYS ユーザーのパスワードです。
7. OracleAS Randomize Password Configuration Assistant を再実行します。

### H.3.12 Database Configuration Assistant (DBCA) の失敗

#### 問題

DBCA が失敗し、次のエラーが戻されます。

```
Open wallet failedoracle.net.config.ServiceAliasException
at oracle.net.config.ServiceAlias.<init>(Compiled Code)
at oracle.net.config.Service.<init>(Compiled Code)
at oracle.net.config.DatabaseService.<init>(Compiled Code)
at oracle.sysman.assistants.util.NetworkUtils.registerDBWithDirSrv(NetworkUtils.j
ava:1137)
at oracle.sysman.assistants.dbca.backend.DirServiceStep.executePreReqImpl(Compiled
Code)
at oracle.sysman.assistants.dbca.backend.PrerequisiteStep.executeImpl(Prerequisite
Step.java:149)
at oracle.sysman.assistants.dbca.backend.Step.execute(Compiled Code)
at oracle.sysman.assistants.dbca.backend.PostDBCCreationStep.executeImpl(Compiled Code)
at oracle.sysman.assistants.dbca.backend.Step.execute(Compiled Code)
at oracle.sysman.assistants.dbca.backend.Host$ModeRunner.run(Compiled Code)
at java.lang.Thread.run(Thread.java:466)
ERROR :oracle.sysman.assistants.util.NetAPIException
```

#### 解決策

このエラーは、環境変数 `TNS_ADMIN` が設定されている場合に発生します。環境変数 `TNS_ADMIN` は設定しないでください（第 3.6.4 項「TNS\_ADMIN」を参照）。設定されている場合は、設定を解除し、「コンフィギュレーション・アシスタント」画面で「再実行」ボタンをクリックして DBCA を再実行します。

### H.3.13 Database Configuration Assistant (DBCA) からの害のないエラー・メッセージ

ログ・ファイルに含まれている場合がある「OC4J 構成ファイルをコピー中にエラーが発生しました」というメッセージは、害がなく、無視できます。

```
Nov 25, 2004 9:07:30 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig updateReposVars
INFO: Updating file /ASInstalls/ASInfra/sysman/emdrep/config/repository.variables ...
Nov 25, 2004 9:07:35 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig addPortEntries
INFO: Updating file /ASInstalls/ASInfra/install/portlist.ini ...
Nov 25, 2004 9:07:35 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig updateEmdProps
INFO: Updating file /ASInstalls/ASInfra/sysman/config/emd.properties ...
Nov 25, 2004 9:07:35 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig updateConfigFiles
INFO: targets.xml file is updated successfully
Nov 25, 2004 9:07:35 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig updateEmomsProps
INFO: Updating file
/ASInstalls/ASInfra/sysman/config/emoms.properties ...
Nov 25, 2004 9:07:35 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig updateConfigFiles
INFO: emoms.properties file is updated successfully
Nov 25, 2004 9:07:40 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig copyOC4JDir
WARNING: Error copying OC4J config files from
/ASInstalls/ASInfra/oc4j/j2ee/OC4J_DBConsole to
/ASInstalls/ASInfra/oc4j/j2ee/OC4J_DBConsole_hostname.domain_portaldb
Nov 25, 2004 9:07:40 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig startOMS
INFO: Starting the DBConsole ...
Nov 25, 2004 9:08:26 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig perform
INFO: DBConsole is started successfully
```

### H.3.14 「OPMN Configuration Assistant - Oracle HTTP Server の起動」の失敗

#### 問題

「OPMN Configuration Assistant - Oracle HTTP Server の起動」の再実行に失敗しました。

#### 解決策

Oracle HTTP Server がすでに実行されていることが問題となっています。Configuration Assistant を再実行する前に、次のコマンドを実行して Oracle HTTP Server を停止します。

```
C:\> ORACLE_HOME\opmn\bin\opmnctl stopproc ias-component=HTTP_Server
```

その後、「OPMN Configuration Assistant - Oracle HTTP Server の起動」を再実行します。

### H.3.15 「OPMN Configuration Assistant - DAS インスタンスの起動」の失敗

#### 問題

「OPMN Configuration Assistant - DAS インスタンスの起動」の再実行に失敗しました。

#### 解決策

Oracle Delegated Administration Services インスタンスがすでに実行されていることが問題となっています。Configuration Assistant を再実行する前に、次のコマンドを実行して Oracle Delegated Administration Services インスタンスを停止します。

```
C:\> ORACLE_HOME\opmn\bin\opmnctl stopproc ias-component=OC4J_Security
```

その後、「OPMN Configuration Assistant - DAS インスタンスの起動」を再実行します。

## H.3.16 「OPMN Configuration Assistant - OCA インスタンスの起動」の失敗

### 問題

「OPMN Configuration Assistant - OCA インスタンスの起動」の再実行に失敗しました。

### 解決策

OCA インスタンスがすでに実行されていることが問題となっています。Configuration Assistant を再実行する前に、次のコマンドを実行して OCA インスタンスを停止します。

```
C:\> ORACLE_HOME\opmn\bin\opmnctl stopproc ias-component=OC4J instancename=oca
```

その後、「OPMN Configuration Assistant - OCA インスタンスの起動」を再実行します。

## H.3.17 chgtocfmt の再実行ができない

### 問題

元の構成に戻すために chgtocfmt スクリプトの再実行はできません。ホスト名が元の物理ホスト名に変換されないのにエラーが表示されません。

### 解決策

chgtocfmt スクリプトを再実行して元の構成に戻すことができるには、単一の Oracle ホーム（つまり共有ディスク）に中間層をインストールした場合のみです。個別の Oracle ホームにインストールした場合は、このスクリプトを再実行しても機能しません。個別の Oracle ホームにインストールした場合にコマンドを成功させるには、次の手順を実行します。

1. `ORACLE_HOME/config/ias.properties` ファイルで、`VirtualHostName` パラメータを、最初の chgtocfmt スクリプトの実行に使用した仮想ホスト名に設定します。
2. chgtocfmt スクリプトを再実行します。
3. `ORACLE_HOME\config\ias.properties` ファイルで、`VirtualHostName` パラメータを物理ホスト名に設定します。

## H.3.18 警告 : DCM サービスが現時点での使用できない場合がある

### 問題

OracleAS Cluster (Identity Management) の最初のノードのインストール時に、Java Security Configuration Assistant から次のメッセージが返される場合があります。

```
WARNING: DCM service may not be available at this time to synchronize %ORACLE_HOME%\j2ee\home\config\jazn-data.xml file.
```

このメッセージは、DCM リポジトリの更新に失敗したため表示されます。送信先のバックエンド・サービスが使用不可能なときに、コール側クライアントに即座に応答するようロード・バランサの仮想サーバーが構成されていない場合、これが発生する可能性があります。

### 解決策

問題を修正するには、次の手順を実行します。

1. インストールが終了したら、次のコマンドを実行します。
2. `dcmctl updateConfig` コマンドによってエラーが返されないことを確認します。
3. 次のコマンドを使用して、パスワードが正しいことを確認します。

```
C:\> ORACLE_HOME\jdk\bin\java
-Doracle.security.jazn.config=./jazn/install/jazn.xml
-jar jazn.jar -checkpasswd jazn.com admin -pw admin_password
```

## H.4 削除の問題および解決策

この項では、削除に関する一般的な問題について説明します。

- [第 H.4.1 項「削除したパートナ URL が、OracleAS Single Sign-On の管理画面に残っている」](#)
- [第 H.4.2 項「削除したインスタンスのインスタンス名を再利用できない」](#)
- [第 H.4.3 項「データベース名を再利用できない」](#)
- [第 H.4.4 項「分散 OracleAS Cluster \(Identity Management\) での構成解除の失敗」](#)

### H.4.1 削除したパートナ URL が、OracleAS Single Sign-On の管理画面に残っている

#### 問題

削除後、削除したパートナ・アプリケーション・エントリの一部が、OracleAS Single Sign-On の管理画面に残る場合があります。

#### 解決策

削除したパートナ・アプリケーションのエントリを登録解除するコマンドを実行します。このコマンドは、`-update_mode` パラメータを `DELETE` に設定する点を除いては、登録のコマンドと同様です。

環境変数 `PATH` に `%ORACLE_HOME%\lib` が含まれていることを確認します。その後、次のコマンド（すべてを1行で）を実行します。

```
C:\> %ORACLE_HOME%\jdk\bin\java
 -jar %ORACLE_HOME%\sso\lib\ossoreg.jar
 -oracle_home_path %ORACLE_HOME%
 -site_name hostname.domain
 -config_mod_osso TRUE
 -mod_osso_url http://hostname.domain:port
 -u userid
 -update_mode DELETE
```

`-site_name hostname.domain` には、中間層がインストールされているコンピュータを指定します。ドメイン名も指定します。

`-mod_osso_url http://hostname.domain:port` には、中間層がインストールされているコンピュータと、Oracle HTTP Server がリスニングしているポート番号を指定します。

`-u userid` には、中間層のプロセスを起動できるオペレーティング・システム・ユーザーを指定します。

パラメータの詳細は、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第 4 章を参照してください。

### H.4.2 削除したインスタンスのインスタンス名を再利用できない

#### 問題

削除したインスタンスの名前を新しい Oracle Application Server インスタンスに付けようとすると、エラーが発生します。

**解決策**

削除したインスタンスの名前は、再利用する前に、Oracle Internet Directory から削除する必要があります。削除済インスタンスのエントリを Oracle Internet Directory から削除するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Directory Manager を起動します。Oracle ホームは、Oracle Internet Directory をインストールしたホームのことです。  
「スタート」→「プログラム」→「Oracle - OracleHomeName」→「Integrated Management Tools」→「Oracle Directory Manager」を選択します。
2. 「接続」画面で、Oracle Internet Directory の接続情報を入力します。Oracle Internet Directory スーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインします。
3. 「エントリ管理」→「cn=OracleContext」→「cn=Products」→「cn=IAS」→「cn=IAS Instances」の順に展開します。
4. 「cn=IAS Instances」の下で、削除するインスタンスを選択します。
5. メニューから「編集」→「削除」を選択します。
6. 「エントリ管理」→「cn=OracleContext」→「cn=Groups」の順に展開します。
7. 「cn=IASAdmins」を選択します。
8. 「プロパティ」タブで、「uniqueMember」フィールドを編集して、そのフィールドからインスタンスを削除します。メニューから「編集」→「削除」を選択しないでください。
9. 「適用」をクリックします。

### H.4.3 データベース名を再利用できない

**問題**

削除したものと同じグローバル・データベース名または SID を使用しようとすると、エラーが発生します。

**解決策**

OracleAS Metadata Repository を削除して Oracle Internet Directory を削除しなかった場合、別の OracleAS Metadata Repository のインストール時に Oracle Internet Directory および同じデータベース名または SID を再利用すると、この問題が発生します。Oracle Internet Directory に、削除した OracleAS Metadata Repository の名前が含まれています。この名前は、再利用する前に削除する必要があります。

---

**注意：** 中間層を削除する場合は、この手順を実行しないでください。

---

1. Oracle Directory Manager を起動します。Oracle ホームは、Oracle Internet Directory をインストールしたホームのことです。  
「スタート」→「プログラム」→「Oracle - OracleHomeName」→「Integrated Management Tools」→「Oracle Directory Manager」を選択します。
2. 「接続」画面で、Oracle Internet Directory の接続情報を入力します。Oracle Internet Directory スーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインします。
3. 「エントリ管理」→「cn=OracleContext」→「cn=Products」→「cn=Portal」→「cn=UltraSearch」→「cn=Database Instances」→「orclApplicationCommonName=」→「infrastructure\_database\_name」の順に展開します。

4. 「**orclApplicationCommonName=infrastructure\_database\_name**」の下にあるすべての子エントリを最も内側の子エントリから順に削除します。エントリを削除するには、それぞれの子エントリを右クリックし、ポップアップ・メニューから「削除」を選択します。「確認」ダイアログ・ボックスで「はい」をクリックします。子エントリを削除するときに、エラー・メッセージが表示されることがあります。これらのエラー・メッセージは無視してかまいません。
5. 「**orclApplicationCommonName=infrastructure\_database\_name**」の下にあるすべてのエントリを削除した後で、このエントリを右クリックして削除します。
6. 「エントリ管理」を展開します。  
デフォルト・サブスクリーブのエントリを展開します。各文字列を別々に展開する必要があります。たとえば、次のようにになります。デフォルト・サブスクリーブが "dc=us,dc=oracle,dc=com" である場合は、まず「dc=com」を展開し、次に「dc=oracle」を展開し、その次に「dc=us」を展開する必要があります。  
その後、「**cn=OracleContext**」→「**cn=Products**」→「**cn=Portal**」→「**cn=UltraSearch**」→「**cn=Database Instances**」→「**cn=**」→「**infrastructure\_database\_name**」の順に展開します。
7. 「**cn=infrastructure\_database\_name**」の下にあるすべての子エントリを最も内側の子エントリから順に削除します。エントリを削除するには、それぞれの子エントリを右クリックし、ポップアップ・メニューから「削除」を選択します。「確認」ダイアログ・ボックスで「はい」をクリックします。子エントリを削除するときに、エラー・メッセージが表示されることがあります。これらのエラー・メッセージは無視してかまいません。
8. 「**cn=infrastructure\_database\_name**」の下にあるすべてのエントリを削除した後で、このエントリを右クリックして削除します。
9. 「適用」をクリックします。

#### H.4.4 分散 OracleAS Cluster (Identity Management) での構成解除の失敗

##### 問題

第 11.4.2 項「[ケース 2: クライアント ---\[HTTPS\]---> ロード・バランサー ---\[HTTPS\]---> Oracle HTTP Server](#)」に示すように構成されている分散 OracleAS Cluster (Identity Management) で、最初の OracleAS Single Sign-On ノードの構成解除を実行すると、Deconfig ツールが失敗します。ORACLE\_HOME¥ssoylog¥ssoreg.log にあるログ・ファイルには、次のエラーが記録されます。

```
Unable to open file ORACLE_HOME\Apache\Apache\conf\osso\osso.conf.
Please check the file path.
SSO registration tool failed. Please check the error in this log file, correct the
problem and re-run the tool.
```

##### 解決策

Deconfig ツールが失敗したのは、ORACLE\_HOME\Apache\Apache\conf\osso\osso-https.conf ファイルを検索できなかったためです。この問題を修正するには、次の手順を実行します。

1. ORACLE\_HOME\Apache\Apache\conf\osso\osso-https.conf ディレクトリで、ファイル osso-https.conf を osso.conf にコピーします。
2. Deconfig ツールを再実行します。

## H.5 関連ドキュメント

この付録で、発生した問題を解決できない場合は、次に示すドキュメントも参照してください。

- 次の Oracle Technology Network で入手可能な Oracle Application Server のリリース・ノート

<http://www.oracle.com/technology/documentation>

- OracleMetaLink:

<http://metalink.oracle.com>

発生した問題の解決策が見つからない場合は、サービス・リクエストを行ってください。



# 索引

## 数字

256 色の要件, 3-5

## A

Administrators グループ, 3-15  
ASControl サービス, 15-2

## B

Business Intelligence and Forms 中間層, 6-2  
インストール, 6-15

## C

CD-ROM  
　ハード・ドライブへのコピー, 3-25  
CD-ROM/DVD からハード・ドライブへのコピー  
　, 3-25  
cn=orcladmin スーパーユーザー, 7-2  
Delegated Administration Services, 7-2  
初期のパスワード, 7-2  
ロック解除, H-4  
Configuration Assistant, G-1  
依存関係, G-2  
エラー・コード, G-3  
説明, G-3  
致命的エラー, G-2  
トラブルシューティング, G-2  
Configuration Assistant のエラー  
Database Configuration Assistant, H-7, H-8  
OPMN Configuration Assistant - Oracle HTTP Server  
の起動, H-8  
OPMN Configuration Assistant - OCA インスタンス  
の起動, H-9  
OPMN Configuration Assistant - DAS インスタンス  
の起動, H-8  
OracleAS Randomize Password Configuration  
Assistant, H-6  
Configuration Assistant のエラー・コード, G-3  
CPU の要件, 3-3

## D

Database Configuration Assistant  
エラー, H-7  
害のないエラー・メッセージ, H-8

Database-Based Farm Repository, 6-5

DCM スキーマ、パスワード, 6-6

deconfig ツール, F-2

ログ・ファイル, F-3

Deployment Delegation コンソール

　グループへのユーザーの追加, 7-14

DHCP

　DHCP 接続のコンピュータへのインストール, 3-18

OracleAS Cold Failover Cluster, 10-11

DVD

　ハード・ドライブへのコピー, 3-25

## E

Event Log サービス (OracleAS Cold Failover Cluster  
用), 10-3  
EXTPROC キー, 3-14

## F

File-Based Farm Repository, 6-5

Forms、Reports および Discoverer 開発者トポジ  
　, 14-4

FS-10230 メッセージ, 10-80

## H

hosts ファイル, 3-17

httpd.conf ファイル, 3-13

## I

IAS Admins グループ, 7-2

ias\_admin ユーザー, 4-6

　パスワード, 4-6

Identity Management Access, 6-5

　インストールに必要なグループ, 7-5

Identity Management コンポーネント, 5-2

　Internet Directory をともなわないインストール  
　, 5-17

Oracle Delegated Administration Services のインス  
　トール, 5-6

Oracle Internet Directory のみのインストール, 5-18

OracleAS Certificate Authority および Metadata  
　Repository のインストール, 5-20

OracleAS Single Sign-On のインストール, 5-6

　インストール, 5-15

　別々にインストール, 5-6

Identity Management のデフォルトのレルムの場所  
, 3-17  
installActions.log ファイル, B-14  
Integration B2B トポロジ, 14-5  
「Internet Directory のネームスペースの指定」画面  
, 3-17, 5-10  
IP 複数の IP アドレスを持つコンピュータへのインストール, 3-20  
要件, 3-3  
IPC プロトコル, 3-14

## J

J2EE and Web Cache 中間層, 6-2  
Identity Management Access, 6-5  
Identity Management Access を使用せずに OracleAS Database-Based Cluster を使用したインストール, 6-11  
Identity Management Access を使用せずに OracleAS File-Based Cluster を使用したインストール, 6-12  
OracleAS Database-Based Cluster および Identity Management Access を使用したインストール, 6-9  
OracleAS Farm Repository オプション, 6-4  
OracleAS File-Based Cluster および Identity Management Access を使用したインストール, 6-13  
OracleAS Web Cache オプション, 6-5  
インストール (インフラストラクチャなし), 6-8  
拡張, 6-16  
構成オプション, 6-4  
Java Access Bridge  
JRE 1.4.2, E-2  
インストール, E-2  
概要, E-2  
構成, E-3  
Java 開発者トポロジ, 14-2

## M

Microsoft Cluster Server (MSCS)  
「MSCS」を参照  
mod\_osso の構成, 15-4  
MSCS  
OracleAS Cold Failover Cluster 用, 10-3, 10-11  
要件, 10-11

## N

nbtstat コマンド, 12-7  
NLS\_LANG パラメータ, 15-4

## O

OPMN  
OPMN の高可用性設定 (OracleAS Cold Failover Cluster), 10-83  
「OPMN Configuration Assistant - DAS インスタンスの起動」、再実行, H-8  
「OPMN Configuration Assistant - OCA インスタンスの起動」、再実行, H-9

「OPMN Configuration Assistant - Oracle HTTP Server の起動」、再実行, H-8  
Oracle Application Server の概念, 4-2  
Oracle Data Guard (OracleAS Disaster Recovery 用)  
, 12-2, 12-6  
Oracle Delegated Administration Services, 5-6  
cn=orcladmin スーパーユーザー, 7-2  
mod\_osso, 15-4  
OracleAS Single Sign-On の依存関係, 5-6  
インストールに必要なグループ, 7-4  
Oracle Developer Suite、同一の Oracle ホームの共有  
, 4-4  
Oracle Directory Integration and Provisioning, 5-6  
インストールに必要なグループ, 7-5  
Oracle Directory Manager  
グループへのユーザーの追加, 7-11  
Oracle Enterprise Manager Application Server Control  
URL, 15-2  
高可用性設定 (OracleAS Cold Failover Cluster)  
, 10-89  
Oracle Fail Safe  
OracleMSCSServices サービス, 10-3  
インストール, 10-4  
クラスタの検証, 10-5  
グループの作成, 10-6  
グループへの仮想アドレスの追加, 10-7  
グループへの共有ディスクの追加, 10-9  
バージョン, 10-11  
ユーザーの要件, 10-3  
Oracle Fail Safe のインストール, 10-4  
Oracle Fail Safe のグループへの仮想アドレスの追加  
, 10-7  
Oracle Fail Safe のグループへの共有ディスクの追加  
, 10-9  
Oracle HTTP Server  
静的ポートの設定, 3-13  
Oracle Internet Directory, 7-1  
cn=orcladmin スーパーユーザー, 7-2  
OracleAS Metadata Repository の登録, 5-7  
orcladmin ユーザー, 7-2  
SSL を使用した接続, 4-8  
新しい内容, 7-16  
アップグレードしたものを使用, 6-8  
インストール, 5-18  
インストールに必要なグループ, 7-4  
グループ, 7-2, 7-4  
グループへのユーザーの追加, 7-10  
コンポーネントのインストールに必要なグループ  
, 7-4  
中間層のインストールに必要なグループ, 7-7  
デフォルト・ユーザー, 7-2  
ネームスペース, 5-10  
ユーザーの作成, 7-10  
レルム, 7-17  
「Oracle Internet Directory に対するログインの指定」画面, 7-17  
Oracle Internet Directory のグループ  
IAS Admins, 7-2  
関連の中間層, 7-3, 7-4  
コンポーネント所有者, 7-3  
信頼できるアプリケーションの管理者, 7-2  
中間層の管理者, 7-3  
ユーザー管理アプリケーションの管理者, 7-3

リポジトリ所有者, 7-3  
Oracle Internet Directory のネームスペース, 5-10  
Oracle Internet Directory のユーザー  
  cn=orcladmin, 7-2  
  orcladmin, 7-2  
  グループへの追加, 7-10  
  作成, 7-10  
Oracle Internet Directory パスワード (OracleAS Cluster (Identity Management) 用), 11-5  
Oracle Sensor Edge Server, 6-3  
Oracle Universal Installer  
  OracleAS Certificate Authority の画面, 5-24  
  起動, 4-8  
  最後のいくつかの画面 (インフラストラクチャ), 5-22  
  最後のいくつかの画面 (中間層), 6-20  
  最初のいくつかの画面 (インフラストラクチャ), 5-21  
  最初のいくつかの画面 (中間層), 6-19  
  新機能, 2-1  
  前提条件チェック, 3-29  
  データベースの画面, 5-23  
  統計の生成, 2-3  
  ファイルを書き込む場所, 4-8  
  ログ・ファイル, H-2  
Oracle Universal Installer の起動, 4-8  
OracleAS Certificate Authority  
  インストール, 5-20  
  インストール後の追加, 5-11  
  インストールに必要なグループ, 7-5  
  サインレント・インストールおよび非対話型インストール, B-3  
OracleAS Certificate Authority トポロジ, 14-10  
OracleAS Cluster, 6-5  
  インストールに必要なグループ, 7-5  
OracleAS Cluster (Identity Management), 11-1  
  DCM の警告, H-9  
  LDAP 仮想サーバーの構成, 11-4  
  Oracle Internet Directory パスワード, 11-5  
  SSL ポートおよび非 SSL ポートの構成, 11-5  
  インストール, 11-8  
  インストール後の手順, 11-24  
  インストール前の手順, 11-3  
  概要, 11-2  
  後続のノードへのインストール, 11-13  
  最初のノードへのインストール, 11-9  
  中間層のインストール, 11-25  
  ロード・バランサの構成, 11-3  
OracleAS Cluster (Identity Management) での時計の同期化, 11-3  
OracleAS Cold Failover Cluster, 10-1  
  Application Server Control の高可用性設定, 10-89  
  Cold Failover Cluster 構成への Oracle Delegated Administration Services および OracleAS Single Sign-On のインストール, 10-49  
  DHCP, 10-11  
  Event Log サービス, 10-3  
  MSCS, 10-3  
  MSCS 要件, 10-11  
  OPMN の高可用性設定, 10-83  
  OPMN への共有ディスクの依存関係の追加, 10-89  
  OracleAS Disaster Recovery 環境, 12-8  
  OracleAS Metadata Repository のインストール, 10-58  
OracleAS Metadata Repository の高可用性設定, 10-76  
  pfile の作成, 10-76  
  staticports.ini ファイル, 10-94  
  URL, 10-11, 10-32, 10-40, 10-72  
  インストール後の手順, 10-75  
  インストール前の手順, 10-2  
  仮想アドレス, 10-3  
  仮想ホスト名, 10-11, 10-31, 10-40, 10-72  
  概要, 10-2  
  記憶デバイス, 10-11  
  クラスタの検証, 10-5  
  クラスタ名, 10-3  
  削除, F-4  
  サポートされる手順, 10-76  
  対称ノード, 10-2  
  中間層のインストール, 10-93  
  ドメイン・ユーザーの要件, 10-3  
  ノード 2 からの Identity Management のインストール, 10-38, 10-47  
  リスナー, 10-80, 10-81, 10-93  
  リスナーへの共有ディスクの依存関係の追加, 10-81  
OracleAS Cold Failover Cluster (Identity Management), 10-31  
  インストール, 10-34  
  インストール手順の概要, 10-32  
OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure), 10-10, 10-13, 10-25, 10-53  
  インストール, 10-13  
  インストール手順の概要, 10-12  
  同じノードの OracleAS Cold Failover Cluster (中間層), 10-71  
  ノード 2 からの Infrastructure のインストール, 10-20, 10-28  
OracleAS Cold Failover Cluster (中間層), 10-60  
  同じノードの OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure), 10-71  
  chgtocfmt が再実行できない, H-9  
OracleAS Cold Failover Cluster のリスナー, 10-80, 10-81, 10-93  
OracleAS Developer Kits  
  インストール, A-1  
  削除, F-8  
OracleAS Disaster Recovery, 12-1  
  Oracle Data Guard, 12-6  
  OracleAS Cold Failover Cluster の使用, 12-8  
  OracleAS Infrastructure のインストール, 12-9  
  staticports.ini ファイル, 12-3  
  インストール手順, 12-9  
  同じホスト名の設定, 12-4  
  設定, 12-3  
  中間層のインストール, 12-9  
  データの同期化, 12-2  
  名前解決, 12-4  
OracleAS Farm Repository, 6-4  
OracleAS File-Based Cluster  
  インストール後の手順, 15-2  
OracleAS Forms Services  
  インストールに必要なグループ, 7-6  
OracleAS Infrastructure, 5-1  
  Identity Management コンポーネント, 5-2  
  Identity Management コンポーネントのインストール

, 5-15  
Identity Management コンポーネントのインストール  
(既存の Internet Directory に対して), 5-17  
Oracle Internet Directory のみのインストール, 5-18  
OracleAS Certificate Authority のインストール  
, 5-20  
OracleAS Cold Failover Cluster へのインストール  
, 10-13, 10-25, 10-53  
OracleAS Disaster Recovery へのインストール  
, 12-9  
OracleAS Metadata Repository コンポーネント, 5-2  
OracleAS Metadata Repository のみのインストール  
, 5-13  
インストール, 5-12  
インストール・タイプ, 5-2, 5-3  
インストールの順序, 5-3  
コンポーネント, 5-2  
削除, F-6  
OracleAS Metadata Repository, 5-2  
Oracle Internet Directory への登録, 5-7  
OracleAS Single Sign-On による使用, 7-6  
インストールに必要なグループ, 7-8  
既存のデータベースへのインストール, 5-7, 13-1  
高可用性設定 (OracleAS Cold Failover Cluster)  
, 10-76  
個別のものが使用される OracleAS Portal, 14-7  
新規データベースへのインストール, 5-13  
内容, 5-8  
複数の使用, 5-8  
ポート 1521, 3-11  
間違った名前の表示, H-5  
OracleAS Metadata Repository インストール・タイプ  
, 5-4  
OracleAS Metadata Repository の登録, 5-7  
OracleAS Personalization  
インストールに必要なグループ, 7-6  
OracleAS Portal  
インストールに必要なグループ, 7-5  
個別の OracleAS Metadata Repository の使用, 14-7  
OracleAS Randomize Password Configuration  
Assistant、再実行, H-6  
OracleAS Reports Services  
インストールに必要なグループ, 7-6  
OracleAS Single Sign-On  
Oracle Delegated Administration Services の依存関係  
, 5-6  
インストールに必要なグループ, 7-4  
「管理」画面上の削除された URL, H-10  
コマンドラインでのホスト名の指定, 3-18  
使用する OracleAS Metadata Repository, 7-6  
OracleAS Web Cache, 6-5  
静的ポートの設定, 3-13  
OracleAS Wireless  
インストールに必要なグループ, 7-6  
OracleBI Discoverer  
インストールに必要なグループ, 7-6  
OracleMSCSServices サービス (Oracle Fail Safe), 10-3  
OracleOracleHomeTNSListenerFslvirtualHost リスナー  
(OracleAS Cold Failover Cluster), 10-80, 10-81,  
10-93  
OracleOracleHomeTNSListener リスナー, 10-81, 10-93  
Oracle データベース  
ポート 1521 の問題, 3-14

Oracle ホーム・ディレクトリ, 4-3  
Oracle ホームの名前, 4-4  
orcladmin ユーザー, 7-2  
パスワード, 7-2

## P

---

pcAnywhere, 3-28  
pfile (OracleAS Cold Failover Cluster 用), 10-76  
Portal and Wireless 開発者トポロジ, 14-3  
Portal and Wireless 中間層, 6-2  
インストール, 6-15  
拡張, 6-16  
portlist.ini ファイル, 3-11

## R

---

RAM の要件, 3-3  
runInstaller コマンド  
OUI\_HOSTNAME パラメータ, 3-18

## S

---

setup.exe コマンド  
CD-ROM, 4-9  
DVD-ROM, 4-9  
-executeSysPrereqs パラメータ, 3-2  
silentInstall.log, B-14  
SSL 対応  
Oracle Internet Directory への接続, 4-8  
インストール後の構成, 15-3  
staticports.ini ファイル, 3-10  
OracleAS Cold Failover Cluster 用, 10-94  
OracleAS Disaster Recovery, 12-3  
作成, 3-11  
書式, 3-10  
SYS/SYSTEM ユーザーのパスワード, 5-10

## T

---

TEMP ディレクトリ, 3-17, 4-8  
必要な領域, 3-4

## V

---

VNC, 3-28

## W

---

Windows システム・ファイル (wsf.exe), 3-6  
wsf.exe, 3-6

## あ

---

アクセシビリティ・ソフトウェア、Java Access  
Bridge, E-1  
アダプタ  
ネットワーク, 3-19  
ループバック, 3-19  
インスタンスの名前  
「インスタンス名」を参照  
インスタンス名, 4-5  
再利用, H-10

- 使用できる文字, 4-5  
どのように使用されるか, 4-6
- インストーラ  
「Oracle Universal Installer」を参照
- インストーラでの記録モード, B-4
- 別名  
複数の別名を持つコンピュータへのインストール  
, 3-20
- インストール後の手順, 15-1  
OracleAS Cluster (Identity Management), 11-24  
OracleAS Cold Failover Cluster, 10-75  
サイレント・インストールまたは非対話型インストール, B-14
- インストール・タイプ  
OracleAS Infrastructure, 5-2, 5-3  
中間層, 6-2
- インストール手順、概要, 1-1  
インストール手順の概要, 1-1
- インストールの新機能, 2-3
- インストールの順序, 4-2  
OracleAS Infrastructure, 5-3
- インストールの統計、生成, 2-3
- インストール前の手順 (サイレント・インストールおよび非対話型インストール), B-2
- インフラストラクチャ  
「OracleAS Infrastructure」を参照
- インベントリ・ディレクトリ, 4-8
- エフェメラル・ポート, 3-7
- オペレーティング・システム・グループ  
Administrators グループ, 3-15
- オペレーティング・システムのバージョン, 3-2
- オペレーティング・システム・ユーザー, 3-15  
Administrators グループ, 3-15
- 
- か**
- 開発ライフ・サイクル・サポート・トポロジ, 14-9  
カスタムのポート  
「静的ポート」を参照
- 仮想アドレス (OracleAS Cold Failover Cluster 用)  
, 10-3
- 仮想アドレス、グループへの追加 (Oracle Fail Safe)  
, 10-7
- 仮想サーバー  
OracleAS Cluster (Identity Management) に対して  
最初にノード1を指す, 11-4
- OracleAS Cluster (Identity Management) 用の  
HTTP の構成, 11-3
- OracleAS Cluster (Identity Management) 用の  
LDAP 仮想サーバーの構成, 11-3
- 仮想ホスト名  
OracleAS Cold Failover Cluster, 10-11, 10-31, 10-40,  
10-72
- 仮想メモリー (ページング・ファイル・サイズ) の要件  
, 3-4
- 空でないディレクトリへのインストール, H-3
- 環境変数, 3-16  
\_CLUSTER\_NETWORK\_NAME\_, 12-4, 12-5  
ORACLE\_HOME, 3-16  
ORACLE\_SID, 3-16  
PATH, 3-16  
TEMP, 3-17  
TNS\_ADMIN, 3-17
- 設定, 3-16
- 環境変数 \_CLUSTER\_NETWORK\_NAME\_, 12-4, 12-5  
環境変数 ORACLE\_HOME, 3-16  
環境変数 ORACLE\_SID, 3-16  
環境変数 PATH, 3-16  
環境変数 TEMP, 3-17  
環境変数 TNS\_ADMIN, 3-17, H-7  
関連の中間層グループ, 7-3 ~ 7-4
- 概念, 4-2
- 画面  
OracleAS Certificate Authority, 5-24  
最後のいくつか (インフラストラクチャ), 5-22  
最後のいくつか (中間層), 6-20  
最初のいくつか (インフラストラクチャ), 5-21  
最初のいくつか (中間層), 6-19  
データベース, 5-23
- 既存のデータベース、OracleAS Metadata Repository の  
インストール, 13-1
- キャラクタ・セット  
NE8ISO8859P10 および CEL8ISO8859P14, 5-10
- 共有ディスク、グループへの追加 (Oracle Fail Safe)  
, 10-9
- クラスタの検証 (OracleAS Cold Failover Cluster)  
, 10-5
- クラスタ名 (OracleAS Cold Failover Cluster 用), 10-3
- グループ (Oracle Fail Safe)  
グループへの仮想アドレスの追加, 10-7  
グループへの共有ディスクの追加, 10-9  
作成, 10-6
- グループ (Oracle Internet Directory), 7-2  
ユーザーの追加, 7-10
- グループへのユーザーの追加  
Deployment Delegation コンソールの使用, 7-14  
Oracle Directory Manager の使用, 7-11
- 言語、追加のインストール, 4-5
- 高可用性環境  
OracleAS Cluster (Identity Management), 11-1  
OracleAS Cold Failover Cluster, 10-1, 10-2  
OracleAS Disaster Recovery, 12-1  
インストールの順序, 9-5  
概要, 9-1  
相違の概要, 9-4  
「Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用」ボタン, 4-8
- コンポーネント  
OracleAS Infrastructure コンポーネント, 5-2  
カスタムのポート番号の割当て方法, 3-10  
構成対インストール, 4-7  
コンポーネントで使用されるポート, 5-11, 6-8  
中間層コンポーネント, 6-2  
デフォルトのポート番号, C-1  
別々のコンピュータへのインストール方法, 5-4  
コンポーネント所有者グループ, 7-3  
コンポーネントのインストール, 4-7  
コンポーネントの構成, 4-7  
コンポーネントの分散, 5-4
- 
- さ**
- サービス  
ASControl, 15-2  
依存関係の設定, 15-3  
「サービス」ダイアログ・ボックス、表示, 15-2

サービス名, 4-4  
サイレント・インストール, B-2  
  インストール後の手順, B-14  
  インストール前の手順, B-2  
削除, B-15  
  セキュリティ上のヒント, B-14  
サイレント・インストールおよび非対話型インストール  
  でのセキュリティ上のヒント, B-14  
削除, F-1  
  deconfig ツール, F-2  
OracleAS Cold Failover Cluster, F-4  
OracleAS Developer Kits, F-8  
OracleAS Infrastructure, F-6  
概要, F-3  
サイレント・モード, B-15  
中間層, F-5  
  トラブルシューティング, H-10  
システム要件, 3-2  
信頼できるアプリケーションの管理者グループ, 7-2  
「スタート」メニューの項目名, 4-4  
静的ポート, 3-10  
  Oracle HTTP Server 用, 3-13, 3-14  
  OracleAS Web Cache 用, 3-13  
  指定無効, 3-12  
「製品の言語」ボタン, 4-5  
前提条件チェック, 3-29

## た

致命的エラー, G-2  
中間層  
  Business Intelligence and Forms, 6-2  
  J2EE and Web Cache, 6-2  
  「J2EE and Web Cache 中間層」を参照  
  OracleAS Cluster (Identity Management) へのインストール, 11-25  
  OracleAS Cold Failover Cluster へのインストール, 10-93  
  OracleAS Disaster Recovery へのインストール, 12-9  
  Portal and Wireless, 6-2  
  アップグレードした Internet Directory の使用, 6-8  
  インストール・タイプ, 6-2  
  インストールに必要なグループ, 7-7  
拡張, 6-16  
  拡張 (サイレント・インストールまたは非対話型インストール), B-3  
  コンポーネント, 6-2, 6-3  
削除, F-5  
  「Business Intelligence and Forms 中間層」も参照  
  「Portal and Wireless 中間層」を参照, 6-1  
中間層の拡張, 6-16  
中間層の管理者グループ, 7-3  
追加の言語, 4-5  
追加の言語のインストール, 4-5  
ディスク領域の要件, 3-4  
ディレクトリ、サード・パーティとの統合, 5-11  
データベース名、再利用, H-11  
データベース名の再利用, H-11  
デフォルトのポート番号, 3-9, C-1  
時計、OracleAS Cluster (Identity Management) での同期化, 11-3  
トポロジ, 14-1

Forms、Reports および Discoverer 開発者トポロジ  
  , 14-4  
Integration B2B トポロジ, 14-5  
Java 開発者トポロジ, 14-2  
OracleAS Certificate Authority トポロジ, 14-10  
Portal and Wireless 開発者トポロジ, 14-3  
開発ライフ・サイクル・サポート・トポロジ, 14-9  
部門別トポロジ, 14-7  
トラブルシューティング, H-1  
Configuration Assistant, G-2  
一般的なヒント, H-2  
削除, H-10

## な

名前解決 (OracleAS Disaster Recovery), 12-4  
  DNS サーバーの使用, 12-4  
  hosts ファイルの使用, 12-6  
名前解決用の DNS サーバー (OracleAS Disaster Recovery), 12-4  
名前解決用の hosts ファイル (OracleAS Disaster Recovery), 12-6  
ネットワーク・アダプタ、プライマリ, 3-19  
ネットワーク関連項目, 3-18  
  DHCP 接続のコンピュータへのインストール, 3-18  
  ネットワークに接続されていないコンピュータへのインストール, 3-20  
  ハード・ドライブからのインストール, 3-25  
  複数の別名を持つコンピュータへのインストール, 3-20  
  複数のホームを持つコンピュータへのインストール, 3-20  
  リモート・インストール, 3-28  
  リモート・コンピュータの CD-ROM/DVD ドライブからのインストール, 3-26  
ネットワークに接続されていないコンピュータへのインストール, 3-20  
ネットワークに接続しない問題, H-6  
ネットワークの要件, 3-3

## は

ハード・ドライブからのインストール, 3-25  
バックアップおよびリカバリ  
  OracleAS Disaster Recovery 環境, 12-2  
  インストール後, 15-3  
パスワード  
  cn=orcladmin スーパーユーザー用, 7-2  
  DCM スキーマ用, 6-6  
  ias\_admin ユーザー用, 4-6  
  orcladmin ユーザー用, 7-2  
  SYS/SYSTEM ユーザー用, 5-10  
  スキーマ・パスワードのランダム化, 5-7  
非対話型インストール, B-1, B-2  
  インストール後の手順, B-14  
  インストール前の手順, B-2  
削除, B-15  
  セキュリティ上のヒント, B-14  
  ログ・ファイル, B-14  
ファーム, 6-5  
ファイアウォール  
  ポート, D-1  
ファイル・システム・タイプの要件, 3-4

ファイルベースのクラスタ化  
「OracleAS File-Based Cluster」を参照  
フォントの問題, H-5  
複数のホームを持つコンピュータへのインストール  
, 3-20  
部門別トポロジ, 14-7  
ブラウザの要件, 3-5  
分散 OracleAS Cluster (Identity Management), 11-15  
  OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated  
    Administration Services のインストール, 11-22  
構成解除の失敗, H-12  
後続のノードへの Oracle Internet Directory のインス  
  トール, 11-20  
最初のノードへの Oracle Internet Directory のインス  
  トール, 11-17  
分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Identity  
  Management), 10-40  
  インストール, 10-43  
  インストール手順の概要, 10-42  
分散 OracleAS Cold Failover Cluster (Infrastructure)  
  , 10-23  
  インストール, 10-25  
  インストール手順の概要, 10-24  
プライマリ・ネットワーク・アダプタ, 3-19  
プロセッサ速度, 3-3  
ページング・ファイル・サイズ (仮想メモリー) の要件  
  , 3-4  
ホスト名  
  複数の別名を持つコンピュータへのインストール  
  , 3-20  
ホスト名の要件, 3-3  
ポート, 3-7  
  エフェメラル, 3-7  
  確認方法, 5-11  
  コンポーネントに割り当てられた, 6-8  
  静的ポート, 3-10  
  デフォルトのポート番号の使用, 3-9  
  デフォルトのポート番号のリスト, C-1  
  ファイアウォール内で開くポート, D-1  
ポート 1521, 3-11, 3-15  
  使用中の場合, 3-14

## ま

メモリー要件, 3-3  
削減, 3-5  
複数のインスタンスがある場合, 3-5  
モニターの要件, 3-5

## や

ユーザー (Oracle Internet Directory)  
「Oracle Internet Directory のユーザー」を参照  
ユーザー・インターフェースの問題, H-5  
ユーザー (オペレーティング・システム)  
  「オペレーティング・システム・ユーザー」を参照  
ユーザー管理アプリケーションの管理者グループ, 7-3  
ユーザーの要件 (OracleAS Cold Failover Cluster 用)  
  , 10-3  
要件  
  DHCP 接続のコンピュータ, 3-18  
  IP, 3-3  
  TEMP ディレクトリ内の領域, 3-4

後でネットワークから切断する、静的 IP を持つコン  
  ピュータ, 3-21  
オペレーティング・システムのバージョン, 3-2  
環境変数, 3-16  
ディスク領域, 3-4  
ネットワーク, 3-3  
ネットワークに接続されていないコンピュータ  
  , 3-20  
ファイル・システム・タイプ, 3-4  
複数の別名を持つコンピュータ, 3-20  
複数のホームを持つコンピュータ, 3-20  
ブラウザ, 3-5  
プロセッサ速度, 3-3  
ページング・ファイル・サイズ (仮想メモリー)  
  , 3-4, 3-5  
ホスト名, 3-3  
メモリー, 3-3, 3-5  
モニター, 3-5  
「ようこそ」ページ、URL, 15-2

## ら

リポジトリ所有者グループ, 7-3  
リモート・インストール, 3-26, 3-28  
リモート制御ソフトウェア, 3-28  
ループバック・アダプタ, 3-19  
Windows Server 2003 からの削除, 3-24  
インストール, 3-22  
レスポンス・ファイル, B-2  
記録モードを使用した作成, B-4  
コマンドラインでの指定, B-14  
作成, B-3  
テンプレート, B-3  
例, B-5  
レルム, 7-17  
ロード・バランサ  
  OracleAS Cluster (Identity Management) の Cookie  
    永続性の設定, 11-5  
  OracleAS Cluster (Identity Management) の構成  
    , 11-3  
ログ・ファイル, H-2  
場所, H-3  
非対話型インストール, B-14

